

東方幻想斬～BLEACH the fantasy time of end～

死神一護

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

霊圧を失った黒崎一護が、幻想郷で生き抜き博麗の巫女と共に異変を解決していく物語。

その中で見えてくる真の敵——黒幕を打倒する一護の新たな人生譚。黒崎一護の新たな物語が始まる。

……と、昔にじファンで書いていた東方とBLEACHの二次創作です。

駄文であり、不定期更新ですが、よろしく願いたします。

目次

第壹章へ東方幻想幕篇へ

第1斬【黒崎一護消失】 | 1

第2斬【博麗の巫女】 | 3

第3斬【始まりの譚】 | 12

第4斬【一護の能力】 | 20

第5斬【香霖堂と文々。新聞】 | 32

第貳章へ東方紅血鬼篇へ

第6斬【紅い霧】 | 50

第7斬【闇の妖怪とバカな妖精】 | 57

第8斬【城の門番】 | 75

第9斬【最強のメイドと最悪の本探し】 | 85

第10斬【吸血鬼VS死神】 | 98

第11斬【狂気の少女】 | 120

第12斬【正体不明の男】 | 138

第13斬【夜の神・ルリミアVS暴走一護】 + 番外編 | 149

第参章へ東方桜春雪篇へ

第14斬【人里での約束】 | 185

第15斬【一護VS妖夢】 | 200

第16斬【少女たちとの戯れ（ロリコン疑惑）】 | 212

第17斬【新たな春なる冬異変】 | 224

第18斬【W冬妖怪】 | 232

第19斬【迷い家での弾幕ごっこ】 | 244

第20斬【アリスの人形劇】 | 253

第21斬【再戦・一護VS妖夢】 | 267

第22斬【亡霊の幽々子】 278

第23斬【約束の花見】 290

第24斬【グリムジョー・ジャガージャック】 298

第25斬【八雲紫の話】 311

第肆章へ東方幻夢殺篇へ

第26斬【百鬼夜行の小さな鬼】 318

第27斬【壺の絶望と式の絶望】 330

第28斬【参の絶望と肆の絶望】 363

第29斬【伍の絶望と最後の光】 401

第30斬【悪夢からの目覚め】 429

第31斬【フレデリック・グレアム】 436

第32斬【決着と最後の思い】 451

第伍章へ東方虚永夜篇へ

第33斬【フランとの絆物語】 478

第34斬【妖蟲と夜雀】 496

第35斬【ウルキオラの策略】 511

第36斬【禁呪VS幽冥・幻想VS夢幻】 528

第37斬【揺蕩う思い出】 547

第38斬【ウルキオラ・シファー】 575

第39斬【異変の終結】 603

第40斬【肝試し】+番外編 626

第六章へ東方神信譚篇へ

第41斬【日常の中の非日常】 650

第42斬【阿求の話と山の神々】 670

第43斬【漆黒の女】 685

第44斬	【覚醒】	699
第45斬	【霊夢の光】	720
第七章へ東方地底核篇へ		
第46斬	【雪かき】	741
第47斬	【いざ、地底へ】	766
第48斬	【旧地獄での戦い】	781
第49斬	【コヨーテ・スターク】	820
第50斬	【銀の星】	857
第51斬	【魔王へカーティア】	891

第壹章 〈東方幻想幕篇〉

第1斬【黒崎一護消失】

静寂な夜、暗い部屋の中に月明かりだけがその部屋を少し明るくする。

ベットのの上に眠る一人の男の姿を、月明かりが優しく照らす。寝ているので確認できるのはオレンジの髪ということと、高校生ほどの少年ということだけである。

その少年こそ、この物語の主人公。

——黒崎一護。

元死神代行であり、藍染から世界を護った男。

だが今、黒崎一護の死神の力は藍染を倒すために消失した。最後の月牙天衝を使う代償として、死神の力の全てを失ったのだ。

そして、あれから数ヶ月経った。

朽木ルキアと別れ、幽霊も見えなくなった至って普通の高校生。

幽霊の見えない生活、普通の生活に一護は憧れていた。一護は憧れていたものになった。平和で、青春を全うできる生活。学生の本分である勉強はもちろん、友人と遊びに行ったり、修学旅行に参加したり、友達と夏休みや冬休みなる長期休暇を使い良好な計画を立てたり、そして恋愛を試みたりと。学生では様々な楽しみがある。

自分の、学生として憧れていた生活だ。

だが、自分は本当にそんな生活に憧れていたのか？ と自分でも疑問に思っている。理由などは明確でないが、心のどこかで、何かが落ち着かずにいる。

そんな気持ちをみんなに隠し、自分の気持ちに嘘を憑きながら一ヶ月経った。

その瞬間であった。

突然に、一護は部屋から静かに消えていった。

いや、消えたのでは無く落ちたのだ。唐突の事に何が起きたのか全く分からない。

一護はそのまま起きることなく静かに部屋から姿を消した……と、表現するのがあつているだろう。一種の神隠しめいた現象だが、その正体は誰にもわからない。

そして、その光景を部屋の窓の外から一人の女性が、少し真剣な面持ちで見っていた。

なぜ、その女性が真剣な面持ちで一護の消える瞬間を見ていたのかは分からない。そもそもなぜ、女性が一護の消える瞬間を見ているのかが分からない。しかしおおよそ普通の人間だったら驚くし、何より一護の部屋は二階だ。そこからどうやって、一護の姿を捉えていたのだろうか。

答えは簡単だ。その女性は空中に浮いているのだ。

非現実すぎる光景であり、更に一護の消えた光景を眺めていたところを見るに、一護を消したのは恐らくこの女性の仕業だろう。

その女性は静寂な夜、一人呟く。

「幻想郷、そして世界を護って下さいね。黒崎一護君」

女性は本人に聞こえるはずもない声で、一護に勝手に頼み込んだ。何を頼んだのかは謎のまま、女性は姿を消した。

そして、数時間後に一護は別世界で目を覚ます。

第2斬【博麗の巫女】

《1》

青い空……まさに晴天の中、一人の男が大地をベットにすやすやと寝ていた。

オレンジの髪に、均整の整った顔立ち、高校生くらいだろうか、そんな少年が寝ているのだ。風が吹き、周囲の木々がゆらゆらと葉を揺らしながら、枯れ葉が風に乗って落ちていく。

その枯れ葉は少年の鼻元に落ちると、少年の意識が夢から現実へと変換された。

「……ん、いてえ」

少年は地面という不自然な場所で寝ていたせいか、目覚め悪そうに起きた。

「……………」

その少年の名は黒崎一護。

ただの高校生であり、現状特筆すべき点はない。しかし、少し前までは死神代行であり、藍染の手から仲間を、世界を護った男。その代償として死神の持つ霊圧を失い、元々あつた霊が見えると言う特性も失った。

その為、普通の何の変哲もない人間へと戻った、普通の少年なのだ。そんな一護は、普通なら初めに見る景色が自室の天井の天井のはずなのに、何故だろうか、綺麗な青空だった。

「……………おいおい、まいったな。寝ぼけてんのか？」

一護はゆつくりと上半身を起こし、首を左右に振り周囲を見渡す。

見知らぬ森。奥深い森。大自然。

そんなことでしか表現できぬ空間だった。

寝起きの一護は、呆然ともう一度周囲を見回す。

(あれ……………どこだ此処?)

脳が冴えてきた一護は、現状を理解。そのため、愕然とした。

「——って、どこだ此処は!? どうなってるんだよ一体!」

理解不能の一言に尽きた。

とりあえず冷静に、昨日のことを振り返る。

(えつと、確か昨日は普通に自分の部屋のベットで寝て、それから……思い出せねえ。いや、思い出せる訳ねえよ。そこで俺は眠っちゃまったんだから)

そう、一護はちゃんと昨日普段通り、ベットの上で寝ていたのだ。だがそれ以降、一護の身に何があったのかは分からない。分かるはずがないのだ。

(可能性としては親父の悪戯か？ いや、ここまでふざけたことは流石にしねえか。……しねえよな?)

いくら破天荒な父親でも、流石にこんな悪ふざけはしない。

(つか、近所にこんな深い森なんてあったか?)

一護は地元である空座町のことを思い出すが、こんな深い森など一向に検索には引つ掛からない。

(もしかして、空座町の外か？ 何で俺がこんな森に？ ……取りあえず人を探して此処が何処なのかを聞かねえと。くそつ、携帯がねえのがここまで不便だと痛感するなんてな。ま、あつたところで電波来てるかも怪しいけど)

ここで冷静に対処できるのは、死神代行と言う非現実を過ごしてきたからだろう。そうでなければ、このように冷静な対処は難しいだろう。

「……………」

縦横無尽、朝の散歩の如く森の中を歩き出す。

見えるのは木、木、木。それだけだ。

その最中、一護は考えていた。

何故、自分がこのような森に居るのかを。

誘拐……それが一番安易であり辻褄が合う道理だが、直ぐにそれは有り得ないと言う回答を出した。

何故なら、自分を見張る人間も居ない上、監禁もされていない。それに寝る前は窓の鍵は掛けた。カーテンは閉めなかったが。

だったら一体……

——ガサガサと、不意に森の奥から草木を掻き分ける大きい音が聞

こえた。

(人か?)

一護は考える思考を停止させ、恐る恐る音源へと近づく。

誘拐犯と言う説が完全に解けたわけではないため、慎重に行動しなければならぬ。

.....

逃げる、と言う術はもう出来ない。

一護が人だと思つた物音は人でも、そして動物でもなかったのだ。それは妖怪……と表現するのが合っているのだろうか？ 漫画に出てくる異形の化物と表現したほうが分かりやすいのかもしれない。そう、それは化物。

人間の限界であろう体格を優に超える凶体。両手の指先には鋭く尖つた長い爪。そして何より人間と違うのは、身体の全てを覆う茶色い毛と獣の顔。

まるで狼の化物。

人間の枠組みから外れた人外。何より感じさせる威圧が、並大抵のものではない。普通の人間なら恐怖に震えて、腰を抜かしてしまうか、失神してしまうような重圧である。

その化物は獲物を見つけたような眼で一護をギロリと見る。

(虚(ホロウ)！ いや、こいつは虚じゃねえ!?)

虚ではまず無いだろう。

何故なら虚にあるはずの胸の穴も、仮面も何処にも見当たらない。

何より、今の一護は霊圧が微塵もないため、霊を見ることが不可能なのだ。ゆえにそれは有り得ない。

「じゃあねえー！」

一護はズボンのポケットに締まってあつた代行証を取り出す。

これは触れることによつて死神へと成れるドクロの彫られた木版だ。だが今の一護は――

(しまった！ いつもの癖で……死神にはもう、成れねえんだった!?)

そう、何も起こらないのが必然。

霊圧の無いものが触れたところで意味を成さない。

瞬間、化物が鋭い牙を誇らしげに見せびらかすように、大口を開け咆哮を上げる。耳を突き刺すような獣の咆哮に、周囲の木々がざわめく。

その刹那に、疾風の勢いで化物は一護に襲いかかった。

「ッ！」

一瞬だけ焦りを見せる一護だが、直ぐに冷静に処理作業を行う。スツと、一護は化物の初撃を巧く躲した。

すると、化物は避けられたことに動揺し、動きが止まる。だが再び、追撃を行うため攻撃を再開する。

鋭く尖った爪が、一護を文字通り引き裂こうとするが――

一護は避けきる。

そう、一護は死神時代、仲間を護る為に鍛え上げた身体と反射神経を活かしているのだ。

簡単にはやられたりはしない。

だが相手は人間ではない異形の化物だ。連続する化け物の猛攻。回避は可能だが、一撃でも受ければ満身創痍、下手をすれば即死の域だ。同時に、普通の人間の一護には勝ち目は無く、徐々に体力が衰え始める。

（くそ……！ そろそろ身体の限界だ。今の俺じゃこいつに勝ち目はねえ！ どうすりゃ……）

体力が衰え、避けるのがやつとに成った途端に一護は、足元の木の根に気づかず片足を躓き背中から地面に倒れこんだ。

その一瞬の隙を、化物は逃がさない。

鋭い爪を、一護を貫くため十指全てが穿とうと動く。

（やべえ！ やられる――！！）

そう思ったが刹那。

一護の前に人影が一人現れた。

そいつは変わった巫女装束を着ている。袖がついておらず、白色の袖を別途腕に括りつけ、肩と腋の部分を露出している。しかも下は袴ではなくスカート。

恐らく巫女なのだろう。

その巫女さんは、襲いかかる鋭い爪を何かの札を手に軽く弾き、無駄のない動作で次の動きを起こす。

手に持っていた御札を一枚、化物に向けて投げたかと思うと、電撃のようなものが走り化物は苦悶の声上げ、崩れ落ちたのだ。

一瞬の、本当に一瞬の出来事だった。

「……あなたは、一体？」

倒れた身体を起こし、目を丸くして巫女さんの背中を見る。そして無自覚に問いかけた。

あのデカく頑丈な身体の化物を、自分より小さい少女が一瞬にして倒してしまったのだ。

一護は驚くしかなかった。

そして謎の巫女は一護の方に振り向き、質問に答える。

「博麗 霊夢」

巫女——博麗霊夢との出会いが、一護のこれからの物語を大いに変えてくれるのだった。

《2》

「——で、あなたの名前は？」

一護を絶体絶命の危機から救い出してくれた巫女——博麗霊夢に名前を尋ねられた。

「……黒崎一護」

自分の名を名乗ると同時に、ゆつくりと立ち上がる。服に付いた砂を手で軽く払いながら、博麗霊夢と向き合う。

それで明確に分かった。霊夢の身長は本当に少女クラスだ。朽木ルキアと同じくらいだと言って良い。それが故、面映かった。少女に助けられる自分の姿が。

……そんなことを思っている一護とは対照的に、霊夢は一護の格好をまじまじ注視していた。

「な、何だよ？」

別に恥ずかしい格好はしていないが、ここまで真剣に見られると恥

ずかしい。

服装は適当な一着を着ている。ただ寝ていた時に此処に来たせいか、現在は靴は履いていない。格好で恥ずかしいといえ、この点くらいだ。

そして霊夢は確信したかのように、言葉を紡ぐ。

「ふむふむ、なるほどね。……あんた、外来人でしょ？」

「外来人？」

唐突に意味の分からない単語を使われ困惑する。外来人……外国人のことかと、一瞬思うが違うだろう。相手は完全に日本人だ。それと同じで自分も日本人。それを間違えうわけがない。では、どういった意味で使ったのだろうか？

霊夢はやっぱりね、と言うような表情になり口を開く。

「外から幻想郷にやってきた人間を指す言葉よ。率直に言うと、あんたは不運にも自分の住んでいた世界から、こちらの世界に幻想入りしてしまったって言う事」

「はい？」

いきなり自分の知らない単語を使われ、一護の頭がこんがらがる。

とりあえず、冷静に事を対処しようと思う。

「えっと、悪いけど一から順に説明してくれないか？ 幻想郷とか幻想入りとか、そんな訳の分からない単語を使われても理解できねえよ」

「あら、それもそうよね。まあ暇だし、ゆっくりと話して上げるわ」

まるで仕方ないと、言うような形で話し始めるようだ。

「さんきゅ」

一護は一言礼を言う。

霊夢の話が長くなるのか、近くにあったちようど良い感じの切り株に腰を下ろす。

そして大間かな霊夢の幻想郷の講義が始まったのだ。

*

霊夢の説明が終わったのは数十分後だった。

大まかだったが、一護はしっかりとそれを理解し、順応できていた。

元々、死神代行だったお陰とも言えるのだろう。常人なら理解に苦しみ、夢だと思いい込むかもしれない。

「どう、理解できたかしら？」

「ああ、大体は。つまり、この幻想郷とかいう世界は博麗大結界っていう結界で、俺が住む世界とは完全に隔離された世界って訳だな」

「まあ簡単に纏めると、そんなとこね」

「すげえな。だからこんな妖怪とかいんのか」

一護は絶賛気絶中の妖怪を一瞥する。

幻想郷は過去に初代博麗の人間が創り出したらしい。それに加担した妖怪の力も相まって、妖怪という存在が幻想郷で生きているようだ。

「あんたも凄いわよ。こんな状況を簡単に受け入れるなんて。今までの外来人とは対応が違いすぎるわ。ちつとも面白くないわよ。少しくらい焦りなさい」

「面白くなって悪かったな。俺にも色々あるんだよ」

黒崎一護は元々死神代行で死後の世界“尸魂界”や“地獄”、現世と尸魂界の狭間に存在する“虚圏”にも行った事があるのだ。今さら、幻想郷とかいう場所に来ても、それ程までに動揺はしない。

「ふうん、まあ詳しくは聞かないわ」

それにどちらかと言うと、幻想郷の方が尸魂界に比べて現実味がある。

「外来人はみんな慌てふためいて、説明もちゃんと聞いてくれないことの方が多いいし。それに比べたら、あんたはマシね。話が円滑に進んだから」

「そいつはどうも」

「外の世界の常識なんて知らないけど、あんた変人って言われたことない？ 格好も変だし」

「失礼なことを言うな。他のやつより適応力があるだけだ。てか格好を馬鹿にすんじゃないやねえ。俺は寝てたらこっちの世界に来てたんだからな」

そもそも脇と腹を丸出しにしている巫女さんに言われたくない。

見方によっては痴女だ……と一護は思う。

「あんた、いま私の格好を見て失礼なこと思い浮かべなかった？」

「あ、いえ、していません」

何やら先ほどの妖怪を一撃で屠った札を取り出したので、一護は頭を下げて謝罪した。

そして咳払いし、話を進める。

「まあなんだ。さっきの説明が本当なら、あんたの力で俺を外に戻せるんじゃないのか？」

「え？」

「いや、あんたの力を使えば、俺を元の世界に戻せるんじゃないかって話なんだが」

博麗大結界を何らかの形で操作し、外と干渉させたら次元の歪みか何かで一護を戻せるだろう。

だが霊夢は――

「そ、それは、その……ね」

盛大に釈然としないのだった。

どうということだろうか？

「……何が、言いたいんだ？」

「そ、それがね、今はあんたを帰すことができないの」

「は？」

ここで一護は初めて動揺した。

「……な、どういう事だよ？」

「帰してあげられないのよ。結界が突如おかしくなって。一昨日までは結界に何の異常も無かったんだけど、昨日……結界に原因不明な異常が起きて、博麗大結界がまるで誰かに操られているような感じがして、干渉することができないの」

博麗大結界の原因不明の異常。

それにより、霊夢が結界を操れないのだ。

「だから私は現在それを解決するべく動いているわけ」

霊夢はそれを言い終えると立ち上がる。

「まあどうやって解決できるのかも、全てが不明なんだけどね。言っ

てて自分でも恥ずかしいけど、手がかりも何もない状況ってわけ」
苦笑いを浮かべながら言った。

それが故、一護の識閥が変わったかのように、自然と言葉を吐いた。
「なら、俺も手伝っても良いか?」

そんな発言をしたのだ。

霊夢は少しビツクリし、慌てて返す言葉を検索した。

「え、あ……あ、あんたなんか足手まといになるからいいわよ」
何て言ったのだ。

だがその反面、嬉しかった。

自分の手助けをしてくれる人間なんて、聞いて呆れるがそれでも嬉しかった。

一護は一護で引かない。

「いいだろ別に。どうせ帰る手段もないし、することもない。その上、
異変が解決しねえと俺は帰れねえんだし。まああれだ。——俺は足
でまといにならねえよう努力する」

理屈にも適った台詞を吐く。

それに霊夢は目を丸くして、少し思案したあとと言った。

「分かったわ。あんたがそこまで言うんなら手伝わしてあげる」

「ああ。じゃあ改めて」

一護は片手を霊夢に差し出す。

「よろしくな霊夢」

「こちらこそよろしく、一護」

霊夢は片手を差し出された一護の手に持っていき握手を交わした。
後、一護と霊夢はあらゆる異変に立ち向かう事になる。

第3斬【始まりの譚】

《1》

森の中を、黒崎一護は駆ける。

草木を手で薙ぎ払い、大きい木があれば効率よく避けて進む。

一護の息は荒く、汗が滝のごとく流れている。一体なぜ、こんなに全力疾走しているのだろうか。

すると、一護の目の前にちやんとした道が現れた。道といっても舗装されている訳ではなく、人が歩きやすくされているだけの道だ。言うなれば軽い山を登るときの山道。

一護はそこに出ると、目の前には石の階段があった。中々段数が多く、小学生が見たら一斉に地獄の階段とか言い出しそうなくらいだ。そこを二段三段飛ばしくらいで、一気に駆け上がる。

山の上。それ程高くないのか、すぐに階段上に赤い鳥居が見えた。一護にとって、そこがゴール地点だ。

「ッー」

そして一護は、鳥居をくぐった。ゴールのテープを切ったかの如く、マラソンは終わりを迎えた。

「ハア、ハア……っ、疲れた……」

フルマラソンを終えた走者よろしく、一護はバテバテモードだった。

顔から汗の雫がぽたぽたと垂れ落ちる。身体の水分が一気に減つたのを感じた。

「結構早かったわね。いや驚いたわ。体力は私以上よきつと」

一護の目の前に、清々しい表情をした博麗霊夢が現れる。一護とは対照的に、一切疲れの色がない。

それにキレかけた一護だが、何とか抑え、若干の憤りを見せて言葉を吐く。

「うるせえよ……っか何いきなり飛んでいつてんだよ！」

そう、霊夢は飛行したのだ。

あの後、自分の神社に案内すると言うや否や、いきなり地面から足

が浮き、そのまま空へGO。更に酷いことに、そのまま何も言わずに飛んでいっちまう。

一護は霊夢を全速力で走りながら、見失わないように何度も呼びかけたが、聞こえていないのか全く反応を示さなかった。

それ故、一護は霊夢を見失わないよう、全力で霊夢の後を追ったのだ。その途中、妖怪に遭遇しなかったのは単に運が良かったからなのだろうか？

「うるさいわね。私は基本、空を飛んで移動するのよ。まああんたが凄く頑張って走ってたから、そのまま飛んだんだけど。けど、私的には逆に空を飛んだことに驚いて欲しかったんだけど」

「悪いが、そういうところには鈍いんでな」

実質、死神時代は霊子を足場にし空中立ちを可能にしていた一護だ。驚くどころか歯牙にもかけないだろう。

「あんたって異常よね。そこんどこ自覚してる？」

「異常じゃねえよ。あんたよりかはな多分」

いやまあ、自分が異常なことは自覚するどころか、考えもしていなかった。ただ、自分を置いて清々しく飛んでいくやつの方が異常なのは間違いないだろう。

「さあ、こっちに来なさい。寝泊りする部屋を貸してあげるから」

けどあれだ。酷いことはされたが、根は優しいのだろう。

先程まで赤の他人同然だった黒崎一護を、軽く自分の神社の部屋を貸してくれるのだ。優しいのか、単に気軽なノリが好きなのか分からないとこだが、悪い人間では断じて無いだろう。

「それを終えたら、昼ご飯ね。もう昼時だし」

「え、そうなのか」

時計がないので分からない。

太陽の位置なんかで時間を確認しているのかな。かなり原始的だ。

そして一護は見た。

この神社の賽銭箱を。

「……何だろうな」

ボソッと一護は呟いた。

それが聞こえたらしく、霊夢が、
「なによ？」

と聞いた。

「いや、賽銭箱が神社と比較したら、随分と廃れてるなあと思ってさ」
何て言ったのだ。

するとどうだろう、霊夢から形容しがたい殺気が一護に向けて放たれた。

「え、今なんか言った？」

笑顔だが、黒い。殺気が笑顔に形成されている。

「い、いや、何でもねえ……」

霊夢の殺気の根源は恐らく賽銭箱。

ああ今ので分かった。

——賽銭箱については触れないでおこう。

そう決意した矢先だった。

「てか賽銭箱で神社の繁栄を語られたくはないわ。そもそもここは立地的に悪いだけで、少しでも良質な場所になれば、それはもうウハウハなのよ。今頃この神社は超広大な神社になっていたわ。幻想郷で一番有名でお金がたんまり貯まる神社になってわよ！」

「ああ、そうなのか」

何か語りだした。触れないでこうと思った途端、向こうから触れてきた。

「ちゃんと人が住んでいる安全な場所になれば、こんなに廃れなかったのよ」

「自分で廃れたって言って悲しくならないのか？」

「それにね、私の夢の一步でもあるの。この神社の賽銭箱が、みんなのお祈りでたんまり貯まるのが。別にお金がほしいわけじゃないわよ。私は単に、この博麗神社を立派にしてあげたいの」

「夢か……」

「その大切な夢の第一歩なのよ賽銭箱は。廃れていてもいい、少しずつ、本当に少しずつでも賽銭箱も立派にしてあげたいの」

「……そうか」

霊夢の言葉にどこか感動する一護。

幼いながらも、立派な志があるようだ。

「てなわけで、ここに来たんだからお布施の一つでもしなさい。罰が当たるわよ」

「そんな脅迫的なお布施聞いたことねえよ。巫女さんとは思えねえな」

「……今思ったんだけど、麗しい巫女を売りにしたらお布施が増えるかしら？」

「お前こそ一度、罰が当たった方がいいんじゃないか？」

——しかも麗しい巫女って誰だ？ 俺の目の前にはチンチクリンな巫女さんしか見えねえな。

何て思ったのが看破されたらしく、一護の顔面にパンチが見舞われたのだった。

《2》

——昼、一護と霊夢は昼食を終え、神社の縁側でお茶を飲みながら座していた。

勿論、飯時などに幻想郷のことなどは殆ど聞いた。

その数ある幻想郷の説明の中から一番気になったのが、弹幕ごっこと言うゲームだ。

弹幕ごっこって言うのは、何かに白黒付けたい時にするバトルのようだ。文字通り弹幕を張り、相手を迎撃する簡単なバトル。けど当たり所が悪ければ死ぬという、危険と隣り合わせのゲーム。

その勝負ではスペルカードと言う特殊な弹幕などを展開する、所謂必殺技という物もあるらしい。しかもそのスペルカードと言う物には、能力という物が大きく左右し、それによってどういった弹幕が張られるのかが決まる上、最近では能力を駆使したバトル展開もあるらしい。

故、弹幕勝負をするには能力が勿論必要になる。

そこで一護は切り出した。

「まずはその、弹幕ごっこってのを覚えたほうが良いと思うんだ」

お茶を飲みながら、霊夢にそう言う。

「まあその通りね。異変の解決には、絶対に必要不可欠だから。と言つても、あんたにはそう言った特殊な力とか無さそうだし。誰でも使える技つてわけでもないのよ」

霊夢が一護を見ながら答えた。

今の一護には霊圧がない。それ故、普通の人間と相違ないのだ。

「……けど、誰にだって可能性はあるわ。そうねえ、こういう時は、なにか身近な……そう、大切な物から能力を形成できるつて奴もいたわね」

「大切な物?」

「ええ、と言つても手ぶらだよね」

一護は幻想入りしたのは突然の出来事、しかも寝ている時だったので何も所持していないのは当然だ。

「いや、一つだけなら」

一護はズボンのポケットから、ある物を取り出す。

偶然なのか必然なのか、一護のポケットにはあれが入っていた。

——死神代行戦闘許可証。通称、代行証が唯一の所持物だったのだ。

「つつつても、何も起きないんだけどな」

と言つて、一護は代行証をポケットに入れた。

だがそれを見た霊夢の顔は何とも、面白い物を見た目付きだった。

「そうね、一護、今のを——」

と霊夢が言いかけた時に、ある声が割つて入った。

「おい霊夢! 遊びに来たぜ!」

霊夢の声が、元気良い声に掻き消された。

そして、一護と霊夢の目の前に、箒に乗った魔女が現れた。

「あら、魔理沙」

霊夢は魔女の名を口に出す。

「おう、元気万倍の霧雨魔理沙だぜ! 暇だから来てやったぜ霊夢。……と、そのオレンジ髪の男は誰だ?」

魔理沙と呼ばれた少女が、一護の姿を見て尋ねる。

「ええ、この人は今朝がた不運にも幻想入りしてしまった人間よ。私が保護して、博麗神社に丁重に案内したのよ」

丁重に案内と言ったか？ あれが、あんな極悪な案内に丁重なんて付けるんじゃないかねえとツツコミたい一護だが堪える。

一護は縁側から腰を上げて、

「あ、えーと、黒崎一護だ。あんたは？」

自分の名を名乗る。

「私は東洋の西洋魔術師 霧雨魔理沙だぜ。今後とも宜しく」

二つ名と同時に、自分の名を名乗る。

同時に手を差し出し、一護と魔理沙は握手を交わす。どんな相手にも分け隔てなく、愛想よく気持ちよく接する態度には、一護も好感を持てた。

魔理沙は黒を基調とした服装と帽子をかぶっており、例えるなら魔法女のような恰好だ。

「えっと、霧雨はその」

「魔理沙で良いぜ。上の名前で呼ばれるのは慣れてないからな。それに、博麗神社にいるんなら長い付き合いになるだろうし、下の名前で呼び合った方が親交が深まるだろうぜ。その代わり、私も一護って呼ばせてもらう」

と、何とも良い台詞を吐いてくれる。

「ああ、じゃあ遠慮なく魔理沙って呼ばせてもらうぜ」

「おう、みんなそう呼んでるしな」

そして一護は改めて――

「魔理沙はその、魔法女みたいな恰好をしてるけど、魔法女なのか？」

突拍子もない質問をした。けどここは幻想郷だ。妖怪がいたんだ、魔法女がいても不思議でない。

「おいおい一護、私は魔法女を模した恰好とよく言われるが、初期の魔法女は白を基調とした恰好をしてたんだぜ。これ豆知識な」

「へえ、そうなのか」

本当に豆知識だなと一護は思う。

「まあ嘘だけだな」

「嘘なのかよ！」

「騙せると思ってよ」

「確かに騙すことには成功しただろうけど、お試的な感覚で俺を騙すな」

一護は溜息をつき、

「で、魔理沙は魔女で合ってるのか？」

「おう、どう見ても魔女だろ？ こんな分かり易い格好してるんだからな。それに最初、西洋の魔術師って名乗ったじゃん。馬鹿なのか一護は？」

「馬鹿じゃねえよ。俺のいた世界じゃ魔女なんて物語の中にしかないなかつたんだよ。実際に見るのは初めてなんだ」

「へえそうなのか。ふふん、なら少しだけ魔法を見せてやるぜ」

魔理沙は箒をクルクル回転させて言った。

「お、いいのか？」

「勿論だぜ。いっくぜー！」

そしてそのまま箒を振るうと、星のようなキラキラな弾幕が流れ星のように迸った。

恐らく先ほど霊夢に説明してもらった弾幕と言うやつ的一种だろう。それを分かった上でも、どこか魅了され感嘆の声を上げる一護だった。

「おお凄えな魔理沙」

「だろだろ。これが魔法って奴だぜ！ あはは！」

瞬間、ドカン！と何かを破壊する衝撃音が轟いた。

「……………」

その先を見ると、魔理沙の放った弾幕が、この神社の命でもある賽銭箱を木っ端微塵にしていたのだ。

（れ、霊夢の夢の一步である賽銭箱が……！ 貯まる前に吹き飛ばしちゃった！）

開いた口が塞がらなくなる一護。

「…………あー、霊夢。わたし用事思い出したから帰るぜ！」

脱兎の如く逃げようとする魔理沙の肩を霊夢が凄まじい速さで掴

んだ。

「奇遇ね魔理沙。私もちよつとあんたに用事があるのよ。最重要で最優先のね」

「悪い霊夢！ 謝る！ そして直すから許してくれー！」

「問答無用オオ！」

「ちよつと待ってってくれ霊夢！ これには俺にも非がある。魔理沙に魔法を見せてくれて言ったのは俺だ。俺も直すのを手伝うから許してやってくれ。何なら、もつと綺麗で立派な賽銭箱を作るからさ」

一護が仲裁に入り、霊夢を止める。

それを聞いた霊夢は逡巡するも、

「……じゃあ、宝袋型の超立派な奴！ 金箔をふんだんに使った奴ね！」

「賽銭箱は少しずつ成長させるんじゃないかよ!? 何とんでもねえ要望出してんだ！」

一護が突っ込んだ。

とりあえず、後で魔理沙と一護が賽銭箱を修理するということで、この話は決着がついた。

けど、今のやり取りでお互いの間柄が一気に縮んだ感じがする。まるで既に友達だったかのような感覚にさせられた。

と、そこに霊夢が口を開く。

「そうだ。一護、魔理沙。少しいかしら。まあ拒否権はないんだけど」

「ん？」

そして、霊夢はとんでもないことを言った。

「今から二人に弾幕ごっこをしてもらうわ」

第4斬【一護の能力】

《1》

博麗の巫女であられる、博麗霊夢がとんでもない発言をして数十分後のことだ。

不運にも幻想入りしてしまった黒崎一護は、弾幕の出し方すら分からないのに、急遽弾幕ごっこをするはめになったのだ。いやそもそも、弾幕を出せないのに弾幕ごっこになるのか甚だ謎である。

そして相手は、博麗神社に現れた魔法使いこと霧雨魔理沙。霊夢の友達で、弾幕ごっこはプロ的レベルと言っても過言ではない。

初心者VS熟練者の戦い。

それが今、始まろうとしているのだ。

「さてと、それじゃあとつと始めなさい」

連れてこられたのは広い草原。障害物も何もなく、緑色の草がゆらゆら風に靡いている程度の草原だ。

霊夢は一護と魔理沙から少し離れ、まるで戦いを見物しに来た野次馬のような感覚で言ったのだ。

現在一護と魔理沙は対峙する形で向かい合っている。

「……」

一護は黙ったまま霊夢を見据える。今、凄まじいくらいに言いたいことがあった。いや、言って当たり前、思って当たり前のことを。

それを吐こうとした瞬間、

「なあ霊夢。一護ってまだ幻想郷に来たばかりなんだろう？ だったら弾幕の出し方とか分からないんじゃないのか？」

魔理沙が代弁してくれた。

もうごく普通の質問である。

「口で説明しても意味ないわ。こういうことは身体で覚えるに限るのよ。それに若干、一護は外の常識と乖離しているから。そういう奴は、実戦で直ぐに覚えるわ」

何て、身勝手に近い発言をした。

反論しようと思ったが、一護は止めた。

何故なら——一護は今までもそうしてきたからだ。斬魄刀の斬月を手に入れる時も命懸けだった。卍解を覚えるのも命懸けだった。虚化を覚えるのも命懸けだった。無月を覚えるのも命懸けだった。そう、一護は命の危機と隣り合わせになることにより力を発揮するのだ。

反駁する必要は……ない。

「分かったよ。んじややろうぜ魔理沙」

「一護が良いんなら別に構わないけど。怪我しても知らないぜ？」

「ああ、それくらい承知している。けど魔理沙、一つだけ言つとくぜ。この弾幕ごっこ——俺が負けるとは限らねえだろ」

そう、一護は言ったのだ。

魔理沙はそれを聞き、目を見開き、

「……はっ、ハハハ、アハハハハハハハハ！ 言うなあ一護！ いや本当、その気概に意気込みは高く評価するぜ！」

大笑いを上げ、魔理沙は楽しそうな表情。骨のある奴だと認識したのだろう。

「どんな紆余曲折が頭の中で繰り広げられて、そんな考えに辿り着いたかは知らないけど、軽佻浮華でないことを願うぜ」

そう言つて魔理沙は持っていた箒を前方に飛ばした。前方には一護が居るのだが、一護に当たる直前でどんな法則が箒に内包していたのであろうか。その箒は運動量も法則も重力も無視し、まるで意図的に上空に飛翔し、円を描くように背後から持ち主へと戻ろうとしている。

「よっこ」

魔理沙は背後から戻ってきた箒に飛び乗り、そのまま上空に飛ぶ。

「さあ始めようぜ一護！ 私を楽しませてくれよ！」

そして黒崎一護VS霧雨魔理沙の弾幕ごっこが始まったのだった。

《2》

まず先手を取ったのは魔理沙だった。

と言うより人間ではどれだけ足掻いても届かぬ上方にいる魔理沙

に、一護から攻撃できる訳が無い。

「これがスペルカードってやつだ。見ておけよ一護」

魔理沙は一枚のカードを取り出し宣言する。

「星符『メテオニックシャワー』！」

瞬間だった。

魔理沙から沢山の星型の弾幕が放たれた。それはまるで流星群のように。

「これが、スペルってやつか……！」

一護は驚愕としながら、間髪を容れずここで避けきる。避け切れたのは、今までの経験則と身体能力のおかげだろう。

一発一発が軽く草原の大地を削り取っていく。曰く弾幕ごっこでもヘタをすれば死ぬとのこと。あながち間違いではないことを、一護は痛感した。

「ッ！ 魔理沙、飛ぶなんて卑怯だろ！」

「何言ってるんだ一護。弾幕ごっこでの飛行なんて当たり前だぜ」

余裕の笑みを漏らしながら、魔理沙は言う。

そう、一護は知らないけど魔理沙の言っていることは正しいのだ。

「そろそろ、続けていくからちやんと避けるよ」

カードを振りかざす。

「星符『メテオニックシャワー』！」

再び同名のスペルを発動する。

天から一護を蹂躪すべく、数多の流星が降り注ぐ。

「どっ、わあああああああああ!!」

全速疾走——陸上選手でも目を丸くするような速度で走る。その轍には、流星により抉られた大地が残っていく。

「ちよつと待てちよつと待て！ いくら何でも反則だろ！」

最初の威勢はどうしたと言いたい所だが、本当に予想外だったのだ。

まさか、飛ぶとは思っていなかった。本当はもっと早く気づくべきだったんだ。霊夢が普通に平然と、当たり前のように飛んでいたところを推測すれば良かったんだ……と、一護は後悔する。

「いやあけど凄いぜ一護。普通なら最初の一発で終了なんだけど、ここまで耐えきるなんて」

まだ始まって一分程度だが、当初の魔理沙は始まって数秒で終わる予定だったのだ。

十分、ここまでに値するだろう。

「くっ、そ……ッ」

今の一護ではあんな高く跳ぶのは不可能。

だったら石ころか何かを投げつける……いや、こんな状況で石を拾ってる暇もない。

——手がない。手段が全くないのだ。

八方塞がりとはこのこと。攻撃はやまず、何十秒も全速力で走り続ける。

「……なあ霊夢。何か一護にヒントの一つや二つあげたらどうだ？

何か知っているんだろ？ そうじゃないと私と弾幕ごっこをさせるわけないからな」

一護が必死の逃走をしている中、魔理沙は傍観している霊夢に話しかけた。

それに対し霊夢は、

「……もう少し、確証が出るまで見させて。そうすればヒントを上げれるかも」

「分かった」

釈然としないが、魔理沙は攻撃を続ける。

それを避けきる一護。その姿を凝視する霊夢。

そして——数分後。

「……成程ね」

と、霊夢が呟いた。

一方、一護は、

「ッ！ くそー！」

だんだん体力も衰え始め、動きが鈍くなっていく。

息も荒くなり、今日一体どれくらい走ったんだろうと言う疑問が湧くぐらいだ。

「つか霊夢。こんなもんノーヒントで出せる訳ねえだろ！ 何かヒントとかねえのかよ!？」

霊夢に向けて叫ぶ。

すると霊夢は、仕方ない感じで答えた。

「あんたの今持っている、大切な物……と言うより、あんたが今唯一持っている物が、最大のヒントであり、攻略ポイントよ」

「は？ 今持っている物……」

一護の頭に、必然的にアレが浮かんだ。

その浮かんだ物を、走りながら取り出す。

「代行証……」

一護はその代行証を手にし、困惑する。これで一体どうするのか分からないのだ。

いつの間にか魔理沙は攻撃を止め、一護を見入る。

「霊夢、あれがそうなのか？」

「ええ、そうよ」

魔理沙が指差し聞いた質問に即答。そして霊夢は一護に語り掛ける。

「ねえ一護。急に変な質問するけど、あんたに取つての“誇り”とは何？」

「誇り？」

「そう、誇りよ。あんたはそれを持っているはず。何故なら——あんたに会った時からそれを感じていたから」

霊夢は言葉を紡いでいく。

「私があんたと異変の解決に臨んだのは、ただあんたの意地や熱意に負けたからじゃない。あんたからは沢山の戦場を歩んできた心を感じたからよ。だから聞いわ。あんたの誇りとは何？」

「俺の誇り……」

一護はゆっくり思索する。否、自然と頭に流れ出てきた。

死神時代の誇り……ゆっくり目を閉じ、振り返る。

俺が……

死神の力に誇りを持った時のこと……

そんなもん——
数え切れねえよ——!!

瞬間、一護の代行証から卍型の漆黒の霊圧が噴出したのだった。

《3》

一護が死神の力に誇りを持った時のこと……それに対し——心が、力が答えてくれた。

代行証から黒い霊圧が卍型になり噴き出す。それはまるで——

「斬月の鏢」

そう、それはまるで一護の死神代行時の時に使っていた天鎖斬月の鏢だった。

迸る霊圧がそれを描く。

「……あれが、一護の能力なのか？」

魔理沙が一護を指差しながら、再度霊夢に問いかける。

霊夢は既に予測していたかのように、事務的作業の如く答えた。

「ええ、あれが一護の能力よ。あんたは気付かなかった訳？ 一護が走っている時とか」

「ん、何が？」

「まああんたが気付いている訳ないか。そうね、一護が走っている時、一護の足から妙な光が迸っていたのよ」

「光？」

「そう、まるで一護の手助けをするかのように。そして魔理沙の攻撃から逃げている時によく気付いたのよ。あれは、この大地に宿る魂だと」

「大地に宿る魂。待て霊夢、ちよつと分からねえ」

「魔理沙も知っているでしょ。魂つてのは、生き物や草木だけじゃな
いってことくらい」

「ああ、知っているぜ」

「例えば玉、椅子、食器なんかにも微小だけど魂は宿っている。一護はその魂を引き出し使役しているのよ。さっきの走っている時なら、大地の魂を引き出して疾走の補助をさせているように」

まあ逃走中は無意識に発動してただけだけどねと付け足し、そして結論を言う。

「差し詰め一護の能力は『物質に宿る魂を操る程度の能力』ね」

『物質に宿る魂を操る程度の能力』……勝手ながら、一護の能力名はそうなった。

それを聞いた魔理沙は――

「何かよく分からねえけど、凄そうだな。俄然やる気が出たぜ!」

魔理沙は一護に目を向け、闘争心に火を点けた。

「一護、さあ続きをやろうぜ! こっからが本番だぜ!」

「! ああ、分かってるよ」

一護は霊圧が噴出している代行証を手に、構える。

まだ使い方は分からない。能力はさっきの霊夢の台詞を耳に入れていたから、何となくは分かるが。

試行錯誤……している暇はないだろう。相手は魔理沙だ。そんな時間をくれるとは思えない。

だったら――

「思いついただけ試すか」

そう呟いた瞬間、一護は前方――魔理沙の下方位置まで駆ける。

既に能力を自覚しているため、現最大限までに発動できた。初めてなのに、何処か馴染んで使えるのは死神時代の経験のおかげだろう。

「だったら、こいつはお試しだ!」

魔理沙はスペルを使わずに、普通の弾幕で一護を狙う。

言うなれば機関銃。連撃弾雨の勢いで一護を襲う。

だが――

「当たらねえよ!」

紙一重で、無駄な動きをせずに匠に躲し続けながら、こっちに向かってくる。

乾坤一擲、一護はそれを心構えに魔理沙へと猪突猛進する。

「凄いなこりゃ。少しどころか、かなりの驚きもんだぜ」

本気で感心する魔理沙。

恐らく、現状今の一護はそこらの妖怪より上だ。たった数時間、幻

想郷に幻想入りしてたつた数時間でここまで上達する人間を、魔理沙は勿論のこと霊夢でさえもお目にかかるのは初めてだった。

故、感嘆の声上がるのは必然的と言えよう。

恐ろしいまでの才能だと思った。

「んじゃ、こいつはどうかかな」

魔理沙は新たなカードを取り出し、唱える。

「魔符『スターダスト』！」

星型の弾幕が張られ、まるで円を描くかのように二重三重と拡がってゆく。

それに対し一護は十分の距離まできたのか、魔理沙の方を見て、演算を開始する。

どう跳べばあの無数の弾幕を掻い潜り、魔理沙のいる座標値点まで跳べるのかを。それには弾幕の動きの予測、速度、タイミング、ジャンプ力を慎重に計らなければいけない。失敗すれば、そこで終わるのだ。

「……………こっだー！」

一護はタイミングを計り終えたのか、意を決して一気に跳ぶ。その際は大地の魂を操り、反発力の補助をさせる。そうすることによって、有り得ない距離を跳ぶことができるのだ。

「うおおおおおおおおお!!」

演算通りだった。

弾幕を全て紙一重で掻い潜り、十分な距離までジャンプに成功できた。

だが甘かった。

相手は数々の弾幕ごっこを制してきた魔理沙。そんな掻い潜れるような隙間を作るわけがなかったのだ。

数発の弾幕が軌道変え、一護に襲いかかってきた。

「ッ、だが、間に合うー！」

一護は弾幕に被弾する前に、卍型の霊圧が噴出した代行証を魔理沙に目掛けて投げつける。

風車が回転するかのような、まるで手裏剣めいた飛び方だ。

だが――

「いて」

噴出した霊圧が突如消え、ただの代行証だけが魔理沙の額にコツンと当たった。

そして重力に身を置き、そのまま落下する。一護は一護で無理な体勢の空中回避を行い弾幕を避け、そのまま同じく落下する。

「チツ、こういう使い方じゃねえのか」

一護は地面に足を付けると同時に、直ぐ様代行証を拾い上げる。

瞬間、再び代行証から卍型の黒い霊圧が噴出した。

（！俺が掴んでいる間だけ、鏢の形の霊圧が出るのか）

そして一護は試しに、卍型の霊圧を地面に当ててみた。だがその分、地面が凹んだだけで、何も起きてはいない。

（それに斬れてねえ。この鏢にそういう力はねえのか。そりやそうだ、鏢で相手が斬れねえのなんて当たり前だ）

さて、どうしたものかと、一護は思った。

対する魔理沙は、

（まさか一発喰らっちゃまうとは、マジで驚きだぜ）

呆気にとられる結果だったが、確かに代行証は魔理沙の額にヒットした。それは紛れもない事実なのだ。

もし、あれに何らかの力が働いていたらただでは済まなかっただろう。

（それに、あれだけの弾幕を全て、まるで針の穴を通るかのような緻密さでクリアしやがった。こりゃ油断したら負けるな）

魔理沙は再びカードを取り出し、

（まだあれが何の力を持っているかは未曾有。ただ魂を使役しているだけじゃないからな多分。だったら試すしかないか――）

唱える。

「星符『メテオニツクシャワー』！」

再び星型の流星群が一護に降りかかる。

対する一護は、卍型の霊圧でそれを防いだ。

「ッ！」

その際、反動で一護の身体は後方へ軽く吹き飛ばされた。だがこれで一護は一つ確信したのだ。

「いてえ……けど、思った通り。鏢と同じ使い方ならできる」
そう、代行証から噴出している霊圧は攻撃はできなくても鏢と同じ使い方なら可能なのだ。

そして一護はもう片方の手で、無意識に代行証へと触れた。

瞬間——代行証から噴出している霊圧が一段と力強くなった。

一護はその感覚に心当たりがあった。

(!!) 今の感覚は——)

その異常に魔理沙も気付いた。

今のは何だと……。

だったら——

「喰らえ一護！」

魔理沙はもう一度、今のが何だったのかを確かめるため弾幕を放つ。

一護はそれに対し平然と思案する。

(いける。今の感覚は確かに——)

飛来してくる弾幕を見つめながら、遂に真の力を発揮する。

(月牙天衝の感覚——)

一護は雄叫びと共に、死神時代、月牙天衝を撃っていた頃感覚で、代行証を振るった。

その瞬間、卍型の霊圧部分だけが乖離し、そのまま魔理沙めがけて飛んだ。飛来してくる弾幕は悉くその卍型の霊圧に掻き消されていった。

「何だこれは!？」

魔理沙は驚愕しながらも、紙一重のところでの飛来してきた霊圧を躲す。

「くそ、避けられたか」

一護は舌打ちし、再び霊圧が放出する。

「……はっ、今のは危なかったぜ一護」

魔理沙は一護を高く評価しながら、言葉を紡ぐ。

「つてことでよ一護。私も少し本気で行くぜ。別に良いだろう？」

「ああ、構わねえぜ。こっちも本気でいくからよ」

今の一発で、だいたい力の加減は分かった。

故、もう本気で行ける。

魔理沙は一枚のカードと、ミニ八卦炉を取り出す。

一護はそれに訝しむも、ここで一々聞くのは野暮だと思ったので聞かないことにした。

「いくぜ——恋符『マスター——』」

「月牙——」

そしてお互いがぶつかり合おうとした瞬間——

「はい終了ー！」

と、随分無粋な台詞が割って入った。

その正体は博麗霊夢だ。

「な、何だよ霊夢。急に」

一護と魔理沙は呆気にとられながら、傍観していた霊夢の方を見る。

「もう終わりよ。これ以上激突したら、どちらかが多大な怪我を負うわ。そうなたらこっちが面倒だから終わり」

冷める台詞。いや、本当に一護と魔理沙は冷めたのだ。最高潮まで高まった心が一気に底辺へと堕ちた。

「一護の能力もわかったし。当初の目的は達したわ」

「いやまあ、そうだけだよ」

魔理沙がゆっくり地面に足をつけながら言う。

「だから面倒なのよ。もしどちらかが気絶したら運ぶの面倒でしょ。その激突はいつかにとっておきなさい。私が見ていない時にでも」

そう言っつて、霊夢は歩き出す。勿論、帰るためにだ。

もう、こうなったら止まらないので、一護も魔理沙も渋々帰ることにした。

こうして弾幕ごっこは終幕した。随分と詰まらない形で。起承転結の結がない形で。

《4》

その夜、一護は早めに寝た。理由はいきなりの出来事に身体が予想以上に疲れたのだろう。

だが懸念は大量にある。

まず外界もとい一護の世界のみなんだ。

一護はいきなり消失したことに友達や家族が心配していないだろうかということ。霊夢曰く、幻想郷には様々な能力を持った者が居るからどうにかなるんじゃないとのこと。他人事すぎる。

まあ悩んでも解決しないため、一護は早くこの博麗大結界の異変を解決すると心に誓ったのだった。

第5斬【香霖堂と文々。新聞】

——夢を見た。

死んだ母親が出てくる夢。

黒崎真咲が現れた夢。

おふくろが居た、生きていた時、生きていたはずの時の夢。

一護の夢はまるで弾劾めいていて、目を逸らさずにはいられなかった。

断罪、贖い、罪、罰が一護を支配していく。

忘れたいが忘れてはいけけない。それは一生の重荷となり——成長していく。

《1》

朝——

「ん……」

鳥の鳴き声が目覚まし時計代わりになるように、黒崎一護が目覚めました。

同時に太陽の日差しが、一護の顔を照らす。

ポカポカとした光と共に、目を突き刺すような光。

ゆつくりと、上半身を起こす。同時に背伸びし、目をこする。

……夢、か……

一護は布団の中で目を覚めました。いつもとは違う部屋。いつもと違う部屋の匂い。いつもと違う布団。いつもと違う要素が盛り沢山な部屋だ。

「朝……か」

呆けた頭を起こすように布団からのそりと立ち上がり、縁側に出る。

快晴と言って良いほどの蒼天。日光が暑さを作り上げ、それが風に乗ってやってくる。

季節は夏……とこの神社の主である博麗霊夢は言っていた。

確かに夏だろう。この暑さと、夏の証拠であるセミの鳴き声なんか

も確認できる。初夏と言ったところだろうか。夏はこれからの的な感じだ。

「……そっか、俺、幻想郷つてところに来たんだな」

呆けた頭が徐々に覚醒し、状況を軽く理解する。

思い出す。昨日のこと。幻想入りし、妖怪に襲われ、霊夢に助けってもらい、神社に居候させてもらい、魔理沙と言う友達ができ、弾幕ごっこをして、能力を習得し、一日を終えた。

これほど濃厚な一日は他にないだろう。

死神時代でもあつたかどうかすら分からないくらいだ。

——夢を見た。

不意に一護はそう思った。

夢の中におふくろが出てきた。別に出てきても、それ程気にはしないけど、何だろう……この不快感は。おふくろを見て不快な気分になった事など一度も無いはずだ。

それなのに、この感覚は一体……。

自分でも腹が立ってきた。おふくろに対する自分に対してだ。

……と、そんなことを考えていると唐突に、

「起きた〜一護」

霊夢が襖を開けて入ってきた。

一護は後ろを振り返り、定番の朝のご挨拶をする。

「おはよう霊夢。朝は早いなだな」

自分は今起きたところだが、明らか霊夢はその前から起きていたのだろう。既に巫女装束になっており、寝起きとは思えない目つきだ。

「二応神社の神主よ。日の出る前に起きる習性くらいはついてるわ」

「そうか」

まあそうだろう。神社の人は朝が早いと聞いたことがあるし。

「起きたんなら顔を洗ってきなさい。朝餉の準備が出来てるから」

「おう、分かった」

一護は朝の支度を始めた。

*

朝食の後、一護と霊夢は居間でお茶を啜っていた。

そして不意に、と言うより昨日行く予定だった場所を思い出した。

「今日は一護の着物を買に行かないといけなかったわね」

そう、一護はいきなり幻想入りしたため、自分の服が全くないのだ。故、今日中にこれからの衣服を購入しなければ明日から色々大変なことになる。

「そうだな、確か香霖堂ってどこに買いに行くんだっけ？」

「ええ。お金はいずれ返してくれると良いから」

「あ、ああ。分かってるよ」

お金の面は誰よりもしっかりしているようだ。

まあ仕方のない話だ。前述で言った通り、一護は代行証以外何も持ってきていない。だから金銭面は霊夢に頼るしかないのだ。勿論、後でしつかり返す約束のもとので。

「んじゃ、やることもないし、とっとと行こうかしら。先に外に出て待ってて」

「……なあ、その香霖堂ってここにはどうやって向かうんだ？」

無性に嫌な予感がした一護は、一応聞いておくことにした。

「え、飛んでいくけど」

「やっぱり……」

一護は溜息をつきながら縁側から外に出た。

霊夢は霊夢で部屋の奥に入る。

「さて、どうしたものか」

一護は悩む。

このままだとまた半端ない距離を走らされる。恐らくだが昨日以上の距離になるだろう。

いくら能力で補正を加えても限度つてものが存在する。

地面の魂を引き出しても、あくまでアクションを起こすのは一護本人であり、疲れるのも一護だ。

(……魂を引き出すか。そう言えば死神は霊子を足場にして空中に立ってんだよな。だったら、俺の能力を応用すれば、どうにかなるんじゃないかねえのか)

万象全てに微小ながら魂は宿っている。それは勿論、空中にも宿っているということだ。

なら――

「空中の霊子を引き出し、使役する」

瞬間、一護の足元から妙な光が迸る。これは一護が能力を使用した証左である。

「……」

そして自分の目の前の空中に踏み台を作る感覚で、片足を置く。

トン……と、簡単に上手くいった。

「よつと」

一護は更に足場を作る感覚で、空中に両足で立つ。これでまるで一護は空中に立っているかのようになった。

ちなみに何故、こんな簡単にできたかという点、死神時代も同じ感覚で空中に立っていたおかげだ。死神の力を失っても、あの時の感覚が骨の髄まで染み付いているのだ。

(これなら霊夢に置いていかれることはなくなるな)

一安心。

あの時の体験はもうしたくない一護である。

「へえ、もうそこまで能力を使えるようになってるのね。ちよつと驚いたわ」

ちよつと良いところに、霊夢がやって来た。

若干驚いた様子で一護の姿を見ている。

「これでお前に置いていかれずに済むぜ」

「失礼な言い方ね。私がいっつ一護を置いてったのよ」

「昨日のことを既に忘れてるだ」と

「それじゃあ、行くわよ」

一護の文句など知らん霊夢は、空中に浮遊し香霖堂に向かうこととなった。

《2》

「……此処が、香霖堂なのか?」

「そうよ」

「物置じゃねえよな」

「言いたいことは分かるわ。けど此処が正真正銘の香霖堂よ」

その証拠に香霖堂と言う看板が粉飾されている。

目の前にやや小さい雑貨店のような店がある。骨董店にも見えなくも無い。見方を変えれば物置だ。

店前には外の世界に有るような物が置かれている。古い看板や道路標識、軽トラ、カーネル・サンダーズ像まで置いてある。

(……不気味だな、ここまでくると)

そして一護は一通り見渡した後、ある事に気付いた。

「つうかこれ、全部外の世界のものだろ!？」

「あら、言ってなかったかしら? 香霖堂は幻想郷の物はもちろん、外の世界の物も取り扱ってるのよ」

「初耳だな」

きつぱりと言う一護。

「とりあえず中に入るわよ」

霊夢の言葉に二人は店内に入る。

店の中は店と呼ぶには余りにも煩雑に物が散りばめられており、本当に商売する気あるのかと疑いたくなるような店内である。

奥のほうにカウンターが有り、一人の男性と一人の少女が話している。どうやら、一護と霊夢には気付いていないようだ。

(客が一人……つか結構散らかってもいるな。大丈夫なのか、この店?)

一護は店に対して少し不満を覚える。

売上とか大丈夫なのだろうか?

と、よく見ると男性と話している少女に見覚えがあった。

見覚えどうこうというより、昨日会った、

「霖之助さん、ちよつと良い?」

霊夢はカウンターのの方に歩み寄り、男性に声を掛ける。

どうやら男性の名前は霖之助というらしい。店の名前の由来が直ぐに分かる。

そして霊夢の声に、カウンターの二人がようやく一護と霊夢に気付いた。

「やあ、いらつしやい霊夢。久しぶりだね」

男性店員が気さくな態度で接客する。

霖之助——白髪のショートボブにアホ毛。黒と青のツートンカラーをしたつなぎのような服装で、首には黒いチョーカーを付けている。

片方の少女は、

「お、ライムにイチゴ」

「誰がライムとイチゴだ!」

いきなりボケを入れてきた。

正体は霧雨魔理沙だ。

「ん、君は?」

店員は霊夢のやや後ろに立つ一護に目を向ける。

一護はまるで反射的に、

「あつ、俺は黒崎一護。あんたがここの店主の?」

「ああ。僕は森近 霖之助。そうか、君が魔理沙が言っていた黒崎一護君か」

お互い自己紹介をする。

その前に魔理沙が既に、霖之助に一護の事を話していたらしい。ちゃんと事実だけを話したのかは不明だが。

「いやあ、こんな汚い店で悪いね。来る客が限られているもので」

自分の店の悪さを軽く陳謝する。

確かにこのような店は、変わった常連客くらいしか来ないだろう。

「それで、どんな物が入用だい?」

「男物の服と下着なんだけど」

女性の前であまり下着という単語は使いたくないなと思った一護。それにこんな店に衣服があるのだろうか心配だ。

「それなら、あっちの方の棚にあるよ」

霖之助は指差す。

「どうも」

指定された棚の方に歩み寄り見てみると、確かに様々な衣服が陳列していた。

外の世界でよく見る服も陳列している。てか、その方が多い。とりあえず一護は陳列されている服や下着を見渡す。

色んな種類の服が沢山有り、サイズが合いそうな服を手取る。あまり派手すぎず、地味過ぎない服が良いだろう。

と、そこに霊夢が近づいてきた。

「どう、似合いそうなのある?」

霊夢が一護の傍らに立って聞く。

「いや、ただだけ。とりあえず四着くらい有ったら良いか?」

「そうね。そのくらいが妥当じゃない。で、どんなのにするの?」

霊夢も一護と一緒に棚に陳列されている服を見る。物珍しいのが多いのか、少し興味ありげに見渡していく。

「そうだな。動きやすい服なら何でも良いつもりだけど」

「動きやすい服ねえ」

霊夢は動きやすい服を探し出す。どうやら手伝ってくれるみたいだ。

その間に一護は下着を探す。これだけは手伝ってもらおうと恥ずかしいので早めに選ぶことにした。

「……にしても外の世界の人間って変わったものを着るのね」

「俺からしたらお前たちの方が変わってるんだよ。巫女服とは魔法使っぽい服とか、外の世界ではほとんどコスプレってやつになるんだよ」

「コスプレ?」

一護は下着があるところをゴソゴソと漁りつつ、

「ああ、俺も詳しくは知らねえけど、普段しない特別な格好、みたいな感じだ?」

例としてアニメの服なんかがあるが、そういつても伝わらないだろう。

「ふくん、特別ね。そうだ、何かこう艶っぽい服を着たら参拝者が増えたりするのかしら?」

「元が艶っぽくないから無理だろ」

何て返した瞬間、いい一発を頂いた。

「……いてえ、つか自分を売る真似は好きじゃねえんだよ。お前はそういう奴を目当てで巫女をやりたいのか？」

「え、ち、違うわよ。そんな訳ないじゃない」

「だったら、そんなことせず巫女として堂々と胸を張って言えることをしろよ」

「そうね、分かったわよ」

「ああ、お前ならできると俺は思うからよ」

と、霊夢の方を見ていった時、彼女の顔が不快なものを見る目になった。

「……あんた、そういう趣味があるの？」

その手にはフリルの付いた純白の——女性用のパンツがガツシリ握られていた。

「ち、違う！ そうじゃねえ！」

何か決まらない一護であった。

*

数十分後、一護は数枚の服と下着を持ちカウンターに向かった。

香霖堂は普通の店と違って商品を価格交渉し値段を決めるらしい。

一護にはそれほど交渉術は無いが、幻想入りしてしまった一護の為に値段を安くしてくれた。客に優しい店である。前言撤回だ。

「ありがとな、霖之助さん」

安くしてもらった事に対し、一護は霖之助にお礼を言う。

「どういたしまして。また来てください」

「ああ」

一護と霊夢は店を出て行った。

そんな中、魔理沙は魔理沙で同じく陳列されている衣服を見ていた。

「改めて見ると色んな着物があるな」

魔理沙は色々な服を見ながら感心したように言う。

「そうだね。で、君はいつになったら帰るんだい」

霖之助もあくまで商売。

完全に冷やかしかしである魔理沙には若干だけ困っている。話し相手と言うより、友達としては大切だが、それはそれで別の話。

「おお、なんか凄い着物発見だぜ」

魔理沙は霖之助の話を無視し、棚の奥から一着の着物を取り出し広げた。

全身黒い着物で、セットになるように下には純白の長襦袢がある。それはまるで……

「——おっと、そういや今日は人里で用事があるんだったぜ」

魔理沙は不図、思い出したかのように言う。

そして着物を棚に置き「じゃあな香霖」と言い店から出て行った。

「全く、慌ただしいな」

霖之助は慌てて出ていく魔理沙を見ながら呟いた。

同時に魔理沙が無造作に置いた着物を自然と見る。

(そういえば、この着物……いつから此処に有るんだっけ?)

黒い着物を手に取り記憶に検索をかけた。

だが、思い出すのが面倒になったので着物を畳んで棚に戻す。まあ店には適当に拾ってきたものや、売られた物が多々あるので忘れていても仕方ない。

そして今日は特に何も無く一日が過ぎ去った。

《3》

どうして私は、閉じ込められてるの？

どうして私は、一人なの？

どうして私は、私じゃなくなるの？

私って、何なの？

生きるって何？

私は、生きている意味ってあるの？

私は……

*

暗い微睡みから、朝日に照らされ一護は目を覚ます。

今日も今日とて小鳥の鳴き声が聞こえ、優しい風が緑を揺らす。
重い上半身を布団から起こし、大きな欠伸を上げる。疲れがまだ
だ取れていないのかな？

——何だったんだ？ 今の夢。

また変な夢を見た。

一護は起き上がるよりも先に、その疑問が浮上した。

曖昧模倣な夢だった為、あまり覚えていない。だが、少しは記憶に
残滓の如く存在している。

誰かが自分に語りかけていた。何処か悲しみの孕んだ声音で、まる
で自分に助けを求めてきているような感じだと、直感だがそんな気が
した。

私は……一体あの続きは何だったのだろうか？

悩んだところで解決はしないが、その謎が頭にへばり付いて無くな
らない。

まあそもそも夢の内容を鮮明に覚えている方がおかしいだろう。
悩むだけ無駄だし、あくまで夢なのだ。別に現実には何の因果も齎さ
ないだろう。

一護は布団から起き上り、縁側に出る。

そこから外に出て、井戸へと向かう。夏なので寝起きは多少汗をか
く。しかも外は太陽の熱気が支配しているため熱い。その垂れてく
る汗を井戸の冷たい水で洗い流す。ここには水道と言う物がないた
め、一々外まで行かないといけないのが不便だ。

「ふう……」

一護は空を仰ぎ見る。

太陽がかんかんに照っており、心地よい風が吹いている。
濡れた顔に暖かい風が吹きつけ、気持ち良くてならない。

この暑い中、井戸の冷たい水はかなり最高だ。

……だが心が落ち着かない。

あの妙な夢のせいだ。

昨日はおふくろの夢を見た。そして次はよく分からない夢。何か
関係でもあるのだろうか。それとも、何らかの形で一護に降りかかる

のだろうか。全く理解できない。

そんなことを考えていると……

「一護〜！ 顔を洗ったんなら早く居間に来なさい。朝餉ができてい
るから」

いつの間にか縁側に立っていた霊夢が、一護に呼びかけた。

とりあえず考えるのは止め、

「ああ、分かった〜」

と言い居間へと向かった。

*

朝食を食べ終えた一護は、縁側に座り呆けている。

と言うより、夢のことで頭が一杯だった。

「何だったんだよ、あの夢」

どうしても気になるが、どうしても思い出せない。

おふくろの夢の後だからだろうか、どうも肝要に受け取ってしま
う。本来なら蚊帳の外にでもやるのだが。

「……また、見るのかな？」

何て思ってしまった。

二日続いて変な夢を見たんだ。そう思って仕方ないだろう。

そこに御盆を持った霊夢が一護の横に座る。お盆の上にはお茶
の入った湯呑みが二つあり、一つを一護に差し出す。

「はい一護」

「おう、ありがとう」

一護は湯呑を啜り、夢のことで考えるのは止めた。それに考えたと
ころで解決する訳が無い。

「なあ霊夢。博麗大結界の方はどうなったんだ？」

ふと頭を過ぎったので聞いてみる。

「全く進歩なし。原因も何もまだ調査中よ」

「そうか、難題なんだな」

「そんなレベルの話じゃないんだけどね。ここまで原因不明だと、逆
に怖いくらいよ。難題と言うより、まるで解けない問題をさせられて
いる気分だわ」

まるでフェルマーの最終定理。存在しない異変の存在を解こうと
している感覚に等しい。

それ程までに、今回の異変は未知過ぎると言う訳だ。

「そんじゃあ、俺が帰れるのもまだまだ先になるかもしれないな」

「もしかしたら永遠になっちやうかもね」

何て、悪い冗談を言う霊夢。

だが、笑い話で済まないのが現状なのだ。

「まあそんなことは置いといて」

「置いとくなよ。ちゃんと嚴重に収納しとけ」

「朝から妙に元気なかったけど、何かあったわけ？」

一護の言葉を見無視し、同時に痛いところを突かれた。

心配した霊夢は何となく聞いてみると、

「何でもねえよ。ちよつと嫌な夢を見ただけだ」

「そう、なら良いけど」

漠然と答えた一護に対し、やや不満があるが気にしないことにし
た。

本気で何かあったら相談なりなんなりしてくると思ったからだ。

「……なあ霊夢、そう言えば聞くの忘れてたけど、この神社では一人暮
らしなのか？」

本当に聞くのが遅い。

一護がここに来てから、居て当たり前の存在を目にしていないの
だ。外とは常識が違うため、そこまで順応していたから気にしなかつ
たが今になって気になった。

「ええそうよ。それが何か？」

「いや、両親とか居ないのかなって思ってたさ」

両親……そう、霊夢はまだ幼い。外見年齢なら15歳くらいだろ
う。

そのくらいの年齢なら両親と一緒に暮らしていてもおかしくない。
だがその両親が見当たらない。神社で一人で修行中と言う憶測もあ
るが、どうも解せない点が多々あるのだ。

「……」

その質問に対し、霊夢が黙ってしまった。

まるで触れてはならないことを聞いてしまった感覚。

一護は反射的に戸惑った末、謝る。

「わ、悪い。何か、悪いこと聞いちゃったか？」

「いや、別に構わないわよ。疑問に思っただたり前だしね」

霊夢はどこか悲しみが滲み出ている声音で言う。

「私の両親はね、ここには居ないの」

「……？」

そのことが指すのは博麗神社になのか、幻想郷になのか……それとも、この世になのか。

霊夢はその続きを淡々と述べるように紡ぐ。

「そうよ。もう居ないの。私の母様と父様は——」

と、霊夢が言おうとした瞬間、

強い風が、風切り音を上げながら吹雪いた。

突然の強風に、一護と霊夢は驚く。勿論、そのせいで霊夢の先がちようど良い感じに鎖され、聞くことができなくなった。

「痛ッ！」

同時に一護は、風により舞った砂埃が目に入り、両目を両手でこする。

「ちよつと文、砂埃を上げないでくれるかしら」

霊夢は砂埃を喰らうことなく、風を起こさせた者に文句を言った。

「アハハハハ、すみませんね。私も結構風力を弱めたつもりだったんですけど、なかなか上手くいかないものですね」

誰か、女の声が一護の耳に入った。

だが残念なことに、一護の目はやられた為、全く見えない。

「自分の力も制御できないって、三流も良いところよね」

「ちよつと霊夢さん、私はこう見えても一流の鴉天狗ですよ。舐めてもらっちゃ困りますね」

「はいはい、自称でしょ」

二人が話す中、一護は目をこすりながら、潤んだ瞳で開眼した。そこには一人の少女が目の前に立っていた。

服装はシンプルに黒いフリルの付いたミニスカートと白いフオーマルな半袖シャツ、赤い靴は底が天狗のゲタのように高くなっている。黒のボブの髪型で、その頭の上には赤い山伏風の帽子をかぶっており、首からはカメラを掛けている。

「……誰だ、あんた？」

少女はその声に気づき、霊夢の横に座る一護の方に目をやる。

そして営業スマイルよろしく、満面な笑みで少女が答えた。

「私は清く正しく生きる伝統の幻想ブン屋 射命丸文です。以後お見知りおきよ」

文はペコリと頭を下げ、自己紹介をした。

「ど、どうも……あ、俺は黒崎一護。よろしく」

予想以上に礼儀正しい慇懃な態度に驚き、一護も自己紹介を行う。

「はい、よろしく」

と言って、一護の手を握り握手を交わす。

そこで一護はふと思った。

「あれ、お前って妖怪か？」

鴉天狗と言う単語に一護は反応したのだ。

「そうですよ。妖怪の山に住む鴉天狗です」

一護はそれを聞いて少し驚いた。

妖怪は初日に遭ったような奴ばっかだと思ったが、こういう奴も居るのかと。

「そして新聞記者も勤めています」

「新聞記者？」

「はい、新聞記者です。文々。新聞と言うのを読んだ記憶はありませんか？」

「いや、一度もないけど」

新聞と言うからには、外と同じような感じのものだろう。

そんなものは幻想郷に来てから一度も見たことはない。

「そうですか、なら次に出す新聞は必ず拝見してくださいね」

「あ、ああ分かった」

文の妙なテンションと逼迫感に押される一護。

ある意味、記者に向いているかもしれない。質問攻めなど得意そう
だ。

「それではそろそろ本題に入りますね」

言うのと、文は手帳と鉛筆を取り出した。

これは取材が始まる展開だと、一護は直ぐに悟る。

「単刀直入に申し上げます。黒崎一護さん、ちょっと取材と撮影にご
協力してもらえませんか？」

予想の中。

やはり取材が始まろうとしていた。

「いや、そういう取材とか、あまり好きじゃねえんだよ。断つても構わ
ねえか？」

「そうですか、残念です。仕方ありません、私の独断で記事を書かせて
頂きましょう」

「え？」

「黒崎一護さんは巫女好きの少女愛好家（ロリコン）であられると
……」

「ふざけんな！」

と怒鳴る一護。

そんなことを書かれた日には、もう外を出ることはできない。

「なら、取材……受けて頂けますか？」

悪い笑みを浮かべながら、脅迫にも似た形で言葉を吐く。

こんな記者、この世を探してもいないだろう。いや、居るかもしれ
ないがここまで露呈して言う奴は少ない。

一護は溜息をつき、

「分かったよ。受けりゃいいんだろ受けりゃ！」

もうやけくそ気分で受けることとなった。

脅迫に弱い一護である。

「ありがとうございます！ これで久しぶりにしっかりとした記事が
書けますよ」

「久しぶりにしっかりとした記事が書ける？ まさかあんた、普段か
ら色々捏造した記事を書いたりしてねえだろうな？」

「……さき、取材を始めますよ!」

「人の質問に答えろよ!」

「失礼ですね。こう見えて私は嘘など書きません。ちよつと脚色しちゃうことも、たまにはあります。嘘は書きませんとも!」

「その脚色が怖いんだが……まあいいや。早くしてくれよ」

「ええ、勿論!」

こうして、嫌々ながらも取材が開始された。

*

数十分後、文の取材は無事終了し、満足そうに帰っていった。

内容は特に変わったものではなく、一護自身少しほつとした感がある。

「終わったの?」

そこに霊夢が襖の奥から一護のいる縁側に来た。

取材が始まった時、霊夢は部屋の中へと戻っていった。恐らく一護の取材で自分まで質問されるのが嫌だったのだろう。

「ああ、少し不安だけどな」

新聞記者だから少しは脚色をいれるだろうが、文の場合何やら妙な胸騒ぎがする。

「そう、まあいいわ。明日の記事がある意味、楽しみだわ」

「ん?」

一護は霊夢の言葉が理解できずに、一日を有意義に過ごしたのだっ
た。

*

次の日の朝、いつも通り居間に行き霊夢と共に朝食を食べ始めようとする。

そして朝食に箸をつける前に、霊夢が噂の『文々。新聞』という新聞を渡してきた。

「これに昨日の取材内容が載っているわ」

「へえ、どんなだよ」

一護は少し興味有り気に新聞を受け取る。

見た目は外の世界の新聞と何ら変わらない。ただテレビ欄やラジ

才欄などが無いだけで、書かれている事柄は変わらない。

そこで一護は一面トップを飾るように書かれていた記事を、瞬時に見つけ出す。

大々的に一護の写真が載せられており、一護についての簡単な紹介文などが書かれていた。そして内容を読み進めて……一護の表情が固まった。

「……な、な、何勝手なこと書いてんだあの女！」

一護は怒りを孕んだ絶叫の声を上げる。

新聞に書かれていた事の一部を抜粋

「黒崎一護氏は幻想郷にやって来た戦闘狂。異常なほど好戦的で戦闘になると凶悪な笑みを浮かべる黒崎一護氏は、あの博麗の巫女と互角以上の戦いを行ったと匿名の人物から証言も受けています。黒崎一護氏は取材の時、一言こう言い残しています。強えエ奴はかかって来やがれ！」

強いヤツ大募集!!」

「俺は剣八じゃねえぞ！」

一護の脳裏に狂気な笑みを浮かべる剣八が現れる。あんな奴と一緒にされたくない。

脚色どころの問題ではない。もはや捏造だ。

「あの野郎！ 次会ったら弾幕勝負でブツ飛ばす！」

一護はそう心に誓ったのだった。

*

勿論その新聞は色んなところに行き渡っている。

例えば薄暗く静謐さを宿す館の中では――

「フッフ、面白い人間が来たわね。まあ博麗に居るから、私の計画の邪魔にならないければ良いけどね」

「邪魔となる場合、私が即刻排除します、お嬢様」

例えば平屋の日本屋敷では――

「あら、へえこの男の子って、あなたを倒した人間じゃない？」

「あ？ ……ッ！ 何でこいつが……？」

例えば多数の魂魄が浮遊している広大な庭では、

「博麗のところに外来人ですって。こういう展開って基本、何かあるのよね。面白くなりそうじゃない?」

「あまりそういうことを言わないでください」

例えば竹林に囲まれる屋敷では――

「あら、この人は……あなたの話していた人じゃない? 間違ってたらごめんね」

「……黒崎一護、なぜ貴様が此処に」

例えばある山の上の神社では――

「また天狗が勝手なことを書いたんでしようか? そんな野蛮そうな人物を博麗神社に引き入れるとは思えませんね」

「別にそうであっても私達には関係ないわ。今のところはね」

例えばある地底世界では、

「いいね、強いヤツ大募集か。よし、これを機にちよつと地上に行ってみるか!」

「ハア、面倒なこつた。何でこいつが幻想郷に居るんだろうな」

「おや、あんたの知り合いかい?」

例えばある寺では、

「面白い子が来よつたな。ここまでくると運命やで。全く、どんな顔して会えばええんやろな」

「あなたの知り合い?」

「ボクが話した、おもしろい子ですわ」

各々が動き出す。あらゆる目的が交差し、混沌を生み出す。

そうして幻想郷で異変が始まっていく。

第3章 〈東方紅血鬼篇〉

第6斬【紅い霧】

——そこは暗く、静謐感に満ちた寂しい場所。

窓も無く家具すら殆ど無い、石造りの酷く息苦しい部屋。まるで精神病院のように隔離された場であり、罪人を閉じ込めておく刑務所のようなでもある。

こんな場所、常人なら精神に異常をきたしてしまうかもしれないよな所だ。

故、このような場所に人間がいることなんて考えられない。どれだけ悪事を働いた罪人でも、このような場所には入れられないだろう。

だから、そうだから——こんな場に少女が居ることがとても不自然で、かえってシニールに映ってしまう。

床に、体育座りをして顔を伏せている10歳くらいの少女。

悲しんでいるのか——黒崎一護はそう思った。

現在、一護はこの夢を認識している。明晰夢というやつだろう。ただ明晰夢は自分でその世界を弄ることが可能と学問的には言われている。しかし、この夢を現状全くコントロールできない。明晰夢とは少し違うのかもしれない。

まるで本当に自分がその場にいるような錯覚を覚えさせる夢。

そして不意にだった。

——少女が顔を上げ、こちらを見てきたのだ。

だが一護には暗くて少女の姿をよく確認できない。

分かるのは少女の赤く輝く、宝石のような瞳。枯れ果てた、泣き泣いた瞳の色をしていた。

一護が逡巡する前に、その少女が一護に向けて口を開いた。

「私を、助けて……お願い」

儂く散ってしまいそうな声で、少女が一護に助けを求めた。

何故、一護に助けを求めるとか分からない。そして、何で助けを求めているのかも分からない。

「…………お前の名前は？」

一護はふと、ほぼ無意識にそう少女に尋ねた。

少女はその質問に少し驚き、おどおどとした雰囲気で答える。

「ブランドール・スカーレット」

ここで、一護の意識は完全に途絶えた。

*

朝…………夏の日差しが幻想郷を覆う。

セミの鳴き声が響き、より暑さを訴えているような気がする。

(…………また、妙な夢を見た)

今回の夢は少しだが、覚えている。

少女が暗く牢獄のような部屋で、自分に助けを求めてきた。理由も何も分からないが…………しかも夢だが、どうにも気になって仕方ない。それに起きたばかりなのに、どこか疲れが生じている。

「くそ、お湯でも浴びてスッキリするか」

変な汗までかいた一護は、とりあえず水で流したいと思ったのでお風呂場へと向かった。

寝起きで頭が回らず、ふわふわとした状態で脱衣室に入り衣服を脱ぐ。

汗で少しベタついていたため、裸になっただけで少しすつきりした。タオルを腰に巻き、

「ふう、さして汗を流してっと」

浴室の戸を開けようとした瞬間――

「……………」

「……………」

逆に誰かが浴室から戸を開けてきた。

いやもう、誰かなんて表現をしているが、そんなもの決まっている。博麗霊夢である。霊夢も湯を浴びていたのだろう、艶めかしく、つややかに水で濡れていた。

霊夢は茫然と、時間が止まったかのように動かない。まだまだ未熟な果実を思わせるその体、しかし鍛えているだけあって引き締まった体が妙に艶めかしい。

霊夢の濡れた黒髪から、水滴がポタポタと落ちていく。対して一護は嫌な汗がポタポタと落ちていった。

「……えっと、あの、あく、何だ……」

どうする、どうすればいいと、過去最大級に思考が回らなくなった一護は、無意識に腰に巻いたタオルを取り、

「ほら、使えよ」

何てアホなことを言ってしまった。

「この……ヘンタイツ!!」

その後、一護は赤い汗もかいてしまったのだった。

*

そんな早朝のやり取り（一護は土下座で徹底した謝罪）が終え、霊夢の機嫌も土下座により功を奏したのか、無事直してくれた。

そして朝食を食べ終えた一護は、弾幕の練習に勤しむ。

すでにスペルカードを一護は多少使えるようになっていた。

そんな弾幕の練習をする一護を霊夢は縁側からお茶を飲みながら見物していた。

「こんな短期間で弾幕をここまで使いこなすなんて凄いじゃない」

霊夢は一護の弾幕を見て、少し感心する。正直、こんな短期間でここまで弾幕を上手く使いこなせるようになるとは、予想外に等しかった。

一護の弾幕の色は黒くて丸い。ザコ敵が出すような感じがするのは錯覚だろうか。

それに――

「不気味な弾幕よね」

「うるせーよ」

一護は軽く霊夢を一喝し、スペルカードを取り出し、慣れた感じで唱える。

「黒符『月霊幻幕』」

瞬間、一護の周囲に無数の弾幕が展開された。

そして上空に飛ばし、意図的な操作で弾幕同士全てコントロールし、被弾させ合う。全て小さい爆発音を上げ綺麗さっぱり消滅して

いった。

「よし、こんなもんか」

弾幕のコントロールは上々と、事務的確認のように思う。

それを見ていた霊夢が、

(……本当に凄いわ。ここまで成長率が早いと、恐怖すら覚えるわね) そう評価する。

霊夢は飲み終えた湯呑みを置き、立ち上がる。

「それじゃ、私と実戦練習でもしよっか？」

一護はその言葉に一瞬、面食らう。

「少し、一護の力を試してみたくてね。良いでしょ？ それに、自分の腕を確認するいい機会にもなるだろうし」

霊夢はお札を出して言った。この状況は断っても意味が無いことを既に理解している一護は「ああ、良いぜ」と言い、承知した。

一護自身もどこか霊夢とどこまで渡り合えるか、試してみたかったのもある。故、好都合でもある。

霊夢が本殿に御札を五枚ほど貼り付け、特殊な結界を張る。

こうすることによって、本殿に弾幕による被害はいかないのだ。

「さて、それじゃ始めようか一護」

「ああ、本腰でいくぜ」

両者構え、相手の目を見据え、スペルを唱える。

「黒符『天幻月牙』！」

一護のスペル発言と同時に、弾幕ごっこが始まった。

*

同時刻……ある薄暗い部屋にて、一人の少女と一人の女性が居た。

部屋はかなり広く、備えられている家具は素人目でもかなり高価な物と分かる一品ばかり。

少女は椅子に腰を掛け、女性はその前に立っている。

「咲夜、計画の準備は出来ているかしら？」

少女は上から視線で咲夜と言う女性に聞く。

「はい、お嬢様。いつでも実行に移せます」

咲夜という女性は答える。どうやら二人は主従関係のようだ。

「そう。じゃあ、命令通りに動いてね」

「はい。承知しました」

従者である女性が頭を下げると、そのまま姿を消した。

少女は一人になると、ボソリと呟く。まるでそれが今から起こりうる真の目的かのように。

「あわよくば、奴等を引き摺り出せるかもしれないわ」

そういうと部屋に静寂が戻った。

*

数十分後、一護は神社の縁側で座っていた。と言つても、上半身は仰向けに倒れているが。

その隣には霊夢が座しており、先程と同じくお茶を啜っている。

「クソ……ッ、やっぱりまだ勝てねえか」

悔しそうに呟く一護。

それが耳に入った霊夢は、

「当たり前よ。幻想郷に来て、弾幕を覚えたばかりの奴に私が負ける訳ないでしょ」

当然のように答える。

確かに一護の成長率には天賦の才めいたものがあるが、霊夢は妖怪退治、異変解決のエキスパートだ。幻想郷に来たばかりの新参に負けることは到底ないだろう。

「でも、強かったわよ。そこらの妖怪じゃ太刀打ちできないくらい。やっぱりあんたの潜在能力は凄く高いわ一護」

だが強いのは認めざるを得ない。

今の一護なら軽い異変なら攻略とまではいかないが、戦闘力としては申し分ない。

「そうか、そいつは良かった」

喜んで良いのか分からないが、一応は認められているのか、判然とはしなかったが答えた。

その時だった――

幻想郷（セカイ）が赤い紅い朱い、自然現象とは思えない、紅い霧に覆われた。

急に、何の予兆もなく一瞬にして、紅い霧が博麗神社を、空を全て覆い尽くしたのだ。同時に夏の太陽を隠し、陽射しが消える。

一護と霊夢はその光景に驚愕する。まるで自分たちが異様な空間に迷い込んでしまったような錯覚をしてしまう。

「ッ！……何だ、こりゃ!？」

一護は立ち上がり、空を仰ぎ見る。

赤一色の空。まるで別位相別次元の世界にいるような、妙な感覚がある。

同様に霊夢も立ち上がり、紅い霧に包まれている世界を見る。ただし一護と違い、見ている眼は何かを思慮しているように見える。

「……この霧から妖力を感じるわ。これは、妖怪の仕業ね」

その言葉に一護は目を丸くする。

「これが、妖怪の仕業だど？」

「ええ、そうよ」

こんな大規模の異変を、妖怪が起こせるとは思えなかった一護は、驚愕に値した。

「まさか、結界の異変に関係してるんじゃないや……」

「それは調査してみないと分からないわ」

とりあえずと、霊夢は雰囲気を変え、

「今から異変の原因を突き止め、解決に向かうわ。それが博麗の巫女に課せられた使命だからね」

言う。

博麗の巫女は代々幻想郷で起こる異変の解決や、悪い妖怪退治が仕事であり使命。

シンプルだが、それをクリアするのが困難なのだ。

「なら、俺も行くぜ。そのために弾幕を覚えたんだからな」

久しぶりの感覚に一護の血が疼いた。

死神時代の、激戦を前にする感覚へと変わる。

「……分かったわ。じゃあ行くわよ。あっちの裏の湖が怪しいから、調査はそこからね」

「ああ」

こうして、一護と霊夢のコンビが初の共同異変解決へと向かう。

第7斬【闇の妖怪とバカな妖精】

《1》

現在、幻想郷は紅い霧に覆われており、太陽の陽射しも遮られている。おかげで不気味な上、肌寒い。

一護と霊夢はその異変を解決するべく調査に向かっている。

霊夢の勘では湖の方向が怪しいらしく二人は現在、湖に向かうため薄暗い森を歩いているのだ。

そんな中、一護はある事を思い出したかのように口を開いた。

「そういや妖怪つてどの程度の規模まで異変を起こせるんだ？」

こんな紅い霧を幻想郷中に覆わせているのだ。初見の一護は魂消たが、霊夢はそれ程までに駭然としていなかったため、規模的にこの程度クラスは今まで何回と解決していったと見るのが自然だろう。

故に気になった。

そんな質問に霊夢は軽い感じで、

「そうね、まあこれ規模は数える程しか解決してないけど、小さい規模なら結構あるわよ」

「そいつは随分、頼もしいな。つか、異変って今まで何回くらい解決してきたんだ？」

「さあ、それは神社にある筆録書を見ないと分からないわ」

「筆録書？」

「ええ、今まで歴代の博麗の巫女が解決してきた異変を記した記録書よ。どんな小さい異変でも、仕来りと言う形で書き留められているわ」

「へえ、少し興味あるな」

今までどんな異変が起きたのか、少し見たくなってきた。

それにもしかしたら、博麗大結界の異変に関する似たような異変が過去にもあったかもしれない。

故に、それを参考に解決への兆しが降り注ぐかもしれないのだ。見る価値はあるだろう。

「まあ見たかったら帰った後、適当に見て良いわよ。見られて困るよ

うな物でもないし」

「ああ、そうさせてもらう」

何て他愛の無い会話を繰り広げる。

「あ、そういうや霊夢って何代目の博麗になるんだ？」

博麗とは、代々幻想郷に起こる異変を解決してきた者を指す。

故に結構続いていてもおかしくはない。

「私で14代目よ。博麗14代目巫女、博麗霊夢。と言っても、正式には7代目なんだけどね」

「は、それってどういうことだよ？」

「そもそも博麗ってのは、幻想郷の法のようなものなの」

「法……それってつまり」

「簡単に言うと——」

霊夢が端的に博麗のことについて言おうとした瞬間、二人の目の前に一人の少女が現れた。

金髪のショートボブに深紅の瞳。その左側頭部には赤いリボンが結ばれており、身長は低めで、白黒の洋服を身につけ、スカートはロングの、一般的服装。

その少女が両手を広げて現れたのである。

おかげで少し驚いた上、大切な部分を聞き損ねた。

「……誰だ、テメエ？」

一護は少し睨みつけて言う。

この少女からは人間とは違う、何かを感じる。それが故、警戒しなければならぬ。

「宵闇の妖怪 ルーミア。あなたは食べてもいい人間なのか？」

何やら、自己紹介をした後にとんでもない事を言い出した少女。この時点で、もう人間では無いだろう。

人間はこんな冗句を言わない。

言うとしたら狂人くらいだ。

「ダメなんじゃねえのか……」

一護はとりあえず冷静に言い返す。

「えーダメなのー」

ルーミアはあからさまに残念な顔をする。

食べても良い人間と聞かれて、ああ良いですよと答える人間なんて、死にたがりだけだ。

「ああ、すまねーな」

一護はそういうと足早にその場から立ち去る。目の前の少女とはあまり深く関わらないほうがいと踏んだ。

霊夢は一護に追い越されると「ちよつと一護、まちなさい」と言い、一護の後を追う。

残されたルーミアは霊夢の言葉を聞き、

「イチゴ……」

脳内に赤い果実の苺がホワンホワンと浮かび上がる。

一体、何の誤算をしたのか、

「やっぱり食べてもいい人間なんじゃない！」

そんな結果が導き出された。

ルーミアは一護と食べ物の苺を何故か勘違いして、大声と共に追ってきた。

一護はそれに気付くと逃げるように走る。霊夢も霊夢で、面倒そうに一護と同じ速度で走る。

「何で追ってくるんだよあいつ!？」

後ろから追ってくるルーミアを見て叫んだ。

それを霊夢が簡潔に答える。

「多分、一護と苺を間違えたんじゃない？」

「嫌な間違いだなオイッ！」

瞬間、後ろから弾幕が飛んできた。

苺と霊夢は弾幕に気づくと、軽く躲す。あの弾幕は、明らか殺しにいつているとしか思えなかった。

「食べさせろー！」

ルーミアが大口を開けて一護に襲い掛かってきた。随分とお下品だ。

「マジかよ。クソツ、こうなりや弾幕勝負で決着つけてやる！」

一護は逃げるのを諦め、一気に振り返る。

「それじゃ、こいつは一護に任せるわよ」

霊夢は二人から離れる。

ちようどここで一護の本番、命懸けの弾幕勝負を見ることができ
る。

今までは謂わば遊び。

異変の解決には命を落とすかもしれない仕事。ここで一護の本当
の、正真正銘の力を拝見できるってものだ。

故に負けたら……

「その程度だったってことかしらね」

一護は弾幕を放ち、一旦ルーミアとの距離をとる。

ルーミアは弾幕を出してくるとは思わず、紙一重で空中に飛び避け
る。

「わくびつくりしたあ。まさか弾幕を出してくるなんてね」

驚きの表情になりながら、空中から一護を見下して言う。

人間が弾幕を出してくるのは珍しかったのだろう。物珍しいもの
を見る目になっていた。

「悪いな。弾幕を出せるのはテメエだけじゃねえぜ」

一護は手のひらに握り拳サイズの弾幕を見せて言った。真っ黒な
野球ボールを連想させる。

「俺を食べたけりゃ、俺を倒してからにしろ」

「分かった。お望み通りあなたを斃してから、ごはんにするわ」

こうして、一護の初の本格的な弾幕勝負が始まる。

まず動いたのはルーミア。

スペルカードを取り出し唱える。

「月符『ムーンライトレイ』」

ルーミアを中心に輪っか状に広がる弾幕と二本のレーザーによる
追い打ち攻撃が放たれた。

一護はそれを——全て苦もなく避ける。軌道を読み、直線上のレー
ザーは地面や木を抉るも一護にはかすりもしない。

ルーミアはそれを見て目を丸くする。

「どうした？ この程度じゃ俺には勝てねえぜ」

一護は余裕な笑みを浮かべながら言った。霊夢や魔理沙と比べたら、どうって事無い。

ルーミアは少し狼狽え、再びスペルを唱える。

「夜符『ナイトバード』！」

ルーミアを中心に左右交互に翼状のような感じで弾を撒き散らした。

だが一護にすれば、速さも間隙にも充分躲せるほどの弾幕だ。

「だから、この程度じゃ俺には勝てねえって言ってるんだろ！」

お返しだと言わんばかりに、一護はカードを取り出しスペルを唱える。

「黒符『月霊幻幕』！」

一護の周りに黒い三日月状の弾幕が展開された。一護はそれを飛んでくる弾幕に向かって、意図的に放った。

それにより、ルーミアが放った弾幕は全て相殺される。

「嘘……でしょ……」

信じられない光景に目を疑うルーミア。自分が放った弾幕が、難無く相殺されてしまったのだ。もはや悔しさを通り越して、絶望に値するかもしれない。

「次で決めるぜ、ルーミア」

一護は最後の弾幕を展開した。

これで終わらす……そんなつもりで展開したのだったが、

「ルーミアが、食べ物を目の前にして、負けるもんかあー！」

ルーミアが激昂した。

その瞬間、ルーミアを中心に黒い霧のようなものが現れた。

黒い霧は紅い霧までも飲み込み、徐々に広がっていく。

「!？」

さすがの一護もそれには驚いた。

そして、逃げ切ることでできなくなった一護は黒い霧に包まれ見えなくなった。

「……何も見えねえ」

一護の視界は闇に奪われてしまった。真つ暗な部屋の中にいるよ

うな感じだが、それとは違う。暗い部屋なら眼がそれに慣れてくるが、この空間はそう言った事が出来ない真の闇だ。

五感の中、視覚を奪われると人間は基本冷静ではいられない。見えない恐怖というものは、人に圧倒的な恐怖心を植え付けてくる。どこか東仙要の正解である清虫終式・闇魔蟋蟀を彷彿とさせる。

「何も見えねえ。けど、他は大丈夫だな」

しかしこんな状況でも数々の修羅場をくぐってきた一護にとって、その程度のことでは恐怖に値しない。

冷静にその場を分析するのに他の五感を働かせる。

その中でルーミアの声が、一護の耳に入った。

「ルーミアにはね、闇を操る程度の能力があるの。この能力を使うと、ルーミアの周りに闇を発生させることができるのよ」

随分とアバウトな言い方で、自分の能力をわざわざ語ってくれる。

「成程な。それがお前の能力って訳か」

「どう？ 形勢逆転でしょ。これであなたはルーミアに弾幕を当てる事はできないわよ！ 大人しく食べさせろー！」

傲慢に、威張った声調で言う。

目は見えないが、尊大に笑っているルーミアの顔が余裕で想像できる。

「ああ。たしかに視覚は見えねえが、お前の居場所くらい分かる……ぜッ！」

一護は弾幕を展開し、一点の場所に向かって放った。

その瞬間「キヤアアアアアア!!」という、ルーミアの叫び声がし、闇が消えていった。

消えた闇から、一護と倒れ伏しているルーミアが現れる。

「終わったな」

一護は倒れているルーミアを見て言った。

ルーミアは残る力で顔を上げ、一護を見て小さく口を開いた。

「どうして、ルーミアの居場所が分かったの……？」

「そんなの簡単だ。視覚は封じられても聴覚までは封じる事はできねえだろ。だからお前がぺちやくちや喋ってる間に、声のする方を探って

たんだよ。そしてそこに向かって弾幕を放った。助かったぜ、あんたが喋ってなかったら、少しは苦戦したかもな」

一護は簡単に説明する。

ルーミアは理解したように微笑み気絶した。

こうして、初の一護の弾幕勝負は幕を閉じた。

霊夢は戦い終えた一護のどこに行く。

「随分と早く終わったわね。まああの程度の妖怪なら当然かな。それじゃあ先に進みましょうか」

労い一つもなしに言う。

まるで勝って当然だったかのような感じだ。

「ああ。悪い霊夢、ちょっと待ってくれ」

一護は倒れているルーミアに歩み寄る。

そして、霊夢は一護がした事に少し疑問を持った。

「何してるの一護？」

そう、一護は気絶しているルーミアを背負っていたのだ。

さつきまで自分を喰おうとしていた妖怪を、一護が背負っている。何とも注意力の無いことだ。

「このまま放っておけねえだろ。一応、目を覚ますまで面倒みんだよ。妖怪でも見た目は少女だからな。こんなところに横になりっぱなしは危ないだろ」

まるで当然のように、当たり前のように言った。

「どういう神経してるのかしら、あんたは。起きた時、後ろから噛みつかれても知らないわよ」

霊夢は頭を掻きながら、溜め息混じりに言った。

だが同時に、一護の事が少し解った。

一護は優しい。

敵にも味方にも優しいのだ。

多分、霊夢が見た人間の中で、これほど優しい人間は居なかっただろう。もしくは単に馬鹿なんだろうとも思った。

「ほら、とつとつと行こうぜ霊夢」

ルーミアを背負った一護が霊夢を追い越す。

「あ、ちよつと待ってよー!」

霊夢は我に帰り一護の横に並んで歩いた。

《2》

一護と霊夢が異変解決へと飛び出す時刻。

魔法の森という常に禍々しい妖気で溢れており、人間はおろか妖怪ですら近づかない危険な森がある。日光すら通さない原生林で覆われており、環境が環境だけに未知のキノコやそれに伴う胞子が宙を舞っている。人や妖怪ですら足を踏み入れない危険域なのだ。

そんな危険な魔法の森に、一軒の家がある。

レンガ作りの家で、煙突まである。どこか西洋の家を連想させ、幻想郷にはあまり似つかわしくない家だ。

そこに幻想郷の魔女——霧雨魔理沙が住んでいるのだ。

「何だ、この紅い霧は?」

魔理沙は家の窓から顔を出し、幻想郷に充満している紅い霧に目を丸くする。

そして直感的に、

「これは、異変か。だったら霊夢も動き出しているな。私もこうしちゃいられないぜ!」

異変と気づき、部屋にある箒を手に持ち、

「……うーん、せっかくだし新作の回復丸も持っていくか!」

ついでとばかりに、この前作った丸薬も紙に包みポケットに突っ込む。

こうして、魔理沙も異変解決に参戦する。

*

現時刻……目の前に立ちふさがったルーミアを倒し、背負ったあとの時刻。

黒崎一護と博麗霊夢は湖のある先へと歩んでいた。

「……月が出始めたわね!」

空を仰ぎ見上げながら、木々を縫うように大きい月が顔を出していた。

しかし紅い霧のせいか、月がとても赤く不気味な色をしている。

「ああ、そうだな」

一護も空を見上げて、赤く血のように輝く月を見る。

まるで自分が異世界へ急に移転したような錯覚に襲われる。

「急ごうぜ、霊夢。何か嫌な“感じ”がする」

そういうと一護はそそくさとルーミアを背負いながら歩いていく。

「ちよっ、どうしたのよ一護!」

霊夢は訳も分からず足早に歩く一護についていく。

一護は紅い月を見て嫌な感じがしたのだろうか。

それとも――

「私の気配を察したか」

木の陰から、一人の男が現れる。

紅い霧で尚且つ木の暗い影から現れたせいで、姿が全く見えない。

その影は、一護と霊夢が向かった先を見つめる。だが勿論二人は既に居なく、紅い霧と森林しか目に映らない。

「成程……面白い。黒崎一護、やはり君を“幻想郷に導いて正解だったよ”」

そして影が紅い霧に溶け込むように姿を消した。

*

「湖か……」

一護と霊夢はようやく湖に着いた。

広大な湖らしく向こう岸が紅い霧のせいで全く見えない。

「ここからは飛んで行くわよ」

霊夢が身体をフワリと浮かせて言う。

「ああ」

一護も空気中の魂を使い空中に立つ。

ここより先に、この紅い霧を引き起こした犯人がいるかもしれない。
い。

故、解決へのカウントダウンが始まると思っていた矢先――

一護目掛けて、氷の塊が飛来してきた。

それを凄まじい反射力で躲しきる。

もし被弾していたら痛かったろう。

「誰だ!？」

一護は飛んできた方向に向かって叫ぶ。

瞬間、濃厚な霧の奥から少女のような甲高い声が帰ってきた。

「あたいの縄張り入ろうなんて100億光年早いわよ!」

「光年は距離の単位だバカ!」

思わず突っ込む一護。

これは平子に鍛えられた証拠だろう。

「バ、バ、バカですつてえええ! この最強のあたいに向かってよくもほざいたな!」

最強? なにやら意味の分からない怒声だ。

そして紅い霧から一人の少女が二人の前に現れた。

髪は水色で、ふわふわのウェーヴがかかったセミショートヘアに青い瞳。背中には氷の結晶に似た大きな羽を六枚持ち、頭の後ろに青い大きなリボンをつけている。服装は白のシャツの上から青いワンピースを着用し、首元には赤いリボンが巻かれている。

その少女が一護に人差し指を向け口を開いた。

「よくも、あたいに対してバカって言ったわね! バカって言う方がバカなんだから! このバカ!」

少女は氷の弾幕を展開する。

「バカにバカって言って何が悪いんだよ」

「またバカって言ったわね! もう許さない、後悔しても遅いんだから!」

バカな少女は展開していた氷の弾幕を放ってきた。

一護は透かさずそれを跳躍し避ける。

「テメエ、危ねえじやねえか!」

「あたいにバカって言うからよ。今すぐあんたを冷凍保存してやるわ!」

どうやらバカと言われる事が相当嫌いのようだ。

そんな少女を見かねて、急に一人の少女が割って入った。

「チルノちゃん、落ち着いて。今はそんなことをしている場合じゃな

いよ」

バカな少女が弾幕を放とうとした途端、1人の少女が仲裁に入
た。

少女は髪色は緑、左側頭部をサイドテールにまとめ、黄色いリボン
をつけている。服は白のシャツに青いワンピースを着用し、首からは
黄色いネクタイを付け、背中には虫とも鳥ともつかない縁のついた一
対の羽が生えている。

チルノは咄嗟に弾幕を放つのをやめ、

「このツンツン頭が悪いのよ！ あたいのことを何回もバカバカつて
言うから！」

一護を指差して言う。

「え……？」

緑の髪の少女がこちらを向いてきた。

「あ、えっと、チルノちゃんが大変ご迷惑をおかけしました！」

そう言っつて、バカ少女が頭を下げるはずなのに、この少女が頭を下
げて謝罪を入れた。

もはや一見して分かる。

これは完全に親と子だと。

「ちよつと大ちゃん、何勝手に謝ってんのよ！ あいつは私をバカに
した悪者よ」

どうやらバカ少女の頭の中は、バカにする人物＝悪者らしい。

「そうやってチルノちゃんは直ぐに暴力で訴えかけようとするから駄
目なんだよ」

「うるさいうるさいうるさいー！」

バカ少女は言うことを聞かない。

溜息をつきながら、緑髪の少女は一護の方を向き、

「えっと、私は大妖精と言います」

名乗る。

その慇懃な態度に一護も半反射的に、

「俺は黒崎一護。よろしく」

自分も名乗る。

どうやらバカな少女と違って、礼儀正しさが次元違いのようだ。

「ほら、チルノちゃんも自己紹介して」

「嫌よ。こんな奴に自己紹介なんてしたくない」

「もう、チルノちゃん」

呆れる大妖精。

自己紹介しなくても、もうバカな少女の名前は大妖精のおかげでチルノだと分かった。

「そんなことより、こいつを早く冷凍保存したいのよ！ どいてくれる大ちゃん」

「だからチルノちゃん。もっと人様のことをよく考えて……」

「良いぜ。できるもんならやってみろよ、バカ」

一護が大妖精とバカな少女チルノとの会話に割って入り——大妖精の発言を制止し——チルノを少し挑発する。

チルノは「カッチーン」と言い氷の弾幕を展開する。

「もう完全パーフェクトに怒ったわ。あんたなんか一瞬で海の藻屑にしている！」

「残念だな。此処は海じゃねーぞバカ」

「きーっ！ あたいは難しいことが大ッ嫌いなのよ！」

「それって遠回しに自分はバカですって言っているようなもんだぜ」「くらえー！」

チルノは一護の言葉を無視し、展開していた氷の弾幕を一気に放つ。一発被弾しても痛いので済むだろうが、何十発ときたら痛いでは済まない。

故に一護は氷の弾幕を全て紙一重で回避していく。

同時にいちごは針の穴をくぐり抜けるように、霊夢のどこまでいく。

「悪い霊夢。ルーミアを預かってくれ」

そう言い、背負っているルーミアを霊夢に任せる。

「早くしてね。こんな茶番」

ルーミアを預かると、霊夢は呆れながら陸地に戻る。

一護は高速移動でチルノの前行く。大妖精は二人を止めるのは

無理と判断したのかチルノから離れていた。

「んじや、始めようぜ」

手のひらに小さい弾幕を出し、戦いの宣告をする。

「そんな弾であたいを倒そうなんて100億万年早いわよ！」

バカなことをいうチルノがカードを取り出す。

「氷符『アイシクルフォール』！」

チルノがスペルを唱えた瞬間、氷柱型の弾幕が横に広がり一護の方に飛んでいった。

だがその程度の弾幕など、一護にとっては目を閉じていても避けられる。一瞬でそのスペルを分析し、法則を見つけ、効率良く動いた。

「正面ががら空きだぜ」

一護は手のひらに出しておいた小さい弾幕をチルノにぶつける。

チルノは「くっ！」と、少し苦悶の声を上げ後退った。小さく霊力すらほとんど箆っていない弾にはダメージは無に等しい。

しかしチルノの場合は油断していたのもあり、驚きがかなり大きい。

「どうした？ 威張ってたわりに全然弱いじゃねえか」

「何だとお！ 今のはほんの腕試しよ！ これからが本番なんだから！」

チルノは再びカードを取り出しスペルを唱える。

「凍符『パーフェクトフリーズ』！」

チルノを中心に無造作に弾幕がばら撒かれる。

確かに先のスペルに比べると弾の量や速さは別格なくらいレベルが違う。

だが、

「がむしゃらに弾幕を放つても当たんねえぞ」

一護は無造作に放たれた弾幕を避ける。

無造作に放たれる弾幕は法則性がないだけに避けづらいし、分析の余地すらできない。しかしそんなものが通用するのは三流までだ。

戦闘に関して一護はエキスパート。故に並外れた動体視力によって軽く躲される。

「この最強のあたいがそんなことだけをやる訳ないでしょ。さあ凍りなさい！」

瞬間、チルノの放った弾幕が全て凍て付いて固まった。

「何!？」

急に弾幕が全て固まったせいで、一護は驚きのあまり一瞬の隙が生じる。

そこを目掛けてチルノが大量の弾幕を放出した。

「チツ」

一護も黒い弾幕を展開し、先に周りで固まっている弾幕を次々に相殺し逃げ道を作り、放出された弾幕から何とか逃れる。この間、わずか一秒。

だが予想外だったのは、チルノが再び無造作に弾幕をバラ撒き、固まらせたことだ。

これにより再び一護は逃げ道がなくなった。

「最強のあたいは抜かり無しよー」

再び、次は時間を全く与えず無数の弾幕を一護に殺到させる。

一護は微動だにせずチルノの放ってきた弾幕に飲まれ爆散した。

耳を穿つ被弾音に爆風が起こり一護の姿が確認できない。

「やっぱり、あたいつたら最強ねー」

チルノは一護に勝って嬉しいのか、かなりの笑顔だ。

しかしこの笑顔は一瞬でかき消された。

何故なら——その瞬間、爆発で起きた煙がまるで扇風機に掻き消されるかのように消えていったからだ。

「え、何!？」

チルノから笑顔が消え、驚愕したように口と目を大きく開いた。

「何勝った気でいんだ。俺は負けちゃいねえぜ」

そこから無傷の一護が現れた。

しかも片手に代行証が握られており、そこから黒い霊圧が卍型のようになり放出している。

「何よ……それ?」

チルノは少し後退りながら、目の前に今まで見たことのない妙な力

を見る。

それに対し、一護はスペルカードを出し唱えた。

「こいつは、俺の最強のスペルだ。黒斬『月牙天衝』！」

カードが光の粒になり代行証に吸収された。

そして一護がチルノに向かって代行証を振った瞬間、卍型の霊圧が歯車のように回転しチルノ目掛けて飛んでいった。

「そんな……。くっ、最強のあたいが負ける訳がないのよ！」

負けじと、チルノもスペルカードを取り出し唱える。

「雪符『ダイヤモンドブリザード』！」

瞬間、前方に無数の弾幕が放出された。

数や威力は恐らくチルノのスペルの中でも最上級。

しかし一護の月牙天衝の前では無に等しい。

チルノが精一杯に放った弾幕は無残にもかき消されていき、チルノの方に飛ぶ。

「そんな……。あたいが……！」

チルノが諦め、怖いと言う感情が働き両腕で顔を覆い目を瞑る。

……が、何も起こらない。

痛みを感じないどころか、当たっていない……どうして？

そんな疑問と同時に目を開けると、おでこにパチンと言う音と共に、ちよつとした痛みが与えられた。

「いたっ」

チルノは額を摩り前を見る。

そこには一護が立っていた。

「これで、俺の勝ちだぜ」

「……何を、したの？」

チルノは勝ち誇った表情をしている一護に、自分の額に何をしたのかを聞く。

「でっピン」

一護は答える。

「どうやら額にでっピンをされたらしい。」

「え……どうして当てなかったの？」

なぜ月牙を当てなかったのか、それが不可解で仕方ない。

「月牙を当てなくても、今のでこピンで勝負はついたからだ。そっちの方が痛くなくて良いだろ」

「そんな理由で。あたいはあんたを……」

今まで喧嘩腰で罵倒しか浴びせなかった自分を、そんな形で勝利を収めた一護。

普通の相手なら怒りで、そのままチルノを倒してもおかしくはない。

「あんたじゃねえ、黒崎一護だ」

しかしそんな疑問を云々より、一護はもう一度、チルノの台詞を無視し名乗った。

「黒崎一護……」

「そうだ。忘れんなよバカ」

チルノはバカというセリフにイラツとするが抑える。

「バカじゃなくてチルノよ！」

「そうか……分かった、チルノ」

一護はようやくチルノとちゃんと言った。

チルノは自分の名前を言ってくれて少し嬉しそうな顔をする。

故、喧々とした雰囲気もなくなり自然と仲直り（主にチルノの一方的な怒り）を果たした。

「勝負はこれで終わりで良いな」

「え、う、うん」

これにてチルノとの弾幕勝負は終わった。

*

一護は霊夢の方に行く。

そこにはルーミアも目を覚ましていたらしく、一護の姿を見ていた。

「遅かったわね一護」

下りてくる一護を見て言う霊夢。

「ああ。ちよつとな」

一護は霊夢とルーミアの前に着地し答える。

そして、霊夢の横に立つルーミアを見た。

「やつと目え覚ましたのか……えくと」

一護はどうやらルーミアの名前を忘れてしまったらしい。

「ルーミアなのだ。忘れないでほしいのよ」

ルーミアは頬を膨らまし答える。

「悪いルーミア。えっと、此处にどうして居るかは霊夢から聞いてるか?」

「うん。一護が気絶したルーミアのことを介抱してくれたって」

霊夢はちゃんと事情を説明してくれたらしい。……まあ当然だろう。

「ありがとう!」

ルーミアは一護に礼を言った。

まるで一護とさつきまで戦っていたことすら忘れていたかのよう

に。

「ああ。どういたしまして」

一護はルーミアの礼に応えた。

その時、二人の少女、チルノと大妖精が三人のもとにやって来た。

「どうしたんだ二人とも?」

一護は二人に向かって聞く。

「〃一護も〃あの館を調べに来たの?」

チルノは何やらよく分からない事を聞いてくる。

「館ってなんだよ?」

「この湖の向こうに島が有って、そこに一つの紅い館があるんです」

大妖精が一護の質問に答えた。

「紅い館……ね」

霊夢が呟く。

「かなり怪しいわね」

「ああ」

怪しいどころか、もはやそこに主犯はいるだろう。

一護と霊夢が湖の方を見る。

だが勿論、紅い霧で見えない。

「凄い強い妖力を感じて、私もチルノちゃんも近づけないの」

大妖精が少し怯えた表情で言う。

チルノは黙っている。どうやらチルノ自身もそのようだが、しかし最強という矜持が、それに反するため口は開かない。

「そうか、ありがとな。教えてくれて」

一護もそれには突っ込まず、お礼を言う。

と、チルノが一護の前に立ち口を開いた。

「行くの？」

チルノが心配そうに聞いてくる。

一護は微笑み、手をチルノの頭に乗せる。まるで不安を抱かせないために。

「心配すんな。ちよつと調べに行くだけだ」

チルノの顔が少し赤くなる。

こうやって優しくされるのに慣れていないのだろう。

「もたもたしてないで行くわよ一護」

霊夢は既に空中に浮いている。

「ああ。ルーミア、お前とは此処でお別れだ」

一護はルーミアの方を見て言う。

ルーミアは少し寂しそうな表情になり、それに気付いた一護は、「別にずっと会えねえ訳じゃねえんだ。この異変が解決したら、いつでも会えるからな」

「ほ、本当！ 絶対だよ！」

「ああ、約束する」

一護は素晴らしい三人に背を向け飛んだ。

「じゃあなチルノ、ルーミア、大妖精」

三人に別れを言い、霊夢と共に紅い館に向かって飛んで行った。

この後——この三人のうちに、とんでもない未来が待っているのを知らずに。

第8斬【城の門番】

黒崎一護と博麗霊夢はチルノの情報を元に、湖の先にある紅い館へと向かっている。

そこでは恐らくこれから凄まじい激戦が待ち受けているのだろうが、そんなものは覚悟の上だ。

相手はこの幻想郷に紅い霧を隙間なく侵食し尽くしている。幻想郷が一つの世界なら世界規模の異変と言っても過言ではない。

故に相手もそれに連なる猛者に違いない。

半端な覚悟で挑んではいけない、死を覚悟しなければいけない大異変。

恐らく常人の精神の持ち主なら足が竦んで挑むことすらままならないだろう。幻想入りした人間は時々稀有な力を持つことがあると、霊夢は語っていた。

しかし例えどれほどの異能を携えていても、使う者の精神と肉体力が無ければ、それは宝の持ち腐れであり、ただの無意味な能力と化してしまう。

例えば相手が音速以上の相手で、自分は発動系の反則クラス的能力を持つていたとする。しかし自分は能力に頼りっぱなしで一切身体力には自信がない。

それ故、発動する前に音速以上に動く相手に八つ裂きにされる。

例えば相手の殺気は比喻表現ではなく本当に相手を殺せるほどであると仮定する。これも同じように、例え自分に反則級のチート能力があっても、能力に頼りっぱなしだとそれだけで殺されるか戦意喪失だろう。

戦いは甘くない。

下手に打てば次の刹那には死ぬ。

それを覚悟した上で、黒崎一護は向かっている。

上述通り、下手な人間ならこんな異変はまず恐怖などの負の概念が働き挑むことすらしないだろう。

だが一護は死神時代に培ってきた身体力と精神力がある。

故に成せる所業。

敵がどれだけ強力だろうとも、過去に戦闘で踏んできた場数なら、
霊夢にも負けない……そんな思いが円環していた。

「すごいや霊夢。一つ聞きたいんだけどよ」

そんな覚悟を内に内包した一護が、飛行中に霊夢に声をかける。

「チルノが一護もって言ってたろ。それって俺たち以外にも紅い館に
向かったってことだよな」

「ええ、そうね。私たちに以外にもこの異変に動き出している奴が居
ても、何らおかしくはないわ」

そう霊夢は答えた。

つまり一護たち以外にも誰かがこの異変の解決に向かっていると
いうことだ。

瞬間、そいつらの安否を心配したが、こんな大異変に挑む奴だ。
故に実力者と測るのが適切だろう。

「さあて、見えてきたわよ」

一護が向かった者のことを考えている間に、次なるステージ——恐
らくラストダンジョンが目前へと迫っていた。

此処からではよくわからないが、確かに紅い尖んがりが見える。
恐らくあれが館。

幻想郷には不釣りあいな西洋の大きな館だ。

*

「……で、何で俺達は隠れてんだ霊夢？」

とりあえず紅い館の門前まで来たは良いが、どう侵入するか迷っ
ていた。

とりあえず門近くの木々に覆われている森林の中に身を潜めてい
る。

「まあ、ちよつとやややしそうな相手が門前にいるからね」

声を潜まししながら、門前に立つ女性を見る。

門番なのだろうか、常に門の前に一つの壁となり君臨している。

華人服とチャイナドレスを足して2で割ったような淡い緑色を主
体とした衣装。髪は赤く腰まで伸ばしたストレートヘア。側頭部

を編み上げてリボンを付けて垂らしている。目の色は青がかった灰色。

そんな女性からは、どこか強烈な何かを感じる。妖気とも、どこか判然としない力。

見ただけで分かる。

あの女は強い。ルーミア、チルノなんかでは足元にも及ばないくらいに。

故に強行突破は得策ではないが故、こうして作戦を建てるために隠れているのだろう。

「さて、仕方ない。こうなれば私が一護があの子を相手するしかないわね」

まあ作戦上、それが一番だろう。

例えあの子の目を盗んで侵入できても、館内で騒ぎを起こせばあの子もやって来る恐れがある。それでは困る。あの子は目視しただけで強さが分かるほどの実力者。そんな奴が加勢に入ってきたら、悪夢も良いとこだ。

「んじや、ここは俺が行くぜ。ああ心配すんな。俺は負けない」

「分かった。じゃああいつはあんたに任せるわね」

と、作戦が決まった瞬間だった。

「その子ネズミども。いい加減出てきたらどうですか?」

門前に立つ女が、門から離れた地に隠れる一護と霊夢の方に向かって口を開いた。

どうやら感づかれていたらしい。

故に、それが始まりの号砲と化した。

「行くぞ霊夢!」

一護が木陰から勢いよく飛び出す。

それに続くように霊夢も飛び出し、二人で弾幕を展開する。

門番の女性は弾幕を見るや否や、臨戦態勢に入った。

だが狙うはその女性ではなく、女性の背後にある門。

「ッ!」

瞬間、一護と霊夢の弾幕が門を破壊した。

門を狙われるのは予想外だったのか、女は不愉快な顔をし霊夢たちの迎撃に入るも……

「させるかよー！」

一護が突入する霊夢を守るように女の半歩先に弾幕を被弾させる。それにより反射的に動きを止めた。故にその隙を狙い、一気に霊夢が紅い館の中へと侵入する。作戦は成功といったところだ。

「あーあ、また咲夜さんに叱られる。もう、どう責任とってくれるんですか？」

女が呆れ半分、自嘲半分で言う和一護と対峙する形で向き合う。

「悪いな、ちよつと俺と付き合ってもらうぜ。強引で笑いが、あんたに拒否権はない」

「これはもう追いかけたところで、私が罰を受けるは十中八九ですね。だから、ああもう……あなた、無事では済まないと思ってくださいね」
むしゃくしゃしているのか、面倒事を片付けるのが嫌なのか判然としない気持ちを漏洩させている。

確かにいきなり現れた二人組に、自分の主の城である門を破壊され侵入されたとあつちや、そんな気分となっても仕方ない。

「そっちの方が話が早くて良いな。……つと、まるで霊夢みてえな台詞を言っちゃったか。随分と気が伝染っちゃまってるらしい」

一護は既に臨戦態勢。

故に、既にこの時点で戦いがいつ始まってもおかしくない状況となっている。

「では、主の任として、今からあなたを排除します。悪く思わないでくださいね、狼藉者！」

刹那だった。

女は一気に一護へと跳ぶ。一回の踏み込みで、数メートル離れている一護まで軽く跳んでくるほどの脚力だ。

それに向けて黒い弾幕を一気に女目掛けて、一護は放った。

真正面から突っ込んでくるのは、謂わば弾幕を当ててくださいと言っているのと同義だ。そう思った一護だったが、

「私を甘く見ないことをお勧めしますー！」

目を疑った。

拳二つで、一護の弾幕を全て掻き消していったのだ。

弾幕やレーザーで相殺したりするのは幾度となく見てきたが、拳という身体の部分で弾幕を防がれたのは初めてだった。

「ッ！」

一護は後方に跳び、距離を稼ぐ。

同時にスペルも唱えた。

「黒符『月霊幻幕』！」

放たれるは三日月形の黒い弾幕。それはまるで極小の月牙天衝であり、一気に女に吸い込まれるようにして発射される。

しかし、それすらも女にとっては、

「効きませんよ。この程度で舐めているのですか!?!」

碎き、破壊し、覆滅する。

女にとって弾幕など意に介す必要なし。

「マジかよ。くそッ！」

再び弾幕を張り、移動しようとするも、

「逃がしませんよ！ 華符『セラギネラ9』」

拡散するは無数の弾幕。

それは一護の放った弾幕を全て相殺していくほどの数だった。

その一瞬の間隙を狙い、美鈴は一護との間合いを詰める。

「しま——ッ！」

避けるか防御かを決める間に、女の拳が一護の腹部を抉り飛ばした。

「ガアッ！」

痛みのあまり苦痛の声を上げ、そのまま血反吐を飛ばしながら勢よく吹っ飛ばされた。

今の一撃は、内蔵をいくつか潰されていても全くおかしくはない。いや、血反吐を吐いた時点でいくつか傷はあっただろう。

(こいつ……一体、何者だよ……ッ!?)

一護は口から垂れる血を拭いながら、立ち上がる。

一発の威力が満身創痍になりかねない程の威力に等しい。

それよりも頭を抱えなければいけないのは、この女が自分の弾幕を拳で潰した事だ。正直、ただの力だけでそんなことを成せるとは思えない。何か特別な力があると考えていいだろう。

「そういえば、まだ名乗っていませんでしたね」

女が立ち上がる一護を見据えながら言った。

「華人小娘 紅美鈴。さあ、あなたも名乗りなさい侵入者。ここを攻め入る勇氣に免じて名前だけは聞いてあげましょう」

「黒崎一護だ」

名乗ると同時に、一護は観察する。

美鈴と名乗った女の能力について。

多分だが、弾幕を素手で破壊するのには能力が関わっていると推測する。

故に——何かがある。ここからが本格的な戦いだ。

「じゃあ、続き行きますよ」

そのまま瞬時に間合いを詰めてきた。

「速エツ！」

「さつきは手加減したんですよ」

地面を滑るように低空から、滝すら両断しかねない蹴りが鳩尾に——しかし一護はそれを両腕でガードしたが、勢いに負け一護の身体が宙に浮く。

そこへ更なる追い打ちをかけるように、弾丸のような右拳が一護の身体を吹っ飛ばした。

「ガアッ」

女に殴り蹴飛ばされるなんて初めての経験だ。場合によつたら喜ぶ人間も居るかもだが、一護にそんな趣味などない。

(クソッ、女の打撃じゃねえな)

死神でいうなら碎蜂か。

いや、単純な攻撃力と言う点なら碎蜂以上だ。まともに受けたら終わりだろう。

(つか、もう弾幕ごっこにすらなつてねえ。いや、こいつは遊びじゃねえから、弾幕以外でも有りか)

元来弾幕ごっこは白黒つけたい時にする遊びや戦い。

しかし生憎とこれは死合だ。弾幕のみならず、格闘戦術で戦っても何の否にもならない。戦場に立ちながら油断だ卑怯だ笑止千万。戦いとはつまり、そういうことだ。

「ほら、まだまだ行きませよ」

ドンツ！——爆発にも似た轟音と共に、大地を揺るがしたのは踏み込みにより発生した衝撃だった。比喻では一切ない。本当に地震が起きたかと思わせるほどの体術が繰り出されたのだ。

同時に風を巻くほどの拳を一護の腹を貫かんと放たれる。

「黒符『月霊幻幕』！」

美鈴が拳を放った刹那に、一護はスペルを唱えた。

無数の黒い三日月状の弾幕が展開され、それが一気に美鈴に放たれる。

「だから——」

拳を一段と固めて、

「そんな攻撃は効かないと言ったでしょ！」

大地すら割りかねない程の一撃が、殺到する弾幕を全て吹っ飛ばした。

だが、

「成程な」

術中にはまったのは美鈴の方だった。

今の弾幕は美鈴の力の真髄を知るために過ぎない。だからよく観察できたし、直ぐに正体が分かった。

「お前の能力、それは気やそういった概念のものを操る力だろ？」

その発言により美鈴が動きを止めた。

それがなによりの証左。

「……鋭い観察眼ですね。いや、本当に賞賛に値しますよ」

たった三発目程度で見破られるとは思っていなかった。

こう見えて美鈴の能力は案外シンプルで、しかしそれながら見破りにくい能力であるはずだったのだ。

「そうです。私は“気を使う程度の能力”を持っている者です。能力

の説明は、まあそのままですし教える気もありませんがね！」
隠す必要はもはや皆無。

美鈴は自分の気を全身に纏い質量を増す。

それ故に今の美鈴にまともな攻撃は通じないだろう。恐らく今までの弾幕では倒せないのは瞭然であり愚問。同時に拳一発ですら、岩をも軽く粉碎する力を宿したのも間違いない。

「はああああアアツ」

怪力乱神の如く遍く総てを悉く粉碎せんと動き出す。

「ツ、まずはあの気ってやつをどうにかしねえとな！」

気を纏った美鈴の攻撃は、物体なら完全なる破壊を顕現させる力を持つ。一発でも喰らえば、戦闘不能は免れないのは必然だ。

「黒符『月霊幻幕』！」

再三放たれる漆黒の弾幕。

放つも美鈴に当たると同時に弾幕そのものがその質量に耐え切れず破壊されていく。

「効きませんよ、今の私には！」

もはや美鈴は一護の弾幕など警戒に値すべきものではない。

それを知っていながらも一護は、

「あんま舐めてっと、後で痛い目みるぜ！」

弾幕を瀑布の勢いで放つ。それを無駄だと知っていながらも、向かって来る美鈴に時間的間隙を一切与えずに、美鈴全体を——まるで気を狙っているかのように被弾させ続ける。

「? ……ツッ! まさか!?!」

最初は一体何を無駄なことと思っただが、刹那にそれが美鈴を襲い悟った。

そう、一護は美鈴の纏っている気を少しずつだが削いでいつているのだ。

いくら相手の質量が凄まじいものでも——自分が放つ弾幕の質量もそれには届かないが——少しでも強力な弾幕を集中砲火すれば、美鈴の纏っている気も衰えていくだろう。

「クッ！」

美鈴は一旦動きを止め、瞬間的速度で気を再び纏おうとしたが、
「させねえ！」

狙い通りだった一護は、何の逡巡もせず SPELL を唱える。
そもそも気を全身に纏うのには集中力がある。だからこそ美鈴は
動きを止めなければいけなかった。

なぜ一護がそれを知っていたかは、謂わば経験則にも似た直感。
たったそれだけの、何の根拠もないものを狙ったのだ。

「黒符『天幻月牙』！」

唱えるは今まで見せていなかった SPELL。

少し前に発動したのは異変前に霊夢と模擬戦をした時だろう。あの時は霊夢にその SPELL のことを熟知されていたから躲されたが、これを初見で出されれば被弾は免れないだろう。

瞬間——美鈴の周囲の空間から四方八方と弾幕が現れた。

「何ッ！」

声を上げると同時に、囲んでいた弾幕がその中心である美鈴のもとへと殺到する。

一度逃げ遅れれば隙間がなくなるため回避は不可。しかも気を削がれた状態の美鈴は、

「クッ！」

かなりの霊力を内包させた弾幕が、美鈴を貫いた。四方八方から全身に浴びせられた弾幕は容赦なく相手に痛手を与えていく。

しかし、

「私が、この程度で負ける訳が無い！」

そんな弾幕が被弾したにも関わらず、美鈴は再び疾風の如く動く。
「嘘だろッ！」

繰り出される拳を何とか躲したものの、風を裂く蹴りが一護の横腹に決まった。

「ガッ！」

石ころのように吹っ飛ばされる一護。

痛いどころの話では済まない。今の一撃で身体に多大なダメージを請け負ったのだ。

これでは例え美鈴に勝っても、この先の戦いは不可能だろう。
「くそッ！」

苦悶の声を上げた瞬間だった。

『変われ！』

一護の中の深奥から、忌むべき裏の声が響いた。

『俺と変わればそんな奴ブツ斃してやる！』

それはこの世にはもう存在しないはずの声。

死神の力を失うと同時に残滓残らず消え去った者の声だった。

有り得ないと、一護は頭を振り前を見る。

恐らく、もう動き回る力すら残っていないだろう。故に、これが最後だ。

一護は最後の切り札である代行証を取り出す。

これが真正正銘、最後の切り札であり、破られたら一護には完全に勝ち目はなくなる。

「黒斬『月牙天衝』」

瞬間、一護の代行証に卍型の黒い霊圧が現れた。

恐らく放てば避けるなり何なりされる。だから、ここは放たず月牙の力を内包したまま、月牙の力を持つ斬撃とする。いや、斬撃とは少し違うかもしれない。

それを見た美鈴は忌憚にも似た恐怖の色が顔を覆った。

あれを喰らえば負けると、そう思ったのだろう。

「なるほど、最後の切り札というわけですか。面白い、ならこちらも全霊を以て挑むのが礼儀というもの」

だから美鈴は今持てる大質量の気で、全身ではなく一つの拳に凝縮させる。その威力は当たれば必滅の一撃になるであろう。

「笑いが、ここを倒してもらうぜ。霊夢が待ってるからな」

「それはできませんよ。あなたはここで私が倒します。侵入者と侮っていました、なかなか良い力の持ち主です。それに敬意を表し、全力でいかせて頂きます」

「そいつは、どうも！」

そして、両者が最後の激突を下した。

第9斬【最強のメイドと最悪の本探し】

博麗霊夢は館の門番である紅美鈴を黒崎一護に任せて、一足先に侵入していた。

紅い館の中にある家具や調度品の数々はどれもこれも高価な物で、壁や絨毯が全て赤色に統一されている。どうやら館の人は随分と赤を好むと見える。

ここまで赤いと逆に返って不気味さすら感じる。

そんな中で赤い館のメイドなのか、沢山の妖精たちが霊夢の迎撃に入ってきた。

主への忠誠心からなのか恐怖心からなのか、メイドたちは必死に霊夢を取り押さえようと弾幕を放ってきたが軽い軽い。

霊夢の霊力を持ってすれば、妖精たちの弾幕など効かない。故に、ちよつとした弾幕を適当に放っただけで妖精たちを一掃できた。

妖精では霊夢には勝てない。

「……にしても、広いわねこの館」

霊夢は向かってくる妖精メイドを倒しながら呟いた。確かに、この館はかなりの広さだ。博麗神社の敷地の倍はある。

館の主はどうにも位の高い者なのだろうか？

そんなことを思っている時だった――

霊夢の前に、妖精ではないメイド衣装を身に纏った人間が現れた。その人間を見て、動きを止める霊夢。

成程、こいつはただ者ではないだろうと直感で理解したのだろう。

「あなたが報告に入っていた侵入者ね」

メイドは霊夢の目を見据え言った。

その目には、どこか殺意を秘めている。

「あんたは？」

「侵入者に名乗る名などありませんが、そうですね名乗るもまた一つの礼法」

回りくどいことを言い、

「紅魔館のメイド 十六夜咲夜。ここまで働いた狼藉、許すわけには

いきませんよ」

*

その頃、一護は思ったより体力の回復が早く、既に立ち上がっていた。だが、身体は美鈴との戦いでボロボロになっており、ほぼ立っているのがやつとの状態だ。

最後の激突を果たした一護と美鈴は両者共倒れ。しかし一護の方が早く意識を取り戻し、立ち上がったのだ。

「……早く、霊夢に追いつかねえと」

フラフラな足取りで紅魔館の入り口に向かう。

今にも倒れそうだ。

恐らく常人なら一週間は目を覚まさないだろう。

だが培ってきた身体力と精神力、そして霊力などもあり立って動けるギリギリの状態にあるのだ。

「そんな体でどうするつもりだ一護」

不意に自分の後ろから聞き覚えのある声があった。

忘れなかつたら殺すぞと言われても忘れられないような声をした

人物――

「その声は……」

一護は振り向き様に言い、声の主を見る。

もはや確信はしているが。

「よお、一護」

声の主は霧雨魔理沙だった。

魔理沙は片手をブンブン振り上げ笑っている。一護と違って何処にも傷が無い。

「魔理沙、何でお前がここに……?」

「決まってるんだろ。この紅い霧の異変を解決しにきたんだぜ」

至極当たり前のように、当然の様に、魔理沙は即座に答える。

……どうやらチルノが言っていた助っ人と言う人物は霧雨魔理沙で相違ないようだ。しかし、来るのが遅すぎないか? 時系列からするに先に魔理沙が着いていないと不自然すぎる。迷子か。

そんな疑問を心の中で呟きながら、今しなければいけない事を思い

出す。

「そうだ、早く霊夢のそこに行かねえと」

一護は再び満身創痍の身体で紅魔館に向かおうとする。

今、一護の身体を動かしているのは霊夢を一人にしてはいけないという想いだ。

門番でこのレベル、なら奥にはもっと厄介な者が待ち構えているだろう。そんなところに霊夢一人ではいくらなんでも危険だ。

「待てよ一護」

そんな一護は見兼ねた魔理沙は、一護を呼び止めた。

「さつきも言ったけど、そんな体じゃ勝てる戦いも勝てないぜ」

「ああ、分かっている。けど、立ち止まるわけにもいかねえんだよ」

真つ直ぐ魔理沙の眼を見て言う。その目は絶対に自分の言葉を曲げない、強い信念を感じる。

魔理沙は一護の眼を見て溜め息をつき口を開く。

「分かったぜ。一護がその気なら、私から良い物をプレゼントしてやるぜ」

そういうと、魔理沙は一つの何やら怪しい紙包みを取り出す。

紙包み、それは異変解決に向かう前に、ついだとばかりに持ってきた丸薬。

「……何だよ、それ？」

一護はその丸薬っぽい物を怪しい眼で見る。

てか怪しい要素しか生まれない。

「これはこの前、私がキノコを素に作った回復薬だぜ。滋養強壮、霊力回復、何でもこれ一つで治るぜ！」

この丸薬は回復薬らしい。結構ありきたりである。

だが、この状況で回復薬はかなり有り難い。どれほど回復するかは分からないが、今の状態よりマシだろう。

「ありがとな、魔理沙」

一護は丸薬を受け取り、口に入れた。

自分でも何の疑いも無しに飲み込んだことを少し不思議に思った。何せ、本当に回復薬という確証がないからだ。しかし今はそれほど切

羽詰まっているゆえ、普通に何の躊躇いもなく自然的に飲んでしまった。

「効き始めるのに少し時間が掛かるが、効果は抜群だぜ」

「……なあ魔理沙、飲んどいて何だが、本当に大丈夫だよな？」

「当たり前だろ。私を信用しろよ被験者第一号」

「第一号!? え、本当に大丈夫だよな!」

「冗談だぜ。ははは、一護はビビリだな」

「……今は信じるしかないか」

安心材料はないが、時既に遅い。

一護は重い足をあげ、

「とりあえず、行こうぜ魔理沙」

「おう！」

こうして一護と魔理沙は紅魔館の中に入ってしまった。

*

「外も中も代わり映えしねえな。不気味だ」

一護は館の中の赤い空間を見て感想を至極簡単に言った。外も赤く、中も赤い。どれだけ赤が好きなんだって言いたくなる。

「でも広いな。これだけ広ければ、どこかに蔵書ホールがありそうな気がするぜ」

一護とは逆に魔理沙は何やら期待の眼で館の中を見渡している。

「とりあえず進むか。さつきから胸騒ぎがしやがる」

ここに入ってから、何やら判然としない不安が募る。

赤い不気味な色がそうさせるのかは分からないが。

とりあえず二人は適当に、この館の中を歩き出した。

歩いている途中で所々でメイド姿の妖精が気絶している姿を見かける。

どうやら霊夢が倒していったようだ。まあ妖精では、いくら掛かっても霊夢には手も足も出ないだろう。

と、不意に魔理沙が一護の肩を掴んできた。

「どうした? 魔理沙」

一護は後ろを歩く魔理沙の方に振り向く。

「あそこに行ってみないか？」

魔理沙は自分たちからみて横の方を指差す。

そこには地下へと続く階段があった。

「あそこから強い魔力を感じるぜ。もしかしたら、紅い霧の犯人かもしれないぜ？」

「地下か……」

一護の脳裏に何かが蘇る。

そう、夢だ。

あの暗い部屋の、あの少女の夢。地下室のように、まるで牢獄のように何も無い場所に、一人の年端もいかない少女が閉じ込められていた。

もしかしたら、

「分かった」

一護はあの夢と何か関係していると思い、地下に行くことにした。

*

本の世界……と言ったら良いのだろうか？

地下室の扉を開くと、そこにはまるまる大部屋全てに本棚があり、そこにはほとんど隙間なく本が並べられていた。そこらの図書館では函が立たないであろう量、恐らく人生を何十回と繰り返し返さないと読みきれない程の量だった。

「すげえ数の本だな」

一護は感心したように言う。

いやホント、関心というよりは驚愕だ。

こんな比喻表現抜きに山ほどある本を初めて見た。……地震が起きたらどうするのだろうか？ 本の津波がやって来るだろう。

「……す、すげー！ 本が一杯あるぜー！」

瞬間、魔理沙の目が眩しいくらいに輝いた。

そういえば魔理沙は本好きだ。それもオタクと呼べるほどに。だから、こんな数の本を見たら嬉しくて仕方ないのだろう。

「こいつは、後で何冊か借りていかないとな」

何て、敵地でそんな素っ頓狂な発言をした。

お前は何しに来たんだ？ と一護は心の底から思ったり

「私が見ず知らずの人に、大切な本を貸すと思っているの？」

ふと、何処からか知らない声が室内に響いた。

その声の根源を直ぐさま並外れた聴覚で突き止め、その方向を見る。

そこには、一人の少女が浮いていた。

長い紫髪のを先をリボンでまとめ、紫と薄紫の縦じまが入った、ゆったりとした服を着ている。さらにその上 から薄紫の服を着、ナイトキャップをかぶっている。また服の各所に青と赤のリボンがあり、帽子には三日月の飾りが付いている。

その少女が二人を見据えている。

「あなた達が小悪魔が言っていた侵入者ね」

「……あんたがこの館の主か？」

一護は敵の姿を現したのを驚きつつ、警戒する。もし相手が急に襲い掛かってくる敵なら、即効対処する準備は出来ている。

それに回復薬のお陰もあって、身体の痛みが消えていつている。戦うくらいなら出来るだろう。まさか本当に効果があるとは半信半疑だったが、効いていたので喜ばしいことである。

「違う。私はこの館の主ではないわ。館の主なら、自室にいると思うわよ」

「え、あ、そうか」

何やら親切に教えてくれた。

……実際、まだこの紅い霧の主犯がここの主と決まったわけではないが。

「あなた達は、今この幻想郷に起きている異変を解決しに来たの？」

「ああ、まあな」

随分と、気軽に話しかけてくる。

こっちは館の侵入者。相手は館の者。

こんな気兼ねなく会話していて良いのだろうか？

「その主の場所を教えるはくれねーか？」

会話が出来る相手なのだろう。別に敵地の全員が敵という訳では

ないのだから。

そんな勢いで主の場所を聞き出そうとする一護。だが流石にこれは断られると思ったのだが……

「良いわよ」

あつさり了承してくれた。

かなり適当な人と見る。

「俺が言うのも何だけど、自分の館の主人の場所をそう簡単に教えていいのか？」

「別に構わないわ。私はのんびり、ここで本に囲まれて生活できれば文句ないもの。それにあなたはそう悪い人に見えないしね」

「はあ、そうですか。じゃあ早速教えてくれねえか？」

「ただし、条件があるわ」

と、まあこうなるだろうとは思っていた。

ただで、何の理由もなく自分の主であろう人物の場所を教えてください訳が無い。いや教えるのもどうかと思うが。

「この大図書館の中から、ある一冊の本を探し出して欲しいの」「本？」

「ええ、こんなこと他人に、いえ侵入者に頼むようなことじゃないんだけどね。こつちも、ちよつと困っているのよ」

「分かった。探してやるよ。で、その本の名前は？」

「〃初代魔術師ダルク・マグス〃の綴った本よ」

「何iiiiiiiiiiiiiiii!!」

魔理沙が本の著者を聞いて凄く驚いた。

「あの、ダルク・マグスの書いた本が有るのか!？」

魔理沙の目が輝くどころか星が飛び出している。

古い漫画のようだ。

「ええ。今それを小悪魔にも探してもらってるから、あなた達も一緒に探してちょうだい。探し出せたら主の場所を教えてあげるわ」

「ああ。その人の本を見つけたら良いんだな」

「良いぜ良いぜ。絶対見つけてやるぜ」

魔理沙は本探しだというのにうきうきしている。多分だが、見つけ

出した暁には、その本を借りるつもりだろう。

「そういや、自己紹介がまだだったな。俺は黒崎一護、よろしく」

一護は悪い人じゃなさそうなので自分の名前を名乗る。

別にさっきの女性（紅 美鈴）が悪い人というわけではないが。

「私は霧雨魔理沙だ。よろしくだぜ」

一護に続いて魔理沙も名前を名乗る。

「私は知識と日陰の少女 パチュリー・ノーレッジ。この大図書館の主よ」

*

その頃、霊夢はメイド長の十六夜咲夜と死闘を繰り広げていた。

銀髪のボブに両方のみあげ辺りから、先端に緑色のリボンをつけたみつあみを結っている。服装は青と白を基調としたメイド服であり、頭にはカチューシャを装備している。

メイド衣装の見本のような姿だ。

そんな彼女が巫女であられる博麗霊夢と戦っているのだ。

絵的には随分晴れるであろうが、しかし繰り広げている戦いは必死そのものであり、一歩間違えれば死へ繋がるかも知れない戦いなのだ。

「奇術『ミスディレクション』」

咲夜はスペルを唱えると、無数のナイフの弾幕を広範囲に放つてきた。

「夢符『封魔陣』」

霊夢もスペルを唱え青白い結界を展開し、ナイフの弾幕から身を守った。

そして、新たなカードを続けて取り出しスペルを唱える。

「霊符『夢想封印』！」

霊夢の周囲に光り輝く弾幕が現れ、光弾を咲夜に向かって発射した。

「……無駄ですよ」

咲夜はそういうと、その場から姿を消失させた。

（消えた!?!）

瞬間、霊夢の後方に咲夜が現れた。

霊夢は直ぐ様、気配に感づき、後ろに振り返る。

「幻在『クロックコープス』」

咲夜がスペルを唱えた瞬間、霊夢の周りに、いつの間にかナイフの弾幕が現れ、飛んできていた。

(いつの間にな?)

霊夢は即座にナイフの弾幕を避けるが、三本ほど腕や足に刺さる。刺さった腕や足から赤い血が流れた。深くは刺さっていないかったのか簡単にナイフを抜き取り、放り投げる。

この時点で、もはや死と隣り合わせの戦い。

血が流れる戦なのだ。

「あんだ、一体何をしたの？」

霊夢はナイフにより痛みなどほとんど意に介さず、敵である咲夜に語りかける。

「私が教えるとしても。もう一度、ご自分の目で確認してみてくださいいかがですか？」

咲夜は少し挑発じみたことを言う。

さっきの咲夜の移動は空間移動……所謂レポートを使ったとは思えない程の速さだった。だが、空間移動とは何か違う気がする。

霊夢はそれを確かめる為に、挑発に挑む。

「それもそうね」

再びカードを取り出し、スペルを唱える。

「霊符『夢想封印』」

複数の光弾が咲夜に向かって放たれるが、さっきと同じように霊夢の後方に虚空より現れ、弾幕を余裕で回避する。

(消えたと思ったら、移動されている。やっぱり空間移動系……にしては、移動の後のあの余裕な姿は些か不自然ね)

もう一度、直ぐ様、咲夜に向かって弾幕を放つ。

瞬間——咲夜は再び空間に呑まれたかのように消え、次は霊夢の頭上に現れる。

「幻世『ザ・ワールド』」

咲夜がスペルを唱えた瞬間、霊夢の周囲を囲むように無数のナイフが展開された。

「チェックメイトですね、侵入者。そういえば、まだあなたの名前を聞いていませんでしたね。まあ、どっちでもいいんですけど！」

そういうと咲夜は展開していた無数のナイフを、霊夢に一斉発射した。これをまともに喰らえば、いくら霊夢でも命に関わるだろう。

「夢符『封魔陣』！」

霊夢はスペルを唱え、渾身の結界を張った。

*

同時刻、一護は大図書館でパチュリーに頼まれた本を探していた。敵地で何を悠長なことをと思われるだろうが、まあそれもまた一興であり異変解決への一歩なのだ。

「こんな大量の書物から一冊の本を探し出すのって、結構きついな」

冗談抜きで、砂漠から特定の砂粒を見つけ出すかのような感じだ。

「そうですね」

一護の横に立つ一人の女性が答える。

赤い長髪で頭と背中には悪魔然とした羽が生えており、白いシャツに黒色のベスト、ベストと同色で膝丈より長いスカートで、ネクタイを着用している。

この女性がパチュリーが言っていた小悪魔。

大図書館で司書をしているらしい。既に一護と魔理沙との自己紹介は終えている。

「これじゃあ、自分で館の主の部屋を探した方が早いかな」

何て、最もなことを言う。

しかし一度、請け負った仕事は途中で止めたくない。

「すみません、司書である私が責任をもって努めないといけない仕事でしたのに、まさか一般の方に手伝っていただくなんて」

一般というより侵入者。

もろ敵だ。

「いや、別に構わねえよ。こっちも対価をもらおう予定でしているんだからな」

こんなだだっ広い図書館の中をボランティアなんかではしたくないし、規模がデカすぎる。

何やら蔵書の数が凄く、外の世界——いわゆる一護のいた世界の本まで置いてある。

難しい文献から女性のファッション誌、漫画雑誌にライトノベルやお堅い文庫本まで。

「けど、あんたも大変だな。こんな数の本の管理、普通に考えて無理だろう?」

「ええ、本音を言うとかかなり大変です。けど今まで見たことのなかった本に触れることの出来る立場で、それはそれで面白いですよ。え、こんな本があるのですか、と感動の出会いがあったりしますから」

「それはまあ、天職ってやつなのかね」

「それより大変なのは、パチュリー様の御面倒を見ることですね。氣付いたら涎を垂らして寝ていますから。よくその涎が本に落ちて染みになったりして、私が綺麗にして直してるんですよ。本も時々、机に側に直し忘れてたりと、色々とお世話が尽きないんですよ」

と、小悪魔が少し愚痴りだした。

一護はそれを軽く聞き流しながら、本の背表紙を見ていく。

既に何百冊以上の本を見て、目が疲れ始めてきた。

「……流石にただ探すって行為だけじゃ見つからねえな。最後にいつ使ったか思い出せねか?」

「申し訳づぎいけません。それが全然憶えていなくて」

「そうか……ん、まさか……」

一護は何か思いついたのか、再び口を開いた。

「なあ、パチュリーがいつも本を読んでる机ってどこにある?」

「え、あっちですけど」

小悪魔は横の方を指差した。

「そうか。さんきゅう」

一護は小悪魔が指差した方に向かった。

(俺の勘が正しけりゃ、本の場所は……)

灯台下暗しの下にある。

*

霊夢は咲夜のナイフの弾幕を封魔陣で何とか防いだ。

だが、霊夢の体力はほとんど残っていない。今の封魔陣で、相当な霊力を消費してしまった。恐らく使えるスペルは残り一枚か二枚が限界だろう。

「今のを、よく防ぎ切りましたね」

咲夜は感心したように言う。

「けど、もう体力切れですわね」

確かに霊夢の体力及び霊力は既に消耗しきっている。

しかし、ああようやく、目の前の敵の能力が分かったと——霊夢は口元を緩めて不敵な笑みを作る。

「あなたの能力が分かったわ」

その言葉を聞いた咲夜は少し顔つきが鋭くなる。

「……面白いですね、では言っておらん下さい」

「あなたの能力は時間やそういった時の概念を操る程度の能力……で、当たってるかしら？」

それを聞いた咲夜は驚く。

まさか、本当に——当てられるとは思わなかったからだ。

「……正解よ。私の能力は『時間を操る程度の能力』。私は流れる時を操れるの」

「大層な能力ね」

「当てたことには驚きましたが、当てたところで攻略法が分からなければ意味ありませんよ」

咲夜はカードを取り出す。

「これで本当の最後です。メイド秘技『殺人ドール』」

スペルを唱えると無数のナイフが発射された。

そんな絶体絶命の状況で、霊夢はスペルカードを取り出す。

「このスペルはあまり好きじゃないんだけど、そんなことも言っていないみたいだわ」

言うのと、それを唱えた。

それは自分の能力と渴望が具現化した特殊なスペルカード……

「天に生み出されし夢想よ 私にその天位たる力を授けろ『夢想天生』！」

*

「マジかよ」

一護と小悪魔はパチュリーの読書机を探っていたら、目的の本を見つけてしまった。

綺麗な装丁の本で、かなり高価な本に見える。

「良かったです。見つかって。でも、どうして黒崎さんはここだと分かったんですか？」

「簡単だ。簡単すぎて説明したくねえよ」

簡単かどうかは分からないが、端的にパチュリーという人物像を小悪魔から聞く限りここくらいしか思いつかなかった。

本を大事にはしているが、どこか抜けがある感じのパチュリー。誰も本棚に直した記憶がないということは、読んでそのまま読書机に置いていたのだろう。

そして月日が経ち、他の本も積み重なり隠れて見つからなくなつた。こんなところだ。

と、そこにパチュリーと魔理沙が来た。

「ようやく見つかつたようね。助かつたわ、ありがとう」

パチュリーは小悪魔が持つ本を見て言う。

「ああ。じゃあ、約束通りこの館の主の部屋を教えてください」

「ええ、分かっているわ。レミイの部屋は」

*

同時刻、その館の主の部屋では一人の少女と一人の男性が向き合っていた。

暗くてお互いの詳しい表情や容姿が分からない。

「まさか、本当にあなたが現れるなんてね」

「私はただここに寄つただけだよ。レミリア・スカーレット」

第10斬【吸血鬼VS死神】

《1》

黒崎一護はパチュリーの依頼をクリアし、お礼としてこの館の主の部屋を聞き出した。そして現在、そこに向かって走っている。

魔理沙は大図書館で調べたいことがあるってことで、あそこに残った。恐らくあの書物の量に目が眩んだのだろう。

疑問に思うであろう一護の身体の傷は、魔理沙から貰った回復薬が異常なほど効いたおかげでほぼ全快に等しい。

だがこの回復薬には副作用があるとのこと。

その副作用はいつ発生するか分からなく、副作用で起こる作用は全身が麻痺し、一時的に体が動かなくなるらしい。飲む前に教えて欲しかったが、状況が状況だけに先に知っていても飲んでいたであろう。

よって今はそんなことを気にしている暇は無い。

一刻も早く館の主の部屋に行かなくては。

と、一護が紅い廊下を走っていると、ボロボロになっている霊夢が壁にもたれ掛かって座っている姿を見つけた。

「霊夢ー」

一護が霊夢に駆け寄る。

一体、どれほどの激戦が繰り広げられていたのだろうか？ 廊下の所々に刺し跡や爆破跡のようなものが残っている。この戦場跡がどれくらい凄まじい戦いがあったか物語っている。

霊夢は一護の声に反応するように、目を開けた。どうやら気絶まではしていないようだ。

「一護……」

顔を上げて一護を確認する。

一護は駆け寄り、霊夢の傍らに屈む。ナイフに切り刻まれたような傷が所々にあり、赤い血が出ている。一発一発が深い傷では無いのか、驚くほどの血の量ではない。

「大丈夫か？」

「ええ、何とかね。それより一護、早くあんたは先に進みなさい。知っ

ているんでしよう、犯人の部屋」

「ああ、分かった。ここで待っているよ。すぐ戻るからな」

一護は素晴らしい館の主の部屋に向かった。

*

その頃、館の主の部屋では、一人の少女と、一人の男が向き合っていた。

少女は凄まじい程の殺気を男に向けている。常人なら昏倒してしまふ程の殺気にも関わらず、男は全く気にせず涼しい顔をしていた。ピリピリとした空気が部屋を間隙なく漂っており、この均等がいつ崩れるかも分からない。

そんな常識が通じない中で、

「本当に、ただ寄っただけなの？」

少女は訝しそうな目で聞く。

それを聞き、男は欺瞞や戯れに満ちた調子で答える。

「否だ。一つ、ここにというより、ここに侵入した者に用があつてね」「侵入者に？ どうして？」

「私の計画の終着点が入入者の一人、黒崎一護に手伝ってもらわないといけないからだよ。ああ別に、手伝ってもらわなくても良いのだが、そちらの方が効率が良くてね」

「……」

「だがまあ、それでは詰まらん。ゲームは難易度が上がれば上がるほど面白い。破壊、虚無、孤独、蛇、そして博麗の力を借りて、全総力でこのゲームをクリアしてみろ」

この会話を、第三者が理解するは不可能だろう。

少女はある程度、男のことを理解した上で、挑戦的に言う。

「良いわ。受けてたつわよ。でも、その前に私が黒崎一護を殺してしまつたらどうする？」

男に一矢報いるように言った。

しかし男は表情を一切変えずに、

「君では、彼を殺すのには力不足だよ」

「ッ！ 何ですって……!?!」

少女はその言葉にキレかけた瞬間だった。

ドカツ！ と、扉を強く蹴り開ける音が響いた。

「邪魔するぜー」

入ってきたのは黒崎一護だった。

一護が入ると同時に男性は姿を消す。まるで初めから、その場に居なかつたかのように。

「……………」

暗い部屋だが、ちょうどいい具合に紅い月が窓から部屋を照らし出している。広い部屋な分、窓ガラスも大きい。と言うより、部屋の向こう側が全面ガラス張りだ。

家具もソファから天蓋ベッド、カーペットまでどれも高そうだ。金持ちの特権のような部屋だ。

そして一護はその部屋に佇む少女を確認する。

「あんたが、この館の主か？」

「随分と礼儀がなっていないわね。まあ良いわ。私が紅魔館の主、レミリア・スカーレットよ」

紅魔館の主は自分の名を名乗る。

水色の混じった青髪に真紅の瞳。ピンクのナイトキャップを被っている。ナイトキャップの周囲は赤いリボンで締めている。衣服は、帽子に倣ったピンク色。太い赤い線が入り、レースがついた襟。三角形に並んだ三つの赤い点がある。両袖は短くふつくらと膨らんでおり、袖口には赤いリボンを蝶々で結んである。左腕には赤線が通ったレースを巻いている。小さなボタンで、レースの服を真ん中でつなぎ止めている。腰のところは赤い紐で結んでいる。その紐はそのまま後ろに行き、先端が広がって体の脇から覗かせている。スカートは踝辺りまで届く長さ。これにもやはり赤い紐が通っている。背中には大きな悪魔のような翼が生えている。

パツと見、悪魔か吸血鬼を連想させる。

「さあ、あなたも名乗りなさい。侵入者」

レミリアは一護の目を見据えて言った。

「俺は黒崎一護。早速で悪いが、この紅い霧はあんたの仕業か？」

「そうだとしたら……どうする気？」

レミリアは楽しそうに答える。

「どうやら、紅い霧の犯人はレミリアのようだ。元より予想はしていたため、全く驚かない。」

「今すぐ、紅い霧を消せ」

一護はレミリアに紅い霧を消すように言う。

まあそんな人間のいうことなぞ、

「嫌よ。この紅い霧があれば、私の嫌いな日の光りを見ずに済むからね」

聞かないに決まっている。

「勝手な事言ってんじやねえぞ」

「だったら、私を倒してみなさい。一発でも私に弾幕を当てたら、紅い霧を消してあげるわ」

一発でも当てたら勝ち。

完全に舐められている。

一護はそれに対し、少し腹が立ったのか、

「上等だ。一発どころか何十発も当ててやるよ！」

「やってみなさい人間。自分の愚かさ、愚昧さを知るが良い」

膨れ上がるレミリアの殺気の妖力。

横溢しきった力が空間を揺るがし、一護に魂をも圧迫する重圧が襲いかかる。

「さあ来なさい。人間、黒崎一護」

こうして黒崎一護VSレミリア・スカーレットの戦いが始まった。

*

「黒符『月霊幻幕』！」

始まった瞬間、まず一護がスペルカードを唱えた。

一護の周りに三日月状の弾幕が展開され、一斉にレミリア目掛けて放つ。

レミリアは飛んでくる弾幕を見て、全く警戒せず呟く。

「ぬるいわね」

レミリアもカードを取り出し、スペルを唱える。

「冥符『紅色の冥界』」

紅い弾幕がレミリアの周囲に展開され、それが一護の弾幕を全て相殺していく。

「黒符『天幻月牙』！」

自分のスペルが一瞬で崩されたことに驚いたが、しかし逡巡せず直ぐ様に新たなスペルを唱えた。

レミリアの周囲の空間から、三日月状の弾幕が展開された。この弾幕は一度逃げ遅れたら回避不可のスペルだ。故に初見でこれを躲すは厳しいだろう。

しかし――

「遅いわよ」

瞬間、レミリアがその場から姿を消した。

「なッ!？」

それは目では追いきれない瞬速。

霊夢より魔理沙より美鈴より、疾風より迅雷よりも――一護が今まで見た中で一番速い。銃弾など鼻歌混じりに追い越す神速に、一護の弾幕など当然当たらない。

ドゴオオン!……と、部屋の壁面が没落した。それだけではなく、床も家具も何もかもだ。

音など遥かに置き去り、レミリアは空間を三次元的に飛び回っている。その後を追うように爆破じみた衝撃波。レミリアが真横を通り抜けただけで、普通の人間は五体を粉碎されかねない。

「私は吸血鬼。永遠の紅い幼き月　レミリア・スカーレット。あなたのような人間風情が、吸血鬼である私に勝てると思っっているの?」
「――!」

吸血鬼――書物などで読んだことはあるが、実際に見るのは初めてだ。吸血鬼の身体力は一説によると、下手をすれば死神を優に追い越せるほどだ。

そんな奴が相手なのかと、一護は改めて自覚する。

元よりこのような、とんでもない規模の異変を起こせる時点で並みの妖怪ではないことは承知の上だったが、妖怪の中でも上位種の吸血

鬼となると、一言でヤバイ。

「必殺『ハートブレイク』」

瞬間、一護の後方からレミリアのスペルを唱える声が耳を穿った。

一護は急いで振り向くも、

「ガアアアッ!!」

遅かった。

光速に等しい勢いで、真紅の槍が一直線に一護の左肩に貫通した。鮮血が迸り、灼熱にも似た激しい痛みが左肩から全身に襲いかかる。

「まだまだいくわよ。呪詛『ブラド・ツエペシユの呪い』」

レミリアは休む暇を与えずスペルを唱える。

紅い弾幕がレミリアを中心に無数に現れ、それが右往左往と敵の動きを制限しながら活動する。

一護は左肩を右手で支えながら弾幕を避け続けた。動く毎に、左肩に激痛が走る。そのせいか、少し動きが鈍くなる。

「弾幕に気がいきすぎよ。夜符『バッドレディスクランブル』」

休むことを知らない怒涛の嵐。

レミリアは背後の壁面に高く飛びつき、紅いオーラを纏う。

質量と共に、そのオーラは美鈴より上。故に当たれば終わりは必然だろう。

その瞬間、レミリアは紅いオーラを纏ったまま一気に一護へと直行する。速さは実に目視不可。故に――

「しま――ッ!」

一護がレミリアの体当たり気付いた時には既に遅く、レミリアによる攻撃を受けてしまった。

まるで全身の細胞が蹂躪されたかのような激痛。しかもそれだけでは止まらず、一護はそのまま部屋の豪華な窓を突き破り、外へと放り出された。

「ツウウウウッ!」

ここから落ちたら死は免れない。

レミリアの部屋は3階に位置する場にあった。そこから今の状態

で落ちれば死があるのみだ。

故に痛みを悶絶するよりも先に能力を使用し、天に足をつく。

「クソッ」

一護は先の部屋を見るが、そこにレミリアはいなかった。

どうやら同じく外へと出たらしい。

(どこ行きやがったあの吸血鬼!?)

「コンコよ」

探そうと思った矢先に、後ろからレミリアの声が静寂となった夜に響いた。

一護は振り返り、声のした方を見る。そこには、紅い霧と紅い月を背景にレミリアの姿があった。

「テメエ、いつの間に」

「あなたが遅いのよ。呆れるくらいにね」

「ッ!」

「どう、もう諦める? 最初から分かっていたはずよ。あなたのような人間が、私に勝てないことくらい。自己防衛本能とか働かなかつたのかしら。始まる前に失神するくらいの殺気を当ててやったのに」「うるせえよ。俺は諦めねえ。まだ動ける、戦える。こんなところで、負けるはずがねえ」

言うや否や、一護は最後の切り札を取り出す。

それは代行証。

一護が手にとった刹那、卍型の黒い霊圧が噴出し、構える。

「……何それ?」

レミリアは一護の持つ武器を見て、怪訝な表情になりながら聞く。長年生きてきたが、このような力は見たことない。

「自分で確かめろよ」

一護は少し余裕の笑みを浮かべる。左肩の傷の痛みにも慣れてきているようだ。

「だったら、確かめさせてもらおうわ。神術『吸血鬼幻想』」

レミリアはスペルを唱える。

六つの大弾がレミリアから放たれ、それに続いて通常の弾幕が無数

に放たれた。

無数の弾幕もそうだが、その比にならないくらいに大弾の質力が並外れて高い。

それを感じ取った上で一護は、最後の切り札を放つ。これでも駄目なら、負けは必須。

「黒斬『月牙天衝』！」

カードが光の粒になり、代行証に吸収される。

一護は代行証をレミリアに向かって振った瞬間、卍型の霊圧が歯車のように回転しレミリア目掛けて飛んだ。

そして月牙天衝は、レミリアの弾幕を次々と破壊していく。

(!?バカな……ッ！)

レミリアはその光景を見て目を丸くする。

流星のレミリアも自分の弾幕が、一発の一護の放った月牙に負けるとは思わなかったらしい。

これが人間の底力。これが黒崎一護の底力。

「チッ！」

ここにきて初めてレミリアは苦い顔をする。

飛来してくる月牙を避けると同時に再びスペルを唱えた。

「紅符『スカーレットマイスタ』！」

「俺を、舐めるな！ 黒符『月牙天衝』！」

再度放った月牙が、レミリアの弾幕を悉く蹂躪していく。

「嘘でしょ……！」

レミリアは驚愕する。

——何だこの人間は、一体何でこんな土壇場でこのような力を出せるんだ。

その驚愕の、一瞬の隙を突き、

「黒符『天幻月牙』！」

レミリアの周りに三日月状の弾幕が現れる。

それを見たレミリアは我に返り、間一髪のとこで避ける。

「チッ、もうちよいだったのに」

一護は悔しそうに呟く。

恐らく今の隙が、戦いが始まってからの一番の隙だっただろう。しかし、ようやく攻めに入れると、一護の心に余裕の隙間が生まれた。

「今のは危なかったわ。ええ本当に、久しぶりに危ないと感じちゃったわ」

レミリアは避けると、直ぐに一護と向き合う。

「けど、次は本気でいくわよ」

刹那、レミリアの中でこの戦いを楽しもうとしている自分が居るのに気付いた。

人間の力——悪くない。いや、これほど素晴らしいのだと、歓喜に満ちている。

「ああ、全力できやがれ！ 全部、俺が叩き落としてやるよ！」

それは一護も同じだった。

ようやく勝率を見い出せた。絶望に等しい状況の中で、勝率が上がるということは、なんとも感激に等しく打ち震える。

「フフ……ハハハ、ハハハハハハハハハハ!!」

唐突に哄笑を上げるレミリア。

ああ、これが戦い。これが削り合い。これが歓喜と恐怖。

戦いの中で、至上の喜びを得た。

自分が生きていると実感できた。

「何が……可笑しいっ！」

レミリアの豪笑を掻き消すように、一護の月牙が放たれた。

紅い夜を引き裂きながら、レミリアに直行する。

「何もかも。全てが、ええ、私が今生きていると声高らかに示せる。長年生きてきて、本当に自分は生きているのだろうかと妙な錯覚に襲われていたのに、こうして、戦いの中で歓喜や恐怖を抽出できると言うことは、自分が今生きている何よりの証になる！」

一護の月牙を身を翻して避けると、一気に一護へ飛ぶ。

「負けるかぁッ！」

黒い弾幕を展開し、その状態でレミリアの交戦する。

しかし弾幕など意に介さず、まるで美鈴のように弾幕を引き裂き、

一護を蹴り飛ばす。

見た目は少女でも、その蹴りの威力は美鈴を超える。

だが――

「どうした、油断してんじやねえぞッ!」

一護は何と、その蹴りに耐え切った。

そして黒い弾幕を握るように掴み、レミリアの腹を力いっぱい殴る。

女を殴るのは気が引けるが、相手は吸血鬼であり妖怪。ならこの程度、痛くも痒くもないだろう。

「へえ」

レミリアは微笑み、後ろへと後退する。

「成程、無意識に霊力の膜を張っているか。随分と、戦闘に関しては怖いほど才能があるわね」

「そうかよ。俺としちゃ、そんな才能はいらねえんだが。まあいいや、そろそろ終わらせようぜ。戦いも長引けば飽きるからな」

「そうね、そうしよう。さて、では――」

その時だった。

レミリアが何かを言い切る前に、異変が起きた。

代行証の黒い霊圧が一護を包み始めたのだ。

「なッ!?!」

レミリアも一護もそれに驚く。

「!.....何だ.....!? 代行証が.....!!」

遂に、黒い霊圧が一護の右腕を完全に包んでしまった。

《2》

「はっ、はっ.....くっ、はあはあ.....」

息が荒くなる。

胸が苦しくなる。

霊力が乱れる、自分に異変が起きていると全身が訴えかけてきている。

黒崎一護は黒い霊圧に包まれた右腕を左手で掴む。

「!?!」

吸血鬼であるレミリア・スカーレットは一護を凝視する。

長年生きてきた中で、自分が見てきた中で、感じてきた中で、どれにも当てはまらない未知の現象が、自分の目の前で起きていた。

——理解できない、何だあれは？

「はっ、はっ……うおおおおおアアアアアアアア!!!」

一護は右腕を支えながら、天に向かって叫んだ。

*

そんな頃、霧雨魔理沙は廊下の片隅に居る博麗霊夢を発見した。そして一護と同様の回復薬を飲ませ、どうにか体力の回復に勤しんでいる。

「……あんたまで、この館に来ていたなんてね」

霊夢は自分の横に座る魔理沙に語りかける。

傷口の回復、霊力の回復は回復薬での効果を待ち、二人は壁にもたれ掛かって座っていた。

「当然だろ。私も異変の解決が好きなんだぜ」

魔理沙は大図書館からパクツた、否借りた本を読みながら答えた。

私も……とは、それではまるで霊夢は異変解決が趣味の一つのようではないか。随分と人間きの悪い。

「さつき、一護の霊力が異常に変化したの感じた？」

霊夢は俯き聞く。

それを聞かれた魔理沙はゆっくり本から顔を上げ、

「ああ、感じたぜ。急激に一護の霊力が上昇していきやがったぜ」

珍しく真顔で答えた。

今なお天井知らずに上がり続ける一護の霊力。原因などは実際に感じるのではなく、目で見てみないことには一切見当もつかない。

それ程、今の一護の身に起きている事は前代未聞の現象みたいだ。

「一体何が起きていると思う？」

「分からないわ。実際に一護を見てみない限り」

「じゃあ行こうぜ。気になって仕方ないぜ」

「……そうね。私の体力も回復してきたし」

二人は立ち上がり前に進む。

これから先に、絶望とも言う展開が待っていることも知らずに。

*

同時刻、湖の畔にチルノ、ルーミア、大妖精がいた。

三人は湖の先、一護と霊夢が向かった方向を見ている。しかし勿論、紅い霧が濃いせいでその先にある紅い館は見えない。

「……大丈夫かな、一護？」

ルーミアが心配そうに呟く。

敵であつた自分を介抱し、優しくしてくれた一護の安否を心懸ける。

そんなルーミアを見て、

「大丈夫に決まってるよ！ この最強のあたいに勝つたのに負ける訳ないじゃない！」

チルノが胸を張って答える。

こういう時のノリは、ウザいではなく随分と心強く聞こえた。

「そ、そーなのかー？」

曖昧とせず頷く。

そんな二人の様子を見て、微笑みながら大妖精が言う。

「チルノちゃんも心配なんじゃないの？ 一護さんのこと」

それを聞いたチルノは、自分の心の内を読まれたかのように顔を赤らめた。

「な、そんな訳……ない、と思う」

「ハハハ、チルノちゃんとは長い付き合いだよ。それくらい分かるよ」

大妖精はにっこりと微笑む。

そしては二人に向かって口を開いた。

「行きたいんじゃないんですか？ 一護さん達のとこに」

そのセリフにチルノとルーミアは顔を見合わせ、二人の気持ちを共有したのか、

「うん」

と、頷く。

*

「その姿は何？」

レミリアは一護を見て聞く。

さつきまでの笑みは消え、少し一護に対して警戒心を強くしている。

「俺にもよく分かんねえ」

分からない、自分にも理解できない。

だけど、どこか懐かしい感覚がある。

今の一護の姿は、完全に死神が着ている死覇装の姿である。否、代行証から流れ出ていた黒い霊圧を死覇装に模し、それを纏っている状態にあるのだ。

更に代行証を持っていた右腕は、完全に黒い霊圧が纏われ見えなくなっていた。

そう、例えるなら、今の一護は死神の姿に相違ない。

「けど、戦える。さつき以上に戦える」

ご都合主義だが、それが黒崎一護の特権であり主人公の証。

「続きと行こうぜレミリア。心配すんな、期待に添えるよう、テメエの生をもっと実感できるように戦ってやるからよ」

一護はまず自分が初めて入手したスペルを唱える。

「黒符『月霊幻幕』」

周囲に三日月状の黒い弾幕が展開された。

それを見たレミリアが目を丸くする。

(ツ！ さつきよりも数段込められている霊力が上がっている！)

内包されている霊力が先より段違いだ。

下手に打てば危険だろう。

「渴望する世界を塗り替え 幻想郷を紅魔の世に染めよ『紅色の幻想郷』！」

それは符名の付かない特殊なスペル。

レミリアから紅い大弾が幾つも発射された。その大弾の軌道上に紅い弾幕が現れる。

「――！」

一護は展開しておいた三日月状の弾幕を一斉発射させる。

レミリアの弾幕と一護の弾幕がぶつかり合う。その間に一護は動く。

バツと、一護の輪郭が残影と化した。

比喻ではない。高速度撮影ですら一護を捉えるのは不可能であろう速度で、ぶつかり合う弾幕の小さい隙間隙間を狙い、そのままレミリアの背後を取る。

「甘いわよー」

しかし相手はそれ以上で動き、動体視力も並外れて高い化物だ。

背後を取られた刹那には、レミリアの少女のように細い腕が一護の脇腹を捉えた。

「ガッー」

細い腕でも相手は吸血鬼。

内包された筋肉と力は外観では分からないものの、その威力は鋼鉄すら砕きかねない。

だが一護は今、全身を霊子で纏い耐久力なら、その程度の攻撃を受けても凄く痛いので済む。

「くそッ、まだだああああ!!」

女に負けるのはどうも釈然としないのか、一護は諦めることなく肉弾術で交戦に入る。

「単細胞ね。良いわ、受けてたつてあげる」

レミリアが不敵な笑みを浮かべながら、一護に応戦する。

剣林弾雨の勢いでお互いの拳が飛ぶ。一発一発が重火器以上の威力を有しながら、両者の拳が両者を撃つと疾走する。

だが、ここでレミリアが異変に気付いた。

「これは……」

逸らされている。流されている。

レミリアは目の前に滅多打ちにしている相手を見失っていた。

それは一種のゲシュタルト崩壊。視覚映像と現実の手応えが噛み合わないが故の齟齬が、レミリアの認識力に誤作動を生じさせた。

「高速を相手取るなら、高速と化すしかねえ。だけど、既に俺はそこにはいねえ」

例えるなら野球で言う可変速球。速球と見せかけて中途減速するスローボールを投じ、打者の時間感覚を奪う詐術を思わせた。

最短距離で自ら殺到する一護が体現していた高速の凌ぎ合いに、レミアは反射的に応じ、こうして置き去りとなった。

激流を緩やかに舞う木の葉のように、レミアの猛撃を躲し続ける一護。その所業は相手と同じかそれ以上の身体力があつての術。故に今の一護はそれくらいに身体面も急増しているのだ。

そして攻撃を全て捉えた一護は反撃に入る。

「ウオオオオ！」

身を沈め、滝を割るが如くの鉄拳。

それを腹部に受けたレミアは、

「所詮は小細工ね。その程度じゃ、まだまだ私には届かないよ」

他の身体面が上がっている一護だが、やはり膂力という面と耐久力と言う面ではレミアの方が上手だ。

お返しと言わんばかりに、レミアの弾幕が眼前で放たれた。

「チイツ」

一護は間一髪で弾幕を躲しきり、後ろへ後退する。

それを逃さずレミアが動くと同時に、一護の背後を先の真似事のように取った。

紅蓮色に輝く鋭い爪を宿した手を一護を引き裂かんと繰り出される。

一護は即座に、振り返り様に右腕の濃縮している霊圧でそれを防いだ。

レミアがそれに驚くよりも先に、

「黒符『天幻月牙』！」

一護がスペルを唱えた。

レミアの周囲に弾幕が現れる。一護はレミアの攻撃を弾くと同時に距離を取ったので、自分の弾幕に被弾することはない。

レミアは逡巡せずスペルを唱える。

「そんな弾幕は効かないわよ。紅符『不夜城レッド』！」

刹那、レミアを包むように赤い十字架が立ち込んだ。

まるで巨大な紅き十字架。その強力なエネルギーが周囲の漆黒の弾幕を否応なく消滅させていく。

そして更にスペルを唱える。

「運命『ミゼラブルフェイト』！」

巨大な紅い十字架から、多数の紅いオーラを纏った鎖が発射された。

それはまるで意思のある蛇のように、一護を狙って多数の鎖が対象を捉えんと動く。

「くそッ！」

一護は鎖を避け続けるも、鎖の一つ一つが意思を持っているかのように一護を追跡する。その上、鎖が無限に伸び続け、一護の逃げ場を減らしていく。

そして鎖が遂に一護を完全に取り囲んだ。

「これで終わりね」

赤い十字架が消え、レミリアが姿を現していた。

その両手には無数の鎖の根元部分が握られている。と言うより、まるでレミリアの両手から異次元の空間があるかのように、そこから鎖が伸びていた。

「年貢の納め時ってわけよ、侵入者」

鎖が一斉に一護に迫る。

「オオオオオオオオオ!!」

一護が黒い霊圧を刀状に形成させ、凄まじい速さで四方八方を切り裂く。

その姿はまるで、白哉戦の億の刃である千本桜を防いだ時のような錯覚さえ覚えさせる。

「ッ！ まさか、このスペルまで防がれるなんてね……」

レミリアは目の前の現象に目を疑った。まさか確実に勝てると思った攻撃さえ防がれたのだから。

今の一護は死神時代の力とまではいかないが、ほぼ同格と言っても良いだろう。

「……そろそろ終わりにしようぜ、レミリア」

一護が黒い霊圧を刀状のままにし、レミリアに向ける。
お互い、そろそろ限界に近いはずだ。

「これで最後だ」

そう宣告し、右腕を構える。

レミリアはそれを聞き、微笑みながら、

「ええ、良いわ。あまり長くやると興が冷めるものね。お望み通り次で最後にしましょう」

カードを取り出し、スペルを唱える。

「神槍『スピア・ザ・グングニル』」

レミリアのカードが紅い粒となり、それが左手にいき、槍を形成し始めた。

槍は赤く、とてつもない大きさだ。万象、全てを貫く槍と言っても過言ではないだろう。

「黒斬『月牙天衝』」

一護もスペルを唱える。

カードが光の粒となり右腕に吸収された。

「行くぜ、レミリア」

「ええ、掛かってきなさい黒崎一護」

一護は右腕に力を込め、レミリアは投擲の態勢に入る。

乾坤一擲——お互い最後の力を振り絞り、一護は右腕から死神時代に放っていた月牙天衝を、レミリアは紅い槍を片手で素早く投げた。数瞬もせず、月牙と槍がぶつかり合う。全力で放たれた力は、次元すら歪み破壊しかねない衝突。世界が慟哭を爆ぜ、大地を揺るがした。

月牙の黒い霊圧と紅い槍の真紅の妖力が天にまで上り、拮抗する。

「――」

互角……レミリアはそう思った。

そう思って、油断してしまったのが唯一の小さな傲慢だった。

「――まだだー！」

一護が叫んだ。

そう、月牙天衝は極小ながら生きていたのだ。

その月牙が油断していたレミリアに——直撃した。

「ハハ……」

一護の限界点が突破したのか、纏っていた黒い霊圧が消滅し、元の服装に戻る。

レミリアも一発喰らってしまったせいで、高価そうな服がボロボロだ。

「一発、当ててやったぞ」

「ええ、当たってしまったわ」

いさぎよく、告げる。

「私の負けよ。約束通り、紅い霧は消すわ」

これにて激戦は幕を閉じた。

一護の勝利という形で。

*

それから、数十分後。

「——お嬢様、〴〵無事ですか!?!」

紅魔館のメイド長——十六夜咲夜が扉を強く開け放った。

霊夢との戦いのせい、頭に包帯を巻いていたり、手や頬にガーゼが張られている。ボロボロになったであろうメイド服は新品のに着替えられている。

そして最初に瞳に映ったのは、レミリアと一護が何やら平和的に否、和睦しているようにも見えた。

「あら、咲夜。どうしたの？ そんなに慌てて、客人の前ではしたくないわよ」

レミリアが咲夜の方に振り返る。

「——……!!」

咲夜の目が大きく見開かれ、一歩後ずさる。

現在、レミリアの服は破けたりしており、その間近に一護が上半身裸（もう服が限界点を超えたため見るも無惨だから脱いだ）で立っている。

咲夜の脳内状況説明。

場所——お嬢様の部屋。

登場人物——男（黒崎一護）、お嬢様。

概略——上半身裸の男（見た目、青少年）がボロボロに破けた服でいるお嬢様（見た目、少女）と一緒に居る。

つまり……

「あ、あなた、お嬢様と一体なんのプレイを!？」

咲夜が赤面しながら、超狼狽えて言う。と言うより、どこか嫉妬しているように感じたのは見間違いだらうか？

「あんた何か変に勘ぐってねえか？」

まあ最悪な誤解をされているのは必定だ。一護はとりあえず説明しようとするも、そんな暇はなかった。

「よくも私のお嬢様に手を上げましたわね！」

あながち手を上げたとは間違っちゃいないが、主旨が違いすぎるだろう。

咲夜が銀製のナイフを取り出し、一護を睨みつけた。

「いつから私はあなたのものになったのかしら？」

レミリアが小声で小さく呟く。

普通逆だろうと突っ込みたかったが、咲夜の瞳には一護しか映っていない。

「お、おい。なに変な誤解してんだよ！俺がこんな子供にそんなことする訳ねえだろ！いや、手を上げたつてのは若干間違つてねえが」

一護は咲夜の誤解を必死に解こうとする。

しかしある単語がレミリアの癪に障つたらしく、

「……子供」

俯きながら、静かなる赫怒に満ちていた。

「おいレミリア！お前もこいつに何とか言つてやってくれ！」

鋭利なナイフを構えている咲夜に対し、命の危機を感じた一護はレミリアに助けを求め。

瞬間、ヒュツとナイフが空気を裂きながら飛来してきた。

「うおっ！」

一護はナイフをギリギリ避けた。

「危ねえな！ 当たったらどうすんだよ！」

「心配には及びません。肉が裂け、血が出るだけです」

「それが危ねえってんだよ！」

平然と答えた咲夜に戦慄する一護。

いや本当、どんな狂人だよ。

「つかレミリア！ 早くこいつを止めてくれ！」

と、一護はレミリアに助けを求め。

「そうね、分かったわ……」

レミリアは俯きながら答えた。なぜか声が震えている。

そして、

「咲夜……少しそいつを痛めつけて上げなさい」

レミリアはそう言った。

……あれ、聞き間違いたかな？

レミリアがナイフ女を刺激するようなことを言ったような。

「はい、お嬢様。少し痛めつけますね。全治三ヶ月ほどの痛みでよろしいでしょうか？」

「よろしくねえな！」

「よろしくねえな！」

どうやら刺激するようなことを言ったらしい。

咲夜は再びナイフを構える。

「おい、待て！ ナイフが一発でも当たったら痛いどころか致命傷も

んだぞ！」

「問答無用です」

再びナイフが放たれた。

しかも一発ではない。まるで弾幕かのようなナイフの嵐。当たれば

少しどころか死に至る。

「うおおおおおおお!!」

一護はナイフから陸上選手もビックリするくらいの猛ダツシユで

駆ける。

「レミリア！ テメエ、何てこと言いやがる！」

ナイフから逃げながら一護はレミリアに向かって叫ぶ。

しかしレミリアは一護の言葉など知らんぷり。ガキのようだ。

——その時だった。扉が再び破壊されるんじゃないかというくらい強く開け放たれた。

「一護、大丈夫?!」

入ってきたのは博麗霊夢と霧雨魔理沙だった。

「一護お大丈夫か?」

と霊夢と魔理沙が言った刹那に、

「大丈夫じゃねー! このナイフ女をどうにかしてくれ!」

一護は霊夢に向かって言う。

その様子を見た霊夢は溜め息をつき、仕方なく一護を助けることにした。

*

それから数分後、ようやく茶番劇が治まり全員が落ち着いた。

一護はこれまでの事を全て霊夢と魔理沙に話した。勿論、咲夜の誤解も解けている。

ついでに霊夢もあの魔理沙の回復薬を飲んだことを聞いた。副作用について知っているかは不明のままだが。

「じゃあ、この紅い霧は明日までに消えるのね?」

「ええ、そうよ」

霊夢は最後にレミリアに確認を取る。

一応、これが博麗の義務であり、筆録書に記すためだろう。

「それじゃあ、これで異変解決ね。帰りましようか、一護」
異変は解決。

もう、帰っても大丈夫だろう。

しかし、一護は、

「待ってくれ、霊夢」

何か用があるのか霊夢を止めた。

「何よ、まだ何か用事があるの?」

「ああ、ちよつとな」

一護はレミリアの方を見る。

「レミリア・スカーレット……お前の名前を聞いた時、ある人物を思い出したんだ」

「ある人物？」

レミリアは一護のセリフに首を傾げる。

回りくどい言い方は面倒だったので、一気にその人物に名前を出す。

「お前——フランドール・スカーレットって女の子、知ってるか？」

一護がそれを言った瞬間、レミリアと咲夜が目を丸くした。

まるで触れてはならない物に触れてしまった感覚に等しい。

「……どうして、あなたが『私の妹』の名前を!？」

「! 妹……だと……!？」

そのセリフに一護も驚愕した。

夢の中に出てきた少女がレミリアの妹だったのだ。

第11斬【狂気の少女】

一護の夢の中で助けを求めていた少女、フランドール・スカーレットはレミリアの妹だった。

フランドール・スカーレット——彼女のことをレミリアからある程度は聞き及んだ。

フランは495年間、今なお地下室に幽閉されているらしい。普通の人間なら死に絶える程の年月だ。

そしてフランが幽閉されているのには、三つの理由が存在する。

一つ目は何をするにも手加減ができない。

二つ目はフランの能力の危険制。

三つ目は気が狂れているから。

この三つの幽閉理由が特筆してヤバいらしい。

特に三つ目の気が狂れていると言う理由が、恐らくこの中で何よりも危険だろう。

フランはちよつとした刺激により、異常なまでに反応し事を行う。例えば弾幕勝負なら、相手の血を一滴も残さずに吹き飛ばしてしまうくらい。

故に監禁幽閉。そうしないと、幻想郷そのものが危ないからだ。

一護はそれを踏まえた上で、その地下室の前まで五人でやってきた。

最初はレミリアにも霊夢にもフランと会うことを反対されたが、一護の長い説得により承諾してくれた。

地下室の扉はかなり頑丈らしく、どんな攻撃も弾き返す特殊な扉で出来ているらしい。故に扉は鍵で開ける必要がある。

咲夜は懐からその鍵を取り出した。

それを見たレミリアはもう一度、最終忠告するかのよう言う。

「本当に良いのね？ フランが発狂したら、私でも止められないわよ」

「ああ、分かっている。けど、俺は行かなきゃなんねえんだ。あいつが俺に助けを求めてんだからよ」

一護を前を、扉を見据えて言う。

迷いなど元より皆無。やるべきことは変わらない。

「……そう、分かったわ」

それを聞いたレミリアは、もう何を言っても無駄だと判断し引き下がる。

咲夜は扉の鍵穴に鍵を嵌め、解錠した。

「ここからは俺一人で行く。お前らはここで待っていてくれ」

一護の言葉に霊夢は何も言わない。

信じているのか、何も言う必要がないのか、それは判然としない。

「——行ってくる」

一護はそんな霊夢にそう告げ、重い扉を開き、中へと入った。

ガシャン……と、背後で扉が閉まる音が静寂の空間に響いた。

一護は周囲の空間を見渡す。

「……………」

夢の中で見た部屋と同じだ。

窓もなく、明かりもなく、家具もほとんど無い、暗い牢獄のような部屋。まるで寂しさのみが充実したかのような静謐さだ。

暗闇に一護の目が慣れてきた時、一人の少女の姿を見つけた。

少女は体育座りをし、俯いている。

これも夢と一緒だ。

しかし夢と違う点は、これが現実と言うこと。少女に干渉できると言うことだ。

「——」

一護は少女にゆっくりと歩み寄る。

どうしてだろうか、あれは夢だった。夢だったのに、それが現実と同じだった。

しかし一護はそれには一切驚かずに順応している。どうにも、こういった非現実的感覚に慣れてきているようだ。

少女は一護の気配を感じたのか、顔を上げ一護の方を見た。

フランは薄い黄色の髪をサイドテールにまとめ、その上からナイトキャップを被っている。瞳の色は真紅で、服装も真紅を基調としており、半袖とミニスカートを着用。背中からは、一對の枝のようなもの

に七色の結晶がぶら下ったような特殊な翼が生えている。見た目は10歳未満の少女に他ならないだろう。

とても狂人になるとは思えない。

フランが一護の姿を確認すると、ゆっくりと口を開いた。

「あなたは、誰？」

「黒崎一護」

一護はフランの目を見て答える。

「黒崎……一護。どうして、ここにいるの？」

「俺は、フラン、お前を助けに来たんだよ」

平然と、自分が幽閉されている部屋に現れた少年に驚いた。更に名乗っていない自分の名前を言われても驚いた。

しかしそれ以上に、あらゆる疑問の中でフランは、助けに来た……と言うセリフが一番の驚愕だった。そも見ず知らずの人がいきなり自分のことを助けに来た、と言い出すんだ。驚いて当然である。

「……どうして、私を助けに？」

「お前が俺に助けを求めて来たんじゃないかねえのか？」

そのセリフにフランは目を丸くする。

「私がいつ、どうやって、あなたに助けなんて求めることができたの？」

当然の質問である。

こんな牢獄の中で幽閉されている現状下で、人に助けを求める事なんて出来る筈が無い。

「夢だ」

だが、一護はその質問に答えた。

「夢？」

フランが怪訝な表情になる。

まあ質問の回答に夢とは、随分と意味不明も良いところだろう。

だが実質、本当に一護の答えは夢であっているのだから仕方ない。

「ああ、お前は俺の夢の中で、俺に助けを求めたんだ。荒唐無稽な話だから、無理に信じろとは言わねえよ」

「私がああなたの夢の中で助けを求めた……」

フランが少し疑惑の目で一護を見る。

「だから、聞かせてくれフラン」

一護は人差し指と中指の二本を立てフランに向ける。
もうまどろっこしいことは無しだ。

「この牢獄に残るか、ここから出て自由になるか、どっちか選べ」

二者択一を迫った。

それにフランは狼狽える。

「え、えっと……わ、私は、ここから、出たい……」

フランは小さい声で言った。

出たいと、正直な気持ちで言った。

「でも、私がここから出ると……お姉様や他の人たちに迷惑がかかるの」

フランは少し悲しそうに言う。

とても狂人になるとは思えない。

自分の姉を、他のみんなを思いやっているその気持ち、それは何の陰りもない無謬の思いだろう。故に、フランをどうにかして助け出さないといけない。

だからこそ一護は、どうにかしたい……いや、フランの狂人を倒す必要がある。

そうすることによって、その狂人の部分を抑え付けることができる
と思ったから。

「分かった。だったら、俺が今からお前と遊んでやる」

故にフランを自ら狂人化させる必要がある。

「お前の好きな遊びは何だ？」

「え、えっと……弾幕ごっこ」

ちよつとした刺激がフランを狂人にさせるなら、それを実際に目の
当たりにしなければ話が進まない。

「弾幕ごっこか。よっしゃ、んじゃ少しだけ——」

その瞬間だった——一護の頬を光のような速度で通り過ぎた弾幕
が引き裂いた。

避けることも、反応することもできない速度。

一護が戦慄するよりも先に、フランが立ち上がり、口を開いた。「ルールなんていらぬよ。一護が悪いんだからね。私を刺激するから」

フランの目が血のように赤く輝き、さつきまでの綺麗な瞳とは思えない殺意に満ちた瞳へと変わっていた。

そして表情も雰囲気も同じくだ。

そう、フランは先とは別人と化したかのように、狂気に満ちていた。

「——イチゴ、簡単二壊レナイデネ」

声のトーンまで少し変わっている。

ちよつとした刺激で狂人になると言っていたが、まさかここまで速く狂人になるとは思わなかった。

フランが狂気の笑みを浮かべ、スペルを唱える。

「禁忌『レーヴァテイン』！」

フランから巨大な炎の剣が現れ、それを握ると高く飛び、一護に向かって振り下ろした。

ここまでの動作に1秒と掛からなかった。

一護は即座に代行証を取り、黒い霊圧で体を覆う。

それにより一護の姿が死神のようになり、同時に右腕の霊圧を刀状に形成した。

瞬間には、炎の剣と霊圧の刀が空間を揺るがすほどの大激突を果たした。

「アハハハハ!! 私ヲ楽シマセテネ、一護——」

フランがその激突の中、無邪気な子供のように笑った。

*

その頃、地下部屋の前で待機する霊夢、レミリア、魔理沙、咲夜は激突する二つの大きな力を感じ取った。

「……始まったようね」

激突の力を感じ取って、レミリアが呟いた。

「一護がフランの運命をどう変えるのかしら?」

「お嬢様、何か見えたのですか?」

レミリアの呟きに、咲夜が反応する。

何が見えたのか……とは一体何だろうか？

「何も。でも、私の能力も100%当たる訳じゃないから分からないわ」

「なあ、お前の能力って何なんだ？」

会話からしてレミリアの能力が噛んでいるだろう。

故に魔理沙がそう聞いた。

レミリアは別に隠す必要が無いと判断したのか、魔理沙の質問に普通に答える。

「私の能力は“運命を操る程度の能力”。能力の説明は面倒だから省くわよ」

能力名は言ってくれたけど、能力説明が無しじゃ全然分からない。

「何にせよ、私たちは今、待つことしかできないのよ」

「……遣る瀬無いぜ」

*

「うおおおおおおお！」

鏢迫り合い——漆黒の刀と真紅の剣が軋り合う。

一護は胸が熱くなるほどの叫号を上げながら、フランの炎剣を弾き返した。

「——ッ！」

フランは自分の炎剣が弾かれたことにより、身体が仰け反り隙が生じる。

勿論、一護はその隙を見逃すようなヘマは犯さない。

瞬時にスペルを唱える。

「黒符『月霊幻幕』！」

無数の三日月状の弾幕が展開され、一気にフラン目掛けて放った。

しかしフランも自分の隙を押し殺し、間髪入れずにスペルを唱える。

「禁弾『スターボウブレイク』！」

フランから無数の弾幕が一護に降り注ぐように落ちてきた。それはさながらメテオが降り注ぐかのような勢いで。

その弾幕が一護の放った弾幕を次々と相殺させていく。

瞬間、フランはその間を狙い動き、牙を剥いた。

「——がッ、アアアアアッ！」

今の速度は音速の百倍を超えるであろう速度を行く、鉄の硬度も超える吸血鬼との正面衝突。そこに発生する運動エネルギーの爆発は、隕石の直撃を受けたのと変わらない。

一護の纏う霊子が消失していく。しかし霊子の膜がなければ、今の直撃で五体の粉碎消滅は免れなかったであろう。

「ツツツ——舐めんなアアアッ！」

一護は力一杯大振りに刀を薙ぐ。

凄まじい衝撃波と共にフランを吹っ飛ばし、態勢を整える。

「スゴイー・スゴイヨ一護！ 私、メチャクチャ楽しい！」

哄笑混じりに、フランが歓喜の声を上げる。

ああ楽しい、面白い。これが遊び、これが弾幕ごっこ。

これだから遊びは止められない。

フランが本当に狂気じみた歓喜に震えた。

「そいつは良かったな！」

一護は一気に跳躍し、上空から攻める。

しかし——

「ソレジャア、一護。コレナンテ、ドウカナ？」

途端に、フランは炎剣を消し、新たなスペルを唱える。

「禁忌『フォーオブアカインド』！」

フランがスペルを唱え終えると——四人に分身した。

「なッ!?」

一護は攻撃を急停止させ、目の前の現象に驚愕する。

一人でも厄介なフランが四人に増えたのだ。

その上、現状一護はあまり長期戦を望めない。何故ならここに来るまでに美鈴やレミリアと言った強敵と戦い、霊力が限界点を超えかけているのだから。美鈴戦での霊力は魔理沙の回復薬で回復はしたが、レミリア戦では更にそれ以上の霊力を消耗した。

故に、早めに片を付ける必要がある。

「イクヨ、一護！」

四人のフランから同時に弾幕が放たれた。

「黒符『月霊幻幕』！」

それに対抗するのは、再び放たれる三日月の弾幕。

だが一護はその弾幕を放たず、自分の周囲に展開したまま、一番左端のフランの方に跳んだ。

自分に飛んでくる弾幕は全て盾のように、己の周囲に展開してある弾幕に被弾し相殺させていく。こうすることによって、フランに近づくことを可能にしたのだ。

「考エタネ、一護。デモ、コウサレタラドウスル？」

左端のフランが不敵な笑みを浮かべながら、スペルを唱える。

「禁忌『恋の迷路』！」

フランから弾幕がぐるぐると回転される形で無数に放たれる。

これは一護の展開している弾幕だけじゃ防ぎきれない。

「だったら、黒斬『月牙天衝』！」

一護はスペルを唱え、月牙を左端のフランに向かって撃ち放った。

「アハハハハ！ ソレデ私ノ弾幕ヲ防ゲルト思ツテルノ!？」

フランがまるで馬鹿にするように笑う。

だがその笑みは一瞬で消え去ることとなった。

何故なら一護の弾幕が、フランの弾幕を全て掻き消していつていたからだ。

「ソナナ、嘘デシヨ……！」

フランが絶望的な表情になる前に、月牙がフランに衝突した。同時に空間に溶け込むようにフランが消失したのだ。

その光景に残り三人のフランが驚く。

一護は透かさず空中を蹴り、残り三人のフランのもとに向かう。攻撃に暇はない。

それを見たフランは油断せずに三人でスペルを唱えた。

「『禁忌『カゴメカゴメ』！』」

刹那、一護の周りに緑弾が縦や横や斜めに籠目状に並び、一護を完全に捕らえる。

一護は急停止し、直ぐにその弾幕に対応しようとするも、先に三人

のフランが動いた。

フランから黄色い大弾が放たれる、その質量は、並の弾幕の比ではない。

「しま——ッ！」

一護がスペルを唱える前に、黄色い大弾が一護に被弾した。

衝突すると同時に爆発が起こり、爆破の力が一護を覆い尽くす。

「終ワリカナ？ 一護」

爆発により発生した爆煙により一護の姿が確認できない。

だがフランがそう呟いた瞬間、一人のフランの周りに三日月状の弾幕が展開された。

フランは驚くも、逃げるのに遅れ三日月状の弾幕がフランを襲った。

纏めて被弾したフランは煙が消え去るように消失する。

「ヤッパリ、マダナノネ」

その時、一護が爆煙を霊圧で吹き消し、姿を現した。

額から血が流れており、所々ボロボロな状態だ。かなりのダメージを喰らったようだ。

「危なかったぜ。霊圧を纏って防いでなかったら、今頃この弾幕ごっこは終わってた」

どうやら霊圧を身体全体に覆い身を守ったようだ。

だが、フランの弾幕の威力が強かったのか、全てを防ぎきるのとは不可能だったみたいだ。

しかし残るフランは二人だけとなった。

「禁忌『レーヴァテイン』」

片方のフランがスペルを唱え、巨大な炎の剣を握る。

「一護、私ネ、今ネ……」

フランは途切れ途切れに言葉を発する。

そしてこの瞬間、明快に異変がフランの中に生じた。

「楽シイッテ感情ヲ通り越シテ、勝チタイツテ感情ニ変ワツチャツタ！」

そういうと、炎の剣を持ったフランは一護に向かった。

一護は霊圧による刀でそれに応戦するも、

「私モ忘レチャ嫌ダヨ、一護！」

炎の剣を持つていない、もう片方のフランがカードを取り出す。

「秘弾『そして誰もいなくなるか？』！」

スペルを唱えると、それを唱えたフランが消え、代わりに無数の弾幕が一護に向かって飛んできた。

炎の剣を持ったフランと無数の弾幕による二重攻撃。

ガギイン！ とフランの炎剣が一護に斬りかかる。

「クッ！」

一護はそれを防ぎながら苦悶の表情に変わる。

その炎剣、フランの力とは先よりも強い。

今のフランは楽しさより勝ちたいという感情の方が強いが故、抑えていた力が完全に全開になっているのだ。

一護が炎の剣を受け止めていると、もう一人のフランが放った弾幕が接近してきた。

それを見た一護は直ぐ様、左手でカードを取り出しスペルを唱える。

「黒斬『月牙天衝』!!」

フランの炎剣を受け止めている右手の刀から、月牙が撃ち放たれた。

それにより、急激な力の変化により、フランは月牙と共に後方に勢いよくふっ飛ばされた。

それを確認した一護は気を抜かず飛んでくる弾幕を躲し続ける。いや、この数の弾幕を避け続けるのは不可能だろう。故に弾幕を惜しまずに使い、最小限に避けながら身を守った。

フランは月牙と共に吹き飛ばされる中、炎剣を力一杯振るい、壁に当たる直前で両断した。

そして、再び一護に向かって飛んだと思うと——一護が炎剣により吹き飛ばされた。

「ガアッ！」

訳の分からない攻撃を受け、一護は地に落下していく。

しかし地に落下するよりも速く、暴狂の嵐が一護の腕を、足を、胴体を四方から打ちのめす。

空中で踊らされる一護は差し詰め竜巻に弄ばれる木の葉。いや、それよりなお酷い。

繰り返される特攻の神速の域。音速など四桁は超えている最速の連撃が、衝撃波を伴って肉体を引き千切りながら切り刻んでいく。

更に最悪なのが意図せずして聴覚を無用のものと変えた、この——
「ハハハハッハハハッハッハハ!!」

耳を掠めた風切り音。咆哮が連撃の後に辿り着く。

軽く十度は打ち据えた後になってから、ようやく連撃の絶叫が届くのだ。

「グアアアア!!」

一護はそのまま蹴り飛ばされ、壁に激突する。

神話の凶獣のようなフランの動きに、一護は全くついていけなく蹂躪された。

(クソツ、全く見えなかった……! こんな有りかよ!?)

ダメージは大きい。だけど、まだ戦える。

満身創痍になりつつ、ゆっくりと立ち上がる。骨が軋む、細胞が立つな立つたと訴えかけてきているのが分かる。

——けど、ここで勝たねえと、フランを助けられねえ。だから……

「負ける訳にはいかねえんだよ!」

一護は無理を超え、スペルを唱える。

「黒斬『月牙天衝』!」

黒い月牙が炎剣を持つフランに放たれる。

威力は高いが、それは当たればの話。

フランは再び光速で動き、

「ホラ、コツチダヨ!」

月牙を避け、一護を引き裂かんと炎剣が振り下ろされた。

「ぐううウツ!」

ガシン! と炎剣を奇跡的に、否、経験則にも似た行為でフランの炎剣を一護は間一髪で霊圧刀を使い防いだ。

一護の足元が陥没し、足が悲鳴を上げている。

噛み締めた歯が碎ける勢い。両手の爪がめくれあがり、骨に亀裂が走っていくが一切無視する。

——気合入れる。全霊を振り絞れ。ここで退いたら全てが終わる。みんなが信じてくれてるんだ。みんなが待っていてくれてるんだ。

霊夢は何も言わずに信じてくれた。魔理沙は心配そうにしていたが最後まで見守ってくれた。レミリアは敵だったが、自分を信じてくれた。咲夜は会ったばかりで会話どころか喧嘩を最初にしたが、やっぱりあいつも心のどこかでは自分を待っていてくれている。

それにルーミア、チルノ、大妖精ともまた会うって約束したんだ。だから——

「見てろよ。絶対に俺が勝つ！」

破壊の炎剣を防ぐ中、一護は吠えた。

「狂気の塊のテムエに負けてたまるかよッ！」

全身全霊で再びスペルを唱える。

「黒斬『月牙天衝』！」

月牙天衝による急激な運動エネルギーにより、フランは再び後方に月牙と共に吹っ飛ばされた。

「アハハハハハハ！ コンナモノ、モウ効カナイヨ！」

炎剣を大きく振り、月牙を両断しようとするフラン。

だがその前に——

「まだまだ！ 黒斬『月牙天衝』！」

二発目の月牙天衝が、フランに向けて放たれた。

二重の月牙による相乗効果により、月牙の威力が莫大に膨れ上がる。

「!?ソナナ——」

流星のフランも二発も防ぎきる事はできず、月牙に飲み込まれた。ドゴオオオンッ！ と凄まじい爆発が起こりフランは爆風と共に消え散る。

それと同時に弾幕も止んだ。

「これで、三人……」

もう体力も霊力も既に限界点を超えている。もはや立っていることじたいが、奇跡に近いであろう。

そんな中、本物のフランが一護の目の前に現れた。

「一護、本当ニスゴイヨ。私ヲココマデ苦戦サセルナンテ」

狂気状態のさすが、冷静にフランが一護に感心の声を上げる。

そのはずだ。今まで、人間とここまで対等に遊んだ事がないからだ。

「デモ、私ノ本気ハコレカラダヨ」

そう言うのとフランが右手を前に突き出し、手の平を上に向ける。

すると、そこから目玉のような赤い物が現れた。どこか不気味な雰囲気があり、まるで自分の核を敵に握られている感覚が生まれる。

「何だ、それ？」

「知ツテル、一護？ 全テノ物質ニハ目トイウ最モ緊張シテイル部分

ガアツテ、ソコニカラ加エレバ簡単ニ物質ヲ破壊デキルツテコト」

「目……だと？」

「ソウヨ。私ハネ、ソノ目ヲ自分ノ手ノ上ニ作ルコトガデキルノ」

それを聞いた一護は目を見開く。

フランの説明している意味が理解できたからだ。

「まさか、テメエ……！」

「理解ガ早クテ助カルヨ、一護」

一護は慌ててスペルカードを唱えようとする。

もしフランの言っている言葉が本当なら、あれを握り潰されたら――

「遅イヨ」

冷酷な笑みを浮かべながら、フランはその目を軽く握り潰す。

「――きゅっとしてドカーン」

何の躊躇もなく、ちよつと握力を加えただけで目が粉碎された。

その瞬間――一護の身体が爆発粉碎した。

霊子の膜も何も関係なく、脇腹あたりが破壊される。否応などない。破壊されるべくして、破壊されたのだ。

「ぐああああアアッ!!」

絶叫が響き渡り、一護は倒れ伏す。

急に脇腹が破壊されたことにより、生命力までも限界点を超えてしまったのだ。脇腹から鮮血が流れだし、床を赤色に染め上げ続ける。

「……一護、モウ終ワリナノ？」

そんな状況を見て、フランは少し悲しそうに倒れている一護に語りかける。

勿論、反応はない。呆気のない終わり方だ。

「ヤッパリ、終ワリナノネ。マタ、私ハ壊シチャツタ」

フランは自己嫌悪に陥りだした。

ああ、やっぱりそうだ。自分を抑えられない。人間はちよつと本気を出したら簡単に壊れてしまう。柔肌を撫でただけでも砕けてしまう。

この世は総じて繊細に過ぎない。

だから——悲しい。

私は自分の狂気に一切抗えない。故に全てを破壊してしまう。

「……私ハ、ヤッパリココニ居タ方ガ、イインダヨ」

フランは一護に背を向ける。

もう終わった。そして結論に至った。自分が自由になるなど、不可能だと。

瞬間だった。

背後から、物音が聞こえた。それは誰かが立ち上がる音だった。

「まだ、終わってねえぞ……！」

その声に、フランは振り返る。

そこには血みどろになっている一護が、フラフラながら立ち上がっている姿が確認できた。

「」

その姿にフランがパアッと明るくなる。

「ヤッター！ 壊レテナカッター！」

危ない発言だが、嬉しそうだ。

一護はその表情を見て、口を開いた。

「……何で、さつき、悲しそうな顔してたんだ？」

「！」

その言葉にフランは目を見開く。

同時に笑顔が消えた。

「お前は、俺に勝ちたいんじゃないかったのか？」

「カ、勝ちタイヨ……」

フランは小声で答える。

「だったら、何であんな悲しそうな顔すんだよ？」

「ソ、ソレハ……」

フランは一護から顔を背ける。

戦いの中、フランは勝ちたいと思った。しかし心のどこかで、こんな勝ち方は望んでいなかった。勝った後もお互い笑い合える、そんな勝ち方をしなかった。

それを一護もどこかで理解し、

「お前は、あんな勝ち方を望んでねえんだろ？」

言ってやった。

真髓を突いてやった。

故にその言葉にフランは目を丸くする。

「そうじゃなきゃ、あんな顔する訳ねえもんな」

フランは背けていた顔を再び一護の方に向ける。

「フラン、お前は自分の力が恐えか？」

「エ……？」

急な問いかけにフランは狼狽える。

「自分の能力が恐えか？ それとも、自分の狂気が恐えか？」

一護は一気に沢山の事をフランに問いかける。

その言葉はかつての仲間に言われたセリフ。自分もフランのように自分の内なる力に怯えていた時に、叱責と同時に自分を信じてくれた仲間のセリフだ。

フランは一護の言葉を聞き逃さず、そして答える。

「私ハ……全部恐イ……。ダカラ、ココカラ出タクナカッタ。ココカ

ラ出タラ、私ハ、沢山ノ人ヲ苦シメルカラ」

それを聞いた一護はゆつくりと口を開く。

「だったらよ、自分の力が恐れりや、それを抑えるくらい強くなりやいい。自分の能力が恐れりや、もうそれを使わないとみんなに誓えばいい。自分の狂気が恐れりや、それすらぶつ潰すまで強くなりやいい。例え他の連中がそれを信じなくても、俺はお前を最後まで信じるぜ、フラン」

その言葉を聞いたフランは狂気の状態から、徐々にいつもの状態に戻る。

「まだ会って、急にこんなことを言うのも変だけどよ。お前と弾幕ごっこをして、お前の剣に触れられた時、お前からは悲しさばかりが俺に流れ込んできた」

フランから戦いで感じたものは、自分を救ってくれる光。だけどそんなものは淡い期待であり、有り得ない夢物語だとフランは踏んでいた。

故に悲しみしか生まれないのだ。

だけど、やっぱり心の奥底では……

「お前は……その悲しみから抜け出すために、必死で心の中で願ってたんじゃないのか？ 助けてほしいって。自分にも明るく、温かい未来が来て欲しいって」

一護の言葉を聞いて、フランは――

「……私は……誰かに、助けてほしかったの。でも、何百年願っても、誰も来てくれなかった。だから、私は……」

フランの紅い瞳から涙がこぼれてきた。

それこそがフランの渴望であり、真に願うこと。

しかし何百年願っても、誰も助けになんて来てくれなかった。光なんて、ただの幻影に過ぎないと思った。

だけど、

「最初に言っただろ。フラン、俺はお前を助けに来たんだぜ」

一護はフランに優しく微笑みかける。

そう、それこそフランが求めた光だった。幻影なんかじゃない、真なる光。

フランは涙を流しながら、自然と少女らしい笑顔を向けた。

「来いよフラン。最後の弾幕ごっこだ。ここで、お前に眠る狂気の器を超えてみる。いや、もう超えているだろうが、不安だろう。まだ残っているんじゃないかって。だけど心配すんな、俺が全部、受け止めてやる」

そうだ。

これで終わりにしよう。

そして証明するんだ。フランが自分の狂気を乗り越えてみせるって想いを。乗り越えたっていう証左を。

「狂気なんてもんは、自分の心が弱いから発生するんだ。俺も昔、そうだったように」

過去、一護は自分に眠る内なる虚を恐れた。だからフランの気持ちは誰よりも分かる。だけど、このままではいけない。

フランには頼る仲間が、友が絶対に必要だ。何故ならそれこそが、自分を優しく支えてくれるから。

「ルキア……」

かつての仲間の名を口にする。

その人物こそ一護を救ってくれた、大切な仲間なのだ。

「だから今度は俺が、お前を支える友達になってやる。さあ来いよフラン。お互いに笑い合える戦いにしようぜ」

それを聞き、フランは、

「う、うん！」

フランが笑顔で答えた。

刺激による狂気化もしない。ああどうやら、やっぱりフランはもう狂気などと言うものは既に乗り越えている。自分にも光と言うものがやって来たからだ。

だったらもう安心だ。

最後の、紅霧異変最後の弾幕ごっこだ。

二人が最後の笑い合える戦いが始まる刹那だった。

——フランに向けて、一発の小弾が打ち抜かれた。

フランから笑みが消え、そのまま冷たい地に倒れ伏す。

何だ、一体、何が起きた？

訳が分からない、理解できない。一護がこの状況に、全く頭が回らない。

「フラン!!」

一護は倒れたフランに駆け寄る。

「黒崎一護」

不意に自分の名を呼ばれ、足を止める。

そして、声のした方を見る。

いつからそこに立っていたのだろうか、一人の男が佇んでいた。

「誰だ……テメエ!?!」

「私は刹蘭。君を頂きに来た」

第12斬【正体不明の男】

「俺を頂きに来ただと……!?!」

黒崎一護は男に向かって、声を震わせて言う。これは恐怖で震えているのではなく、怒りで震えているのだ。

そんな一護の動揺にまみれている姿を見て男——刹蘭は微笑む。

刹蘭は深い闇のような漆黒の髪を肩の辺りまで伸ばし、少し癖のある髪型をしている。瞳の色は董色。服装は白と黒を基調としており、黒の長ズボンに白い長シャツという至ってシンプルな服装だ。

「いきなり現れて何ふざけたこと言っただよー!」

一護は刹蘭に怒りをぶつけた。

フランはようやく自分の全てを清算できたはずだった。闇から、悲しみから、孤独から抜け出せたはずだった。

——それなのに、急に現れたこいつが!

一護の怒鳴っても、刹蘭は常に笑みを絶やさない。まるで一護の言葉など心底どうでも良いかのように。

「フランはやつと光を見据えて生きていけた……!　なのにテメエ、一体何のつもりで邪魔しやがった!?!」

返答次第では、いや最早そう考えるよりも先に、刹蘭が口を開いた。「それがどうしたんだい?　随分と下らないことで簡単に沸点が上がるな黒崎一護」

刹蘭の言葉を聞いた一護は問答なく、スペルカードを取り出した。無意識のうちに、怒りが臨界点を突破したせいもあるが故に、これは考えない暴力。

「テメエ、許さねえ!　黒符『月霊幻幕』!!」

一護がスペルを唱えると、三日月状の弾幕が刹蘭を襲った。フランとの戦いで霊圧の殆どが無くなっていたが、怒りと言う感情だけで強力な弾幕を放てた。

刹蘭は躲そうとする動作も一切見せず、一步も動かずに佇む。

故に弾幕の被弾は目に見えていた。

怒りのみを乗せた一護の弾幕は単純な暴力。故に強く、そこに救済

の余地などは一切ない。

しかし――

「その程度か?」

傷一つ、衣服や髪の一本にすら乱れが無い。

自分に結界でも張ったのかと一護は思ったが、いいや違う。結界を張れば刹蘭からは何らかの力を感じるはずだ。それが一切感じられないということは……単純なスペック。力量の次元が違いすぎるのだ。

「体力も霊力も底を尽きた状態で、これ程の弾幕を放出できれば確かに秀逸している。だがこの程度。取るに足らん」

滑稽な一護の姿を見て嘲笑するかののように、刹蘭はすつと指先を一護の方に向ける。そこから現れるは、小さな小弾。

しかし内包されているエネルギーが並外れて違うのが、一瞬で理解できるほどの圧力を感じられる。

それが何の迷いも無く、一護の腹部に被弾した。

「ガアアアアッ!!」

無造作に一護の身体は壁面に激突し、そのまま崩れ落ちる。

見えなかった。反応できなかった。

元々フランと戦ったこともあり、あれを避けるのは至難の業だが……それを差し引いてもあれを捉えるのは不可能だっただろう。

油断していたとは言え、フランに簡単に直撃を加え、一撃で沈めてしまった。

その攻撃は余りある。最早、一護が例え全力を出しても勝てるかどうか危うい。

「まあ心配することはない。頂くとと言っても今じゃない」

カツカツと、靴音を立てながらゆっくり一護に近づくと刹蘭。

「君が死神の力を完全に取り戻した時……いいやそれすら超越した時、君を頂く」

刹蘭が語りかけてくる中、一護は壁を支えにゆっくり立ち上がる。

今は刹蘭の言葉を聞いている余裕など無い。

(……くそ、こいつ、一体何者だよ!?)

徐々に一護を纏っているれ霊圧が消滅していく。
戦うことはもう不可能だろう。

しかしこいつをタダで帰らせる訳にはいかない。一矢報いなければ、自分の気が晴れない。

その瞬間——地下室の扉が強く開け放たれた。

刹蘭は歩みを止め、扉の方に瞳を向ける。

「必殺『ハートブレイク』！」

向けたと同時に、光の速度で穿たんと紅い槍が自分目掛けて投擲されていた。

だがそれすらも刹蘭は何の驚きもせず、槍が当たると同時にいとも簡単に碎け散ったのだった。

「随分出てくるのが遅かったな。レミリア」

刹蘭が呟くと同時に、地下室の中に外で一護の帰りを待っていたレミリア、霊夢、魔理沙、咲夜が入ってきた。

霊夢と魔理沙は入ってくるなり、血みどろな一護の姿を見て駆け寄る。

「どうして、あなたが此処に居るのかしら？」

殺意の瞳を向けながら、レミリアが刹蘭に問う。

「黒崎一護を実際にこの目で見て、干渉したかっただけだよ」

平然とその質問に刹蘭が答えた。

常人なら精神が圧迫されかねない、レミリアの殺気の中で全く意に介さずに答えた。

「……お嬢様、あの男は何者なんですか？」

咲夜が刹蘭を警戒しながら、横に立つレミリアに尋ねる。どうやら咲夜も刹蘭のことを知らないようだ。

「あなたじゃ聞いても理解できないわよ。それに、私もあの男のことはほとんど知らないわ」

事実、レミリアは刹蘭のことをほとんど、いや全く知らないに値するだろう。元より知りたくなし分かりたくもない。

それが刹蘭と言う男だ。

「……………」

刹蘭はそんな状況の中、二人に背を向け歩き出した。

「どこに行くきょ？」

レミリアが歩き出した刹蘭の背に向かって、言葉を投げかける。
「帰るんだよ。用は済んだことだしね」

瞬間、刹蘭の身体が、まるで幻だったかのように消え始めた。

このままでは逃げられてしまう、そう思いつた刹那……

「霊符『夢想封印』！」

複数の光弾が刹蘭目掛けて放たれた。

「ッ」

この時、刹蘭は初めて表情を少し歪ませた。

何故ならこのスペルは、自分にとって忘れられない忌むべきものだったからだ。

光弾が刹蘭を完全に捉え包み込む。凄まじい衝撃波と共に砂塵が舞った。

「逃がさないわよ。あんたには色々喋ってもらいたいことがあるからね」

霊夢が刹蘭を見据えて言う。どうやら霊夢が放ったスペルのようだ。

砂塵が晴れると無傷の刹蘭が現れた。

全くの無傷。薄皮一枚どころか、衣服の汚れすら全く見受けられない。レミリアの真紅の槍も、一護の弾幕も、霊夢の十八番の夢想封印も、全てが効いていない。頑強さというより別位相の物理を目にしたようだった。

例えるなら、絵の中でどれだけ猛火を描写しようと、それが現実の人間を燃やせる訳がないのと同じ。

立っている場所がそもそも絶望的に違いすぎる。

そして絵に現実を害せなくとも、現実が絵を破壊することは容易にできる。

つまり高次元（現実）から低次元（絵）への攻撃は、赤子の手を捻るよりも通じやすい。

それが刹蘭と言う男なのだ。

「初見の私にか？」

「ええ、そうよ。あんたからは今までに感じた事の無い、嫌な“感じ”がするの。ここで見す見す逃したら、これから先、何か大変な事になりそうな予感がするのよ」

「……博麗の血か」

呟くと刹蘭は興味、悦情、諧謔に満ちた瞳で全員に発言する。

「良いだろう。私に手傷を一つでも負わせたなら、君たちに“全て”を話そう」

「全てだと」

その言葉に真っ先にレミリアが反応した。

「ああそうだとも。私に傷一つでも付けてみるよ。いや、むしろ超えたいとでも思ってくれよ。それぐらいの気概がないと、わざわざこうしているのも無駄に終わる。

——さあ来いよ、吠えてみるよ。神様の法則すら歪める、博麗とそのお仲間達」

世界が歪み、解脱していく。

その瞬間、刹蘭から陰気が消え去り、戦神としての“己の法則に塗り替えられた”。

来い、立ち向かってみると、刹蘭からの念を全員が感じ取った——
「上等よ！ 随分と舐めた口きいてくれるじゃない！」

誰よりも先に、爆発的に霊夢が動いた。

「霊符『夢想封印』！」

スペルを唱えた瞬間、複数の光弾が刹蘭目掛けて放たれた。

「だよな。やっぱり君から来るわけだ。良いよ、私は酷く嬉しい」

内包された霊力は破壊しれない。今まで見た霊夢のスペルとは思えない程の力だ。

光弾が次元すら歪ませながら、降り注ぐが——

「だが、それでは駄目だ」

まるで蠅を追い払うかのような気軽さで、霊夢の弾幕を簡単に掻き消した。

刹蘭にとって、絵の中の猛威など気にするに値しない。絵の中でだ

れだけ強くても、現実では全く頭現できないのと同じだ。

しかし諦めない。絵の中の存在が必死に、絵の外の存在を倒さんと尽力する。

「恋符『マスターズパーク』！」

霊夢に続き、魔理沙がスペルを唱える。

極太のレーザーが、夢想封印に続き発射された。

その威力はこの地下室をも木っ端微塵に破壊しかねない猛威。単純なパワーだけならフランや一護ともタメを張れるだろう。

だがそんな一撃も、

「弱い。その程度では到底私には及ばんよ」

刹蘭にとつては戯れ以下の攻撃。

片手で握り潰され、完全に圧殺された。魔力の残滓すら一切残さず、綺麗さっぱり消滅させられたのだ。

「獄符『千本の針の山』！」

暇など与えず、刹蘭に猛攻撃を仕掛けるべくレミリアがスペルを唱えた。

まるで千本の針山から飛来するが如く、無数のナイフが刹蘭を穿つため瀑布の勢いで発射される。

「私たちも手伝うわよ、咲夜」

「はいお嬢様、仰せのままに」

レミリアと咲夜も戦線に加わる。

これで霊夢&魔理沙&レミリア&咲夜VS刹蘭——一護はその戦いを壁にもたれながら、遣る瀬無い気持ちで見ている。今の身体では、戦いに加わることなど不可能なのだ。

「あなたには私も聞きたいことが山程あるわ。それに……」

レミリアが倒れているフランに瞳を向け、

「私の大切な妹を傷つけた罪は重いわよ！」

地下室に閉じ込められているとはいえ、レミリアはフランを何よりも誰よりも大切に思っている。故に自分の大切な妹を傷つけられて、怒り心頭しない訳が無い。

そして、四対一の怒涛の弾幕勝負が始まったのだった。

*

それから数分後……一護は目を疑った。

あの博麗の巫女であり異変解決のスペシャリストである霊夢が、弾幕ごっこを得意とする魔理沙が、時間を操り霊夢と拮抗した咲夜が、吸血鬼であり大異変を起こしたレミリアが……刹蘭に手傷すら負わせられず、逆に押されていた。

四人ともかなり疲弊しているのに対し、刹蘭は息切れ一つしていない。戦う前の状態と全く変わっていないのは勿論、更に恐ろしいのがその場から一歩たりとも動いていないのだ。

「その程度か？ 君達の実力は」

あー詰まらん、興醒めも甚だしいと刹蘭は少々気落ちする。

「少し残念だ。君達はもう少しやってくれると思ってたんだがな」

そして霊夢の方に目をやり、

「特に博麗霊夢。君には落胆した。君は君の母親のようにはなれないようだ」

その言葉を聞いた霊夢は目を見開いた。

「あんだ、何で私の母上を知っているの!？」

霊夢が身を乗り出して聞く。

自分の母親を目の前の男が知っている。その事実が、驚かすにはいられない。

「何でだって……それは」

刹蘭が霊夢の質問に答えようとした瞬間――

氷の弾幕が刹蘭に飛来した。

刹蘭はそれを呼吸すらのが必然的なように、軽く躲す。同時に弾幕が放たれてきた方角を見据えた。

霊夢達も同じように、その方向を見る。

そこには湖で別れた、ルーミア、チルノ、大妖精がいた。

「何で、お前らが……？」

一護が三人の急な登場に目を丸くする。

それは霊夢も同じだった。予想外過ぎる登場に、驚くほかに何も無い。対するレミリアと咲夜、魔理沙は初対面のため意味が全く理解で

きていないのは同じだった。

そんな中、チルノが一步前に出て大仰に言葉を吐く。

「最強のあたいが最強のタイピングで登場よー!」

最強のタイピング……これまた意味の分からない言葉だ。

しかもチルノの登場及び、素っ頓狂なセリフを放ったため緊張感が消えかけていた。

「一護さんの霊力を辿ってここまで来ました。勝手なことをしてごめんなさい」

と、大妖精が言う。

「……誰だい、君たちは?」

対する刹蘭はいつも通り笑みを向けながらチルノたちに語りかける。

「あたいは最強の氷精、チルノよ!」

胸を張って答える。

そんなチルノとは違って、大妖精とルーミアは普通に名乗った。

「……ルーミア」

刹蘭はルーミアと言う名前を聞き、少しだけ目を見開いた。

「ルーミア……これは偶然だね」

「へ?」

ルーミアは自分の名前を言われ、少し驚く。

その瞬間……刹蘭はルーミアの前に一瞬で移動し、ルーミアを捕らえた。

「ルーミア!」

一護は動かない体を無理に動かし、ルーミアを助けようとするも……先に妖精二人が動いた。

「私の友達を離せえ!」

「ルーミアちゃんをどうするつもりですか!?!」

チルノと大妖精が刹蘭に向かって少しだけ弾幕を放つ。放ち過ぎたら、ルーミアに当たってしまうが故、全力が出せなかったのだ。

刹蘭はその弾幕を軽く避けると、全員から距離をとる。

「ルーミアを離しやがれ!!」

一護は赫怒の念を放ち、駆け出そうとするも、今まで蓄積したダメージにより激痛が襲いかかった。

「んーーーーー！」

ルーミアは口元を刹蘭に抑えられており、言葉を発することが出来ない。

「ちようどいい、ルーミアを返して欲しければ、時計台の上に来るといい」

そう言うと、刹蘭はルーミアと共に姿を消した。

それはまるで、瞬間移動したというより、空間移動したかのような異次元の消失だった。

「くそ……ッ！」

一護は怒り任せに歩き出す。しかし激痛に耐えているのが傍目でも分かる足取りだ。いつ倒れてもおかしくはない。

なぜ刹蘭がルーミアを連れ去ったのかは分からないが、急いで助けに行かないといけない。

「どこに行く気、一護？」

そんな一護を見て、レミリアが言った。

「決まってるんだろ。ルーミアを助けに行く」

「そんな体で？」

「ああ」

一護が一度決めたら曲げない……と、直感的に気付いたレミリアは、次にチルノと大妖精の方に目を向ける。

「その二人。あなた達は一護の味方なんですよ？」

「そうよ。最強のあたいが唯一認めた男よ」

威風堂々とチルノは答える。

「そう、なら一護の援助をお願いできるかしら？ どうせ止めたって効かない男だしね」

「そんなこと、いわれるまでも無いわよ」

チルノと大妖精が一護に駆け寄る。

「それじゃあ、私たちも向かいますようか。 戦闘中はあの二人に一護を任せてね」

*

そして七人は時計台の上へとやって来た。足場が屋根の上ともあり悪い。しかし七人にとって足場など気にする問題など無いだろう。問題といえば、目の前の刹蘭だろう。

ルーミアを抱えており、現状、人質にもなりうる。しかもルーミアに意識は全くない。瞳を閉じており、一切反応を示さないからだ。「全員で来たのか。良い心がけた。この状況下、その二人の妖精の力も大切だからな」

刹蘭が七人を確認すると、挑発じみた口ぶりで言葉を発する。

「臆病者と言いたいわけ？」

真つ先に霊夢が反応した。

「そう聞こえたのなら訂正しようか、博麗霊夢」

刹蘭は微笑みながら言う。

この笑みは先とは違い、何かを企んでいるように見える。

いや、企んでいた。

「それより、君達に面白い物を見せてあげよう」

刹蘭がルーミアの頭に付けている赤いリボンに触れる。

「さあ、復活の時だ。——ルリミア」

スツと、刹蘭が赤いリボンを取り外した。

その瞬間——天を引き裂く赤黒い妖力が立ち上がった。

「何なの一体!？」

その余波は凄まじいもので、まだ解除していない紅い霧をも消し飛ばし、空にある周囲の雲は総じて滅び散った。

刹蘭は開放すると、距離をとる。

「全盛期の頃とは程遠いが、封印は解けたか」

刹蘭が呟いた瞬間、天を引き裂いた妖力が徐々に消え去り、そこからルーミアが現れる。

「……………」

しかし現れるはずのルーミアの姿が、ルーミアではなかった。

金色の髪は腰まで伸びており、背中には悪魔を連想させる漆黒の大翼。容姿も、少女ではなくまるで欠点の欠片もない美麗な姿。

その瞳は地獄の底めいた黄金の光。見るもの全てを焼き尽くすほどの瞳。

「ッ！」

七人全員が、その姿を見て形容し難い重圧に襲われた。

天に亀裂が走り、紅魔館が、湖が、大地が叫んでいる。ただの存在感だけで、この重圧が全くもって洒落にならない。

「ようやく出てこられたわ。あの忌々しい女に封印されて幾星霜……やっとな自由になれた」

フラン以上に、いやフランが可愛く見えるくらいの狂気を浮かべながら、目の前の七人を見る。

「さて解放されたばかりだし、ちよつと遊びましょうか。ああ心配しなくてもいいよ、ただの殺し合いだから」

その発言と共に、全員が骨が軋むほどの重圧の中、構える。

こうして紅魔異変、最後の戦いが始まった。

第13斬【夜の神・ルリミアVS暴走一護】 十番外編

《1》

「何なんだよ、テメエ……!?」

一護が変貌したルーミアの姿を見て目を丸くする。

今のルーミアは、姿も雰囲気も完全に変わっている。簡単に例えるなら、フラン以上の狂気に、レミア以上の圧。

まるで生きている立ち位置が違う存在。別位相より現実干渉しているような未曾有な感覚。

それが目の前に立つ、女だ。

「彼女はルリミア。幻獄七夢卿（セプテムカールダ）の一人だった女性だよ」

一護の疑問に、刹蘭が答える。

ルリミアの姿を見て、どこか楽しんでいる口調に表情だ。

そしてその言葉を聞いた霊夢が目を見開いた。

「幻獄七夢卿ですって!」

まるで禁忌の名称を聞いたが如く、驚愕の表情へと塗り替えられる。

「どうしたんだよ霊夢？ 幻獄七夢卿って何か知ってんのか?」

幻獄七夢卿と言う単語に驚きの声を上げた霊夢に、一護がそう尋ねた。

「……幻獄七夢卿は、私の母上が唯一、恐れていた組織よ」

怯えたように、冷や汗を流しながら答える。

こんな霊夢の姿は、一護も、そして長年の付き合いである魔理沙ですら見たことがなかった。

「そうか、やはり博麗霊華は君にそのことを伝えていたか。存外、賢明な判断をしたということか」

「あんだ、私の母上の名を軽々しく口にしないで!」

霊夢が怒りの形相で言う。

自分の母親の名前を、敵に口にされた事に苛立ったみたいだ。

博麗霊華……どうやら、話の流れからするに、その名が霊夢の母親

の名のようだ。

更にそれを聞いたルリミアが霊夢の方を見て口を開いた。

「へエ、あんた博麗霊華の娘なの？」

「だから、私の母上の名を軽々しく……」

霊夢が再び同じことを言おうとすると、ルリミアがそれを遮るように言っってはならないことを言う。

「——で、博麗霊華は死んだの？」

その一言に霊夢は口を閉ざし、俯いた。どこか悲しげな表情に見える。

「……そう、死んだのね」

ルリミアが霊夢の表情を見て察したのか、最悪の結論を言い述べた。

死んだと——。

「それは酷くガツカリだわ」

その言葉に霊夢は顔を上げる。

敵であるルリミアが、霊夢の母親の死に本気で気落ちしているのだ。過去に何か因縁があったのだろう。故に次に発言する言葉は——

「私が殺すはずだったのに。私を封印して死ぬなんてね」

「どういうこと……？」

「私は博麗霊華の手によって封印されたのよ。その赤いリボンのお札を媒介にね」

ルリミアが剣蘭の持つお札を指差す。

どうやら霊華に、赤いリボンのお札の力で封印されていたらしい。「まあいいわ。だったら同じ博麗の者を殺して、私が博麗より上だっ
てことを証明させてあげるわ」

そういうと、ルリミアの目が覇者の色に変わる。何百年何千年で辿り着けるような境地にはない、遍く全てを滅尽せんと動く霸王の領域。

同時に一護は直感する。

こいつは今まで会った敵とは違う。グリムジョーとも、ウルキオラ

とも、藍染とも。敵とは言っても、敵の力量を推し量るなり、想像するなりはできた。

しかしルリミアは全く違う。

人が宇宙の広大さを測ることができないように、一護たちの目にはルリミアが人の形を模した別の宇宙にしか見えなかった。

「さあ、見せてもらうよ。博麗の血を継ぐ者……そして、黒崎一護」
刹蘭がそう呟くと、持っていた赤いリボンを放り投げた。

*

「終焉無き月夜の焰——ルリミア・セヴンテイル。さあ来なさい。私の世界が全てを塗り替えてやるわ」

ルリミアの世界法則が“何か”を塗り替えようと拡大する。

敵の巨大すぎる密度だけで、本来なら一護たちは完全消滅しても不思議ではないどころか必然だったであろう。

しかし封印の解除は完全ではない。

霊華の封印は特殊なもので、封印されている間、急激に力を消失していく。その消失率は並の妖怪なら一秒で存在そのものが消滅してしまうほどだ。

だがルリミアは十年以上封印されても、全く衰えを見せていない。

これがルリミア、これが幻獄七夢卿の恐ろしさなのだ。

一人一人が世界法則そのもの、宇宙そのものと言っても過言ではない敵だ。

「神術『吸血鬼幻想』！」

「星符『メテオニックシャワー』！」

そんなルリミアに対し、真っ先に動いたのはレミアと魔理沙だった。

二つのスベルによる豪雨のような弾幕がルリミアに襲いかかる。

「悪くはないと言ったところかしらね」

自分より下位の攻撃など避ける必要もないが、霊華の封印の効力がどう働くか分からない以上、ここは避けるのが得策だろう。

「ここは『法』に従い、スベルで行こうかしら」

そう呟くと、ルリミアの手にカードが現れた。

「夜闇『深淵の道』」

ルリミアの周囲に漆黒の弾幕が展開され、自分に向かってくる弾幕を悉く粉碎していく。この圧倒的な力を前に蹴落とされると思ったが――

「隙あります」

咲夜がルリミアの背後をとっていた。

時間停止により、いとも簡単に背後をとったのだ。

ルリミアが後ろを振り向こうとするも、

「遅い、穴あきにしてあげるわ！ 幻符『殺人ドール』！」

咲夜がスペルを唱えると、大量のナイフがルリミアに放たれた。

ルリミアは避けるのに遅れ、数本のナイフが体に突き刺さる。

「ほう、私にナイフなどが刺さるとは、やはり博麗霊華の仕業か。いやそれ以前に、人間如きの時間停止に抗えなかった時点で、私の弱体化は見るも無残だな」

自らが一つの世界であるルリミアは、時間軸すらも個別に存在するがゆえ、時間を操る能力などは一切通じないはずだった。だがそれが霊華のせいで著しく弱まっている。宇宙規模までの弱体化……それはそこに上り詰めた者でしか確認できないであろう領域だ。

だがしかし、ナイフが何本も刺さったにも関わらず、一切苦悶の表情すら見せずにいる。

「次行くわよ！ 霊符『夢想封印』！」

霊夢が更に追い討ちをかけるよう、スペルを唱えた。

複数の光弾がルリミアを滅却せんと一瞬で包み込む。

瞬間、爆発と共に爆風が舞い起こった。

「やったか!？」

「分らないけれど、恐らくはまだ」

魔理沙の問いに霊夢が即答した。

恐らく、いや確実にこの程度では倒せていないだろう。

その証拠に、爆煙が勢いよく掻き消された。

「ッ！」

瞬間、晴れた場所から無傷のルリミアが現れた。

そして更に驚いたのが、咲夜が刺したナイフ傷も綺麗さっぱり消えてなくなっていたのだ。

「強いねエ。けど、無駄な体力を使っただけだったね」

ルリミアが不敵な笑みを浮かべて言う。

「どうして、無傷なのよ。咲夜が確かにあなたに攻撃を加えたはずよ」

レミアが睨みつけながら言った。

それに対しルリミアが悠々と答える。

「そうだな、教えてあげよう。私の能力は『夜を操る程度の能力』。

私は自分の好きな時に朝から夜に変えたりできるんだよ」

ルリミアが自分の能力を言う。

だが、傷が治ったこととは関係ないように思える。

「その能力でああなたの傷が完治したとでも?」

それを聞いたレミアが怪訝な表情で確認する。

「そうよ」

ルリミアが微笑みながら、あっさりとは肯定した。

「けど、能力だけのお陰じゃないわよ。私の特異体質『月夜大星(オレイオス)』の力でもある」

「月夜大星……?」

「そう。月夜大星とは私のもう一つの異能。夜の間は、私がどれだけ傷を負おうが、死のうが、消滅しようが、例え因果律を操ろうが、直ぐ様元通りに戻すことができるのよ」

月夜大星——その異能が有る限り、夜の間はどれだけ倒そうが意味がないということだ。それに、例え朝まで持ちこたえても、ルリミアの能力で夜に変えられてしまう。

これは、かなり厄介だ。

「さあ、すぐに終わらせて上げるわ」

ルリミアがカードを取り出す。

その瞬間、ルリミア目掛けて黒い弾幕が飛来した。

「……………」

しかし身体を少し逸らし、黒い弾幕を躲しきり、飛んできた方向に瞳を向ける。

そこには満身創痍ながらの一護が立っていた。

「俺を、忘れてんじやねえぞ」

既に立っているのが有り得ない状況下なのに、弾幕を放つというのは異常と言って良いだろう。

「そうだったわね。でも、その体で何ができるのかしら？」

一護は先の戦いで体も霊力も限界に達している。

まともに戦うのは確実に不可能だ。

「まだ、やれる……！」

強がっていると云うのが、その場の全員に理解できた。

「そう、やれるのね。だったら、見せてみなさい。夜触『淫怪の祭』」

ルリミアの周りに、夜の暗闇から具現化したように複数の黒い触手が現れた。

それが一斉に一護に襲いかかる。その速さは、今の一護では到底避けられない。

「最強のあたいも忘れないでよね！」

そこにチルノと大妖精が一護を庇うように前に現れた。

迫る黒い触手を恐れず、スペルを唱える。

「冷符『瞬間冷凍ビーム』！」

チルノから三本の白いビームが、黒い触手に向かって放たれた。

そして文字通り瞬間的に全ての触手が凍らされ動きが止まる。

同時に大妖精がクナイ型の弾幕を放ち、凍らされた触手に止めが刺された。いとも簡単に砕け散り、氷の残滓が空气中に舞う。

「ほお、妖精の分際で勇気があるじゃないか」

ルリミアが感心したように言うが、どこか侮蔑の念がこもっていた。

「チルノ、大妖精……」

一護が二人の背中を見て呟いた。

「一護はあたい達が護るからね」

チルノが振り向き、心強く言う。

護る……その言葉に、一護は少しむず痒かった。

いつもは自分が誰かを護る立場だったが、こうして誰かに護られて

いると思うと、少し遣る瀬無い気持ちになる。

「ああ、ありがとう」

一護はお礼と共に答える。

そうだ、今は一人で戦っている訳じゃない。仲間たちがこうして一緒に戦っていてくれるんだ。これ程、頼りになる仲間はいない。

「夜王剣『終焉ノ裏十字』」

そんな中、ルリミアがスペルを唱えた。

ルリミアの右手に聖者の十字架を変形させたような漆黒の大剣が現れた。

「さあ行くわよ。これが博麗の終焉となることを願って」

そして、ルリミアが本格的に動き出した。

*

全員が倒れるのに、それ程までに時間は掛からなかった。

ゆらゆらと夜風に長い金髪を靡かせながら、戦場跡に悠然と佇んでいる。その足元には、ルリミアを倒さんと動いた全員が地に伏せていた。

だがまだ止めは刺していないのか、全員の息遣いが聞こえる。

「やっぱり、この程度か。まあ、その体でよくやった方だよ。黒崎一護とやら」

ルリミアが倒れている一護に向かって言う。

倒れている一護も既に虫の息であり、生きているのがやっつとと言う状態に等しいのかもしれない。

「そんな君は一番先に止めを刺して上げるわ。どうせ、全員殺すんだ。仲間の死に様ななんか見たくないだろう？」

ルリミアが一護に歩み寄る。

それを聞いた一護はゆっくり、絶対に立てない体を無理やり足の力で立ち上がらした。

「俺の仲間は、俺が護る……。テメエなんかには、殺されてたまるかよ……！」

立ち上がり、口を開いた一護に、ルリミアは少し驚く。

「……へエ、まだ立つの。いやいやこればかりは驚いたよ。けどさ

護る……さつきまでは妖精ちゃんに護られていたくせに、よく言えるわね」

「うるせえ！ 俺の仲間にこれ以上、触れるんじゃ——」

刹那、一護の体が崩れ落ちた。

(な……何だよ急に……!?! 体が、動かねえ!!)

一護は俯せになりながら、心の中で叫んだ。

まるで身体が死んだかのように、微動だにしない。

そして、一護はあの時の魔理沙から貰った回復薬の副作用の事を思い出した。副作用は全身が麻痺し、一時的に体が動かなくなる事。

それが、今の一護に起こっているのだ。

(くそ……何で、こんな時に……!!)

一護は体を頑張つて動かそうとするが、小指一本も動かせない。

「流石に体がガタにきたみたいね」

ルリミアは一護の前に立ち、倒れている一護を見下ろす。

「だがまあ、この中では一番賞を上げたいくらいだよ。私と戦う前から既に、普通の人間なら死んでもおかしくない状態だったのに、それでも私に挑んだ。いやいやあつぱれだよ本当に」

漆黒の大剣を一護に向けながら、最後の言葉をかける。

「それじゃあ安らかな永眠を。バイバイ——黒崎一護」

そして何の躊躇もなく、大剣を振り下ろした。

……だが肉の裂ける音も、血飛沫すらも無い。

苦悶の声も当然あっても良いが、それすらないのだ。

——なぜなら、一護がその大剣を片手で掴んでいたからだ。

「——ッ！」

その姿を見た、ルリミアと刹那は目を見開いている。

「何で、私の剣を……!?!」

ルリミアが有り得ないものを見るような目で一護を見る。

いや、本当に有り得ない。

身体は死んでもおかしくない状態な上、副作用の麻痺のせいで絶対に身動きが取れない状態だったのだ。しかもルリミアの大剣の一振りには天を引き裂く威力を有している。

それを片手で掴むなど、人間である一護が成せるはずがない。

「——バカが……言っただろうが……テメエに死なれちヤア、こつちも困るってよ……」

一護は俯いたまま、独り言を呟く。

その声が一護の物では無いと、ルリミアも刹蘭も直ぐに気付いた。

「質問を変えようか……君は、誰だ？」

ルリミアが俯いている一護に目を向けながら問いかける。

その問いに一護は、

「……誰だど？ はッ！ 名前なんか、無エよ！」

ゆつくりと頭を上げた一護の顔には——虚のような仮面が顔半分を被っていたのだった。

《2》

「名前なんか、無えよ！」

ブワツと、解けていたはずの黒い霊圧を再び身に纏った。

霊圧が底を尽きているはずなのに一体どうしてか、今の一護は全盛期以上の霊圧を内包している。

例えるなら神氣じみた圧倒的な質量。ルリミアが一つの宇宙であるように、今の一護も一つの宇宙のような測り知れない存在となっていた。

「ッ！ こいつ……!？」

ルリミアは即座に握られている大剣を、強引に引き離し一護から距離を取る。

あまり強く握られていなかったのか簡単に引き戻せたが、これは考えを変えると自分の大剣なんぞ何の脅威にもならないことを意味していた。

舐められている——そう直感し、ルリミアは少し苛立つ。

だがしかし、舐められても仕方ないのだろう。今の一護に、もはや理性など無いに等しいのだから。

一護の顔半分には虚の仮面が完全に被っていて、今も顔全体を被うように仮面が徐々に拡がっている。

「……………」

ザツと、一護の足が半歩動き、

「オラ行くぜエー！」

地面が陥没する勢いで蹴り、ルリミアに直進した。

ルリミアは直ぐ様、スペルを宣言する。

「夜闇『フィンスレーゲン』！」

スペルを唱えると同時に、走る一護の頭上に黒い弾幕が現れ、穿ち殺すかのように降り注いだ。

しかし一護はそれらを難なく躲しながら、いとも簡単に突破していく。

そも速さの次元は、レミアアを破った時点で、ルリミアは音速以上の速さなんぞ取るに足らんだろう。否、そもそも一つの法則が成立しているルリミアの世界において、速さの概念など存在していない。

だが不運にも霊華の力により著しく低下しており、更に今の一護は同じ次元に立っているといっても過言ではない。

故に――

「ハッハアアアアア!!」

既にルリミアは一護の斬程圏に入られていた。

一護は右腕の膨大な霊圧を刀状と化し、一気に振るわれる。

「チッ！」

だが間一髪にも大剣で、一護の刀を防ぎ切った。

このまま鏢迫り合いになると思ったのも束の間――

バキンツと、まるでクツキーでも割るかのように、ルリミアの大剣がそのまま斬り砕かれた。

ルリミアがそれに驚く前に、そのまま漆黒の刀がルリミアを引き裂く。胴体、斜め一閃に斬られ、ルリミアの宇宙に多大なダメージを負った。

「グッ！」

苦悶の声が漏れ、再び後方に跳躍し一護から距離を取る。

かなり深く斬られたらしく、鮮血が絶え間なく流れ出ていた。

（バカな……!? 私の剣を、私の宇宙（カラダ）を斬つただと!? いく

ら私が全盛期の力を出さないからって、有り得ない!? 一体何だ、この男は!? いいや、それよりも——)

ルリミアは自分の斬られた体を一瞥し、

(なぜ、月夜大星(オレイオス)が発動しない!?)

夜の間なら、例えケガをしようとも、死のうとも、存在を消されようとも、因果律を操作されようとも、ルリミアは一瞬で復元できる。

なのに、それが発動されない。

意味が分からない、理解できない。

そんなルリミアが混乱している最中に、

「はははははっ!! やっぱりテメエは下手糞だ!! 一護!! 力の使い方も理解できずに体中が軋んでんじゃねえか! 情けねえを通り越して、可哀想に思えてきたぜ! せつかくだ見せてやるぜ俺が! 力の使い方ってやつをよ!!」

一護は右腕を大きく振りかざし、勢いよく月牙天衝を放った。

その質量、今まで一護が放ってきた月牙天衝と同じものかと問いたくなる程までに次元が違う。

ルリミアはそれを透かさず後方に飛び避ける。

(何だ!?! この出鱈目な力は!?! どうなっている!?!)

一護の力に慄き、驚愕している一瞬の間……一護はルリミアの上方に移動していた。

「ッー」

再度放たれた月牙天衝を間一髪のところまで避けきる。

そして刹那的対応で、一護に攻撃を仕掛ける。

「舐めるなよ! 夜砲『ティフゼークリダ』!」

ルリミアから漆黒の超極太レーザーが一護に向かって放たれた。

瞬間、レーザーが一護を完全に包み込んだ。

「あははは、やった……」

ルリミアは一護を完全に捉え、破壊の閃光へと追いやった。

故に歓喜し、勝ったと思っただが——

既に一護が逆にルリミアの背後を捉えていた。

気配に気づき、冷や汗と同時に振り向こうとするも……

「おせえよ」

冷酷で冷酷な、慈悲も何も無い一閃。

「ガハ——ッ！」

吹き飛ばされたルリミアの右腕。

肩から容赦なく斬られ、鮮血が舞い散りながら肉塊と化した。

そして一護はそのままルリミアを蹴り飛ばす。

その衝撃は、ルリミアの内蔵を悉く爆散させ並の妖怪なら五体粉砕は当然の威力だっただろう。

「クッソ……！」

荒くなるルリミアの呼吸。月夜大星（オレイオス）が発動しないせいで、ルリミアの身体は限界に行きかかっている。

「クソクソ……ッ！ あんた、一体私の身体に何をしたの!？」

恐らく体質効果が発動しないのは、目の前の男が何かをしたからだろう。

それしか有り得ないし、それ以外に見当もつかない。

すると一護は、ルリミアの質問に答えるわけでもなく、スッと左手をルリミアの方に突き出した。

「ッ！」

それに対しルリミアは身構えたが、特に何もこない。

「……ハッ、何構えてんだよ。楽にいこうじゃねえかオイ。つうかよ、今頃身構えても、遅えよ」

「何が、遅いつての?」

ルリミアがそう言った瞬間、ようやく自身の異変に気づいた。

手が、足が、身体が——

(動かない!)

そう、ルリミアはまるで見えない束縛を受けているかのように、全く身動きが取れないのだ。筋一筋、声を発するための筋肉以外、どこも動かない。

「あんた、一体何をしたの……!?!」

ルリミアは冷や汗を垂らしながら、焦り口調で叫んだ。

「質問の多いヤローだな。ガキじゃねえんだから、テメエで考えやが

断末魔のような叫び声を上げると同時に、顔の仮面が完全に剥ぎ取られた。

仮面の破片は黒い粒子となり消滅していく。

「はっはっはっ……ふうっ！」

そこにはいつもの一護——黒崎一護が立っていた。

雰囲気も霊圧も全て一護だ。ただ微量ながら先の一護の霊圧が残っており、良く言えば霊圧が少し回復しており、悪く言えば自分本来の力ではない禍々しいもの手にしているに等しい。

ただ一番良いのが、魔理沙の回復薬の副作用が完全に回復していることだろう。憶測になるが、先の一護がそれすら打ち破る力を行使したせいで、理論も道理も何もかもを無視して、副作用を消したのだろう。

「……悪いいな。邪魔が入っちゃった。さあ、仕切り直しといこうぜ！」

刀を向け、再戦の意を決する。

なぜ自分に内なる虚の存在が蘇ったのかは分からない。

だが今はそんなことに頭を抱えている場合ではない。

眼前の敵——既に虫の息に等しいがルリミアがいる。状態的には五分五分、いや相手の方がまだ上だろう。故に普通に戦えば勝てない。

しかし、

「クッ」

ザザと、何かが擦れる音がした。

一護がそちらを振り向くと、ボロボロながら霊夢がゆっくりと立ち上がっていた。

「……一護、大丈夫？」

千鳥足よりも不安定な足取りで、一護に近寄る。

「ああ心配ねえよ。つか、お前こそ大丈夫かよ？」

「余計な心配よ。博麗の巫女を舐めないで」

ここまでの多少な減らず口が叩ける。お互い大丈夫ではないが、瀕死とまではいいないようだ。

「……かなり弱ってるわね」

霊夢がルリミアに目を向け率直に言う。

ルリミアは既に瀕死といってもいい。右腕は切り落とされ、身体は深く斬られ、月牙による攻撃も受けた。

だがそれを差し引いても、ルリミアはまだ一護と霊夢よりは強いだろう。

「にしてもあれ、一護がやったの？」

「……………」

霊夢の質問に一護は押し黙る。

ここで霊夢に自分の内なる虚の存在について言うか迷ったが、これは自分の問題だ。

そう思ったが故、一護は言わなかった。

「まあいいわ。あいつももう虫の息。一瞬で決着を付けるわよ」

深く聞かず、霊夢は自己完結する。

「ああ」

それに対し一護は少しホツとした。

……一護と霊夢は既に気づいている。

ルリミアは消滅させようが倒すことはできない。

今はどうか分らないが、どうせ消滅さしても夜になると復活する。だから、もう一度こいつを封印するしかない。

一護は剝蘭が放り投げた赤いリボン、お札を一瞥する。

運よく、リボンは屋根の瓦礫に少し埋もれているだけで、破れたり、飛ばされてはいない。

「……霊夢、俺がルリミアを引きつける。お前はリボンを回収して、あいつを再度封印してくれ」

一護はルリミアに聞こえないように、小声で霊夢に言う。その声の量は、ほぼ口パクと言つて良いだろう。

しかしそれを難なく聞き取った霊夢は頷き、前を見る。

ルリミアは油断せず残り少ない体力でスペルを唱えた。

「夜神『闇ノ支配』！」

ルリミアが左手を頭上に上げた瞬間、掌に黒い小さな丸い塊が現

れ、それが徐々に膨らみ巨大化していく。

一護は右腕に霊圧を込め、ルリミアの目を見据えた。

「黒崎一護、あんたのさっきの姿は問わないが、私をここまで苦しめた代償はきっちり払ってもらわうわよ」

「やるもんならやってみろよ」

笑みすら浮かべて一護は答えてやった。

「つたく、あんたは、随分と肝の据わったガキね——黒崎一護!!」

激昂と同時に大宇宙が震撼し、惑星群なら軽く消し飛ばせる漆黒の闇が一護を塗り潰そうと拡散する。

その激烈な、次元の違う力を前に一護は、

「黒符『月牙天衝』!!」

放たれるは月牙天衝。

しかし一護の月牙天衝は今、一つの宇宙に挑むに等しい。そんなもの打ち破れるはずがないのは火を見るより明らかだ。

だが忘れてはいけない。

今、一護が行使している霊圧は一護のものであって一護のものではない。

漆黒と漆黒が激突する。

瞬間、月牙と闇が同化し、まるで何もなかったかのように消滅した。

「く……そ……ッ」

ルリミアは完全に体力切れしたのか仰向けに倒れた。

一護も纏っていた霊圧を解き、なんとか倒れそうな体を踏みとどめる。

ルリミアが倒れた、その隙に封印できる。

「ハア、ハア、ハア…:霊夢、封印を頼む」

「ええ、分かっているわ」

霊夢は仰向けに倒れているルリミアに歩み寄り、傍に寄るとルリミアと目が合った。

ルリミアは霊夢を見ると、少し嫌な顔をし、

「本当、あんたは博麗霊華にそっくりね」

まるで過去を思い出すかのように言った。

「……何が言いたい訳？」

「別に。ただ、そっくりだなと思つて……。けど、その強気な性格は父親の方に似ているわね」

ルリミアは少し笑みを浮かべながら、懐かしい思い出を話すかのように言う。

「父上のことも知っているのね」

「まあね」

霊夢は「そう」と言うと、リボンに霊力を込め、封印を開始した。「最後に言いたいことはある？」

「霊夢が封印する直前で聞く。」

「そうねえ。だったら二つ、あんたに良い事を教えて上げるわ」

「二つ？」

「二つ目は、あんたが思つてる以上に幻想郷……いや、博麗の巫女つてのは大きい存在よ。例えるなら、総ての宇宙を捻るような、ね」

「……もう一つは？」

「あんたの『父上はまだ生きている』わよ」

そのセリフに霊夢は驚愕した。

一つ目の壮大なことには全く表情に変化は見られなかったのに対し、二つ目のことには声すらも荒げてしまった。

「どういうこと！ 何で私の父上が生きてるつていえるの!？」

「それは自分で確かめなさい。あんたはあの、博麗霊華の血を受け継ぐ博麗の巫女でしょ」

「……そうね、そうするわ」

それを聞いたルリミアは微笑んだ。まるで封印されることをよしとするかのような、この世にもう未練などないような。

その証拠に――

「……霊華……『ごめんね、そして、ありがとう』」

刹那、ルリミアから青い光が現れ、その光がルリミアを覆い尽くしていく。

直ぐに光は消え、そこにはぐっすり眠るルーミアがいた。体の傷も何もないのは、この封印がとても優れている一つの証左だろう。

「——なかなか面白いものを見せてもらったよ。黒崎一護」

戦いを傍観していた刹蘭が一護に向かって言う。

「デメエ……ッ！」

一護は反射的に駆け寄ろうとしたが、既に身体が言うことを聞かなかった。

「今日はもう、これで帰るとするよ。ああ心配するな、また直ぐに会えるさ。ただし、次に会うときはもう少し力を付けていてくれよ。そうでないと、面白くないからね」

刹蘭はそういうと姿を消した。

一護と霊夢はそれを確認すると、その場に崩れ落ちた。

もう立つことも動くこともできない。いや、既に意識すら朦朧としてきた。これは屋敷の誰かに見つけてもらわないといけない……な。

一日が終わる。

紅霧異変が終わる。

——こうして一護たちの最初の異変解決が幕を閉じた。

*

数日間後、一護たちは紅魔館で目を覚まし、一護と霊夢は博麗神社へ帰った。

フランは一護の説得により地下室から完全とまではいれないが開放され、今では紅魔館の中では自由にしている。

そして、帰る間際に一護はフランと一つの約束をした。

「今度、お姉様たちと遊びに行ってもいい？」

その約束に霊夢は頷き、一護は「ああ」と答えた。

いつ遊びにくるか分からない。

だがまあ、それを生き甲斐に日々を楽しく送ろうと誓った。

一護と霊夢が博麗神社に到着すると、再び平和な日常が訪れたのだった。

【みんなで湖水浴】

紅霧異変が解決した夏の後日譚。

幻想郷の夏は暑い。

夏の空は澄み渡り、眩い太陽の光が熱を帯びて気温を容赦なく上げる。

蝉の鳴き声心地よさを通り越して五月蠅いと感じていた日の頃、博麗神社では一つの企画が進行していた。

「こんなムシムシした部屋はもうたくさんだわ。一護、魔理沙、何か涼しくなる案を言いなさい」

「急になんだよ、藪から棒に」

三人はテーブルを囲うように座り、冷たい茶を啜っていた。そんな中で霊夢が、鬱陶しそうに額の汗を拭いながら突拍子もなく言ったのだ。

「いいから、何かあるでしょ？ 何のために外の世界からやって来たのよ」

「その為じゃないのは間違いねえよ」

「もう役に立たないわね。次、魔理沙」

「順番なのか。そうだな、一つだけならあるぜ。私の住んでいる魔法の森は年中ひんやりしてるぜ。こう、背筋が凍るような涼しさを感じられる」

「そういう涼しさはいらないわよ。ねえ一護、外の世界ではこういう暑い時はどうしてるの？」

「そうだな、基本的にはエアコンのきいた部屋にいるけど、まあここじゃエアコンなんてないもんな」

「エアコンってなんだ？」

「端的に言うと、部屋を涼しくする道具だな」

「お、そんな便利なものがあるのか。香霖堂に行けばあるかな？」

「さあ？」

魔理沙が目を光らせながら聞いてくるが、あつたとしても使えない気がする。電気関係とか、室外機とか諸々の理由で。

「まああとはそうだな。プールとか海に行くのが王道だと思うぜ。実際、遊んでいるときは気持ちいいし涼しいしな」

「海は文献で読んだことがあるわ。けど、プールって何？」

「水遊びができる場所だな。夏つていえば外の世界ではプールは欠か

せないところなんだよ」

「ふうん、水遊びね……。ちようどうつてつけの湖が近くにあるし、いかもねそれ」

霊夢が顎に手を宛がいながら言った。

「お、水遊びか。そういえば霖之助がもし水場で遊ぶならいい物が手に入ったとか言ってたぜ」

霖之助とは香霖堂という店の主人。いわゆる古道具屋を営んでおり、外の世界の物まで取り揃えている珍しい店である。

「珍しい物？ それって何なの？」

「ん、確か水に入るときに着る——」

「水着です！」

瞬間、いつの間にか縁側に立つように、そこに霖之助が出現していた。

「うおッ!? 霖之助さん! あんたいつからそこに!?!」

一護が声を荒げて言う。

「いやなに、少し通りかかったものでね。君たちが面白そうな話をしていたので、つい盗み聞きをしてしまった。不躰を許してほしい」

「盗み聞きって、一体いつからだよ」

「こんなムシムシした部屋はもうたくさん……と霊夢が言ったところからだね」

「最初からじゃねえか! そんなことしなくても、堂々として入りゃいいじゃねえか」

「ああ、そのつもりだったんですが。盗み聞きというのは、なかなか興奮するものだと知りまして、やめられなかったんだ」

「え、この人ってこんなヤベエ人だったのか」

霖之助の発言にドン引く一護。

「ああ、霖之助は真面目そうに見えてすげえ変態気質なところがあるぜ」

「失礼だな魔理沙。今回は魔が差したただけであって、普段の僕は至って紳士だよ」

「じゃあそれは何だ？」

魔理沙が霖之助の懐を指さす。そこには、何やらカラフルな薄い下着のようなものが顔を覗かせていて……。

「おっと気づかれてしまったね。これは水着というものでね、文字通り水場で遊ぶときに着るものなんだ。幻想郷の住民にはあまり馴染み深くないだろうが、これを君たちに贈呈しようと思う」

「怖いまでのすげえタイミングだな」

「へえ、水着ってどんなものなの？」

霊夢が水着というものに少し興味を抱いている。実際、海のない幻想郷で水着と言う衣服が流通してないため、見たことがないのだ。

「ああ、これだ」

そして霖之助が三着の水着をテーブルの上に置く。

「……………」

霊夢が一着を手に取り目を細め、

「——てコレ、下着じゃないのー！」

バシンツ！と、霖之助の頬に投げつけたのだった。

「おお、何ていうか露出が凄いな。生地が下着と違うから、これが水着って奴なのか。確かに、まんま下着だな」

魔理沙が一着の水着を触りつつ言う。

「まんまっていうか下着じゃないのこれ!? ちょっと霖之助さん、私たちが騙そうとしているわね?」

「違う違う! 本当にこれが水着なんだ! だからその振り上げた拳は下げてくれ!」

「どうなの一護、これって本当に水着ってやつなの?」

「ああ、間違いないから安心しろ。霖之助さんに他意はねえよ多分」

「そ、そう。分かったわ」

「良かった、助かったよ一護くん」

安堵の息を吐く霖之助に対し、霊夢はまだ納得がいていない。

「確かに水に入って遊ぶなら、服を着たまま入るわけにはいかないけど……でも、こんな肌を見せるものでなくてもいいじゃない……」

「いいじゃないか霊夢。こういう趣の違うものを着るって楽しいと思っ
うぜ」

「魔理沙は平気なの？ だってこんな、破廉恥な服を着るのよ」

「別に。逆に早くこれを着て泳いでみたいくらいだぜ」

「あんたに聞いた私が馬鹿だったわ」

霊夢が水着を見つつ、自分の水着姿を想像して赤面していた。

「ま、着てみたら案外気にならないもんだけどな。それより霖之助さん、他にも水着ってあるのか？」

「当たり前だとも。ビキニタイプ、ワンピースタイプは勿論、ボーイレッグタイプやビスチエタイプ、ホルターネックの水着とお客様のニーズに合ったものを多種多様に揃えているよ。それと試着コーナーも作ってみたから、ぜひ友達を連れてくるといい。歓迎するよ」

「あ、ああ。別にそういうことを聞くつもりじゃなかったんだけどな」

一護の質問に対する霖之助の回答に引きつつ、少し思案した。

「一護、あんたなに考えてるの？」

「いや、せっかくだし紅魔館のみんなを誘おうかなって思ってよ。せっかく打ち解けたんだ。一緒に遊んでも問題ないだろうし」

「まあいいんじゃない？ けど、あそこの吸血鬼は日光苦手だけど大丈夫なの？」

「あ、そうだったな。ま、声かけるだけはしてみるよ」

そうして予定が着実に決まっていたのだった。

*

——そして数日後。

太陽がかんかんに照らす、まさに夏真っ盛りの気候。空は晴れ渡り、蝉の鳴き声が響き渡る。

そんな炎天下の空の下、広大な湖の湖畔に一護は水着姿で立っていた

「……あちいな」

オレンジを基調とした短パン式の水着を着ており、涼しい格好ながらも汗が止まらない。

「たく、いつまで着替えに時間かかってんだアイツら……」

汗を拭いっつみんなを待っていると、ようやく二人の人影が現れた。

「一護く待たせたな！」

「……………」

そこには元気よく手を振る魔理沙と、恥ずかしそうにする霊夢の姿があった。

2人とも水着を身に纏っている。魔理沙は黒を基調としたビキニタイプで、腰にはパレオを巻いている。そして霊夢は赤を基調とした、フリルの付いたビキニタイプを着ている。

「どうだ一護、似合っているだろ」

「おう、いいんじゃないか。いつも魔法使いっぽい服だから、なんか新鮮だな」

「だよな。私もこんな布面積の少ないものを着るなんて初めてだから、ちよつと恥ずかしいぜ」

少し赤面しつつも笑顔で言う魔理沙に、どこかグツとくる一護。ギヤップ萌えという奴だろう。

「ちよつと一護、なに魔理沙のことじろじろ見てるのよ、いやらしい」
対する霊夢は赤面しつつも額に青筋を立てて、どこかゾクツとする一護。

「い、いや別にそういうわけじゃねえよー」

「どうだかね」

「それに、ちゃんとお前のことも見てたよ。魔理沙ばかりじゃねえ……………あれ」

一護は誤解を解くために変な弁明をしたと、発言した直後に後悔する。

そして霊夢から叱責という名の拳が飛んでくると覚悟したが、そういう展開にはならなかった。

「……………あ、そ、そう。ふ、ふくん……………で、私の水着は、どう？」

一護の予想に反して、霊夢は照れながら小声でもじもじしつつ聞いてきた。

「え、そうだな。綺麗だと思うぜ。すげえ似合ってる」

「……………あ、ありがとう」

そう言われ、紅潮した頬を隠すように俯きながらお礼を言う。

「ははくん、嬉しそうだな霊夢。一護に褒められたのがそんな嬉しかったのか？」

「なっ！ そ、そんなわけないじゃない！ 単にあんただけ似合ってるって言われたのが癪に障っただけよ！」

「凶星だぜ一護。霊夢いま凄く喜んでるからな」

「魔理沙、少し黙りなさい」

札を魔理沙の頬にあてがいながら、笑顔で言う霊夢。

すかさず魔理沙は口を閉じ、降参の意を示すように両手を挙げた。

「そういえば、紅魔館のみんなはまだなのか？」

ふと一護は聞いた。

そう、今回のこの催しに紅魔館のメンバーにも声をかけたのだ。返

答は快諾。水着も香霖堂で仕入れたと聞いている。

「ああ、もうそろそろ来ると……お、早速来たらしいぜ」

霊夢たちが来た湖畔近くの森林より、紅魔メンバーが現れた。

「暑いわね、この日光が腹立たしいわ。咲夜、日傘をしっかりとお願いね」

「はい、心得ております。この命に代えても、お嬢様のお肌は私がお守りいたします。日焼け止めクリームを塗る際は、ご遠慮なくお申し付けください。すみずみまでこの咲夜、責任をもって対応させて頂きます！」

「はあく、私は館でゆっくり紅茶でも飲みながら読書をしたっていうのに。なんでこんな暑い日に外なんか……あ、ダメ。頭がふらついてきたわ」

「パチュリー様しつかり！ この小悪魔がしつかりサポート致します！」

「ねえねえ美鈴！ すっごくお水がきれいだよ！ ここで遊ぶんだよね！ 早くいこー！」

「ああ待つてくださいいフラン様！ まずは準備体操をしないとイケません！ 怪我をしてしまいますよ！ あれ、けど吸血鬼だったら大丈夫なのかな……？」

ぞろぞろと、水着を着た六人（レミリア、咲夜、パチュリー、小悪

魔、フラン、美鈴）がにぎやかに出てきた。

「おう、待ってた……っ!？」

一護の目にまずパチュリーが入り、言葉を失った。

まさに豊満なボディを体現したかのような、グラビアアイドル顔負けのパチュリー。青紫を基調とした花柄の水着を着ており、ビキニタイプなため自身のアダルティーな要素を惜しげもなく出している。

圧巻にとられた一護はすかさず視線を反らし、別のメンバーを視界に入れた。

「……一護、今かなり失礼なことをしているんじゃない?」

まず目が合ったレミリアが、一護の心を看破したかのように言った。

「え、い、いや何言ってるんだよ? 何も失礼なこととはしてねえぞ」

嫌な汗を流しながら答える。

レミリアはなぜか、全国の学校でみられる紺色のスクール水着を着ていた。何というか、見た目が幼いためジャストフィットしている。

「本当かどうかなり疑わしいけど、まあいいわ。それでどう、私の水着の感想は? みんなとは少し変わってるでしょう。日焼けしないために、肌をなるべく出さないものにしてみたの」

「おう、いいと思うぜ。なんか色々調和が取れてて安心するつつうか、レミリアくらいの子が一番似合う水着だと俺は思う」

「やっぱり少し馬鹿にしてない?」

「いえ、違いますお嬢様。この水着はお嬢様のようなよう……失礼。高貴なお方に相応しいものです」

と、レミリアの横に日傘をさしながら立つ咲夜が口を挟んだ。

咲夜は全体的に大人の雰囲気を感じさせる、白いフリルの付いたビキニタイプの青い水着である。

「下賤な者には、お嬢様の水着の良さなど分からないでしょう。この咲夜、お嬢様の水着選びに抜かりはありません!」

——ああ、この人が選んだのか納得。

そう思った一護は次の瞬間、腹部に衝撃が走った。

「いちごっ! 会いたかったよ!」

その正体はフラン。一護めがけて抱き着いてきたのだ。

「おうフラン。元気にしてたか？」

「うん元気してた！ ねえねえ一護、フランの水着似合ってる？」

フランは自分の水着を見せるように立つ。

少し背伸びをした子供が着るような水着だ。黄色を中心とした花柄なデザインで、とても可愛らしい。

「ああ、よく似合ってるぜ。自分で選んだのか？」

「みんなを選んで決めたんだよ！ 一護も水着似合ってるね！」

「おう、さんきゆうな」

フランの頭を撫でながら言う。

「まるで親子のようですね。黒崎さんはきつと、いいお父さんになりますよ」

「まだ父親になる予定はないけどな」

競泳水着を着た美鈴が近づいてきた。

流石は武術家ということもあり、スレンダーでありながらしつかり引き締まった身体をしている。その上で出ているところははっきり出ている、女性ということを忘れさせないスタイルである。

「美鈴、親子じゃないよ！ 愛人っていうやつだよ！」

「は？」

「フラン様！ どこでそんな言葉を覚えたのですか!？」

「パチユリーが教えてくれたの！」

それを聞いてパチユリーに視線を向ける。

「あら、どうしたの？」

こちらの視線に気づいたパチユリーが一護に歩を進める。

歩く度にたわわに実った乳が、それを惜しみもなく主張してくる。

一護が赤面しつつ、視線を少しずらして言う。

「い、いや、なんでもねえ……！」

「あれ、一護、どうしてお顔真っ赤なの？」

「……………」

一護は答えられないため黙った。

「パチユリー様、フラン様に愛人と言う言葉を教えたのですか？」

「ん？ 突然なんなの？ まあそうね、色んな童話を読み聞かせたりしているから、そういう単語が出てきて覚えちゃったのかもしれないわね」

「ああ成程、そうでしたか」

「何よ、愛人なんて言葉を意図して私が教えたと思ったの？ フランの教育上、そんなことをするわけないじゃない」

パチュリーの言葉を聞いて「まあそうだよな」と思った一護は、少しだけ視線を戻そうとすると……

「——あら、急にめまいが」

フラツとパチュリーの足元がおぼつかなくなったかと思うと、そのまま倒れそうになった。

「ッ、危ねえ！」

咄嗟に誰よりも早くパチュリーに跳んだ一護は、倒れる直前で両腕を使い優しく支えた。

「おい大丈夫かよ？」

「助かったわ。少し日光に当たりすぎたみたい」

お札を言うパチュリーに、黒色のシンプルなビキニタイプの水着を着た小悪魔が日傘をもって駆け寄ってきた。

「パチュリー様ー申し訳ありませんー！ 私が油断していたばかり

に！ それと黒崎さんありがとうございますー！」

「気にすんな。それよりパチュリーを頼む……ん？」

ハラリと、パチュリーの水着の紐が緩かったのかほどけてしまい、それが露わとなってしまうた。

「……………」

「あんたは何やってるのよ!!」

呆然としていた一護に向けて、霊夢の跳び蹴りがとんできた。

「どああー!!」

吹っ飛ばされる一護。

水着を結びなおすパチュリー。

「……おかしいわね。ちゃんと結んだと思ったのに」

「おっぱいが大きいから、紐が耐えられなかったんじゃないのかパ

「チユリー」

「魔理沙がヘラヘラしながら言った。

「うるさいわよ魔理沙。まあお胸の小さいあなたからしたら、縁のないことでしょうけど」

「何をー！ー！」

「魔理沙とパチユリーがガヤガヤ言う中、一護は少し冷や汗をかいていた。

「一護く、大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ。霊夢はああ見えて、手加減してくれたからな」

「鼻血出てるけど……」

「フランが一護を案じつついると、霊夢が近づいてきた。

「……あなた、能力を使ったわね？」

「!? 霊夢、どうしてそれを……?」

「パチユリーを助ける際、能力を行使したでしょ。あなたの足元が一瞬光ったの、私はすっかり見ていたわよ」

「さいですか」

「そしてあなたはそのままパチユリーを支えると、再び能力により水着に宿る魂を操って紐を解かせた。これで合ってるわね?」

「はい、100点です。けど水着に関しては、わざとじゃねえよ。手違いで続けざまに能力使っちゃっただけなんだよ」

「そんな必死になって弁解しなくていいわよ。あなたがわざとじゃないうってことは分かってるから。心配しなくても、その辺は信用してるから」

「……………」

「——じゃあ蹴るんじゃねえよと思う一護だった。

「ねえねえ早く遊ぼうよー!」

「そうだな、ここにいても暑いだけだし、水に入るか」

「そうして、みんなで水遊びをした。

「幻想郷の湖なだけあって、とても綺麗で不純な物が見当たらない湖である。完全に澄み切っており、神々しさすら感じる広大な水面、日光が水底まで差し煌めいている。そんな水の中で遊んでいた。」

遊泳、ボール遊び、水かけから思いつく限り色々と遊んだ。

そして少し経った頃、フランが小首を傾げていたのだ。

「ん〜、ん?」

「どうしたフラン?」

「うんとね、咲夜のおっぱいって、あんなに大きかったかなって思っ
て」

「……………」

何やらとんでもないことを口にしたフラン。

「一緒にシャワー浴びる時、あんなに大きくなかったもん。絶対におかしいよ」

「そ、そうなんだな。まあその、あんまり気にしてやるな」

「いやいや気になるぜ! これは調査が必要だな!」

ヌツと、水の中から聞き耳を立てていたのか魔理沙が目の前に現れた。

「うおっ、ビックリした。急に出てくるんじゃないやねえよ。つうか聞いてたのか」

「そんな面白い話、私が聞き逃すわけじゃないぜ。これは調べ上げないといけないぜ。早速、作戦開始しよう」

「わーい私もやる〜!」

「ろくな事にならねえのは目に見えてんな。言つとくけど、俺は関わらねえぞ。あっちで泳いでくる」

「待てよ一護。この作戦にお前は必要不可欠なんだぜ」

去ろうとする一護の腕をがつつり掴む魔理沙。

「…………言っただろ、俺は参加しねえ。その手を離せ」

「いいのか一護。フランはあんなにお前に期待の眼差しを向けてるんだぜ」

「はっ」

一護がフランに視線を向けると、そこにはキラキラな眼をしたフランが祈るようにして一護を見ていた。まるで子供が親にお願いをするかの如くその姿に、なぜか一護は胸を締め付けられたのだ。

「……………しょうがねえな。くそっ、分かったよ手伝ってやるよ」

「それで屈する一護もどうかと思うぜ。子供に頼まれたら断れないタイプだな」

「やったー！ 作戦作戦♪ ねえねえ作戦ってなにをするの？」

フランがキャツキャしつつ魔理沙に尋ねる。

「簡単だぜ。一護の能力を使って咲夜の水着をほどいてしまおうって作戦だ」

「やっぱ断っていいか？ この作戦、全責任が俺にくる。間違いなく殺される」

パチュリーの際は事故で済んだが、これはバレたら事故では済まない。

「心配するな。そこに至るまでの作戦もしっかり考えてるぜ」

「何でそんな瞬時に作戦を思いつくんだよ」

「ここは湖。つまり水場だ。私が盛大に水飛沫を飛ばして、みんなの視界を奪うからそこを一護が狙うんだぜ」

「完全に急ごしらえの作戦だな」

一護は頭を抱える。

「フランも手伝うよ！」

「お、いいぜ。私と思いつきりやろうぜ！」

「おー！」

「フランの教育に絶対に悪いよな」

「よっしゃああ！ いくぜフラン！」

「うん分かった！」

他メンバーはそれなりに密集している。狙うなら今である。

そしてこちらの意図をバレないようにしなければいけない。よつて……

「霊夢ー、遊ぼうぜ！ 水につかった中で私の弾幕に当たったら負けなー！」

「はっ」

うきわでプカプカ浮いていた霊夢が、こちらを見た途端だった。

「星符『メテオニックスパワー』！」

魔理沙は何の迷いもなくスペルを唱えた。空から星型の弾幕が容

赦なく降り注いできた。

「ちよつと魔理沙ー！ 何してるわけえ!？」

「全く、あんたは友達を選んだ方がいいわよ。普通、なんの躊躇いもなく弾幕放つてくる友達なんていないから」

レミリアは冷静に諭す。

ザバンザバンと弾幕が湖に落下し、噴水の如く水飛沫を上げていく。

「今だ一護いけええ!」

「何でこんなことやらされてるんだ俺エ!」

一護は水中に潜り、能力を使い一気に泳いでいく。

おかげで魚の如く速く泳げているが、魔理沙の弾幕のせいで水中での視界が泡と弾幕で悪い。

とにかく気配を探りながら、咲夜がいたであろう場所まで泳いでいった。

（——つうかさろそろ弾幕やめろつてのアイツ。ん、いた、多分あれだ!）

手を伸ばし、泡まみれだが誰かの水着に触れた。

「よし当たった!」

一護は手ごたえを感じると、そこから離れて水から顔を出す。そこには……

「あー! 私の水着が急に破れましたああ!」

美鈴の競泳水着がまるで弾けるように破けていた。同時に艶やかな体が露わになった。

一護は心の中で謝罪と猛省をし、再び水中に潜る。

（クソッ! 俺は何やってんだ!?! 冷静に考えてなにやってんだ俺!?! とりあえず勢いでやらねえと心が折れちまう）

一護がそう決意する最中、水上ではフランがスペルを唱えていた。

「次は私が行くよー! 秘弾『そして誰もいなくなるか?』!」

無数の弾幕が湖を飛びかう。

「ちよつと! あんたの妹も躊躇いがないわよ! どういう教育してるわけ!？」

「きよ、教育はパチエに任せつきりだから……」

「責任転嫁してるんじゃないわよレミ。あんたに似てきてるだけよ」
霊夢たちがそのような言い合いをしている中、一護は水中にて「次こそは」という思いで泳いでいた。

（くそ、みんな同じ場所にいるな。間違えて別のやつに触れてしまいうそになる）

苦悩しつつその上、相も変わらず弾幕が激しいせいかわりの水の視界は最悪だ、

（けど……これ以上の被害を増やすわけにはいかねえ！）

一護の手が伸びる。

泡まみれになった水中で、もはや運任せになりつつも誰かに触れた。

そしてすかさず水中から顔を出すと、一護の目の前には――

「きやあー！ 見ないでください！ きゅ、急に水着がほどけてしまつて……！ てか何で目の前に出てくるんですか黒崎さん!？」

小悪魔の水着の紐がほどけ、美しい形をしたソレが露わになっていた。

「……すいませんでしたー！」

一護は素早く水中に潜る。

（駄目だ、何かもう成功するビジョンが見えねえ！ つうか上のみんなもう弾幕ごっこ状態になってるし。そりゃそうだよ、あんなやり方したらそうなるわな）

どこか諦めにも似た表情になりながら、湖の上を見つめた。

フランの弾幕を発破に霊夢が弾幕を展開し、同じくして他メンバーまで参戦してしまっている。

（……待てよ、今なら狙えるんじゃないやねえか。この弾幕ごっこの状態なら、水中から何ていう分かりづらい場所から狙わず、弾幕ごっこに紛れて狙える。行ける、次こそ成功させてやる！）

一護は一気に浮上する。

水から出ると、そこは弾幕ごっこを繰り広げるみんながいた。しかし、ごっこなどという生易しいものではなく、優しさの欠片もない弾

幕の応酬であった。

「何でこいつら弾幕が絡むと手加減つてものを忘れるんだよ。もう涼みに来たってより、弾幕ごっこしに来た感覚だ。いやまあ、これの原因作ったのは俺たちなんだけど」

水上に出た一護は弾幕を避けつつ、咲夜を探そうとあちこち視線を動かす。

「——いた、レミリアの近くか。しかもレミリアのことをジロジロ見てるおかげで隙だらけだな」

まるで夜一さんを見る碎蜂の眼に似ている。

「けど、チャンスは今しかねえ！」

一護は一気に咲夜に向けて跳躍する。

針の穴を縫うように弾幕を躲しながら、一気に突っ切っていく。

「いける、いけるぞ。いや、いくしかねえ！」

そして遂に咲夜に触れそうになった……その瞬間

「何用ですか？ 黒崎さん」

レミリアを舐めるように見ていたはずの咲夜が、こちらに視線を向けてきたのだ。

「——なんだと!？」

「甘いですね黒崎さん」

ヒュツと風切り音を上げて、ナイフが一護の頬を掠めた。

「私がお嬢様に夢中になっているのをいいことに、何かお嬢様にやましい事をしようとしたのでしよう。そうはさせません、この咲夜がいる限りお嬢様に近づくことは許しませんよ」

ナイフをチラつかせながら咲夜が一護に言う。

「……やっぱそう簡単にはいかねえよな」

何やら咲夜が盛大に勘違いしているが、正直どうでもいい。

咲夜に触れさえすれば、それでこれは解決するのだから。

「私はしっかり見ていました。あなたが能力を使いパチュリー様や美鈴、小悪魔に触れて水着を取っていたのを。何とも羨まし、じゃなかった。何とも不埒で最低極まる能力の使い方でしょう。この咲夜、是非ともお嬢様にその技をかけて、ではありませんでした。お嬢様を

下郎なあなたから死守する必要があります」

所々、本音が出ていたが、今は正直どうでもいい。

一護は構え、

「あんたには悪いが、触れさせてもらうぜ。ここまできたら俺は、引き下がるわけにはいかねえんだよ」

そして一気に咲夜に向けて動いた。

咲夜もそれに応じるように動く。

互いの弾幕とナイフが飛び交い、ここでも死闘が繰り広げられてしまった。

「ッ！ くそ、隙がねえ！」

流石はメイド長である咲夜。一護の弾幕をもろともせず、そして近づけさせもせず対抗している。

「この程度ですか黒崎さん。そんなことではお嬢様に触れるなど到底不可能です」

「別に……触りてえつもりで戦ってるわけじゃねえよ……。触らなきゃいけねえから……。戦ってたんだ……！」

「凄いセクハラめいた台詞ですね。あなたのその助平心はこの咲夜も感服です。しかし……」

咲夜はナイフを構え、

「お嬢様の水着はこの私がお持ち帰りするもの。あなたに触れられては美鈴同様、破られるかもしれません。それは許されざる所業ですよ。これ以上、よこしまな感情でお嬢様に近づくようでしたら、本気で容赦しませんよ」

「そうかよ、なら俺も……本気で行くしかいかねえな」

一護はそう言うと、手に代行証を握りしめる。

その瞬間、代行証から黒い霊圧が噴き出し、一護に纏われていく。そして徐々に死覇装を象り、その姿は死神のそれになっていた。

「こつからは手加減なしだ。全力で触れさせてもらうぜ」

「いいでしょう、私も紅魔館のメイド長として、全力でお相手いたします」

「——黒符『月霊幻幕』！」

「——傷符『インスクライブレットソウル』！」
決死の覚悟をした両者のスペルが大激突をしたのだった。

*

そして少し時が経ち……

一護と咲夜も体力の限界が近づいていた。

「はあ、はあ……まさかこれ程とは……！　認めましょう、あなたは強い。いえ、欲望に怖いくらい忠実と言った方がいいかもしれませんね」

「……うるせえよ」

息も絶え絶えの中、一護は再度構える。

それを見て咲夜は目を細めた。

「しづといです……。そんなにお嬢様に触りたいんですか……!?!」

「……バカ野郎。触りたいんじゃない、触るんだ！」

「!?!」

瞬間、一護はスペルを唱える。

黒符『天幻月牙』……咲夜の周囲に漆黒の弾幕が包囲した。それら
が一齐に自分に向かってくると思った咲夜が身構えるも……

「……こない？　いえ、これは——」

周囲の弾幕が動かずに展開されたのみ。

頭で来ると思ってた次の動きをシミュレートしたが、その予測が外れ
脳が数舜だけ停止する。

「今だ——黒斬『月牙天衝』！」

その一瞬だけの隙を狙い、一護は月牙天衝を咲夜に放った。

「ッ!?!」

咲夜は弾幕を展開し、周囲の一護の弾幕を掻き消して回避に転じ
た。

その動きを予期していた一護は、一気に咲夜に向けて跳躍する。

「——しまった！　お嬢様！」

「いけるー！」

そして……遂に咲夜の水着に触れ、その勢いそのままレミリアに疾駆
した。

「これで決めてやる！」

霊夢や魔理沙、フランたちと弾幕ごつことなったレミリア。その後から一護の手が、見事に当たったのだった。

「え？」

レミリアが急に触れられ、キョトンとする。

その刹那——レミリアのスクール水着が弾け飛んだ。ビリビリに破れた水着から、レミリアの素肌が露わになってしまった。

同時に咲夜の水着もほどけ、胸元が露わになる。

「あ——！ やっぱり咲夜のおっぱいちっちゃい！」

遠目で見ていたフランが指をさして声を上げた。

咲夜の胸はまな板のようで、どうやら水着の下に胸パッドを付けていたらしい。そのせいで胸が大きく見えていたのだ。

「お、任務達成だな！ やっぱりパッドだったわけだ。ははん、これじゃメイド長ってより、PAD長だぜ！」

魔理沙が馬鹿にしたかのように笑い飛ばす。

「……………」

二人が達成感に包まれる中、一護の冷や汗が止まらなかった。

完全にみんなにバレた上、なぜか勢いでレミリアの水着までブレイクしてしまった。言い訳もなくそもない事態である。

「……黒崎さん、お命頂戴いたしますね」

「一護、少し怒ったわよ。死ぬ覚悟はできているわよね」

「あんたは一体……何してるのよおお!!」

そして激怒した三人から、容赦ない弾幕を浴びせられるのだった。

「はあく、涼みに来たのに何してるのかしらアイツら」

湖面に仰向けに揺られるパチュリーの溜息と、一護の悲鳴が湖に木霊したのだった。

第参章 〈東方桜春雪篇〉

第14斬【人里での約束】

幻想郷——外の世界から結界により隔離された人間や妖怪、神や宇宙人、偉人などが暮らす幻想のような世界。まるでお伽話に出てくるような世界観で、空気の汚れなど一切ない一昔前の世界観。

そんな幻想郷に、外の世界である人間……黒崎一護が幻想入りしてしまった。

そして博麗の巫女である博麗霊夢に出会い、霧雨魔理沙に出会い、幻想郷での日々が始まる。

*

紅霧異変解決後、紅魔館で戦いの傷と疲れを癒し、数日後に博麗神社へと帰ってきた。

その次の日にある異変が起きたのだ。

昼——一護と霊夢が食事を終え、ゆっくりとくつろげる時間に一護は新聞を広げ、届いていた文々。新聞を読んでいた。

勿論、トップ記事は紅霧異変のことが記載されている。

書かれている内容もほとんど事実のみで、嘘偽りはない。

だが——

「何で、俺の写真が……」

記事内容ではこの紅い霧を解決したのは博麗神社の巫女である博麗霊夢と、そこに居候している黒崎一護のお陰と書かれてある。まあ問題はないだろう。

問題がある点と言えば、記事に大々的に掲載されている写真だ。

その写真はと言うと、まさに一護とレミリアが屋外空中戦を繰り広げている瞬間だった。これ以上ない激写だ。

いつ撮られたんだ？ と疑問に思ったが、あの時は戦闘中だったため周囲の気配など気にしていられなかった。故に気づかなかつたに違いないだろう。

「……………」

スつと新聞を閉じる。

まあ今回の文々。新聞は特に、何も危険な要素はないため大丈夫だろう。

そして気づく。

「にしても霊夢のやつ、遅いな」

霊夢は食後の茶を汲みに台所に行つてから、中々戻つてこない。

少し気になった一護は立ち上がり、台所に様子を見に行つた。

そこで……一護はうつ伏せに倒れている霊夢を見つけた。

手や足がびくびくと、死にかけのゴキブリみたいに震えている。場所が台所だけにリアリティがある。

「お、おい、大丈夫かよ霊夢？」

一護が霊夢の傍らに座り、霊夢の背中を両手で揺さ振る。まるで死人を揺さぶてるようだ。

そして、その応答に答えるよう、霊夢が顔だけを一護の方に向けた。

霊夢の顔は風邪を引いたかのように赤くなっている。

「一護……体が痺れて……動かないんだけど……」

霊夢が滅多に見せない弱々しい声音で言う。

どうやら口を動かすだけでも、精一杯に見える。

「……まさか」

霊夢の言葉を聞いて、ふとあることを思い出した。

魔理沙が紅霧異変の時に持ってきた回復薬だ。

霊夢はあの回復薬を飲んでいる。

あの回復薬は異常に効くが、決定的な副作用がある。

体が全身麻痺し、動けなくなることだ。

今の霊夢は完全にそれと一致する上、確かまだ副作用に犯されていない。

「霊夢、多分それ、魔理沙の薬の副作用だ」

「えっ？」

この反応、どうやら霊夢は薬の副作用のことを魔理沙から聞かされていないようだ。

一護はあの時の薬のことを説明した。

*

「——つー訳だ。魔理沙から聞いてねえのかよ？」

説明し終わった一護は、知っていたか確認を取ってみる。

「そんな話、知らないわよ……！」

予想通りの答えが返ってきた。

魔理沙は副作用の説明をしないまま飲ませたようだ。

「そういうの普通は飲む前に説明するものじゃないの……？」

「普通はな。ちなみに俺も飲んでから教えられた。長い付き合いだろ、魔理沙に普通を期待すんなよ」

一護は頬を掻きながら、

「まあいいか。取りあえず布団敷くから、そこで横になつとけよ」

「そうさせてもらうわ」

「それじゃあ、少し失礼するぜ」

と、一護は倒れて動けない霊夢を軽々とお姫様抱っこをしてみせた。

「——ツ、な、えつ、ちよつと!?!」

急なことで顔を赤らめ恥ずかしがる霊夢。

「い、いきなり何するのよバカ!」

「何言ってるんだよ、動けないお前を引きずって部屋まで運べつてのかわ？ こつちの方がいいだろう」

一護は至って普通に答える。

「そ、そういう事を言いたいわけじゃないわよ……!?! そ、そういうことをするのなら一言……」

急に言い淀み始めた霊夢に、一護はどこか得心の言った顔になり、

「ああ、心配すんなよ。全然、重くねえから」

と悪気なく言った。

「……あ、あんたつて人は……本当に何なのよ!」

「いでえッ!」

なぜか痺れて動けない霊夢から拳を一発もらったのだった。

そうして一護は動けない霊夢をお姫様抱っこにて、部屋まで運ぶ。実は重く感じていたが、それは全身が動けないせいだろう。決して体

重がヤバイ訳ではない。

部屋に入ると一護は布団を敷き、霊夢を横にさせる。

「んじゃ、何かやらねえといけないこととかあるか？」

動けない霊夢に代わって家事、買い物、その他諸々を済ませなければいけない。

「それじゃあ、食料の買出しでもお願いしようかしら」

「買出し……」

「ええ、そうよ。人里まで行けば食料が売っているから」

霊夢はそういうと、買ってきてほしい物を言っていく。口が軽く動き始めたのは、体の麻痺を少しずつ抑制しつつあるからだろうか。

それ程までに買い出しは多くないためメモはせず、一護はそれを全て記憶する。

お金は霊夢の財布から言われた金額だけ抜いた。

「でもよ、一人で大丈夫か？ そんな体でいきなり妖怪なんかに襲われでもしたら」

「心配いらないわよ。神社の周りに結界を張つとくから。それに……」

霊夢の視線が一護から縁側の方に移る。

その瞬間、いつも通り箒に乗ってやってくる魔理沙が颯と現れた。

「よお霊夢に一護。遊びに来たぜ！」

魔理沙が箒から降り、地面に着地する。

と同時に、横たわる霊夢の姿が目に入った。

「どうしたんだ霊夢、風邪か？ 体には気を付けろよな。情けないぜ」

魔理沙が溜め息混じりに言う。

瞬間、そのセリフを聞いた霊夢の額から青筋が立った。

「一護……早く行ってきてくれない」

霊夢の声調が急激に変化した。例えるなら、氷点下と言ったところだろうか。

恐怖……殺気を感じた一護は身震いがし、直ぐ様「行ってくる」と言い、部屋から逃げるように去って行った。

一護が神社から出て、人里に向かって飛び立とうとした瞬間、神社

の方から「魔理沙アツ!!」と霊夢の怒鳴り声が聞こえてきた。

一護は聞かなかつた事にして、人里の方に向かった。

人里に向かって飛んでいる中、一護はふと思った。

(「そーいや、人里に行くのは初めてだな」)

霊夢から人里の事は少しだけ聞いた事があつたが、行ったことは無かつた。

だから行ってみたいとは常々思つてはいた。

しかし正直あまり今は行きたくない一護。

何故かというと、あの文々。新聞のせい。あの新聞には自分の事を異変解決前に、戦闘狂みたいだと書かれていた。

もし、人里の人達に警戒でもされたら気分的に最悪だ。

一護は心に不安を募らせながら人里の方にゆつくりと飛んでいく。

*

同時刻、広大な庭に大きい日本屋敷がある、とても風情ある場所に二人の女がいた。

「では幽々子様、今晚の買出しに行つてきます」

少女が買い物かごを手に、目の前の女性にそう言う。

「は〜い。行つてらつしや〜い」

女性は微笑みながら、柔らかく脳天気 to 答える。

どうやら、この二人は主従関係のようだ。

少女はペコリと頭を下げ、そのまま人里へと向かった。

*

更に同時刻、竹の生い茂る中にひっそりと建てられている屋敷がある。

その屋敷から一人の男が出てこようとしている。

「どこに行く気?」

その男は一人の女性に呼び止められた。

男は女性の方を見て口を開く。

「少し出る」

男は低い声で簡略に答えた。

「そう。だったらついでに買い物を頼めるかしら。そろそろ頃合いだ

しね」

「……好きにしろ」

男がそう答えると、女性は買ってきてほしい物を言った。

「それじゃあ、よろしくね——」

女性は見送り、

「ウルキオラ」

女性は男の名を言った。

「ウルキオラ」と……

《2》

人間の里

幻想郷における、普通の人間達が住んでいる集落。

妖怪の賢者が保護しており、人間の里の中にいれば妖怪に襲われることはほとんど無い。

人間が生活する分に必要なものは全てこの里の中で揃う。その為、霊夢はいつも里で食料や道具の購入をしている。

妖怪も人里に来ることはある。

だが、ここを訪れる妖怪達は暴れ回ったりすることはないため、人間と妖怪の交流もなかなか多い。特にお酒の飲める店では、人と妖怪が一緒になって盛り上がることも割と日常茶飯事らしい。

一護は今、そういう里に向かっている。

*

——数分後。

一護は人里に到着した。

「……………」

まるで過去にタイムスリップしたような集落。

流魂街や日本史の資料で見た、一昔前の風景に似ている。いや、まさそのものである。現代からは程遠い風景とっていいだろう。

里の人の着ている服も時代劇でよくみる着物だ。

だから、一護の着ている外の世界の服は嫌でも目立つし浮く。

「……………やっぱ、目立つよな」

周りの人々が、里を歩む一護をチラチラと見てくる。とても視線が痛い。

しかも時折、どこからか囁き声が聞こえてくる。勿論のこと、その囁き声は一護の耳にキツチリと入っている。

そしてその囁き声の内容はほとんど、あの新聞のことだ。

詳しくまでは聞き取れないが、人里に何だか居づらい一護は、早めに買い物済ますことにした。

何でも揃うスーパーマーケットのような店はもちろん存在せず、八百屋や魚屋、肉屋など一つ一つ独立した店になっている。よつてお店を梯子しなければならぬ。

「そう考えると、現代の市場ってのは便利だったんだな」

そう呟いた瞬間だった――

「そこのオレンジ頭君、ちよつといいか？」

不意に、後ろから声を掛けられた。

流石に直接、話しかけられると思わなかった一護は、直ぐに後ろを振り向く。

そこには、一人の女性がいた。

腰まで届こうかというまで長い、青のメッシュが入った銀髪。頭には頂に赤いリボンをつけ、赤い文字のような模様が描かれた青い帽子を乗せている。この帽子は六面体と三角錐の間に板を挟んだような形。衣服は胸元が大きく開き、上下が一体になっている青い服。袖は短く白。襟は半円をいくつか組み合わせ、それを白が縁取っている。胸元には赤いリボンがつけてある。下半身のスカート部分には幾重にも重なった白のレースがついている。

「……えっと、俺のことっすか？」

一護は自分で自分を指差し尋ねてみる。

「ああ。急で申し訳ないが少し時間を頂けるか？」

「……いいですけど」

誰かに声をかけられるかと思っていた一護は、別にその申し出に断る理由は無かったため承知した。

一護と女性は適当な茶屋に行き、店前に置いてある横幅の広い腰掛

けに座った。

今時、外の世界ではほとんど見ない茶屋なため、どこか新鮮感がある。

「で、用件は何ですか？」

隣に座す女性に言う。

「まあそう急くことはないだろ。ここの串団子は美味しいぞ。どうだ？ もちろん私の奢りだ」

「はあ、じゃあお願いします」

女性は茶屋の主人に茶と団子を二人前注文する。

流石、本場茶屋なのか注文して直ぐに茶と団子が運ばれてきた。

女性はまず茶を一口啜り、

「自己紹介が遅れたな。私は上白沢慧音。この里で寺子屋の先生をしている。よろしくな」

「へえ先生ですか。それは凄いつすね。あ、俺は黒崎一護。訳有って博麗神社に世話になっている外来人だ」

お互い自己紹介をする。

「ああ、知っている。新聞に載っていたからな」

新聞……一護に嫌な記憶が蘇る。

あの嘘八百の文々。新聞……一護の事を戦闘狂と書いた上、強いヤツ大募集という随分と身勝手なことを書いてくれた新聞だ。

「……まさか、あの新聞読んでるんですか？」

「まあな。けど、心配するな。私はあの新聞のことをほとんど信じていない。内容が内容だ。拡張解釈や脚色など多いと思うしな」

それを聞いた一護は一安心する。

「うん、美味しい。ここの団子はいつもと変わらず美味だ」

串団子を食す慧音。

「君も食べなよ。味なら保証する」

「ああ、それじゃあ遠慮なく、いただきます」

とりあえず、串団子を食べてから本題に入ることにした。

「——それじゃあ上白沢さん、用件つてのをそろそろ聞かせてくれねえか？」

「慧音でいいよ。用件つてのはな、黒崎一護君……君に寺子屋の子供達に、外の世界の事を少し教えてやってくれないか？」

「え？」

あまりにも的外れな用件に一護は目を丸くする。

「いや、別に嫌なら断わってくれても構わないぞ。こんなお願い、急にされても困るだろうしな」

慧音が少し焦り口調で言った。

やはり前振りもなしに言ったのが悪かったと少し反省。

「いや、別に断わる理由なんてありませんけど、またどうしてですか？」

今はそれ程忙しくないの、取りあえず了解する。

そして、その理由を聞いた。

「簡単なことだ。近頃、子供達が外の世界に憧れているんだ」

「え、それはまたどうしてですか？」

「新聞だよ。それで外の世界からきた君の事を子供達が見て聞いて、興味を示したんだ」

「あの新聞ですか」

あんな新聞で自分のことを知られたと思うと最悪だ。

取りあえず、その子供達にはいくつか間違いがあるという事を教えないと、と思う一護。訂正箇所が多過ぎるが。

「そして今日の朝、子供達が新聞を見てきたらしく、その話題で授業が全く進まなかったよ」

今日の新聞と言えば、一護と霊夢が紅霧異変を解決したという内容だ。

この記事に対しては特に問題ない上、前の新聞の内容が内容だけにその悪評を、今回の新聞で解消できたことになる。

「たしか、あの異変の事だよな」

「ああ、その通りだよ。あの新聞で興味から憧れに変わったんだ。今の君は子供たちから見れば、まさに英雄、外の世界風に言うところパーマンというやつだ。あの内容は事実なんだろう？」

「あれは本当ですよ。どうやって記事にしたのかは知りませんが。」

ちなみに、その前の新聞は丸切り嘘なんで、この場で訂正しておきま
すね」

「やっぱりそうか。写真まで載せられていたから確信はもてたが、や
はり本人に聞いてみないと思ってるな」

慧音は団子を頬張りつつ、

「しかし、君が好青年で何よりだ。君が本当に、あの新聞通りの戦闘狂
いの悪漢だったらどうしたものかと思ったよ」

「いやだから、それは？八百なんで忘れてください。……ちなみに、俺
がそんな男だったらどうしてました？」

「ああ、もしそうだったら……あなたという存在を歴史から抹消して
いたわね」

「そうでなくて俺は良かったです」

やはり幻想郷はデンジャラスな人が多い多いと、改めて再確認した
一護だった。

慧音は残りの茶を飲み干し立ち上がる。

「さて、そろそろ行かないと。それじゃあ、黒崎一護君。いつでもいい
から寺子屋に寄ってくれ。子供たちもきつと喜んでくれる」

「あ、はい。分かりました、時間ができたら行きます」

慧音はその言葉を聞くと、まるで急ぐように走ってどこかへ行っ
た。

一護はフランに続いて、また約束をしてしまったのだった。

*

その後、一護は適当に里をブラブラ歩き回った。

直ぐに買出しを済ませて帰ればいいんだが、ついでに人里がどんな
ところなのかを自分の目で確認する為に適当にぶらついているのだ。

周りの視線もそれ程気にしなくなった。

と言うのも、慧音から新聞のことで思っていたより悪い風評は耳に
しなかったからだ。

それに周囲の視線も改めて思い直すと、自分が過剰に反応していた
だけだったのかもしれない。

故に堂々と、あまり気にせず里を堪能できた。

「——さて、そろそろ買い物して帰るか」

ぶらついて二十分くらい経っただろうか。

満喫した一護が適当な店に入ろうとした瞬間だった。

ある一人の少女が一護の姿を見て、駆け寄ってきた。

「あの、お忙しいところ申し訳ありません」

「ん？」

背中に物騒な二本の長刀と短刀を携えている少女。

さらさらとした銀色の髪をボブカットにし、黒い質素なりボンを付けている。そして白いシャツに青緑色のスカート。

その少女の傍らには白くて大きい幽霊みたいなのがいる。

何やら本当に、幻想郷にいる子は個性的というか、外見が特筆過ぎる者が多過ぎる。

「えっと、何か用か？」

一護が聞くと、少女はペコリと頭を下げ、

「はい。あなたがあの、紅い霧の異変を解決した黒崎一護さんですか？」

セリフからするに、新聞のことで一護のことを知ったのだろう。

一護は端的に答える。

「ああ、そうだけど」

それを聞いた少女の表情が明るくなった。

「やっぱりそうですか！ あ、申し遅れました。私は魂魄 妖夢と言います。以後、よろしければお見知りおきください」

妖夢という少女がペコリと、再度お辞儀をする。

「あ、俺は黒崎一護といいます」

その姿を見た一護も、ほぼ反射的にお辞儀をし名乗った。

なぜか丁寧語になってしまった。相手が礼儀正しいせいだろうか。

一護と妖夢はお互い顔を上げ、一護が口を開く。

「で、俺に何の用なんだ？」

「はい。早急で極まり無く不躰なんですけど、一つお願いしても宜しいでしょうか？」

「……構わねえけど」

これと言って断る理由が無いので承知する。まあ頼む内容が洒落にならないことなら断るが。

「ありがとうございますー!」

妖夢は深く頭を下げる。

律儀な子だ。霊夢や魔理沙も見習うべきだと思った。

「では、そのお願いですけど……私と、一戦交えて頂けませんか?」

さつきと同じくらい予想外の願いに少し驚く。

これで今日までに三つの約束をすることになるが……

「別にいいけど、どうして俺なんだ?」

「今日の文々。新聞を読んで尊敬したんです。幻想入りしたばかりの人が異変を解決した上、あの吸血鬼と互角以上に戦った」

本当に、一護を敬っているかのように言う。

何か逆に恥ずかしくなる一護。

刀を持っているから、やはり研鑽を積みたいのだろう。誰だって、強くなりたいと思うのは必然だし、この幻想郷は物騒だ。

だから戦うものとして練度は欠かせない。

「それで俺と戦いてえのか?」

「いえ、本当の理由は別にあります。しかし、不遜ながら私はあなたに憧れを抱きました。そんなお方と手合わせ願いたいのは当然です。受けて頂けないでしょうか?」

もう一度聞いてくる。

本当の理由というのが分からないが、特に気にすることはなかった。それに何やら真剣味を帯びていたため、一護は「ああ」と言い約束をした。

「ありがとうございます」

妖夢はもう一度お礼を言う。

しかしながら、このような少女まで強くなりたいと思うのは、やはり外の世界ではほとんど有り得ないことだ。

外の常識は全く通じない。あながち間違いではない。

こうして一護はまたまた約束をしたのだった。

*

一護はあの後、妖夢に模擬戦を行う日取りと場所を言われ去った。妖夢……多分だが、あの子は中々の強者だろう。憶測になるが、何故かそう思った。

と言っても、レミアアクラスではない。美鈴レベル……か、それより少し下。しかし強いことに変わりはない。

そして霊夢に言われた買い物を終え、一護は人里を出ようとしていた。

この里に来て一護は二つも約束をした。

慧音とは寺子屋の子供達に外の世界を教える約束。

妖夢とは戦いをする約束。

一護は一つ溜め息をつくとき、博麗神社に向かって飛ぼうとした。

その瞬間、後ろの方から強い視線を感じた。

少し殺気が込められた視線。

一護はバツと後ろを振り向く。

だが、そこにはそういう視線を送っている人物はいない。

けどあの爛れるような、迸ったかのような強い殺気は、一瞬だったが確かにあった。それは一護の粟立ちが如実に物語っている。

まるで少しでも気を緩めていたら刎頸されていたかもしれないよ。うな、出鱈目で洒落にはならない無謬なる殺気だった。

「……………」

放っておけば危ない。いずれ自分らの脅威になるだろうと、直感的に感じ取る一護。

とりあえず深く詮索するのは止め、そのまま博麗神社へと帰った。

例え人里で見つけ出しても、戦えない。

あんな無辜の民が平和に暮らす場では……

一護が飛んで行くと同時に一人の男が物陰から現れた。

その男は角が生えた仮面を左頭部に被り、瘦身に真っ白な肌をした黒髪の男。貫通した孔が喉元に開いており、緑の両眼の下に、垂直に伸びた緑色の線状の文様がある。そして、コート状の死神のような白い死覇装を着ていおり、腰には一本の刀を差している。

そう、この男は死神時代の一護と壮絶な戦いをした破面——ウルキオラ・シファア。

だがウルキオラは一護との死闘の末、消滅した。その男が平然とそこにいるのだ。

消滅した男がそこに……

「黒崎一護……やはり、幻想郷に来ていたか」

ウルキオラはボソリと呟き、その場から姿を消した。

一護はまだ知らない。

自分以外にも、幻想入りしている者がいることを。

一護が博麗神社に戻ると霊夢の副作用は治っており、魔理沙が床の上で気絶していた。

《3》

自己愛——他人に対して優しくするのは自己意識であり、自己愛。他人を助けるのは自己満足であり、自己愛。他人を嫌うのは自己防衛であり、自己愛。他人を陰で貶すのは自己欺瞞であり、自己愛。他人から評価を求めるのは自己顕示であり、自己愛。

生き物は全て自己愛の巣窟。

何てことを——

「刹蘭さんは言ってるわけだア、こりやまた捻くれ放題のお人！」

何処にいるのか、どんな場なのかも表現できない、ナニかなる場所に、一人の男は立っていた。

「いやいや賞賛すべき対象だ。狂つてると言うべきなのか、それこそ生き物の在り方を認知しているお人なのか判然しきれないねエ、アハハハッ！」

こんなにも言葉を軽々しく言っている人間はいるのか？ と感じてしまう虚無の塊であり、空っぽな男。

恐らく善悪共に相容れない存在。誰とも仲良くなれない存在。否、恐らく総てを侮蔑、逆撫でする対象になってしまうであろう、世界が認めない存在。

そんな男は、一体誰につぶやいているのかすら分からない。

「しつかし、刹蘭さんの言う通り、ホントにあの少年が幻想郷へ来たんだ。バツカだねエ！ もしかして、あの女、あの男に期待とかしちゃってる訳なのかな？」

独り言……なのだろうか？

それとも刹蘭と言う男に言っているのだろうか？

「うんうん、まあ期待するだけ損だと思っただけだねエ。幻想郷にはバカな連中が多いから。自己陶醉ってやつなのかア？ そんな連中の淫らな溜まり場みたいなの……うっわキモオ、アツハハハハハ！」

男は紡ぐ言葉を制止させ、口角を不気味に吊り上げ、

「じゃあ、刹蘭さんの言う通り、高みの見物といきますかあ。三流映画を観る気分で、ご堪能しよう。——観客の目はないが、役者は総じてご覧あれってね」

瞬間、男は全てを意図的に仕組み、支配し始めた。

それこそ、これからの事象すべてが誰かの掌の上で躍らせるかのよう。

「踊る阿呆に見る阿呆、飛び入り大歓迎のパーティーってことで——お一つよろしくウー！」

男の哄笑と共に、全てが始まる。

第15斬【一護VS妖夢】

魂魄妖夢との模擬戦の約束の日は一週間後。

場所と時間は、正午に人里から西へ1km程にある平原。

この約束については、霊夢の方にも伝えましたが、興味がないのかほぼ無関心だった。本当、他人に対してはあまり見向きしない。

そして、直ぐに一週間が経った。

*

「そんじゃあ、行ってくるぜ」

そろそろ頃合の時間となり、黒崎一護は約束の場である平原へと向かう準備を済ませ、霊夢に告げた。まあ準備といっても、靴を履いてENDだが。

霊夢は「早く終わらせて帰って来なさいよ」と心底どうでもよさそうに言っつて、一護を見送る。

一護は「ああ」と言い、平原へと向かって飛んだ。

*

目的の平原までは空を飛ばせば直ぐに着く距離だ。

故に時間の調節を間違えてしまい、少しどころか結構早い時間に平原へと到着した。

早すぎたかと思つた矢先だった――

「黒崎さんー!」

自分を呼ぶ声が聞こえ、一護はそちらへと顔をやる。

そこには出会つた時と同じ姿で、短刀と長刀の二本を背中に携え、傍らには白い幽霊のような生き物を連れている妖夢の姿があつた。

一護が妖夢の目の前に着地すると、感心するように口を開く。

「よお、妖夢。随分と来るのが早いな」

自分ですらかなり来るのが早かつたのに、妖夢は更にそれを上回つていたのだ。

「いえ、私自身が頼み事をした故、後から来るのでは黒崎さんに失礼だと思ひまして」

何とも律儀な子である。

どこぞの巫女や魔法使いに爪の垢を煎じて飲ましてやりたい。

「そ、そうか。別に俺にそんな気を使わなくていいぞ。そんなんじややりづらいだろ?」

「いえいえ私がお願ひした身です。黒崎さんはお気楽にお願ひしたく思いますゆえ、気など使わなくてください」

——ああ、何て良い子なんだろ。

一護は涙を流しながら、目の前の煌めく少女に目が当てられないでいた。

今まで出会った女性は、現世も含めて男顔負けの連中ばかり。こんな優しくいい子、滅多にいないだろう。

と、感涙した一護は改め、

「さてと、どうする? 早速始めるか?」

「あ、いえ、始める前に少し質問してもよろしいですか?」

「別に構わねえよ」

「……黒崎さんは、外の世界から幻想入りした人で間違いないですよね?」

「間違いねえよ。俺はれっきとした外来人ってやつだ」

外から来た人間で外来人。

ちなみに外からは人間だけではなく、物なんかも幻想郷に迷い込んだりもする。

「私は、実際に外の世界を見た訳ではありませんが、聞くところによると外の人間はそれ程までに強くないらしいんです」

「まあ妖怪なんかと比べたら、そりゃ人間は無力に等しいかもな。ちようど人里にいる人間と同じだ」

「そこです。そんな人間である黒崎さんが、どうしてあの吸血鬼を倒し、異変を解決したのかが不思議で仕方ないのです」

「あく、まあ確かに疑問に思うだろうな」

並の人間なら、吸血鬼と対峙しただけで足がすくみ、殺気を当てられるだけで失神するのは確実だろう。

だが外来人は希に異能を身に持つことがある。その能力によっては、強い妖怪に勝つことが可能になるかもしれない。

しかし問題は、強い能力を持ったところで体力、精神力、能力を使う際の技術力がしつかりしていないと、相手の殺気だけで気絶モノだ。もしくは能力を使う前に、単純な攻撃で打ちのめされる。

故に知りたいのは――

「黒崎さん、失礼を承知の上で申しますが、黒崎さんは本当に人間なのですか？」

幻想入りしたばかりの人間が、こんなに早く上位の妖怪、吸血鬼を退け異変の解決なんて出来るわけがないのだ。例え博麗の助力があつたとしても。

一護は妖夢の深入りな疑問に対し、

「当たり前だろ。俺は人間だ」

そう、人間で間違いない。

昔は人間の力を超越した死神の力、そして虚の力もあつた。

しかし今では能力がなければ、普通の人間と変わらない。そこらの妖怪にも敵わないだろう。

「……………ですよね。愚問でした。おかしなことを聞いて申し訳ありません。質問は終わりです」

ペコリと頭を下げる。

「では、そろそろ宜しく願います」

妖夢は背中に携えている長刀を引き抜く。まるで斬魄刀だと思ふ一護。

「この刀は楼観剣。私の大切な一振りです」

「そうか。じゃあ、始めようぜ」

一護はザツと後ろに跳び、距離を置く。

そして戦いが始まった。

妖夢の持つ刀は真正銘の、鋭利な刃を持った武器。

故に死神時代の戦いを思い出す。刀と刀が交差していた、あの頃を……

「――行きますー！」

地面を蹴り、妖夢の鋭い突きが身体ごと飛んでくる。

(ハナっからぶっ飛ばしてきやがった！)

速さは美鈴より恐らく上。下手に手を抜いて戦える相手ではない。

「黒符『月霊幻幕』！」

咄嗟の判断でスペルカードを唱え、無数の三日月状の弾幕を展開し、間隙なく放つ。

妖夢は速さを瞬時に落とし、地面が陥没するかの勢いで止まり同じくスペルを唱えた。

「幽鬼剣『妖童餓鬼の断食』！」

一閃、刀を振るった瞬間、その軌跡から無数の弾幕が前方に放たれた。

一護の弾幕と妖夢の弾幕が激突し、相殺し合いながら土煙が巻き大地を衝撃で破壊していく。

「チッ！」

前方が土煙で視界が悪くなり、一護は必死に気配を探ろうとした時……

土煙の気流がおかしくなったかと思うと、そこから土煙を引き裂きながら銀色に煌く鉄閃が繰り出されていた。

一護は間一髪で躲すも、続いて妖夢の剣閃が舞い踊る。

「——ッ！」

まるで絢爛な剣舞。

妖夢の刀は一切隙を与えず、連続性を帯びながら怜悧に精緻に、無駄のない体捌きで踊り続ける。純粋な剣技だけなら、死神でも上位クラスになれるだろう。

迅速に、静謐に、妖夢は全霊を持って刀を振るい続ける。

「やっぱ強えな、妖夢！」

並大抵の修練ではここまで強くなれないだろう。

故、この子はここまで強くならなければいけない、何か理由があるに違いない。

一護はそれを感じ取りながら、妖夢の剣戟を掌握し、一気に後ろに飛び退く。

「次はこっちが攻めるばんだぜ！」

後退し、距離をとった刹那に、一護は妖夢の背後を俊敏な動きで移

動していた。

しかし妖夢は鋭い瞳で見切り、捷い動きで一護が攻撃の動作に入る前に刀を振るい反撃する。

「——ッ！」

まさか反撃されると思わなかった一護は、上半身を反るように避けるも少しだけかすった。

ヒュツと、衣服が横一閃に裂け皮膚にかすかだが、血が滴る。

そして直ぐに二撃目が一護を襲ったが、再び後方に跳び退き、体制を立て直そうと図る。下手に拮抗するように攻撃しても、体勢的に妖夢が圧倒的有利だ。

故に、後方へ跳んだのだが——

(今だっ！)

妖夢は一護の跳んだ瞬間を計らい、即座にスペルを唱える。

「人符『現世斬』！」

妖夢は前方に踏み込む。

刹那、全く目視不可な瞬速で一護へと斬り込んだ。

その速さは、一護が後方に跳んで着地する前の、足が宙に浮いている回避不可な状態で右肩を峰打ちだが斬り抜けていた程だ。

(速エッ！)

峰打ちだが、これが死合だったら右腕は軽く持って行かれただろう。

それに妖夢の反射神経に应变な対処、動体視力は半端ではない。

「やるじゃねえか。お前、今でも充分強いぜ」

上から目線で悪いが、本当に賞賛に値する強さだ。

恐らく、今まで血反吐を吐くような努力をしてきたのだろう。努力の天才ってやつだ。

「お褒めに預かり光栄です。ですが、黒崎さんはまだ殆ど力を使われていませんね。僭越ですが、少し本気を出しては頂けませんか？」

妖夢は構えを解かず、そう言う。

「……ああ、そうだな。下手に手加減したら、お前に悪いな」

瞬間、一護の霊圧が妖夢の言葉に答えるよう急激に上がった。

その霊圧に剣呑した妖夢は、力強く刀を握り緊張を解かず、常時全開を心がける。

「んじゃ、こっちもマジで行くぜ」

ズボンのポケットから代行証を取り出す。

そして、いつも通り代行証を中心に黒い霊圧が卍型の形になった。

「何ですか、それは？」

「こいつは、そうだな。俺にとって大切な物で、俺に力を与えてくれるもんだ。そんじゃあ、行くぞッ！」

それだけを言い、一護が烈風の如く速さで動き、

「——ッ」

代行証の鏢である霊圧を妖夢に向かって振り下ろした。勿論、妖夢はそれを軽く刀で受け止める。

鏢迫り合い……なのか。一護の霊圧の鏢が妖夢の刀と軋り音を立て、火花が飛び散っている。どちらも気を抜けない力比べ。刀と刀なら妖夢の並外れた剣技で対処可能だが、生憎と一護のは卍型の霊圧による鏢だ。頭にあるどの対処法も適切にはならないだろう。

「く……ッ！ やりますね、黒崎さん！」

「お前もな、妖夢！」

互いに互いを褒める。

しかしそんな中も、気を抜けない状態である。

膠着状態が続く。一護はこの態勢を解けない。下手に解いたら最後、妖夢の刀が颯風と共に飛んでくる。それは妖夢も同じだ。お互い、この状態を下手に解くことは出来ない。

——と、思われていた。

「ハアアアアアッ！」

その細腕からは出たと思えない、凄まじい剛力。

それが一護の鏢を圧倒し、そのまま一気に弾いた。

「なッ！」

一護はそれに驚愕するも、直ぐに妖夢の追撃に備える。

だが再び——

「人符『現世斬』！」

凄まじい速さで、一護を斬り抜ける。

「クソツ、やっぱ速エ！」

だが流石に二回も見たら、三回も喰らうことはない。

勿論、妖夢もそう思ったのだろう、現世斬は使わない。

「こいつは、やっぱ近接は不利か。なら——そろそろ見せてやるよ。俺の最強のスペル」

「！ 黒崎さんの、最強のスペル……!?!」

その言葉に、妖夢の心が打ち震えた。

これは謂わば、自分の尊敬する相手に認めてもらえたに同義だからだ。

「——黒斬『月牙天衝』」

一護がスペルを唱えた瞬間、代行証の霊圧が急激に増し、まるで風車のように回転し始まる。そして同時に、月牙天衝が撃ち放たれた。

「ツー！」

妖夢はそれに対抗せず、逡巡せず月牙を避ける。

本能で、あれとまともにぶつかってはいけないと、判断したのだろう。それが正解だ。あの月牙はレミリアの弾幕でさえも、何の障害にもせず破壊したのだから。

「凄いですね。これが黒崎さんの最強のスペルですか」

月牙に圧倒された妖夢。

あれに対抗できそうなスペルは、恐らくだが無いだろう。

だが、妖夢は何処かであれとぶつかりたいと思っている。

「ああ。これが俺の切り札だからな。そんじゃあ、もう一発いくぜ」
一護は再び月牙を放った。

妖夢もそれに対抗するようにスペルを唱える。

「餓王剣『餓鬼十王の報い』！」

妖夢は先と同じように横に一振りした。

妖童餓鬼の断食と同じように、刀の軌跡から瀑布の勢いで無数の弾幕が放たれる。しかしその数、勢いは妖童餓鬼を優に超える。

だが月牙はその弾幕をも掻き消していく。

無情に、無慈悲に、情け容赦なく。この月牙を前にすれば、全てが

無力のようだ。

(やはり、この程度のスペルでは歯が立ちませんか。では……)

月牙の攻略を諦め、月牙の軌道から外れた場を移動し、一護を狙って斬りかかる。

一護はそれに直ぐに気づき、対処するためスペルを唱えた。

「やっぱ、そう来るかよ。黒符『月霊幻幕』！」

小型の月牙が無数に放たれる。

妖夢が刀に力を込めたら、弾幕を切り伏せることも可能だが、数が数だけに不可能だろう。

故に――

「魂魄『幽明求聞持聡明の法』！」

妖夢がスペルを唱えた瞬間、一緒にいる幽霊のようなものが妖夢の姿を模った。刀も携え、幽霊にありながら物理法則に則り質量も宿している。

まるで妖夢が二人になったようだ。いや、今は二人なのだろう。

二人の妖夢が一護の弾幕を、並外れたチームワークで効率よく斬っていく。純粋に二倍の戦闘力。否、そのチームワークを見るにそれ以上とみていいだろう。

「おいおい、どんなスペルだよ」

フランの禁忌『フォーオブアカインド』のような感じだ。

しかしこの分身はフランの四人と違って、まるで姉妹かのように意思を共通しているかのように攻めて来ている。

「二対二か。厄介だな。けど、やれねえことはねえ」

近接は不利だと思ったが、やはり死神時代はこういった戦いをしてきたため、昔の一護の血が騒いでいるのだろう。

再び代行証で妖夢二人へ挑んだ。

――近接戦が始まり、激闘して数十分。

一護と妖夢は疲弊を隠しきれず、息が荒れていた。妖夢の分身も消え、再び幽霊となり浮遊している。

「やっぱ、充分強えぞ妖夢」

「いえいえ、私などまだまだです」

あくまで謙遜する妖夢。そんなことは一切ない。実力で言う和美鈴くらいは余裕で強いかも知れない。

一護は潮時だと思っただのか――

「妖夢、そろそろお前の最強のスペルを見せろよ」

「そうですね。これ以上の戦いは、あまり良くはなさそうですし。……最強かどうかは分かりませんが、これで最後にします」

遂に、最後の激突が始まる。

妖夢は刀を前に構えスペルを唱える。

「断迷剣『迷津慈航斬』！」

妖夢の刀の刀身に青い大量の妖力がつき込まれ、巨大な刀身が作り出された。

その妖力、恐らく今まで見た妖夢の力の中で無謬の本気だろう。あれに注ぎ込まれた力は、恐らく月牙天衝に負けない程の質量。

「すげえな。けど、俺も負けねえぞ。黒斬『月牙天衝』！」

一護の代行証の卍型の部分が歯車のように高速回転する。

一護も妖夢に応えるべく、自分の霊力を力一杯込めた。

「では、行きますー！」

妖夢は刀を頭上に振り上げ、一気に一護に向かって天空を引き裂きながら振り下ろされた。大地を劃かつほどの力を有している刀を前に一護は、

「負けねえぜー！」

真っ向から挑む。

放たれた月牙は妖夢の刀と激突し、拮抗し始めた。

空間が振動し、凄まじい力と力が火花のように飛び散る。

「はあああああああ!!」

妖夢は気合の咆哮を上げ、力一杯に一護の月牙に負けないように振り下した。

そう、遂に振り下ろし切った。月牙が真っ二つに割れ、天に向かって飛翔していく。

「勝った！」

妖夢が歓喜に満ちた瞬間だった。

しかし既に一護は元の場所には立っていないく、妖夢の背後へと移動していた。妖夢に隙があり過ぎたのだ。一護の月牙に集中するあまりに。

妖夢は直ぐ様振り向くが、一護の拳が妖夢の顔に当たる寸前で止められる。

「く……っ」

「俺の勝ちだな、妖夢。ちょっとした慢心が、負けに繋がるぜ」

一護は拳を向けたまま言う。

妖夢は参ったかのように目を閉じ、

「はい、私の負けです。ありがとうございます」

こうして、妖夢との模擬戦は終わった。

*

「黒崎さん、今日は本当にありがとうございました」
深々と頭を下げる妖夢。

相手に対しての敬意が行き届きすぎている。何だろう……こつち
にきて、久々に真面目な普通人に会えた気がする。

「ああ、こつちも久々に鈍ってた体を動かせて良かった」

異変が解決してから、特に小さい異変もなかったし妖怪に襲われる
こともなかった。

故にちようど良い運動となったのだ。

「えっと、あの、黒崎さんは私がこの模擬戦を申し込んだ理由、知りた
いですか?」

やはり最低限の礼儀として、しっかりと云ったほうが良いのだろう
か思った妖夢だが、

「別に構わねえよ」

「え、ですが——」

「あんたの刀を通じて分かったんだ」

一護は妖夢の言葉を遮り言う。

「あんたは誰かを護る為に刀を振ってんだろ?」

妖夢は目を見開く。

なぜ言ってもいないそのことを、一護に見透かされているのだろうか。

「ちよつと変だけども、俺は相手と剣を合わせると相手の考えが少し分かるんだ。別に心を読めるとか、そんなんじゃないやねえけど、どういう覚悟で剣を振るってんのか、俺を見下してんのか認めてんのかも含めてな」

「す、凄いです黒崎さん。まさか相手の心まで理解できるなんて。感服しました」

「いや、そこまで褒められると逆に恥ずかしい」

「……そうです。私はある方を護る為に刀を振るい、そして強くならなければいけません」

「その為に、俺と戦ったと」

「その通りです。沢山学ばせて頂きました」

「そいつは良かった。……これからどうする？ 一緒に飯でも食うか？」

特にこれから予定がないため、適当に誘ってみた。

「あ、ごめんなさい。私、これから少し用事があります。えっと、このお礼はいつか必ずさせて頂きます！」

と、断られた。

「そうか。まあ、そのお礼ってやつを期待しとくぜ。じゃあな妖夢」

「は、はい！ では、また」

こうして一護は飛び、立ち去った。

「……………」

妖夢は一護が見えなくなると、森の方に顔を向け口を開く。

「そのような場所でコソコソと隠れていないで、そろそろ出てきてくれませんか？」

まるで敵意を向けるかのように、森の中に居る何かに向けて言葉を吐く。

するとガサガサと茂みの音がなり、そこから一人の男が姿を現した。

「るせえな。テメエが黒崎と戦っていたから出て行けなかったんだ

よ」

男は少し怒り混じりの声音で言った。

妖夢の眉間がピクリと動く。

「黒崎……何故、あなたが黒崎さんのことを知っているんですか？」

「あ？ テメエには関係ねえだろうが」

「そうですね。関係などありませんでしたね。して、用件とは何ですか？」

妖夢と男は不仲なのか、無駄な会話など一切せず、単刀直入に本題に入ることにした。

*

一護が博麗神社の前まで帰ってくると、中から色んな人の談話する声が聞こえてきた。

(……誰か来てんのか?)

客人とは珍しい。

博麗神社に来る者など、今までに魔理沙くらいしか見たことない。勿論、参拝に来る人間などもつとない。

こんな言い方をしては悪いが、神社としては機能していないに等しいだろう。

とりあえず一護は玄関の戸を開け「ただいま」と言い帰宅する。

その瞬間だった――

「一護おー……」

少女の声が聞こえたかと思うと、急に誰かが一護に抱きついてきた。結構勢いが良かったため、腹部にズシンとききた。

一護は自分の胸囲に飛び込んできたものを見る。

黄色い髪に七色の羽、赤い服に少女のような体格。

そいつが抱きついたまま一護の方に顔を上に向ける。

その顔に、一護は見覚えがあった。どころか忘れてはいけない少女だった。

「――フラン！」

そう、抱きついてきたのはフランだったのだ。

第16斬【少女たちとの戯れ（ロリコン疑惑）】

《1》

「何で、フランがここに？」

魂魄妖夢との模擬戦から博麗神社に帰ってきたら、何と紅魔館の吸血鬼——フランドルスカーレットが一護に抱きついてきた。

——え、どうして、何で博麗神社にフランが……と思ったが、一護はあの約束を思い出した。

紅霧異変が終わり、帰宅しようとした間にフランから「今度、お姉様たちと遊びに行ってもいい？」と聞かれ、快く了承したのだ。いつ遊びに来るかは言っていなかったため、いつ来るかは全く予想がつかなかった。

別にいつ来られても良かったが、まさか模擬戦の後になるとは思わなかった。

「えへへ、遊びに来たんだよ〜」

フランが抱きつきながら、顔を上げ応える。

その笑みに、あの時の狂気など一切感じない。純粹で無垢な、少女のような可愛らしい笑みだ。

もうフランに狂気などというものは宿っていないだろう。

……と、そこに三人の少女が一護の前に現れた。

「いっちょ〜」

「一護！」

「一護さん」

三人の少女が一護の名を呼んだ。

聞き覚えのある声に、一護は前を見る。

そこには水色の髪の小柄な少女と、金色の髪の小柄な少女と、緑色の髪の小柄な少女の、小柄3人娘が居た。

上から氷の妖精であるチルノ。宵闇を生きる妖怪のルーミア。妖精の中でも強い大妖精。

この三人も、博麗神社に来ていた。

「お前らまで。何で？」

「紅魔館の咲夜さんと言う方からお声を掛けられました。一緒に博麗神社に来ないかと」

一護が問うと、大妖精がご丁寧に答えてくれた。

「うん、それでねえ、一護が博麗神社に居るって聞いたから来ちゃったんだ！……む」

自分も飛びつきたいチルノだが、一護に抱きついているフランが邪魔で出来なかったため、少し頬を膨らませる。

そしてそんな思い馳せる刹那――

「わーい！ 一護久しぶりなのだ〜」

と、一護の空いている背中に抱きつくルーミア。

「お、おい、ルーミア。お前まで、よせつて」

前後から抱きつかれては身動きの取れようがない。

いや、もしかしたらこの状態を嬉しがる少女愛好者（ロリコン）が居るかもしれないが、一護は少女愛好者ではない断じてないし認めない。

チルノはそんな三人の姿を見て、怒りの念を募らせた。

その姿はまるで駄々をこねる前の女の子だ。

「フランも、ちよつと離れてくれないか？ 今の俺は少し汗臭いからさ。ちよつとシャワー……じゃなかった。湯浴みをしたんだよ」

妖夢との激戦後で、やはり汗は結構でた。

故に自分ではあまり分らないが、少し臭うだろう。そんなもの、誰にも近くで臭って欲しくない。

「だったらフランも一緒に入る！」

「あ、ルーミアも一緒に入るもん！」

そう言ってみだが、事態が面倒な方向に転んだ。

「頼むから。少し離れてくれ。つか、咲夜の声がかかったってことは、紅魔の他メンバーもここに来てるのか？」

「うん、お姉様も咲夜もパチエも美鈴もみんな来てるよ〜」

「そうか、そいつは挨拶に行かねえとな」

礼儀として当然だろう。

シャワーは……と言うか、シャワーと言う言い方は幻想郷では通じ

ないだろうが、別にシャワーでも構わないだろう。それにフランのいる紅魔館は洋館だから通じるが。

シャワーは挨拶を一通り終えてから入ろう。

「んじや、とりあえず顔見せるか。だから、早く離れてくれないか。後で遊んでやるから」

「うん、分かった」

「うう、仕方なのだ」

二人は名残惜しそうに、抱きつくのを止めた。

これでようやく動けると思った矢先だった――

チルノが抱きついてきた。それは勢いよく、腹にダメージが来るくらい。

「グツ――何すんだよ……チルノツ!」

もしあの後、妖夢と食事に行つて帰つてきてたら間違えなく、チルノの特攻で胃の中の物が全て口から発射されたであろう。

それくらいの衝撃が、腹部を襲ったのだ。

「だって、あたいだけ一護に抱きついてないもん!」

「……はあ?」

突拍子もないことを言われ、もう何が何だか訳が分からなくなった一護だった。

チルノが何故か満足気になつて離れたところで、ようやく一護は居間へとやって来た。

居間ではまるで我が物顔で座すレミリア・スカーレット。

レミリアの付近に泰然と佇むメイドの十六夜咲夜。

魔道書らしきものに目を通してパチュリー・ノーレッジ。

睡魔に犯されかけている紅美鈴。

紅霧異変に関わつたもの全員が集合していた。圧巻だ。

「……………」

絶句する一護。

いやまあ確かにフランから聞いてはいたが、改めて見てみると吸血鬼、時間を操る女、魔女、武人……普通の人間がいない。

「ふむ、久しいな一護。まさかこのような狭苦しい場所で暮らしてる

とは、息が詰まらんか？」

不遜な態度、と言うより尊大な態度で紅い眼を輝かせながら、レミアが言葉を発する。

華奢な体つきをしているが、その威光たるや凄まじい統率性（カリスマ）がにじみ出ている。上に立つに相応しい力を有している証拠だ。

「しかしお嬢様。こう言った場も、趣あつて良いではないですか。下賤な者たちにはお似合いで釣り合った場だと思われます」

「……………」

咲夜が言う。

いや、つうか、とんでもないことを言う。本当にあの時、共闘した仲なのだろうか？

もしこの場に霊夢が居たら、咲夜の言葉を発破に戦いが始まったであろう。

「——と、そんなことを言ってみたが、まあ別に悪いとは言っていない。先の発言も冗談だ。こういう屋敷も案外落ち着くものだよ」

レミアがテーブルに肘を付きながら、前言を撤回し言った。

外見だけでいえば糞生意気なガキである。

「お久しぶりです、黒崎さん！」

うとうとと、上の空だった美鈴が、朦朧とした視界で一護を確認すると、いきなり一護の前に立ち頭を下げた。

「あの時は、いやくまさか負けるとは思わなかったんですが、良い戦いが出てよかったです」

異変で戦つて以降、一度も話さなかったから、一番緊張する相手だと思っていた。

しかし普通に、気さくに話しかけてきてくれて、どこか嬉しい一護である。

「だからもう一戦、私と挑んではもらえないでしょうか!？」

何て言い出した。

「あ、いや、また今度な。今日はもう疲れた」

妖夢に続いて美鈴と戦えば、もう今日は動けなくなるだろう。この

後、恐らくフラン達にも遊びを求められるだろうし。

と、その時だった。

「おー、何だ何だこの面子は？」

空から魔女が降ってきた。

金髪に、いかにも魔女が被ってそうな帽子に、極めつけは箒に乗ってきていると言う、テンプレ的な魔法使い——霧雨魔理沙だ。

魔理沙が外から縁側を跨いで居間へと入る。

「おっ、よお一護。何でこんな濃ゆい面子が勢ぞろいしてんだ？」

「お前はまず靴を脱ぐ習慣を心がけようぜ」

どうしてなのか、魔理沙は土足で居間へと上がってきた。

和と洋の生活習慣の違いが簡単に出るが故、魔理沙は何度も注意しても間違えて土足で居間へと入り、汚れた後処理は一護がすることとなる。

魔理沙は悪気もなしに「悪い悪い」と言い、改めて靴を脱いで上がる。

「おう、久方ぶりだなパチュリー。今度また本を借りに行くぜ」

満面な笑みで、子供らしく魔理沙がパチュリーに言った。

何の曇りもないその笑みに、罪悪感など一切ない。そも、なぜ人に物を借りるのに罪悪感が生じるのか。それは——

「あんだ、私の部屋から書物を何冊も無断で借りに来てるでしょ。まずはそれを謝罪と共に返してくれないかしら」

パチュリーが不満全開に言う。

そう、魔理沙は無断で本を借りていき、例えパチュリーと出会ったとしても「死ぬまで借りるだけだぜ」などと抜かす始末。

手に負えない。始末に負えない。

しかしこれでも、魔理沙に罪悪感など皆無なのだ。

「死んだら返すから、心配すんなって」

「……私が喘息じゃなかったら、今すぐにでも取り返してるのに」

まるで苦汁を舐めたかのように、苦い顔をするパチュリー。

悔しさがにじみ出ている。

「居間にこんなに集まると鬱陶しいわね本当に」

廊下から霊夢が現れ、居間の様子を見て呟く。

小さい居間に現在六人。そこに霊夢や少女四人が加われば、窮屈なことこの上ない。

「ん、一護、その左肩の傷はどうしたの？」

霊夢は一護に目を移すと同時に、左肩の切り傷に即座に気付いた。勿論、この傷は妖夢との模擬戦での傷だ。

一応は隠していたつもりだったが、やはり簡単に見破られた。

「ふむ、確かに血の香りがするな」

レミリアは鼻をクンクンとさせながら、一護の血のにおいを嗅ぐ。

「ああ、ちよつとな。ほら、今朝も言っただろ。約束の相手と弾幕ごっこをしてきたんだよ。これはその時に負った傷だ」

「——弾幕ごっこ!!」

途端に、廊下からフラン、ルーミア、チルノが現れる。

どうやら一護の弾幕ごっこと言う単語に反応したらしい。

弾幕ごっこで反応する……同時に一護はとてもじゃないが嫌な予感がした。否、その予感は当たるだろうから、これは先を見据えて冷や汗を流した。

「一護ー、早く遊ぼー、もちろん弾幕ごっこね！」

フランが煌く笑顔でそう言ったのだった。

《2》

一護はみんなと弾幕ごっこを終えて、かいた汗を浴室で流していた。

「はあ、疲れた。妖夢との弾幕ごっこの後だから、もつと疲れた」

一護がお湯で体を洗い流しながら、バスチェアに腰を下ろしつつ呟いた。

その時だった。

「ふむ、妹の相手ご苦労だった一護」

「……………」

浴場の戸が開いたかと思うと湯気に包まれた、一糸まとわぬレミリアが堂々と入ってきた。

「……れ、レミリア!？」

突発的な登場に一護は驚く。

白い肌に、全く実っていない果実を連想させる容姿、端的に言うところに出ているところが出ていない体だ。幼女体とまではいれないが、少女体？　なのかな。

肩から腕、そして胸……お尻へかけて、優しい曲線を描く身体のラインが否応なく目に入る。

可愛らしい胸は、あまり成長しておらず、その一方でお尻の丸みがい際立っている気がする。

そして下腹部は……自主規制。

「ふふ、いい反応ね。けど、いくら私でもそんなに見つめられると照れるぞ」

「ち、違う！　見てねえ！　つうか堂々としてきたやつに言われたくねえよ！」

顔を赤らめながら一護は言う。

と、レミリアは何の恥じらいもみせず、蓮の言葉を無視して口を開く。

「いやなに、妹を救ってくれて、まだちゃんとお礼を言ってなかったと思つて。ありがとう、一護。あなたのお陰でフランは笑顔でいられているわ」

「いやここでお礼言う必要なくね!？」

一護は思わず突っ込んでしまった。

性的刺激があまり無いのは、一護が少女愛好家ではない証左にもなる。

だが、やはりレミリアは女だ。あまり女性に対しての免疫が無い一護にとつて、例え外見が少女でも、どこか激するところはある。

「いやお前、羞恥心つてやつはねえのかよ」

「羞恥心？　年下に見られたところで恥ずかしくもない」

「なら俺が恥ずかしい」

「まあそう言うな。お礼に私がお前の背中でも洗つてやろう。この私自らが洗つてやるのだ、喜びなさい一護」

「いやいやいや、ないから。つかもう洗ったし」

「何だそうなのか。なら、一護、お前が私の背中を洗ってくれ」
「え？」

するといつの間にか、一護の眼前に背を向けたレミリアがいた。

木製のバスチェアに腰かけている一護の目の前に、床にお尻からペタリと座り込むレミリア。

レミリアの肌は白く、まるで人形のようにシミも何もない美しい肌、柔らかそうな身体がアップで映らせる。背中には勿論、吸血鬼の羽が生えている。

特にこの幼そうな肩甲骨が何とも可愛らしい。

「ふむ、洗って良いぞ」

「……………」

ここで断ったら男が廃ると思った一護は、生唾を飲みながら頷く。あれ、お礼される側なのに、何で俺が洗わなきゃいけないのだ、なんて疑問は彼方に吹き飛んでいる。

一護は泡のたったスポンジを手に、レミリアの小さい背中にあてがう。

まるでガラス細工を取り扱う慎重さで、ゴシゴシと非常に優しく丁寧に、上下にスポンジを動かす。

「結構あれだな、普通の少女と変わらないよな、お前の肌って。弱々しくもどこか強い芯の通ったっていうか、吸血鬼独特の美しさって言うか」

一護はどこか変な語彙になりつつも、レミリアの肌の綺麗さには本当に見蕩れている。

と、一護が心奪われていると自然に擦る力が強まり、

「はふう、ん、んあ、ああん」

何て艶かしい声をレミリアは上げた。

それに対し一護は驚き、

「な、何変な声出してんだよ」

少し顔を赤らめて言う。

「いきなり力を強く入れるからだろ。さすがの私もビビったぞ」

まあ半分マジ、半分わざとだがと、レミリアは心中呟く。

「わ、悪かった。次はもう少し優しくする」

と、再びレミリアの背中をスポンジで目に見えない汚れを落とす。

少し弄りたくなつたレミリアは、は再び同じく艶かしい声を、半分は本気で上げる。

「あ、あん……ふあつ、あああ」

「だから何なんだよその声は！ 結構優しくしただろ？」

「だって、気持ちよかつたんだもん」

「何がもんだ。アタマ大丈夫かお前」

そんな中でもレミリアの背中を洗っているのは、一護が律儀だからだろう。

「もういい、お前が何を言っても突っ込まねえ」

「何だ詰まらん」

そんな時だった。

再びガララと、浴室の戸が開いた。

そこにいたのは……

「愛しのお嬢様が見当たらないと思えば、あなたは一体何をしていますしやるのですか？」

咲夜であった。

なぜか手元に銀製のナイフを輝かせながら、迫力のある笑みを浮かべている。

「いや、えっと、あの……」

一護はダラダラと汗を流し……

「おや、咲夜か。どうだ、お前も一緒に入るか？」

「お嬢様、そのお誘いは大変うれしく思うのですが、少々私は黒崎一護と大切なお話ができましたので」

「え、いや誤解だ咲夜！」

一護の悲鳴にも似た説得は空しく、時間をとめた咲夜が一護を連れ出し、その後……一護の悲鳴が木霊したのだった。

*

「妖夢く遅かったわね」

一人の着物を着た女性が、縁側でお茶を啜りながら妖夢の帰宅した姿を見て言った。

「すみません。少し時間が掛かってしまいました」

妖夢は頭を軽く下げながら言う。

女性はそんな妖夢の姿を見て、クスリと笑い、

「随分と楽しんできたらしいわね。その様子だと、得られたものは大きかったと言うことね」

「え、あ、はい。どうしてお分かりに？」

「顔に書いてあるもの」

まるで幸せそうに、自分の娘を愛でるように言った。

妖夢もそれが嬉しい。

と同時に、ある事を思い出した。

「そういえば幽々子様。あの後、八雲の使いが来られました」

「紫の……藍の方？」

「いえ、この前新しく八雲に入った男の方です」

男という言葉に女性の脳裏に一人の男が現れる。

「あの男ね。で、何て？」

「今度、紫様が外の世界で見つけた美味しい飲み物を一緒に飲みましょうと」

「分かったわ。でも、その程度の伝言を何であの男に頼むのかしら？」

「それは、分かりません」

妖夢が答えると女性が残りの茶を全部飲んだ。

女性は空になった湯呑みを置き、少し俯く。

（それに、あの男が命令されて素直に聞くような人には思えないけど。まあ私の偏見かもだけど）

「あの、幽々子様」

妖夢の声に思い耽っていた女性が顔を上げる。

「何、妖夢？」

「……次の春に計画を実行するんですね」

それを聞いた女性が「そうよ」と軽く答える。

この春に実行する計画で、再び一護と戦う事になることを妖夢はま

だ知らない。

*

所変わって再び博麗神社――

あれから数時間、一護は三人の弾幕ごっこにつき合わされた。

もう完全にボロボロになった一護は晩飯の後、みんなより一足先に眠りにつく。疲れの度合いは異変解決クラス。

紅魔メンバーもルーミア達も泊まっていくようだ。

――だから、一護は朝起きた時、大変なめにあつた。

朝……一護が目を覚ますとルーミア、チルノ、大妖精、フランが一護にくっ付いていた。

「……………」

予想外というか、予想内というか……率直に現状の問題点を上げるとするなら、動けないことだろうか。

起きようにも、四人が、しかも約一名吸血鬼が抱きついている状態だ。

力加減が分かってきたのか、それが幸いした。もし吸血鬼、フランが力加減をまだ理解していなかったら、体が粉碎していただろう恐怖。

――ガラガラ。

と、ちょうど良いタイミングで霊夢が一護の部屋の戸を開けた。

「起きてる?…一護」

霊夢は一護を見る。

同時に一護にくっ付いている四人も目に入る。

「霊夢、助けてくれ」

一護が四人を起こさないように小声で助けを求める。

だが何故だろう。霊夢の一護を見る目が徐々に軽蔑、侮蔑の眼差しに変わっていく。

「お、おい。何だよ、霊夢?」

「昨日から言って上げたかったんだけど、今言うわね」

「……………」

「あんた、ロリコンでしょ」

」
ロリコン……ハ？ ロリコン……だと!?

霊夢はそれを言うと出て行ってしまった。

そして、一護はこれから一ヶ月先まで霊夢から名前ではなくロリコンと呼ばれることとなった。

第17斬【新たな春なる冬異変】

「無残に砕かれ、引き裂かれた大地。最早それは大地と言っていないから分らないくらい、破壊の限りを尽くされた戦場——。」

周囲の木々は力の波に跡形もなく消滅し、天に浮かぶ雲さえも消し去っている。

場に爛れる並外れた二つの霊力が、互いを倒さんと動き回る。休むこともなく、逡巡すら一切ない戦慄を覚える攻防。力と力がぶつかり合うごとに拮抗した衝撃波を生み、空間が大きく揺らぐ。

たった二人が起こした力の余波だけで世界の一部が崩壊しようとしていた。

——瞬間、一際大きい轟音と爆風が周囲を震撼させる。

爆風で破壊尽くされた大地が吹っ飛び、粉塵が否応なく舞う。

そんな状況の中、渦中の中心である一人の男が、粉塵を吹き飛ばし現れる。

「……どうした。こんなもんじゃねえだろ。……出てこいよ！」

漆黒の衣を身に纏い、右手には同じく漆黒の刀が形成された武器を携えて、余裕の態度で、弱みなど見せることなく吠えた。

平面だった大地は、もはや様々な形状変形している。

そんな荒れ果てた大地が蔓延る中、凄まじい轟音が轟いた。

放たれたのは、赤い閃光。

破壊された大地を尚抉りながら、破壊の光が迫る。この閃光は、例え山だろが何だろが問題なく破壊し尽くす威力を有しているだろう。

並みの者が挑めるものではない。

しかし黒衣の男は——

右腕に有している刀を構え、そこに高速で霊力を込め編み出す。

神の御業と思わせる力を手に、破壊の閃光を切り裂いた。

赤い閃光は容赦なく散布し、そのまま綺麗に儂く消えていく。黒衣の男の前に、“この程度の力では倒せない”。

しかし、それを常識の範囲で、至極当然の域で理解していたもう一人の男は、黒衣の男を前に全く慄きを感じていなかった。

吹き飛ばされ、岩のようにそびえ立つ大地に足を置き、こちらを見下ろす男は、何の痛痒も受けていない。

常人、いや並みの妖怪ですら場に流れる圧力だけで魂が覆滅しかねない中、口元を弦月の形に歪めている。

笑っている。嘲笑っているのだ。

その程度かと、お前の力はそんなものかよと、享樂を味わっているかのように……。

『幾星霜を経ての、再度行われた大きな戦い』に、彼らは彼らなりに全力を出し、尚且つ心のどこかで戦いを楽しんでいる。

どちらが先に倒れてもおかしくない、一步のミスが全てを傾かせるような緊張極まった中、黒衣の男は呟く。

「そうか、お前はお前なりの努力をしたって訳かよ」

自身の今までの研鑽が無駄に終わり、全てが振り出しに戻っても男は諦めなかった。

黒衣の男はまるで最低限の敬意を評すように、靈力を一気に解放し、構える。

対する男も帯刀している刀を引き抜き、切っ先を黒衣の男に向けた。

この戦いは、ある女の遊戯感覚のつもりで起こった、過去の因縁による戦い。互は互いに戦わなければいけない理由と矜持、そして約束がある。

なぜなら、それは……——

「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■」

轟音と共に両者が最後の激突を果たす。

弾幕、剣戟、スペル、靈圧、体術と、あらゆる攻撃手段と防御手段、反撃手段を瞬時に演算し練りこんだ卓越した闘争。共に奥義を尽くし、幻想郷が二人の力で侵食していく、誰も介入できない域で絡み合いながら喰らい合う。

音速を遙かに超え、世界の理すらも半分無視した異質かつ凄惨な

戦。

刀と刀が軋るだけで、幻想郷に衝撃が走り抜ける。大空が二つに割れ、烈火怒涛の攻防が巻き起こっている。

その光景を危険と承知して間近で見ている、一人の少女。

彼女も彼女で並外れた力を持つが、流石の少女もこの光景には呆然とするしかなかった。呆然とし、無責任にとる。

そんな中で彼女は、絞り出すかのように呟いた。

「……これが、あいつの正真な本気。なら——勝ちなさいよ。負けることは許さないから」

一点の信念を胸に、彼女は言ったのだった。

*

時は春——

紅霧異変から、既に半年以上の時間が過ぎ去っていた。

特に大きな異変もあれ以降なく（小規模な異変はあった）、勿論のこゝと博麗大結界に及ぼされている異変も解決の糸口はたっていない。

その間、一護は弾幕やスペルの練度のみを上げ一際強くたくましくなっていた。

春と言えば暖かく、桜の花びらが舞う美しい季節だろう。

寒い寒い冬を乗り越えた、みんなへのご褒美のような季節感だ。

故にそんな季節に心躍るはずだった……

外は白い吹雪が休むことなく吹雪いている。

外に出て数分立つ立っていたら間違はなく、人間雪だるまが完成してしまえるほどの吹雪だ。吹雪の中の吹雪、猛吹雪レベル。

黒崎一護はそんな光景を、縁側から眺めていた。

冷風が一護の肌を刺すような痛みで襲い、体温を急激に下げている。普通に、とんでもなく寒い凄まじい異常気象。

一護の背後の居間では、博麗霊夢が炬燵に入り暖まっている。

「……なあ、もう春だろ？　いくら何でもおかしくねえか」

吹雪く外を見ながら、一護が言った。

おかしいなんてレベルではなく、これは最早異変ととっても良いレ

ベルだ。

今の季節は春。

この吹雪は季節外れにしては長続きすぎる。冬から春真っ盛りになつてまで雪が降り続けているものなのだろうか。

「知らないわよ。それより、早くそこ閉めてよ、寒いじゃない」

霊夢が縁側と部屋の間のお襖を指差す。

本当、霊夢は寒いのが苦手みたいだ。

冬に魔理沙達と雪合戦した時やチルノたちとかまくらを作った時も、霊夢だけ参加しなかった。寒いのが嫌いどころか畏怖すらしている。いや、そこまではしていないか。

一護は部屋に戻り、お襖を閉める。

「これって異変じゃねえのか霊夢？」

改めて、と言うか率直に言った。

「多分ね。こんな異常気象は今までになかったから」

それに対し、さも当然の様に言い切る霊夢。半分ほど他人事に近い対応だ。

「だったら、異変の解決しないといけねえんじやねえのか？」

「そうね、そうよね」

霊夢のやる気が全く出ない。

一護はため息をつき、

「つたく、こうなったら俺一人で……」

もしこれが異変なら、紅霧異変レベルの大異変だろう。放っておくわけにはいかない。

故に一護は一人でも行動に出ようと思った。

一護が襖を開け、異変解決に一人で向かおうとした瞬間だった。

——まるで狙ったようなタイミングで魔理沙が現れたのだ。

「よお一護。霊夢いるか？」

「あ、ああ」

魔理沙が服や帽子に積もらせた雪を落としながら部屋に入って行った。

お陰で部屋なんかにも落とされた。

誰が後始末すると思っただ、と思う一護。

「ちよつと魔理沙。部屋に雪落とさないでくれる」

「そんなことより霊夢。これを見ろ！」

魔理沙がテーブルの上に何かをバンツ！と叩きつけた。

一護と霊夢は魔理沙の叩きつけた物を見る。

「……桜の花びら？」

一護がそれを見て言った。

そこには一枚のピンク色の桜の花びらがあった。

「これが何よ？」

霊夢が桜の花びらを摘みながら聞いた。

「鈍いな霊夢。こんな雪が降り続けている中、どうして桜の花があるんだ？」

「……あ、そういうことね」

春になっても冬の季節と全く変わらないのに、春に咲く桜の花びらが存在する訳がない。

「どこで見つけたんだ、それ？」

一護が聞く。

「数十分前に魔法の森の上空で見つけたんだ。これだけじゃないぜ。他にも沢山の桜の花びらが、雪と一緒に吹かれてたんだ」

「どういう事だよ？ 何で桜の花びらが」

「そこまでは分からないから、霊夢に相談に来たんだぜ」

と、霊夢が炬燵から遂に出て、立ち上がった。

「仕方ないわね。それじゃあ、この異変の解決に行こうかしら」

ようやく霊夢がやる気になってくれた。

恐らくあるはずもない桜の花びらを見たことによって、完全に異変という確証を得たからだろう。

「おう」

「私も行くぜ。この寒さには迷惑してるからな」

こうして三人で異変解決に向かうことになった。

*

三人は吹雪く外に出た。

冷たい風が顔を刺激する。

霊夢と魔理沙の服装はあまり変わらない（マフラーを付けている程度）が、一護は服の上に青いダウンジャケット（香霖堂で購入）を着ている。

「私の勘で行くわよ。良いわね?。」

霊夢の勘……

あまりそういうのを頼りに任せたくないが、紅霧異変の際の貢献があるので渋々承知した。

いやそもそも、霊夢の勘でいかずとも桜がどこから舞っているかを探し出せば良いのではないだろうかと一護は思った。

しかしいちいち言わない。言わずとも把握していると思ったからだ。

「桜に雪、か。なあなあ、これつてよく考えたらある意味、乙じゃないか。どこか花見とは一風違った感じがしていいと思うぜ」

「あら、確かにそうね。せっかくだし一杯やってから行こうかしらね」「いやいや、なに考えてんだよ。二次会みたいなノリで異変解決しようとしてんじゃねえ」

一護が二人を制止する。

「一護は酒を飲まないから知らないと思うけど、飲むと体が温まるんだぜ」

「熱爛がちようどいいわね」

「知らねえよ。霊夢まで魔理沙に合わせようとしてんじゃねえ」

「一護も飲んでみろよ。外の世界の常識を、幻想郷に持ち込んだらいけないぜ」

「……構わねえが、それは異変を解決してからだ」

「構わないのね」

などと言うやり取りをしつつ、出発しようとした時だった。

「私も御一緒させていただいてもよろしいでしょうか?。」

不意に上空から声が聞こえてきた。

聞き覚えのある声音に、三人はそちらを見るより先に主が誰なのかを瞬時に理解する。

「……咲夜」

一護が言った。

そこには紅魔館のメイド長——十六夜　咲夜がいた。

服装はいつものメイド服で変わらないが、首元にはマフラーを巻いてる。

咲夜はゆつくりと一護の前に着地する。その際、角度を的確に調節したのか、スカートの中は全く見えないようにされていた。

「あら、お金持ち館のメイド様が何しに来たの？」

霊夢が挨拶もなしに聞く。

「言ったでしょ。私も御一緒させて頂くと。構わないでしょうか皆様？」

それを聞いて霊夢がちよつと悩んだ末に、

「足手まといにならないければいいわよ。ただし足手まといになると決めたら、途中帰還、もしくは邪魔者と言うことで敵とみなすかもしれないから、そこらへんよろしくね」

という、何とも危険性がたつぷりと孕んだ条件で同行を許可した。

「でも何で咲夜が？」

「このしつこく長続きする冬のせいで色々困っているのよ。結果、お嬢様の命により参ったということですよ」

とても普通で、平凡な理由だ。

「けどレミリアは、太陽が出ていないから嬉しそうにしそうだけだな」
「お嬢様も最初は太陽の光が出ていないから喜んでいただけ、ここまで冬が続けば流石のお嬢様も堪忍袋の緒が切れまして。この雪景色と寒さには飽きました、てね。そこでそろそろ博麗が動き出すと思うから、手伝って上げなさいとお嬢様の命で参った次第です」
「また随分な理由で繰り出されたな」

一護の疑問に答えてくれた咲夜は続ける。

「実際、この雪と寒さが続けば屋敷を管理するものとして大変なのよ。配管が凍結したり、凍害による痛みなんかね。他にもメイドたちが体調を崩したり怪我をしたりなんかも。全くもう、私一人では対応できません」

と愚痴がこぼれ始めた。

そこは一護もどこか同情していた。この冬、霊夢に色々とお願いう名名の強制雪かきや清掃をさせられたものである。

「失礼、少し口が過ぎましたね。忘れていただけだと幸いです」

「はは、忘れられないぜ。今の咲夜、少し本音が垣間見えたぜ。色々お腹に溜まってそうだな。景気づけに一杯やろうぜ」

「おい魔理沙、お前は誰彼構わず飲ませようとするんじゃないぞ」

「ホットワインを頂きたいわね」

「あんたも飲もうとしてんじゃないやねえよ。あと、うちにそんな洒落たものはねえ。あっても安い清酒くらいだ」

「ちよつと一護、あんたも余計なこと言わないで」

一護はふとここで考えを出す。

——やはり、みんな困っているようだ。いや当たり前か。困っていないものなんて、冬好きの人間か、冬真っ盛りに活発性を帯びる妖怪くらいだろう。

だったら自然に犯人の構図が出来てくる。

恐らく、根拠が微妙な確信になるが、犯人は冬の妖怪。

しかしそれだと、なぜ桜の花びらがこんな冬の季節——現在は春のはずだが——に吹雪と共に舞っているのかが気になる。まさに文字通りな桜吹雪だ。

そこらへんを鑑みると、冬の妖怪と言う線が薄れてくる。

故に今回の異変は、中々大きい異変になるだろう。

ただの予感になるが。

「今回の異変も一筋縄じゃいかないわね」

と、霊夢が呟くように言った。

やはり、いやこの際、一筋縄でいかないことは明白だ。

この幻想郷中を轟かすような異変は、紅霧異変ぶりだから。

しかし、こういう時のために、この春まで一護はまた強くなった。紅霧異変の時みたいに仲間を傷つけさせない為に。

「行くわよ、みんな」

霊夢がそういうと、四人は異変解決に向かった。

第18斬【W冬妖怪】

《1》

——現在、幻想郷では春なのに雪が降り続ける異常気象……否、異変が発生している。

勿論、気温も春の暖かい気温ではなく、冬の冷えた気温である。大地も真つ白な雪に染められ、空も同様に白い雲で覆われている。

冬眠から覚める動物たちも、春に向けての畑仕事も全てが遅滞停滞してしまふ。迷惑も甚だしいとは、このことだ。

紅霧異変並の大異変に部類されるだろう。

黒崎一護、博麗霊夢、霧雨魔理沙、十六夜咲夜は、その大異変を解決すべく、この雪が降る寒いなか調査解決に向かっているのだ。

四人は取りあえず霊夢の勘を頼り——と言うより、花びらが飛んでくる方向——に進んでいると、桜の花びらがちらほらと見え出した。

このような冬が続く季節に、桜の花びらが雪と一緒に舞っているのは確実におかしい。故に何らかの異変が関与しているとは、言うまでもない事実だ。

「本当に桜の花びらが雪と混じってやがる」

少し半信半疑だった一護は、改めて桜の花びらを見て信用する。模造品でも何でも無い、真正銘の桜の花びらだ。

「この異変を起こしている黒幕を見つけ出すには、この桜の花びらを辿るのが一番の近道かもしれないね」

咲夜が言う。

分かりきっていると言えば、分かりきっていることだが、もしかしたら特殊な場所で育った桜が風に揺れ、花びらを雪と共に撒き散らしているだけかもしれない。

ここは幻想郷。冬に咲く桜があっても不思議ではない。

「言うまでもないわよ。それに若干、暖かくもなってきたわ」

霊夢が咲夜の言葉に答える。

前述のとおり、ただ桜の花びらが舞っているだけなら、幻想郷特有の常識の通じない桜だけで済むが、しかし気温まで上がっていると

ると、ただ事ではないだろう。

「早くこの異変を解決して、花見で一杯やりたいぜ」

魔理沙が急におっさんみたいなお事を言い出した。

でもまあ、桜の木の下で食べる弁当は美味しいなと思う一護。お酒は飲めないが、みんなで桜を着に盛り上がる、悪くはない。

だから早く、こんな異変を解決したいと思う一同。

「その時は私達も是非お誘いください。きつとお嬢様達も喜びます」

「ああ、良いぜ。多い方が盛り上がるからな」

そんな話をしている時だった。

「氷の妖怪チルノの登場だー！」

予想外の妖精が、一護たちの目の前に現れた。

何の前兆も、タイミングすら無視した、酷く呆気にとられる瞬間である。

「チルノか」

「よおチルノ。この冬の季節はよく会うな。やっぱり雪が好きかー？」

急な登場にも魔理沙は気兼ねなく挨拶する。

対する霊夢は平静を装い、

「……それで、何しに来たのかしら？ 私たちはあなたと違って暇じゃないのよ」

霊夢が睨みつけて聞く。

この二人、正直あまり仲良くない。

ていうか、霊夢が一方的に嫌っているだけで、チルノは別に霊夢のことを嫌っている訳ではない。よって空気を読めないチルノは躊躇いなく、

「一護と弹幕ごっこをしに来たの！ 今度こそ一護に勝って私が幻想郷最強の称号を取り戻すのよ！」

「またかよ」

一護がため息混じりに呟く。

冬の間も、よくこういう口実でチルノと弹幕ごっこをするはめになった。まるで負けず嫌いの子供を相手にするかのように。

弹幕ごっこの結果は全て一護の全勝。清々しいくらいの負けなし。

もう、やり飽きたくらいのレベルだ。

「一護、こんな奴無視してとつとと行くわよ」

霊夢がそう促す。

そうしたいのは山々だが、生憎と簡単に逃げれる相手ではない。そのことを理解している一護は仕方なしに、

「悪い霊夢。先に行行っててくれ。俺はチルノと弾幕ごっこをしてから行く」

「はあ？ 何言ってるのよ、今は異変の解決中なのよ。こんなところで寄り道してる暇あると思ってるの？」

霊夢が反論する。

確かに、異変の解決中に遊びで弾幕ごっこをするのは、あまり良くない。

「別に良いんじゃないのか。一護の言うとおりにさせて」

魔理沙が言う。

「だってよ、どうせ無視してもずくと付いてくるぜ。だったら一護と弾幕ごっこをさせた方が良いだろ。もしこの異変を起こしてる主犯と戦ってる最中に、あいつに割り込まれたら、もつと最悪だぜ」

「私も同感ですわ」

咲夜も魔理沙の意見には理に適っていると思い、賛同してくれた。

3対1。ぐうの音も出ない霊夢。

そして呆れたかのように言葉を吐き捨てる。

「早く終わらせて来るのよ一護」

「ああ」

そして霊夢たちは一護を残し、先へと進んだ。

*

「それにしても早く敵さんに登場してもらいたいぜ」

一護と別れて数分後。

一向に敵の影もなにも現れないため、魔理沙が退屈そうにボヤいた。

「そんな簡単に現れたら、異変の解決なんて何も苦労しないわよ。面倒だけど、時間をかけて解決するしかないの」

霊夢が答える。

今まで数々の異変を対処してきた霊夢だからこそ言えることである。

「お嬢様の起こした異変を解決した博麗の巫女です。期待していますよ、その手腕に。まずは異変を起こした黒幕を見つけ出し、そして退治するまでが仕事ですもんね。言うのは簡単ですが、成すのは相当に困難かと思えます。是非ともお近くで拝見できればと願っております」

「心配しなくても解決してあげるわよ」

咲夜の物言いに、霊夢は毅然と答えた。

「黒幕を炙り出して、私の手でとつと解決に導いてあげるわ。まあ見つけるのに多少時間はかかると思うけどね。敵方も馬鹿じゃないと思うから」

と霊夢が言った途端だった。

「くろまく〜」

と、三人の前にとんでもない発言と共に一人の女性が現れた。

女性は薄紫のショートボブに白いターバンのようなものを頭に巻いている。

左胸あたりに首から腰までの白いラインが走っており、そこに氷をかたどったようなアクセサリーをつけている。

下はロングスカートにエプロンらしきものを着用。首には白いマフラーを巻いている。

見た目は雪が大好きそうな女性である。

「……あなた、今なんて言ったの？」

霊夢は先の女性の言葉が気になり、何よりも先にそれを尋ねた。

「え、黒幕だけど」

平然と答える女性。

それを聞いた魔理沙が横にいる咲夜に言う。

「黒幕がこんな簡単に出てきて良いと思うか？」

「ダメですね。黒幕がこんなに早く出てきては。小説や漫画だったら

一瞬で完結してしまいますよ。いえそれよりも、先の博麗の巫女のお言葉に誤りがあることになりました」

「私は別に構わないし、早く黒幕が現れるほうが好みだわ。だから一瞬で終わらせるわね」

霊夢がお札を両手に持ち、臨戦態勢に入る。

「ちよつと待って！ 私は黒幕だけど普通よ」

女性が焦りながら、よく分からない事を言う。

確かに通りすがり様に攻撃されるのなど、たまったものじゃない。

「普通の黒幕ね。だったら普通に退治させてもらおうわ」

普通の黒幕を普通に退治する事となった。まあ霊夢の仕事はあくまで妖怪退治専門だ。しかし何も特に悪さをしていない妖怪を退治して良いものだろうか。

そして霊夢が攻撃を仕掛けようとする。

だが、それを咲夜が霊夢の前に立ち、攻撃を遮った。

「ちよつと、何のつもり？」

「いえ、ただこの妖怪の相手は私が行いたいと思ひまして」

「あら、どうして？」

「最近、メイド業以外で体を動かしていないものでして。本当の黒幕と相對する前に、戦いの準備運動がしたく思います。ご納得いただけますか？」

たしかに咲夜は紅魔館で従者の仕事をしているだけで、戦いなどと言った行為はあまり行わない。

攻めてくる敵がないからだ。例えいたとしても美鈴が基本的に片付ける。

だから、肩慣らしに戦いたいのだ。

「分かったわ。その代わり早く終わらせてね」

「ええ。承知致しました」

咲夜はそういうと、ゆっくり女性に近づく。

そして、咲夜は手品のように右手の指の間から三本のナイフを出し、構える。

「完全に瀟洒な従者 十六夜咲夜です。強引で申し訳ありませんが、

弾幕ごっこを申し込むわ」

「受けて立つわ。暇だったしね。私は冬の忘れ物 レテイ・ホワイト
ロックよ」

二人は名乗り、そして弾幕ごっこが始まった。

その頃、一護もチルノと弾幕ごっこの相手をしていたのであった。

《2》

「霜符『フロストコラムス』！」

氷の妖怪、チルノがスペルを唱える。

ゆるく遅い弾幕と、鋭く速い弾幕が混合になりながら四方八方に放たれた。遅い弾幕と速い弾幕を連射することで、相手の避けるタイミングや弾幕との距離感を朦朧とさせる。

だが、こんなものは知り尽くしたと言わんばかりに一護は弾幕で対応するでもなく避け続ける。

「もお、何で全然当たらないのよ!？」

チルノが悔しそうに叫ぶ。

冬の間によくチルノと弾幕ごっこをしたのだ。

チルノのスペルはもう全て見飽きた上、嫌でも簡単に避けられるようになった。だから当たることなど皆無に等しい。

「当たるかよバカ。何回見てると思ってんだよ」

チルノに聞こえないように呟く一護。

チルノの攻撃よりもどちらかと言うと、この吹雪による寒さの方が自分の体力を減らしている。

「なあそろそろ終わりにしねえかチルノ？」

「まだまだよ！ 本番はこれからなんだから!!」

当分終わりそうにない。

一護は溜め息をつく。

チルノはスペルカードを取り出しスペルを唱えた。

「凍符『パーフェクトフリーズ』！」

チルノから無数の弾幕が放たれる。

弾幕全てが速く、そして一護の周囲全体を覆うかのように凍てついた。これは相手の行動範囲を制限するスペルだ。

「このパターンも飽きたな」

一護が呆れ半分にいる中、チルノは千載一遇のチャンスとでも言い
たげな瞳でスペルを大仰に唱えた。

「氷符『アイシクルマシンガン』！」

チルノから身動きがとれない一護に向けて、さながら機関銃を発射
するかのよう連続して氷柱が襲いかかる。

一護は冷静に、スペルを唱える。

「黒符『月霊幻幕』」

一護の周りに三日月状の弾幕が展開される。

その弾幕が周囲を囲うチルノの弾幕をかき消していき、迫る氷柱へ
の回避ポイントを作り出す。

よって一護は簡単にチルノの弾幕を避け切った。

「この程度かよ、チルノ」

一護が挑発的なことを言う。

「そんな訳ないでしょ！ こっからが、あたいの本気よ！」

「そのセリフも、もう聞き飽きたな」

*

その頃、咲夜も弾幕ごっこをしていた。

相手もチルノと同じ氷の妖怪、レテイ。しかしチルノより強いのは
明白だ。宿っている妖力も、そしてスペルも別格である。

「寒符『リングリングゴールド』！」

レテイがスペルを唱える。

その瞬間、レテイから大量の弾幕がばら撒かれ、咲夜狙いの中弾が
発射された。大量の弾幕が攪乱し、目当ての中型の弾幕で射止める、
よくあるスペルだ。

咲夜もスペルで応戦する。

「幻符『インディスクリミネイト』」

咲夜から無数のナイフがばら撒かれた。

無作法に飛び交うナイフは、レテイの放った弾幕を相殺していく。

「ほおほお、やるわねえ」

「お褒めに預かり光栄です。あなたも悪くない弾幕です。では次は私

から参ります。幻符『殺人ドール』」

咲夜が新たなスペルを唱える。

無数のナイフが回転しながら、レティに襲い掛かった。

「白符『アンデュレイションレイ』！」

それを見たレティは透かさずスペルを唱える。

レティから無数の弾幕と共に細いレーザーが放たれた。

その弾幕とレーザーが咲夜のナイフを撃ち落としていく。そのままレーザーが咲夜を一直線に狙う。

「流星は黒幕ですね。この程度では倒せませんか」

だが一直線のレーザーなど避けるのは容易い。

軽く身を翻して躲すと同時に言った。

「そうよ。黒幕を舐めないでね」

レティは休まず、終わらないスペルの嵐を吹かせる。

「冬符『フラワーウィザラウェイ』」

吹雪と似たような弾幕が無数に放たれる。

そのせいかどれが雪でどれが弾幕なのか判然としなくなった。

「奇術『エターナルミーク』」

しかし冷静に、咲夜はスペルを唱え、周囲の吹雪と共に弾幕もろとも打ち消していく。

今のところは拮抗した戦いを繰り返している。

お互いまだ一発も被弾していない。いや、両者まだまだ本気など出してなどいない。故に戦いはこれからだ。

「素晴らしい力です。是非とも紅魔館の警備として雇いたいレベルでございますね。しかしながら、今はそのような場面ではありません」

咲夜がナイフを構えつつ、

「……そろそろ終わりに致しましょう。このまま戦っていても同じパターンが続くだけでございますので」

咲夜は少し呆れた風に言う。同じ展開を何度も続けるなど面白くもなんともないし、本格的な戦いの準備運動にもならない。

故にとつとと決着を付けたいと、咲夜は思う。

「私は面白いけど。いいわ、じゃあどう決着をつけるつもり？」

「あなたの全妖力を次に出すスペルに込めてください。それを私のスペルで踏破してみせましょう」

「……あなたの罠ってことは？」

「ご心配ありません。メイドである私は、そんな卑怯な真似をしませんから。それにアドバンテージはあなたにあるんですよ。もう少し余裕を持って頂きたく思います」

この猛吹雪は冬の妖怪からすれば、完全にレティが有利だ。

スペルは勿論のこと、あらゆる面で自分が優位な方向へ働くだろう。しかし咲夜はその逆。この吹雪は体温を非常に下げていく。故に体力の一方的な衰えは隠せない。

「分かったわ。あなたの案を飲みましょう」

そしてレティは、咲夜の提案を受け入れた。

もし、例え罠だろうとレティはその罠を打ち破る自信がどこからか出てきたのだ。

恐らくこの吹雪がそうさせるのだろう。

相手は冬の妖怪。前述の通り、今のこの天気はレティからしたら最高の局面。自分の力を100%発揮できる。

「それじゃあ、いくわよ」

レティは、自分の妖力を全解放しスペルを唱える。

その妖力は凄まじいもので、流星の咲夜も少しばかり驚いた。

そして――

「怪符『テーブルターニング』！」

レティを中心に全方位に無数に弾幕が放たれた。

全方位より放たれた弾幕は、この吹雪すらも己が力とするため吸収し、天井知らずに力が膨れ上がる。

咲夜はそれに対し、なお冷静に……スペルを唱えた。

「時符『パーフェクトスクウェア』」

刹那、空間全体の時間が停止した。

例え弾幕の力が膨大であろうとも、この世の時間さえ止めてしまえば無力に等しい。

そしてその停止した世界で、咲夜は別のスペルを唱えた。

「奇術『エターナルミーク』」

無数の弾幕が放たれ、レテイに当たる直前で、全世界の時が動き出した。

「——え」

レテイが意識した刹那、咲夜の弾幕による無慈悲な鉄槌が下される。

意識を途絶えさせ、そのまま森へと落下した。

「悪くない黒幕でした」

咲夜は落ちてつたレテイを見て呟いた。

そもそもこのような弾幕ごっこ、咲夜が少しでも本気を出していれば一瞬で決まっていたのは目に見えている。

ならば何故、このように永らく弾幕ごっこを勤しんだのか。

答えは簡単だ。当初の目的——弾幕ごっここの勘を取り戻すため及び、準備運動。だから咲夜は無駄に拮抗した戦いを行い、身を動かしていたのだ。

「たく、もっと早く終わらせてよ。ごっちは体を動かさないから寒いのよ」

と、身を震わせながら霊夢が言った。

「それは、失礼致しました」

軽く謝罪する咲夜。

そこに——

「よお、やっと追いついたぜ」

一護がやって来た。

様子を見るにチルノとの弾幕ごっこを終えてきたようだ。ナイスタイミングである。

「一護、遅かったな」

魔理沙が言う。

チルノとの弾幕ごっこは直ぐに終わって追いついて来ると思ったが、予想より完全に遅かった。

「で、勝ったのか？」

聞くまでもないが、一応聞いてみる魔理沙。

愚問だろう……と霊夢と咲夜が思ったが――

「……それが、負けたんだ」

『は?』

ある意味、空前絶後の空気が流れた。

最初は冗談かと思っただが、一護の表情を伺うにそれは有り得ないだろう。

「ちよ、ちよつと嘘でしょ?」

あの博麗の巫女が内心あたふたしながら聞く。

一護は頭を掻きながら、どことなく言いづらそうに言った。

「いや、負けたというより、負けてやった……って言った方が正しいかな」

「え、どういうこと?」

「いやよ、勝っちゃったら、また弾幕ごっこを挑まれるだろ。だから、今回の弾幕ごっこで負けて、もう挑まれずに済むようにしたんだ」

「……成程ね」

まあ恐らく一定の間限定だろうけど。

「でもよ、チルノに負けたって、文の奴に知れたら大変だぜ」

魔理沙が少し心配そうに言う。

たしかに、文に知れたらまた変なことを書かれそうだ。それより、バカで有名な妖精に、紅霧異変解決に貢献した男が負かされたなんて書かれた日には、色々イヤバイ。

主に紅霧異変を起こした吸血鬼にとっては。

しかし一護は悠然と、

「心配ねえって。こんな吹雪の中でバレる訳ねえだろ」

そう言った。

「それより、咲夜。お前誰かと戦ってたのか?」

一護は咲夜の方を見て聞く。

どうやら二つの力のぶつかり合いを感じ取っていたらしい。

「ええ。ですが、この異変とは全く無関係な妖怪ですわ」

「そうか。じゃあ、とつと先に進むか」

こうして一行は先へ進んで行った。

しかし一護はとんでもない失態を犯したと、後に後悔するのであつた。

第19斬【迷い家での弾幕ごっこ】

「ここは……どこだ？」

オレンジ色の髪に、高校生の少年——黒崎一護は迷子になっていた。

いい年して迷子と、笑うものもいるかもしれないが、この場合は笑えるのだろうか。いや、笑う前に恐怖するのもかもしれない。

何の前兆も、何の違和感も感じさせずに、自然に当たり前のように、急に目の前の世界が変貌したのだ。

先まで、肌を突き刺すほどの痛みを与える吹雪が引き裂き音を響かせ、それにより雪が完膚なきまでに積もり、緑から白い山へと姿を変えた白一色の世界を飛んでいたのだが……いつのまにか雪が全く見当たらない場所にいた。

いいや、雪だけではない。気温も、春のように暖かく、全く寒気がない。

まるで別世界。幻想郷から、違った世界へと迷い込んでしまったような感覚を覚える。

「それに、みんなは？」

一護はあたりを見渡す。

さつきまで一緒にいた博麗霊夢、霧雨魔理沙、十六夜咲夜の姿が影も形も見えない。これではまるで、一護だけが不運にも、別世界に迷い込んでしまったかのようだ。

いや、事実そうなのだろう。ここに一護しかいないと言うことが、如実にそれを語っている。

「くそ……っ、一体ここはどこなんだよ？」

見慣れない住居が建ち並ぶ一つの集落。

しかし人影はなく、とても村として機能しているとは思えない。

言うなら廃村。その言葉がきつちりと当てはまる場所だ。

一瞬、人里と見間違いそうになったが、人里も今は吹雪で切羽詰っており、尚且つ村の景観が違う。そもそも人影が一つも見当たらないのなんて有り得ない。

「誰でもいいから出てきてくれよ……」

そんなことを呟いた瞬間だった。

「呼ばれて飛び出てにやんにやかにやん！」

一護の前に、颯爽と一人の少女が現れた。

茶色のショートボブに猫耳が生えている少女。緑色のナイトキャップを被っており、白いシャツに赤いベストおよびスカートを着用している。首元には、チャームポイントなのか黄色のリボンをつけている。

とても幼い少女……例えるなら自分の妹と近い年くらいだろうか。

しかし猫耳と、そして二本の愛らしい猫のような尻尾が生えている。明らか人間と違う、妖怪だろう。故に見た目と年齢とでは齟齬を起す。

「……えくと、誰？」

一護はとても印象深い登場シーンを繰り広げた少女に対し、半分呆然としながら尋ねる。

「凶兆の黒猫 橙だよ！ 君は何ていう名前かな？」

元気よく自己紹介してくれた。

精神年齢、いや、元気で言うところとチルノやルーミア、フランとどっこいどっこいだろうか。

「俺は、黒崎一護。早速で悪いんだけど、質問させてくれねか」

「何だね？ この橙先生が答えてあげるよ」

まるで出来の悪い生徒を可愛いがるような態度で、橙と言う少女は猫耳をピンと張る。

「ここは、どこなんだ？ 幻想郷とは違うところっぽいけど」

「え、ここ？ ここはマヨヒガって言うところだよ」

「マヨヒガ……」

ふと、一護の頭の中にある書籍を思い出す。

(確か、前に読んだ本にマヨヒガっていう奇談があったような)

その書物と、このマヨヒガって言うところが一致しているのか、再度質問してみることにする。

「マヨヒガって迷い家の事か？」

「そうだよ。よく知ってるね」

「どうやら、自分の知っているマヨヒガと一致したようだ。」

「まあ、な。確か、旅人が山奥で迷うと辿り着くっていわれてる無人の屋敷だよな。そして、その屋敷の物を持ち帰ると幸運が訪れるっていう」

「そうよ。一護は運良く此処に迷い込んだんだよ」

「そうか……」

確かにそれは不運より遥かに幸運の出来事だろう。

迷い家に迷い込んで莫大な富を得たという譚もあるくらいだ。故にここを興味本位で調査、探索を試みたいとなるのが必然。

しかし今は、そんなことよりも……

「橙は、ここから出る方法って知ってるのか？」

今すぐにもこのマヨヒガから出て、霊夢たちのもとに戻らないといけない。

現在は異変の解決中であり、こんなところで油を売っている暇などないのだ。

「知ってるよ。教えてあげようか」

橙の言葉に、一護は内心ホツとする。

でも、こんな小さい子に助けられるのは少し面映かった。

「けど、一つ条件があるよ」

「……………」

まあ、だいたい予想できた。

幻想郷に来て以来、事がスムーズに進んだためしがない。

一護は渋々と言葉を吐く。

「その条件ってのは？」

「私と弾幕ごっこをしてもらおうよー」

予想的中。

幻想郷では相手が条件などをつけてきた時は、ほとんど弾幕ごっこになる。

「ああ、いいぜ」

そんなことをしている暇は、本当はないのだが、弾幕ごっこをしな

いと恐らく先に進まない。と言うより、ここから出られないだろう。故に了承した。

橙は簡単に、勝敗を決めるルールを説明した。ルールは簡単。

お互いスペルカードは五枚まで使用可能で、一発でも被弾したら終了了。

もちろん、弾幕に被弾した方の負け。

「それじゃあ、弾幕ごっこスタート！」

橙の合図により弾幕ごっこが始まった。

*

その頃、霊夢たちは一護が消えたにも関わらず、歩みを止めず先へ先へと進んでいた。

何の脈絡もなく一護がいなくなったことには驚き、心配はしたものの「一護なら大丈夫だろう」と言う三人の共通意識により、探すことなく事なきを得てしまった。

敵の仕業……かもしれない。自分たちの起こした異変を解決しに来た輩がいると知れば、何らかの形で動き出すのは必須だ。しかも博麗の巫女と分かれば、より一層際どい動きを見せるだろう。何たって、あの異変解決のスペシャリストなのだから。

しかし、それでもなお、一護なら大丈夫だろうと踏んでいる。

出せる根拠は少ないが、あの吸血鬼であられるレミリア・スカレットと互角以上に戦える人間だ。相応の敵かそれ以上でない限り心配する必要もないし、元より探し出すだけでも時間を喰う。あの霊夢ですら一護の霊気を感じできていないのだから。

——だが、前述の予感はずべて的外している。

一護は迷い家なる場所に、幸運か不運か分からないが、迷い込んでしまったのだ。

言うなら単なる迷子。神隠しと似た道理だ。

「——にしても、全く敵と言う敵が現れませんね。早く、次の敵さんに登場願いたいものです」

咲夜が言う。

敵ではないが、レテイ以降、一向に戦いという戦いが起こっていないのだ。紅霧異変の時はルーミアからチルノへと、まあ直ぐに現れたものだったが。

「平和でいいじゃねえか」

魔理沙が微笑みながら答える。

そんなこととは裏腹に、魔理沙もどこか早く弾幕ごっこをしたいと望んでいる。それは一種の性なのかもしれない。

「こんな状況のどこが平和な訳？」

そんな二人を睥睨するように、霊夢が力なき言葉で吐く。

春なのに、寒風吹き荒れ、相応の雪群が空より降り注いでいる。しかも何なのか、全くこの光景には見合わない桜の花びらが風に乗って舞っていた。これを平和といふべきかどうか。異常現象を平和という人は少ないだろうから、一般論としては平和ではない。

「私が平和だと思ったら平和なんだよ」

「何それ？」

そんな一般論すら撥ね退け、魔理沙は言う。

そもそもこんな能天気な少女にとっては、この程度など平和の範疇らしい。

と、そんな時だった。

「また、変なこと言ってるのね魔理沙は」

三人の目の前に、一人の少女が現れた。

髪は魔理沙と同じ金髪で頭にヘアバンドのように赤いリボンが巻かれている。青のワンピースのようなノースリーブを着用し、スカートはロング。その肩にはケープのようなものを羽織っている。

見た目は魔理沙や霊夢と同じ年くらいの少女だろう。まるでフランス人形のような可愛さを感じる。

「お、アリス。久しぶりだな」

どうやら魔理沙と知り合いの間柄らしい。

しかし霊夢は知らないらしく、

「誰なの魔理沙？」

と聞く。

「ん、こいつはアリス・マーガトロイドって言って、同じ魔法の森に住む魔法使いだぜ」

「よろしく」

アリスは丁寧な顔を下げる。

対する霊夢はぶつきらぼうに、咲夜は慇懃に名乗る。育ちの良さが出るというか何というかだ。

「で、何しに来たんだアリス？」

「黒崎一護……って人に会いに来ただけど」

「ああ、残念だったな。一護は今、行方不明中だぜ」

*

「仙符『鳳凰卵』！」

放たれたのは小規模な弾幕。

しかしそこから、まるで卵から孵るかのように無数の弾幕がサークル状に四方八方へと拡散した。

橙が放った一枚目のスペルカードだ。今ここに橙と一護の弾幕ごっこが繰り広げられている。

「……………」

一護は無作法に飛んでくる弾幕を、一瞬にして見極め、次いで軽く、まるで優雅さすら感じるような躲し方で、かすりもせずに避けきる。

そもそもこのような無造作に放つ弾幕など、チルノとの弾幕ごっこで嫌というほど見てきている。全てが無造作に放たれる弾幕は一定の法則性はないが、動体視力とそれに類する反射神経とアクションに入るときの身体力さえあれば軽く突破できる。

「そんなスペルじゃ、俺に弾幕を当てるのは無理だぜ」

涼しげな顔で、一護は言った。

「むくだったら、これにやんてどうにや！」

橙は悔しそうになりながらも、攻撃の手を止めることなく二枚目のスペルを唱える。

「式符『飛翔清明』！」

瞬間、橙の身体を光が覆った。

そして猫のように体を丸めると、そのまま回転を始める。

一護が少し驚いた時には、橙は既に動きの手に入っていた。

さながら五芒星を描くように、回転しながら小さい体は高速で動き始める。しかも五芒星の五つの頂点を描くと、そこから弾幕が大量に発射された。

弾幕は先と変わらないが、橙の速度が異常だ。流星は猫といったところか。

「黒符『月霊幻幕』」

一護はそのスペルに対抗するべく、冷静に一枚目のスペルを唱える。

漆黒の三日月状の弾幕が展開され、例外一つもなく一護に向かってくる橙の弾幕は相殺されていった。同時にそのまま、激しく動き回る橙に向けて三日月状の弾幕を一点放射させる。

「うにゃっ！」

橙は自分に向かってくる弾幕を確認し、即座に新たなスペルを唱えた。

「翔符『飛翔韋駄天』！」

先のスペルの上位互換だろうか。

速度が更に増し、そこから放たれる弾幕の密度と量も愕然と凌駕した。

故に一護の放った弾幕は軽く避けられ、その上反撃の祝詞まで上がる。

「ッ！」

——この弾幕ごっこのルールは至って簡単。スペルの使用は五回までであり、例え微力でも弾幕に一発でも被弾した方の負け。

だから一護にとって全く損傷なく被弾しても負けになってしまう。

一護は弾幕を避けつつ、橙に反撃の隙を伺うもそんなものは見当たらない。高速で動いているため狙いが定まらないのだ。

「ちっ、黒符『月霊幻幕』！」

一護は弾幕を避けつつ、二枚目の——再度同じスペルを唱える。

自分の周りに三日月状の弾幕を展開し、飛んでくる弾幕を掻き消していく。同時に並外れた動体視力を駆使し、集中し見切る。見極め

る。動きの先読みを行うのだ。

「——そこだ！」

そして見極めた一護は躊躇いなく、橙に向けて弾幕を放った。

「にやッー！」

橙は驚きつつも、どうにかして避ける。

そう、一護からしたらレミアアやフランの方が圧倒的に速かったの
で、橙くらいの動きなら見切るのにそう難しくない。

「うにゃく、ここまで強いなんて……」

橙は動きを止め、悔しそうに頭を抱える。

ここまで自分のスペルを看破されたら、悲しくもなるもの。

しかしスペルを唱えることだけは逡巡せず——

「うく、こうなつたらこれにや！ 鬼符『鬼門金神』！」

四枚目のスペルを唱えた。

橙から赤と青の無数の弾幕が放たれる。

「黒符『月霊幻幕』」

一護は特に警戒もせず三枚目も同じスペルを発動し、三日月状の弾
幕で橙の弾幕を相殺していく。

確かに一発一発の質量も、速さも先の橙のスペルとは比べ物になら
ないが、やはりその程度。一護の敵ではない。

「にやんでえええええー！」

橙が悲痛な叫びを上げる。

「お前の出せるスペルは後一枚だけ、橙」

そんな中、一護はどこか苦笑いを浮かべながら告げた。

一護は三枚スペルを発動し、橙は四枚スペルを発動した。確実に一
護の方が有利である。

「……まだ、一枚つかえる！ 鬼符『青鬼赤鬼』！」

悲痛な叫びはどこへやら、橙は最後のスペルを唱えた。

橙から赤い大弾と青い大弾が幾つか発射され、その大弾の弾道から
大量の弾幕が一護に飛んでくる。

「まだ、そんなスペルが残ってたのかよ」

一護が飛んでくる大弾と普通の弾幕を見て呟いた。

確かに、今までの橙の出したスペルとは迫力感が全く違って凄い。恐らく、これが橙の全身全霊を振り絞った弾幕だ。

「だったら、こっちも少し本気でいくぜ」

一護は代行証を取り出し、いつも通り代行証を中心に黒い霊圧が卍型の形になった。

そして四枚目の、一護が持つ最強のスペルを言い放つ。

「黒斬『月牙天衝』！」

放たれるは卍型に回転する黒い月牙。

橙の最強の弾幕も、この月牙を前にすれば意味を成さない。無情に無慈悲に情け容赦なく、全ての弾幕が掻き消されていく。

「にやにー!?!」

その光景を見て驚きの声を上げる橙の隙を突き、

「黒符『天幻月牙』」

一護も最後のスペルを唱えた。

橙の周りの空間から三日月状の弾幕が現れる。

「にや?」

橙がそれに気付くのと同時に、三日月状の弾幕が橙を襲った。

「にやああああああ!!」

全ての弾幕が橙に被弾した。

一発どころか数十発も当ててしまった。

故に、一護の完全勝利で、この弾幕ごっこは終わった。

第20斬【アリスの人形劇】

「にや〜負けてしまった」

橙は残念そうに俯いて言う。

迷い家にての黒崎一護VS橙の弾幕ごっこは、一護の勝利で幕を閉じた。

戦況は一護の圧倒。驚かされる点もあったが、やはり過去に戦いあつた美鈴やレミア、フランにルミアと言つた強敵とやりあつていたので、式神の更に式神に値する橙には負けない。

橙はあのと聞いてみると、どうやらとある主人の式神の、その式神らしい。つまり式神を主とする変わった式神なのだ。

「そんな落ち込むなよ。また相手してやるから」

一護はシユンとする橙に言う。

すると、俯き加減だつた橙は一気に顔を上げ、

「え、本当!？」

子供のようなキラキラした瞳で一護を見据えた。

「ああ、約束する」

「やったにや〜!」

橙が喜ぶ。

切り替えが早いというか、本当に見た目相応の年齢を予想してしまふ。

「で、こっから出る方法は?」

「こつちだよ」

一護は橙に連れられ、ここから抜け出す出口へと向かった。

*

その頃、霊夢達はどんどん先へと進んでいた。もはや頭の中に一護の存在があるのかどうかすら危うい。

アリスはあの後、目的である一護がいなかったため興ざめたかのように帰っていった。

「……今のは春告精だよな?」

魔理沙が後ろを振り向きながら、先ほど霊夢が撃ち落とした妖精の

ことを思って言った。

「そのようね。鬱陶しかったから、撃ち落としたりわ」

とても酷い言い方だ。

春告精というのは、春になると春が来たことを伝えにくる妖精。

普段はとても無害で、誰かを襲うかなど決してしないのだが、このような異変が発生していたせいかな、不安や不満が爆発し暴れていたのだ。故に霊夢は弾幕で軽く撃ち落としたりした。

可哀想な反面、仕方ないだろうという気持ちで一杯だ。

「それにしても、黒崎さんは中々姿を現しませんね」

咲夜が特に心配はせず、事務的な言い回しで言う。とても非情には見えるが、一護のことはちゃんと覚えていてくれたらしい。

「そのうち現れるわよ。それより、雲の上まで上昇しましょ」

一護のことなどどうでも良いのか、霊夢は一気に上空へと浮上した。魔理沙と咲夜もそれに倣って上昇する。

「雲の上に何かあるのですか？」

「分からなかったの？ 桜の花びらが徐々に空の方に上がっていったのよ」

「え……」

それを聞いた魔理沙と咲夜はそこらに舞う桜の花びらを見る。

霊夢の言う通り、たしかに桜の花びらが雲の上にゆつくりと上がっていつている。よく観察しないと分からない現象に、霊夢は真っ先に気づいたのだ。流星は数々の異変を解決してきた博麗の巫女である。

そして、三人は雲の上にまでやってきた。

「おっ、ポカポカしてきたぜ」

雪雲の上は太陽の日差しを全身に浴びれる世界が広がっていた。必然的に、地上のように寒くはなく、暖かい春のような陽気に満ちている。

「見えてきたわよ。目的地っぽいところ」

霊夢が前方を見て呟く。

そこには途轍もない大きさの門があった。特筆して描写すべき点はないが、単純にとっても大きな門がある。

「恐らく、あの門の向こうにいる誰かが春を奪っているのね」
「だったら早く調べに行こうぜ」

と、魔理沙が門に向かおうとした瞬間——門の前に、門番のように三人の少女が現れた。

一人目は金髪のショートボブに金色の瞳。

頭には円錐状で、返しのある黒い帽子をかぶっている。服装は白のシャツの上から黒いベストのようなものを着用し、下は膝くらいまでの黒の巻きスカートを着ている。

ベストに二つあるボタンは赤。スカートにも同じボタンが二つ付いている。また、ベストやスカートの裾には円や半円を棒で繋いだような赤い模様があしらってある。帽子の先には赤い三日月の飾りがついている。そして傍らにヴァイオリンが浮いている。

二人目は全体的に強いウェーブがかかった薄い水色の髪。

服装は、薄いピンクのシャツの上にこれまた薄ピンクのベストのようなものを着て、上同様薄ピンクのフレアスカートを履いている。

ベストは前面ボタン閉じタイプのもの。そして、円錐状で返しのあるピンクの帽子を被っている。返しの上には、ここにもフリルが付いている。

ベストの裾、スカートの端、襟の淵フリル手前、帽子の返しの淵フリル手前には黒いライン付きである。帽子の先には青い太陽の飾りがついている。そして傍らにトランペットが浮いている。

三人目は少し薄い茶色の髪で、毛先に行くに従って強い内巻きの癖がついているショートヘアである。

服装は、白のシャツに赤のベストのようなものを着ていて、他の二人と違い赤いキュロットを着用している。

二つあるボタンは緑。ベストやキュロットの裾には白いジグザグ模様がある。そして返しのある赤い円錐状の帽子を被っている。

帽子の先には緑の星の飾りがついている。同じく傍らには楽器のキーボードが浮いている。

見た感じはバンドのように見えなくもないが、とてもここに演奏しに来たようには見えない。

「ここから先は通さないよ」

茶髪の少女が言う。

「じゃあ力尽くで通るけど。その前に、あんたたちは誰？」

「この門の番を任されている者」

金髪の少女が答えた。霊夢の力づくという言葉に、全く身動きしていない。

「ふうん、じゃあ、あんた達を文字通り倒せば、自由に出入りできるってことね」

霊夢が御札を取り出して、臨戦態勢に入りながら言った。

「そうねえ、そうなるのかな。でも、この門は多分あんた達を通してくれませんよ」

水色の髪の少女が、どうでも良いかのように答える。

話し方や態度が、とても個性的な三人だ。

「心配しなくてもいいわ。この程度なら簡単に通れるから」

「そう、なら弾幕ごっこで決めましょ。負けた方は諦めて引き下がるで」

金髪の少女が、弾幕ごっこを提案してくる。

霊夢からすれば、話が早くて助かる限りだ。

「上等よ。三対三だからちようど良い弾幕ごっこになるわ」

「決まりね。じゃあ、自己紹介するよ。私はプリズムリバー三姉妹の長女——騒霊ヴァイオリニスト ルナサ・プリズムリバー」

「私は次女の騒霊トランプッター メルラン・プリズムリバーです」

「私は三女の騒霊キーボードイスト リリカ・プリズムリバーよ」

金髪の少女、水色の髪の少女、茶色の髪の少女の順番で自己紹介をした。

「私は楽園の素敵な巫女 博麗霊夢よ」

「私は普通の黒魔術少女 霧雨魔理沙だけ」

「私は完全に瀟洒な従者 十六夜咲夜です」

各々二つ名を言い名前を言った。

そして、三対三の弾幕ごっこが始まった。

*

「やつと出られたけど、あいつらどこまで行ったんだ？」

一護はようやく迷い家から脱出し、先に行った三人を追っている。もともと霊圧探知というスキルが苦手な一護は、臆げではあるが三人の魔力や霊力を感じつつ追っている。

迷い家の環境で、変に温まったせいかわ、こちらに戻ってきた時の急な気温低下により一護の身体が少し震えていた。

……と、そんな時だった。

「あら、あなたが黒崎一護？」

横合いから、一人の少女が接触してきた。

そこには、ちよつと前まで霊夢達と会った、魔理沙の友達？の魔法使いアリスがいた。

「誰だよ、あんた？ 何で俺の名前を」

「私は七色の人形使い アリス・マーガトロイドよ」

アリスは自らの名を名乗り、

「あんたのことは、もう幻想郷では有名よ。知っていても、特に気にする点ではないと思うけど」

「……そうだったな」

文々。新聞で、一護のことは知れ渡っていたのだ。完璧に盲点だったというより、思い出さなくなかった。

「で、俺になんか用か？ 悪いが、今は急いでいて要件なら後で——」

「少し、弾幕勝負に付き合ってもらえないかしら？」

一護が言い切る前に、アリスが尋ねてきた。

「……悪い、今はそんなことをしている暇はないんだ」

「心配ならいらないわよ。魔理沙から黒崎一護との弾幕勝負をしても良いと、許可を貰ってるから」

「お前、魔理沙を知ってるのか？」

「ええ、まあね。あと、博麗霊夢と、メイドにも一応許可をもらったわ」

一護は簡単に察し、少し悩む。

アリスという少女からは霊夢と似たような匂いがする。一度言い出したら、己の言葉を曲げない力。恐らく変に言い回しても、簡単には納得してもらえないだろう。逆に考えている間の方が時間を浪費

してします。

故に――

「分かった。弾幕ごっこ、してやるよ」

「ありがとう。じゃあ、早速やりましようか」

アリスが一言礼を言うと、周りから金髪ロングヘアアの可愛らしい人形がいくつか現れた。

「人形か。いいぜ、来いよ」

「随分と余裕な態度ね。少しは、後悔するかもよ」

湧き上がるアリスの魔力。

その力を即座に感じ取った一護は、並の相手ではないことを思い知らされた。

(こいつ、純粋な魔力つてやつなら魔理沙と互角レベルかよ!?)

魔理沙と同等のレベルであり、相手の能力などの詳細等は一切不明。故に、この戦いは少し長引く。いや、下手をすれば負けてしまうことも視野に入れなければいけない相手だ。

「さあ、行くわよー」

魔力を横溢とさせながら、人形たちが駆動し戦いの火蓋が切つて落とされた。

「操符『乙女文楽』」

先手は、アリスがスペルを唱えた。

初手は小手だめしにも等しい、矮小なスペル。アリスの周りにいる数体の人形から、レーザーと共に無数の弾幕が一護に向かって放たれた。

「黒符『月霊幻幕』」

一護も冷静にスペルを唱える。

三日月状の弾幕が展開され、アリスの弾幕に向かって放つ。

二人の間に無数の弾幕が飛び交い、相殺しあう。一つも余さず、お互いがお互いの力をゆっくりと測り合っている。

一護はそんな中で一気に動いた。

己の弾幕と、アリスの弾幕が飛び交う中を、針の穴を縫うように避けて躲し、アリスのもとへと飛ぶ。

「直接攻撃ってわけ。けどね——」

瞬時に、アリスの周りを浮上する人形たちが動いた。

自分の主を守るボディガードのように、アリスの前に移動したのだ。

「……………」

その人形たちの動きを見た一護は、即座に後退する。本来なら、このまま人形もろとも攻撃を仕掛ければ良いのだが、あの人形一体一体に込められている魔力が凄まじい。それに、何か他に能力を隠している危険性を孕んでいる。性急は得をしない。

(くそ、あの人形が邪魔だな。バウントと戦ってる気分だ)

一護の脳裏にバウントとの戦いが出てきた。

バウントはドールという人格を持った武器を使い戦う集団。アリスの戦い方は一護の目にはバウントと同じように見えるようだ。

「白符『白亜の露西亞人形』」

一護がバウントの戦いを想起していた時に、アリスが休まずスペルを唱えた。

人形たちから六方向に弾幕が大量に放たれる。さながら無数に飛び交う蛍を連想してしまう。

(だったら、これだ)

一護もカードを取り出しスペルを唱える。

「黒符『天幻月牙』」

一護がスペルを唱えた瞬間、アリスの周りの空間から三日月状の弾幕が現れた。

このスペルは相手との距離などを一切無視して放てるスペルだ。これを初見で躲せるのは、相当の手馴れくらいだろう。

故、その弾幕が一斉にアリスを襲った。

一護は飛んでくる弾幕を躲しながら、やったかどうか見る。恐らく、この程度で勝つのは不可能だろうが、ダメージくらいは負っただろう。

しかし、現実はそう甘くはなかった。

「やるわね。流石というところかしら」

アリスが無傷で現れた。

手傷どころか、服にすら一切の傷もなく汚れもない。

「――！」
驚かすにはいられない一護。

「テメエ、何で無傷なんだ……って顔ね」

アリスが一護の心中を読むように言った。思いつきりの射抜いたセリフだ。

「まあ、とても簡単なことよ。それはね、あなたのスペルや能力を全て魔理沙から聞いたから」

「何だと……!?!」

「そんなに驚くことじゃないわよ。魔理沙が家に来て、よくあなたの事を話していたから知っていただけよ」

どうやら魔理沙とアリスは友達同士のらしい。確かに魔理沙のことだけを魔理沙と言っていた。霊夢はフルネームだし咲夜はメイド。明らかに距離感が違う。

「あなたの能力は“物質に宿る魂を操る程度の能力”で、スペルの種類は全部で四つ。その中で一番強力なのが月牙天衝。そして、魔理沙から聞いた中で一番興味深かったのが、黒衣の姿よ」

黒衣の姿……恐らく死神の姿の事だろう。

そして、アリスは全部とっていいくらい一護のことを知っている。魔理沙のせいで。故に、攻略法も知られていると思ったほうが賢明だろう。

「私にその姿を見せてくれないかしら？」

「まだ、見せてやれる程の力を出しちやいねえだろう。お前が本気で来たら見せてやるよ」

「そう。なら、少しだけ本気を出そうかな」

ため息混じりに、本気など出したくもない口調で締める。

そして――

「蒼符『博愛の仏蘭西人形』」

人形たちがアリスの周りに行き、それぞれ一発の青い弾を放った。その青い弾が白い弾に複数に分裂し、そして更に赤色の弾に無数に

分裂した。それを繰り返すことにより、相手の避け際や反射を狂わせていく。

「甘え！ 黒符『月霊幻幕』！」

一護もスペルを唱え、アリスの弾幕に対抗する。

いくら無数に分裂しようと、自分に向かってくる弾幕だけ相殺すれば何の問題も無い。しかしこの所業は簡単に見えるが、とても技量がいる。自分の弾幕を巧く操作し、正面全域を全て見通し、演算しつつ予測なども加えて分裂する弾幕を対処しなければならない。

これはもはや、一護の並外れた戦闘経験による手腕。一護だからこそ出来る方法だ。

「まだまだ行くわよ。闇符『霧の倫敦人形』」

アリスは続けて新たにスペルを唱えた。

人形たちがアリスの周りでグルグル回転しながら無数の弾幕をばら撒いてくる。

（こいつは、なにかの布石か？）

こんな単純なスペルが決め手になるとは到底思えない。この程度なら、とてもじゃないが、黒衣の姿にならずとも充分渡り合える。魔力は高いが、スペルが浅はかすぎるのだ。

だが、それは本当に布石を投じたに過ぎなかった。

無数に放たれた弾幕により、完全にアリスの姿を見失ったのだ。

（どこ行きやがった!?!）

一護が辺りを見回す中……

「(ト)トよ」

一護の真下に、アリスがいた。

一護から見て、地上をバックにアリスがスペルを唱える姿が、同時に目に映る。

「呪詛『魔彩光の上海人形』」

アリスの周りの人形たちが無数の弾幕と少数の大弾を展開し、それらを一斉に放ってきた。

「舐めんなー！」

並外れた身体能力で、空中を駆けながら全ての弾幕を避けて、弾く。

その間も先と同じミスをしないうよう、アリスを視界に入れながら動いていた。

「どうしたよ、こんなもんか？ お前の実力は」

一護は全ての弾幕を避け終わった後にアリスに言った。

「いいえ。まだ、全く本気なんて出してないわよ」

「だったら、そろそろ本気を出したらどうだ？」

「……そうね。早くあなたの黒衣の姿も見てみたいし」

アリスはカードを取り出しスペルを唱える。

「蒼符『博愛のオルレアン人形』」

人形たちがアリスの周りで、一発ずつ青い弾を放った。

その弾が先程の博愛の仏蘭西人形のスペルのように青、白、赤の順番で無数に分裂していった。

(さっきのスペルと同じか？)

一護がそう思い、先の手順と同じように対策しようとした瞬間、大量の赤い弾幕が再び分裂した。赤い弾幕が黄緑の弾幕に無数に分裂したのだ。数も速さも、分裂するごとに、驚異的なほど増す。

「しまッ!？」

一護は咄嗟の事で避けるのに遅れ、何発か被弾してしまった。

「休む暇は与えないわよ。雅符『春の京人形』」

アリスが直ぐにスペルを唱えた。

このスペルも先程の霧の倫敦人形のような弾幕だ。

だが、圧倒的に先刻のやつより強力だ。

「クソッ、黒符『月霊幻幕』！」

避け切るのは無理だと思っただけ一護はスペルを唱えた。

一護の周りに三日月状の弾幕が現れ、その弾幕が向かってくる無数の弾幕を相殺していく。しかし、そうこうしているうちに、またアリスの姿を見失った。

「またかよ！ 次は——」

「アハハよ」

アリスの声が、全く先と同じように真下から響いた。

一護が気づくと同時に、アリスがスペルを休むことなく唱える。

「呪詛『首吊り蓬萊人形』」

これも先程の魔彩光の上海人形のようなスペルだ。だが、これも同じように強力になっている。

この戦法は、本当に先と同じだ。スペルが強化されている以外は、行動もスペルを唱えるタイミングも全く同じ。これは何かの作戦かと思つた一護は、直ぐ様ポケットから代行証を取り出した。恐らく心理的な何かを狙っているのだろう。なら、全く別の展開を用意してやるのみだ。

「黒斬『月牙天衝』！」

黒い霊圧が代行証を中心に卍型を描くと同時に、一気にアリスめがけて放つた。

全ての弾幕も月牙の前では無意味。故に、アリスまで直行する。

「これが黒崎一護の最強のスペル……月牙天衝」

アリスは一髪千鈞を引く勢いで、月牙を観察して軽く避けた。

それもそのはずだ。月牙天衝の情報も魔理沙から聞いているのだから。

「今のが、あなたの最強のスペル、月牙天衝ね。想像以上の威力だわ」
流星のアリスも今には驚いたようだ。

「けど、油断は大敵よ。魔符『アーティフルサクリアイス』」

刹那——一護の背中が爆発した。

一護は苦悶の声を上げ、痛みと理解できない現状に、倒れそうな体を踏み止める。

「くツ……テメエ、何しやがった……!?!」

急に、何の前兆もなく自分の背中が爆発したのだ。激痛よりも、そちらが気になる。

「あなたが私の弾幕をスペルで防いでいる時に、真下に回つたついでに私の魔力を込めた人形をあなたの背中に付けておいたの。戦いに夢中で気付かなかつたでしょ？ まあついでに魔力も隠匿しておいたけど」

「それが、爆発したのか……?」

「そうよ」

「……強えな、やつぱ。仕方ねえ、俺も少し本気でいくぜ」
そのセリフにアリスの口元が少し緩んだ。

ようやく、自分の見たかったものが見れるのだから。顔には出さな
いが、今アリスの心が、たった一護の一言に心を震わせた。

瞬間、一護の身体が黒い霊圧を纏っていく。そして徐々に霊圧が形
成を始め……死神の姿へと変わっていった。

「……お望み通り、見せてやったぜ。これが、お前のいう黒衣の姿だ」
アリスは一護の姿に驚愕していた。

(……これが、魔理沙の言っていた黒衣の姿。凄まじい霊力。先刻と
はまるで別人みたいだわ。久しぶりに、興奮してきた)

吹き上がる戦いへの欲望が、逡巡すらせずにアリスを動かさせた。

アリスがスペルカードを取り出す。しかしその瞬間、一護は一瞬で
アリスの目の前に行き、カードを持っている腕を左手で掴んだ。

「!? え……ッ!?!」

アリスは目を見開いた。

(……いつの間に、私の前に移動を? この私が、全く見えなかったっ
ていう訳!?)

アリスは強引に一護に掴まれている腕を引き離し、一護から距離を
取った。

「凄い、凄いわ。私をここまで驚かせた人間なんて初めてだわ。さあ、
これからが本番よ!」

「すまねえけど、一瞬で終わらせるぜ」

一護はそういい、構えた。

アリスは持っていたスペルを唱え始める。

だが、この戦いは一瞬で一護の言った通りに幕を閉じる事になる。

*

一方、三対三のチーム戦はお互い全く疲弊していない。

それと霊夢チームは全くチームプレーをしていない。まあ、この三
人がチームプレーをしたら逆に変に感じてしまうだろうが。

しかし三姉妹はその真逆。三人が三人ともお互いの事を通じ合わ
せ、無駄のない動きで攻める。

「騒符『ライブポルターガイスト』」

ルナサがカードを取り出しスペルを唱えた瞬間、三姉妹から無数の弾幕が放たれた。

「霊符『夢想封印 散』」

「魔符『スターダストレヴアリエ』」

「幻符『インディスクリミネイト』」

霊夢たち三人も各々スペルを唱え、飛んでくる弾幕を相殺していく。

プリズムリバー三姉妹は霊夢たちが弾幕に気を取られている一瞬の間に、それぞれ霊夢たち三人を取り囲むように移動した。

そして、三姉妹は各々のスペルを唱える。

「弦奏『グアルネリ・デル・ジエス』」

「管霊『ヒノファンタズム』」

「冥鍵『ファツイオーリ冥奏』」

三姉妹の放った無数の弾幕が霊夢たちを襲う。

そして、凄まじい爆発が起きた。

「あれ、終わっちゃったの?」

メルランが言う。

「多分」

それにルナサが答えた。

「思ったより呆気なかったね」

リリカが言った。

だが、爆発による爆煙が消えた瞬間、三姉妹は驚愕した。

霊夢たち三人が無傷で現れたのだ。

「夢符『封魔陣』よ」

どうやら、霊夢がスペルを発動して防いだらしい。

「そんな……! 三人のスペルをたった一枚のスペルで……!」

リリカが驚きながら言う。

「チームワークは確かに凄いわ。それは認めてあげる。けどね、個々の力が低すぎるのよ。例えばチームワークが良くても、私からすれば……まあいいわ」

一瞬、酷い言葉が頭に浮かんで言いそうになったが霊夢は止めた。
そして――

「さて、もう準備運動はこの位で良いわね。それじゃあ、一瞬で終わらせるわよ。魔理沙、咲夜」

霊夢の言葉に場の雰囲気が一気に動き出す。

この戦いも、そう永くは続かないだろう。

この二つの戦いは――文字通り、一瞬で終わってしまう。

第21斬【再戦・一護VS妖夢】

《1》

西行妖——ことの発端は全て、この桜の木にある。

今回の異変はとある女性が、その西行妖の桜を満開にし、そこに眠る何かを復活させるため。しかしこの桜の木は、春になっても満開にはならない。

理由は不明。何かが他の桜の木と違う。

西行妖に封印されている何かが拒むように、満開になる気配がない。

そのことに対し、とある女性は一つの手段に出た。

それは幻想郷にも訪れる春。その春を全て西行妖に捧げ、満開にさせること。そして封印されている何かを解放すること。

これが、とある女性の目論見なのだ。

*

「さてと、そろそろこの異変も佳境ね」

博麗霊夢は、自分たちの行く手を遮るプリズムリバー三姉妹を撃墜し、彼女たちが守っていた門の前にいる。

同じく霧雨魔理沙、十六夜咲夜もだ。

このままとつと先に進めば良いのだが、優しくも三人は黒崎一護を待っている。

「終わりが近いってわけか。今回の異変は早く済みそうだぜ」

「とか思っていますと、後々から裏ボス（ルリミアなど）が鬱陶しくもしやしやり出てくる可能性があるのです、あまり楽観的にならないことをオススメします」

魔理沙の発言に対し、即座に咲夜が半余計なことを言った。

「そうだな。確かにこの前の異変で言うレミアがラスボスで、フランが隠しボスみたいな位置だよな。その後の刹蘭とか絶対にはいなかったと思うぜ」

「刹蘭の次のルリミアは、もう完全に引き伸ばし特有な——」

「何言ってるのよ、あんたたち。物語と現実が一体化してない？」

よく分からない二人の会話に霊夢が呆れていると……

「おーい、お前らー」

手を軽く振りながら、遂に一護が三人の前にやってきた。

「随分と遅かったじゃねえか一護」

魔理沙が笑みを浮かべて言う。

その笑顔とは対照的に、一護の顔は少し怒っているように見える。

「お前のせいで遅くなったんだよ」

そのセリフを聞いた魔理沙は、数秒これまでのことを思い出し、察したのか一言謝った。

「で、今まで何してたの？」

「ん、何かマヨヒガってとこに行って、その後アリスと弾幕ごっこをしてだな」

霊夢の質問に一護は大間かに答える。

「そう。やっぱり彼女ともしたのね。だったら今までの遅れた時間を取り戻すために、とつとと行くわよ一護」

と言い、一護の服の襟を引っ張り、門の方に向かった。

そして、遂に霊夢たちは門の向こうに到着し、異変解決のカウントダウンが始まる。

《2》

「一体いつまで続くんだよ、この階段？」

一護は現在、糞が付くほど長い桜並木に挟まれた階段を数十分ほど登り続けている。

門の向こうに到着したら、即黒幕の登場だと思っていた一護たちは超糞長い階段を見て愕然とした。

そう、門の向こうには階段と桜の木しかなかったのだ。

神社や寺などでよくある石造りの階段で、なぜか普通の階段より上るのが疲れる。

ここは幻想郷から消え去っていた筈の春で満ち溢れており、桜の木も満開になっていた。ゆるりと散る桜の花びらがとても風情あふれる。

「逆に疲れちまうよ」

なぜ、一護が飛んでいかないかというところ、一護の霊力の回復の為である。

一護は此処に来るまでにチルノ、橙、アリスと戦っている。自分では気付いていないだけで、結構霊力を消費しているのだ。

「文句言わないでさっさと黙って登る」

と、霊夢が言う。

その言っている本人は悠々自適に空中に浮いて、一護のペースで飛んでいる。とても楽そうだ。

「ファイトだぜ、一護」

「頑張って下さいね、黒崎さん」

魔理沙と咲夜が労ってくれる。

だが、魔理沙も咲夜も酷いことに、楽に空中に飛んでいる。

「くそ、人が頑張って登ってるってのに」

一護の額から汗が流れる。

此処は地上と違って春のポカポカとした気温だ。お陰で汗がどんどん出てくる。

ちなみに服の上から着ていた、防寒のための青いダウンジャケットは此処に来た瞬間、門の前に置いてきた。

と、一護は何かを感じたのか足を止めた。

(この霊力は……)

霊夢達も一護と同じ力を感知したのか、進む飛行を止める。

「……………」

一護は前方を見据える。

コツ、コツ、と上から誰かがゆっくりと降りてくる音がする。桜が咲き誇り、花びらが散る風景すら目に入らず——一人の少女が現れた。

予想通りであり、既に知っている人物だが驚かすにはいられない一護。

だって、その少女は……

「妖夢！」

そう、そこには魂魄妖夢がいたのだ。

いつも通りの服装に二本の刀、そして常に妖夢と一緒にいる半霊。よく人里で会って、他愛の無い会話をしたり、一緒に何かを食べたり、時々二人で研鑽を積んだりした友という間柄の少女が。

だから、ちよつとした妖夢の素性なら一護は知っている。

「驚きました。まさか黒崎さんが侵入してくるとは、本当に。いえ、予測はしておりました。異変解決専門の博麗の巫女と一緒にいるのですから、簡単に予想は出来ておりました」

動揺を見せずに、冷静に言葉を紡ぐ妖夢。しかしどこか悲しみを孕んでいるのは、否定できない声音でもある。

「お前が従者をしているつてのは聞いてたが、ここの従者だったなんてな」

「黒崎さん、今すぐここから退いてはくれませんか？」

「悪いが、できねえ相談だな」

それを聞いた妖夢は少し残念そうな表情になり、ゆつくりと長刀の楼観剣を抜いた。

「そうですか。なら、私は今から黒崎さんを敵として排除しなければいけません」

「そうかよ。霊夢、ここは俺に任せて先に行つてくれ」

忘れ去られていた三人は何も言わずに先へ進んだ。

妖夢はその三人を引き止めようとせず、一護の姿を見据える。

「止めねえのかよ？」

「私一人では四人全員を相手にするのは不可能です。ですから私は一人、一番厄介な人物、黒崎さんだけでもここで阻止します」

その目は、もはや友に向けるものではない。

己の敵に向けるもの。敵とみなし、これから相手を斬るもの。目だ。油断、軽視などは一切捨て、全霊をもって討つと決めたものの瞳をしている。

「成程な。じゃあ、久しぶりにやるか。今度は手加減無しだ」

対する一護も構える。

今の妖夢に手加減など不可能。一緒に剣を交えた際も、あくまで修

練。これは本気の戦い。そんな中、手を抜いてしまえば容易に狩られるだろう。

故に初手から真剣。

そして今ここに、一護VS妖夢の弾幕勝負が再び始まった。

「先手は貫きます。獄炎剣『業風閃影陣』！」

手始めに放ったのは妖夢のスペル。

妖夢の妖力が凝縮され、それらが複数の大弾となり一気に放つ。

(ただの大弾の弾幕か……)

一護がそう思考した瞬間、妖夢が自分で放った複数の大弾を刀で横一閃に大きく斬った。その光景に瞠目したが、次の瞬間に大弾が小さい弾幕へと無数に分裂した。

一護はそれに驚き直ぐ様、左上斜めに高く跳躍し上空に飛ぶ。

しかし妖夢は手を一切止めず、己で放った大弾を再度連続して滅多切りにしていった。同時に呼応するよう、無数の弾幕が辺りを埋め尽くして放たれ続ける。

これは単純に回避するのは困難を極める。

「くそ、黒符『月霊幻幕』！」

故に即座にスペルを唱える。

一護から三日月状の弾幕が展開され、それを向かってくる妖夢の弾幕に当て相殺させていく。しかし弾幕の数が多いだけに、相殺するのに時間もかかり視界も弾幕のせいで悪い。だが下手に手を緩めれば妖夢の弾幕が容赦なく襲いかかってくるのだ。

そしてそれは、大いに一護の隙を誕生させてくれた。

「弾幕に気を取られすぎです」

一護が弾幕を相殺している間に、妖夢が一護の後方に移動していた。

「ッ！」

弾幕のことすら忘れ、一気に振り向こうとするも――

「遅い！ 人符『現世斬』！」

完全に遅かった。

妖夢がスペルを唱えたかと思うと、瞬間的速度で一護の左肩を切り

裂いた。問答無用に、情け容赦なく。

弾けるように、左肩から鮮血が噴出すると同時に、焼けるような激痛が襲う。

これは妖夢が本当に真剣になっっている証拠なのだ。

妖夢は周囲を飛び交う己の弾幕を消し、鋭い瞳で鋭利な刃を向けながら口を開く。

「この戦法は、黒崎さんから習ったんですよ」

「俺から……」

急な発言に困惑するも、一護は直ぐに思い出した。

初めて妖夢と戦った時、両者が最後の激突をした際に、妖夢が一護の月牙天衝に気を取られ、防いでいる間に一護が妖夢の背後を取り勝利した。

恐らく、あれを模倣したのだろう。

「黒崎さんからは色々と学ばせて頂きました。だから私は、あの時より強いですよ」

「そうかよ。けど、俺も、あの時より強くなってるぜ。それに、まだ、お前には見せた事の無えスペルもある。例えばこれだ。黒符『天幻月牙』」

一護がスペルを唱えた瞬間、妖夢の周りの空間から三日月状の弾幕が現れた。

妖夢はそのスペルに一瞬だけ驚いたが、冷静に対処する。

「天神剣『三魂七魄』！」

妖夢から七色の弾幕と大弾がばら撒かれる。

一拍の遅れもなかったが故に、一護の弾幕は容易にかき消されていった。

「簡単に対処しやがった！」

「まだです。六道剣『一念無量劫』！」

妖夢は新たなスペルを唱える。

瞬間、空間に剣閃が迸り、三次元空間を切り裂いていく。そして裂かれた空間から、無数の弾幕が飛び出してきた。

「あめえ！」

しかし、この程度の弾幕なら簡単に対処は可能だ。

故に一護は軽々とその弾幕を躲し、反撃の時を伺う。だが、そう簡単にはやってこないのが現実だ。

「こちらですー！」

弾幕と共に、妖夢も動いた。

そして連続する剣閃の瀑布。散りゆく桜の花びらは両断され、その刃が鋭く、速く、精妙に、己の敵を討つがために塵殺の軌跡を描く。

走る剣風が一護の頬を、足を、腕を、腹部を徐々に掠めていった。

速い——しかし一護でも反応できないほどの速度ではない。並の者なら閃光にしか見えないだろうが、あくまで方に一人か二人は辿り着ける領域である。しかし本当に恐ろしいのはそこではない。

妖夢の妖気を纏った剣戟は、桜がゆらゆらと舞い落ちるように意が読めない。すなわち剣戟の鋭利さを纏う妖気だけが、不確かに放たれている。有り体に言えば木を隠すなら森である。

どこから、どのタイミングで放たれているかは、妖夢自身にも分かっていない。

分かるのは剣を振るった時に、どこかに放たれているということだけ。故に達人になればなるほど重要視される刀の読み合いなどが、全くもって通用しない。

「くッ——」

徐々にはあるが、一護の足を指を、脇を切り裂いていつている。

スペルを放つ隙すらない。

「はあああああ!!」

そして熱を帯びた声を上げる妖夢。

大気を突き破る轟風と共に、繰り出されたのは渾身の刺突。単純な貫通力なら必殺は愚問だろう。

「黒斬『月牙天衝』！」

刺突が来るということは、すなわち繰り出されていた剣閃が止んだのだ。だからその一瞬の間隙を突くように、一護は自分の最強のスペルを放った。

瞬時に代行証を取り出し、放った月牙は風車のように回転して妖夢

を襲う。

しかし軽々と、一護の月牙は引き裂かれた。

都合三十——妖夢は刺突から移転し剣閃の乱舞へ。奔る刃は疾風となり、月牙を微塵と化すまで断絶した。今まで全てを引き裂いてきた月牙が斬殺された瞬間である。

そして妖夢は動きを止めない。

この手で、黒崎一護を沈めるまでは——

「人鬼『未来永劫斬』！」

残像すら残らない異常な速度で、一護の懐へと入る妖夢。

一護が驚くよりも、反射するよりも、感知するよりも速く刀で強く一護を斬り上げた。次いで二撃、三撃、走る銀光が清流の滑らかさで、しかし瀑布の勢いで連続する。

故に一護は地面に落下するまでに、超光速の連撃で打ちのめされる。一撃と視える剣戟でも、繰り返される刃の数は十、二十の域だ。

「ガアツ、アア、アアアアアア!!」

苦悶という名の叫喚を上げ、妖夢の攻撃が終わる頃にはそのまま階段へと無様に落下していく。

しかし一護は諦めない。

「黒符、『月霊幻幕』！」

落下していく中で、せめてこれでもと言わんばかりに一護が弾幕を唱えた。

漆黒の弾幕が妖夢を襲う。

「蒙昧です」

無意味なことだと呟く妖夢の声に、妖気を帯びた斬撃が飛翔し弾幕を掻き消しながら、そのまま一護の周囲を切り裂いていく。

「く……そ……ッー！」

身体はもはや傷だらけ。満身創痍とまではいかないが、それに近いレベルではある。

一護は気合で体を起こし、再度、戦闘態勢に入った。

「まだ立ちますか。ですが、黒崎さん、もう終わりにしましょう」

妖夢は一護の方を見下ろしながら言うと、新たなスペルを唱える。

「断迷剣『迷津慈航斬』」

妖夢の刀の刀身に青い大量の妖力がつき込まれ、巨大な刀身が作り出された。

これは、あの時一護の月牙天衝をも打ち砕いた最強のスペルだ。

「これで、終わりです！」

妖夢は刀を構え、一気に一護へと振り下ろした。

凄まじい激突音と砂煙が舞う。

これを受ければ一護でも、もう立つてはいられないだろう。

なのに妖夢は怪訝な表情をしている。そう、斬ったという感覚がないのだ。

それどころか、何かに受け止められている感覚がする。

「一体、何が……？」

有り得ない、あの体でこの攻撃を回避ならともかく、受け止めることなど断じて不可能だろう。

そして、徐々に砂煙が晴れてきた。

同時に、妖夢は驚愕の表情へと変わった。

一護の姿が、黒くなっており、自分の刀を一護の右腕の黒い霊圧に受け止められていたのだ。それも易易と、表情には力強く受け止めている歪みすら一切感じられずに。

「妖夢、すまねえが、俺の勝ちだ」

一護は呟くように言うと、妖夢の刀を弾き返す。

そして妖夢と同じ上空へと跳躍し、霊子で足場を形成した。その姿に、あの時の傷の痛みなどの苦悶も一切感じられない。

「そんな、まだ、黒崎さんはそのような力を隠していたのですね……！」

悔しさをすら孕んだ表情に彩られながら、妖夢は再度、一気に一護に斬りかかる。

妖気を刀に纏わせ、刺突の構えで空間すら引き裂く剣戟を放った。

「……悪いな。この程度じゃあ、今の俺には勝てねえよ」

「——なッ!?!」

命中はした。

しかし左手で、一護は妖夢の必殺にも等しい刺突を受け止めていたのだ。これには驚かずにはいられない妖夢。

全く後退せず、踏ん張るでもなく、当たり前のように妖夢の刀を受け止めている。事実として妖夢の手応えは不動の大木に激突したかと思えるほど重厚に、堅牢に感じ取れた。

「次は、俺の番だ」

一護は力など一切込めていない。

誰が見てもそう言うだろうゆったりとした動作で、もう片方の右腕

——霊圧が込められている方を軽く振るった。

それだけで妖夢は後方に吹っ飛ばされた。

もはやパワーの面でも完全に一護が圧倒している。妖夢は子供に等しい扱いだ。

「私が、こんな簡単に押されるなんて……！ そんなはずない！」

自分の今までの努力が、一気に覆されるなんて信じたくない。

それ故に、妖夢はスペルを唱え駄目押しへと掛かった。

「六道剣『一念無量劫』！」

再度、先と同じスペルを唱える。

そして斬る場所は一護の上——頭上の空間を滅多矢鱈に剣閃を走らせ、空間を引き裂いていく。

そこから雨のように弾幕が飛び出し、一護へと降り注いだ。それに、これだけではもちろん、終わらない。

「獄炎剣『業風閃影陣』！」

これも先と同じスペル。

大弾を複数放ち、それを自らの刀で斬り、分散させていく。横合い、上空からの二重攻撃だ。

「……………」

しかし、連続するそれらの弾幕の中、一護は一発すら掠っていない。密度的には回避不可能な絨毯爆撃になっても、悉く躲し続けている。

瞬間移動や空間移動のようでもあるが、だがそうだと断言できない遅さが付随している。ゆるやかに、舞う桜のように。

言うなれば何かの歩法。回避という意味概念すら操作しているよ
うな。

「嘘……そんな、はず……」

その光景に戦意すら失いかける妖夢。

だが踏ん張り、刀を握る力を緩めずに、一護を見据える。

どこかに、きつと何か弱点となるものがあるはずだ。ないわけがな
い……と、観察するも、妖夢の洞察力ではそれを見極めることはでき
なかった。

なら、もう手は一つしかない。

「私の全身全霊、至極の一閃を与えるまで」

妖夢は構えの態勢に入り、そして最後のスペルを唱える。

「奥義『西行春風斬』！」

妖夢がスペルを唱えた瞬間、一護目掛けて走りこみ、桜色の斬撃を
帯びながら、放ちながら突っ込んできた。

どうやら、このスペルが妖夢の今出せる最強のスペルだろう。

一護は何の動揺もせず、ゆつくりと右腕を上げスペルを唱える。

「黒斬『月牙天衝』」

一護はスペルを唱えると、月牙を放つように右腕を振り下ろした。

それにより月牙が放たれ、一瞬で妖夢の斬撃と共に妖夢を撃ち落し
た。妖夢はあまりにも月牙の速さに反応できずに撃ち落されたのだ。

「また、私の……負け……ですか。申し訳ございません、幽々子様。
私、負けてしまいました……ッ！」

妖夢は落下しながら薄い意識の中、誰かに謝罪している。

そして、ほどなくして地面に激突した。

だが、痛みは無い。

誰かに受け止められたのだ。

だけど、妖夢にそれを確認する程の意識は残っておらず、意識を
失った。

第22斬【亡霊の幽々子】

《1》

魂魄妖夢の相手を黒崎一護に任せた博麗霊夢、霧雨魔理沙、十六夜咲夜は既に長い階段を上がりきり、どこかの庭園にいた。

そこには立派な日本屋敷があり、綺麗な桜の木がいくつも並んでいる。

「ここはどこなんだ？」

魔理沙が周りを見渡しながら聞く。

「多分、ここは冥界ね」

魔理沙の質問に霊夢が平然と答えた。

冥界、普通は聞いたら驚くはずだが、二人とも特に驚いている様子は微塵もない。

「生きた人間が冥界に来てても良いのかしら」

咲夜が尤もなことを言う。

「駄目に決まっているでしょ。だから早々にお引取り願おうかしら？」

「……誰あんた？」

いつの間にか、知らない女性が前方に佇んでいた。

女性は綺麗な桜色の髪をしており、薄紫のナイトキャップを被っている。そのナイトキャップには白布の、おぼけが付けるような三角頭巾が付けられている。着物を着ており、柄は桜で全体的に水色の着物だ。腰回りの帯は太く、腰の横辺りで蝶々結びされている。

見た目は美しい和服美人だが、生きている人間の生気を全く感じられない。

「私は幽冥楼閣の亡霊少女 西行寺幽々子。つて、あれ、こういう時つて普通自分達から名乗るのが礼儀じゃないの？」

「そんな礼儀は知らないわ」

キツパリと言う霊夢。

「あなた本当に巫女？」

霊夢の言葉に少しだけ呆れる幽々子。

「これは申し訳ございませんでした。私は紅魔館のメイド 十六夜咲夜です」

「私は奇妙な魔法使い 霧雨魔理沙だぜ。よろしくな」

咲夜と魔理沙は霊夢のやり取りが無かったかのように自己紹介をする。

「ほら、あなたのお仲間はちゃんと名乗ったわよ。早くあなたも名乗りなさいよお」

「何かムカつくわね」

幽々子のセリフに少しイラツと来る霊夢。まるで出来ない妹を優しく叱る姉のような口調だ。

「私は永遠の巫女 博麗霊夢よ」

「よく出来ました」

幽々子のセリフに、更にイラツとする霊夢はとつとと用件を済ます事にする。

「あなたの集めてる春を返しにもらいに来たわ。さあ、とつとと大人しく素直に返しなさい」

犯人かどうかも聞かないで、決定事項のように言う霊夢。

その言葉に幽々子は特に反論も、嘯くこともせず、笑みを浮かべながら言った。

「嫌だ……つて言ったら？」

「フルボッコよ」

霊力を纏いながら一切逡巡せず――

「霊符『夢想封印 集』！」

スペルを唱えた。

霊夢から複数の光弾が、幽々子に集まるように放たれた。

「あらあら、いきなりスペルを唱えるなんて本当に礼儀がなっていないわね」

幽々子は何の動揺もせず、同じくスペルを唱える。

「亡舞『生者必滅の理』」

螺旋状に弾幕が飛び散り同時に複数の大弾が現れ、それにより霊夢の放った複数の光弾が掻き消されていく。

「面倒ね。夢符『封魔陣』！」

霊夢がスペルを唱え結界を張り、飛んでくる弾幕を防いだ。

「あら、少しはやるようね」

幽々子は少し感心したように言う。

「あんたもね。けど、何か忘れてない？」

霊夢がそう言うと同時に、幽々子の後方から魔理沙と咲夜が現れた。

「私たち二人を忘れてるぜ。魔符『ミルクィウェイ』！」

「幻符『殺人ドール』！」

二人はスペルを唱え、幽々子に星型の弾幕と無数のナイフが放たれた。

霊夢も前方からさつきと同じスペル、霊符『夢想封印 集』を発動する。

これにより幽々子は前方からも後方からも弾幕に襲われることになった。並の妖怪でなくとも、この三重攻撃を防ぐのは困難を極める。

「あら、三対一なの。困ったわねえ〜」

困ったと言うものの、全く困ってなさそうな幽々子はスペルを唱える。

「けど、私の方が上ですよ。亡郷『亡我郷』」

幽々子を中心に全方位に、無数の弾幕とレーザーが回転しながら発射された。

それにより、霊夢たちの弾幕が相殺されていく。

「すげー、マジで強いぜ」

魔理沙が焦りにも似た感心をする。

「フッフ、私の本気はこれからよ。華霊『バタフライデイルージュン』」

*

(!! ……この霊力は?!)

一護は急いで階段を駆け上がっていた。

その最中、一護は霊夢たちの霊力と共に、もう一つ強力な霊力を感じ取っていたのだ。

(霊夢たちと接戦してやがる！ こいつはただ者じゃねえな！)

恐らく妖夢が守っている主だろう。実力言うなら、吸血鬼のレミリアやフラン以上といっても過言でない猛者だろう。霊力だけで分かる。

一護は右腕に霊圧を込めながら急いだ。

*

「……この亡霊女。中々弾幕が当たらないわね」

霊夢が悔しそうに呟く。

三人が放つ弾幕が悉く攻略されて言っているのだ。悔しくて仕方ないのも無理はない。同時にそれによる心理的な疲労と、体力的な疲労が体を蝕んでいる。

「流石に三人相手じゃ私でも結構きついわね」

幽々子も弾幕が全く当たっていない訳では無い。

だが、三人相手に引けは取っていない。しかし、やはり三人を相手にすると、どうしても疲労が滲み出る。

「そろそろ終わらそうかしら」

幽々子が小さくそう呟く。

瞬間、凄まじい霊力が幽々子から溢れ出た。

それを直接感じ取った三人に、冷や汗が流れる。

「さあ、いくわよ」

「させるかあ!!」

突然、一護の声が聞こえてきた。

幽々子はスペルを唱えるのを止め、声のした後ろを反射的に視線を投げる。

そこには一護が月牙を放つ態勢に入っていた。

幽々子はその姿に目を丸くする。

「黒斬『月牙天衝』！」

一護は幽々子に向かって月牙を放った。

「しま——ッ！」

幽々子は咄嗟のことに対応しきれず月牙に飲み込まれた。

霊夢、魔理沙、咲夜対幽々子の弾幕勝負は一護の月牙天衝により、一時停止する。

幽々子はその月牙天衝に飲み込まれた。

……と、三人は思っていた。

そう、月牙天衝は幽々子のギリギリ横を通り抜けていっただけで、幽々子は無傷だったのだ。

「あなたは何者？」

幽々子が一護に向かって聞く。

「黒崎一護。 霊夢たちの仲間だ」

「黒崎一護……」

幽々子は腕を組み思案する。

「……あ、思い出したわ。妖夢の言っていた子ね。後、新聞に載った子」

幽々子は一護という人を思い出すと同時に、妖夢が一護に敗れたということを悟った。

「ふくん、ねえ一護ちゃん」

(ちゃん付け……?)

「私と一対一で弾幕勝負してくれない？」

突然の幽々子の申し込みに一護だけではなく、霊夢たちも驚く。

「ちよっ、あんたは今私たちと弾幕勝負しているのよ！ 勝手なこと言わないでー！」

霊夢が幽々子に怒鳴り声を上げた。

「あら、別にいいじゃない。あなた達はもうボロボロなんですから、一護ちゃんに代わってもらうってことで」

「ですが、あなたも表面上はピンピンしていますけど、内面の方はどうでしょうね？」

咲夜のセリフに幽々子は少し顔を引きつる。

「……だったら、ハンデをちょうだい」

幽々子のバカげたセリフに一同啞然とする。

「ふ、ふざけたこと言ってるんじゃないわよー!!」

霊夢が咆哮のような怒鳴り声を上げる。

一護たちはしつかり手で耳を塞いだ。

「あんた今の状況分かってるの!? ここで四人で掛かれば一瞬であんたの負け! この現状でよく……!」

霊夢が一人怒鳴っている間、一護は幽々子と話をしていた。

「あんたの名前、まだ聞いてなかったな?」

「私は西行寺幽々子。よろしくね一護ちゃん」

「その、ちゃん付け止めてもらえませんか?」

「えくいいじゃない。可愛いでしょ?」

「そういう問題じゃなくて」

「その二人! 何和気藹々と話込んでるのよ!」

霊夢は自分を無視して、二人が普通に話しているのを見て再び怒鳴り上げた。

「あら、まだ了承してくれないの?」

「する訳ないでしょ!」

即答する霊夢。

幽々子は一つ溜息をつき

「仕方無いわね。じゃあ、こうしましょ。私が負けたら春を返した上、ここでの花見を許可するわ」

と、提案する。

「お生憎様。花見は家でも出来るのよ」

「でも、ここの桜はそこら辺とは訳が違うわよ」

「そんな提案を呑む訳ない……」

「いいじゃねえかよ霊夢」

霊夢は最後まで言い切る前に、一護の言葉に遮られた。

「いいわけないでしょうが。何勝手に決めているのよ」

「俺は幽々子さんと一度戦ってみたくなった。それに俺が負けるとでも思ってるのか?」

「それは……」

霊夢は言葉に迷ってしまった。

「仕方ない! じゃあ、もう一つ」

と、幽々子が何かを切り出す。

「私が負けたらタダ酒に妖夢お手製弁当をお腹一杯になるまでご馳走するわ」

「オツケー。いいわよ」

幽々子の提案に霊夢は即OKを出した。

「いいのかよ」

一護はそんな霊夢を見て小声でつつ込む。

「良かったね一護ちゃん。これで弾幕勝負ができるよ。それじゃあ、ハンデをもらうわね」

「ああ」

「私は三発、弾幕を被弾したら負け。一護ちゃんは一発でも被弾したら負け。いいわね?」

「あ、ああ。構わないぜ」

少し無茶だが一護はOKした。

「それじゃ、スタート!」

幽々子が開始の合図をすると同時に一護はスペルを唱えた。

「黒符『月霊幻幕』!」

三日月状の弾幕が展開され、幽々子目掛けて発射する。

「あらあら、速いわね」

幽々子もカードを取り出し、スペルを唱える。

「桜符『完全なる墨染の桜』」

幽々子から大量の大弾が放たれた。

その大弾により、一護の放った弾幕が掻き消されていく。

そして更に米粒状の弾幕が数多に降り注いできた。

一護は直ぐ様それを避ける。

(すげえ弾幕だ)

一護が弾幕を避け続ける隙を狙い、幽々子は新たなスペルを唱える。

「死符『ギヤストロドリーム』」

次は、幽々子を中心に大量の蝶の形をした弾幕を、円状に撃ち出された。

「やべえ！」

一護は直ぐにスペルを唱える。

「黒斬『月牙天衝』！」

一護の右腕の黒い霊圧から月牙が放たれた。

その月牙が全ての弾幕を掻き消していく。

（くそ、こんなに早く月牙天衝を使っちゃった！）

一護は少し情けない気持ちになった。まさか、こんなに早く自分の切り札である、月牙を使うことになるとは思わなかったのだ。

（つうか、これで霊力が殆ど残ってねえのかよ。ピンピンしてるようにしか見えねえぜ）

一護は少し焦っている。

咲夜が幽々子の霊力はもう殆ど残っていないと言っていたが、一護からしたら余裕なくらいある。

これで殆ど無かったら、もし始めの全快の状態で戦っていたらと思うと、少し恐怖を覚える。

「それがさっきのスペルね。見たところ、一護ちゃんが一番最強のスペルなんじゃない？」

綺麗に当てられた。

「ああ、そうだ」

「凄いわね。私の弾幕を全て潰すんですもの。やっぱり弾幕勝負はハラハラドキドキしないとね」

余裕綽々という感じだ。

「そうかよ。だったら、あんたのお望み通り、もっとそうさせてやるよ！ 黒斬『月牙天衝』！」

一護は幽々子に向かって月牙を放つ。

だが、月牙は当たらなければ怖くないし、真正面から堂々と放たれても簡単に避けられる。

ゆえに、幽々子はその月牙を軽く横に移動し避けた。しかし一護は、その移動する一瞬の隙を狙っていたのだ。

「黒符『天幻月牙』！」

一護がスペルを唱えると同時に幽々子の周りの空間から三日月状

の弾幕が現れ、幽々子目掛けて一斉に放たれた。

だが、幽々子は予想していたかのように対応する。

「幽曲『リポジトリ・オブ・ヒロカワ』」

幽々子から円形状に広がる弾幕が現れ、それが一護の弾幕を相殺していく。

「チツ、やっぱ駄目か。じゃあ、こいつでいくぜ」

一護は新たなスペルを唱える。

「——黒符『天雨月閃』」

一護がスペルを唱えた瞬間、三日月状の弾幕が展開され、全て上空へと飛んでいった。

「逃げれると思うなよ。降り注ぐ月牙の雨から」

一護はそう言うと、弾幕を幽々子に向かって軽く放つ。

「何言っているの？ あんなもの、この場に居なければいいだけじゃない」

幽々子はそう言って、一護の放った弾幕を避ける。

たしかに上空に放った一護の弾幕は、恐らく相手が居た場所に降り注ぐ弾幕。だが、幽々子は一護がスペルを発動してから放った普通の弾幕により、既にその場には居ない。それ故に、上空に放った弾幕は無意味なところに落下すると思われた。

しかし——幽々子の避ける方向を予測していたかのように、月牙の雨が幽々子に高速で降り注いだ。

咄嗟の事に幽々子は避けるのに遅れ、一護の弾幕を二発被弾してしまふ。

「ど、どうして私の所に!?!」

流石の幽々子も今には驚いたようだ。

「予測しておいたんだよ。俺があの時月牙を放って、あんたがどう避けるかをチェックし、あんたの動きを予測した。そして次にさっきのスペルを発動し、予め予測しておいた場所に月牙が降り注ぐようにする」

「簡単に言うと、こう攻撃を仕掛ければ、こう躲すだろう。さっきの普通の弾幕がその役割をしたわけね」

「そういうことだ。半分は賭けだったけどな」

避ける方向と場所を予測して、放った天雨月閃が当たり成功して少し満足気になる一護。

「うーん、これは一気に私が不利になったわね。でも、さっきの手はもう通じないわよ」

「分かってるさ。同じ手が二度通じる相手とは思えねえし」

幽々子は二発被弾したせいで、後一発でも被弾したら負け。

これで、お互い一発でも当たったら負けとなる。

「それじゃあ、続きといくぜ」

その瞬間、一護は右手に変な違和感を感じた。

だが、一護は特に気にせず、幽々子の方に向かう。

「黒符『月霊幻幕』！」

一護は自分の周りに三日月状の弾幕を展開させながら幽々子の方に行く駆ける。

「無闇に放つのは止めたようね」

幽々子は一護から逃げるように、後ろに高く飛んだ。

そして、周りの桜の木より数段大きい木を背景に、一護と向かい合った。

「ん、何だ、その木……？」

一護はその桜の木から不思議な力を感じた。

自分では理解できない力を。

「これは西行妖っていう妖怪桜よ。こんなに桜が開花しているのに、これでも満開じゃないのよ。見てみたくない？ この桜の満開を」

「……まさか、あんたが春を奪っていた理由って」

一護は幽々子のセリフから春を奪っていた理由が分かった。

「そうよ。私はこの西行妖を満開にしてみたかったの。その為に幻想郷中の春を集めていた。それだけの理由よ」

「……どうしてだろうな、その桜は満開にしない方がいいと思うぜ」

一護はその桜の木から、根拠も何も分からないが危険を感じていた。

「そうね。たしかに満開にさせたら封印が解けて、何者かが復活す

るって聞いたわね」

「封印してんなら解いたら駄目なんじゃねえの」

尤もな意見を言う一護。

「いいじゃない。別に」

「駄目だろ普通。まあ、俺が勝てばそれを阻止できる話だけだな！」

「ここでいちいち、桜の満開の問答口論をしている場合ではない。弾幕ごっこに則れば、一番簡単に解決できる。」

一護は再び幽々子の方に向かって飛んだ。

「これで最後よ。『反魂蝶——一分咲——！』」

幽々子からレーザーと弾幕がばら撒かれた。

「この程度で当てれると思うなよ」

一護は全てのレーザーと弾幕を避けながら進む。

「まだまだ、次よ。『反魂蝶——三分咲——！』」

幽々子から再び同じようなスペルが唱えられる。

さっきのスペルと似ているが、弾幕の数と放たれるレーザーの数が一段とアップしていた。

「面倒臭え」

一護は展開しておいた弾幕で、幽々子から放たれる弾幕を相殺していく。

「まだ、やるのね。『反魂蝶——五分咲——！』」

再び同じようなスペルが唱えられた。

同じように弾幕の数とレーザーの数が増えている。更に大弾まで加えられており、込められている霊力が天井知らずに上がっていく。

「くそ、何なんだよこのスペル!？」

一護は残っている弾幕を全て放つ。

それでも当て損なった弾幕は紙一重で避けていった。

「まだ当たらないのね。だったら、これで本当の最後よ。——『反魂蝶

——八分咲——！』」

「ごっちゃんも最後だ!」

幽々子がスペルを唱えると同時に、一護は動きを止める。

幽々子からは無数の弾幕とレーザーが放たれてくる。

それを見た一護はスペルを唱えた。

「黒斬『月牙天衝』！」

一護から凄まじい月牙が放たれた。

その月牙が幽々子の弾幕を掻き消していく。

「もう少しなのよ……」

幽々子は月牙に消されていく己の弾幕を見ながら言う。

「もう少しで……西行妖が満開になるのよー」

幽々子が激昂すると同時に弾幕の威力が強くなった。

一護の月牙が一瞬押されたが、それでも月牙の方が強かった。

——月牙はそのまま弾幕と共に幽々子を貫いたのだった。

第23斬【約束の花見】

《1》

西行寺幽々子の企みは、博麗霊夢と霧雨魔理沙、十六夜咲夜、そして黒崎一護の活躍により幕を閉じた。

よって春を集め、満開にしたかったであろう西行妖は諦め、春という概念が元通り幻想郷中に還元された。故に今回の異変は無事解決したのだ。

*

異変解決から数日後、幽々子から花見の招待通達が届き、今回異変解決に貢献した四人の他に紅魔メンバー、魔理沙の誘いでアリス、そして大変ご迷惑をかけたプリズムリバー三姉妹も参加することになった。

そして約束通り、幽々子の白玉楼にて盛大に花見を行う。もちろんタダ酒であり、タダ飯がたら腹食えるのだ。

霊夢はタダ酒ということもあり、飲みまくっている。それとは対照的に、一護は未成年なためオレンジジュース（果汁100%）を飲みつつ、妖夢の手作り弁当に舌鼓を打っていた。

「どうですか黒崎さん。お口に合いますでしょうか？」

妖夢は自分の作った弁当を食べている一護の姿を見て、少し緊張した面持ちで聞く。

「ああ、美味しいぜ。この味付け、結構俺好みだな」

「あ、ありがとうございます！」

妖夢は嬉しそうに言葉を上げる。

「あ、あの、こちらも、よければお召し上がりください……！」

と、妖夢が皿に乗った一口サイズに切られた、卵焼きを差し出した。見た目は一般的、平均的なものだ。

「おう、さんきゆう」

一護はパクリと、それを食べた。すると卵の旨味と、更に相乗効果を生み出す出汁の効いた風味が口いっぱい広がった。

「おお、すげえ美味えな」

自然に、関心の声を上げる一護。本当に、お世辞抜きに今まで食べた卵焼きの中で一番美味しい。

「これだけで店出せるんじゃないか。俺なら毎日通うぞ」

「え……そ、そこまでお褒め頂いて、嬉しい限りですはい！」

少しドキツとした妖夢は、ちようど手に持っていたお盆で顔を隠しながら答えた。第三者視点から見たら、初々しいカップルが誕生しそうな瞬間である。

そんな光景を見ていた一人の少女が、千鳥足気味に近づいてきた。

「お〜お〜お熱いねえ〜お二人さん」

酒瓶片手に、酔った魔理沙が声をかけてきた。

「将来は結婚かなあ〜、このこの」

「完全に悪酔いしてやがる」

肘で小突いてくる魔理沙に、一護は鼻を抑えながら溜息混じりに呟く。本当、見た目が少女だけに、かなり場面的にヤバいところがある。規制されかねないレベルだ。

顔は赤く、目がトロンとしており、しかも酒臭い。

最悪だ。

「け、けけけッ——ケツコン!?!」

魔理沙の発言に対して、恥ずかしさが爆発したのか妖夢は屋敷の中へ逃げてしまった。賢明である。

「つたく、魔理沙ったら何言ってるのよ」

そして次に、アリスがやって来た……と、同時に、

「結婚の日程が決まったら報告してよね」

「こいつも完全に酔ってやがる」

もう、完全に酔った親父の領域だ。

こういうのに絡まれるくらいなら、そこらの不良に絡まれる方が何倍もましだと思おう一護。

とりあえず、この二人から一護は逃げるように離れた。

「これじゃあ、ゆっくり弁当も食えないな」

こんな桜が綺麗なのに、周りには酒に酔った集団がいるため静かにできない。とてご立腹である。

と、前方で紅魔メンバーが騒霊の三姉妹の演奏を聴きながら花見をしていた。

「あれえ〜、一護だあ。けど、ぼやけて見えるよお〜」

金髪少女のフランが一護に気づき、よろよろの千鳥足で一護に近づいてくる。

こいつも、酔っている。体格は完全な子供だが、実年齢は500を超えるため、飲酒はOKだが絵的には一番大変だ。

「あれえ〜、一護が四人に分身したあ〜。もしかして私のフォーオブアカインドを使ったのかなあ〜」

フランは違う意味で嫌な酔い方をしている。

「コラコラ、フラン駄目よ。一護を困らしちゃ。——弾幕ごっこなら、あつちでやって来なさい」

そしてフランの姉であるレミリアが助け舟をくれるかと思いきや、とんだ煽り舟だ。

同じく酔っているのを瞬時に理解できた。

「一護さんー」

一護は嫌になり逃げようとしたのも無駄に終わった。

美鈴が気合の入った声を上げて、反射的に一護の動きを止める。

「何です……?」

気合の入った声なので、どこかこの人なら酔ってなさそうと期待する一護だが、

「私とお、戦ってえくれませんかあ〜? 今なら私、酔拳が使えるん

でえ、メツチャ強いですよ」

少しでも期待した自分がバカだったと思う一護。

溜息を盛大につく。

こういう時に限って、一番まとも(?) そうな咲夜は、妖夢と料理を作っている。

(……そうだ、俺も二人の方に行って手伝うか)

そうすれば、こんな悪酔い共と居なくてすむ。

一護は、早速屋敷の中に入ろうとする。

その途端、後ろから誰かが抱き付いてきた。

(この豊満な感触は……)

一護の背中に抱きついているので、背中に誰かの豊満な胸が当たっている。柔らかく、弾力のある感触に初心な一護は、少しどころか結構ドキリとしてしまう。

そして、この中でこれ程の胸の持ち主は一人しかいない。

一護はゆっくり後ろを振り向くと、そこには幽々子がいた。

「一護ちゃん、ダメよ。勝手に人の家に入っちゃ」

この人？も完全に酔っている。

「あの、幽々子さん。その、胸が背中に、当たっているんですけど……」
恥ずかしながらも言った一護は少しどころか、かなり赤面する。

「やあくん、一護ちゃんのエッチイ。ホントは嬉しいくせにい」

「何言ってるんですか!?! あんたは!」

悪酔い共に絡まれて徐々にイライラしてきた一護は幽々子を引き離し、屋敷の中へ入って行った。

幽々子は何だか少し残念そうにいる。

そして一護は直ぐに戻ってきた。

両手に満タンの水が入ったバケツを持って……

「あんたらいい加減に目え覚ませ!!」

一護はバケツに入った大量の水を悪酔いしている全員にぶっかける。

ぶっかけられた悪酔い連中は水のせいで一気に酔いが覚めた。

「ったく、これだから悪酔い連中は」

一護は悪酔いから覚めた連中を一瞥し、屋敷の中にバケツを戻そうとした。

「黒崎さあん!!」

が、妖夢の呼ぶ声が一護を止めた。

妖夢が門の方から慌てて何かを持ってやって来る。

「何だよ、そんなに慌てて」

妖夢が一護の前に行くと言って持っていた物——文々。新聞を一護に渡した。

「……………」

一護は何がなんだかよく分からないが、とりあえず新聞を受け取り見る。

それを見た一護は目を丸くした。

それが気になった霊夢（もともと酔っていない）、酔いの覚めた魔理沙が新聞を覗くと、二人とも一護と同じ反応をした。

「あら、どうしたの？ 私にもちよつと見せて」

幽々子が一護から新聞を取り読み上げる。

「えくと、大スクープ。異変を解決し、吸血鬼とも互角以上に戦った黒崎一護氏が、バカで有名な妖精チルノ氏に……まさかの敗北」

幽々子の読み上げに、紅魔メンバーがピクリと反応した。

「チルノ氏が幻想郷最強か……だって」

「ちよ、ちよつと待てよ！ 俺はあの弾幕勝負は——」

わざと負けた、なんて言えなかった。

なぜか、それが卑怯だと思ったからだ。

「くそ、あの鴉女！ 許さねえ!!」

一護は再び文に復讐？を誓った。

*

その頃、ある屋敷では一護たちと同じ新聞を見て苛立っている男がいた。

「あの野郎、こんなふざけた奴に負けやがって……」

怒りが頂点に達したのか、男は新聞を握り潰した。

「何をイライラしているの？」

その男に女の人が声を掛けた。

「チツ、どうでもいいだろ」

男はクシャクシャの新聞を投げ捨て、何処かへ行った。

女はそのクシャクシャになった新聞を拾い上げて、目を通す。

そして、女は何か面白い事でも考えたのか微笑んだ。

《2》

あの花見の後、霊夢、魔理沙、一護以外は全員帰った。

花見にパチユリーが見えなかったのは、ある事を夢中に調べていた

かららしい。恐らく何かの文献だろう。

そして三人は花見の後、幽々子の家に泊めてもらった。

霊夢と魔理沙はあの後も飲んだせいで、直ぐに就寝した。本当、約束どおり大量に飲み食いをしたのだ。

一護は泊めてもらう礼として、適当に妖夢の手伝い、床に就いたのだった。

そして、明朝直ぐにお暇するはずだったのだが。

「すみませんが、こちらに黒崎一護という人はいますか？」

一護は朝起き、着替え、縁側に出たら一人の女性に突然声をかけられた。

金のショートボブに金色の瞳を持ち、その頭には角のように二本の尖がりを持つナイトキャップを被っている。

服装は古代道教の法師が着ているような服で、ゆつたりとした長袖ロングスカートの服に青い前掛けのような服を被せている。

その女性が腕を交互の袖の中に隠しながら、黒崎一護の居所を本人に聞いてきた。

「えっと、俺がその黒崎一護ですけど」

一護は自分を指差しながら言う。

それを聞いた女性は少し驚いた表情をした。

「そうでしたか。これは失礼しました。あなたが黒崎一護さんでしたか。では、今から私とちよつとの間付き合ってもらいます」

「は………どういう事だよ？」

一護は訳も分からない事を言われ、少し困惑する。

「仰った通りの意味です」

女性はそういうと自分の後ろを指し示した。

そこには空間に穴が空いていた。両端にはまるで空間を縛るようにリボンが付いており、漆黒の穴が口を開いている。

「では、行きましようか」

そう言うと、女性は穴の方に歩き出した。

「ちよつと待てよ。俺はまだ行くとは言ってねえぞ」

「幽々子さんには既に伝えて了承を得ていますが。それに、この先に

あなたに会いたがっている男がいるんです」

「俺に会いたがっている男。つうか、あの人？は勝手な事してくれたな」

一護は頭を抱える。

女性は穴の中に入っていた。

「あ、おい待てよー」

一護は何も考え無しに、反射的に穴の中に入って行ってしまった。

*

穴の中は無数の目が有り、一言で言い表すなら気持ちの悪い空間である。常に全方位から監視されているような、不気味かつ居心地の悪い所だ。

一護は女性の後ろを歩きながら周りを見渡す。

(何か、気分が悪くなってきやがった)

一護は手で口を押さえる。まだ、寝起きも同然で、こんな空間にいたら気分が悪くなるのも必然であるし目覚めが悪い。

「そういや、まだあんたの名前聞いてなかったな」

一護は不図思ったので聞いてみる。

「私はすきま妖怪の式 八雲藍です」

「式って式神のことか？」

「はい。私はグータラババア……じゃなかった、スキマ妖怪の八雲紫様の式神です」

(今グータラババアって言わなかったか?)

と、そんな会話をしていると出口に到着した。

そこは一護が一回だけ行った事のある、橙と弾幕ごっこをした迷い家だった。

「……は……」

一護がそう呟くと、目の前に一人の女性が現れた。

金髪のロングで毛先をいくつか束にしてリボンで結んでおり、ナイトキャップを被っている。首にも同じ赤いリボンが付いている。服装は紫にフリルのついたドレスを着ており、白い手袋を着用している。

片手には大きな可愛らしい日傘を持っているのが特徴的だ。

一護はその女性を見て、かなりの強者だと分かった。

正直いって、今の自分では敵わないと瞬間的な直感で確信している。

「あんたは?」

「人に名を聞く時は自分からよ、ぼーや」

「……黒崎一護」

「私は神隠しの主犯 八雲紫。よろしくね」

紫が一護に微笑みかけてくる。

しかしその裏、何かを楽しんでいるような企んでいるような、判然としない雰囲気がある。そこにあった。

「で、用件は何ですか?」

「早速本題に入るの。せっかちさんね。まあ、それ程大した用じやないから安心して。あなたに会わせたい男がいるの」

「誰だ?」

「ごつちにいらつしやい」

紫はそう言うと歩き出した。

どうやら、その男のところに連れて行くようだ。

一護はその後ろを歩く。

付いていくこと二分、一護は少し広い平地にやってきた。

同時に——驚愕した。

一人の男が自分に背を向け立っている姿を見る。

一護はその後ろ姿だけで誰なのかが分かった。

ショートジャケット風の白い死覇装に水浅葱色の髪。そして、右腰背面に「6」の刻印がある。

一護は声を上げ、その人物の名を言った。

「グリムジョー!!」

その名を言われ、男は笑みを浮かべながら一護の方を振り向いたのだった。

第24斬【グリムジョー・ジャガージャック】

「――グリムジョー！」

黒崎一護は確信と共に叫ぶ。

目の前に、忘れるはずもない男が立っている。

死神時代、激しい激突を繰り返した敵。虚圏の虚夜宮で倒したはずの破面――グリムジョー・ジャガージャック。

その男が、何の因果か幻想郷に……黒崎一護に背中を向けるようにして佇んでいる。

「……よオ、黒崎一護」

ゆつくりとした動作で、グリムジョーは振り向きつつ呟くように一護の名を口にした。

刹那、一護の視界からグリムジョーの姿が消えた。

いや、消えたのではなく、単純に動いたのだ。常人には目視不可な速さで、風のようにして一護を引き裂くように――

「ッ！」

一護は透かさず後ろに跳ぶ。

その瞬間には、己のいた位置に地面を打ち砕くほどの拳が叩き込まれていた。間一髪、ちよつとでも避けるのに遅れていれば、地面の代わりに自分の頭蓋が砕かれていたであろう一撃だ。

「何しやがんだグリムジョー!?!」

今のは確実に殺す気の攻撃。

一護は睨みつけ、砂塵飛び交う中、油断せずに問いただす。

「久し振りじゃねえか、黒崎。まさか、テメエまで此処に来ていたなんてな。偶然じゃねエかオイ。なあ、どうして此処にいやがんだ黒崎?」

グリムジョーは一護の言葉など無視し、己の疑問のみをぶつける。先の一撃は訛っていないかの試しだったのか、特に戦闘態勢に入るのではなく質疑した。

「それはごつちのセリフだ。何でテメエがここにいんだよ?」

「先に聞いたのは俺だぜ。テメエから答えろ」

「……俺はただ、偶然ここに幻想入りしちまっただけだ」

今ではその回答も怪しいが、しかし現在はそれで正解だろう。

「お前も、同じ理由か？ グリムジョー」

「……ああ。俺も此処に幻想入りして、その女に此処の知識を教わった」

グリムジョーは紫を一瞥して言った。どうやら、八雲紫に世話になっっているようだ。

とてもじゃないが、それだけで女——八雲紫の総合力を凄まじいものと感じ取れる。グリムジョーのような野蠻で戦闘大好きな男に何かを教え、一緒に暮らしている。そんなことができるのは並の者では不可だ。

よって、紫はとんでもない力を持っているのだろうと察せれる。

「……………」

そこで、一護はある事に気付いた。

「テメエ、霊圧はどうした？」

そう、一護はグリムジョーの霊圧が弱まっている事に気付いたのだ。

以前グリムジョーと戦った時より半分位の霊圧が消えている。

「さあな。俺はテメエとノイトラの戦っている最中に意識が途絶え、此処に来た。そして、理由も何も分かんねえが、俺の霊圧のほとんどが消えてやがったんだよ。それどころか、帰刃（レスレクシオン）まで使えなくなっちまってる」

「何だど？」

グリムジョーは苦虫を噛み潰したように言った。

一護が感じたところ、恐らくグリムジョーは全盛期の三分の二程の霊圧を失っている。しかも聞くところによれば、破面の最終奥義に等しい帰刃まで使えなくなっているらしい。

しかしグリムジョーは、そんなことほぼ歯牙にもかけず言葉を吐く。

「けどまあ、実際そんな事はどうでもいいんだよ。俺は……テメエと戦う為に此処に呼んだんだぜ」

」
半分以上、予想していたことだ。

グリムジョーが一護の目の前に現れた時点で、なぜ自分がここに呼ばれたのか、今から何をするのか予想できなかったわけがない。

——戦い。

一護とグリムジョーの間にあるものは、それのみと言って過言ではない。

「心配しなくても、ちゃんとした弾幕勝負でだ、黒崎。テメエは言ったよな。何回でも戦ってやるってよ」

一護はグリムジョーとの戦いの終末を思い出す。

確かに言っていた。自分のことが気に喰わないなら、何度でも戦ってやると……発言した記憶が残っている。

「だから、俺と戦え！ 黒崎！ 今度こそテメエに勝ち、俺の方が上だって事を教えてやる！ あの時の雪辱ここで晴らさせてもらうぜ」

もはや純粹な執念、執着心。

そう言った本能により、己の好敵手である黒崎一護に仕向ける。

「……ああ。だったら、俺も手加減無しで行くぜ。覚悟しろよ、グリムジョー」

一護はグリムジョーの瞳を見据えて言った。

「いいぜ、そうこなくっちゃな黒崎。勝負ルールは至って簡単だ。――

――最後まで立っていた奴の勝ちだ。さあ、始めようぜ！」

「ああ」

グリムジョーがそういうと一護は即座に代行証を使い、死神の姿になつた。

こいつ相手に下手に手を抜けば、一瞬で自分の敗北が決まるだろう。故、手加減など最初から皆無で挑む。

「テメエのことは紫から聞いているぜ。死神の力を無くしたらしいな」
その発言に、一護は眉をひそめた。

「藍染の野郎を倒す為に失ったんだろ。いいじゃねえか！ 俺もお前も一から再び強くなった！ 対等ってやつだよ！」

確かに一護は霊圧を失い、幻想郷で一から鍛え強くなった。

滞在期間は違うものの、始まりは対等と言って過言ではないだろう。いや、グリムジョーは霊圧の三分の一は残っていたことを鑑みるに、普通に考えてアドバンテージはグリムジョーに傾いている。

しかし、いちいちそんな小さなことで揉めるようなことは断じてしない。

「喋ってる暇なんてあんのか？ グリムジョー。随分と余裕だな」

刹那——グリムジョーが舌を回している中、一護はいとも容易く背後を取っていた。

手加減、油断。そんなことをしていて勝てる相手ではないのは理解している。故に隙をつき、初撃を貰い受けた。

戦いなど、お互いが臨戦に入った時点で始まっているも同義なのだ。

一護は右腕に備わっている漆黒の霊圧を刀に形成し、攻撃を仕掛けた。

だが、振り向き様に抜き放ったグリムジョーの刀により、宙でぶつかり合い火花を散らせただけだった。

「舐めんなー！」

単純な力任せにより、鏝迫り合いなどほんの数瞬により終わった。膂力は完全にグリムジョーの方が上だったのか、そのまま一護は勢

いよく吹っ飛ばされる。

しかし態勢を直ぐに立て直し、追撃に備えるためスペルを放った。

「黒符『月霊幻幕』！」

一護の周りに三日月状の弾幕が展開され、吸い込まれるようにしてグリムジョーへと飛んでいく。

「おいおいその程度の弾幕で俺をやれると思ってんのかよ！」

それを見たグリムジョーも、同じくスペルを唱える。

「豹符『豹鉤』！」

グリムジョーから無数の棘状の弾幕が、螺旋を描くように放たれた。

そしてお互いの弾幕が掻き消しあい、相殺し合いながら激しい爆風と先行を轟かせる。

烈火怒涛の勢いで放たれるお互いの弾幕に、一切の手抜きがされてない。

「黒符『天幻月牙』！」

そんな中、一護は新たなスペルを唱えた。

グリムジョーの周囲空間から、一護の弾幕が顕現される。少しでも逃げ遅れば、弾幕の餌食となるそのスペルは、初見で躲すのは半端ではない技量が必要となる。

だがグリムジョーは初めから読んでいたのか、一瞬でその場から姿を消した。

響転（ソニード）——破面が使う高速移動能力。常人なら消えたとは思えないその速度。

だが一護は常人ではない。それ故、見切り対処する。

瞬間、一護の懐でグリムジョーの刀剣が炸裂した。

同時に耳を搔つ切るような、凄まじい金属音が響き渡る。

見切っていた一護は、即座にグリムジョーの刀剣と自分の霊圧刀で防ぎ、そして一気に弾いたのだ。

「なるほど、平和ボケはしてねえようで安心した。雑魚の妖精に負けたと言う情報を見たときは、目を疑ったんだがな」

「そいつは文々。新聞か。お前も読んでたんだな。なら、一つお前に教えといてやるよ。あれは事実だ。俺は負けた。いや、言い方は悪いし身勝手な物言いになるけど、あれは負けてやったんだよ。けどな、妖精は弱くねえぞ」

最初はグリムジョーが例の新聞を読んでいたことに少し驚いたが、しかしそんなことより妖精——チルノやその他のみんなを雑魚と呼ばれるのは、どうにも嫌気がさす。

チルノ、そして大妖精は紅霧異変の時、一護を守るため殺しすら躊躇わない敵に、果敢にも挑んだ。

そんな妖精を弱いと、誰が言えようか。

「負けてやったか。クク、ハハハハハ！ そいつはまたそどうしてだと聞きてえところだが、今はそんなことはどうでもいい。妖精に負けたと見たときは、テメエも雑魚に成り下がったのだと不安だったが、

杞憂で何よりだ！」

「そう、かよー！」

そしてお互い、莫大な霊圧を刀剣に纏わせた。ここに激突した力と力の闘ぎ合い。拮抗するが、しかし僅かに一護が押され始まる。やはり霊圧の総量や、臂力が相手の方が上回っている証拠だろう。

「ぐツ、クソォ——！」

しかしどうしてだろうか。始めのように、力任せの激突でも吹き飛ばされることはない。

これは、一護の力が……戦いの中で天井知らずに膨れ上がっているのだ。

論理的解析は不可能に等しい。だがしかし、現に一護は通常時より、戦いの中の方が霊圧の力強さが増す。それはレベルアップでも何でも無い。最初から一護に備わっている力がフル活動しているだけなのだ。

紅霧異変時に美鈴からレミリア、フランに刹蘭、ルリミアと戦った際、霊圧が限界状態になっても尽きることは無かった。それは——己が思っている以上に、感じている以上に、霊圧が眠っており底が見えないからだ。負けそうな時、諦めてはいけないうちに一護は無意識下で下げている力を、一気に上げている。たったそれだけなのだ。

「いいぜ黒崎。戦いはこうでなくちゃアな！」

グリムジョーは後方に飛び、一護から距離をとるとスペルを唱えた。

「虚符『虚閃』！」

瞬間、紅い閃光が一護の視界を埋め尽くした。

死神時代に、嫌というほど見てきた大虚や破面が放つ技——虚閃（ゼロ）だ。

破壊の限りを尽くす閃光が、大地を抉り、吹き飛ばしながら迫る。更に閃光だけあり、速さも凄まじく、例え知ついても避けるのは困難を極めた。

それ故——

「ガッ、アアアアアアア!!」

虚閃に呑み込まれた一護は、全身を蹂躪されると同時に、ボロ雑巾のように吹っ飛ばされた。

「まだだぜ黒崎！ 豹符『豹鉤』！」

グリムジョーは攻撃を休める事なく続いてスペルを唱える。

再び棘状の弾幕が展開され、螺旋のように回転しながら一護を襲う。そも、この弾幕は貫通性と見掛けによらない破壊力に優れており、喰らえばそれ相応の痛手を負うのは必須。

一護は虚閃でのダメージに抗いつつ、対抗、いやグリムジョーの弾幕を消し飛ばせるほどのスペルを唱える。

「黒斬『月牙天衝』！」

一護から破壊力の優れた月牙が放たれ、グリムジョーの放った棘状の弾幕を掻き消していく。

のみならず、月牙はそんな弱い弾幕だけでは食い足りないようで、そのままグリムジョーへと飛来した。

「チツ、虚符『虚閃』！」

グリムジョーは月牙に向かって、同じく破壊力に優れた虚閃を放つ。

だが、紅い閃光すら両断しながら、漆黒の月牙はグリムジョーを包み込んだ。

瞬間、とてつまない爆発が発生し、凄まじい爆風と鼓膜を打ち破るような爆音が響き渡る。

「……………」

一護は迫撃するでもなく、様子を見る。

爆煙で姿こそ見えないものの、あの奥からはまだまだピンピンしているかのような霊圧を感じ取っていた。いや、ピンピンどころか、換気に震えているようにも感じる。

「……フツ、フハハハハハハハハハハ!!」

そして、哄笑が上がったかと思うと、爆煙が引き裂かれて、そこからほぼ無傷に等しいグリムジョーが現れた。

「いいぜ黒崎！ この時を待ってたんだ！ 今度こそ俺がテメエを全力で潰せる時をよ！」

さながら地震でも起きたかのような錯覚さえするほど、グリムジョーは地面を蹴り飛ばし一護へと駆け出す。そしてその速さはまるで野獣。ソニードのような瞬間移動のような速さではなく、簡単に目視できるが圧倒的加速が付随していること。それは精神的にも恐ろしく、まるで蛇に睨まれたカエル状態へと追いやられる。

しかし一護は冷静に向かってくる獣に対して、まずは遠距離からの攻撃を仕掛けた。

「黒符『月霊幻幕』！」

漆黒の弾幕が、駆けてくる獣を打ち抜くように発射されていく。

しかし獣のような俊敏な動きで、全ての弾幕の間間を抜けていき、己の獲物を……食い破った。

「ガアッ！」

グリムジョーは一護との距離が近くになると、止めの響転で一気に目の前まで瞬間的移動を行い、そのまま一護を上空に蹴り上げる。

そして、蹴り上げた一護の方まで跳び、次は一護を地面の方に蹴り落とす。

その威力、一護の身体が大地を陥没させ、地鳴りと土煙が辺りを支配するほどだ。

「行くぜ、黒崎」

土煙のせいで、一護の姿は視界に入っていないが、ある程度の場所には分かる。

そこに手のひらをかざし……

「喰らいやがれ——虚符『王虚の閃光』！」

グリムジョーが新たなスペルを唱えたかと思うと、絶大な霊圧が手のひらに凝縮される。

そして、超極太の青い虚閃が放たれた。

普通の虚閃とは威力の桁が違う。次元すら歪ませ、破壊力はまさに上位互換であり範囲も増している。

さながら神が下した罰のように、極太の青い閃光が大地に降り注ぎ、大地が破壊の限りを尽くされた。爆風や爆煙が辺りを覆い尽くすと、大型隕石でも落ちたかのようなクレーターを作り出していた。

「……どうした。こんなもんじゃねえだろ。……出てこいよ」

グリムジョーは上空からクレーターの様子を見るが一護の姿はない。この程度で倒せるほどの相手ではないことを理解しているグリムジョーは、何気なしに呼びかけてみたのだ。

瞬間、背後に一護が現れた。

「黒斬『月牙天衝』！」

一護はグリムジョーが振り向く前に月牙を放つ。

月牙はグリムジョーを飲み込んだが、直ぐに月牙が掻き消された。

「いいぜ！ 黒崎一護!! いい眼だ。その眼が！ 気に喰わねえんだよ!!」

グリムジョーは再び一護に斬り掛かる。

一護もそれに対抗するべく、グリムジョーに対応する。

一護とグリムジョーの最初の初太刀が激突すると同時に、凄まじい突風と砂煙が吹き荒れた。

そして、直ぐに二撃目の激突に入る。

一回一回激突すると同時に地面が砕け、突風が吹いた。

*

それを観戦している八雲紫と藍は驚いていた。

「すごい戦いですね、紫様。幻想入りした時のあの人は脆弱でしたが、ここまで成長しているとは驚きです」

藍が戦いを見ながら紫に言う。

「ええ。二人共、身体能力だけならとても優れてるわ。これは中々見ものな戦いになりそうね」

紫はこの戦いを楽しみながら見ている。

面白い戦い程、終わるのが早い。

だから、この戦いも直ぐに決着が着くだろう。

紫がそう思いながら、背後に眩きかける。

「あなたもそう思うでしょ。博麗霊夢」

ガサガサと、爆風や烈風により倒れかけている草木を掻き分けながら、そこから巫女姿の霊夢が現れた。

「そうね」

一体いつから気づいていたなどとは聞かない。

端的に肯定の言葉だけを言う。

「あなたがここにいてるってことは、幽々子が？」

「それしかないでしょ」

紫の質問は返しているが、目と意識は既に一護の方に向けられている。

「……どうした。こんなもんじゃねえだろ。……出てこいよ！」

漆黒の衣を纏う一護を見て、霊夢はどこか緊張している。

そして観戦する中、紅い閃光が一護を襲ったが、霊夢は特に表情を変えずに見据える。見続ける。

「そうか、お前はお前なりの努力をしたって訳かよ」

一護の言葉から、相手が一護の知り合いだと簡単に理解できたし、幽々子からそのへんのことは少しだけ聞いていた。

「まだまだぜー！ 本番はこれからだ！」

そして霊夢の目の前で繰り広げられる死闘。

弾幕、剣戟、スペル、霊圧、体術と、あらゆる攻撃手段と防御手段、反撃手段を瞬時に演算し練りこんだ卓越した闘争。共に奥義を尽くし、幻想郷が二人の力で侵食していく、誰も介入できない域で絡み合いながら喰らい合う。

音速を遥かに超え、世界の理すらも半分無視した異質かつ凄惨な戦。

刀と刀が軋るだけで、幻想郷に衝撃が走り抜ける。大空が二つに割れ、烈火怒涛の攻防が巻き起こっている。

霊夢はまるで、自分の戦いでもあるかのように、一護に向けて小さく言葉を吐く。

「……これが、あいつの正真な本気。なら——勝ちなさいよ。負けることは許さないから」

*

斬り込み合い、弾幕の掛け合い、そして鏢迫り合い。

その中、一護は強引的に月牙を放ち、グリムジョーをそのまま後方に吹っ飛ばした。

「終わりだグリムジョー！」

一護は刀を構え、グリムジョーの方に凄まじいスピードで一気に跳ぶ。

だが、グリムジョーは直ぐに態勢を整えスペルを唱える。

「甘エんだよ。封閉『反膜の匪』！」

グリムジョーがスペルを唱えた瞬間、一護の周りに半透明の結界が張られた。

これにより、一護はその中に閉じ込められる結果となったのだ。

「何だよ、これ!？」

一護は刀で結界を破ろうとするが、全く効果がない。

「無駄だぜ黒崎。そいつは内側からじゃ絶対に破れねえ。その代わり、外側からの攻撃なら簡単に破れるがな！」

そのセリフに、一護は一瞬で理解し驚愕する。

グリムジョーはスペルを唱えた。

「吹き飛ばせ！ 虚符『虚閃』！」

グリムジョーの虚閃が、閉じ込められている一護に向かって放たれた。

これに閉じ込められれば必中。故に防ぐしかない。

そして虚閃はいとも簡単に結界を破壊し、一護を包み込んだ。

「ッ、オオオオオオオオオオ！」

一護は己の漆黒の霊圧で全身を包み、完全防御耐性で挑んだが、それでもやはり威力は凄まじく激しい痛みが全身を襲う。

「よく耐えたな。だが、次で終わりにするぜ。黒崎一護」

「黒斬『月牙天衝』！」

グリムジョーが動き出す前に、一護が月牙を放った。

しかし一直線に放たれた月牙は、軽く横に飛び躲かされてしまった。だが、それが狙いだっただけだ。

「……………」

一護は笑みを零した。

グリムジョーは、一護の笑みを理解するのに、そう時間はかからなかった。上空から霊力を感じとったからだ。

そう、上空からグリムジョーを狙うように、弾幕が烈風のごとく降り注ぐ。

『天雨月閃』——あらかじめ敵の避ける位置を予測しておき、月牙を放つ前、つまり結界が虚閃に破られた際に放っておいたのだ。

「くっ、くそ……！」

まともに喰らってしまったグリムジョーだが、これで倒せるほど安い相手ではない。

「よく耐えたじゃなえか、グリムジョー。けど、次で終わりにするぜ」「テメエ……！」

グリムジョーは一護にさっきのセリフを真似られて少し苛立つ。「ふざけてんじゃねえぞー！」

グリムジョーが一護に駆け出そうとする。

だが、一護の方が先にグリムジョーの目の前に行き、先に斬りかかった。

グリムジョーは一護の攻撃を刀で受ける。

「くっ、舐めんなー！」

グリムジョーは空いている足を使い、一護の脇腹を蹴る。

「グア……ッ！」

それにより、一護の腕の力が一瞬弱まった。

そこを狙いグリムジョーは一護の刀を弾き、一護の顎を蹴り、上空に吹き飛ばす。

「虚符『虚閃』ー！」

グリムジョーはスペルを唱え、上空に飛んだ一護に虚閃を放った。

一護はそれを見ると素早く月牙を放ち、虚閃と相殺させる。

その隙にグリムジョーは一護の背後に移動する。

この展開を予測していた一護は防御の態勢を取り、グリムジョーの攻撃を半減させる。

だが、グリムジョーの攻撃が予想以上に強かったのか、地面の方まで吹き飛び、思いつきり叩きつけられた。

「これで最後だ！ 黒崎一護!! ——豹符『豹王の爪』！」

グリムジョーが真正銘、最後のスペルを唱える。

手を前方にかざし、両の指先から霊圧で十本の青色の巨大な刃を両手に創り出した。これは虚圏でグリムジョーと戦った時に最後に見せた技と同じだ。

「さあ、テメエも最後の力を振り絞って、月牙天衝を放ちやがれ！」
上空から見下ろし命令するグリムジョー。

一護はそれに答えるようにスペルを唱える。

「黒斬『月牙天衝』！」

一護の右腕に霊力が込められる。

「ああ、いいぜ、グリムジョー。俺も本気でぶつかってやるよ」

「そうこなくっちゃな。……黒崎一護！」

グリムジョーは一気に十本の巨大な刃を放った。

「終わりだ！ グリムジョー！」

一護も月牙天衝を放った。

霊力を込め過ぎたせいか、一護は方膝を地面につける。

そして、渾身の力を込めて放った月牙が巨大な刃を一本ずつ砕いていく。

一本、二本、三本、四本、五本、六本、七本、八本と。

だが、九本目を砕いたところで月牙が消滅してしまった。

そして必然的に、残りの一本の刃が一護に撃墜したのだった――

第25斬【八雲紫の話】

「一護、私はあなたの味方よ。どんな事があっても、私が絶対に助けてあげるから、安心しなさい」

優しく微笑む女性は——黒崎一護の記憶の一片。

無数に存在する記憶、つまり思い出……その中で大切な人の言葉が蘇る。

忘れてはいけない、忘れてはならない思い出。絶対的な安心を齎してくれる、一護にとってかけがえのない方の言葉だが——その人はもういない。

自分の心の支えになってくれた人が、自分のために死んだ。

死んだ、死んだのだ。

それにより、一護の心には無意識下で断罪、贖い、罪、罰などと言ったものが支配してしまった。

「……おふくろ」

一護は己の闇を葬るように、いや逃げ出すように覚醒した——

*

「——ん、ここは……？」

一護はゆつくりと目を覚ます。

最初に目に映り出された光景は、どこにでもある板式の天井。

ああ、博麗神社の自分の部屋かと思っただが、木目などが妙に違う。それになにより、雰囲気や布団の質、そしてその部屋の独特の臭い。その他もろもろほとんどが違うのだ。

「ん……」

寝ぼけ眼で一護は数秒ほど頭を空白にし、どうにか寝る前のことを思い出そうとする。

だが、それよりも先にとある人が声をかけてきた。

「ようやく目を覚ましたようね」

とても透き通るような声。霊夢のような半暴力的な声ではなく、どこか儂さの中に強さを持った声が、ここが博麗神社でないことを如実に語ってくれた。

まあ、この思いが霊夢に聞かれればボコボコにされるが。

一護は半分寝ている頭で、声の主に瞳を向ける。

「あんたは……八雲紫さん」

そこには綺麗なドレスのような服を身にまとった、金髪の美しい女性——八雲紫がいた。

「おはよう、一護君」

一護が横になっていいる布団の傍らに座りながら、どこか計略に満ちた瞳で見ている。

「何で、俺はこんな所で寝てたんだ？」

「あなたはグリムジョーとの弾幕勝負で最後の激突の時に、グリムジョーの刃があなたを貫いて気絶したのよ」

殺し合いなら死んでいたね、と微笑みながら言われた。

一護は少しゾツとしたが、それより何より負けたという事実が、とても悔しかった。しかしそれより——

「落ち込むことはないわよ。グリムジョーの方が先に幻想郷に来て、弾幕ごっこを覚えたんだから、グリムジョーが勝つても不思議じゃなかったのよ」

「別に、落ち込んじゃいねえよ。確かに負けたのは悔しいけど、また鍛えて強くなつて、次に勝てばいいだけの話だ」

「じゃあ、どうしてそんな暗い顔してたの？」

「いや、何でもねえよ」

一護は言わなかった。言ったところで意味がないから。

自分の見た夢に自分の母親が現れた事なんて。

「まあいいわ。今みんなが来たところよ」

「みんな？」

「そうよ。来たら分かるわ。もう、立てる？」

紫がそう言うで一護は「ああ」と言い立ち上がった。

それを見た紫も立ち上がり、居間の方に向かったのだった。

*

一護はその後、紫にここが迷い家の八雲家だと聞かされた。

中は純和風の日本屋敷で、現在は紫と、式神の八雲藍、その式神の

橙、そして居候のグリムジョーの四人暮らしのようだ。

とても四人にしては広い内装をしている。

そして一護と紫が、この家の居間に行くとか確かにみんながいた。

霊夢、魔理沙、幽々子、妖夢の四人だ。藍と橙、グリムジョーはどこかに出掛けているらしい。

霊夢には勝手に行ったことを怒られ、魔理沙には負けたことに対し笑われ、幽々子には楽しそうに励まされ、妖夢にはちゃんとした励ましの言葉を頂いたが少し怒られた。

そんなやり取りをした後、六人はテーブルを囲むようにして座る。

「……で、私達はそろそろ此処からお暇したいんだけど」

霊夢が少しイライラしながら口を開いた。

「別にいいじゃない。ゆっくりして行こうよ」

霊夢のセリフに幽々子が茶を啜りながら答える。

「元はといえば、あんたが勝手に了解しなければ、こんな事にはならなかったのよ」

睨みつけるように言う霊夢に、幽々子は「怖い目しないでよ」と微笑みながら言った。ピリピリした雰囲気と、ホワホワした雰囲気が入り混じった空気が居間を支配している状態だ。

そんな中、空気を読まない魔理沙が横から言う。

「まあまあ、ゆっくりしようぜ霊夢。帰ったってする事ねえだろう。どうせ1日中、暇してんだからさ」

「何ですって」

魔理沙がいちいち癪に障ることを言う。

これでまた霊夢が怒り出した。

一護は溜息をつき、妖夢が霊夢を宥める。

その姿を見た紫は微笑み、霊夢に声を掛けた。

「あなたが今の博麗の巫女なのね」

その事を言われた霊夢は怒りを忘れ、紫の方を見て頷く。

「そう、やっぱりあなたの怒っている姿は母親似ね」

「……あんた、私の母上を知っているの？」

「ええ、まあね。あ、当然だけど父親の事も知っているわよ」

「何が言いたいわけ？」

紫のセリフから、あまり主旨が見えてこない。

確かに自分の母と父を知っていたことには驚きを隠せなかったが、紫の言い方を聞くにどうにも他の何かを言いたがっている。故に主旨を問うた。

紫は言いづらそうにしたが、直接的な固有名詞を出して言った。

「――幻獄七夢卿（セプテムカールダ）って組織は、知っているかしら？」

その単語に霊夢、一護、魔理沙が目を見開く。

幻獄七夢卿は紅霧異変の時に現れた、危険極まりない連中だ。

刹蘭、そして元幻獄七夢卿のルリミア。

この二人はレミア達と共闘しても敵わなかった相手であり、文字通り次元が違う敵だ。

「その反応を見るに、どうやらご存知のような」

「あなた、あいつ等の事を知っているの？」

霊夢がさつきとは打って変わって真面目な表情になり聞く。

「ええ、少しだけね。知りたい？」

「……聞かせてもらおうかしら」

どうして紫がこの話を切り出したのかは分からないし、なぜ知っているのかは分からないが、先ずは奴等のことを聞きたい三人は追求しない。

そして、紫は口を開き話し始める。

「幻獄七夢卿とは、たった七人で構成された幻想郷の裏組織よ。この七人に上下関係は一切無くて、仲間意識も無い、当然組織力も無いわ。だけど、一人一人の実力は恐ろしく高い」

幻獄七夢卿の力は片鱗程に過ぎなかったが、身をもって味わっている。

「この七人が一体何の目的でこの組織に在籍しているかは分からないわ。ただ、少しだけならメンバーの事について知っている。聞きたい？」

「さつきと言って」

「……幻獄七夢卿は非常に危険な思想を持った連中だから、聞いたことのある人がいるかもね。まずは刹蘭という男は知っている？」

紫が聞いてくる。

その男……刹蘭は三人共、嫌でも記憶に残っている。

「あの男はあくまで私の予想だけど幻獄七夢卿を創り出した男だと踏んでいる。理由はいろいろあるけど、一番の理由は——過去にあの男が幻想郷の博麗大結界を消滅させようとした人物だから」

「……そんな事したら幻想郷が大変な事になるわよ」

霊夢が反応した。

「そうね。けど奴の作戦は失敗に終わったわ。あなたの母親と父親のお陰でね」

「!! 母上と父上が」

「ええ。現時点、刹蘭がなぜ博麗大結界を消滅させようとしたかは分からないけど、これについては今は保留ね。絶対的な確証がない限りは」

紫は、話を続ける。

「そして他の幻獄七夢卿のメンバーだけど、刹蘭はもちろんの事、ブギーヴァルトという男は大量の人間と妖怪を殺した殺人鬼。続いてリフィットオールと言う男は禁忌に必ず入るような術を数多に創り行使した天才術師。そして断霧鏡帥は幻想郷には存在せず、今は外の世界の裏社会を牛耳っていると聞く。私の知っている奴はこの四人だけよ。残りの三人は全く知らないわ」

ちなみに、ルリミアの穴埋めは既にされているらしい。

「聞いた四人だけでも、かなり危険だぜ」

魔理沙が少し震え上がる。

「ああ、かなりヤバい奴等だな」

「そうね。幻想郷からは即刻退場してほしい連中ね本当」

二人も魔理沙と同じ反応をする。

幻獄七夢卿を知らなかった妖夢も、その事を聞いてとても驚いていた。対する幽々子は既に認知していたのか、それ程までに驚きはしないものの景気の良い表情はしていない。

「因みに、さっき言った断霧鏡帥は幻獄七夢卿から脱退したらしいわ」
紫が付け加えるように言った。

「で、なぜ私がこの事をあなた達に話したかというと、幻獄七夢卿の刹
蘭が活発に動き始めているからよ」

その発言に対し、神妙な面持ちとなる一護と霊夢。

「また、あいつが来るのか」

「まだ時間はあるわ。あの男だって二度目の失敗は絶対にしないはず
よ。二度目の失敗をしないという事は、それなりに時間も掛かると思
うわ。年単位でね」

「何でそんな事が分かるんだよ？」

「昔、失敗した際は百年間の準備を整えてきていたの。今回はもつと
掛かるはずよ。だって——今の方が昔より状況的には刹蘭にとつて
最悪だからね」

最後の方は誰にも聞き取れない域で、小さく呟いた。

「……俺の出番無くなるんじゃないやねえの？」

百年以上、という事は一護はおろか霊夢の寿命も尽きているだろ
う。

「油断は禁物よ。もしかしたら、十年後になるかもしれないし、明日に
なるかもしれない」

刹蘭の動きは、例え預言者であつても分からないだろう。そもそも
あいつは、そういう存在だ。

「——まあ、そう考えてみたけど、やっぱり俺は刹蘭と戦うと思う。嫌で
もな」

一護が言う。

「どうして？」

紫がキョトンとした顔で聞く。

「あいつは俺を頂きに来るって言った。だから俺はあいつと嫌でも
戦うことになる……と思う」

たしかに紅霧異変の時、刹蘭は黒崎一護を頂くと言った。

即ち、一護は刹蘭と戦う確立が高い。

「……何故、あなたを頂くの？」

「さあな、俺もよくわからねえんだ。けど、次に会ったら俺があいつを、絶対に倒す」

最後の誓を終え、これにて春雪異変の幕は全て降りたのだった。

第肆章 〈東方幻夢殺篇〉

第26斬【百鬼夜行の小さな鬼】

《1》

チウンチウンと、小鳥のさえずりが心地よく聞こえてくる朝。

眠気を誘うような陽気に対し、しかしながら瞼を閉じていても鋭く刺さるような日差しが部屋で寝ている少年を、起きろ起きろ朝だぞと言わんばかりに照らし上げる。

縁側に隣接する部屋の中、半開きになった襖障子の奥に眠る少年――黒崎一護は暖かい日差しにより重い瞼を上げた。

「……朝、か」

意識をゆつくりと覚醒させていき、名残惜しいが自分を包んでいてくれた布団を片手でめくり、そのまま上半身を起こす。

そしてそのまま呆然とはせず、立ち上がり半開きになっている襖に歩み寄った。

ガラガラと、襖を全部開放し、全身に日差しを浴びると背伸びをするように自分の頭に朝だぞと語りかける。

「……………」

同時に、暖かい風が吹き、森の小枝や葉を揺らす。後はここに、川の水のせせらぎなんか聞こえてきたら完璧だと思う一護。

しかし既にここで一年を過ごした一護は、だいたいこの地理を把握しているのです、そんなものが聞こえないのは承知だ。

(そーいや、幻想入りして、もう一年も経つのか)

一護が幻想郷にやって来て約一年が経とうとしている。

早く感じたような、短く感じたような。ここでは見るもの全てが一護にしてみれば、新鮮であり様々な出来事があったりしたため、どちらかと言うと短く感じたような気がする。

幻想郷に来た時期は、なるべく早く自分の元の世界に帰りたいと思っただけだが、ここではすることが増えてしまったため、今はそれを終わらすまではまだ帰れない状況だ。それに元々の原因である博

麗大結界の異変については、ほとんど進歩なしに等しかったりもする。

「……一年か。早いもんだな」

この一年、振り返ると本当に色んなことがあった。

楽しいことも、辛いことも、悲しいことも、たくさんたくさん。

ここに初めて来たのは夏あたり。夏は紅霧異変が発生し、そこで色んな戦いがあった末に仲間もできた。そして明確な敵も出現した。

(剎蘭……か)

未だ謎に包まれた敵だが、あれから姿を見せないことを鑑みるにもう少し先になるだろう。

(夏……そういや幻想郷には海が無いんだったな)

そういえば、去年の夏は紅魔メンバーが遊びに来ることが多々あった。

遊びに来るたびに一緒に花火をしたり、スイカを食べたり、湖で水遊びなんかもした。

(あく、あの時期ってそういや人里で祭りをやってたんだったかな。去年は行ってないから、今年は一度行きてえな)

次の季節の秋は、紅葉狩りなんかをした。

幻想郷の秋は、全ての山が赤に染まり、とても色鮮やかだった記憶が今でも熱く焼き付いている。実際、一護の住んでいた空座町では、そんな光景が全く見れないため単純に凄く綺麗だと思ったのだ。

(そういや人里の収穫祭は凄かったな。あんま見たことない果実まで色々あったし)

そして次の季節の冬は、同じく空座町ではお目にかかれないほど雪が積もった。

とても寒くて、毎日布団から出るのに一苦労した思いがある。

(冬か。そういや毎日のようにチルノに弾幕ごっこを挑まれたっけ)

チルノは冬の妖精のため、その季節だともちろん活発——元からすごく活発だが——になる。それ故に弾幕ごっこで「今日こそ最強のあたいが勝つ！」などと行って挑んできたが、一護の連戦連勝で終わっている。

その他にも紅魔メンバーや妖精メンバーと雪合戦やかまくら作り、そして上白沢慧音との約束であった寺子屋での顔出しなんかもあった。冬といえばクリスマスというものもあるが、幻想郷では浸透していないのか人里ではそういった概念がなかった。しかし紅魔館では大きなクリスマスツリーが、登場し盛大にクリスマスパーティーをした記憶があるが、酒を飲まれたせいもか記憶に霧がかかっている。

他にもお正月の時期は、さすがの博麗神社にもたくさん参拝客が来られたため、霊夢はどこか嬉しそうだった。その裏で、一護は人を襲うような妖怪の警告及び退治に回されていたので、とても多忙だった。

そして春……と言いたいが、春は春雪異変が発生しほとんど春の季節の醍醐味である桜が見れなかったので、それほど重んじた思い出はないが、もちろん異変を通して新しい仲間もできた。同時に懐かしい好敵手であるグリムジョーとの出会いもあった。これが正直なところ、一番でかい。

花見をした記憶もあるが、呑んべえ急増のため、あまり良い記憶がない。

「……そして、一年か」

思い出に浸っていた一護は、新しい一年を迎えるように、空に向けて「おはよう」と言い放った。

一護は部屋に戻り、布団を畳む。

その後に、普段着に着替えると井戸まで行き、冷たい水で顔を洗う。顔を洗い終わると、そのまま居間へと向かった。

居間に着くと、食欲をそそる味噌汁の香りと、焼いた魚が目に入った。霊夢が朝食の用意をしており、ここで一護は霊夢と朝の挨拶をする。

二人は朝食をとり、食べ終わると霊夢は神社の外の掃除をし、一護は中の掃除をする。

これが、毎日の日課だ。

*

昼になり昼食を食べ終えた霊夢と一護は縁側に行く。

朝はほとんどの時間を掃除に消費するため、昼ごはんを食べた後は縁側でゆつくりと寛ぐ……これもいつもの日課だ。

そして――

「よお、一護、霊夢」

そこに魔理沙がやって来るのも、いつもの日課だ。

ただ、いつもと違う点が一点……

「あれ、魔理沙。何、その変な着物」

そう、いつも着ている服と全く違うのだ。

一護はその着物を確認した途端、目が驚愕の色に変わった。

（まさか、死覇装……なのか？）

魔理沙が身に纏っている着物は、黒一色で白の帯を巻き、下には純白の長襦袢を着ている。まるで死神が纏っている死覇装のようだ。

「へへ、いいだろ。私の新コスチュームだぜ」

自慢するように、魔理沙が言う。

もしかしたら似ているだけかもしれないが、一護が聞いてみた。

「その着物、どこで手に入れたんだ」

「ん、気になるか。この着物は、一護が幻想郷に来て初めて香霖堂に行った時に見つけたんだぜ」

「香霖堂で……」

魔理沙があの時、一護と霊夢が帰った後、棚の奥から見つけ出した着物。それを魔理沙が購入（？）し、サイズをアリスに合わせてもらい着用したのだ。

「どうだ、一護のあの黒い姿に似ているだろ」

似ているというより、まんま同じである。

「魔理沙は元々黒い服を着ているから、あまり違和感が無いわ」

「アリスにも似たようなこと言われたぜ。そんなに私って、黒のイメージが強いのか？」

一護は死覇装に似ている着物って事で、一応その場は済みました。

あくまで憶測だが、もしかしたらグリムジョー以外に誰か自分の知り合いが来ているのかもしれないと考える。いや、そもそもそちらの方が自然なのかもしれない。ここは「不幸というレベルだけで来れ

るのだから”。

「おー、ここかー」

と、不意に鳥居の方から幼い無邪気そうな少女の声が聞こえてきた。

一護と、そして霊夢と魔理沙がそちらに目を向ける。

そこには、確かに少女がいた。

薄い茶色のロングヘアを毛先のほうで一つにまとめている少女。その頭の左右から、長くねじれた角が二本生えている。幼い容姿で、服装は白のノースリーブに紫のロングスカートで、頭に赤の大きなリボンをつけている。三角錐、球、立方体の分銅を腰などから鎖で吊るしている……とても個性的な格好の妖怪少女だ。

その少女が一護たちを確認すると、歩み寄り――

「ここに黒崎一護がいるって聞いて来た！ 私と勝負しろ!!」

挨拶も何もなしに、いきなり勝負を挑まれた。

急な展開に、三人は頭を空白にし、最初に霊夢が呟くように言う。

「いきなり現れて何言い出すの？ こいつ」

どう反応したのか困惑した末の発言だった。

しかし妖怪少女は自分のテンポを緩めることなく、次なる台詞を吐く。

「私は小さな百鬼夜行 伊吹萃香だあ!!」

急に名乗られた。

最早完全に自分のペースである。

「いきなり名乗られても困るんだけど。それに、あんた酔ってない」

よく見ると妖怪少女の顔が少し赤く、酒臭い。これは完全に酔っ払い妖怪だ。

「紫から聞いたのよ。強いヤツ大募集してるって」

瞬間、聞きいたことのある妖怪の名を聞いて三人が少し反応する。

紫とは、もちろん迷い家に住む八雲紫のことだ。彼女の名前が出たということとは、恐らく知り合いなのだろう。

それを軽く聞きたいが、それより一護が困ったように別口のことを聞く。

「もしかして、それって一年前くらいの文々。新聞のことか？」

まさか一年前の記事のネタが今ここで上がるとは思わなかった。

「ん、それは知らないけど、とりあえず尋常に勝負よ！ 黒崎一護!!」

一護の質問などどうでも良さげに、バツと指さした……霧雨魔理沙に向けて。

「え、私？」

「そうだよ。黒崎一護は黒い着物を着てるって聞いたからね」

何か勘違いしている。

これは完全に紫の説明不足だ。

それとも、この萃香って子が大切なことだけを聞き逃して、黒い着物ってとこだけを聞いていたのかもしれない。

しかも、黒い着物といっても戦闘で死神の姿になった時以外はならないし。

「へっ、いいぜ。この黒崎一護が相手になってやるぜ！」

そして間違いを指摘せずに、そのままノリノリに流す魔理沙は、自分を黒崎一護と嘘を言った。

「おー、やる気満々だな！ よくし、私はそんなやつが大好きだあ！」

萃香と名乗った少女もノリノリである。

「お、おい、魔理沙。いいのかよ？ 俺って言わなくて」

一護は小声で魔理沙に言う。

「別にいいだろ。それとも一護がやりたいのか？」

「いや、別にやりたいとは思わねえけどよ」

「じゃあいいって事で。いやー、久しぶりに思う存分、体を動かしたかったんだよ」

箒をクルクル回転させながら言う。

「それじゃあ……早速勝負だぜ！」

「おおー！ 掛かって来い!!」

こうして魔理沙VS萃香の弾幕勝負が始まる。

《2》

魔理沙と萃香は博麗神社から少し離れた平原にやってきた。

ここは、一護が幻想郷に来たばかりの時に魔理沙と弾幕ごっこをした場所だ。

そして、あの時と同様に広い平原の真ん中辺りで二人が向き合っている。本当に、あの時と同じ映像を別キャラで魅せられている気分だ。

一護と霊夢は二人から離れた場所に立って、二人を見守る。

「何か久し振りだぜ。此処にこうやって相手と向き合うのは」

魔理沙はあの時の事を思い出す。

初めて一護と弾幕ごっこをした時の事だ。

「ねえ、早く始めようよ一護」

「……………」

一護といわれ魔理沙は反応しない。

そして、ふと今は自分が黒崎一護って事を思い出す。

「お、おう。分かったぜ」

魔理沙は慌てて答える。

「それじゃあ、とつととスタート！」

魔理沙が答えた後に、霊夢が面倒そうにスタートの合図を切った。

「先手必勝！ 萃符『戸隠山投げ』！」

萃香が速攻でスペルを唱えると同時に、大岩を魔理沙目掛けて投げしてきた。小さい体から投げられたとは思えない大質量の大岩。自分の3倍の大岩を軽々と投げるとは、流星は妖怪である。

「危ねエッ！」

魔理沙は飛んで来る岩を横に跳び避ける。

瞬間、魔理沙のいた位置に大岩が大地にめり込み、凄まじい揺れを起こした。これは当たれば洒落にならない。

「まだまだ行くよお〜！」

萃香が続けて大岩を魔理沙目掛けて、連続して投げってくる。もはや投げる感覚は野球ボールに等しい。

魔理沙は放棄に素早く乗り、高速で飛行して躲す。

「おいおい、一体どつからあんな数の岩が出て来るんだよ!？」

「ここは平原だ。大岩などどこにも存在しない。」

すると魔理沙の疑問に萃香が平然と答えた。

「私の能力は『密と疎を操る程度の能力』。この能力で私の周りに岩を萃めているのさ」

「説明さんきゅう」

今の回答では疑問を氷解しきれていないが、あまり深く問わない。そもそも敵に問うのは間違っているし、ここは幻想郷である。非常識蔓延るこの世界で、こんなものは当たり前だ。

「魔符『スターダストレヴエー・2』！」

魔理沙が遂にスペルを唱えた。

その瞬間、箒の速さが数倍も上昇し、そのまま萃香に突っ込む。

「この私に正面から挑もうなんて、いい度胸してるじゃない」

萃香は不敵な笑みを浮かべながら拳を構える。それを見た魔理沙は雄叫びを上げ、炎のような黄色い魔力を纏った。

萃香も何の逡巡もせず橙色の妖気を纏い、真正面から受け入れるそ
うだ。

——その刹那に、お互いの力が激突した。

爆発的な大音響を響かせ、力の余波による凄まじい突風を全方面に巻き起こる。それだけではなく萃香の立っている地面は陥没し、大地までも粉碎していく。

「鬼の力を舐めるなよおー！」

萃香が叫ぶと同時に、魔理沙が上空に吹き飛ばされた。

単に力負け。激突は魔理沙が敗れたが、それだけでは終わらないのが、この魔法使いだ。

「喰らえ！ 恋符『マスタースパーク』！」

ミニ八卦炉を取り出すと、透かさずスペルを唱えた。

そして萃香に向けて極太の大エネルギーのレーザーを放たれる。これこそ魔理沙の十八番のスペルだ。

萃香は油断していたためか、極太レーザーを避けきれずそのままレーザーに飲み込まれた。

魔理沙は地に足を着き、萃香の方を見る。

マspaのせいで土煙が舞っていて、無事かどうかは分からないが、

この程度で倒せる程やわな相手では無い事は承知している。

「流石は黒崎一護！ 紫が強いつていうだけの事はある！」

そして、当然のごとく、土煙をかき消して萃香が現れた。

少しは傷ついているものの、ほとんどピンピンしている。

「こうなったら私もちよつとだけ、本気を出して上げる！ ——鬼神

『ミツシングパープルパワー！』

萃香がスペルを唱えると魔理沙だけではなく、一護と霊夢も「見上げながら」驚愕した。

「な、何…だど?!」

そう、萃香が何十倍にも巨大化したのだ。さながら一つの山、現世のビルなんかが該当するような圧巻する大きさだ。

「さあ、こつからが本番だよ！」

萃香はそういうと魔理沙目掛けて拳を振り下ろした。

もはや隕石が降ってきたような錯覚に襲われる拳を、魔理沙は箒に再度乗り飛行しつつ避ける。

「へっ、ただ大きくなっただけじゃ、私は倒せないぜ」

魔理沙は再びミニ八卦炉を巨大な萃香に向け、マスタースパークを放った。

萃香はそのマスパに対して、拳を構え……

「おりやあ〜！」

素っ頓狂な声を上げ、萃香は軽々とマスパを殴り消した。

「……マジかよ」

魔理沙は自分のマスパを拳で消された事に驚く。こんな相手、今まで見たことない。

「次は私から行くよー！」

萃香は魔理沙に殴りかかった。

これは挑むより、避けたほうが良いと考えたのか、魔理沙は素早く飛行を続けて避ける。

「くそッ。一発でも当たったら終わりだぜ」

萃香の攻撃は巨大化して鈍くなっていると思っていたが、殆ど鈍くなっていない。これは半分ほど卑怯だ。

「儀符『オーレリーズサン』!」

魔理沙はスペルを唱えた。

すると自分の周囲に四つの球体が現れる。

その球体が魔理沙の周りを回転しながら萃香に向かってレーザーを放った。だが、そのレーザーは萃香に殆ど効いていない。

「まだまだー!」

魔理沙の周りを回転する球体が青白い光りを放ち、ブーメランのように回転しながら萃香に向かって放たれた。

「喰らわないよお!」

萃香はその四つの球体を蚊を潰す要領で、軽々と潰してしまった。

その事に魔理沙は目を見開く。

「冗談だろ……」

「隙有り!」

萃香は魔理沙の一瞬の隙を狙い、巨大な拳をぶつけた。

魔理沙はそのまま地面に勢いよく叩きつけられる。

「これで終わりだよ、黒崎一護」

止めを刺すかのように萃香は、地面に叩きつけられた魔理沙を踏み潰そうとした。

「くそ……ッ。この私を……霧雨魔理沙を、こんな簡単に倒せると思うなよお!」

魔理沙が憤ると同時に自分の本当の名を明かしてしまった。

それを聞いて驚いたのか、萃香の動きが一瞬止まってしまう。

その間に魔理沙は、凄まじい速さで上空に飛んだ。

「大出力! 星符『ドラゴンメテオ』!!」

魔理沙は萃香の上空に行くときスペルを唱えた。

ミニ八卦炉から下方の萃香に向けて極太レーザーが放たれる。

萃香は油断してしまい、もろにレーザーを受けてしまった。

「く……ッ!」

萃香も今のレーザーは流星に喰らったようだ。

「くそお!」

萃香は直ぐに自分の上にいる魔理沙を見るが、そこには既に魔理沙

の姿はない。

「ど、どこに行った!？」

萃香は少し焦りながら魔理沙を探す。
だがどこにも居ない。

「終わりだぜ、魔砲『ファイナルスパーク!』」

不意に魔理沙のスペルを唱える声が聞こえてきた。
聞こえた方向は、自分の真正面。まさに灯台下暗しである。

そして、スペルを唱え魔力を大量にミニ八卦炉に溜めている。萃香も真正面にいるとは思わず、探しそびれていたようだ。

「しまった!」

萃香は直ぐに魔理沙を攻撃しようとするが、間に合わない。

魔理沙のミニ八卦炉から凄まじい超極太レーザーが萃香に発射された。

萃香は全身でそれを受け止めるが、あまりの強さに受け止めきれず、レーザーに飲み込まれた。

「はっ、はっ、はっ……私の勝ちだぜ!」

完全に疲れ切った体でそう言うと、魔理沙は地面に吸い込まれるように倒れた。

今のレーザーを喰らった萃香も大ダメージを受けたらしく倒れる。

両者が倒れ、そのまま弾幕勝負の幕は閉じてしまった。

「ふむ……」

そして、観戦していた霊夢が勝者の名を言う。

「勝者は……萃香ね」

どうやら霊夢の見立てでは萃香の勝ちのようだ。

「引き分けじゃねえの?」

一護が異論反論する。

たしかに両者が倒れたので引き分けのはずだが。

「何言ってるの。倒れたのは魔理沙が先よ。魔理沙の負けに決まってるじゃない」

「あー、成程な」

一護は一応納得する。

「で、この二人はどうするんだ？」

一護は倒れている二人を見る。

この二人は気絶しているから誰かがどこかへ運ばなければいけない。

「一護に任せるわ。じゃ、先に帰ってるから」

霊夢はそういうと直ぐに神社の方に飛んで行った。

「あ、おい！ ったく、何で俺なんだよ……」

まあ薄々は自分が運ぶとは思っていたが。

一護の言葉を完全に無視する霊夢。

霊夢は直ぐに一護の視界から消えた。

「はあく、仕方ねえな」

一護は溜息をつき二人を博麗神社まで運んだ。

*

夜になり一護と霊夢は夕食を終えた。弾幕ごっこの後は平常通りの日常を過ごしたのだ。

魔理沙と萃香はあのまま起きず、仕方無しに神社で寝かせてある。

「んじゃ、俺はそろそろ寝るな霊夢」

一護は居間に居る霊夢に言い、寢床に向かった。

眠気が高まってきた一護は直ぐに布団に入り、寝息をたてる。

——しかし、この時は誰も気づかなかた。

一護がこれより「本当の悪夢」を見るなんて、誰にも……もちろん本人にも。

第27斬【壺の絶望と式の絶望】

《1》

——長い夢を……見ていたような気がする……
と　て　も　長　い　……　幻　想　的　な　夢　を

「グッモーニンツ！ イッチゴーツ!!」

深い微睡みを打ち消すように、父親の一心の大声と足音が聞こえてくる。

その音が一護の鼓膜を叩き、一気に目を覚ます。

「……うるせえ」

ベットから起き上がり、部屋の扉を開け入ってくる一心を、顔面に蹴りを入れ撃退する。とても父親に対する行為ではないが、二人の間にこの程度のスキンシップは日常茶飯事なのだ。

「毎朝毎朝うるせえんだよ」

一護は倒れた一心を一瞥し、部屋から出て行った。

下の階から妹の遊子と夏梨の声が聞こえてくる。二人共、既に朝の支度を終えているのだろう。朝の面ではしっかりものの黒崎家である。

一護は階段を下りリビングに向かう。

リビングに入ると遊子と夏梨に朝の挨拶をし、テーブルに着く。既に遊子は朝食を作り終えており、主婦顔負けの腕前である。本当、父親に似なくて良かったと常常思う一護であった。

対する夏梨はとても行儀がよく、とても小学生には見えない。

「……時々、思うんだけどよ。遊子も夏梨も母親似だよな、どっちかつうと」

一護がテーブルに付きながら、ふと思ったことを口にした。

「いきなりなんだよ一兄。まあ、アレと似ているとは思いたくないけどさ」

夏梨が味噌汁をすすりながら、父親のことをアレと呼ぶ。とても酷

いい言い方だが、これも黒崎家では別段、叱責する点ではない。

「そういえば、お父さんに似ているのって、多分お兄ちゃんだけなんじゃない?」

「俺かよ!?!」

遊子の言葉に少し凹む一護。確かに外見も髪の色を除けば、どちらかと言うと父親似であり、性格も母親とは程遠いだろう。

「あく、うん、遊子の意見にあたしも賛同だね。あたしと遊子より一兄の方が髭達磨に似てるかも」

次はアレから髭達磨に少し昇華された。しかし一護の心は下落した。

「ふるんじやなかった」

と、落ち込む一護の前に一心が話を盗み聞きしていたのか……

「我が息子よ、この俺と似ているのがそんなに嫌なのか!?!」

と、飛び蹴りと同時に言い放ってきた。

一護はブチツ、眉間に青筋を立てせ、

「お前エの、そういう態度が嫌いだっつてんだよ!」

軽く一心の飛来してくる両足を受け止め、そのまま廊下の方まで放り投げたのだった。

そんな中でいつも通り朝食をとり、一護は部屋に戻り制服に着替える。

そして、遊子たちとは一足先に家から出た。

これが、いつもの朝の日常だ。

*

少し早めに家を出すぎた一護は、少し遠回りをして学校に向かう事にした。

一護は公園へと足を踏み入れる。

視界一杯に桜の木が目映る。

もう少して春。桜の木はまだ蕾もなっていないが春になると沢山の桜を咲かせる。

そこに色んな人々が花見をしにやってくるのだ。

一護はここを気分転換も兼ねて歩きながら、朝の騒がしい時間をど

うにか落ち着かせる。

この公園は学校の通学路から大きく跨るように位置する公園。学校に行くのに、この公園の中を通るのは遠回りになる。

だから学生でこの公園を通る者は滅多にいない。いるとすれば、学校を意図的に遅刻しようとしているものか、この公園でサボる生徒くらいであろう。

一護はゆつくりと足を動かす。

舗装された公園の道を歩き、もう直ぐ公園の出口が現れる所まで来た。

一護は普通に公園から抜けるはずだった。

——そう、普通に抜けるはずだったのだ。

「ッ!!」

一護の目の前に、いつもの景色を遮るように、いつもの景色を切り取るように、突如一護の前に現れた。

「何だよ……これ……!?!」

何かは分かる。

だが、何で“こんなものがここにあるのか”は理解できない。

黄色いテープで囲われた物。

その囲われた中にある青いシート。

その青いシートがテントのようになっていて。まるで、その青いシートの中を見えないようにする為に。

一護の心が真空になったかのように、周りの音が全て遠のく。

「……ッー」

一護の視線が自然とその青いシートの下に行く。

そこには引きずったような……這ったような……真紅の色。

その真紅の生々しい紅は紛れもない血。その血の筋先に青いシート。そのシートに隠されているものは……見てはいけないモノ……?!

一護は、直感的にシートの中に何が有るのが分かった気がした。

「ちよっと、その少年ー」

突然後ろから声を掛けられた。

一護が後ろを振り返ると、そこにはひと目で警察と分かる人がい

た。

「この公園は現在立ち入り禁止になっている。何処から入った？」

警察の人が困ったような表情で聞いてくる。

「立ち入り禁止……？ いや、普通に入れたぜ」

「何？」

「普通に南の出入り口から入れた。立ち入り禁止とか、そんなもん全然してなかったぜ」

「チェック漏れがあつたのか……？」

「どうやら警官の不注意だつたようだ。」

「……」

一護は黄色いテープの周りをよく見る。

気付かなかつたのか、何人か警察官がいた。この現場の異様さに圧倒され気付かなかつたみたいだ。

さっきの警官が他の警官に出入り口のチェック漏れの事を伝えている。警官なのか、周りの警官とは少し服装が違う。多分、刑事とかいう人だろう。

この公園は空座町で一番広い公園なので、出入り口も沢山ある。

ちようど一護が入って来た所だけチェックから漏れていたんだらう。

「あの、すみません。そろそろ学校に行かねえといけないんですけど」

この公園での事で時間を忘れていた一護は近くにあった時計台の時間を見て言った。

そろそろ行かないと結構やばい時間に差し掛かっていたのだ。

警官が一護の方を向き口を開く。

「……君は空座一校の生徒か？」

「はい、そうですけど」

「そうか、ちよつといいかな」

警官が一護の学年や住所などを聞いてきた。

それに一護は答える。

これで、この場は通してもらえらしい。

本来なら事情聴取をしなければいけないんだが、今回は見逃してく

れた。

一護は異様な空間から逃げ出すように公園を出た。

*

公園で多少のタイムロスがあつたが、予鈴が鳴るまでには間に合った。

学校に着いた一護は上靴に履き替え、教室に向かう。

その途中で、友人でありクラスメイトの小島水色に出会った。

「おはよ一護」

「おーす、水色」

二人共、挨拶を交わす。

と、廊下の奥の方から一人の男が走ってくる。

「い~~~~ち~~~~ご~~~~!!」

その男は大きい声で一護の名を叫んでいる。

そいつの名は同じく友人でありクラスメイトの浅野啓吾。

いつも朝、一護にハイテンションで駆け寄って来る男。テンションのレベルなら一心とタメを張れるであろう

「おーす」

一護はそう言った人間の対処法を熟知している。それ故に腕を啓吾の顔面に当て、動きを止める。さながら一心の時と同じように。

啓吾はその衝撃で廊下に倒れた。

一護はその状態の啓吾を無視し、教室に向かった。

「全く、毎度毎度しようがねえな」

一護はそう言い、教室に入る。

教室に入ると井上織姫が「おはよう、黒崎くん！」と挨拶をして来る。

啓吾とまではいかないが、井上も中々朝からテンションが高い。

他にも幼馴染の有沢竜貴や茶渡泰虎も一護に挨拶を交わす。

一護は一応頑張つて公園での事を忘れようとしていた。

そして、朝のホームルームが始まる。

担任の越智美論は、教卓に立つと珍しく真面目な表情で口を開く。

「本当だったら体育館で全校生徒の前で伝えるべきだったんだが、教

室で言う事になった」

先生のセリフに教室内がざわめく。

「ほら、静かにしろー」

なぜか一護は内心嫌な予感がしていた。

あの公園での映像が頭に過ぎる。

「今日の明朝、すぐその公園で殺人事件が起きた。警察が言うには通り魔の犯行の線が強いらしい。登下校の際はなるべく一人ではなく複数で帰るように」

——通り魔。

一護はどうしてか、ただの直感だが、通り魔が犯人では無い気がしていた。

そんな公園での事のせいで授業は殆ど上の空。

そして、放課後。

井上がそんな一護を心配して歩み寄ってきた。

「黒崎くん。大丈夫？」

「ん、何がだ井上??」

「今日ずっと元気無かったから」

「何だ、そんな事かよ。心配すんな。いつも通りだ」

そこで一護はふと、あの事件の事が聞きたくなった。

「井上は、何かあの殺人事件の事知らねえか？」

「え、どうして？」

「いや、知らねえんだったらいいや。悪い、忘れてくれ」

一護は素晴らしい帰り支度をし、教室から出ようとした。

「待って、黒崎くん！」

教室から出る直後に井上に呼び止められた。

「少しだけなら、噂くらいの事なら知ってるよ」

その言葉に一護は少し驚き、井上の元に行く。

「本当か」

「うん。女の子って基本的にそういう話が好きな子が多いから」

確かに、女性は世間話や噂話が好きな子が多い。

それにコンビニ等の女性誌コーナーはホラー関連の漫画や雑誌を

よく見かける。

そういうのに精通している子が沢山いても何ら可笑しくない。

「だから、色々と変な噂は聞いたんだ」

「例えば……」

「例えば、今回の殺人犯は郊外の精神病院から脱走した人なんじゃないかって……」

「精神病院か……」

空座町の郊外には、かなり古くからある少し大きな精神病院がある。

その精神病院から脱走……。

「あと、精神鑑定で罪に問われなかった人が、脱走したって噂が……」

TV等で騒がれるような凶悪犯罪や少年犯罪を見ていると、二言目には精神鑑定だ。

犯罪が凶悪で常軌を逸していればいるほど、精神鑑定で無罪になってしまう気がしない事はない。

確かに、郊外の精神病院にそういう人間が入院していても可笑しくは無い。

でも、そんな事が起きているなら、噂だけで済むとは思えない。警察が直ぐに嗅ぎつける。

「それから、これは結構良く聞く話なんだけど……」

井上が言うか言わないか悩んでいる。

此処まで聞いたら最後まで聞きたい。

「言ってくれ」

「うん。上から下まで真っ黒な服を着た人が、建物の影から、じつとこっちを見てるって話……」

「あ、何かそんな話を聞いたことはある。たしか『闇夜の男』だったけ」

一護自身、そういう霊関係以外の事はあくまで噂や都市伝説程度の事だと思っている。

「ずっと前から噂はあったけど、最近になってその『闇夜の男』を見たって人が多くなってるんだって」

「!?……」

一護はその事に少し驚く。

「背が高くて、全身黒くて、不気味な仮面を付けてるみたいなの」
噂話にしては具体的すぎる。

精神病院の噂もあるし、どこかで繋がっているのだろうか？

「他には何かねえのか？」

「うん。これだけ。何で、黒崎くんがそんなに今日の事件の事を気にしてるの？」

「いや、ただの興味本位……かもな。近くで人が殺されたら気になるだろ」

一護はそう言うと「じゃあな井上」と言い、教室から出た。

啓吾と一緒に帰ろうと言われたが、今日はそんな気になれなかった。

*

自然に足が公園の方に行ってしまった。

警察による現場検証が済んだようだ。

公園全体に対する立ち入り禁止の措置は、既に解除されていた。

あの場所に行くと、変わらずテープで囲われ、警察が立っていたが、

朝の雰囲気とは違っていた。

野次馬が沢山いるのだ。

まあ、居ても仕方ない。

朝と全く同じ状態なのに、朝の緊迫感が殆どない。

あの青いシートの向こう側に人の死体……もとい、その遺体はもう無いだろう。

いつまでも野晒しておけないだろう。

シートの中を詳しく調べてみたいが殺人事件があった当日に、その現場で怪しい行動をとる訳にはいかない。

そんな怪しげな行動を取ったら、犯人に間違えられても弁明のしようがない。

それに調べる理由なんて一護にはない。

こういう状況に直面していると、小説や漫画で出てくる探偵ってい

う人は本当に特殊な存在だと分かる。

犯行現場に踏み入って、勝手な事を抜かしまくっても、全然怪しまれないからだ。

「まあ、俺が何かしたところで重要な証拠が見つかる訳ねえし」

警察が見落としてしまうような証拠が有ったとしても素人の一護に見つけられる訳が無い。

一護はそのまま家に帰った。

《2》

遊子と夏梨も学校で殺人事件の事を聞かされていた。

夜のTVニュース番組は火災や交通事故など、あまり興味の引かないものが流れた。

当事者にとってみれば大惨事なんだろうけど、TVのこっち側の人間にとっては等しくニュースになって消費されてしまう。

今日の殺人事件もこういう視点で見えてしまえば、ありきたりなニュースの一つになってしまう。

いくつかのニュースを見ていると、公園での殺人事件のニュースが流れた。

他の事件ニュースと殆ど相変わらず流れる。

「殺されたのは女性だったようだ。」

一護にとっては衝撃の出来事だったが、TVの放送を見る限り、それ程大きく報道されていない。

この日、一護は精神的疲労が高かったのか早めに就寝した。

*

そして、次の日の学校にて。

一護は事件の事を忘れられなく、石田から少し情報が有ると思いきしかける。

「石田、昨日の殺人事件のことで何か知らないか？」

「生憎と僕にそっち関係の事を聞いても、キミの期待している答えは返ってこないよ」

そっち関係……多分、人間関係の事と霊関係の事のことだろう。

石田は滅却師、霊関係の事には精通しているが、人間による事件はあまり詳しく知らないようだ。

「それじゃ、殺された人の魂魄から情報を得る事はできねえか？ 殺されたんならきつと未練が残ってて、この辺に居るかもしれないねえだろ」

一護は死神の力を失ってから、霊などを見ることは不可能となってしまっている。それ故に、こういったことは靈感の強い、もとい精通している人間に聞くのが一番だ。

「すまないが、僕もその程度のこととはとつくにを試みた。だが、殺された人の魂魄は見つけ出すことはできなかつた」

「何!?!」

「理由は知らないが、成仏したんだと思うよ」

唯一情報を得られると思った一護の期待は綺麗に潰された。

一護は諦め、そのまま去ろうとしたが石田に声を掛けられる。

「黒崎、キミはなぜそんなに今回の殺人事件に首を突っ込もうとするんだ？ 昨日、井上さんにも事件の事を聞いたらしいじゃないか」

「さあな、俺にもよく分かんねえんだ」

首を突っ込む理由は自分でも本当によく分からない。

事件現場に偶然居合わせたからなのか、それとも自分に今回の何か降り掛かろうとしているのではないかと予感しているのか。

「まあいい。キミに丁度良い情報を与えよう」

石田の台詞に一護は少し期待する。

「パソコンのとあるネットワークのサイトに、報道されていない事件の詳しい情報を得る事の出来るサイトが有るんだ。そのサイトならより詳しく事件の事を知る事が出来ると思うよ」

ネットによる情報。

本当か否かは分からないが、見て損は無いだらう。

「そのサイト名は？」

「たしか——廃絶の理」

サイト名を聞いた一護は早速、放課後に学校にある情報室のパソコンを使い調べる事にした。

勿論、先生の許可を得た上で。

一護は情報室に入ると、パソコンを立ち上げた。

ホームにいくと、石田に教えて貰った廃絶の理のURLで検索し、ページに飛ぶ。

廃絶の理とはニュースサイトで報道関係者でもない一般の人が、様々なホームページを毎回巡回し情報を収集して、自分のアンテナに引っ掛かったニュースを簡単なコメントと共に紹介しているものらしい。

その中で廃絶の理とは結構有名なニュースサイトとして多くの人に知られているようだ。

「断華」という、本名なのかハンドルネームなのか、よく分からない名前の人が作っている。

ズラツと並んだニュースへのリンク。

リンク先のページを読むだけで、最近ネットで話題なものはチェックできる。

よくこれだけの更新を毎日できるものだと感心する。

こんなものを毎日更新できるなんて一護からしたら超人か、超暇人のどっちかだ。

この廃絶の理は数あるニュースサイトの中でも、群を抜いて収集するニュースの数が多いみたいだ。

単純に多くのニュースに眼を通したいのなら、新聞社のサイトとここを見れば充分だ。

時事的なニュースをチェックし、今度は今回の公園での殺人事件に関する情報がないか、探してみた。

………探していた事件の記事を見つけた。

そこには発見された時刻や死亡推定時刻、被害者の詳細、事件が起きた地区の事などが事細かに書かれている。

しかも絶対に報道されない——「死体の写真」まで掲載されていた。

一護はそれを見て気分が悪くなった。

こんなものを掲載してなぜ消されない。

(このサイトはアングラかよ……?)

アングラとはアンダーグラウンドの略。

つまり地下だ。

アングラのニュースサイトは突っ込んでいかないようなところで、情報を集めてくる事で有名だ。

毎日見ていると気が滅入るようなサイトである。

だから、たまに見るのが丁度良い。

もしかしたら、このサイトはアングラに近いサイトなのかもしれない。

取り敢えず、一護は死体の写真を見ないように写真の横に書いてある記事を読む。

内容は昨日見た報道より詳しい事が書いている。

殺された人は鋭利な刃物で切り刻まれ、殺されたようだ。

腹を真一文字に深く切られ内臓が飛び出し、それから眼球を抉られ、喉の奥を抉られ、性器を抉られ、脳を抉られ、内臓を抉られていたようだ。

こんな殺し方は、あまりにも非道だ。

本当に殺人犯が人間なのか疑いたくなる。

一護は読んでいるだけで吐きそうな位、気分が悪くなった。

そして、同じような事件が「数十年前にも空座町で起きた」らしい。

あの時の犯人は未だに捕まっていない。

一護は過去のその事件を調べるのは止めた。

もう精神的にきついからである。

「石田の野郎、何でこんなサイト知ってんだよ？」

今さらだが、そんな疑問が頭に浮かんだ。

一護はブラウザを閉じ、システムを終了させモニターの電源を落とす。

そして鞆を持ち、時計を見る。

夕方の6時過ぎ。

もう最終下校時刻前だ。

一護は情報室を後にし、鍵を職員室に渡し、帰路についた。

*

家に帰る途中、迷子の男の子を見つけた。
泣いている。

どうやら、親と逸れたようだ。

一護はその子連れ、交番に届けた。

そんな事で時間を費やし、見れば夜の7時になっていた。

夜の7時までに家に帰らないと父親の一心が煩い。

黒崎家の夕食は毎晩7時と決まっている。7時を過ぎると一心の

血の制裁を喰らう事になる。最近は喰らっていないが。

一護は早足で暗くなった夜道を歩きながら家に帰る。

そして、一護は異変に気付く。

家の明かりが全く点いていないのだ。

普通なら電気が点いていて当然の時間。

一護は不審に思いながらも家の玄関を開け、中に入る。

物音一つしない。

その静けさが少し恐怖心を抱かせる。

廊下が暗くてよく見えない。

だから電気を点けようと、スイッチを入れるが電気が点かない。

ブレーカーでも落ちているのかと思うが、何かおかしい。

一護は靴を脱ぎ、リビングに向かう。

何処かに出掛けているのだろうか。

「ッ!!」

リビングに向かう途中、一護は急に異様な感覚に襲われた。

この感覚はあの時の、昨日の公園での殺人現場で圧迫されたような
感覚。

一護の頭に一瞬、昨日の殺人現場の光景が鮮明に蘇った。

その時、一護はまさかかと思った。

そのまさかは外れて欲しい。

一護は早足で歩き、リビングの扉を開ける。

開けてしまった事を……一護は後悔してしまった。

暗闇に眼が既に慣れていた一護の眼に最初に映ったのは、赤い紅い液体。

例えば、暗闇に眼が慣れていなくても月明かりがリビングの窓ガラスから侵入していて、よく見える。

その液体が部屋中に飛び散っている。

ソファやテーブル、テレビ、窓ガラス、壁、カーテン……彼方此方にだ。

一護の視線が下の方に移る。

下の方に視線を絶対に向けたくは無かった。

けど、見ないと何も言えないし、何も考えられない。

床には赤い水溜り。

その水溜りの先に一つの影があった。

それを確認し、それが何なのかを理解した一護は声にもならない悲鳴を上げた。

そう、その影は紛れもない遊子だった。

遊子が床の赤い水溜りに浸かる様に倒れている。

一護は遊子に駆け寄ろうとする。

だが、一歩足を動かした途端、足で何かを蹴ってしまった。

柔らかくて、少し重い物。

一護はゆっくりと蹴った物を見る。

それは血だらけの黒崎夏梨だったものだった。

「うわああああアアアアアアアアアッ!!!」

一護は叫んだ。

妹が二人共死んでいる。

それを理解してしまった一護の胃が跳ね上がる。

苦くて酸い液体が食道を上がってきた。

「げええ……ッ！」

一護は胃の中の物を吐いてしまった。

あまりの事に足が竦む。

手や足が痺れたかのように力が入らない。

一護は深い悲しみより、恐怖感の方が強かった。

そのお陰か、一護は前からする微かな物音に気付けた。
一護は音のした方を見る。

そこには異様な物が立っていた。
それが人だと分かった時には全てが遅かった。

全身黒づくめの男が動いたかと思うと、一護の視界が完全なる闇へと落ちる。

「テ……」

テメエと叫ぶつもりが、その刹那より前に一護は声を失った。

真なる闇に銀の一閃。

何かが一護の喉に当たった。

黒衣の男は一護の喉に手を伸ばしている。何かが喉にめり込んでいる？

男は一護の喉をついたそれを半回転させる。

ゴリツという音と共に喉に液体が溢れた。

それは刺さっていた。

「げ……はっ！」

液体と共に強烈な不快感と焼けるような熱さが湧く。

「う……あ、げはあっ……げえ……」

男は一護の腹を蹴り、廊下に出す。

焼ける液体が喉と鼻に溢れる。

一護は足が無くなったかのように、そのまま膝を折り倒れた。

(これは……血だ……！)

一護はそれが何なのかを理解した。

「げ……うう……！」

ぐぼぐぼと泡立った血を吐き出す粘液と赤黒い血液が混じり合う大量の血。

喉に残る違和感、痛みでは感じない焼けるような感覚と強烈な不快感に残る。

これはナイフ？　メス？　意識した瞬間、ようやく遅れた激痛がやってきた。

「うげえ……げ、げはっ!!」

突つ伏したまま大量の血を吐き捨てる。

言葉にならない激痛。神経が寸断されるかのような感覚。だが、痛みが戻ったお陰で一護の意識が少しだけ鮮明になる。

目の前に黒衣の男が立っていた。

(クソー・畜生！ クソクソクソクソクソオツ!!)

一護は男を睨みつける。

出血が多過ぎるせいか眼が霞んでよく見えない。

だから男の姿が詳しく分からない。

男は一護を見据えている。

そんな男の姿を見ている一護の憎悪が激しく高まる。

(許さねえ！ 許さねえ！ 許さねえ！ こいつは殺す!! 絶対に殺してやる!!!)

一護の憎悪の念が更に強くなる。

ここまで相手に対して殺意を覚えたのは、人生上一回もなかった。

頭の中がジンジンと熱く感じる。

まるで脳が赤熱化した鉄に変わったようだ。

怒りと殺意のみが一護の生を実感させている。

男は一護の喉に刺さった物を抜き取る。

一護は一瞬苦悶の声を上げた。

そして、男は抜いた物を一護の脳天目掛けて振り下ろした。

一護が最後に聞いた音は自分の脳に何かが刺さった音。

今までの痛みが嘘だったかのように消えた。

……全てが闇に堕ちる。

——一護の世界が消えた。

《3》

——……!!!!

朝・黒崎家——

一護が目を大きく開け、目を覚ます。

(……夢を、見ていた……ような気がする。とても……嫌な夢を……)

その証拠に起きたばかりの一護の身体は、汗でびっしょりと濡れていた。

今の季節は冬。

こんな寝汗をかくほど、暑い夜ではない。

起きたばかりなのに、どつと疲れた感じがする。

(どんな夢だったっけ……。思い出そうにも、全く思い出せない)

とても嫌だった、という余韻しか残っていない。

ふと、顔に触れると、頬が涙で濡れていた。

「……………」

朝から夢で落ち込んでいても仕方ない。

服の裾で顔を擦る。

一護は深呼吸をして気分を入れ替えた。

時計を見る。

少し早めに起きたようだ。

一護は制服に着替え、下の階に向かう。

一階に行きリビングの扉を開ける。

「あ、おにいちゃん！ おはよう！」

「おはよう、一兄」

妹の遊子と夏梨が一護に挨拶する。

いつもの二人の声。

毎日聞いている遊子と夏梨の声だ。

「おう、おはよう」

分かっていた。

毎日必ずする挨拶なのだ。

今更驚く事など何も無いはずだ。

(なのに……………何だ……………この違和感は)

「……………どうしたの、一兄？」

夏梨が一護の様子がおかしい事に気付いたようだ。

「いや、何でもねえよ。顔洗ってくる」

一護はそういい、風呂場の洗面台に向かった。

洗面台の前に立ち蛇口を捻る。

胸にわだかまるもやもやを消し去る為に、勢い良く冷水で顔を洗った。

寝汗をかいていたせいか、洗顔がいつもよりも気持ちよく感じた。(それにしても、あの違和感は一切何だったんだ……？ 昨日の出来事で思い当たる事はない。やっぱり夢が原因か……)

一護は夢を思い出そうとする。

そして、夢を思い出そうとした瞬間、胸の奥がグツと苦しくなるような感覚に襲われた。

「く……ッ」

形容し難い不快感が身体の奥をゆっくりと蠢く。

不吉な予感が実体を持つようとしているような、曖昧かつ濃厚な気持ち悪さ。

一護はもう一度冷水で顔を洗い、落ち着きを取り戻そうとする。

(これは……精神的なものだ)

病気や怪我といった具体的な害ではない。

一護はタオルで顔を拭く。

その時には不快感は消え、若干の精神的な疲労だけが残った。

一護がリビングに戻ると、既に朝食が出来ており食卓に着いた。

いつも通り朝食をとり、遊子たちとは一足先に家から出て、学校に向かった。

家から出ると、太陽が一護を照らし出し、ゆっくりと空を仰ぎ見た。今日も快晴。

突き抜けるような青。

空を高く広く感じる冬。

いつもと変わらない冬の空……それなのに。

(どうしてこんなに、空虚に感じるんだ)

それに目の前にいた遊子と夏梨もあのまま霧散してしまいそうな程、儚い存在に感じた。

あの時、なぜか涙が出そうになった。

(一体どうしちまったんだろうな、俺は)

一護は足早に学校に向かった。

*

少し早めに家を出すぎた一護は少し遠回りをして学校に向かう事にした。

ついでに気分転換もかねて。

公園に足を踏み入れると視界一杯に桜の木が目映る。

(……………!)

強烈な違和感が一護の中を走り抜ける。

見慣れた道が、まるで異界に通じる禍々しい通路のように感じた。

朝日が道を照らし、まだあまり木に葉が生っていないが、見る人が見れば綺麗な公園だ。

だが、その綺麗な公園の皮を剥けば、底知れぬ闇が溢れ返ってくる。そんな印象を一護は受けた。

(一体……………どうしてそんな印象を受ける……………!?)

一護の足が止まる。

この先に行つては駄目だ。

一護の何かがそう叫んでいる。

でも、どうして……………?

……………理由などは無かった。

でも、此処を通らないと学校には行けない。

行けるには行けるが遅れてしまう。

一護は自分の不自然な考えに戸惑いが隠せない。

「つたく、訳分かんねえ」

一護はまとわりつく暗い澱みから逃げ出すように、足早に歩き出した。

理由も定かでない妙な感覚に振り回されるのが不快で仕方なかったのだ。

「……………つ!」

目の前に広がる異様な光景。

黄色い立ち入り禁止のテープに囲われた空間。

青いシートに隠された死体。

俺は、これを――

(知っている……?)

なぜ、知っているのだ?

「ちよつと、その少年!」

突然後ろから声を掛けられた。

一護が後ろを振り返ると、警察の人がいた。

「この公園は現在立ち入り禁止になっている。何処から入った?」

警察の人が困ったような表情で聞いてくる。

……………?

(……こんな事が、前にも何処かで……あつたような……)

記憶に検索をかけてみても、全く憶えていなかった。

(……気のせいなのか……?)

じゃあ、この強烈な感覚は一体…。

「立ち入り禁止? 普通に入れたぜ」

「何?」

いつまでも黙っていると不審に思われるので、一護はそう答えた。

「普通に南の出入り口から入れた。立ち入り禁止とか、そんなもん全然してなかったぜ」

「……チェック漏れがあつたのか?」

どうやら警官の不注意だつたようだ。

「……」

黄色いテープで囲われた犯行現場の周りに立つ警官たち。

ドラマなどで見た光景と変わらないそれは、何だか現実感が無く、少しだけ滑稽な感じがした。

本物っぽい、いや、本物だからこそ、嘘臭い感じが際立ってしまう気がした。

「あの、すみません。そろそろ学校に行かねえといけないんですけど」

この公園での事で時間を忘れていた一護は近くにあつた時計台の時間を見て言った。

そろそろ行かないと結構やばい時間に差し掛かっていたのだ。

警官が一護の方を向き口を開く。

「……君は空座一校の生徒か?」

「はい、そうですけど」

「そうか、ちよつといいかな」

警官が一護の学年や住所などを聞いてきた。

それに一護は答える。

これで、この場は通してもらえらしい。

本来なら事情聴取をしなければいけないのだが、今回は見逃してくれた。

一護は異様な空間から逃げ出すように公園を出た。

*

——学校での朝のホームルームが始まった。

学校に着くと、いつも通りの友達みんなと挨拶を交わし、心を少し落ち着かせたが、ホームルームの時間になると再び違和感が少し襲った。

担任の越智美論は教卓に立つと珍しく真面目な表情になっていた。

(何だ……？ 先生が何を言うかが分かるような気がする)

一護の心が平然としている。

あの現場を見ていたから……？

(いや、これは今朝の違和感の延長……)

いつもと変わらない朝に戸惑いを感じて、異常な光景には平然としている。

一護の中の日常と非日常が逆転してしまったのか？。

それが違和感と冷静さの原因か。

あの光景を知っていた、という感覚。

直感的にそう思ったけれど、どう頭を捻ろうとも、そんな記憶はない。

見た事の無い場所を、いつか見たように感じる。

(こういうのを既視感って言うんだっけ？)

そんな事を考えている内に先生が口を開いた。

「本当だったら体育館で全校生徒の前で伝えるべきだったんだが、教室で言う事になった」

先生のセリフに教室内がざわめく。

「ほら、静かにしろー」

先生が出席簿で教卓を叩き、生徒のざわめきを止める。

「今日の明朝、すぐその公園で殺人事件が起きた。警察が言うには通り魔の犯行の線が強いらしい。登下校の際はなるべく一人ではなく複数で帰るように」

一護はこのセリフを何処かで聞いた感じがした。

いや、それ以前に人が死んだっていうのに、今の自分の異常なまでの冷静さに混乱してしまう。

平穏なはずの日常に違和感を抱き、人が死んだという事実冷静でいる自分。そんな感覚を、まともに受け止められるわけがない。

——通り魔の事件。

海外の事件の話でも聞くかのように、まるでリアリティを感じる事が出来ない。

自分の冷淡さに気分が滅入った。

そんな事のせいで授業は殆ど上の空。

そして、そのまま昼休みになり、未だに教室では事件の話で持ちきりだ。

井上が一護を心配そうに歩み寄ってきた。

「黒崎くん。大丈夫?」

「ん、何がだ井上?」

「今日ずっと元気無かったから」

「何だ、そんな事かよ。心配すんな。いつも通りだ」

そこで一護はふと、あの事件の事が聞きたくなった。

「井上は、何かあの殺人事件の事知らねえか?」

「!?え……?」

突然、一護にそんな話題を振られ少し驚いたようだ。

女の子の持っている情報ネットワークは野郎の噂話の比ではないから、その情報源を無視する訳にはいかない。

そういう情報ネットワークで訓練を積んで、やがて少女達はオバさんとなり、さらに情報伝達の速度を上げていく。

局所の情報収集能力に関しては、各国諜報機関も真つ青に違いな

い。

つまり、女の子の情報はバカに出来ないという話だ。

「こんなお話は聞いたよ。今回の殺人犯は郊外の精神病院から脱走した人なんじゃないかって……」

「精神病院か……」

「信用していい話かどうか分からないけど、精神鑑定で罪に問われなかった人が、脱走したんじゃないかって噂だった」

憲法何条か忘れたけど、精神病などで責任能力がないと判断された場合、罪が問われないっていう話だ。

でも、そんな脱走があったら、もつと騒ぎになっている。

「それから、これは結構良く聞く話なんだけど……。夜遅くに道を歩いていて、全身真っ黒な服を着た人が、じつとこつちを見てるっていう……」

暗闇に現れる「闇夜の男」ってやつか。

一護もそれは聞いた事がある。

「ずっと前から、そういう噂はあったよね。でも、最近になってその「闇夜の男」を見たって人が多くなってるの」

「……!？」

「背が高く、全身黒くて……。それから、不気味な仮面を付けてるみたいな……。」

背が高く、全身黒い……。一護に悪寒が走る。

何だか、とても嫌なものを思い出しかけた……。そんな感じがした。

井上も嫌な話をし過ぎたせいかな、ひどく疲れたような顔をしている。

「ごめん、井上。嫌な話させちまったな」

「あ、大丈夫だよ。私、役に立てたかな？」

「ああ、ありがとな」

一護は一言礼を言う。

その会話で昼休みは過ぎ、チャイムが鳴った。

それから放課後、一護は帰り支度をした。

そこに啓吾と水色がやってきた。

「一護、これからゲーセン行かぬ。久し振りにさ」

ゲーセン……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「ああ、構わねえけど」

これといつて別に用事は無い。

それに羽を伸ばして遊べば、変な違和感を忘れる事が出来ると思つたのだ。

一護達はゲーセンに向かった。

《4》

——夕方6時。

一護たちはゲーセンから外に出た。

「いやあく、今日は楽しかったぜ！」

ゲーセンを出た啓吾は背伸びをすると共に笑顔で言った。

「啓吾は万年楽しそうにしてるじゃない。悩み事とか今まで無かつたでしょ？」

「酷えな！俺にだって悩み事の二つや三つ……」

啓吾の言葉が途切れた。

どうやら啓吾に悩み事が無いようだ。

「無いんだね。羨ましいよ啓吾が」

皮肉のように言う水色。

「ちよつとちよつと！何で急にそんな話になるのさ！人が楽しい気分になつてたのに！」

「あ、ごめんね。つい言ってみたくなつて」

一護は二人の言い合いを適当に耳を傾けていた。

と、一護が二人の話を聞いている中、一護の興味を引く話が耳に流れ込んできた。

「ねえねえ知ってる？今日公園で起きた猟奇殺人事件って、昔にもこの町で似たような事件が合ったらしいよ」

「へーそうなんだ。昔ってどのくらい？」

「えくとね……テン」

二人の女性が事件の事を話しながら一護たちの前を通つて行つた。

一護はその話の詳しい内容が気になった。

「なあ、二人共」

一護の言葉に啓吾と水色は話を止め一護を見る。

「何だよ一護？」

「空座町で昔、今日みたいな殺人事件ってあったのか？」

「あったよ。たしか18年前だったっけ？ 知り合いから聞いた話だから詳しくは知らないけど」

水色が答えてくれたが、あまり知らないようだ。

「俺は姉貴から聞いたんだけど、18年前に空座町で連続殺人事件と集団失踪事件があったって話を聞いたぜ。あの事件は結局解決されずに終わったみたいだけど」

「連続殺人事件と集団失踪事件か……」

啓吾が中々良い情報をくれた。

「もつと詳しく知らねえか？」

「えーと、たしか……姉貴が言うには……」

啓吾が少し間を置き本題を話す。

「空座町で連続殺人が起こって、町が恐慌状態に陥ったみたいで、空座町で立て続けに起こった殺人事件は、死体をバラバラに刻む猟奇的なものだったらしいぜ。死体を隠す意味すら無いように、間隔を空けずに次から次へと人が殺されたって話した。まあ、その事件も空座町に住む人々の集団失踪を境にぷつり途切れたみたいだけど。因みに、当時その二つの事件は全国規模のニュースにまでなったらしいぜ」

その大きい事件が何の手掛かりも無しのまま現在に至っている。

「つうか一護、何で急にそんな話を聞いたんだ？」

「いや、何となく。ちよつと小耳に挟んだから気になっただけだ。そろそろ、帰ろうぜ」

三人はゲーセンを後にし、無事、家路に着いた。

*

次の日の朝。

一護はすつと目が覚めた。

昨日の不快な目覚めと比べて、かなり清々しい。

「いゝちゝいゝおおおゝゝゝ!!」

清々しいのに、それを踏み潰すような声と足音が聞こえてくる。

一護はベットから立ち上がり、部屋の扉を見る。

瞬間、扉が強く開けられ一心が飛び掛かってきた。

「うつせえええ!!」

一護は強く一心の顔面に蹴りを入れる。

顔面に綺麗にヒットしたせいで一心の鼻から鼻血が噴出する。

一心はそのまま床に倒れた。

「朝っぱらからうるせえんだよ」

倒れた一心を一瞥して言う。

そんな言葉を聞いた一心は鼻で笑った。

「何だよ、元気じゃねえか一護」

一心は鼻血を垂らしながら言う。

声柄と今の状態が全く合っていない低い声だ。

「は、何だよ?」

一心が何を言っているか分からない。

「いや、昨日お前、全く元気が無かったじゃねえか。遊子と夏梨が心配

してたぞ」

成程。

たしかに昨日の一護は妙な違和感や不安に駆り立てられていた。

それに遊子と夏梨が気付いたらしい。

まあ、家族なんだから気付くのも当然か。

「悪い」

一護は一言一心に謝った。

「何俺に謝ってんだよ。謝るんなら遊子と夏梨に言え。俺は全く心配

してなかったからよ」

「そうかよ。謝って損したぜ」

何て親だ。

一護はそう思いながら部屋を後にしようとする。

「待てよ一護」

だが、一心に呼び止められた。

「何だよ？ まだ何かあんのか？」

一護は顔だけ一心の方に向け聞く。

「何か、有ったのか？」

有ったのか？

一心の質問に一護は答えられない。

昨日は変な違和感が有ったのと犯行現場に偶然居合わせただけ。

それだけなのだ。

一護にとつて答えられる要素が無い。

「何も無えよ。少し疲れていただけだ」

一護はそれだけ答えた。

*

学校にて。

今日は昨日とは違い授業にも身が入り集中できた。

妙な違和感などが消えたお陰だ。

そして放課後になり啓吾が一護に話しかける。

「なあ、一護。今日もゲーセン行かね？」

一護たちが行くゲームセンターは商店街にある。

正式名称は空座レジャーワールド。

全国に支店があり、通信対戦系のカードゲームや格ゲー、音ゲーに力を入れている感じだ。

今、啓吾や水色、一護たちがハマっているのは神座万象シリーズ／＼狂乱の宴、十神サバイバル／＼という2D対戦格闘ゲームだ。

キャラが特徴的なのと、ゲーム全体のバランスが秀逸で飽きない上、人気が高い。

ネットワーク対戦機能もあるので、それを利用して一年に一度は全国大会が開催されている。

その神座万象シリーズ／＼狂乱の宴、十神サバイバル／＼に啓吾が群を抜いてハマっている。

実の所、一番ハマっている啓吾が一番下手で、水色が群を抜いて上手い。

井上もたつきも時々プレイしている。

たつきは格ゲーが好きなのか水色の次くらいに上手い。

「ああ、そうだな」

こうして昨日と同じ三人でゲーセンに向かった。

*

三人はゲーセンの中に入ると早速啓吾が神座万象シリーズく狂乱の宴、十神サバイバルくをプレイする。

対戦直前に自分のキャラの特性を6種類のパターンの中から選択するので、対戦が始まってみないと完全には相性の善し悪しが判明しない。

このシステムのお陰で、簡単に絶対的な強者が生まれにくい。

その他に、自分の位置から直線的に敵を攻撃できる追撃機能、それを途中で解除できる追撃キャンセル等、使える機能が豊富にある。

こういった多様な機能が仇となって、初心者には向かずマニア同士の技の磨き合いになってしまっているのが現状。

一護は今回は積極的にプレイせず、周りの人達のプレイを後ろから観戦している。

なぜか何のゲームをやらせても上手い水色のプレイを観戦していると、色々と勉強になる。

「よっしゃー！　麻呂の連勝だぜ!!」

神座万象シリーズく狂乱の宴、十神サバイバルくをプレイしていた啓吾がガッツポーズをしながら叫ぶ。

啓吾のプレイ画面を見ると、五人抜きを達成した結果が表示されていた。

啓吾の言った麻呂、つまり坂上覇吐というのは、神座万象シリーズく狂乱の宴、十神サバイバルくのキャラクターの一人。

どんな相手にもカウンターを取りやすい万能型ではあるが、操作が難しく自分からの攻撃には特色の少ないキャラである。

「いつの間にな腕上げたんだよ啓吾」

昨日は啓吾と対戦せず他の人達をしていたので啓吾の現在の腕前は知らない。

今回は神座万象シリーズく狂乱の宴、十神サバイバルくの全国大会

前って事でかなりの凄腕が集まっている。

その中で五人抜きをするという事は、お世辞抜きに腕を上げている。

啓吾の使っている坂上覇吐はあまりにもクセが強いキャラなので本格的に使っている人は少ない。

メインに使い込むには不向きなキャラを、よくもここまでと思う一護。

「はっはっはっは！ 格ゲーに大事なのは訓練だからな。どれだけ時間と金を投資したとか……」

その情熱を他のものに活かせれば、一廉の人物になれるだろうに……。

「水色に常々フルボッコにされてたからな、今度こそはリベンジしてやんよーっ！」

と宣言する啓吾。

啓吾と水色は同じゲームで競い合う事が多い。

だけど、同じくらいの時間をゲームに当てても十中八九、水色の方が上手くなる。

「それじゃあ対戦しようよ啓吾」

リベンジの雄叫びを聞きつけたのか、水色が啓吾の元にやってきた。

「よっしやー！ 今日こそは勝ってやるぜえ！」

自信満々の啓吾。

「へえ、五人抜きなんて凄いじゃない啓吾」

「お前に褒められても嬉しくねえよ！ さっさとやろうぜ！」

今までの積年の屈辱をこの場で雪ごうと意気込んでいるようだ。

「一護、次やる？」

水色が聞いてくる。

全く啓吾を見ていないような感じだ。

「いや、俺はいいよ。昨日久し振りにゲーセンに来て全然駄目だったから、やるなら勘を取り戻してからにするよ」

今は恐らく啓吾にも完敗してしまう程のレベルだろう。

「それじゃあ、始めようか啓吾」

画面にNew Challengerと表示される。

水色と啓吾の戦いの火蓋が切られた。

水色の使うキャラはシユピーネというキャラだ。

オルカナム：アニメスの中でも最も弱い部類に入るキャラなのが、水色はこのキャラだけを限界まで極めている感がある。

通信対戦が可能なゲームなので、空座店のシユピーネ使いとして全国でも知る人ぞ知る存在である。

「ほらほら、どうしたの啓吾」

「くっ！ ……フッフ、中々やるな水色。まあ最初は小手調べってやつだぜ」

一戦目は水色の勝ち。

プレイを客観的に見ていると、最初は互角だったが一戦の間に水色が啓吾のパターンを読み切っていくのが分かった。

そして二戦目。

「オラオラオラオラアッ！ いくぜつ必殺・黄泉返り！」

「あまいよ啓吾」

「おいイ!? 更にカウンター取れんのかよ!? それじゃ、これで、どうだッ!?!」

「へえ、そうきたか。んー、成程」

「おっしやー!! へっへっへ、最後の二択からのコンボは読めなかったみたいだな水色!」

「でも、もう駄目だよ」

水色が自分の読みが正しいのかを確かめるようにプレイするのが分かり、それに比べると啓吾はただ必死に戦っている状態。

仏心を見せたのか、それとも、三戦目でいたぶるためか、水色はギリギリのところまで負けた。

……これは第三戦の結果を見るよりも明らかだった。

一護はいたたまれなくなって、そつとその場を離れた。

数分後、啓吾が涙を流し、水色が笑顔で一護の元にやってきた。結果は聞くまでもない。

「一護、そろそろ帰ろう、もう暗くなってきたし」
水色が言う。

外を見てみると、商店街なのでまだ賑わっていたが、時間はもう7時前だ。

「ああ、そうだな」

三人はゲーセンを後にした。

*

一護は啓吾と水色と別れ、一人暗くなった線路沿いの夜道を歩く。
人気も無く、物音一つしない。

——そこにあいつが現れた。

闇の中から湧き出るように。

影の中から浮き上がるようにして現れた。

「……ッ!?!」

一護は驚きのあまり目を見開く。

闇よりもなお暗い黒衣。

不気味な仮面。

そしてギラリと輝く……。

「くっー!」

一護がそれを理解すると同時に、禍々しく光る刃が一護の目の前を通り過ぎていく。瞬間的過ぎる刃を転がり避けた。

そして咄嗟に立ち上がり身構える。

男はゆっくりと一歩一歩近づいてくる。

……ヤバイ……こいつはヤバイ。

とにかくヤバイ。

頭の中がチカチカとスパークする。

警報が大音響で鳴り響く。

逃げろ！ 逃げろ！ と、どこからともなく声が聞こえてくる。

男が手に持った巨大なナイフを構えもせず、無造作に横に薙いだ。

「チッー!」

びゅんっと言う風を切り裂く音。

身をよじらせて、それを何とか避ける。

再び空を裂くナイフ。
横に転がりながら避けた。

ガシヤンと線路沿いのフェンスに背中がぶつかる。

(しまった……！)

この状況で退路を無くしてしまつたら、万事休すだ。

一護は周りを見ると、自分の横の方に何かがあった。

それは鉄パイプだ。フェンスの根元に鉄パイプが転がっているのを見つけた。

一護はスライディングをするかのように鉄パイプの落ちてる方に移動する。

そして、地面の土もろともパイプを拾い上げた。

男は一護と対峙する。

相手は肉を裂き骨を断つ刃物。

一護の獲物はただの鉄のパイプ。

だが、さつきと比べれば勝算は感動的なほどに確率を増した。

「うおおおおおお!!」

一護は先手必勝とばかりに、鉄パイプを握って突進する。

振れば隙を突かれる。

狙いは男の手。

突きで男の手からナイフを落とさせつつもりだ。

……だが、男はナイフを構えようともせず、片手を一護に突き出した。

「死ぬ……虫けら」

黒煙にも似た濃厚な気体が浴びせかけられる。

(ガス……!?)

鼻を突く刺激臭で目も開けられなければ、息をする事もままならぬ一護。

(このままじゃ、殺される！)

逃げ出そうと体を捻った時……

世界が爆発した。

「!？」

違う……爆発したのは一護の周りの空気。

全身が一瞬で炎に包まれた。

「あ……」

火だと認識したのは一瞬の事。

そこから先はただの地獄だった。

「ぐああああああああああああつ!!!」

衣服が瞬時に液化化し、肉に張り付き焼き焦がす。

炎が耳に轟音として届き、脳が攪拌かくはんされるような痛みが走る。

眼球が煮え爆ぜ、皮膚が爛れ縮み、器官に灼熱が流れ、肺を焼く。

もう悲鳴すら上げる事が出来ない。

数秒後、一護は炭化しつつある皮膚を崩しながら、アスファルトに倒れ込んだ。

何なんだ、これは……？

ガス……炎……？

自分の死の理由すら分からないまま、全身を走り抜ける炎の激痛で、一護はショックのあまり心停止した。

……全てが闇に堕ちる。

——一護の世界が消えた。

第28斬【参の絶望と肆の絶望】

《1》

.....

「.....ッ!!」

一護は飛び起きるように、上体を起こす。

(.....夢を、見ていた.....のような気がする。とても、嫌な夢を.....)

全身からべとつく汗が滲み出している。

内容は欠片ほども憶えていないが身体に残る不快感が、悪夢に魘されていた事を物語っている。

「!? う.....ッ!」

突然、ズンツと重い感覚が胸を走る。

それと同時に視界がホワイトアウトする。

きつい眩暈が走った。

「.....」

直ぐに眩暈は治ったが、起きたばかりのたるさも相まって、不快感が増してしまう。

一護は汗で濡れた両掌を見る。

「.....!!」

一瞬——指が“消えた”ように見えた。

「.....はっ、まさかな」

眩暈の直後だったから、視界がおかしくなったただけだ。

「それに、決まってる」

一護は深呼吸をして気分を入れ替えた。

(省略)

*

——放課後。

一護は事件があった、公園の方に行った。警察による現場検証が済んだようだ。

公園全体に対する立ち入り禁止の措置は、既に解除されていた。あの場所に行くと、変わらずテープで囲われ、警察が立っていたが、朝の雰囲気とは違っていた。

野次馬が沢山いるのだ。

まあ、居ても仕方ない。

朝と全く同じ状態なのに、朝のような緊迫感が殆どない。

と、その野次馬の中に有沢竜貴がいた。

「たつき。何してんだよ？　こんな所で」

一護が声を掛けるとたつきが驚いたふうにごちらを見る。

「！　一護……あんたこそ何でここにいんだよ？」

「何でって、ただ通りかかっただけだよ」

「そう……そういや一護。あんた何か今回の事件について色々聞きまくってんだって？　織姫から聞いたよ」

「あからさまに話を逸らした。」

それに、そんなに聞きまくった覚えなどない。

「実はあたし、そういう話に凄く詳しい人知ってたんだ。紹介してやろうか？」

「詳しい人……！」

話を逸らした理由はどうであれ、そんな人を紹介してくれるのは有り難い。

「ああ。多分今も学校にいると思うから、行ってみるか？」

「いや、流石に今日は迷惑だと思っから後日で……」

そう一護が断ろうとしたら、たつきが一護の腕を掴んだ。

「いいから。どうせ、あいつ暇だろうし」

そんなこんなで強引的に一護は学校に連れて行かれた。

*

学校に戻ると、一護は情報室に連れて行かれた。

情報室に入ると一人の女子生徒がパソコンを弄っていた。

「おい、華。ちよつと用事有るんだけど今いいか？」

たつきが女子生徒に声を掛けると女子生徒は二人の方を振り向く。
「あ、たつきちゃん。いいよ別に」

女子生徒はパソコンの電源を落とし、二人の方に歩み寄ってきた。

「あれ、そちらさんは？」

女子生徒が一護の顔を見て聞く。

「ん、ああ。こいつは黒崎一護って言ってあたしの友達だ」

「どうも」

たつきに自分の事を紹介された一護は、軽く頭を下げる。

「黒崎さんですね。私は華断（はなたち）と言います。でも、たつきちゃん、用事があるならメールしてくれたりいいのに」

「悪い。ちよつと携帯が故障中でき。替えの携帯を使えばいいんだけど、どうも別のをっていうのが嫌でさ」

赤い髪に黄色いリボンで後ろの長い髪を二つに纏めツインテールにしている、どこにでもいそうな少女だ。

（てか、たつき、携帯今は持ってねえのかよ）

「で、たつきちゃん。用事って何？」

「一護がちよつと聞きたい事があるらしいのよ」

「聞きたい事？ 何ですか？」

たつきから一護の方に顔を移す。

「いや、ちよつとした事を聞きたいんだ」

「じゃあ、話して下さいな」

そういうと華は情報室にある椅子に座った。

続いて一護とたつきも、向かい合うように椅子に座る。

「一護。華は一度何かを話すと止まらないから気をつけろよ」

と、たつきが一護に耳打ちしてくる。

どうやら彼女はマシンガントーク娘らしい。

だが、そんな事を一々気にしない一護は本題に入る。

「それじゃあ、二つ程聞きたい事があるんだ」

「はい、何でしょうか？」

「公園で起きた殺人事件の事を知ってるだろ？」

「勿論ですよ」

まあ、今日のホームルームでも言われたから知らない方がおかしい。

「俺はあの事件に少し興味が有ってさ、クラスの女子から色々変な噂を聞いたんだ」

「変な噂？」

「夕暮れ時に全身黒尽くめの男が現れて、こっちを見てるって話なんだけど」

「『闇夜の男』の噂ですね」

一瞬で言い当てられた。

「ああ、それならあたしも知ってる。最近見たって人の話だと変なマスクを付けてるらしいよ」

マスク……

「変なマスク？ プロレスラーが着けるみたいなの？」

そりゃあ、夜道で黒尽くめのプロレスラーに会ったら、かなり怖い。

「いや、能面のような変なマスクだって聞いている」

……

一護の脳裏にやけにリアルなイメージが湧いてくる。

能面の泥眼のような不気味な面。

不快感と嫌悪感、そして怒りにも似た感情がない交ぜになって胸に込み上げる。

(何だろう……この感覚は……?)

「その情報で、何かねえか？」

変な感覚は置いとく話を進める。

「……その最近の目撃例が、ちよつと引つかかるけど……メン・イン・ブラックの噂は珍しくありませんからね」

「メン・イン・ブラック？」

「いわゆる都市伝説の類です」

「都市伝説？」

「昔は伝説なり民話なり怪談なり、人間の理解を超えた怪異つてのが結構身近にあったんです。何か不思議な事が起きても「それはナニナニの作業じゃ……」とか言つて、一応納得する事が出来たんです。で

も近代化するに従って、科学的にありえないものは無いと切り捨てられてしまった訳です。辛うじて幽霊の存在は信じている人はいますけど、人を化かす狸や狐を信じる人は少ないでしょ？」

「確かに」

事実、一護は幽霊が見えていたので信じるも何も無い。

死後の世界の尸魂界にも行った事があるし。

「有るかもしれないが無いが変わっても、理解できない事、不気味な事は起こり続ける。そうになると、迷信として切って捨てた存在が形や名前を変えて現れる事になる。それが都市伝説なんです」

妖怪が出たと聞いても信じる気にはなれないが、黒尽くめの人攫いが現れると聞けば、ありえない話ではない。

でも、昔の人にしてみれば、妖怪もありえない話ではないという事だ。

信じるものや感覚の違いこそあれ、レベルは一緒という事なのだろう。

「空座町近辺だと『闇夜の男』の噂は聞くけど、これはオーソドックスな都市伝説ですね。昭和の始めに赤マントという都市伝説が生まれましたけど、雰囲気はそれに近いですね」

赤マントなら一護もたつきも聞いた事がある。

「さつき言ってたメン・イン・ブラックって何？」

「それは黒衣の男の事です。メン・イン・ブラックっていうのは少しアメリカ的な言い方です。アメリカは元々植民地で、土着の伝説や民話が少ないせいで怪異の理由を、あつちに求める傾向が強いんです」

と、言って指を上に向ける華。

「……天井？」

「……空？」

一護とたつきが上を答える。

「宇宙です。アメリカ政府は宇宙人と密約を交わしていて、その事実を知ってしまった人間を攫ったり、記憶を消したりするエージェントがいるって話。それがメン・イン・ブラックです」

「んな、バカな」

でも、妖怪も闇夜の男もメン・イン・ブラックと変わらない。

「どんなに近代化し都市化しても、そういう不思議な現象がないと、人の心はバランスが取れないという訳です。人間は怪しい事を無視する事も、そして語らずにいる事も出来ないんです。逆に語る事によって、怪しいものに説明を与え、納得しようとする。全てのものに意味があると考えたがる心理。それが現実と現実との間にある、空白を埋めようとする訳です。そうして、科学信仰に満ちた現代社会でさえ、都市伝説を生み出すんです」

この話題に関しては、何となく納得できる。

「更に言えば、この世界の全ての事象は言葉にされた段階で怪しいという本質を失うのです」

……言っている意味がよく分からない。

「つまり、この世に怪しい事なんて何も無いんです」

(飛躍してねえか……？ 何か騙されている気がしてならねえ)

「そういえば、口裂け女という都市伝説は知ってます？」

「口裂け女……知ってるけど。何か関係あるのか？」

「ありますよ。要は都市や近代というものが生み出した現象なんです。あれは整形手術に失敗して発狂した女性が、精神病院を抜け出したって話なんです。口裂け女の話が最初に発生した時期と場所は、実は特定されているんです。1978年末の岐阜県。そこから愛知や滋賀、次いで京都を始めとして、まずは西の方へと伝わっていった。そしてほぼ全国に伝わった後の79年6月、マスコミに取り上げられて、都市伝説としては決定的になったんです。まあ、それはどうでもいいんですけどね。問題はなぜ口裂け女か何です」

「どういう事だ？」

「どうして整形手術の失敗なのか？ どうして精神病院から抜け出すのか？」

確かに整形手術と精神病院の繋がりが分からない。

「この場合、精神病院というのは特殊ではありません。都市伝説のブックボックスとして、噂にはよく使われているガジェット何です。黄色い救急車とか今もよく聞くでしょ？」

何だか、脱線し始めてる気がする。

「でも黒崎さんは黄色い救急車なんて見た事あります？ 無いでしょ？」

「そういえば……ないな」

「つまり現代社会の狂気は、古代社会の化物と同じ扱いになってる訳です。分からない事があつたら精神病。そうやって恐怖に対して安全弁を働かせているんです。大衆という存在は」

確かに、そうなのかもしれない。

病院に世話になったのは、内科とか整形外科とかばかりだ。

普通に暮らしてたら、精神病や精神科というのは縁遠い存在だ。

「整形手術というのは面白い事例ですね。この都市伝説が流行つたのは78年から80年頃。つまり、その頃は整形手術がまだそんなメジャーではなかった事が関係しているんです」

「メジャーとかマイナーとかが関係あんのか？」

「精神病院と同じです。恐ろしい物、嫌な物があると、人々は未知の領域にその責任を押しつけるんです。だから整形手術の失敗というのは、まさにその時代だから成立しえたことなの」

成程。

分からないから仕方ない。

そう思ってしまった方が、精神衛生上いいって事だ。

「何となく分かったけど、口裂け女ってのは要するに何なんだ？ 何が恐くて、そんな噂が広まったんだろうな。整形手術に失敗するのは怖いだろうけどさ、それだけじゃなさそうだよな」

「良い質問ですね。それに答える前に……ところで、噂話を広めるのは誰だと思えます？」

「え？ マスコミ……か？」

「いいえ。実は噂話を広める主体は主に少女なんです。主婦なんかもその主体になりやすいんですけど、この場合は一度ワイドショーで取り上げられてからね。口裂け女の場合、マスコミで取り上げられる前に、既に全国に広がっていたから、それを伝え広めるのは主に少女達と考えられるんです。学校というコミュニティが媒介になる訳」

「それがどうかしたのか?」

「関係大有りです。恐ろしい物、嫌な物から逃避したがっていたのは、つまり少女達だったという事です」

たしかに興味が無ければ話題にはしないからな。

恐がっていた、語らずにはいられなかったのは、女の子って事になるのか。

「受験戦争の全国化、社会の情報化による性情報の氾濫、80年前後という時代はそういう時代だったの。口裂け女イコール教育ママとする説があるんです。つまり受験に対する嫌悪が形となって現れた。それから、裂けた口というのは性器に通じるといふ説もあるんです。思春期の女の子達の性への興味と不安、それが裂けた口というものに現れたという事ね。そうやって人々は不安を解消するの。噂という形で表に出して、カタルシスを得たのね。それじゃあ男の子は、どうやって不安を解消しているのでしょうか?」

「え?」

「解消出来ないの」

一護の答えを待たずに答えを言ってしまう華。

「考えてみてください。少年犯罪の激化なんて事が言われますけど、その犯人は殆どが男の子じゃない。不安を解消出来ずに内に溜めていって、そして爆発させてしまった結果、それが犯罪となってしまふ。犯罪も化物も、私たちに無縁の話じゃないんです。全ては起こるべくして起こるんです」

全ては起こるべくして起こる。

一護はそのフレーズに何か不気味なものを感じた。

「ここがポイントです。現実というのは“発生”するもの。実体じゃなくて“現象”なんです」

現実の実体じゃなくて現象?

「それは炎みたいなものなんです。炎に実体はない。火の原子なんて有る訳が無い。でも、燃える物があつて、温度が発火点に達した時、火という現象は存在を始める」

言われてみるとそうだ。

火には実体が無い。

「化物や犯罪も同じ事。それを滅ぼそうと思つたら、その根を絶つしかないんです。火を消そうと思つたら、水を掛けて酸素を遮断したり温度を下げたり、燃える条件をどうにかしないと駄目なんです。火をいくら叩いたって火は消えない。噂を否定したり犯罪者を処罰するだけでは駄目。その原因にアクセスしないと。そして原因は一つでは無いわ。いくつもの原因が複雑に絡み合つてそれは存在するんです。原因が違えば、原因の比重が少し違つただけでも、表に出る現象は違つた形を帯びてくる。例えば火のイメージというと赤があるけど、あれは炭素が燃えている色ね。木、紙……私達の周りの燃えやすいものには炭素が多いから、赤のイメージが定着しているわけ。ガスの火は赤く無いでしょ？ それから炎色反応なんていうのもあるわ。化学の授業とかで実験しなかつたかしら？」

(あれ……?)

「銅ならば青緑、ナトリウムは黄色、カリウムは赤紫……。同じ火でも燃えるものが違うとこんなに違う。因みにいうと、花火っていうのは、このメカニズムを応用したもののなんです」

(……何の話をしてたんだっけ?)

「ところで花火って日本の文化のイメージだけど、元々は日本の発明では無かつたんです。そもそもの最初は勿論火薬の発明。黒色火薬の基礎となる硝石が発見されたのが、紀元前3世紀の古代中国。それから紀元200年頃、やはり中国で黒色火薬が発明されたわ。最初は主に狼煙に使われていた。形態としては、この狼煙を花火のルートとして扱うといいかも。鑑賞用の花火としては、14世紀後半、イタリアのフィレンツェで始まったとされているんです。その後、大航海時代において全世界に伝播。日本に火薬が伝わったのは……」

*

カー、カー。

「……………はー」

カラスの声で一護の目が覚めた。

難しい話が続いていたので、思わず眠り込んでいた。

華の声は子守唄にしかならなかったが、別の物音はちゃんと聞こえた。

情報室の窓の外が赤く染まっている。

もう夕方のようだ。

華は相変わらず講釈を続けている。

フランス革命だとか立憲主義だとか、重商主義とかアメリカとか。

一護の聞きたい話とは関係ない。

そもそも一護が寝ている事さえ、華は気がついていない。

一護は陶醉している華を無視して帰る事にした。

「たつき、起きろ」

小声でたつきを起こす。

「ん〜」

目を開けるたつき。

きよろきよろと周りを見回す。

「帰るぞ」

寝ぼけ眼のたつきの手を引いて、そつと情報室を後のした。

案の定、華は気付いていないようだ。

閉められた情報室の中から、滔々と華の声が聞こえてくる。

「つまり民主主義の暴走が全体主義を生み出す訳で、民主主義を金科

玉条にするのは非常に危険な…」

未だに流れてくる華の声から逃げるように去った。

《2》

次の日の朝。

一護はすつと目が覚めた。

昨日の不快な目覚めと比べて、かなり清々しい。

「……親父は来ねえのか？」

こういう朝は大体親父が急に現れるのだが現れない。

だけど別にそれ程気にする事ではないので、いつも通り制服に着替

え、一階に下りた。

遊子が言うには明朝から親父は診察室に籠もりつきりらしい。

*

学校が終わり、放課後にて。

一護は遊子から頼まれていた買い物をする為に商店街に向かった。その商店街に向かう為に、あの公園を通った。

公園のあの場所は昨日みたいな野次馬は居ず、普通に人が通っている。

だが、変わらずテープである場所は囲われている。

ふと、近くのベンチに目をやった。

そこに一人の小学生くらいの少年が、呆然とベンチに座って前方を見据えている。

その少年を見た時、なぜか昔の自分を思い出してしまった。

昔の、母親が死んだ日の自分を見ているみたいだった。

一護はその小学生に声を掛ける事が出来ず、そのまま商店街へと向かった。

*

商店街に着くと一護は啓吾と水色に出会った。

二人共、これから空座レジャーワールドに行く途中だった。

時間に余裕があったので一護も空座レジャーワールドと一緒に行く事にした。

それから……

「くそ……ッ！」

一護は一言そう言った。

ゲーセンから出ると、既に外は夕方で6時を過ぎている。

遊子から買い物頼まれていたのにゲーセンで遊んでいたら結構ヤバい時間になっていた。

まだ、買い物は済ませていない。

一護は急いで買い物済ませそうと思った時、視界に見知った人物が目に入った。

「……あれは」

夕闇に沈み行く街。

そんな中で有沢竜貴を遠目で発見する。

高架下を通って、繁華街の外れから旧商店街へと抜けるとこだった。

「たつき……」

おかしい……。

北口の商店街は廃墟みたいなシャッター街。

(そんなところに何の用が……?)

不安に駆られる。

一護はたつきが消えた方へと走り出した。

*

高架下から旧商店街に抜ける。

旧商店街は戦後すぐの市場から、自然発生的に出来たものなので、複雑な上に道が狭い。

区域は広くないのだが、裏路地も大量にあつて迷路のようなものなのだ。

町の区画整備が進んで、商店街の南側が明るく綺麗な街に生まれ変わり、徐々にこの一面は寂れていつてしまった。

たつきが入っていったのは、旧商店街の中でも最も寂れているところだった。

ほとんどが店をたたむか、商店街の南に移動してしまい、こんな時間でも開いていない。

一護はそんな中を走って追いかける。

「うお……」

旧商店街も通りに面した場所は、まだ開いている店もちらほら有ったが、裏路地を進んだ此処は、まるで廃墟だった。

無駄に点いている蛍光灯だけが、この場所が人の通れるところだと教える。

(こんな場所に何でたつきが?)

倍増する不安を胸に、一護は奥へと進んでいく。

迷路のように入り組んだ裏路地。

所々で外に通じる道から、オレンジ色の光が差し込んでいたが、それも見えなくなった。

外が夕闇に包まれた証拠だ。

入り組んでいるとはいえ、旧商店街はそれ程広くはない。

追いつけないって事は、いつの間にかたつきは此処を抜けて、帰ってしまったのかもしれない。

「うわああつ!？」

「うおお……?」

たつきと出くわした。

「な、何で一護が此処に……?」

「俺はお前が、こんなところに入って行くのを見たから気になって追いかけてきたんだ。一体なんでこんな所にいんだよ?」

「それは……」

たつきが口籠る。

「……実はね、昨日殺された女性はうちの道場に通う子の母親だったんだ」

「何……!？」

突然の事に一護は驚いた。

そして合点がいった。

昨日、たつきがなぜ、あの場所に居たのかが。

「その子ね、昔のあんたと一緒にすぐ泣く子だったの。でも、あんたと一緒に迎えに来たお母さんの力才見ると、すぐにニコニコになんの。本当にあんたと一緒にそれが嫌だったわ。ヘラヘラしてお母さんにベツタリの甘ったれ……そのお母さんが昨日殺されたって分かった時のあの子はずーと、あそこに居るの。お母さん捜すみたいにウロウロウロウロ、疲れたらそこにしゃがみ込んで、しばらくしたら立ち上がってまたウロウロ。見てらんなかったのよ、あの時のあんたと一緒に……」

たつきのセリフに一護は自分の過去を思い出していた。

あの時、一護は一人で苦しみ、悲しみ、誰にも頼ろうとせず、全て一人で背負い込んでいた。

だが、それが一番弱いと家族に気付かされ、苦しみや悲しみを家族と共に背負い、立ち直った。

「だから、あたしがあの子からお母さんを奪った犯人を捕まえて、あの子の前で謝らせる。あたしにはそれ位しか出来ないから」

「けど、相手は殺人犯だぞ。危険過ぎるだろ」

たつきは片腕を骨折していてもインターハイで準優勝するほどの空手の達人でも、相手が悪過ぎる。

「もう、あんな姿見たくないんだよ。あたしまで悲しくなっちゃまうだろ」

「……………」

一護は昔、本当に色んな人を悲しめていたと改めて理解した。

「俺にも、その子に会わせてくれねえか？」

「え……………」

突然の一護の発言にたつきは少し驚いたようだ。

「俺ならその子の気持ち分かる。自分が間違った事をしてるって事が。だから、会わせてくれ」

「……………ああ、分かったよ」

たつきは少し微笑んで答えた。

ここまで二人が会話をした時。

「……………」

たつきの背後の闇から滲み出るように、不気味な仮面の男が姿を現した。

「あ……………」

「え……………」

黒衣の男はサバイバルナイフを振りかざす。

問答をする時間もなく、躊躇すらない。

一護はたつきの腕を掴んで引き寄せる。

そして、抱き込むようにして、刃に背を向けた。

「くっ！」

背中に焼き付くような感覚が迸る。

「い、一護ッ!？」

「たつきっ！ 走れ!!」

一護はたつきの身体を押して、狭い通路を走り出す。

汚水で濡れた地面で滑り足を取られ、放置されたゴミで転びそうになりながら、一護とたつきは走る。

一護はスピードを緩めない様にしながら振り返った。

まるで一護たちに逃げ場などが無いと言わんばかりに、ゆつくりと歩いている黒衣の男。

たとえ逃げ場がなくなるとも、今は走る事しか出来なかった。

何処をどう走ったのか分からない。

入って来たときの倍以上の距離を、進んだような気がする。

それでも一護たちは、この迷路のような廃墟から抜け出せなかった。

「ハア……ハア……」

「大丈夫か一護……!？」

一護はそれに答える事が出来ず、そのまま地面へと倒れ伏した。

「一護っ！」

背中への出血が思ったよりもひどかったらしい。

水溜りに血が混じり、あっという間に赤く染まる。

「もう……動けねえ……。たつきだけでも、逃げろ……」

「ふざけた事言ってるんじゃないよ！ あんたを見捨てれる訳ないでしょー！」

分かっていた。

たつきが一人で逃げる訳が無い事は。

「けど、身体が動かねえんだ。たつき……病院を、救急車を呼んでくれねえか……?？」

「でも、電話が……」

たつきが今、携帯電話を持っていない事は承知していた。

一護は携帯電話を持っているが、その事は黙っておく事にしたのだ。

「頼む……。俺を助けると思って、電話を掛けてきてくれ。それから人を呼んで戻ってくれればいい」

「でも……」

「大丈夫だ。行ってくれねえと、助かるものも助からなくなっちゃう。このまま、たつきが急いで行ってくれなかつたら、俺は確実に死ぬことになる」

「……」

「行けっ！」

「……分かった、絶対に戻ってくるから」

たつきは急いで走り出した。

「……ハア、ハア……」

(俺もとんだ嘘つきになっちまったな。この傷で生きて帰れる訳ねえのに……)

意識が朦朧としてくる。

徐々に視界が暗くなる。

一人で死ぬ事を覚悟して、たつきを行かせたのに、目前に迫った死に一護は恐れおののく。

死にたくねえな……。

ぴしやり……ぴしやり……

汚水の水溜りを踏みながら、ゆっくりとやってくる黒衣の男。

「……」

「おおおおおおおお!!」

シャッターに指をかけ、手だけで体重を支えるようにして立ち上がる。

人一人しか通れない程の狭い通路。

こうすれば、今の一護でも邪魔ぐらいは出来る。

「……」

無言でナイフを一護の喉に目掛けて突き刺す。

「ぐ……」

貫通しそうなほどに、黒い刃が喉を抉る。

そして一護を引き倒した。

「ぐあああッ!!」

一護は男の足にしがみつく。

死んでも放さないように、抱きつくようにしがみつく。

何度となく振り下ろされるナイフ。

「……あ、が……」

どれくらいの間稼ぎになるか分からないが、こうしてこいつを血塗れにしまえば、そう簡単に表には出られないだろう。

もう、たつきは路地から抜け出せたかな…

降り注ぐ激痛と死の刃の下、たつきを逃がす事が出来た安堵を感じ、一護は眠りについた。

……全てが闇に堕ちる。

——一護の世界が消えた。

《3》

………

「……………ッ!!」

一護は飛び起きるように、上体を起こす。

全身からべとつく汗が滲み出している。

(……夢を、見ていた……ような気がする。とても、嫌な夢を……)

内容は欠片ほども憶えていないが身体に残る不快感が、悪夢に魘されていた事を物語っている。

「う……!?!」

突然、ズンツと重い感覚が胸を走る。

それと同時に視界がホワイトアウトし、強烈な眩暈が走った。

「……」

じつとしていると、じんわりと視界が戻ってくる。

軽い頭痛もするし、寝起きのダルさと相まって、気分が悪い事この上ない。

一護はこめかみを指で揉みながら、溜め息をついた。

「……………!?!」

——その刹那、手が「消えた」ように見えた。

ほんの一瞬だったが、一護の目には確かにそう見えたのだ。

「……………はっ、まさかな」

眩暈の直後だったから、視界がおかしくなったただけだ。
「そうに、決まってる」

一護は深呼吸をして気分を入れ替えた。

(省略)

*

……放課後。

一護は教室に待っているようにと井上に言われ、放課後の生徒が一人もいなくなった教室にいる。

何故かは分からない。

井上から噂話を聞くと、もつと詳しい人を知ってるから待っててと、言われ教室に待機している。

「何だ、さつきから変な意味で嫌な予感がする」

この予感は……今までの不快な感じの予感とは違う。

どちらかというと、面倒な感じの予感。

面倒な感じの予感……？ ちよつと意味が分からない。

「まあ、会ってみりゃ分かるか」

一護が一言そう呟くと、井上と一人の女子生徒が教室に入ってきた。

赤い髪に黄色いリボンにツインテールの、あまり見かけない生徒だ。

一護がその生徒を見ると少し目を丸くする。

「黒崎くん、待たせちゃってゴメンね。この子が噂話とかに詳しい生徒なの」

「華断と言います。黒崎さんの事は井上さんから色々聞かせてもらっています」

色々……？

一体何を聞かせたんだ井上は。

「会えて嬉しいです」

そう言つて、華は手を差し出してきた。

「お、おう。俺も会えて嬉しいよ」

一護も手を出し、握手を交わした。

(……こいつ、やっぱ何処かで会った気がするな)

一護は不思議とそう思った。

「では黒崎さん。私に聞きたい事とは何ですか？」

早速、華断が本題に入った。

「ああ。じゃあ、聞け。公園で起きた殺人事件の事を知ってるだろ

？」

「勿論ですよ」

まあ、今日のホームルームでも言われたから知らない方がおかしい。

「あの事件についてなんだけど、精神病院から脱走したやつがいて、そいつが通り魔の正体なんじゃないかって。そういう噂があるらしいけど、何か詳しい事しらねえか？」

「精神病院から脱走？ そいつが通り魔の正体？ これだから素人は……。明治大正の頃なら、いざ知らず、現代人がこの有様だなんて……。精神病院が都市のブラックボックスに成り易いのは分かるけど、そんな典型的な差別意識で見ても駄目です」

「別に差別してる訳じゃねえけど……」

「日本の制度だと、犯歴がある精神患者とそれ以外の患者を区別しないから、同じ扱いになつてしまう……。だからいつまで経つても、こういう偏見がなくなるのかもしれない」

「偏見……」

ふと、井上を見る。

既に話についてこれていない様子だ。

「でも最近は凶悪な犯罪を犯しても精神鑑定で、罪が軽くなるやつが多いだろ。憲法何条か忘れたけど」

「憲法じゃなくて刑法ですよ、それは。刑法三十九条。心神喪失者の行為は、罰しない。心神耗弱者の行為は、その刑を軽減する」

事もなげにそらんじる。

(すげえ……)

一護はそう思った。

「そう、それだよ。もしかしたら空座町の病院に、そういうやつが入っていたかもしれねえだろ?」

「それはありません」

否定された。

「黒崎さんが言っている病院っていうのは、町境の空座第三病院の事でしょう?」

「ん? 名前まで知らないけど、町境のそれ」

町境の街道に抜ける方角に、大きな精神病院があると聞いている。

実際に行った事はないが、その方角には大きな火葬場と墓地があるため、精神病院の印象も強かったのだ。

「世間を騒がせるような事件なら大体知っていますけど、あの病院の精神病棟に入院したって話は聞かない。それにあの病院から脱走した人がいたら、少なからず噂を耳にするはずだもの。無いです、それは」

「何で言い切れんだよ?」

「この私が知らないからです」

……何だか分かんないけど、凄い自信だ。

「それに、猟奇殺人から精神病院なんかをイメージするのは、映画やドラマの悪影響を受けすぎです。典型的思考ってやつです。普通の人が、未だに精神病院に負のイメージを持ってしまうのは、分からなくも無いのです。実際、精神病院の歴史を紐解けば、目を覆うような陰惨な事実は沢山ありますし、特に町境の空座第三病院は、そういう噂が絶えない場所でしたし」

「やっぱり?」

「元々は空座癲狂院と呼ばれていて、かなり早いうちに建設された精神病院の一つだったんです。多分に漏れず、近代的な医療技術と法制

度が整備されるまでは、その時代なりの酷さはあつたらしいけど…それに独逸ドイツの療養院を模倣して作られた石造りの施設だったから、みんな不気味がつて近づこうとしなかつたらしいです」
「だった？」

「十数年前に取り壊されているんです。老朽化のために、ずっと廃墟でしたし。今は総合病院の別院になっていて、長期療養も可能な綺麗な施設に変わっている。過去のイメージで悪く言うのはいけませんよ」

「あ、ああ……。でも、いくら施設が良くても、殺人狂みたいな奴が入ってた可能性は少しぐらいあるだろ？」

「その考え方自体がナンセンスです。例えば、人を傷つけたり、殺してしまうような凶暴性を持った異常者がいたとするでしょ。その人の場合、自分をコントロール出来ないが故に、簡単に捕まってしまう。警察の捜査能力が高い国で、異常な犯罪を続けるには、それなりに高い知性が必要になってくるんです。心神を喪失している人間には、ちよつと無理な話です」

映画に出てくるような頭のいいサイコ野郎は、フィクションの中の存在でしかないのかな。

もし実在していても、こんな場所にはいないって事か。

「というわけで、精神病院と猟奇殺人を繋げる思考っていうのは、実際は無理が大きいって訳です。その考えでいくと、別に病院じゃなくたって、どこに殺人鬼がいようと同じでしょう？ それに、私の情報以前の問題として、そういう事実があるなら、真つ先に警察が動くはずでしょう？ 私はともかく、黒崎さんや井上さんが知っている噂なら、警察だって知っていますよ」

「それは俺も、薄々気付いていたけど……」

何だか一護には反論の余地がないくらいに、言い包められてしまった。

でも、華の言うことに真を受けていいのかと思う。

……ん？

ちよつと待てよ。

「あのさ、異常な犯罪を続けるって言わなかった？」

「言いましたけど」

「今回の事件以外にも、こんな事が起こっていたって言うのか？」

「うーん……警察が正式に発表した訳じゃありませんから、憶測の域を出ていないけど、今回の事件は連続した殺人の一つかもしれないです」

「!?」

「空座町だけでみたら、こんな大事件は他にありませんけど、視野を近隣の県まで広げると、似たような事件が起こっているんです。間隔や距離もまちまちで、繋がった事件としては報道されていないけど、平均から考えたら数が多いすぎます。その筋の人間には結構有名な話だし、公表はしていないけど、警察もその線で動いていると思います」

「そうだったのか……」

本当に自分は何も知らなかったんだなと……少し打ちのめされた気分になってきた。

「そういえば、口裂け女という都市伝説は知ってます？」

「口裂け女……知ってるけど。何か関係あるのか？」

何だろ、嫌な予感がしてきた。

前にも似たような事があったような……。

この後、一護は口裂け女の話から、何故か花火や政治等、色んな話に移って、寝てしまった。

予感であたっていたのだった。

*

カー、カー。

「……はー」

カラスの声で一護の目が覚めた。

難しい話が続いていたので、思わず眠り込んでいた。

華の声は子守唄にしかならなかったが、別の物音はちゃんと聞こえた。

教室の窓の外が赤く染まっている。

もう夕方の方だ。

華は相変わらず講釈を続けている。

フランス革命だとか立憲主義だとか、重商主義とかアメリカとか。

一護の聞きたい話とは関係ない。

そもそも一護が寝ている事さえ、華は気がついていない。

一護は陶酔している華を無視して、帰る事にした。

「おーい、井上」

小声で井上を起こす。

「ん？ むう？ もう食べられないよう〜」

マ、マジですか……。

そんなベタな寝言が聞けるとは思ってもみなかった。

「井上。起きろ〜」

「ん……」

目を開ける井上。

きよろきよろと周りを見回す。

「帰るぞ」

「ん、帰る……」

寝ぼけ眼の井上の手を引いて、そつと教室を後にした。

案の定、華は気付いていないようだ。

閉められた教室の中から、滔々と華の声が聞こえてくる。

「つまり民主主義の暴走が全体主義を生み出す訳で、民主主義を金科玉条にするのは非常に危険な……」

未だに流れてくる華の声から逃げるように去った。

*

——夕暮れの中、一護と井上は二人で並びながらゆつくりと帰り道を歩いている。

「……本当に強烈な奴だったな」

帰り道、華の話を振った。

「すごいよねえ、華ちゃん。難しい事も一杯知ってるし、行動力もあるし。私、尊敬しちゃうなあ」

「尊敬に値するか……？」

博識なのは分かるけど、聞いていないような無駄知識を言い立てられると、最初に何を聞きたかったのか忘れてしまう。

行動力はあるのかもしれないけど、それは思いついた事をすぐ実行するっていう、集中力のなさの現れなんじゃないだろうか。

「まあ、今日はためになつた話は聞けたから結果はよしだな」

「そうだね。……あ、じゃあね、黒崎くん」

いつの間にか、互いの家の分岐点まで来ていた。

そこで井上と別れる。

「おう、また明日な、井上」

一護はそういい、足早に帰る。

……家の直ぐそこまで行くと、遊子と夏梨が家の前に出ていた。

「お兄ちゃん、帰ってくるの遅いよぉ〜！」

どうやら、帰りが遅くて心配していたらしい。

いつもなら心配などしないが、朝の事もあつて心配していたのであろう。

本当に心配性の妹達だ。

人の事はいえないけど。

——ふと、沈みゆく夕陽を見つめる。

違和感に包まれた不快な朝。

殺人事件に駆り立てられた一日。

それが終わろうとする今、心がこんなにも安らぎに満ちているのは、何故だろう……。

その答えは明白だった。

どこかにズレていきそうだった一護を、日常に引き戻してくれた存在。

友達や家族。

友達や家族がいるから……。

「!?……家族？」

何だ……？

「う……」

脳髓を這いずる不快感。

「げ……」

喉の奥が焼けるように熱い。

だが、吐き出すものは何もなく、喉と胃に引き絞られるような苦しみだけが残った。

一護は唾を吐き捨てる。

「な、何だ……今のは……」

自分の頭の中から生まれたとは思えないような、陰惨なイメージ。生臭い瘴気が嗅ぎとれる程の、圧倒的なイメージ。

何で家族の事を考えている時に、あんなものを想像してしまったんだ……？

「気にする、必要なんてねえよな……」

一護はそう言い聞かし、自宅に着いた。

《4》

家に入ると既に晩飯の準備が出来ていた。

だが、その晩飯に少し疑問を抱く。

三人分しか準備されていない。

そう、親父の分が無いのだ。

「遊子、親父の分はどうしたんだよ？」

「何か、今日急な用事があるとかでどこかに出掛けて、明日の夜には帰ってくるらしいの」

どこかって……。

何で用事も何も言わずに出て行ってんだ。

そして今日三人はうるさい親父抜きで晩飯を取った。

*

一護は診療室にやって来た。

黒崎家は一心が開業した、クロサキ医院という病院と併設して建っている。

一心はああ見えても医者で、大きな手術以外のことは大抵こなす人物だ。

「たしか精神関係の本は……」

一護が診療室に来た理由は精神関係の本を探すため。
今日、華に精神病院の事を聞かされた事もあるが、今日の朝から妙な不快感に襲われている。

その事について一護は精神的なものだと思っている。
その為に医療関係の書物が沢山ある診療室に来ているのだ。

「んくと……」

本棚にギツシリ並べられた医療関係の本。

一護は一冊一冊の背表紙を見ながら、精神関係を探している。

……ふと、床を見た。

そこには一滴の赤い雫が付いていた。

「何だ……？」

よく見ると一滴ではなかった。

その赤い雫が診療室にあるベットの下の方まで間隔をおいて付いていた。

一護はベットの下のぞき見る。

「あれ……」

ベットの下に箱のような物がある。

ギリギリ手の届く位置にあるそれを……

一護はひっぱり出した。

「……何だよ、これ」

一瞬、目を疑う。

ところどころ赤黒く変色している——救急箱。

それは明らかに古い血がこびり付いていた。

いや……ここは病院。

何か、理由があつての事だ。

だが見れば見るほど、それが普通の救急箱ではない事が分かる。

血のりで錆付いたメス……。

それが五本以上入っている。

(メスがこんなに入った救急箱なんてあんのかよ……?)

しかも臭気が漂うほどに、血がこびり付いている。

中には刃に脂が付いている物まで……。

思わず吐き気を催す。

(この木の棒は……杭?)

杭……?

木の棒を削って作った太い杭が、何故、メスと一緒に入っている……?

そして……一番目立っていたのに、目に入れようとしなかったそれ。

それは――

血が付いた大型の――サバイバルナイフだった。

「う……」

吐きそうになったが、手で口を抑え、吐気を止める。

そのサバイバルナイフを見ているだけで、正気を失いそうになる。とてつもない不快感。

一護は救急箱をベツトの下にしまい、立ち上がる。

少し、足が震える。

「何だよあれ……!? 一体、親父は何を……?」

考えても、答えには全く至らない。

至るはずが無い。

一護は精神関係の本を探すのを止め、診療室から出て行った。

答えを知るには親父に直接聞くしかない。

そう思ったのだ。

*

次の日、遊子の言った通り親父は帰ってこなかった。

だが、今日の夜に帰ってくる。

その時にあの救急箱の事を問いかける。

今日はそんな事で授業に全く集中できなかった。

「気晴らしに商店街にでも行くか」

放課後になっていたので一護は席から立ち、足早に商店街に向かった。

*

商店街にやって来た。

今、ゲーセン、空座レジャーワールドが一段と賑わっている。

ある2D対戦格闘ゲームが全国大会前って事もあって、皆集まっているのだろう。

一護も久し振りに行くのかなと思っただが止めた。

今はあんな騒がしいところには行きたくなかったからだ。

……と、誰かが自分の前に建つショッピングモールから大量の買い物袋を持って出てきた。

空座一校の女子の制服を着ている。

恐らく、学校帰りにバカ買いたのだろう。

買い物袋を持っていて両手が震えている。

どれだけ買ったのだろうか。

「……ん」

よく見ると見知った人物だった。

赤い髪に黄色いリボンにツインテールの女生徒。

華断だ。

華が大量の買い物袋を頑張って持ちながら、重い足取りで歩いている。

今にも買い物袋を落としてしやがみ込みそうな勢いだ。

「……たく、しゃあねえな」

見ていられなかつたので、一護は華を助ける事にした。

「大丈夫か、華？」

「あ、黒崎さん。大丈夫と聞かれたら、大丈夫ではありません……」

息遣いが荒い。

もう無理だろう。

一護は片手を華に差し出す。

「ほら、持つの手伝ってやるよ」

「……あ、ありがとうございます」

華は一言礼を言い、買い物袋を渡した。

買い物袋を受け取った一護はその重さに少し驚いた。

……かなり重い。

買い物袋の中には色々とかかが入っているが、余計な詮索は止め

た。

「何で、こんなに一気に大量買いなんてしたんだ？」

「欲しい物が沢山あったので、まとめ買いしたら予想以上に凄い量になってしまったんです」

後先考えずにいたんだな。

「仕方ねえな。家まで運んでやるよ」

「え、いや、悪いですよ。そんなの」

「昨日の礼だ。気にすんな」

昨日は何やかんやで華には世話になった。

だから、その礼をするのだ。

「……昨日の事ですが、黒崎さん、昨日はごめんなさい」

突然の華の謝罪に、一護は少し驚く。

「私って一度何かについて話したら止まらなくなって、話が逸れてしまう事が多々あるんですよ。それで昨日、黒崎さんに聞いてもいないような無駄な事ばつか言っただじやないですか。だから……」

どうやら自分で自覚はしていたようだ。

「こつちもお前に何も言わずに帰って悪かったな」

一護も謝る。

昨日は華に何も言わずに黙って帰ってしまった。

その事について詫びた。

「いえ、そもそもの原因は私ですから」

「いや原因は俺の方にあるって。俺が井上にあんな話をしたから……」

「でも、それを私が承知しましたから……」

と、いう面倒な会話をしながら、華の家に向かった。

*

一護と華はマンションに来た。

此処が華の住居。

大きくもなければ、小さくもない。

何処にでもある普通のマンションだ。

中に入ると、真っ先に目に入ったのはエレベーターの前に置かれた

黄色い立て看板だった。

看板にはエレベーター故障中と書かれてある。

「マジかよ」

二人は重い買い物袋を持ちながら、長い階段を上がった。

*

華の部屋の中に到着すると、買い物袋をテーブルの上に置く。

華は現在一人暮らしをしている。

理由までは聞いていないが、一人暮らしをするには少し広すぎる住まいだ。

「……6時30分前か」

一護は部屋の時計を見て言った。

此処に来るまでに結構時間が掛かってしまった。

まあ、あんな重い買い物袋を二人で持って、数km歩いてきたのだ。しかも華は女。

歩く速さは一護と比べて遅いし、買い物袋を持つ力も一護の方があ

る。遅くなって仕方ない。

「んじゃ、俺はこれで帰るな」

「えっあっ、あの……黒崎さん。一緒に……」

「……何だよ?」

「一緒に、この映画を見てくれませんか?」

と言って、DVDのパッケージを見せてきた。

パッケージにハロウィーンの悪夢3と書かれてある。

ハロウィーンの悪夢3といえばスプラッタホラーのシリーズ最新作だ。

一護はこの作品を知っているし、シリーズ的に1と2も見ている。今作は今までのシリーズとは、ちよつと違う展開があるらしくて、見てみたいとは思っていた。

「少し怖くて、一人ではあまり見たくないんですよ。いいですか?」

「……まあ、いいけど」

少し悩んだ末、OKした。

どうせ、明日は学校は休みだし、断る理由は無
遊子や夏梨も一護が一日居ない事には慣れてい
るだろうし。
多分……。

「じゃあ、私の部屋に来てください。リビングのテレビは少し小さいので……」

そういつて、一護は華の部屋に向かった。

華の部屋には家族が居間に置くような大きいテレビ（37インチ）があった。

そして、華は部屋の電気を消した。

7時前だが冬は夜が早いので、もう真っ暗だ。

「それでは再生っと」

華はDVDを再生した。

*

約2時間で映画が終わった。

部屋の電気を点ける。

今作はストーリーらしいストーリーは無かったが、恐怖シーンとスプラッタシーンは前作よりかなり上がっていた。

たたみかけるような勢いで展開される恐怖シーン等がこの映画のウリ。

試写会の時に、恐くてマジ泣きしちゃった女の子がいた、なんてエピソードがあるほどだ。

「悪くは無かったな」

「うん。けど、ストーリーはちよつと微妙だったね」

「ああ」

ストーリーは無いに等しかった。

そこだけは次回作に期待だ。

——その時、激しい金属音が響き渡った。

「な……」

プツンと電灯が落ちた。

「きゃ……」

華が小さい悲鳴を上げる。

(……この不快で悪寒に満ちた感覚を、俺は知っている……?)
状況を確かめるために、一護は床から立ち上がるうとした。

「黒崎さん……」

華が怯え、腕を掴んだ。

「……華、心配すん——」

華にそう言い切らないうちに、部屋のドアが音もなく開いた。

「な……」

まるでそれが当然のように、黒装束の男が部屋へと入ってくる。

長身の男だが、足音すら立てず、風にたなびく布のような自然な歩みで近づいてくる。

あまりにも異常過ぎて、一瞬、それを危険だと気付けなかった。

鉈のようなサバイバルナイフを目視する。

それが何の予備動作もなく、スツと華に向けて突き出された。

「……!」

一護は無意識のうちに華を庇う。

ブツンと音を立て、刃が一護の腕を貫いた。

鮮血が迸り、華の顔を真っ赤に染める。

「ぐああ……!」

「きゃああああああああああ!!」

華の悲鳴と共に、一護の腕に雷撃のような激痛が湧き上がる。

「フンッ」

黒衣の男は、そのまま裏拳で一護の頬を殴りつけた。

「ぐ……っ!」

床に倒れる。

その勢いで引き抜かれるサバイバルナイフ。

だくだくと流れる血を止める事が出来ない。

「ひ……嫌……イヤアアアアアアッ!!」

華の上に乗るかかると黒衣の男。

「テメエエエー!」

男を羽交い絞めにしようと、飛びかかったその時、振り向きざまにナイフが振るわれる。

「ガ……」

真一文字に振るわれた漆黒の刃。
顔を覆う激痛と共に、光が失われる。

「――目が……ッ！」

何かに足を取られ転ぶ。

真なる闇の中でもがく。

「は、華あああッ!!」

「黒崎さん……!」

声のする方に手を伸ばす。

同時に激痛が襲った。

「ぐああッ!」

手首を棒で殴られたような衝撃が走り抜ける。

だが、それは棒ではなく、あのナイフ。

手首がパツクリと開き、肉が空気に曝されたのが分かった。

パタパタと一護の顔に降る温かい雨。

それは水などではなく、一護の血液。

「や、やめてえええええッ!!」

ドンツと腹部に鈍い衝撃。

押し潰されるような苦痛。

腹を貫く鋭角の痛み。

(何をされた……?)

下半身の感覚が痛みの泥に沈み、消えてしまう。

(腹を……刺された?)

「く……ん、んぐっ……」

声を上げようとした華。

それを封じられたのが分かった。

「あの男はもうじき死ぬ……」

「な……っ!?! げふ……」

「あんな男の事は気にせず、私の事を愉しませてくれよ」

下卑た言葉を華に吐く。

一護は立ち上がろうと、身体を動かす。

「げ……」

腹に刺さった異物に固定されて、身体が動かない。

腹の肉が裂けた感触。

あまりの激痛に頭を床に打ち付けて悶える。

「は、華ああ……」

腹のナイフに手を伸ばすが、指に全く力が入らない。

辛うじて握っても、血液で滑って、うまく引き抜けない。

まるで解剖される蛙のように、一護は床に釘付けられてしまっている。

その瞬間、ドンッと鈍い音。

「んんぐー……っ!!」

悲鳴。

手で封じられている絶叫。

再び、ドンツという鈍い音。

「い、きやあああああつ!!」

金切り声に近い絶叫が部屋に木霊する。

「は……がはっ、は……はなあ……」

口の中に溢れ返る血を吐き出しながら、華の名を呼ぶ。

一護の身体に充満する死の鈍痛が、意識を不明瞭にしていく。

華の悲鳴にすら、指一本動かせない。

「美しい、聖性すら感じるぞ……」

「あつ……あ……」

痙攣するような声を上げる華。

ショックで正気を失っているみたいだ。

「人が磔刑にかけられた姿は、この世で一番美しいと思わないか？」

磔刑……？

「両手に杭を打たれた感想は……？」

(なん、だと……？)

ショック状態の華は、勿論答える事など出来ない。

「美しい身体だ。よい供物になりそうだ。だが、命尽きるまでは、この身体で愉しませてもらうとしようか」

繰り返す切り裂き音と悲鳴。

「裂いた腸の中の温かさは……膾などとは比べ物にならない……」

ヌチャヌチャと粘性の液体音が聞こえる。

「見てみる。綺麗な色をした腸だぞ」

「ひ、ん……ん……」

力ない悲鳴。

聴覚と苦痛のみが全てになっている一護には、気が狂いそうなほどに不快な音。

「くくくく……」

「あ、ああ……」

一護は何度も何度も、腹に突き刺さっているナイフを取ろうとする。

「くくくく……このまま、お前の腹を解剖し、生きたまま内臓全てを晒そうか」

「んえ……い、いやああああ!!!」

「……チツ」

「んぶ……」

華の悲鳴が、泡立つような音と共に消える。

(何を、した……?)

「女の悲鳴は好きなんだが……。場所が場所だ。あまり騒がれても困るんだよ。もう少し生きたままを愉しみたかったんだが、仕方あるまい」

「ぎ……ぎぎまああああああ!!」

ナイフを握り締める。

脳を焼き尽くすような憎悪のお陰で、ナイフを掴む握力を得る。

ゴリゴリと擦り切るような刃の音。

引き抜く。

ナイフを手を立ち上がろうとする。

「おおおおおおおお!!!」

「貴様も黙れ……『黒崎一護』」

何か大きな丸い物を投げつけられた。

立ち上がるのがやっとだった一護は、そのまま倒れ込んでしまう。

(何だ、これは……?)

球状のものを撫でる。

沢山の糸状のものが指に絡む。

「……………」

沢山の凹凸……。

濡れた断面から血が滴っている。

(まさか……)

藻のように指に絡むのは、血に濡れた髪……。

動かすと開くこれは顎で……この硬いのは歯、口……?

(じゃあ、この突起は鼻……?)

濡れた穴に指が滑り込む。

ぐちゃり……と眼球を潰してしまった。

(これは、華の首だ)

そうか……華は殺されてしまったのか。

「……あ、ああ」

一護の中から全ての力が揮発した。

身体を動かす力も。

意識を保とうとする力も。

「……………」

黒衣の男が歩み寄ってくるのが分かった。

その刹那、一護にある考えが浮かんだ。

あのサバイバルナイフに一護の名を知っていた。

(まさか……親父……?)

親父の診療室にも同じようなサバイバルナイフがあった。

そして、親父は昨日から家にいない。

何より、証拠づけるのは名乗ってもいない一護の名を知っている事だ。

だが、もう遅い。

一護から華の首を奪い取ると、代わりとばかりに硬い刃を降らせた。

喉、胸、頬、額、眼窩。

激痛と死が降り注ぐ。

が、まるでこの絶望を終わらせてくれる、慈悲の刃のようにも思えた。

「『また会おう』 黒崎一護」

最後に男が何かを喋った。

だが、一護には聞き取れない。

顔の中心に死が突き立てられた。

一護の命が死に向かってめくれ返る。

——全てが闇に堕ちる。

……一護の世界が消えた。

第29斬【伍の絶望と最後の光】

《1》

.....

「.....ッ!!」

一護は飛び起きるように、上体を起こす。

同時に、全身からべとつく汗が滲み出しているのに気づいた。

(夢を、見ていた.....:ような気がする。とても、嫌な夢を.....)

内容は欠片ほども憶えていないが身体に残る不快感が、悪夢に魘されていた事を物語っている。

「う.....!?!」

突然、ズンツと重い感覚が胸を走る。

それと同時に視界がホワイトアウトする。

強烈な眩暈が走った。

「.....」

じつとしていると、じんわりと視界が戻ってくる。

軽い頭痛もするし、寝起きのダルさと相まって、気分が悪い事この上ない。

一護はこめかみを指で揉みながら、溜め息をついた。

「.....!?!」

一瞬.....手が“消えた”ように見えた。

ほんの一瞬だったが、一護の目には確かにそう見えた。

「...はっ、まさかな」

——眩暈の直後だったから、視界がおかしくなったただけだ。

「そうに、決まってる」

一護は深呼吸をして気分を入れ替えた。

(省略)

*

——放課後、一護と啓吾が職員室に呼び出された。

二人を呼び出したのは、担任の越智美諭だ。

呼び出された理由は、この前のテスト結果の事だ。

啓吾はこの前のテストで、クラスでドベ赤点をくらい、一護は最近のテストの点数が急激に落ちている事を指摘された。

結果、これを踏まえた上、二人共明日の放課後に補習をするはめになった。

それを聞いた啓吾は、明らかガツカリした表情で帰宅していた。

一護は一旦教室に戻り、机の中にある教材を取りに戻った。こういう日は今までの復習をして、少しでも学力向上に励むためだ。

そんな思いを胸に一護が教室に入ると、人影が二つあった。

一つは井上織姫。

もう一つは、赤い髪に黄色いリボンにツインテールの女子生徒だ。

「あ、黒崎くん」

「おう」

「え、この人が井上さんの言っていた黒崎一護さんですか？」

女子生徒が一護を見るなり、そういつてきた。

言葉から察するに、井上が一護の事をこの生徒に色々と話していたのだろう。

「あんたは？」

「あ、私は華断といいます」

華断……。

なぜだろう？

その名を聞いて、なぜか少し心が安堵している。初めて聞く名のはずなのに……。

「華断、か。で、二人は何してんだこんな所で？」

「ほら、黒崎くん。公園の事件の事を知りたがってたでしょ。華ちゃん、事件とか犯罪とか、そういうのに詳しいから、紹介しようと思つて」

「そうだったのか」

(つうか、俺が教室に戻ってくる事を先読みしてたのか?)

この事に対し、少し驚いた一護。

「私は皆さんと違ってヒマヒマ人ですから、何でも教えて上げれます。本当のエリートは有閑階級ともいいますし。と言っても今日は少し見たいテレビがありました、予約録画をセットするの忘れて来ましたから、小一時間で済ませていただけたら嬉しいです」

「ああ……そんなに時間はかからないと思う」

いつの間にか、華に聞く事になってしまった。

「公園で起きた殺人事件の事を知ってるだろう?」

「勿論ですよ」

一護は単刀直入に話を振る事にした。

「あの事件についてなんだけど、精神病院から脱走したやつがいて、そいつが通り魔の正体なんじゃないかって。それから、これも気になる噂なんだが、夕暮れ時に全身黒尽くめの男が現れて、こつちを見るって噂があるんだ」

「最近見た人の話だと、変な仮面みたいなのを付けてたって言うの」

「何か知らねえか?」

聞きたい事を全部言っただけ。

「何か知らないか? っって言われても。噂の種類としてはどちらもありふれているから、それだけじゃ何も分かりませんね」

「ありふれてる?」

「そうです。まず最初の噂の方の話ですけど、精神病院から脱走なんて、通り魔の犯人としてはよく噂になるものです」

「そうなのか?」

「聞きますけど、精神病や精神病院について、黒崎さんはどのくらいの知識を持っています?」

「え、どのくらいって……」

言われてみて気が付いた。

こういった噂によるイメージ以外に、一護は何の知識も持っていない。

「精神疾患の定義は？ 精神病と神経症の違いは分かります？ 精神科医と臨床心理士の違いは？」

「分から、ない……」

「やっぱり知りませんか。最もそれは黒崎さんに限った事ではありませんけどね。一般の人たちにとって、精神病っていうのはブラックボックスなのです。理解できないもの、恐ろしいもの、見たくないもの、そういったものに対する責任を、未知の領域に押し込めている訳です。昔はそれを担当するのは怪異譚だった。例えばひよっこり女の子いなくなつた。人々は神隠しだと恐れた。ある日、きこりが山に行くと、神隠しにあつた女の子の成長した姿があつて、子供を連れてくるのを見た。そこで、きこりは山男に攫われたんだと考えた。よくあるタイプの昔話です。でもこれを現代風に解釈したらどうなるかな？ 山に住む少女趣味者が女の子を誘拐し、子供を産ませて強制的に結婚した。そうなるのが筋でしょ」

言われてみれば、そう考えられなくもない。

「確かにその方が現実的だな……」

「現代に生きる私たちにとってはね」

昔の人間にとってはそうではないと言う事か。

「子供がいなくなつて戻つてこない、そんな悲しい事実からはみんな目を背けたい。だから昔の人々は神隠しとして処理したんです。子供が略奪されて強制的に妊娠させられた。これも見たくない事実としては同じ。だから山男というフィクションを作るの。何か不幸があつた時には、自分たちの手に負えないモノによつて起こつた、そう考える事で納得したがるんですよ人間は。その為のフィクションを、長い長い時間をかけて作ってきたの。それが神だつたり妖怪だつたりするんです。でも現代では神も妖怪もいなくなつて、そういった部分を担当してくれるモノが減つた。そこで精神病が召喚されてくるんです。普通の人々は精神病について知らないから、それをフィクションとして扱ってしまうの」

……成程。

よく知らないものなら、どう解釈しようと納得できてしまう。

「最初の話につながりますが、全身黒尽くめの男だつてその典型ですよ。これはメン・イン・ブラックという形で、特にアメリカで有名な類型ですけど。アメリカの場合は歴史が新しいから、日本で言う神とか…これは向こうでは妖精かな、それから妖怪とかは、最初から機能していないの。だから彼らはブラックボックスにこれを選ぶんです」

そう言つて華は指を上に向けた。

「……天井？」

「……お空？」

一護と井上が上を答える。

「宇宙です。アメリカでは科学技術も発達しているし、近代的な政治機構のイメージもありますからね。アメリカ政府は宇宙人と密約を交わしていて、その事実を知ってしまった人間を攫ったり、記憶を消したりするエージェントがいるって話。彼らは黒いスーツに身を包んでいるのが典型です。それがアメリカにおける神隠しであり、妖怪にあたるモノなの」

「宇宙人って、そんなまさか……」

いる訳が無いだろう。

「それはまさしく偏見です。アメリカは精神医学に対しては常識がある国だから、精神病院から脱走した通り魔なんて聞けば、まさかと思われるのは私たちかもしれない」

「そんなものなのか……」

つまりアメリカ人と一護たちの現実感覚が、まったく違うわけだ。「だったら、噂からだけじゃ今回の事件については、何も分からないんじゃないかねえのか？」

「ですから最初からそう言っているではありませんか」

バツサリ切り捨てられてしまった。

「まず精神病院云々っていうのは、先程も言ったようによくある話だから論外です。黒衣の男については、かろうじて何か手掛かりになる可能性もあるけど、そこまで噂になっているなら警察も知っています。警察は基本的に人海戦術なんです。噂についてだったら、私たち

以上に詳しい事を知ってるはずです。もし本当に脱走した精神病患者の記録があるなら、当然それを掴んでいるはずだし、だとしたら氏名や容貌まで分かっているはず。安楽椅子探偵（アームチェア・ディテクティブ）を気取るなんて無茶です。現実はそんなに甘くないの」「そんなつもりはねえけど。何か、俺たちに出来る事はないかなって思ってたよ」

「ありますよ」

「あるのか？」

「警察の邪魔をしない事です。根拠のない噂を広めない事。捜査協力は惜しまない事」

「そうか……」

結局、一護に出来る事は何も無いのだろう。

「ところで精神病院と妖怪っていうのは、意外なところでつながっているんですよ？」

「え？」

「先程も言った通り、妖怪というのはあくまで現象であって、それを構成する科学的な事実が存在するんです。たとえば憑き物という現象。狐憑きとか犬神憑きというのは本当に存在するんです」

「まさか」

「そう思うでしょうね。でもそれは、狐憑きが存在するという事と、憑く狐が存在するという事を、混同しているだけなんです。憑き物は科学的に言うとなり離れ性障害、多重人格とか記憶喪失とかの組み合わせで起こるの。狐が人に憑くんじやないのよ。人が憑かれた“ふり”をする訳。勿論本人にその自覚はないけど。そしてそれを共同体も認めるの。だから狐憑きは本当にあったんです。狐を現象として見てしまえば、それもいたの」

「はあ、成程な。しかし何でまたそんな現象が起こるんだ？」

「原因は一つではないでしょうね。様々なケースの解決法として発達したものなんです。例えばこんな例が考えられます。ある男が悪さをしてしまったとする。彼には罪悪感もあつたけれども、それを告白する勇氣はない。そして昔の話だから、外からやってきて罪を追求し

てくれる警察もいない。客観的な罰を与える裁判所もない。そこで憑き物の出番なんです。その男に狐が憑いて、つまりは多重人格を発症して、暴れ回る。そこで彼はみんなを集めて狐の人格は言うわけ。「この男はこれこれこういう悪事を働いた。そこで罰として俺はこの男に憑いたのだが、これこれこうすれば許してやろう」って。お狐様の言う事だから、その共同体の中では客観性がある。男には懺悔と償いの機会が与えられる。そうやって処理されていたの」

「あ、ああ。成程、分かってきた……。それが昔の社会制度の欠陥を補っていたんだな。裁判所とかねえもんな」

「というより、それが昔の社会の制度だったの。欠陥と捉えてしまうのは、自分の社会を基準としてしか考えてないから。面白い事に、外国にこういった憑き物の症例っていないのはないんです。いえ、憑き物自体はあるんですけど、その殆どが悪魔か狼なんです。日本みたいに、狐とか犬神とか、蛇だとか竜だとか蛙だとか化け猫だとか、そういった豊富な憑き物はなかったみたいね。ところで狐と言えば稲荷様な訳ですけど、あれって全国の神社の内の約30%を占めるんです。街の片隅にある社なんかも含めたらもつと。稲荷の鳥居といえど朱で有名だけれど、これは色んな説があるんです」

(あれ?)

「まずは稲作起源の説。稲穂の黄金色を朱色に見立てたという説。実りの季節の紅葉を模したという説。それから、稲作に鉄の農具が不可欠な事から、鋳物が成りイナリ、炉の中の赤い鉄を見立てたという説もあるんです」

「でも稲荷に限らず、神社には朱が多くないか?」

「そうね。だからもつと広く取って、中国の道教に由来するという説もあるんです。道教の陰陽五行説によると、あらゆるものは陰と陽の気で出来ているの。ほら、韓国の国旗にあるでしょう? あのイメージです。そして人間の生活にとって重要なのは、木火土金水の五つの元素だとされている。この陰陽五行説は日本に伝わると、神道や仏教と結びついて、原型をとどめないほど浸透していったんです」

(何の話をしてたんだっけ?)

「ま、元々原型なんてない理想だったんだけど。さて、この五行思想によると、赤は火星を意味し、季節は夏、方位は南、霊は朱雀とされている。朱雀つてのは鳥だから、鳥居は朱雀の休まるどころ、したがって赤くあるべきだという説があるのね」

「成程な。ところで、その陰陽五行思想は曜日と関係あんのか?」

「勿論です。ただの偶然ではありません。そもそも望遠鏡が発達する前、目に見える惑星というと、太陽と月を除いた五つだったんです。あなわち、水星、金星、火星、木星、土星。これらは他の星に比べて、特殊な動き方や輝き方をするから、どうしても注目される訳。星を基準に季節や方向を見る技術は世界共通だから、太陽、月、水星、金星、火星、木星、土星の七つは、古今東西の思想に万遍なく影響を与えているんです。陰陽五行説だって、陰が月、陽が太陽、他がそのまま木火土金水にあたる訳ね。現代の曜日の七日制の起源は、古代バビロニアだと言われているんです。これも占星術が元になっているの。だから陰陽五行説の用語が、西洋の曜日制にすっぽりあてはまったのは、単なる偶然という訳じゃないんです」

「そういえば一週間の始まりって、月曜か日曜か迷うよな。週末って言葉があるくらいだから、月曜が最初つてのが俺はしっくりくるけどな」

「土曜とする説もあるんですよ? 私はそれが有力だと思います」

「そうなのか……」

「月曜日が週の始めだとするのは、一番歴史的根拠がないの。単に日曜日が休みとなっていてから、働き始める日という意味が、一週間の始まりの日と重なってしまったのね。でも実感には即しているから、ある意味で根拠が一番あるのかもね。日曜を始まりとする説は、キリスト郷やユダヤ郷に由来するものです。これらの宗教では日曜を週の始まりとしています」

——……はっ!

ていうか滅茶苦茶話がずれてる!

事件と全つ然関係ない!

雑学としては面白くない事もなかったので、つい付き合ってしまった

だが、当初の目的とはかけ離れた事態になっていた。
そろそろ切り上げて帰ろう。

(井上は……)

寝ている。

しかも立ったまま。

器用すぎるだろ。

「井上。起きろ〜」

「ん……あ、黒崎くん、おはよう」

「おお、おはよう。もう夕方だけだな。用事も終わったから、そろそろ帰ろうぜ」

「うん」

井上が頷く。

「イエスが磔にされたのは、13日の金曜日という事で有名です。そしてその日から三日目にキリストは復活するの……」

「おい、華」

「金曜日を第一日目として数えるから、キリスト復活の日は日曜日にあたるわけね。この日を主の日として祝福する」

ちつとも聞いていない。

「はーなー!」

「はなちやーん!」

「その祝福を行う日ための日が……え? 何です? 話の腰を折らないで下さいよ」

「いや、誰もお前の話聞いてねえから」

「えっ!」

華が少し驚く。

「つうか、もう聞きてえ事は聞いたからさ、時間もかなり経っちゃったから、俺たちそろそろ帰るぜ」

「時間……?」

そう言っつて、華は腕時計を見た。

「……」

しばらく沈黙。

一護はキムチ鍋を突きながら、リモコンを手に取り、TVをつけた。夜のニュース番組。

交通事故やら、火災やら、大して興味を引かないニュースが続く。

——センター

「今日の早朝未明……空座町の公園で、女性が遺体で発見され……」
「……………」

不意に今日の公園の事件を伝えるニュースが流れる。

空座町の事件が全国区のニュース番組で流れるとは思ってもみなかった。

遊子と夏梨もその事件の事を学校で聞かされていたらしく、事件の事を話し始めた。

二人の話を聞き流し、一護はニュースに集中する。

「被害者は身体を酷く傷付けられた後に、バラバラにされていたらしく……………」

酷く傷つけられた後に…………バラバラ…………。

「!!」

悪寒とも吐気ともとれる不快な感覚が、一瞬だけ一護の身体を駆け抜ける。

何か、途轍もなく嫌なものを思い出しかけた。

キムチ鍋の赤色でさえ生々しく見えて、それ以上口をつける事が出来なくなってしまった。

「どうしたの一兄？　顔色悪いよ」

箸を置こうとした一護に、夏梨が心配そうな表情で言ってきた。

「ん、いや、何でもねえよ。ほら、とつとと食っちゃまおうぜ」

そう言い、一護は箸を再び持ち、赤いキムチ鍋に箸を入れた。

精神的疲労が高かったのか、一護は夕飯を食べ終わった後、少し勉強し早めに就寝した。

*

次の日の放課後。

一護と啓吾は教室に生徒が居なくなると、担任の下補習授業が始まった。

補習授業の内容は基本教科、国語、数学、英語だ。

二人はこの三教科をみっちりと担任に教えてもらった。

それだけでも啓吾はクタクタなのに、その後止めを刺すかのよう
に三教科のテストをやらされた。

一護は少しだけだが、昨日家に帰った後、復習していたので難無く
出来た。

が、逆に啓吾は何の対策もしていなかったたので、かなり苦戦してい
た。

結果、啓吾のせいで最終下校時刻まで帰る事が出来なかった。

一護と啓吾は二人で帰路につく。

二人が帰り道のいつも通る線路沿いの道にやってきた。

その時には辺りはすっかり暗くなっていた。

「あくだるう〜」

啓吾が疲れ切った表情で言った。

放課後になってまで、あれだけ補習授業をされたら啓吾にとっては
死ぬほど辛いだろう。

「何で俺らだけ補習授業だったんだよ〜」

「昨日先生が言ってたじゃねえか。終わった事をあんまネチネチ言う
なよ」

「でもさあくでもさあく、大島と反町は不良だから補修免除ってどう
いう事だよ!?! あいつらも成績すごい悪いのにさ」

「さあく〜な」

一護の担任はヤンキーだったら、まあ殆どの事はOKされる。

「それにさあく〜」

啓吾がまだ話を続ける。

その話を一護は適当に聞き流していた。

(それにしても……)

平和だ。

ちよつと前まで、死神代行として活動していた自分。

命をかけた戦いをしていた一年間。

ルキアと出会い、死神として活動し、その後に重罪を犯したルキア

を助ける為に尸魂界に潜入し、ルキアを救出。

そしてその直ぐ後に破面が出現し、その破面と激闘を繰り広げ、最後は藍染との戦いで死神の力を失った。

この一年間は本当に色々な事があった。

死と隣り合わせの生活。

だが、今は死神の力も失い、戦う事が無くなった。

今が一護にとっての本当の平和。

こんなに平和でいいのかって思えるくらい平和で。

平和ボケしているかのようだ。

……

……………

……だからなのだろうか。

一護はそいつがそこに立っていると言う事に、今の今まで気がつか
なかつた。

「……」

そいつは闇の中から現れた。

闇の中からわき出るように。

影の中から浮き上がるようにして現れた。

「……わあっ！」

啓吾が驚いた。

「あ……」

一護は声が出せない。

闇よりもなお黒い黒衣。

不気味な仮面。

そしてキラリと輝く……。

「啓吾っ！」

「うおおっ!!」

瞬間、一護は啓吾を突き飛ばしていた。

それと同時に、禍々しく光る刃が一護の目に前を通り過ぎていく。

「く……っ！」

一護はゴロゴロと道路を転がる。

咄嗟に立ち上がり、両手を大きく広げて男の前に立ちふさがる。

「……」

男はゆっくりと、一步一步近づいてくる。

(……ヤベエ)

こいつはヤバイ。

とにかくヤバイ。

頭の中がチカチカとスパークする。

警報が大音響で鳴り響く。

逃げろ！ 逃げろ！ と、どこからともなく声が聞こえてくる。

男が手に持った巨大なナイフを構えもせず、無造作に横に薙いだ。

「ぐあっ！」

びゅんっと言う風を切り裂く音。

一護は身をよじらせて、何とか避ける。

「逃げろっ！ 啓吾っ!!」

一護が大声で叫ぶ。

「え……けど、一護……!」

一体何が起こっているのか分からないのだろう。

啓吾は戸惑っていた。

ただ、驚いた表情を浮かべている。

だけど……。

今はそんな余裕は無い。

一刻も早く。

一秒でも、一瞬でも早く、この場を離れなければならない。

「早く逃げろ！ 啓吾!!」

「一護、お前はどっするんだよ……!?!」

「いいから！ 早くいけ！」

「お前を放って行けるかよ！」

友達が危険な状況にいるのに、自分だけが逃げるなんて出来ない啓吾。

だけど、今はそんな事を言っている余裕など無い。

本当にヤバいんだ。

「俺は大丈夫だ！俺を信じろ！たのむっ！」

真剣な眼で啓吾を見つめる。

言葉以上に想いを伝える事を信じて。

「……あ、ああ、分かった」

ようやく一護の必死の想いが伝わったようだ。

「すぐに警察呼んでくるから待ってろよ一護!!」

そして啓吾は後ろを振り向かず夜闇の中に駆けて行った。

「……」

それと同時に男が動いた。

今まで一護を見つめていた瞳が、啓吾の後ろ姿に向けられる。

そして、そのまま男はその後ろ姿を追って…。

「くそっ！待ちやがれっ!!」

瞬間、考える間も無く、一護の身体は動いていた。

腰を落とし、全身のバネを効かせて、男に飛びかかる。

「ぐっっ！」

「くっっ！」

激しい衝撃。

それと同時に、一護と男はもつれ合うように地面に倒れ込んだ。

「……ちっっ！」

「テメエ！」

もみ合いながら、男の武器を奪おうとする一護。

それを躲しつつ、必殺の一撃を一護に喰らわせようとする男。

「……あ、くっ」

「うっ……くっ……」

お互い上を奪えば勝負は決する。

一護は相手の武器くらいは奪い取れるだろう。

逆に相手は一護の命を奪い取れる。

天秤にかけるのは、ちよつと割に合わない条件。

でも今更もうどうにもならない。

「くそっ！テメエ！」

「ぎ……ぐっっ！」

互いにつかみ合うような形で、ゴロゴロと地面を転がっていった。いつ果てるとも分からない取っ組み合いを、どのくらい続けたらろうか。

激しいつかみ合いの衝撃で、男の付けていた仮面がガキンと外れた。

そして、否が応でも見えてしまう男の姿。

仮面の下に隠された、その素顔は――

「え……う？」

命のかかっている状況だというのに、一護は驚きに我を忘れてしまった。

何故なら、その仮面の下に隠されていたのは……。

「何で……だよ……？」

おふくろ……

――黒崎真咲。

一護の母親だ。

一護の母親が目の前にいる。

死んだはずの母親が。

頭が混乱する。

訳が分からない。

理解できない。

混乱で頭が一杯になり、現実感が遠のく。

理解できる事があるとしたら……。

それはたった今、取り返しの着かないミスを一護が犯したと言う事だけ。

「あ……」

サバイバルナイフの切っ先が迫る。

黒崎真咲が振り上げたナイフは、真っ直ぐ一護に向かって突き進んできた。

一護の眼窩に飛び込んできた切っ先は、そのまま眼球を突き破る。

ぐちゆりと血液とは違う粘性の汗が滴る。

それも一瞬。

溢れ出した鮮血に上塗られていく。
突き立てられる刃。

肉を引き裂き、骨を砕いて、感じる事など有り得ない領域にまで到達する。

死が頭蓋の中に溢れた。

——そして、一護の自我はそこで消滅した。

……全てが闇に堕ちる。

……一護の世界が消えた。

《3》

「ぐあ……………っ!!」

一護が飛び起きる。

「夢……………」

一瞬、自分がどこにいるのかすら、上手く認識できなかった。

「ここは…………俺の部屋? ……夢を見ていた…………?」

さつきまで鮮明に見えていたはずの夢が、溶けるように消えうせて、もう思い出せなくなっている。

夢の中で感じていた事も、まるで靄に包まれたように、曖昧になつていく。

一護はゆつくりと自分の頬に触れる。

……涙。

涙が一護の頬と指を濡らす。

(…………俺は一体どんな夢を見てたんだ?)

脳裏に残る悪夢の残滓を、必死に拾い上げようとしたが、こぼれ落ち霧散していった。

残ったのは、悪夢を見ていた不快感だけだった。

「? ……ぐあ……………!?!」

胸の奥が熱い。

全身から脂汗が滲み出る。

熱さは激痛へとステップアップしていく。

「う…………ぐ…………」

悲鳴を上げそうになって、一護は唇を噛む。

鼓動の度に、白い衝撃が意識を攻め立てた。

全身の神経が痺れていく。

「」

一護の意識がブラックアウトする。

*

「は…………っ。…………夢？」

死に至るほどの激痛が嘘のように消えている。

「何が、起きたんだ？」

服に手を入れ、胸の中心を確かめる。

早くなっている鼓動と冷や汗以外は、別段変わったところはなかった。

「…………心臓の病気にでもかかってしまったのか？」

一護は冷や汗に濡れた手をじつと見つめる。

「…………！」

一瞬…………腕も含めて、全てが消えたように見えた。

眩暈かと思い、目を固くつぶる。

「何とも…………ねえ」

(…………まさかな。そんな有り得ねえ事が起きる訳ないか)

「そうに…………決まってる」

一護は深呼吸をして気分を入れ替えたのだった。

(省略)

*

「つう訳だ一護。その廃絶の理ってサイトなら色々分かると思うぜ」

……放課後。

啓吾は一護が今日の事件について興味を持っている事に気づき、誰かからそういう情報が沢山載っているサイトを教えてもらい、一護に教えて上げたのだ。

「廃絶の理……」

「サイトのアドレス教えてもらったから、今から一緒に情報室に見に行こうぜ」

啓吾が一護の腕を引っ張る。

正直、今日は体調があまりよく無いから断りたかったけど、好奇心が上回ってしまったのか、一緒に見に行く事になった。

そして情報室へ。

二人は情報室に入ると、早速パソコンを立ち上げた。

ホームにいくと、啓吾が誰かから教えてもらったという廃絶の理のアドレスを打ち込み、サイトに入る。

廃絶の理とはニュースサイトで報道関係者でもない一般の人が、様々なホームページを毎回巡回し情報を収集して、自分のアンテナに引っ掛かったニュースを簡単なコメントと共に紹介しているものらしい。

その中で廃絶の理とは結構有名なニュースサイトとして多くの人に知られているようだ。

「断華」という、本名なのかハンドルネームなのか、よく分からない名前の方が作っている。

ズラツと並んだニュースへのリンク。

リンク先のページを読むだけで、最近ネットで話題なものはチェックできる。

よくこれだけの更新を毎日できるものだと感じる。

こんなものを毎日更新できるなんて一護からしたら超人か、超暇人のどっちかだ。

この廃絶の理は数あるニュースサイトの中でも、群を抜いて収集するニュースの数が多いみたいだ。

単純に多くのニュースに眼を通したいのなら、新聞社のサイトとこ

こを見れば充分だ。

「つうか、今日起きた事件の事はまだ掲載されてねえんじやねえのか？」

殺人事件は今日の朝辺りに起きた事件。

即ち、まだあまり報道されていない事件だ。

「ところがどっこい。今日の事件の事がもう掲載されてるぜ」

啓吾が事件の記事を見つけた。

「どうやら、断華という人は早くも事件の事を嗅ぎ付けていたらしい。」

記事に発見された時刻や、事件が起きた地区の事などが事細かに書かれている。

流石に被害者の情報や、死亡推定時刻などは載っていない。

そして、一護は記事の横の画像を見て目を見開いた。

そこには絶対に報道されない、死体の写真が掲載されていたのだ。

一護はそれを見て気分が悪くなった。

「おい、何だよこの写真？」

「ん、多分作り物だろ。死体の」

一護が死体の写真を見て言ったが、啓吾は作り物だと言った。

確かに有名なニュースサイトで本物の死体の画像など貼れば、騒ぎになる。

だが、一護すら本物の死体と間違えてしまうほどの出来上がりだ。

しかも事件が起きてから時間はそれ程経っていない。

一体どうやって、こんな短時間で作ったのだろうか？

「それよりも横に書いてある記事読もうぜ」

啓吾が写真を見つめたままの一護にそう促す。

「！お、おう……」

啓吾の言葉に一護は我に返る。

一護は写真の横に書かれている記事を読む。

……

「……どうやら、殺害された人は鋭利な刃物で切り刻まれ、殺されたようだ。」

身体中を弄ぶかのように切り刻まれた死体。

横の作り物の死体の写真がその酷さを教えてくれる。

そして、記事の最後に付け足しのように一文書かれている。

それは18年前に空座町で連続殺人事件と集団失踪事件が起き、空座町を騒がせていたという文面だ。

死体をバラバラに刻む猟奇的なものだったみたいで、死体を隠す意味すら無いように、間隔を空けずに次から次へと人が殺されたようだ。

その事件は空座町に住む集団失踪事件を境にぷつぷつりと途切れたみたいだ。

その二つの事件は同一犯の可能性が非常に高いらしいが、現在も犯人は不明。

そして手掛かりも全く無いまま、時効まで警察が犯人を追っている。

世間では永遠に犯人の正体は分からないままだと言っている。後7年くらいすれば時効が成立する。

恐らく犯人を捕まえるのは不可能だろう。

「この18年前の事件、姉貴から聞いた事あるな」
啓吾も一護と同じところを読んでいたようだ。

「たしか姉貴曰く、切り裂きジャックの襲来だと言ってたな」
切り裂きジャック。

詳しくは知らないが、ロンドン市民を恐怖のどん底にたたき込んだ猟奇的連続殺人事件・切り裂きジャックだ。

今から100年以上も昔、売春婦ばかりを残酷な手口で殺した人物。

この事件は結局迷宮入りとなり、犯人は判明していない。

「切り裂きジャックか……」
確かに18年前の事件と似ている。

「けど今回の事件で井上から聞いた話だと『闇夜の男』って奴が出てきたな」

「『闇夜の男』って、あの都市伝説か？」

「ああ。ネットに情報とか無えかな？」

「無いだろ。『闇夜の男』の都市伝説って空座町で少し有名なだけで、全国的には全く知られてないからな」

それもそうだ。

闇夜の男の都市伝説はあまり知れ渡って無い都市伝説だ。

ネットなどに情報があるとは思えない。

「じゃあねえ。今日はこんぐらいにするか。これ以上探しても情報は無さそうだし」

一護はブラウザを閉じ、システムを終了させモニターの電源を落とす。

その時、どっと体が重くなった。

どうやら精神的疲労は自分が思っていたより、かなり凄まじいものであったらしく、一護と啓吾はすぐに帰路についた。

《4》

「……寝ちまったのか」

昨日、家に帰った後、一護はあまりにも疲労に夕飯までベットで横になった。

だが夕飯まで眠るはずだったのに、次の日の朝まで眠ってしまっ

た。それ程まで疲れていたのだろう。

「……うっ」

頭痛がする。

それに、身体が重い。

まだ疲れがとれていないみたいだ。

「熱でもあんのか？」

額に触れるが分からない。

恐らく熱は無いだろう。

一護は病気は愚か、軽い風邪にも殆ど掛かった事が無い。

「んな訳ねえか」

時計を見ると、そろそろ遊子が朝食を作り終え、呼びに来る時間だ。

一護はベットから立ち上がり、制服に着替えようとする。

「ぐあ……っ！」

制服に手を伸ばした瞬間、急激な頭痛に襲われた。

一護は頭を抱え、倒れ込みそうになるのを何とか踏み止める。

「何だよ、一体……!?!」

頭痛が止まない。

それどころか頭痛が増してきている。

その瞬間だった。

一護の脳裏に何かが現れた。

それは……人影。

黒いシルエツトになっていて、誰かは分からない。

が、なぜか大切な人のように感じる。

自分の運命を変えた人。

そんな考えが浮かんできた。

けど、ルキア……では無い。

では一体――

その時、その人影の口元が動いた気がした。

だが、何も聞こえない。

そのまま人影は一護の脳裏から消え、同時に頭痛が止んだ。

「……何だったんだ、今の?」

自分でも理解できない。

けど、何か忘れてはいけないものを忘れていている気がした。

一護は妙な違和感に駆られながらも、普通の日常に戻ったのだっ

た。

*

学校にいる間も精神的疲労で授業も集中できずにいた。

時折激しい頭痛も起きた。

その度に人影が現れる。

現れては自分に向かって何かを言っているような気がする。

けど、一体何を言っているのかが分からない。

そして誰なのかも分からない。

そんな事が五回ほどあった。

放課後、一護は酷く疲れていたので、直ぐに帰宅した。

帰宅途中も一度だけ激しい頭痛が起きた。

流石に七回目って事もあり、頭痛で頭を抱える事も無くなり、悶える事も無くなった。

だから、脳裏に現れる人影に集中できた。

人影は同じように何かを話している気がする。

否、話しているのだ。

何て言っているかは分からないが、何かを言っている。

とても懐かしいような声。

少し声を荒げているように聞こえる。

だけど聞き取れない。

そんな声と影も頭痛と共に消えた。

「何だっつてんだよ……？」

一護は一言そう吐き、走るようにして帰宅した。

*

帰宅すると同時に自室に行き、ベッドの上に倒れ込んだ。

先に帰っていた遊子と夏梨が心配そうに声を掛けてきたが、一言大丈夫と言い安心させた。

恐らく二人共、安心はしていないだろう。

心配性な二人がこの程度で安心する訳が無い。

だけど、一護にはもうベットから起き上がる力が無い。

一護はこのまま寝てしまいたいという誘惑に駆られた。

そして、そのまま睡魔の誘惑に軽く誘われた。

……

……

……

……

……

——夜。

一護はゆっくりと目を覚ました。

窓の外から月明かりが射している。
もう、すっかりと夜だ。

とても静寂で心地よい。

余計な雑音が無いからだ。

………：妙に静かだ。

静か過ぎる。

普段なら下の階から、何かの音がしても良いのだが、何の音もしない。

携帯の時計を見ると、今は夜の九時前。

遊子たちが寝るには少し早いような気がする。

不審に思った一護は部屋のドアを開け、下の階を見る。

真っ暗だ。

明かりが全く点いていない。

(おかしいな)

この時間帯に家の明かりが一つも点いていない事は有り得ない。

(遊子と夏梨はもう寝たのか?)

一護は下の階に下りる。

家の中を階段を下りる足音だけが響く。

下の階に行くと、リビングの扉を開ける。

……誰もいない。

どうやら本当に遊子と夏梨は寝てしまったようだ。

(親父も寝たのか……?)

妹たちは兎も角、一心まで寝ているとは思っていなかった。

一護はリビングの電気を点ける為に、スイッチを入れる。

が、電気が点かない。

「何だ……?」

電気が点かない事に疑問を抱いたが、気にせずリビングの中に入る。

その瞬間だった。

背後で何かの気配を感じた。

それと同時に大量の血が口から溢れ出た。

「ぐあ……っ！」

胸から突き出る黒い刃。

サバイバルナイフが背中から胸にかけて、肋骨を縫うように貫通していたのだ。

確実に心臓を貫いている。

「……これで終わりだ、黒崎一護」

何処かで聞いたような不快な声。

口から血を吐きながら、倒れ伏した。

倒れ伏すと同時に、サバイバルナイフが引き抜かれた。

「テ……テメエ……」

一護が力無く言い、ゆっくりと自分を刺した人物を見る。

闇よりもなお黒い黒衣。

不気味な仮面。

都市伝説の『闇夜の男』の噂で聞いた人物とそっくりだ。

いや、それ以前にこいつとは何処かで何度か会った気がする。

「……貴様の妹と父親は殺した」

男は一護に更なる絶望感を与えるように言った。

(遊子も夏梨も親父も……殺されたのか……)

それを聞いた一護は何故か、それを知っていたかのように思えた。

自分の冷静さに嫌気が差す。

「……早く、殺してくれ……」

自分でも理解できない事を呟いてしまった。

「……そうか、既に魂魄が崩壊し掛けているのか。ならいい。とつとと殺してやろう」

男はそう言うと、サバイバルナイフを振り上げた。

その時、出血が多過ぎたせいか一護の視界が暗くなる。

「死ね黒崎一護」

何も見えない。

けど、男がサバイバルナイフを振り下ろしてくるのは分かる。

……だが、何も感じない。

自分はサバイバルナイフを振り下ろされる前に、意識を失ってし

まったのだろうか。

「こ、この波動は……博麗の結界だとお……!?」

……博麗?

「!? な、何故……貴様が……こんなところに……っ!? まさか……貴様アア!」

男の声が聞こえてくる。

一護はまだ自分が生きていることを実感した。

そして、今一体何が起きているのかを確かめる為に、残り少ない力で目を開け、男の方を見る。

……男の前に一人の女性が立っていた。

後姿で顔は見えないが、一護は誰なのかが分かった。

「……おふ、くろ」

そう、一護を守るように母親、黒崎真咲が立っているのだ。

訳が分からないが、心の何処かで安堵している。

「一護……」

真咲が口を開いた。

懐かしい声が一護の耳に入る。

それだけで、涙が溢れ出そうになった。

「私が絶対に護るから」

真咲がそう言った瞬間、凄まじく神々しい光りが全てを包み込んだ。

「うぐああああああああ!!」

男が悪魔のような断末魔を上げる。

それと同時に一護の意識が遠のいた。

*

——そこは、例えるならば、全てが消え真っ白になった世界。

全ての世界を失った空を見上げるような感覚。

意識は一片の曇りもなく鮮明なのに、何も見えない。

盲いてしまったように……何も無い。

それを確かめるために手を伸ばす。

腕が無い。

脚も、身体も無い。

確かめようも無いが、恐らく目も口も耳も……顔も無いだろう。
ただ虚ろなる世界を漂っている。

何とも心細い……。

そうは思ったが、不思議と恐怖は無い。

その瞬間、何かが現れた。

そう、あの人影が現れたのだ。

頭痛の度に一護の脳裏に現れた、あの人影が。

人影が何かを叫んでいる。

「い……て……のよ……」

あまりよく聞き取れない。

が、今までよりは聞き取れた。

「いつ……てんのよ……」

どんとんと声のはっきりしてくる。

「いつま……てんのよ……ちゅ」

(何だ……この声、どっかで聞いたような……)

一護は集中して、無い耳で聞き取る。

そして、一護はその声を完全に聞き取った。

「いつまで寝てんのよ、一護!!」

ゴツンと言う音と共に、無い額に激痛が走った。

「イテエッ!」

——そして、一護は悪夢から目を覚ましたのだった。

第30斬【悪夢からの目覚め】

「イツテエー」

鋭い痛みと共に、少年——黒崎一護は目を覚ます。

誰かに平手打ちされたようなジンジンとした痛みが額を焼き、普段なら重たい瞳がとても軽く開いた。

そこには巫女姿の博麗霊夢がいた。

「いつまで寝てるつもり一護。もう朝食済ませちゃったわよ」

「ああ、悪い。今起きる」

どうやら霊夢が起こしに来てくれたらしい。

よく見ると、太陽の位置がいつも起床した時よりも傾き加減が違う。恐らく昼前辺りだろう。

霊夢は「とつとと起きて、顔でも洗ってきたら」と言い残し部屋を出ていった。

「……………」

——夢の内容は覚えている。

とても鮮明に。へばりついたガムのように、不快感までも残して覚えていなのだ。

不快で不快で凄く嫌な夢。自分が何度も何度も殺される夢。家族や友達が殺される夢。まるで現実だったかのような現実感があつた夢。痛みも悲しみも苦しみも、現実のそれと全く変わらないほどの夢。

一瞬吐気を催した。

「一体、何だったんだ？ あの夢は」

思い出すだけで不快になる夢。

こんな夢は生まれて初めてだ。

一護は布団から起きようと立ち上がろうとする。

その時……

「う……………!？」

視界が歪む。

胸に焼けた鉛が注がれるような激痛が走った。

「ぐ……はっ！」

一護は胸を掴む。

血管という血管が裂け、神経という神経が千切れそうな痛み。細胞がバラバラになりそうな苦痛。

痛みが一護の意識を、軟泥のような闇へと引きずり込もうとする。

一護は気を失いそうになる。

だが失う訳にもいかず、肉体と精神を引き裂かんばかりの激痛を、封じ込めるように身体を丸めながら、一護はじつと耐えた。

「……」

突くような痛みが、徐々にではあるが引いていくのが分かる。

「……がはっ！」

痛みに耐えるために、止めていた息を一気に吐き出す。

痛みの痕跡が神経に残り、吐き気と痺れたような感覚が押し寄せてきた。

けれど、何とか気絶せずに済んだ。

「そーいや、夢でもこんな事が」

夢でも、殺されて起きた次の日は何らかの不快な痛みに襲われた事があった。

「ただの、夢じゃねえのか……？」

一護はゆつくりと布団から起き上がる。

いくら、ただの夢でなくても起きてしまえばどうする事も出来ない。

だが——三つほど不可解な事がある。

1. 空座町で起きた18年前の連続殺人と集団失踪事件。
2. “闇夜の男”の正体。
3. 黒崎真咲の事。

“闇夜の男”の正体は一度仮面を取り見た。

正体は黒崎真咲だった。

だが黒崎真咲は最後に一護を闇夜の男から護ってくれたのだ。恐らく闇夜の男の正体は別にある。

真咲が二人もいるはずがないのだから。

一護は布団を畳み、私服に着替える。

着替えたのと同じくらいに、ドタドタと足音が聞こえてきた。

「誰だ？ うるせえな」

精神的疲労がある一護にとって、寝起きから雑音を立てられると、一言で言っとうざい。

そして、その足音の主が自分の部屋の襖を強く開けて入ってきた。

「本物の黒崎一護！ 今度こそ私と尋常に勝負しろおお!!」

朝の少女からの第一声。

いきなり勝負を挑まれた。

勝負を挑んできたのは勿論……伊吹萃香だ。

「何だよ突然。何で俺がお前と勝負しねえといけねえんだよ？」

「当たり前じゃん！ 昨日この私を騙しといて、よく言えたな！」

「昨日……」

(そういえば、すげえ長い夢を見てたせいで、昨日の事をすっかり忘れてたな。つうか、昨日っていう実感が無い)

昨日、伊吹萃香が黒崎一護に弾幕勝負を挑みに来たが、何を間違ったのか一護と魔理沙を勘違いし、その流れのまま魔理沙と萃香が弾幕勝負をした。

最終的に萃香は魔理沙が一護では無い事に気づき、そのまま弾幕勝負は終わった。

だから、正真正銘の黒崎一護に弾幕勝負を挑みに来たのだろう。

「それは悪い」

一護は昨日騙した事を軽く詫げる。

「けど明日にしてくれ。今日は疲れてて、どうにも弾幕勝負をする気にはなれねえんだ」

「寝たのに何で疲れてるの？ 普通は寝たら疲れて取れるんじゃないの？」

「変な夢を見たら精神的にしんどいんだよ」

一護は適当に答えた。

「むう………だったら明日で良いや。本調子じゃないと、やっても詰まんないし」

萃香は諦めてくれた。

けど、弾幕勝負をするのは変わらなかった。

「……とつとつと朝飯食うか」

*

朝食を食べ終えた一護は、縁側に座りながら空を仰ぎ見た。

魔理沙は昨日の萃香との弾幕勝負で、身体中がボロボロになり、立
てずに寝込んでいる。

萃香も同じくらいボロボロになったはずなのにピンピンしている。
流石は鬼である。

「……………」

一護は夢の事を思い出していた。

思い出したくも無いが、気になるし妙に胸騒ぎが起きるからだ。

……おふくろが護ってくれた。

夢で一番新しい記憶。

夢なのだが、闇夜の男から一護を護ってくれた。

(また、護られたな)

夢だが、夢じゃなかったような気がする。

何故か、そんな気がする。

でも正常に考えれば、ただの不快な夢だ。

万人に一人が見るか見ないかくらいの、ただの夢。それだけなの
だ。

「一護、私ちよつと人里に行って来るから、留守番していてね」

不意に霊夢が背後に現れ、人里に行くと言った。

「買い物か？」

一護は霊夢の方に振り返って聞く。

「ええ、そうよ。お昼の食材が無いから、買い足しに行くの」
食材が尽きたのか。

そして霊夢はそのまま飛んで人里に向かった。

「……………忘れて行きやがった」

縁側から居間を見ると、テーブルの上には霊夢の財布が置いてあつ
た。

どうやら財布を忘れていったようだ。

財布を持って追いかけてようと思ったが、身体がだるくて動く気がしなかった。

「……駄目だよな。こんなんじゃ」

一護は自分の墮落している姿が嫌になり立ち上がる。

一度背伸びをし、気分を入れ替えた。

(掃き掃除でもするか)

一護は神社前の掃除をしようと思った。

参拝客は全く来ないが、一応掃除をしておかないと廃神社になりかねない。

まあ、成る事は無いだろうが。

「それじゃあ、私も出掛けよつと」

すると、萃香も縁側に来て言った。

「何処に行くんだ？」

別に興味は無いが、何となく聞いてみる。

「ん、地底だよ」

「? 地底って地底世界の事か」

誰かから地底の事は聞いたが、まだ行った事は無い。

「そうだよ。結構前だけど地底にも面白い外来人が現れてねえ。人間でも妖怪でもないんですけど、そいつが凄く強くて、時折弾幕勝負をしてもらってるのさ」

「人間でも妖怪でも無い外来人？」

「そうだよ。いつもは面倒臭えとか言ってるけど全力では戦ってくれないけど、愉しいんだ。その外来人と弾幕勝負してると」

「そうか。随分といい奴なんだな」

「そうねえ。多分いい奴。殺気とかそういうのは一切感じないから」

萃香はそう言うと、地底という場所に向けて行ってしまった。

この幻想郷には一護やグリムジョー以外にも沢山の外来人がいるようだ。

「さてと……掃除でもするか」

と、一護が箒を手にした瞬間、凄まじく不気味な、嫌な気配がした。

一護は手にした箒を無意識に手放す。
カタン、と箒が地に落ちた。

(何だ……この感覚!? まさか……っ!?)

一護はこの感覚を知っていた。

夢でいつも、アイツが現れた時の不快な感覚。

一護は不快で最悪な気配を放っている方を見る。

見たくは無かった。

けど、見なくては確証を持てなかった。

「——な、何で、お前が……ここに!？」

一護の見た方向には一人の男が立っていた。

黒い黒衣を身に纏い、能面の泥眼のような不気味な面を付けている。

そう、そいつは紛れも無い、夢の世界で見た『闇夜の男』だった。

「黒崎一護。自分の母親に感謝するんだな」

この下卑たような声。

間違いない。

——『闇夜の男』だ。

「もう少しで、貴様の魂魄を深淵なる闇の底へ消し去れるはずだったのだが、予想外の邪魔が入ったからな」

男は淡々と喋り続ける。

「何でお前が此処にいるんだよ!？」

一護は男の話に聞く耳持たず、怒鳴りつけるように問いかける。

「お前は俺の夢の世界の人間じゃねえのか!？」

「……くっ、はは。黒崎一護、あの夢の正体を知りたいか？」

不快な笑みを混じえながら、男が一護に問いかける。

「夢の正体だと……!？」

「そうだ。夢の世界の正体だ」

一護は少し冷静になる。

此処は幻想郷。

不思議な事が起こっても可笑しくない。

「……まさか」

「察しが良いな。そう、貴様に見せていた長い悪夢の正体は俺の能力だ」

「……ッ!？」

「『悪夢を操る程度の能力』……と言っても言っておこうか。おっと、勘違いするなよ。ただ悪夢を見せるだけじゃない。俺は相手に永久に覚める事の無い悪夢を見せる事が出来る」

「永久……だと?」

「そう、といっても永久では無い。悪夢を見ている者の魂魄……即ち精神が破壊されれば、悪夢から覚める事が出来る。だが、その代償として、その者は永眠することになるがな」

「何だと……!？」

「相手がその悪夢に現実感を持てば持つほど、魂魄の破壊は早まる。魂魄が破壊される予兆として身体が消えかけていただろう?」

夢を思い出す。

自分が殺された次の日は、眩暈などがし、身体の一部が一瞬消えた事があった。

「貴様を五回殺した後、もう後一回殺していれば、貴様は間違いなく完全な死へと追い遣れた。だが、邪魔が入ったせいで、殺すことが出来ず、その上貴様を悪夢から強引的に覚まさせた」

邪魔……。

恐らく黒崎真咲の事だろう。

「まあ、それも良い。この俺が直々に貴様を死へと葬ってやろう」

男は仮面のようなマスクを取る。

マスクから闇夜の男の本当の顔が現れた。

獅子を思わせる程に猛々しく逆立った銀の髪。隙の無い眼光を常に湛えている蒼い瞳。衣服が赤黒いドイツの軍服を模した服装へと変わる。

「まだ名乗っていないかったな」

男は手に持ったマスクを捨て言う。

「幻獄七夢卿の一人。フレデリック・グレアム」

第31斬「フレデリック・グレアム」

《1》

「幻獄七夢卿の一人——フレデリック・グレアム」

「……幻獄七夢卿……だと!？」

突如、黒崎一護の夢の中に現れた「闇夜の男」が現実の世界に現れたかと思うと、己の正体を明かした。

——幻獄七夢卿。

非常に危険な思想を持った七人の集団。

一護は一年程前に刹蘭、そして元幻獄七夢卿のルリミアと戦っている。二戦とも、桁違いに苦戦した末、仲間達がかかりボロボロになった。とてもじゃないが、勝てたと言える戦ではなかったのだ。

その七人の内の一人が、唐突に一護の前に現れた。不吉、憎悪を携えて……。

「ああ。やはり貴様は幻獄七夢卿の事を知っていたか。刹蘭から聞いたのか」

「……そんなことはどうでもいいだろ。それより俺は、テメエらと会ったら聞きたかったんだが、幻獄七夢卿……テメエらの目的はなんだ？ 博麗大結界を消すことか」

「目的？ 何故それを貴様に話さなければならない。博麗大結界など俺にとって心底どうでもいい……。確かに俺の目的の一貫には、それを成さなければならぬが。今の俺は——」

瞬間、悪寒が一護の全身を駆け巡る。

フレデリックと名乗った男から、異常なまでの殺意を感じ取ったのだ。

「私は貴様を殺しに来たんだぞ」

「黒符『月霊幻幕』!」

フレデリックの圧倒的な殺意と、それを具現した言葉を聞いた瞬間に一護は、躊躇いなくスペルを発動した。

漆黒の三日月状弾幕が、フレデリックに吸い込まれるようにして殺到する。

「……………」

フレデリックは特に警戒するでもなく、まるで稚児を相手取るかのように柔らかくも不気味な笑みを浮かべる。

そして一護の弾幕は完全に敵を捉え、轟音を上げながら爆発、爆風の破壊音を上げた。

「——随分と荒っぽいな、黒崎一護」

だが、爆煙は直ぐに掻き消え、服装の乱れすらない魔人が姿を現す。元より、この程度で傷を負わせられるほど樂觀もしていないので、一護は何の驚きもせずに次の戦略を思考する。

「博麗の人間に敗れ、幾星霜を経て、ようやく貴様らに復讐できる」
フレデリックは相手を覆滅せしめん力を顕にした。

「貴様らは弾幕……スペル方式を使って戦うんだつたな。なら私も弾幕ごっこルールを使わせてもらおう。ただし、ごっこという甘い遊びではない。れっきとした、殺し合いでだ」

そして「己の使う御技をスペルに変換して」唱える。

「怒符『ヘルクラッド』」

フレデリックがスペルを唱えると、ドス黒い槍状の弾幕が幾つも顕現した。

そして、死を迸らせながら狂風の如く槍状の弾幕が一護めがけて襲いかかる。

一護はそれに対し、下手にスペルで挑むのではなく躲すのに専念した。地面の魂を引き出して反発力の補助をさせ高く跳ぶ。

それで何発かの弾幕は一護に被弾せず、地面に衝突した。そして予想通り、今の弾幕は破壊力ではなく貫通力に優れているのが理解できた。槍状の弾幕は、地面に当たるなり、そのまま地球の裏側にまで行ったのではないかと思うほどの穴を残して消えた。

浅はかに弾幕で挑んでいけば、恐らく月牙天衝であつても貫通し、かき消されていたかもしれない。

一護はそのまま空中に立ちながら、まだまだ飛んでくる漆黒の槍を避け続ける。

「逃げるのは巧いようだな。だが、逃げてばかりでは、私の弾幕は止ま

ないぞ」

フレデリックは憎悪を漲らせ、新たなスペルを唱えた。

「獄炎『パジエリマ』」

スペルを唱えると一護を覆い尽くす程の巨大な火の鳥が現れた。とても幻想的な姿だが、猛々しく燃える炎は、まるで小さな太陽を思わせる。

その火の鳥が、音速を軽く超える域で一護に迫った。

「しま——ッ！」

高速で向かってくる火の鳥に、一護は逃げ切れず、火の鳥に包まれ呑み込まれた。

殺意に満ちた熱が、一護を覆い尽くす。

人間であろうが、並の妖怪であろうが肉体はもちろん、骨も魂すらも一瞬で灰塵と化すであろう灼熱地獄だ。

火の鳥は一護を飲み込んだ後、そこに佇む。

「終わりか……随分と呆気ないな」

フレデリックは嘆息しながら呟く。

火の鳥に飲まれた一護が、何の反応も示さないのだ。

「……ん？」

その時、火の鳥の様子がおかしくなった。

それに気付いたフレデリックが、火の鳥を凝視する。

その瞬間、火の鳥から黒い霊圧が現れ、逆に火に鳥を包み返してしまった。

「何だ、あれは？」

フレデリックが言い終わると同時に、黒い霊圧と火の鳥を払いのける様に、一人の黒衣の男が現れた。

そう、黒崎一護が漆黒の衣を纏った死神の姿になったのだ。

「ほう、それが貴様の切り札か？ 黒崎一護」

フレデリックが今の一護の姿に、少し興味を示す。己の火の鳥を消し飛ばすなど、並々ならぬ力では不可能だ。

「——ああ」

一護は一言そう答えると、一瞬でフレデリックの背後に移動する。

並の者なら目視できない程の速さで……

「!? ——なに」

フレデリックは対応できずに、一步遅れて一護に気づくも——
「遅えよ」

一護は右腕の漆黒の霊圧を刀状に形成し、躊躇いなくフレデリックの身体を袈裟斬りの要領で引き裂く。

「——」

しかし、そこは流石、幻獄七夢卿と言ったところだろう。

あくまで斬れたのは右肩を少し程度で、他は衣服含めて無傷だ。

だが、斬れた……そのことに一護は少し違和感を覚える。

「怒符『ヘルクラッド』！」

フレデリックは一護との間合いを取る為に、スペルを唱え、槍状の弾幕を放つ。

「黒符『月霊幻幕』！」

対する一護もスペルで対抗する。

先程は貫通力のある弾幕には挑むのではなく、躲して対策を取っていたが、今は違う。

死神の姿になった一護の霊力は、先とは比較できないほどに高い。故に収斂された一護の弾幕は、槍衾となった弾幕を尽くかき消していく。

だが、フレデリックの計算通り、一護が弾幕を相殺している間に、間合いは充分に取れていた。

「素晴らしいな。まさか、その姿になるだけで、そこまで基本性能が強化されるとは」

「……………」

一護は無言でフレデリックを見据える。

「……何を黙り込んでいるのだ？」

「あんたはいつになったら、本気を出してくれるんだ？」

「何？」

「幻獄七夢卿の実力はこんなもんじゃねえはずだろ？ 刹蘭もルリミアも、この程度の力は簡単に対応してた。あんたみたいに、肩を簡単

に斬られるような奴等じゃなかったぜ」

刹蘭やルリミアはまさに次元が、そもそも比較しても良い対象ではないくらいに違っていた。

あの時、最初に感じ取ったのは無限の宇宙が人の形を成しているような、圧倒的圧力。攻撃は、この幻想郷どころか全宇宙にまで轟いたのではないかと思うほどの、桁違いな強さ。いや、比喩表現ではなく、本当に宇宙をどうにでもしてしまえる力を持つであろう。

しかしフレデリックからは、そういった神的な力を感じれない。そもそも肩を斬れた時点で、自分でも目を疑った程だ。

フレデリックはその質問に対し、一瞬眉間に皺を寄せたが、直ぐに超然とし答える。

「そうだな。まあそう思うのも仕方ない。しかし俺を『こうしたのは、お前ら一族だ』」

「? ということだよ」

「今は話さん。そうだな、気が向いたら教えてやる。けど、確かにそうだ。今の俺は弱い。弱いが……」今出せる、俺の真の力を見せてやる。」「

途端に、場の空気が変わる。

「私はこう見えても魔術師でね。魔力という物が力の源なんだよ」

魔術師……いわゆる魔法使いだ。

だが、魔法使いなら魔理沙、パチュリー、アリスと、既に三人と出会っている。魔法使いは一護や霊夢が霊力を使い、妖怪は妖力を使うなら、魔法使いは魔力を使う。

あまり変わらないが、根本は同じなのだ。

「それがどうした?」

「もし——その私の魔力が無尽蔵だったら、どうする?」

「!?!」

魔力が無尽蔵。

それは、どれだけ魔力による力を使おうと、疲弊や衰えは一切無い上、魔力による力に限界が無くなる。

即ち、無敵と言っても過言ではない状態だ。

「さあ、少し本気を出してやろうか」

フレデリックがそう言うと、スペルを唱える。

「怒符『スロウトハンド』」

フレデリックの目に前の空間に、直径4 m程の黒い異次元の穴が口を開き、その中からいくつもの黒い不気味な腕が現れ、一護に襲い掛かる。

黒い腕の、爪は鋭く尖っており、一度掴まれば肉に喰い込み絶対に離さないであろう。

一護は己の霊圧を更に高濃度にし、右腕に宿る刀に注ぎ込む。そして隙など一切見せずに、剣戟が烈風と化して黒い腕を切り裂いていった。

だが……

「くそッ、切りがねえ！」

まるで地獄から這い出てくる罪人のように、無数に湧いてくる黒い腕。その光景は、地獄から助けを求めるような、いや一護をこちらに引きずり込もうとしているように感じられる。

切っても切っても黒い蒸気が上がり消滅するだけで、ねずみ式に増えて出てくる。まさに無尽蔵だ。

「だったら……」

一護は新たにスペルを唱える。

「黒斬『月牙天衝』！」

一護が右腕を振るうと、霊圧による斬撃が飛ばされた。

天を衝く黒い牙が、出てくる黒い腕を一網打尽にしていく。しかし異次元を消滅させるまでには至らなく、そのまま消滅した。

しかし自分が随意に動ける余裕は出来たのだ。

一護は瞬歩の要領で動き、再びフレデリックの背後を捉える。

(もらった！)

今度こそ完全に隙を突いた。

しかし、今のフレデリックは本気を出しているが故、この程度の動きなど簡単に見切れる。

「こんな見え透いた動きが、私に通じると思うなよ」

フレデリックは避けると同時に、一護の腹を蹴り飛ばした。魔力を込めた蹴り。

さながらミサイルを叩き込まれた衝撃が、全身に数カ所襲いかかる。一発見えた蹴りは、実は推定16発決められていたのだ。

一護は口から血を吐き、後方に勢いよく吹っ飛ばされる。

「くくくく、どうだ、私の蹴りは？ 魔力を込めた蹴りは、今までに喰らった事の無いくらいに、痛かっただろう？」

一護は今の蹴りで、森の方まで吹き飛ばされ木々を何本も薙倒している。

「さあ、早くこちらに戻ってきてくれ。それとも、今の一撃でノックダウンか？」

「——まだだ！」

一護は直ぐに立ち上がり、フレデリックの方に疾風のように駆ける。

「怒符『ヘルクラッド』」

向かってくる一護に、フレデリックはスペルを唱えた。

再び、一護に槍状の弾幕が放たれる。

「黒符『月霊幻幕』！」

一護もスペルを唱え、三日月状の弾幕が展開されると槍状の弾幕と拮抗し合うように激突し合う。

その瞬間、一護は高速移動で、フレデリックの上空に移動した。

「黒斬『月牙天衝』！」

そして黒い牙を下方にいるフレデリックに向けて放つ。フレデリックはまだそれに気づいていない。

直撃した……と思ったのも束の間。

「何処に向かって撃っているんだ？」

刹那、一護の更に上空から嘲笑混じりの声が聞こえた。

一護は上を見る。

そこにはフレデリックが空中にいた。

「く——ッ！」

構えようとするも、数瞬フレデリックの方が早かった。

「遅い。獄炎『パジエリマ』」

フレデリックが先程のスペルを唱えた。

火の鳥が現れ、一護に襲い掛かる。

(ヤベエー！)

避ける選択肢は無かった。

火の鳥が凄まじく速いからだ。

一護は何とか、ほぼ強引に霊力の膜を張り、全身防御体制を取る。

——そんな窮地なる瞬間だった。

「水符『プリンセスウンディネ』」

「萃鬼『天手力男投げ』」

その時、聞き覚えのある二つの声が聞こえてきたのだ。

目の前に迫ってきていた火の鳥が、二つのスペルにより掻き消された。

「誰だ？」

フレデリックも予想外だったらしく、少し驚いている。

一護はゆつくりと、声のした方を見た。

「誰ですって？ まず、自分から名乗りなさい……と、言いたいところだけど、特別に先に名乗ってあげるわ」

一護が見た二つの声の主は、予想通りの人物だった。

「動かない大図書館 パチュリー・ノーレッジよ」

「萃まる夢、幻、そして百鬼夜行 伊吹萃香だ！」

そこには、パチュリーと萃香がいたのだった。

《2》

「パチュリー、萃香……何で、お前らが？」

一護が地に足をつき、二人の方を見て、驚きの声を静かに上げて言う。

パチュリーと萃香が一護を助けに来たのだ。

——だが、どうして？

パチュリーは紅魔館から滅多に出ないし、萃香は地底に行くと言つて出て行った。

此処にいるのは、少しおかしい二人だ。

「説明は後よ。幻獄七夢卿を前にして、そんな暇あると思うの？」
たしかにそうだ。

幻獄七夢卿の戦いは、一瞬の隙で生死が決まる。

今、そんな事を聞いている場合ではない。

「……魔術師と鬼か。成程。中々、悪くない助っ人ではないか、黒崎一護」

フレデリックが二人を確認して言う。

確かに助っ人としては、かなり頼りになる。

だが、フレデリックは全く危険視をしていない。そもフレデリックからすれば払い除けるゴミが増えたほどでしかないだろう。

居ても居なくても、全く変わらないと言うことだ。

「……あなたが、あの有名な魔術師——フレデリック・グレアムね。会えてほんの少しだけ光栄だわ」

パチュリーが一護の方に移動しながら、フレデリックに言う。

「ほう、この私の事を知っているのか。やはり、アレでか？」

「ええ、そうよ」

パチュリーが一息いれると、言う。

「あなたは初代魔術師、ダルク・マグスの残した魔導具の一つ——『聖無石』の所持者だからよ」

「そうか、やはりな。魔術師達は、そんなにこれを欲するか」

フレデリックは手の平に収まるほどの、小さな黄色の宝石を見せてきた。

それを見た、パチュリーが驚きの余り、身体を一瞬振るわせる。最初は半信半疑だったが、本物を見るとやはり疑いの余地はない。

「どうだ、美しいか？　これが聖無石だ」

その聖無石が黄色く輝いている。

「……なあ、パチュリー。あれは一体何なんだよ？」

魔術師では無い一護にとっては、専門外で全く分からない。

パチュリーは分かりやすく答える。

「あれは、聖無石と言って、魔術師なら誰もが知っている人物、ダルク・

マクスが作った魔具なの」

「魔具……魔理沙が持つてるミニ八卦炉みてえなやつか？」

「ミニ八卦炉……みたいなやつね。そうだったら、どれ程楽観できたことかしら」

「そんなにヤバイのか？」

「ええ、あれは……あいつに無限の魔力を供給する魔具よ」

「!! 無限だと……!?!」

一護は数分前の事を思い出す。

あの時フレデリックは「もし、その私の魔力が無尽蔵だったら、どうする?」と言っていたが、あれは半信冗談で聞いていた。

だから、それが確信に変わると、驚かずにはいられない。

「そうよ。だから、あいつに勝つには早めに決着をつけなくちゃいけない。そうしないと、私達が先に力尽きるわ」

時間が掛かれば掛かるほど、一護たちが不利になるのは必然。相手の魔力が無尽蔵だが、こちらには限界があるからだ。

フレデリックは聖無石を体内に取り入れた。

その瞬間……

「だらっしやあああああ!!」

考えるより先に動け。

萃香が戦いを待ち切れずになり、真っ先にフレデリックに向かった。

「ちよつと、萃香! 考え無しに突っ込まない!」

「考えるより動けだあ!」

パチュリーの制止の声も聞く耳なし。

仕方なく、一護もパチュリーも萃香から、少し遅れて動き出す。

「全員で来るか。なら、怒符『スロウトハンド』」

先程から空いていた異空間の穴から、不気味な黒い腕が再度、蛇のように大量に出てきた。

萃香は向かってくる黒い腕を、難なく素手で殴り飛ばして行く。一護では到底真似の出来ない荒業だ。

だが、流石に腕の数が多過ぎるのか、萃香一人では対応できなく

なった。

「後方で援護するわよ一護」

「ああ、分かっている」

萃香の後ろを走る二人は、一人で黒い腕に対応している萃香に援護する。

「金符『シルバードラゴン』！」

「黒符『月霊幻幕』！」

パチュリーーの銀の弾幕と、一護の黒の弾幕が前方に放たれる。

萃香に当たらないよう、二色の弾幕が黒い腕だけを狙う。

「その穴……邪魔だあ！ 符の壺『投擲の天岩戸』！」

萃香がスペルを唱えると能力を使い、手に自分の五倍はあるであろう大岩を持ち、それを穴の前に目掛けて投げる。

黒い腕が一護とパチュリーーのお陰で消えていつていたお陰で、難無く穴の前に大岩を放り投げ、穴を大岩で封じた。

これで少しの間だが、黒い腕は出て来れないだろう。

「符の式『坤軸の大鬼』！」

萃香は続けてスペルを唱える。

スペルを唱えた事により、少女とは全く思えないほどの、巨大な身体になった。まるで怪獣映画で出てくるような大きさは、見ただけで圧倒される。

そして、一気に拳をフレデリックに目掛けて突き出す。さながら隕石を思わせる拳である。

「魔術師は物理を使ってあまり戦わないのだが、まあいい」

フレデリックは軽く拳を構え……

「私の唯一の接近スペルだ。怒符『邪聖一点』」

スペルを唱える。

その瞬間、フレデリックの拳から黒い邪悪に満ちた魔力が集中した。そして、萃香が突き出してくる拳に向かって、フレデリックは自分の拳を突き出す。

小さい拳と巨大な拳が激突する。

凄まじい衝突音と共に、大地が砕ける。

「まさか……」

拮抗した激突中に萃香が驚きの声を上げた。

言い終わると同時に、両者の拳が弾き合ったのだ。

——互角。

フレデリックとはいえ、相手は鬼。

力では負けないと思っていた萃香が、勝ったのではなく互角だった。

「やるねえー！」

萃香は直ぐ様、フレデリックに向かって再び拳を突き出す。

互角だった事に一切悔しがらずに、逆に闘志を燃やした。

萃香はこういう奴なのだ。

「またか。もうその拳には挑みたくないな」

フレデリックは隕石のようなその拳を軽く後方に跳び、避ける。

「魔術師は基本接近戦をしないんだよ。怒符『ヘルクラッド』」

フレデリックがスペルを唱えた。

無数の槍状の弾幕が、萃香を襲う。

「符の参『追儼返しブラックホール』」

そう来ると思っていた萃香は、即座にスペルを唱えた。

瞬間、黒い闇……宇宙空間にしか存在しないはずの暗黒天体ブラックホールが空間に現れ、フレデリックの放った弾幕を全て常世の闇に吸い込んだ。

そして弾幕を全て吸い込むと、ブラックホールが消えた。

「ほお、やるな」

フレデリックが少し感心する。

「まだまだ！ 出てこいお前らー！」

萃香が叫び、能力を応用で使用すると、百体以上はいるであろう危険な妖怪が現れた。

蛆が出てきた。百足が出てきた。蛇が、蜘蛛が、白骨が、小鬼が……その他正体不明の臓物めいたモノたちが、身を震わせて暴れながら出てきた。

ひたすら不浄で、人間種には害しか及ばさない異形の群れ。霊力や

妖力も高く、並の人間なら致命的なのは間違いない。例えフレデリックほどの男でも、これだけの異形を相手取れば危険という二字が明滅するだろう。

「なるほど、百鬼夜行か」

萃香の能力により萃められ、這い出てくる妖の大軍勢——自分以外を食い殺したい邪悪な百鬼夜行だ。その不浄さと怨念以外にも、一見して何の類似もない百鬼夜行だが、実のところ共通している点が一つだけある。

皆、狂気めいた暴れ方をしている。そう、萃香は狂気に悦楽・暴走している妖怪のみを選別して萃めたのだ。

最初に大百足が大突進を仕掛けてきたが、フレデリックは腕を振り払って弾き飛ばした。

そして大百足の次は大蛇、次は腐乱した山犬、白骨した馬が嘶き、首のない武将が吼え、目が爛々とした鬼、際限なく連続する怒涛の嵐がフレデリックに襲いかかる。

どんな大津波や火砕流、大地震よりこの百鬼夜行は危険だろう。狂気に狂った魔物たちが脇目もふらずに押し寄せてくるのだ。

「これは、悪趣味だな。なら、覆滅してやるまでだ」

フレデリックは手を前に突き出す。

「怒符『テレキ・オブ・キューブ』」

そしてスペルを唱えると、ぐしやりと百鬼夜行が圧縮され捻り潰されていく。

血が滴り落ちる。

捻り潰された百を越える妖怪たちが極限にまで圧縮され——もはや玩具のキューブ程度の大きさでしかなかった。

一瞬で百を越える妖怪が、文字通り覆滅されたのだ。

「……嘘、そんなに強いのか？」

萃香が冷や汗を流しながら言葉を吐く。

それは理不尽な暴力などという甘い言葉では片付けられない。ただただ一方的かつ刹那の速度で行われた大虐殺（ジェノサイド）だった。

だが時間ができた。

「何処を見てやがる」

刹那、一護がフレデリックの後方にいた。対するパチキュリーはフレデリックの上空にいる。

「――」
気付くのに遅れたフレデリック。

萃香の対応をしている時に、二人共移動していたのだ。

「いくぞ、萃香！」

一護が叫ぶと同時に三人がスペルを唱える。

「黒斬『月牙天衝』！」

「土&金符『エメラルドメガリス』！」

「鬼火『超高密度焔禍術』！」

一護は月牙天衝を放ち、パチキュリーは大弾と小弾を複数放ち、萃香は拳で地面を叩きつけ、そこから溶岩弾を噴出させた。

それら全てが、フレデリックに向かって出されたスペルだ。

並外れの相手でも、このスペルを一度に一気にされれば、無事では済まない。

三人の攻撃が、フレデリックに殺到する。

「ふはははは、小賢しいっ！ 怨……」

フレデリックの身体から黒い光が放たれた。

その瞬間、まるで埃でも払うかのように、三人の多面攻撃が吹き飛ばされ、霧散してしまう。

フレデリックの身体を中心にして、ドス黒いオーラが空間を塗り潰していく。

「な、何だ……これは……？」

「結界？」

周囲の空気全体が、胎動する臓腑のように波打った。空間が腐った果実のように、グニヤリと溶け落ちる。

溶けた世界の裏側から表れる血の色の空。

天地の感覚が混乱する。

重力、磁場、大気の組成まで変わってしまったかのような、その異

常な空間の中で、三人は瞬時に体勢を整える。

さつきまでであった、博麗神社も空も山も、既にそこには無かった。

「どうやら、精神はしつかりと保っているようだな」

フレデリックが余裕な態度で三人に対峙する。

「何をしやがった……フレデリック!?!」

「これ以上小賢しい真似が出来ないように、私の世界へと招待してやっただけだ」

フレデリックがそう言うと、パチュリーが周りを見渡す。

「……こんな濃密な結界を一瞬で出したの？ 詠唱も供儀も無しで、こんな大規模な結界を張れるとは思えないわ」

「結界だと？ 違うな。ここは私の異界だ。簡単に言うと、私が支配する別次元の宇宙といったほうがいいか」

不気味な笑みを浮かべながら言う。

「ここは私の宇宙だ。すなわち私の腹の中といってもいい」

信じられない言葉だが、過去に似た例があるため信用せざるを得ない。

「この異界の源泉は私だ」

つまりこの宇宙において、フレデリックは唯一神。隔絶された王に他ならない。

「さあ始めようか——第二幕の開始だ」

そして絶望の中で、一護たちの戦いが始まるのだった。

第32斬【決着と最後の思い】

《1》

世界がドロドロに崩れ落ち、新たに現れた世界は血の色の天を宿す、重力、磁場、大気の組成までも全く違う異界。

先程までそこにあつた博麗神社も、緑の山も、青空も既にそこにはない。

別次元……フレデリック・グレアムの世界なのだ。

「成程、ここまで矮小になっているか」

一護、パチュリー、萃香の三人と対峙する異界の神は悠然と言葉を放つ。

こうしている今も、この無限に続く異界に三人の魂が蝕まわれている。

そも、この世界の王たる『最盛期のフレデリック』に力を持つてすれば、この異界に閉じ込めた瞬間、一護たちの魂など欠片も残らない。

しかし、過去の戦により、フレデリックの力はそれほど残っていないのが、唯一の救いであり希望なのだ。

「そうだな、ここまで生き延びた褒美に、攻略法だけでも教えてやろうか」

絶対的上位存在からの気まぐれの言葉。

瞬間、フレデリックの手に一冊の本が現れた。

「お前も魔術師なら、この本くらいは知っているだろう」

パチュリーに示すよう、薄気味悪い本を向ける。

その本を見たパチュリーは、瞬時に理解し戦いた。

「その本、まさか……!?!」

「そうだ。禁断の魔道書——『死霊秘法』の写本の一冊。死を司る呪ばかりを加えて再編された暗黒の魔書だ。暗黒魔術の使い手としては、これ以上の魔具はない」

「なあなあ、パチュリー。あれは何なんだ?」

一護が聞きたかつた事を、先に萃香が聞いた。

「あれは『死霊秘法』という魔道書の写本の一冊……『邪劫の法』。

簡単に言えば、暗黒の魔書と呼ばれるに相応しい本よ。それに……」
パチュリーが付け足しのように説明する。

「人間の顔の皮で装丁されているのは一見して分かるでしょ？」
確かに、あの本は顔らしき不気味な装丁をしてある。

「さらに、全てのページが生きたまま剥いで、なめされた魔術師の皮膚で出来ているの。羊皮紙ならぬ、人皮紙で作られた書物なの。数百人分の魔術師の魂を編み込んだあの本なら、無詠唱でこんな力を使ったのも領けるわ」

「うえ、気持ち悪う〜」

萃香が口に手を当てる。

たしかに萃香の言う通り、吐き気がする本だ。

「その本を一体何処で？」

説明し終わったパチュリーは、再びフレリックに問いかける。

「一体何処で……か。良いだろう。場所だけは教えておいてやろう。外の世界にある、空座癡狂院というドイツの療養院を模倣して作られた石造りの施設で手に入れた」

「空座癡狂院……だど?!」

一護が夢の世界で、華断という女子から聞いた話を思い出した。

空座癡狂院。精神病院の一つで、十数年前に取り壊された建物である。
る。

なぜ、その施設の名前がここで……?」

「話はこれまでだ。そろそろ続きを始めよう」

邪劫の法が黒く輝き出した瞬間、フレリックの体内に入っていた。
た。

「さあ、掛かって来い、黒崎一護、パチュリー・ノーレッジ、伊吹萃香。
この私を愉しませてくれ」

フレリックのセリフを元に火蓋を切る。

相手は二つの最強の魔具を持っている男。

勝てる確立は極めて低い。

だが、三人は諦めずに、フレリックに立ち向かう。

「怨霊『妖怨霊属』」

フレデリックが向かってくる三人に向かつてスペルを唱える。

濃厚な瘴気が渦巻き、そこから獣とも人ともつかない顔が溢れ出した。

その怨霊のような物が、三人に襲い掛かってくる。

「走り続けるー！ パチュリー、萃香ー！」

一護が二人に叫ぶと、己はスペルを唱える。

「黒斬『月牙天衝』！」

一護は向かってくる怨霊を、月牙天衝で一掃する。

そのせいで、黒い霊圧が舞い、フレデリックは三人の姿を目視で確認できなくなつた。

「流星は黒崎一護だな」

自分のスペルを破られたのに、全く危機感が無いフレデリック。そもそも、この世界はフレデリックの体内も同義。故に目指できなくとも、誰がどこにいるか感知可能だ。

すると真つ先に飛来してきたのは、萃香の巨大な拳である。遍く全てを粉碎する最強の鬼の拳の前に、冷静に対処する。

「またそれか。私には通じないと分からないのか？」

フレデリックは前と同じように、軽く後方に跳び避ける。

「けど、避け方は同じのようね。月符『サイレントセレナ』」

刹那、フレデリックの上空にパチュリーがいた。

黒い霊圧に紛れて、フレデリックの上空に移動していたようだ。

そして、パチュリーはスペルを唱えた。

青い米粒弾が降り注ぎ、パチュリーから放射状に水色の米粒弾が放たれる。

「降り注ぐ青い雨と言ったところか。見世物としては悪くないな」

だが…と付け加え、軽い笑みを零す。

「そんな単純な戦法が効くと思うなよ。獄炎『バジエリマ』」

フレデリックはスペルを唱えると、火の鳥が現れ、降り注ぐ全ての弾幕を、火の鳥が喰らい尽くす。

そして、火の鳥はそのままパチュリーに向かつて飛翔した。

「土水符『ノエキアンデリユージュ』!？」

向かってくる火の鳥に対し、即座にスペルを唱えるパチュリー。そこから圧縮した水が放出され、火の鳥を掻き消す。

「ほお、私のスペルを破るとは、中々やるな」

「くっ！ ツウ……」

今の火の鳥を消すのに、結構の魔力を使ってしまった。

しかも世界観が違うせいも、魔力の現象も違う。

やはり別法則の働く、宇宙だとパチュリーは理解した。ここでの長期戦は圧倒的に不利だ。

「気づいたか。ここでは貴様らの世界とは少し違うぞ」

「そうみたいね。けど、そんな余裕かましてる暇なんてないんじゃない？」

「……そのようだ」

その瞬間、フレデリックの周りの空間から三日月状の弾幕が現れ、一斉にフレデリックに向かって放たれた。

これは一護のスペル……黒符『天幻月牙』だ。

三日月状の弾幕がフレデリックに全て被弾し、凄まじい爆発が起る。

「私にこんな攻撃が効くと思うなよ」

爆炎の中から無傷でフレデリックが飛び出してきた。

そしてそのままパチュリーの方に向かう。

「先に貴様から葬ってやろう」

フレデリックは邪悪な魔力を凝縮させ――

「怨霊『妖怨……っ!?!』」

瞬間、ほんの一瞬だけフレデリックが揺らいだ。

何かに吸い込まれそうになり、バランスが崩れたのだ。

その方角を見ると、そこには萃香が出したブラックホールがあった。

符の参『追儼返しブラックホール』だ。

いくらここがフレデリックの世界でも、頭が一瞬何かに集中すれば、そこいらに空白の隙が生じてしまう。そこを突かれてしまった。

「隙ありよ。火&土符『ラーヴァクロムレク』！」

パチュリーがスペルを唱える。

赤色と黄色い弾幕が、パチュリーを中心に無数に放たれた。

「こんな物が私に通用すると思っっているのか？」

「思っていないわ」

「なに？」

パチュリーのセリフにフレデリックは少し悪寒が走った。

そう、フレデリックはパチュリーのいる自分の上空に向かって跳んでいる。

その跳んでいる下から、凄まじい程の力を感じ取ったのだ。

「馬鹿な!? 何だこの力は！」

フレデリックが自分の下方を見ると、そこには一護が霊圧を右腕に込めて立っていた。

「もう遅いわよ、フレデリック。あなたでも、あれは喰らえば、タダじゃ済まないでしょ」

パチュリーがそう言うと同時に、一護がスペルを唱える。

「いくぜ、フレデリック。黒斬『月牙天衝』!!」

一護からフレデリックに向かって、凄まじい霊圧が込められた、月牙天衝が放たれた。

「——ッ！」

フレデリックが驚愕する。

瞬間、一護の月牙とパチュリーの弾幕が同時にフレデリックに衝突し、世界すら震動する凄まじい爆発が起きた。

爆炎と爆煙が吹き荒れる。

「やったか!？」

一護がそう言った瞬間だった。

「ふはははははははははははははははは!!」

下卑た哄笑を上げながら、爆炎がフレデリックの為のように道を作り上げた。

「それが、最後の手か?」

フレデリックは三人に対峙する。

その姿は無傷で、服装すらも全く乱れていないし、焦げ跡すらない。

「嘘……だろ!？」

「言っただろ。私には『邪劫の法』がある。貴様らの攻撃など、私には全く効かない。それに『邪劫の法』で使用する魔力も全て、『聖無石』から無限に供給してもらえる」

——絶望。

三人は完全に絶望してしまいかけた。

「もう、終わりにしようか。数百人分の魂を編み込んで作られた、邪劫の法」の力で、貴様らを跡形も無く消し飛ばしてやる」

「……………」

その瞬間、一護はある事を思いついた。

「パチュリー、萃香……もう一度だけ頼む。最後にもう一度だけ……あいつの隙を作ってくれ」

一護が最後の賭けに出る。

《2》

「最後にもう一度だけ……あいつの隙を作ってくれ!」

一護のこのセリフが、絶望の淵に落ち掛けていた二人を救い出した。

だが、一護がフレデリックに対して、どう攻略するのかは、二人共分からない。

いちいち聞いていられないからだ。

「分かったわ。隙を作れば良いのね」

絶望しかけていたパチュリーが、一護のセリフを聞いたお陰で、完全では無いが少し立ち直っている。

三人の中でフレデリックの魔力が一番感じやすいので、一番恐怖しているても仕方無いのだ。

「ああ。頼む」

「簡単に言うけど、結構大変なんだよね」

パチュリー程では無いが、フレデリックの力の巨大きさに、負けを覚悟してしまっていた萃香も、一護のセリフで立ち直っている。

「けど、今は……」

「そんな事言ってる場合じゃないな!!」

パチュリーが呟くように言った言葉の続きを、萃香が叫ぶように言った。

その言葉が合図のように、三人がフレデリックに駆ける。

「何を思いついたか知らないが、私に勝てると思わないことだな」

「うるせえ! 黒符『月霊幻幕』!」

一護が最前でスペルを唱える。

無数の三日月状の弾幕が、フレデリックを襲う。

「下らんな。怒符『ヘルクラッド』」

フレデリックの周りに、槍状の弾幕が展開され、向かってくる一護の弾幕を掻き消していく。

相殺ではなく、圧倒的にフレデリックの弾幕の方が強力で、一護の弾幕全てが、一瞬で消え去った。

「俺の魔力は聖無石の力で無限の上、邪劫の法で、スペルも詠唱を唱えた時以上の魔術が使える。貴様のスペルが、この私に通じる訳が無いだろ」

「御託はどうでもいい! 黒符『天幻月牙』!」

続けてスペルを唱える一護。

フレデリックの周りの空間から、三日月状の弾幕が現れる。

「さつきと同じ手か。なぜ私に通じんと分かん」

「酔神『鬼縛りの術』!」

瞬間、萃香がスペルを唱える。

萃香から鎖が放たれ、その鎖がフレデリックを縛った。

「何……?」

鎖のせいで身動きの取れないフレデリックは、一護の弾幕を全て被弾した。

それに続いて、パチュリーがスペルを唱える。

「攻撃は止めないわよ。水符『ベリーインレイク』!」

パチュリーから水色のレーザー、小弾、大弾が、大量にフレデリックに目掛けて発射された。

休む事無くフレデリックに弾幕が降り注ぐ。

「チツ……その程度のスペルで、この私に勝てると思うなよ！」
フレデリックが鎖を解き、動き出す。

「逃がすかよー。黒符『天雨月閃』！」

一護がスペルを唱えると、フレデリックの上空に黒い弾幕が現れ、それらが一気に降り注ぐ。

さながら、黒い雨のようなスペルだ。

「何をしよう……無駄だアツ！ 怨符『毒蟲砲弾』」

フレデリックがスペルを唱える。

すると、地面から黒い小さな塊が無数に現れ、一斉に降り注いでくる一護の弾幕に向かって放たれた。

それにより、一護の弾幕が相殺されていく。

「懐が、ガラ空きだよー！」

いつの間にか、萃香がフレデリックの懐に入っていた。

「何!?!」

「遅いよー！」

萃香は右拳に凄まじい妖力を込め、一気にフレデリックの腹に突き出す。

フレデリックの腹に入った拳は凄まじい威力だったらしく、フレデリックは口から血を吐き、後方に吹っ飛んだ。

「ガハ……ッ!!」

フレデリックは態勢を整えると同時に、勢いよく口から血を吐いた。

「くっ、内臓がいくつか潰れたみたいだが、こんなもの一瞬で再生してやるー！」

フレデリックが自分の片手を腹に持っていく。

どうやら、治療しようとしているようだ。

「させないわよ。木符『グリーンストーム』！」

パチュリーがフレデリックの治療を、阻止しようとスペルを唱える。

弾幕があらゆる角度からフレデリックを狙うように放たれた。

フレデリックは透かさず、スペルを唱える。

どす黒い瘴気をフレデリックが纏い始めた。
大気をも腐らせるような、高濃度の魔力がフレデリックから溢れ出す。

「この私を本気にさせた事を後悔しながら死んでいくがいい……」
高濃度の魔力は周囲に漂う陰気を吸い込み、実体を成すほど死霊の群れが現れる。

暗黒魔術の魔具の中では最上級に位置する「邪劫の法」。
それに無尽蔵の魔力を供給する「聖無石」。

この二つを取り込んだフレデリックの肉体は魔術回路と化し、永久機関の如く邪気を生み出しているのだ。

しかも自然界と完璧に遮断されているこの別次元の空間では、邪気による力が何倍にも膨れ上がっている。

「怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨オオオオ!!」

フレデリックの雄叫びに呼応し、漆黒の空から何かが降り注いでくる。

「ッ!?!」

凝り固まった怨念が髑髏の形を形成して、雨のように降り注ぐ。

「パチュリーー! あいつは一体何をしたんだ!?!」

魔術関連の事に全く詳しくない一護は、フレデリックが何をしたのかをパチュリーーに聞く。

「簡単に言うわよ。フレデリックは自分自身を、邪気を生み出す化物にしたの」

「邪気……?」

「一護は隙を作つてと言つたわね」

「ああ」

「……あいつの隙は、もう作れないわ」

その言葉に、一護は目を見開く。

「な、何でだよ?」

「フレデリックのあの邪気は常に自分自身を守る。打ち消す事も恐らく出来ないわ。何故なら、この世界がそれをさせないから」

「世界……」

「そうよ。スペルによる力は絶対に通じないわ。いえ、それどころか、あらゆる異質な力を寄せ付けられないわよ」

スペルによる力が通じないどころか、それ以外の力も通じない。その言葉が一護たちに絶望感を与える。

「何をチンタラ話している？ 貴様らにそんな暇を与えると思うなよ。怨霊『死の楔』」

フレデリックがスペルを唱えると、ゾゾゾと音を立て、怨霊が現れる。

それが無数の黒い鏃となり、フレデリックの周りを浮遊する。

「死ねええええええっ!!」

一護に向かって鏃状の弾幕が放たれる。

(……スペルが効かねえなら、これしかねえよな！)

一護は何かを決心したように、向かってくる鏃状の弾幕に向かって走る。

「な、何をしているの一護!?!」

一護の行動に驚いたパチュリーが声を上げて言う。

傍から見れば、今の一護の行動は完全に自殺行為だ。

「萃香！ 俺をフレデリックの方に思い切り投げてくれ!」

一護の言葉を聞いた萃香は、一瞬思考を停止させてしまったが、直ぐに行動を起こす。

今はどれだけ一護が馬鹿げた事を言おうと、それに賭けるしかない。

それ程までに切羽詰っている。

だが、萃香の力は殆ど残ってはいない。

フレデリックを殴る時に、殆どの妖力を使ってしまったからだ。

「分かった。けど、これが最後だよ一護」

萃香は一護の方に駆けながら、スペルを唱える。

「萃符『戸隠山投げ』!」

萃香の能力で一護を手元に萃める。

お陰で鏃状の弾幕は、一護に当たる事は無かった。

そして一護を掴み、全力でフレデリックの方に投げ飛ばした。

「何をしている?」

流石のフレデリックも、今の一護の行動には理解できないようだ。

一護はそのままフレデリックの方に吹っ飛ぶ。

「まさか私と正面衝突をし、気絶させようという魂胆か? 下らん」

怨霊の群れが、フレデリックの前で壁を作り出す。

「怨霊の壁に衝突すれば、貴様の身体はどうなるかな?」

「……霊圧を消す」

一護がそう呟いた。

その瞬間、一護の纏っている黒い霊圧、死神の姿が解除された。

これで一護は完全に無防備になってしまったのだ。

「!! 貴様、何を考えている!?!」

この一護の行動にフレデリックは驚き、目を見開く。

「テメエの力が、スペル等による異質の力に過剰に反応するなら、俺自身の中にある異質の力、霊圧を消して、テメエの邪気を突破してやる!!」

一護にとつて、これは賭けに等しい行為。

上手くいかなければ、一護は無防備のまま邪気の力を浴び、死ぬ。

だが、上手くいけば、一護は最大の、フレデリックを倒すチャンスを作れる。

そして……一護は怨霊の壁を突破した。

「何だ?!」

フレデリックは驚く。

突破されると、思っていなかったからだ。

「いくぜ!」

一護は突破すると、直ぐ様態勢を整え、フレデリックの胸元を掴む。

怨霊の壁を突破したと同時に、萃香に投げられた時の力が緩和されたので、態勢を整える事が出来た。

「貴様! 何をする!?!」

フレデリックは一護の掴んでいる手を掴み、引き離そうとするが、一護は離さない。

「離せえ!」

怨霊が一護の周りに浮遊し、今にも襲い掛かろうとしている。

「フレデリック……俺の能力が何か分かるか？」

「何!？」

「……分からねえんなら教えてやる。物質に宿る魂を操る程度の能力だ！」

「……まさか、貴様ああああ!!」

一護の能力を聞いたフレデリックが、尋常じゃない焦りを見せる。何かを察したようだ。

「終わりだ……フレデリック」

一護は空いている手で、フレデリックの腹に手の平を突き出す。その瞬間、ドクンと世界が波打つ。

「止める……黒崎一護！」

「テメエの、邪劫の法の……魔術師達の魂を——解放する！」

「止めるおおおおおおお!!」

その瞬間、凄まじい光と共に怨霊たちが霧散し、フレデリックの世界に輝が入った。

そして、ガラスが割れるような音と共に、フレデリックの世界が潰れ散ったのだ。

いつもの光景、山や青い空、そして博麗神社が、視界に映し出される。

「な、な、何をしやがるツ！ 黒崎一護おおおおお!!」

「——黒斬」

フレデリックの怒涛の叫びも聞く耳持たず、眩くように黒斬と言った。

それと同時に、一護の姿が死神の姿に戻り、右腕から黒い霊圧が溢れ出す。

「何!？」

フレデリックはそれに驚く。

一護は今、スペルを唱えようとしている。

しかも、胸倉を掴まれたままなので、ゼロ距離だ。

『『月牙天衝』!!』

一護は月牙をゼロ距離でフレデリックに放った。
渾身の霊圧を込めた月牙天衝。

今のフレデリックは、自分を守ってくれる力が無い。
それにより、月牙を完全に受け、霊圧による凄まじい爆発が起きた。
「幻想郷に漆黒の柱がたちのぼる。」

「ぐあっ！」

一護は自分の放った月牙天衝の衝撃で、後方に勢いよく吹っ飛んでしまった。

パチュリーもそれに耐えるように、身体を縮める。

萃香は、一護を投げ飛ばした時に、力を殆ど使い果たし、気絶していた。

「……やったよな」

一護は月牙を放った方を見て、フレデリックの安否を確認する。
流星にあの月牙を受けて無事では無いだろう。

天まで届くような黒煙が舞っていて、全く様子が分からない。

「……パチュリー、後どれくらい魔力が残ってる？」

「もう、殆ど無いわ。今の月牙天衝で倒せていないなら、絶望的ね」
「そうか」

一護は自分の残り霊圧を確認する。

(月牙天衝は、撃てて後一・二発くらいか)

「ねえ、一護」

「ん、何だ？」

「どうやって、あの世界を打ち破ったの？」

フレデリックの結果、そして邪気による力。

そのフレデリックの全ての力を、一護はあつという間に打ち砕いてしまった。

魔術師のパチュリーはその力を、どう打ち砕いたかに興味があったのだ。

「簡単さ。あいつの持っている邪劫の法ってやつは、魔術師達の魂が源で出来てんだろ。だから、その魔術師達の魂を、あの本から解放してやったんだよ。俺の能力でな」

「……なるほど、そんな裏技が」

「“物質に宿る魂を操る程度の能力”。その能力のお陰で、あいつの本の力を打ち破ったんだ。まあ、賭けに近い行為だったけどな」

結果、一護は二重の賭けに挑戦した事になったのだ。

フレデリックの邪気の力を、霊圧無しで突破できるかどうか。

邪劫の法の魔術師達の魂を、自分の能力で解放し無力化できるか。

この二つの賭けを、一護は成功させたのだ。

——刹那、パチュリーが黒い弾幕に貫かれた。

「ッ…パチュリー！」

一護の叫び声も空しく、パチュリーは地面に倒れ伏した。

「黒崎……一護……」

一護がパチュリーに駆け寄ろうとした途端、フレデリックの声が聞こえてきた。

足を止め、月牙で出来た黒煙の方を見る。

そこから、フレデリックが歩いて来ていた。

身体は、かなりボロボロで、戦える状態とは思えない。

「フレデリック…：…テメエ、まだ立てんのかよ？」

フレデリックは足を止め、答える。

「…私を舐めるなよ。貴様に邪劫の法は崩されたが、まだ私には無聖石がある。それに私にはまだ…」

フレデリックがここまで言ったところで、一護は直ぐ様攻撃を仕掛ける。

こう会話している間にも、フレデリックは魔力で身体を治療しようとしているからだ。

(今なら、まだ間に合う！)

一護は素早くスペルを唱える。

「黒斬『月牙天衝』！」

一護が残り僅かの霊圧で、月牙天衝を放つ。

「……フツ」

フレデリックが小さい笑みを浮かべ、この場では有り得ない物を取り出した。

「…………ツ!? 拳、銃…………?」

そう、フレデリックは拳銃を取り出したのだ。

その銃の種類はモーゼルミリタリーだ。

「褒めてやるぞ…………黒崎一護」

迫り来る月牙に全く動揺せず、話し続ける。

「んなもんが、月牙に通用すると思ってるのかよ!?!」

「どうかな」

フレデリックが月牙の方に銃口を向ける。

月牙がただの銃に負ける訳が無い。

…………そのはずだった。

フレデリックの握るモーゼルミリタリーが火を吹く。

弾丸が月牙を貫き、いとも簡単に霧散した。

「月牙が…………消滅しただと!?!」

一護は目を疑う。

月牙が銃の弾丸に負けてしまったのだ。

「切り札というのは、最後まで取っておくものだぞ?」

続け様に銃声が発せられる。

左腕、もも、腹、肩…………。

一護の纏っている黒い霊圧が貫かれ、徐々に消えていく。

肉を抉る弾丸の破片。

それが深々と刺さった瞬間に、力が急激に失われていく。

(一体…………何が…………!?)

「私が聖無石と邪劫の法だけで、貴様らに復讐すると思ってるか?」

「何だと…………」

復讐…………この単語が一護には今だ理解できない。

「奥の手まで喋る程、愚かではない。お前らは、奥の手を全て出し切ったようだがな」

さらにもう一発。

フレデリックの弾丸が一護の右腕を打ち抜いた。

右腕の黒い霊圧が、霧散していき、一護の纏っている全ての霊圧が消えていく。

フレデリックは一護に歩み寄り、無造作に一護の腹を蹴り上げた。
「ぐ……ッ！」

一護は衝撃のあまり転がる。

「何故ただの鉛球が、貴様や月牙を打ち抜けたか、知りたいか？」
「……何？」

「この銃の弾丸は特別製なんだよ。この弾を相手にして、防ぎ切れる力は存在しない。今の私でも不可能だし、悪魔ですら確実に殺しきる事が出来る代物だからな。そう、これは、かの磔刑に使われた釘だよ」
「磔刑？」

「神人の肉を貫き、血を浴びたのはロンギヌスの槍だけじゃない。十字架に磔にされた時に、手首と足に突き刺さっていた大釘の方が、充分に血を吸い込んでいた訳だ。神人の血肉を裂いた釘を独逸国へと持ち帰り、鍍かして弾丸を鑄造したのさ」

一護は言葉を発する事が出来ない。

「さらに、この弾丸の内部には、ある協会が開発した霊薬が仕込んである。あらゆる区別なく、どんな異質の力でも分解する特殊な霊薬だな。勿論、貴様のような力でも、一瞬で分解できてしまう霊薬だ」

——更なる絶望。

一護は完全に絶望してしまいかけている。

（俺は、死ぬのか……）

そんな言葉が頭を過ぎった。

「これで、最後だ黒崎一護。脳に一発撃ち込み、終わりにしてやろう」
銃口を一護の頭に向ける。

「死ねえ」

銃声が轟く。

終わった……かと思った。

だが、一護の頭には何も貫かれていない。
何故なら、一護は放たれた弾丸の位置にいないからだ。

「貴様は……」

フレデリックは一護がいる方向を見る。

そこには、一護の横に一人の少女が立っていた。

そう——博麗霊夢だ。

「博麗の巫女か」

「誰よ、あんた？」

毅然とした態度で登場した霊夢だったのだった。

《3》

「誰よ……あんた？」

窮地に陥った一護を、霊夢が救い出した。

もし霊夢が来なかったら、今頃一護は頭に弾が貫通し、即死だっただろう。

ただし霊夢は口には出さないが、実を言うと財布を忘れたから、取りに戻ろうとしたら偶然こんな展開になっていたのだ。

簡単に言うと、一護は財布のお陰で助かったと言っても過言では無い。

「博麗神社とその境内をこんなに滅茶苦茶にして、死ぬ覚悟は出来るわね」

周りを見渡す。

確かに境内には大穴が開き、博麗神社の所々が崩壊している。

まあ、あんな熾烈な弾幕勝負をしていれば仕方の無い事。

ただし、殆どが一護の月牙天衝によるスペルが原因だが。

「……貴様が今の博麗の巫女か？」

フレデリックは銃を下ろし、問いかける。

「私が先に誰？ と言ったのよ。先に答えなさい」

「……幻獄七夢卿の一人。夢殺しの暗黒魔術師 フレデリック・グレ
アムだ」

「——ッ！ 幻獄七夢卿……」

幻獄七夢卿という単語に霊夢は面喰らった。

だが、直ぐに態度を戻す。

「あんたが、その一人。良かったわ。ようやく、これで幻獄七夢卿の事を聞きだせる」

霊夢がスペルカードを取り出し、臨戦態勢に入る。

「幻獄七夢卿の事を聞き出すか……。面白い事を言う。聞き出せるだけでも思ってるのか？」

「聞き出すわよ。拷問をしてでも」

「巫女とは思えないような事を吐く。」

「博麗の巫女と博麗の■■■■」

フレデリックが博麗の巫女の続きを言ったが、何を言ったか聞き取れなかった。

「……霊夢、俺の霊圧は残り少ない。月牙天衝は撃てて後一発が限度だ」

「分かってるわよ。あんたの霊圧を見れば分かる。けど、あいつも結構弱ってるわね。私に来るまでに、粗方終わらしたようだけど……」

「あいつには聖無石つつう魔力を無限に供給する魔具がある。だから、時間を掛けたら、こつちが不利になる。それに、あいつが持つてる銃は弾幕や結界などの異質の力は全て分解し、無効化される」

「聖無石と鉄砲……分かったわ。じゃあ、私があいつの隙を作る。だから一護は、最後の月牙であいつを倒して」

「簡単に言うが、あいつの隙を作るのは大変だぜ」

「そんな事、分かってるわよ！ 神霊『夢想封印』！」

霊夢がスペルを唱え、フレデリックに駆け出す。

複数の光弾がフレデリックに殺到する。

「博麗の巫女……貴様を殺す。怒符『ヘルクラッド』！」

フレデリックがスペルを唱えると、槍状の弾幕が展開され、霊夢の弾幕を相殺していく。

「怒符『スロウトハンド』！」

続けてフレデリックがスペルを唱える。

空間に穴が開き、そこから黒い腕がいくつも現れ、霊夢に襲い掛かる。

「この程度のスペルで、私に勝てると思わないでね」

霊夢は向かってくる黒い腕を、全て紙一重で躲しながらフレデリックに向かう。

「流石は博麗の巫女だな。だが、これならどうだ？ 獄炎『パジエリ

マ』！」

フレデリックの頭上に火の鳥が現れる。

だが、大きさが今までの比ではない。

まるで、燬燬王。

ルキアの処刑時に使われた炎の鳥だ。

「どうだ、これなら簡単には対処できんぞ」

「そのようね。けど、あんたもかなりの魔力を消耗したんじゃない？」

「ああ。だが、この程度の魔力は、聖無石で直ぐに元に戻せる」

それを言い終わると、炎の鳥が霊夢に向かって飛んだ。

「……チツ」

霊夢は後ろを少し振り向き、舌打ちをする。

そこには博麗神社がある。

そう、避けたら博麗神社は炎の鳥に燃やし尽くされる。

「最悪ね。神技『八方鬼縛陣』！」

霊夢がスペルを唱え、結界を張る。

炎の鳥から博麗神社を守れるくらいの大サイズの結界だ。

「結界か」

フレデリックが呟くように言う。

「くっ……流石にきついわね！」

霊夢が両手を前に出し、結界に霊力を注ぎながら、何とか炎の鳥に
対抗している。

「けど、もうちよつとで……」

炎の鳥の魔力が消える。

放った魔力を無限に保つ事は不可能。

即ち、時間を掛けて防ぎきれば、炎の鳥は自然に消える。

だが、予想外の事が起きた。

凄まじい音が一瞬轟いたかと思うと、炎の鳥も霊夢の結界も霧散し
た。

「な……ん!?」

霊夢の右肩から鮮血が出ている。

何か小さな物に、貫かれたようだ。

「どうだ、この銃の威力は？」

フレデリックが銃口を霊夢に向けながら言う。

「どうやら、あの銃で炎の鳥も霊夢の結界も消し去ったようだ。」

そして、弾丸はそのまま霊夢の右肩に貫通した。

フレデリックが持つ銃の弾丸は、磔刑に使われた釘と霊薬で出来ている。

その両方の力で、あらゆる異質の力は分解され、無に還る。

即ち、どのような方法を用いても防げない弾丸だ。

「……霊符『夢想妙珠』！」

「――！」

霊夢はフレデリックの話を聞かずに、スペルを唱える。

こうしている間にも、フレデリックは魔力を回復するからだ。

霊夢の周りに八個の光弾が展開され、フレデリックに放たれる。複数の光弾に比べて、威力は高い。

「成程。賢明な手段だな。俺の魔力の回復時間をやらずに、一気に攻めて来るか」

「当然よ！」

霊夢はまるで右肩の傷が無いように、動き出す。

「……確かに俺の魔力は炎の鳥により、殆ど無くなったが……怨霊『スピズエイド』」

フレデリックがスペルを唱えると、半透明の暗黒色の結界が張られた。

それで霊夢の光弾から身を守る。

だが、それにより結界に輝が入り、今にも割れそうになった。

「良い弾幕だな。だが、俺の結界の前では無力に等しい」

フレデリックがそう言うと、輝が入った結界が何も無かったかのようになり、元に戻った。

「面倒な結界ね！」

霊夢が結界の近くまで行くと、スペルを唱える。

「宝符『陰陽宝玉』！」

霊夢の手の先から光りが発せられ、そこから気弾が放たれた。

その気弾が結界にぶつかる。

だが、結界には傷一つ出来ていない。

「私のスペルが、効いていない!？」

「無駄だ。この結界には私の魔力が込められている。そう簡単には壊せないぞ」

フレデリックは自分の魔力で結界を強化したようだ。

これで、自分の魔力の回復の時間稼ぎをするつもりだろう。

「くそ……だったら、これなら………宝具『陰陽鬼神玉』!!」

霊夢の先程の手先から巨大な光の弾が現れ、再び結界を襲う。

このスペルは陰陽宝玉の強化版のようなスペルだ。

「だから、無駄だと言っている………何?」

フレデリックの余裕の笑みが、少し歪んだ。

結界に輝が入ったのだ。

(後、少し!)

霊夢は霊力を力強く込める。

だが、後一押しというところで結界が割れない。

「くくく、残念だったな、博麗の巫女。貴様は無駄に霊力を使っただけだ」

「ちっ、くしょう……」

霊夢の光の弾が弱まっていく。

そろそろ霊力が切れそうだ。

「無駄じゃ無いぜ! 霊夢!」

突然、霊夢の背後から聞きなれた声が聞こえてきた。

その声の主は……

「こんな近くでドンパチと祭り事をやられちゃ、嫌でも目が覚めるってのー!」

魔理沙だった。

萃香との弾幕勝負で、動けない程のダメージを受け寝込んでいた魔理沙が、起き上がりミニ八卦炉を構えている。

「魔理………沙」

霊夢は後ろを振り向き、魔理沙を確認すると、弱々しく言った。

「いくぜ、霊夢。恋符『マスタースパーク』!!」

ミニ八卦炉に魔力が吸収され、そこから極太レーザーが放たれた。マスタースパークがフレデリックの結界に激突する。

「ツ! ……まさか、ここで魔法使いの助っ人とは予想外だ!」

瞬間、マスタースパークが結界を打ち破った。

「チツ」

フレデリックは結界が破られたと同時に、空中に跳び、極太レーザーを避ける。

霊夢も巻き込まれないように、横に跳び避けた。

「くつ、やっぱ、一発が限界だったぜ」

スペルを唱えた魔理沙は、そのまま地面に倒れ伏した。

動かせない身体を強引的に動かして、マスタースパークを放ったのだ。倒れても仕方が無い。

「一発でも、よくやってくれたわ魔理沙。神霊『夢想封印』!」

霊夢がスペルを唱え、複数の光弾が上空にいるフレデリックを襲う。

「くそ……まだ魔力は殆ど回復していない。だったら」

フレデリックが銃を構え、向かってくる光弾に向かって弾を発射する。

自分に向かってくる弾幕だけを的確に捉え、発射された弾丸は全て光弾に当たった。

それにより、光弾が霧散していく。

「ハハハハハ、無駄な足掻きだったな、博麗の巫女! やはり貴様では、私に傷一つ付けられんようだ」

「……私の事ばっか見すぎよ、あんた」

「何?」

その刹那、フレデリックの背後に一護が現れた。

「——しまった!!」

後ろを振り向いたフレデリックは、険しい表情になる。

一護は死神の姿に戻り、月牙を放つ構えをとっていたからだ。

「黒斬『月牙天衝』!!」

一護は残り少ない霊圧で、渾身の月牙天衝を放った。それと同時に、一護の右腕に妙な違和感が流れる。

(何だ……「右腕の霊圧が今、変に感じた」ような……?)

「くそおおおおお!!」

月牙を喰らったフレデリックが、身体をボロボロにさせながら、地面に落ちていく。

「黒崎……一護おおおおお!!」

落下しながら、フレデリックは銃口を一護に向ける。

「死ねええええ!!」

だが……銃からは何も発射されない。

どうやら、弾切れのようだ。

恐らく、霊夢の弾幕に使い果たしたのだろう。

「ば、かな……」

フレデリックが弾切れを信じきれない目で見ている。

「しぶといわね。まだ、そんな銃を構える力が残っているなんて」

霊夢が落下してくるフレデリックを見上げながら言う。

「私も残り少ない霊力で、スペルを唱えさせて頂くわよ。神霊『夢想封印』!」

霊夢から複数の光弾が放たれる。

それが全てフレデリックに被弾した。

「ぐふっ」

フレデリックは口から血を吐き、そのまま地面に撃墜した。

「今ね」

霊夢は何枚かのお札を、地面に叩きつけられたフレデリックに投げつけ、それを四肢に貼り付けた。

「これで終わりよ。幻獄七夢卿」

「博麗……がア」

フレデリックが四肢を動かさそうとするが、全く動かない。

「無駄よ。今、あんたの四肢は完全に封じたから。しばらくは動けないわ」

「貴様……!」

フレデリックは四肢を動かすのを止め、霊夢を睨みつける。憎しみや殺気が込められた眼。

霊夢はそれに一瞬ビクついた。

「霊夢、終わったか？」

「ええ」

一護は空中から霊夢の横に下りる。

そして、倒れているフレデリックを見る。

「……随分と無様な姿になったな、フレデリック」

一護はフレデリックを見下ろしながら言う。

既に霊圧が限界状態だった一護は、死神の姿を解き、普段着に戻っている。

「くそがああ……これ以上、博麗の前で醜い姿を見せるのは、御免だ」

フレデリックがそう言うと、掌に聖無石が現れた。

「！ テメエ、まだ……！」

瞬間、霊夢と一護は目を疑った。

フレデリックが自分の聖無石を握り潰したのだ。

聖無石がガラスのように割れ、欠片が全て霧散していった。

「な、何してんだよ!? テメエ……?」

理解できない事に、一護が声を荒げた。

「……言っただろ。これ以上、博麗の前で醜い姿を見せたくないと」

その瞬間、フレデリックの身体が徐々に消え始めた。

「テ、テメエ……どうしたんだよ!」

「俺の生命は『神聖闘争』以降は聖無石に維持されてきた。その聖無石が砕けた今、俺の魂は消えていく」

「聖無石は生命を維持まで出来んのか?」

「ああ。無尽蔵の魔力のお陰で……だ」

聖無石の魔力で生き永らえてきたフレデリック。

それが潰れた今、フレデリックの生命の維持が出来なくなり、魂が消えようとしているのだ。

それに対して、一護は頭が回らなくなっている。

「あんたには聞きたい事が山ほどあるのよ! 勝手に消えるなんて卑

「怯よ」

「聞きたい事があるなら早く言った方が良い。私に残された時間はごく僅かだからな」

「どうやら、フレデリックは今なら質問をして答えてくれるようだ。だが、それはフレデリックが消えるまで。」

「質問できる数も限られてくる。」

そんな中、一護が霊夢より先に口を開く。

「待てよ。俺も聞きたい事がある。テメエが見せたあの悪夢は、全てフィクションなのか？」

「霊夢を差し置いて、先に一護が質問した。」

「……違うな」

「何!?! じゃあ、18年前の連続殺人と集団失踪事件は本当に有った事なのか?」

頭があまり回らない一護は、真っ先に思いついたことを聞いた。

「当然だ。俺が空座町に滞在した時の話になるがな」

「どういう事だ?」

「話すのに時間が掛かるな。簡単に言おう。俺は空座町で博麗に敗れた」

「空座町で!?!」

「ちよつと一護。私も聞きたい事があるの。質問させて」

自分を差し置いて質問をする一護を退け、霊夢が問う。

「まだ色々と聞きたい事が有ったが、仕方ない。」

「あんた達の目的は何?」

一護が一番最初に聞こうと思っていた事を、霊夢が聞いた。

「……目的か。私たち一人一人は独自の野望を持って活動している組織だ。だが、一つだけ共通の目的がある」

「共通の目的……?」

「ああ。俺たちの目的は『真の自由』を得る事だ」

「真の自由? 何よ、それ?」

全く訳の分からない目的に、霊夢は理解できなかった。

「そろそろ俺の魂は消える。その質問に答える時間は無い……が、最

後に一つ面白い事を教えよう」

「面白いこと？」

「刹蘭……奴の正体は、外の世界でも有名な、ある伯爵だ」

「伯爵？」

「ああ。……最後に黒崎一護。貴様の名を聞かせてくれ」

「名前だと？」

「ああ。名前というより、二つ名に困んだ……いや、いい。二つ名で構わん」

二つ名を含めた名。

一護にはまだ二つ名が存在しない。

決めていないからだ。

「俺は……」

一護は思案する。

ちようど今、決めようと思ったからだ。

「俺は——博麗の死神 黒崎一護だ」

咄嗟に思いついた自分の二つ名を、一護は言った。

博麗の死神……今この時をもって、一護の二つ名が決まったのだっ
た。

第五章 〈東方虚永夜篇〉

第33斬【フランとの絆物語】

《1》

時は幻獄七夢卿の一人、フレデリック・グレアムを倒して数週間。核なる戦いが終わり、ようやく一護に平和な時間が戻った。

人が人成す円環する己の日常。戦いもなく、異変も起こることのない一時の生活。つまるところ、学校の休日、仕事の公休などが当て嵌るだろう。自分が自分である世界に入浸かれるのだ。

そんな——黒崎一護の平和な日常は、とてもじゃないが非日常へと変わる。

*

「……どうして、こうなったんだ？」

幻想郷に唯一存在する人間が暮らす人里を歩きながら、一護は溜息混じりに呟く。

あれから実際に何も起こることもなく、フレデリック戦後は霊夢から昔小耳に挟んだ、過去の歴代博麗の巫女が異変を記してきた筆録書に、面倒くさそうに霊夢が何やら書いていたことくらい。

特筆して、この程度のことくらいしか言えない、何もない日常だったのだ。

しかし、現在は違う。

これを日常と言うのか非日常と言うのかは、恐らく賛否両論となるだろう。

なぜなら今、一護はとある少女と一緒にいるから……

「ねえねえ、いっちー！ あれは何〜!？」

一護の横には、周りを見渡しながら無垢な声を上げている一人の少女がいる。まるで遊園地に遣って来た子供のようなはしゃぎ様で、目をキラキラさせながら少女がある一点を指差す。

その先には団子屋があった。

あそこは人里に初めて来た時に、上白沢慧音に連れられた場所だ。

「あれは甘い菓子が食える場所だ」

「甘いお菓子っ!」

「食いたいか?」

「うん!」

少女は可愛らしく頷いて答える。

頷くときに、黄色い綺麗な髪が揺れた。

そう、一護の隣にいる少女の正体はフランドール・スカーレット。

レミアアの妹にして吸血鬼。

一護と会うまでは幽閉されていたが、その後からはフランも自由に外を出歩けるようになった。

ただし、吸血鬼なので太陽は苦手。

だから一護は日傘を差しながら、フランと人里に居るのだ。

「それじゃあ、食いに行くか」

こうして二人は、団子屋へと向かったのだった。

——何故、一護がフランと一緒に人里に来たかと言うと。

話は1時間程前に遡る。

*

まさに晴天と言う言葉が似合う、天気の良い中——黒崎一護は一人、博麗神社の縁側で茶を啜りながら、空を眺めていた。

空を見つめる表情はポケ〜としており、まさに平和ボケした人間の外面的に表していると見えよう。

そして傍らの煎餅を齧る。

もう、完全に博麗神社暮らしを物にしている……と言うより、ここ
の神社の巫女である博麗霊夢に似てきている。

「……平和だな」

湯呑みを置き、呟く。

フレデリック戦の後、これといって激しい死闘は一切無い。

あるとすれば、あの後、萃香との激烈な弾幕勝負くらいである。

それ以外は、これといって何も無い。特に邪悪な妖怪が出たという話もないし、それ以外の人的事件も何ら起きていない。

「ん〜」

一護は背伸びし、立ち上がる。

「さて、そろそろ庭掃除の続きでもするか」

近くにあった箒を取り、境内の落ち葉を掃き清掃を再開する。境内はフレデリック戦の時、暫しメチャクチャになっていたが、今は綺麗に元通りになっている。

勿論、元通りにしたのは一護。

理由は殆どが月牙天衝のせいだからって事で、霊夢に強引的に復旧作業をさせられたのだ。正直に思い返せば、あの仕事は何よりも大変だった。

「……にしても、いい天気だな。風が気持ちいいぜ」

空は快晴。

風はちょうど良いくらいの感じで吹いている。まさにお出かけ気分、ピクニック気分。気温は暖かく、少しでも横になれば一瞬で寝てしまいそうだ。

「こんな平和が、後いつまで続くんだろうな」

誰に言うでもなく呟く。

霊夢は今、八雲紫に用事があるとかで、八雲の家に行っていて、今は一護一人である。

だから、答えが返ってくる訳が無かった。

「そうね。いつまで続くのでしょうか？ 天罰『スターオブダビデ』」
誰かが一護の言葉を返してきた。聞こえるはずもない、スペル名付きで……。

瞬間、妖力を感じた一護は声のした方角である上空を見上げる。

そして目を見開いて驚愕する。

なぜなら、自分に複数の弾幕と、紅いレーザーが目の前まで迫ってきていたのだから。

「うおおおおおおおおおおおおお!!!」

一護は絶叫を上げながら、弾幕とレーザーを間髪を置かずで回避した。ほんの少しでも確認するのを遅れていたら、回避は出来なかっただろう。

「平和ボケはしていないようね、一護」

一護はもう一度、上空を確認する。

そこには咲夜の差している日傘に入った、レミリアとフランの三人がいた。

「テ、テメエー！ 何すんだよ!？」

そこに紅魔館の吸血鬼である二人とメイド長がいた事には特に触れず、まずは何より一護は弾幕とレーザーが被弾した石畳を指差す。

綺麗に砕かれており、もし被弾していたら洒落にならない。

「大丈夫よ。力は抜いたから、例え当たったとしても、それ程まで致命的にはならないわ」

「そっちじゃねえよ！ せつかく集めた落ち葉が散ったじゃねえか！

しかも地面を砕きやがって、誰が元通りにすると思ってるんだよ!？」

この石畳修復するの大変なんだぞ！」

「……怒るところはそこなのね」

呆れた表情になるレミリア。

三人が一護の前に下りてくる。

「……で、何しに来たんだ？ お前ら」

「久し振りに遊びに来て上げたのよ」

「そっ、遊びに来たんだよろ！」

突然、フランが一護に抱きついてきた。

一護はそれを受け入れるように、フランを受け止める。

「お、おいフラン。急に何だよ？」

一護の胸に頬を摩るフラン。

何故かこの時、霊夢に言われたロリコンという単語が頭に浮かんできた。とりあえず脳内で否定しておく。

「今日は一護と二人で、人間の里に遊びに行きたいのだから！」

フランが一護の顔を上目遣いで見上げながら言う。

「は……人里に？」

「ええ、そうです。妹様の頼みです。何も言わずに聞き入れなさい」

何故か咲夜がナイフチラつかせながら、一護に向かって言う。

傍から見えれば脅迫以外の何ものでもない。その時点で選択肢など皆無だ。

もし断ればBAD END直行であるし、こんな満面無垢な笑みを浮かべるフランを前にして、断れる勇氣もない。

「……はい」

そんな状態の一護は、一言答え、首を縦に振った。

とりあえず石畳を砕かれた件は、また霊夢に説教を食らうことを覚悟したのだった。

*

そんな事があって、一護とフランは人里にいる。

フランは人里に来るのが初めてらしい。

だから、フランは一護と人里に行きたかったのだろう。自分を救い、誰よりも慕う相手と。

「いっちー、この団子美味しいね」

フランが串団子を食べながら言う。

本当に美味しそうに食べるフランを見て、一護は微笑ましくなった。

幽閉されていた時では、絶対に見られない笑顔だ。

「……つうかフラン。その『いっちー』って何だよ？」

「いっちーはいっちーだよ。一護だからいっちー」

いっちー。

まるで何処その副隊長を思い出させる呼び方だ。

「お姉様がね、お友達はあだ名で呼ぶもんだって言うから、私がいっちーのあだ名を決めて上げたの」

「そうか。じゃあ、俺も何かお前にあだ名を決めてやらねえとな。俺だけあだ名で呼ばれるのは卑怯だし」

「えー！ 良いの!？」

「ああ。けど、少し時間が掛かるな。あだ名って中々思いつかねえから」

「いつでもいいよ。いっちーが決めてくれるんだったら、何百年でも待つからー!」

「な、何百年も待たせねえよ」

恐らく百年もしないうちに、自分がこの世にいない可能性大だ。

「私、あだ名とか初めてだからすぐドキドキするよ」

フランが眩しいくらい笑顔を見せてくる。

これにドキツとしてしまったら、霊夢にロリコンと言われても、反論できなくなる。

「そんじゃあ、そろそろ行くか」

「うん」

団子を食べ終えた二人は、団子屋を後にした。

「——お、一護君じゃないか。久し振りだな」

団子屋を後にした途端、さながら狙ったかのように上白沢慧音が一護とフランの前に現れた。

「慧音さん。こちらこそ久し振りです」

フランは誰なのか分からない顔をしている。

勿論、フランと慧音は初対面だ。

「ん、一護君。その子は誰だ？」

「こいつはフラン。まあ慧音さんは多分察しがついたと思うけど……」

「ああ、勿論だ。君の娘だろ」

「は？」

「似たような色の髪、隠す必要はないぞ。そうかそうか、君も遂にか。相手は誰だ？ 霊夢か？ それとも妖夢か？ いや、髪の色から察するに魔理沙あたりが濃厚だろ。けど君の好みは個人的には年上の女性かと思っていたが、私としたことが履き違えていたよ。いち学び舎を預かる先生として、大誤算だ」

「な、ななな何勘違いしてんだよアンタ！ 察しってそっちじゃねえよ。俺はそういう意味で言ったんじゃないねえ！」

「ま、まさか君、こんな小さい子を……いや、人の趣向にとやかくは言わんが、ああ、そうなのか。私はとても残念だよ」

「……………行くぞフラン」

と、踵を返す。

「あはは、待て待て冗談だよ。少しからかってみただけだ。そんなに怒らないでくれ」

……—と、そんなやり取りは終えて。

「そうか。紅魔館の吸血鬼か。私は上白沢慧音。この人里で寺子屋の先生をしている者だ。よろしくなフラン」

改めて、慧音はフランと少女と自己紹介をする。

慧音は言い終わると、フランに手を差し出す。

握手を求めているのだろう。

「私はフランドール・スカーレット。いっちーの友達なの。よろしくね」

フランも自己紹介をし、慧音の差し出してきた手に、自分の手を持っていく。

そして、二人は握手を交わしたのだった。

*

——その頃、紅魔館では広い部屋の中、レミリアがテーブルに付き、紅茶を飲んでいる。

紅茶は血のように真っ赤だが、恐らく人間の血では無いだろう。

……そうであつて欲しい。

「咲夜、フランは今楽しんでるかしら？」

紅茶を啜りながら、自分の横に立つ咲夜に聞く。

「ええ、楽しんでることでしょう。初めて行く、人里ですから。それに、妹様は一護さんに好意を寄せていますし、楽しくないわけございません」

レミリアはふと、咲夜の使ったある単語が気になった。

「好意……？」

レミリアは紅茶の入ったカップをテーブルに置き問う。

「はい。妹様は一護さんに恋心を抱いているはずです。なぜ分かるかと言いますと、同じ恋を抱いている者だからです。勿論、私が恋心を抱いているのは、お嬢」

「フランが恋心をね……」

レミリアは少し悪寒を感じ、途中で咲夜の話聞くのを止めた。

「……あの子の気が狂れなくなつたのは、一護の存在が大きいって事ね」

何かを理解すると、レミリアは再び紅茶に口をつけた。

*

これは一護も知っている吸血鬼姉妹の過去の物語——
フランは自分の狂気と言う概念に囚われ、外の世界を知らなかった。

なぜ、どうして、フランがそこまで狂気に襲われたのか、その経緯は簡単だ。

既にフランからは記憶が失われているが、簡易的にレミリアから一護に教えられた。

そもそも二人は幻想郷の出身ではなく、一護たちのいた世界からやって来たのだ。スカーレット家はとある国の元貴族。しかし時代が古く、スカーレット家は人を殺しては、その血を浴び永遠の若さを保とうとしている貴族であると、民衆から思われていた。

だが、それは紛れもない嘘。それを広めたのはスカーレット家を憎む、衰退していった貴族である。つまるところ言うと、ただの妬みから発生したのだ。

当時のスカーレット家は国の中枢を成す貴族で、それを妬む他貴族はいたものの嘘を蒔く貴族はいなかった。しかしとある貴族は妬み、根拠もなくそもない嘘を平気で蒔き、民衆を疑心暗鬼にさせた。

そこで、とある貴族がその嘘の真否を確かめるため、スカーレット家に趣いて確認したところ、そう言った嘘に繋がるものは何も出て来なかった。これで、嘘も晴れるとスカーレット家のレミリアとフランの夫婦にあたる二人はホッとした。

だが、そこで見られてはいけけないものを見られてしまった。

それは幼子、フランの小さな牙と黒い蝙蝠の羽である。

まだ幼子であるフランは、急に見ず知らずの人間たちが自分の家に押し入ってきたのに混乱し、怯え、不意に見せてはならないものを人間に見せてしまったのだ。

そもそもスカーレット家は夫婦ともに、古くから続いた真祖直径の一家なのである。昔は人の血を飲んではいたが、時代が変わるごとに人間と平和に暮らせる日を夢見た吸血鬼は、その特異な体質から通常

の人間の何倍も国のために仕事に励み、そして国の中枢を成す貴族にまでなった。

そして人の血を飲むことを止め、じよじよにはあるが血を飲まなくてもすむ吸血鬼へと変質していった。

しかし吸血鬼の羽や牙、身体力は残ったものの人間と何ら変わらぬ生活を送っていた。

そして、その瞬間に、フランの羽を見た人間たちは化物として捉え、スカーレット家の人間を捕らえようとしたのだ。

そこで母と父がフランとレミリアを連れて、驚異の身体能力により国から逃げる事ができた。

だが、これからの生活は地獄だった。

元々貴族という事だからではない。これから先、人間たちから逃げ回って生活しなければいけないからだ。

何度も何度も住まう場所を変えていき、数回目、人をあまり寄せ付けない山奥で、簡単な木製の小屋のような家で生活していた。

この時、レミリアとしては毎日働いている父と母がいつも一緒にいるから、この生活を満足していた。大変で、辛いこともたくさんあるけど、それでも家族四人が毎日一緒にいるだけで、それがとても嬉しかった。

貧相な食事、古く汚い服、本当に最低限のものしかない生活用品、小さな家。それだけでもレミリア、そしてフランは家族がいるだけで温かいし、食事も貴族暮らしの時より美味しく感じた。

——そんな生活が続いて、数年後……その幸せな時は一瞬で崩壊した。

スカーレット家とはある山奥にいますと言う情報が、故郷の国に流れ、大々的に抹殺へと動いてしまった。

それは夜の、一瞬の出来事だった。

スカーレット家が住む山は取り押さえられ、国から来た武装集団が爆撃、放火と、そして暴力が始まる。

食事をしている瞬間を狙われたスカーレット家は、瞬時に完全包囲されているのを理解した。そこで捕まれば自分の娘も殺されると

悟った父は、母に娘たちを託し一人で数千の兵に挑んだ。自分の愛する家族に逃げ道を作るため、一定の箇所に吸血鬼の力を見せつけ、数多の兵を薙ぎ払い、それを突くように娘を担いだ母は走った。

レミリアはこの時、何も恥じぬ声調で、この時自分は一番涙を流したといった。

愛する父が自分を守るために戦った。それが誇らしかったが、とてもじゃない悲しみと絶望があった。それは母もフランも同じだ。

そして随分逃げたところで、母とフランが三人になったところを、狙うような策謀していた感じで数百の兵が現れた。

この時、もしかしたら母はレミリアとフランを見捨てたら逃げられたかもしれない。しかしそれをしなかった母は、本当に子供を守る意思を露にし、自分に宿る吸血鬼の力を解放した。

だが、数百の兵には敵わず、戦うことのできないフランとレミリアを守り亡くなったという。

この瞬間、レミリアは糸が切れたかのように絶望し、全てが終わったと思った。

しかしフランは違った。

自分の愛する父と母が殺され、全てが狂ったのだ。黒い羽は砕け、代わりに水晶のようになり、驚異的な力を見せつけ、有り得ない域で兵を惨殺していった。

その光景を唾然と見ていたレミリアは、死に際に母と父の言葉を思い出す。

……………思い出して、絶望からフランを救い出し、そして誰かが呟いた。

「その勇気、絶望から立ち上がる希望。とても素晴らしい。さあ君たちを助けてあげよう。俺の世界へ」

そこで全てが変わった。

二人は何の前触れもなく、幻想郷にいたのだ。

ここまでがレミリアから聞いた簡易的な話し。

いろいろと省かれて話したが、レミリア曰く母と父を目の前で失ったのだ、狂気の原因だと言った。

*

そして話は戻り、ある屋敷では——
とある計画が実行されようとしていた。

「今日の夜、月を隠すわよ。良いわね」

一人の女性が、前に立つ二人の少女に告げる。

それを聞いた二人はコクリと頷く。

「今回のこの計画で、博麗の巫女などの異変解決に携わる人達が動くはずよ。あなた達はそれを止める役に回ってもらおうわ」

「はい。師匠」

一人の少女が答える。

なぜ月を隠そうとしているのかは分からない。

だが、再び大きな異変が起きようとしているのは分かる。

「今回、あなたには大いに期待しているわよ」

女性は二人の少女から視線を、部屋の壁の方に移す。

そこには一人の男が立っている。

コート状の死神のような白い死覇装を着ている男。

そう……そいつは

「ウルキオラ」

女性が、その人の名を言った。

ウルキオラ・シファード。

新たに起こる異変に、ウルキオラが参戦する。

《2》

太陽が沈み、丸い月が顔を出す。

幻想郷に暗い夜が訪れた。

宵闇に包まれ、人々が寝静まった人間の里。

人の気配は無く、建物の明かりが一切照らされていない。

昼間とは豪い違いようである。

そんな人里に二人の男女が歩いている。

男はオレンジの髪に、眉間に皺を寄せている。

女は黄色い髪に、小柄な体躯で可愛らしい顔をしている。

パツと見、男が小さい女の子を誘拐しようとしているようにも見える。

だが、それは違う。

この二人の男女は、黒崎一護とフランドール・スカーレットだ。

人里に遊びに来たんだが、そこで寺子屋の先生をしている上白沢慧音と出会い、慧音宅で夜中まで話し込んでしまったのだ。

勿論、夕飯は慧音宅で済ませた。

「たく、まさかもうこんなに暗くなってるなんて思わなかったぜ」

一護が溜め息混じりに言いながら、頭を抱える。

こんな夜遅くまで、フランと一緒に出歩いていたのだ。

霊夢に何て言われた物か。

ロリコン。

そんな単語が一護の頭の中で泳いでいる。

「誤解されるだろうな」

弁解しようが、霊夢は恐らく聞く耳を持たないだろう。

何せ、一護には不可抗力な前科があるのだから。

「……………」

フランが月を見たまま黙っている。

何かあったのだろうか。

「どうした、フラン？」

一護の言葉に我に返ったのか、少し表情がビクついた。

因みに日傘は、太陽が出ていないので閉じている。

「え、えつとね……………今日のお月様、少し変だなくって思っ」

「月……………」

フランの言葉を聞いて、一護は月を見る。

今日は綺麗な満月で、深夜まで夜空を見ていたい気になるような感じだ。霊夢のことだから月見団子に一杯やっていたりするかもだ。

「……………満月がどうしたんだ？」

「少しだけ……………あのお月様、おかしくない？——形が」

「形？」

一護は満月をよく見る。

そして気付いた。

「満月が——欠けてやがる」

そう、綺麗な満月のはずが、ほんの少しだけ欠けていたのだ。

*

その頃、博麗神社でも二人の女性が、その月の異変に気付いていた。

「……紫、月がおかしいわね」

「ええ、霊夢も気付いていたのね」

二人の女性が縁側に座りながら、欠けた満月を見ている。

その二人の正体は博麗霊夢と八雲紫。

二人がその異変に気付いたのは、ほぼ同時だった。

「一応聞くけど異変……よね」

霊夢が自信の無い口調で言う。

「恐らくね。けど、こんな大掛かりな異変も久し振りね」

今までの大掛かりな異変といえば、紅霧異変、春雪異変の二つくらいである。

だが、これは一護が幻想入りしてからの異変であって、過去にもいくつか大掛かりな異変は起きているが。

「……それじゃあ、とつとと解決に向かおうかしら。欠けた月の欠片を探しに」

霊夢が縁側から立ち上がり、異変解決に向かう事を決めた。

本当は、自分の神社の石畳を砕いた犯人を取っちなめたい気分だったが、後回しにすることにした。

そして、それに続いて、紫も立ち上がる。

「それじゃあ、夜を明けられないようにしないとね。朝が来たら、月の欠片なんて探し出せないでしょ」

「……どうするつもり？」

「夜と昼の境界を弄るだけよ。そうすれば、夜は明けないわ」

今、霊夢の前でも異変が起きようとしているが、今回は見逃す事にした。

ある意味では、月が欠けている事より夜が明けない異変の方が、人々にとっては大惨事である。

だが、今はこんなことをした犯人を捕まえるのが仕事だ。

「さあ、今ここに幻想の結界チームの誕生よ」

そして紫は勝手にチーム名まで決めてしまった。

*

同時刻、霧雨魔理沙とアリス・マーガトロイドは魔法の森を歩いていた。

理由は月の様子がおかしいという理由でだ。

最初に気付いたのはアリスで、一人で調査しようとしたが、途中で行き詰まり、魔理沙に協力を仰いだのだ。

「魔理沙……この異変は何が目的だと思う？」

「え？」

アリスの唐突な質問に、魔理沙は答えに少し困る。

今までの異変には、目的があつて行われていた。

紅霧異変では、太陽を隠すため。

春雪異変では、春を奪い妖怪桜を満開にさせるため。

アリスは今回なぜ、月が欠けているのか……その目的を聞いたのだ。

「えくと、分からないぜ」

満面な笑みで答える。

分からないのに満面の笑みで答えられると、何故かイラツと来る。

「アリスは分かるのか？」

魔理沙が聞き返してきた。

「え、私は推測だけど、多分あの亡霊女が怪しいと思う」

亡霊女。

幽々子の事だ。

「何で、幽々子が怪しいんだ？」

月と幽々子……一体何が関係しているのだろうか？

「あの亡霊女は、前に幻想郷中の春を奪った前科があるよね。それと同じよ。次は月を奪おうとしているのよ！」

さながら名探偵よろしく自信たっぷりと言うアリス。

こんな馬鹿げた事、有り得る訳が無い。

「だったら何で、月を奪おうとしているんだ？」

とりあえず訊ねて見る魔理沙。

あの時、幽々子が春を奪っていた理由は、西行妖という妖怪桜を満開にさせる為である。

だが、今回は違う。

幽々子が月を奪ったところで、何のメリットがあるのだろうか？

「……魔理沙も分かるでしょ。満月を見ながら食べる団子やカレーは一段と美味しいの。あの亡霊女は大食いで有名。だから、あの大食いの亡霊女は毎日満月を見ながら、美味しい食生活を送ろうとしているのよ」

つまり、食事を一段と美味しくする為に満月を奪おうとしている訳だ。

流星の魔理沙も、アリスの推測には全く信憑性が感じれなかった。

「大丈夫か、アリス……頭」

魔理沙に頭の心配までされてしまった。

こいつに頭の心配をされてしまったら、わりと頭の終わりは近い。「まあいいわ。取りあえず動くわよ。今ここに——禁呪の詠唱チームの誕生よ」

そしてアリスは勝手にチーム名まで決めてしまった。

だが、二人は気付いていなかった。

この会話を、ある人物に聞かれていたことを。

*

さらに同時刻。

紅魔館では、レミリア・スカーレットがフランの心配をしていた。

それは簡単。フランの帰りが遅いからだ。

「遅いですね、妹様」

外を出窓から見ているレミリアに、十六夜咲夜が話しかけた。

勿論だが、二人共満月の異変には気付いている。

「ええ、遅いわ。二人で一体何をやっているのかしら？」

「そうですね。夜遅くまで男女がやる事といえば……」

咲夜は顔を赤らめながら言う。

そして、その続きを言おうとした途端。

「真面目に答えてくれるかしら、咲夜」

レミリアは呆れた表情で咲夜を制止する。

これ以上言わせたら、何かと大変になる。

「ごほん、失礼しました。……もしかしたら、博麗神社にでも泊まっているのでは？」

一言謝罪し、話を戻す。

「それは無いと思うわ。一護と二人で人里に向かう時に、必ず帰ってくるのよと言いついておいたから。もし、フランが途中で疲れて寝てしまつて、博麗神社に泊まる事になつたとして、何の連絡も無いのはおかしいわ」

「何か事件に巻き込まれたのでしょうか？」

レミリアが今一番言われたくない、考えたくなかつた事を言われた。

必死に目を逸らしていた真実を、言われてしまったのだ。

「……満月が欠けている上、フランまで行方不明。仕方ないわね咲夜、出陣よ！」

レミリアは出窓を突き破り言う。

「はい、お嬢様！ そのお言葉を待っておりました！」

咲夜はそれに乗る。

誰も出窓を突き破つた事にはツッコまない。

「今ここに夢幻の紅魔チームの誕生です」

そして咲夜は勝手にチーム名を決めてしまった。

*

そのまた同時刻。

白玉楼で西行寺幽々子は満月を見ながら、縁側で団子を頬張っていた。

「ハァ、あまり美味しくないわ」

幽々子が滅多に口にしない発言をした。

美味しくないよ。

だが、そう言いつつ、団子は全て平らげる。

「そうですか？ 私は美味しいと思いますよが」

幽々子の隣で団子を食べている魂魄妖夢が言う。

「妖夢には分からないのおく？ 団子はね、満月を見ながら食べるのが格別に美味しいのよ。それなのに、今日の満月は綺麗に欠けていて、満月じゃ無くなっている。だから、団子の味も落ちるのよ」

「そ、そうなんですか？」

「そうよ」

幽々子の妙なこだわり。

だが、幽々子と同意見の人も多数居るだろう。

「よし、こうなったら……私達で月を元通りに戻すわよ！」

急に幽々子が立ち上がり、異変の解決をする事にした。

理由は勿論、美味しい団子の味を取り戻す為である。

こんな理由で異変に立ち向かう人？ は、前代未聞だろう。

「……あの、幽々子様、そんな急に言われましても」

妖夢は突然すぎる幽々子の発現に、頭が付いて行かなくなっていった。

「今ここに幽冥の住人チームの誕生よ」

そして幽々子は勝手にチーム名まで決めてしまった。

もう妖夢は何を言っても、参加させられる事になってしまったのだった。

*

その頃、一護とフランも動きを見せようとしていた。

「フラン、俺は今から異変の解決を試みる。お前は先に帰っててくれ」

一護も他の四組と同様に、異変の解決に向かう事にした。

今から博麗神社に戻ったところで、霊夢は既に異変に気付き、解決に向かっていると思っただからだ。

「え、嫌だよ。私もいつちーと一緒に異変の解決に行きたい！」

突然のフランの発言に、一護は困惑する。

「いや、危ねえから。フランは帰った方がいいって」

とりあえず説得を試みる。

「嫌だ！ いつちーと一緒に行くもん！」

説得は効果が無いようだ。

「……しょうがねえな。じゃあ、付いてくるだけだぞ。危ないと思ったら直ぐに逃げる。約束だからな」

あつさりと引く一護。

これにより、フランは一護と同行する事となった。

「うん！ 分かったあ！」

嬉しそうに言うフラン。

「それじゃあ、今ここに禁忌の死神チームの誕生よ」

そしてフランは勝手にチーム名まで決めてしまった。

いつ決めたのだろうか？

こうして幻想の結界、禁呪の詠唱、夢幻の紅魔、幽冥の住人、禁忌の死神チームの計五チームが異変に乗り出す事になったのだった。

第34斬【妖蟲と夜雀】

《1》

——歪な月が浮かぶ幻想郷。

現在、平和な日常から不意に何の予兆もなく、幻想郷では満月が欠けるという大異変が起こっている。

満月が欠けている事は、人間からしてみれば別にどうでもいい事だが、妖怪からしたら大問題。そもそも月から放たれる光というのは、一種の憩い。それは人間にとっても大切だが、妖怪たちにとって月の煌びやかに、そしてどこか不気味な光というのは、生きるための活力となる。故に、解決は必須。

また、それ故にこの異変は満月が沈むと解決できなくなる。

その為、紫が昼と夜の境界を操り、夜を止めている。

現在、異変を解決するべく二人一組のチームが五チーム動いている。

幻想の結界、禁呪の詠唱、夢幻の紅魔、幽冥の住人、禁忌の死神チーム。うまい事、人間と妖怪のタッグになっており、どのチームも過去のの大異変を起こした強者やそれを解決してきた猛者で埋められている。

故に、解決は時間の問題だろう。

しかし、この異変は一体誰の者による所業なのか……一体何の目的があるのか。

全てはまだ、謎に包まれている。

*

現在、幻想の結界チームの博麗霊夢と八雲紫は、暗い夜の森の中を飛んでいる。

今日は蛍が活発に活動する日なのか、そこら中に沢山お尻を激しく光らせて踊っている。とても綺麗な光景であり、普通の人なら感嘆とするのが必然である。

不安を募らせる闇夜を引き裂くその光こそ、一般的には羨望に満ちるはず……なのだ。

「なかなか風情があつていいものね、夜の山道も。今度、この景観を着に一杯やりたいね」

紫は周囲を飛び回る光の球体を眺めながら、自然と優しい笑みを零す。

対する霊夢は少し、いや頑張つて隠そうとはしているのだが隠しきれていないどころか完璧に露呈している……そう、凄く嫌な顔をしているのだ。

「そうね。悪くは無いと思うわ。けど、私はそんなに虫が好きじゃないのよね。どっちかって言うとなんか嫌いな方」

近づいてくる蛍を手で追い払いながら、若干くぐもった声で言う。

「初耳ね。あなたが虫嫌いななんて。これはもしかして、最強無敵で有名な博麗霊夢の最大の弱点だったりするかもね」

「別に弱点までにはならないわよ。それに初耳なのは当たり前。誰にも言っていないもの」

「でも流石にGが大量に湧き出てきたら逃げるでしょ？」

「いや、たぶんそれ、誰でも逃走すると思うけど」

「……………」

「何よその含みたっぷりの笑は？ まさか、あんた自分の能力を使つて…………」

「あはは、ないない。そんなことしないわよ。けど、どうして虫が嫌いななの？」

「過去のトラウマもあるけど、一言で言うとな…………」

「——あなた、さつきから蛍を拒絶しているようだけど、蛍の何が嫌なわけ？」

瞬間、二人の会話に割って入るかのようになり、第三者の声が響き渡つた。

「ここで普通なら第三者に目を向けるのが一般だが、今の二人はまるで耳に入っていない様子なのか、綺麗に聞き流していた。

「一言で言うとな？」

「あれ、待って。別にあんたに言う理由も何もないよね」

「ここまで話して言わないなんて卑怯よ」

「ちよつと、何無視してんのよ!」

無視されたのに憤ったのか、二人の前に立ち塞がる。

だが、二人共それすらも、何も居ないかの如く素通りした。

「無視するなって言ってるでしょ!」

過ぎていった二人の方に振り向き、怒鳴りつける。

それでようやく二人は、その呼びかけに振り向いた。

そこには一人の少女がいたのだ。

緑色のショートカットヘアに、頭部に虫の触角らしきものが生えている。

甲虫の外羽を模していると思われる燕尾状に分かれたマント、白シャツに紺のキュロットパンツという、ボーイッシュな格好をしている。

「何か用?」

見ず知らずの妖怪に声を掛けられたので、霊夢は更に嫌な顔と声をしながら問いかけた。

「用って……あなたがどうして虫を嫌っているのかを聞きたかったんだけど、もういいわ知らない。あなたが私を怒らせたんだからね」

少女は小さな憤りを流出させながら、臨戦態勢に入る。

「どうやら無視された事+αで怒ったらしい。」

「弾幕ごっこでこてんぱんにブツ倒してやる」

そして同時に弾幕勝負を仕掛けてきた。

「面倒くさいわね」

霊夢が溜め息混じりに言う。

「あの子、虫の妖怪ね。ちよつとあなたの嫌いな類の」

「虫は無視して先に急ぎたいところだけど、仕方ないわね」

「霊夢がダジャレを交えて言う。」

正直言って寒い。

「楽園の素敵な巫女 博麗霊夢よ。受けてたつて上げるわ」

少女の挑戦を霊夢が受ける事にした。

「闇に蠢く光の蟲 リグル・ナイトバグ。虫の餌食にして上げるわ」

少女も二つ名と名前を名乗り、霊夢と弾幕ごっこをする事となつ

た。

「とつとと終わらせて上げるから…ほら、掛かって来なさい」

霊夢が挑発的な態度を取り、手招きをして言う。

その態度に完全に憤ったのか、リグルは怒りで顔を赤くした。

「こんのお、くそ女ああ!! 蠢符『ナイトバグトルネード』!」

リグルは激昂すると共に、スペルを唱えた。

自分の周囲に白い弾幕を配置する。

そして、そこから白い弾幕が緑色の米粒弾に変わり、拡散するよう
にばら撒かれた。まるで卵から孵化した虫のような弾幕だ。

「最初からまあまあ強力なスペルね。やる気満々って感じ…:けど」

霊夢は木の幹から木の幹に蹴り跳び、跳躍しながら弾幕を避けてい
く。

当たりそうで当たらない感覚とリズムで躲しつつ、相手を心理的に
追い詰めていっていた。

「私には当たらないわよ」

「ツ!」

自分の弾幕を余裕な表情で避け続ける霊夢を見て、目を見開いて驚
く。

ここまで己の弾幕を華麗に避けられ、一切焦燥しきった表情にも
なっていない。正直、さつき紫と会話していた時の表情と全く変わら
ないのだ。

余裕綽々…:そう思われ逆にリグルが焦りを見せ始めた。

「くそ、どうして!? 灯符『ファイヤフライフェノメノン』!」

そして、新たなスペルを唱えた。

無数の米粒弾を全方位に放ちながら、霊夢狙いの青い弾幕が放たれ
る。

「さつきと代わり映えのしないスペルね。愚直すぎて欠伸が出るわ
よ」

「うるさい! 早くくたばっちゃえ!」

「あのね、この程度で私に勝とうなんて…:」

霊夢はそう言うと、迫ってくる弾幕を軽く避けながら、リグルの方

に突進するように加速する。相手が驚くよりも先に、あつという間と
言う時間でリグルの背後を取った。

「悪い冗談でしょ?」

リグルの背後に移動した霊夢が、耳元でポツリと奇怪に呟いた。

「――!!」

リグルはそれを聞いた瞬間、恐怖にも似た表情になり、その場から
即座に離れる。

離れている途中、霊夢はリグルに特に何もしない。代わりに、相手
を罵るように口を開いた。

「威勢はいいようだけど、力は全く無いようね。妖精と同程度か、下手
をしたらそれ以下かしら?」

「くっ……う、うるさいなあ! 隠蟲『永夜蟄居』!!」

続けてリグルはスペルを唱える。

リグルの周囲に弾幕が配置され、それが米粒弾に変わり、拡散する
ようにばら撒かれた。

さっきの蠢符『ナイトバグトルネード』の上位互換といったスペル
だろう。先の弾幕とは加えている妖力や数、速さが歴然として違っ
ている。

「ふくん。夢符『封魔陣』」

霊夢が初めてスペルを唱えた。

青白い結界が、霊夢の周りに展開され、リグルの弾幕から身を守る。

「うそ、でしょ……?」

自分の弾幕が全て、結界一つで防がれた事にリグルは驚く。

そして霊夢は、弾幕が止むのを確認すると、結界を解除した。

「今のは中々良かったわよ。その証拠にスペルを使って上げたわ」

「……………」

霊夢に褒められたリグルは、何も言う事が出来なかった。

「……で、今のが全力なの?」

続けて言う霊夢。

それを聞いたリグルの表情が険しくなる。

「……そんな訳、ないでしょうがあ!」

リグルが慄くほどの妖力を集中させ、手を振り上げる。

「——世界の変換により発せられる理を死骸し、全てを擦り切る異風全幕は——遍く私の同胞に颯風と名の収益をもたらす」

それは自分の最強のスペルを発言するための祝詞。

今ここに、リグルの持つ渴望という名のスペルが顕現する。

『季節外れのバタフライストーム!!』

リグルを中心に台風の渦のような軌道で米粒弾を全方位に飛ばし、それを蝶々弾に変えて拡散させた。

カラフルに弾幕の色が変わり、とても綺麗であり、とても殺伐としている。

(符名も何も付かないスペル……！ 私夢想天生と同じ、強力なスペル！)

霊夢がリグルのスペル名を聞き、少し驚く。

——符名の付かないスペル。

スペルカードには符名の次にカード名が付く。例えば、霊符『夢想封印』、黒斬『月牙天衝』。

だが、稀に符名の付かないスペルカードが存在する。

そのスペルカードは、自分の持つ全てのスペルカードを超越した最強の名に相応しいスペルであり、己の渴望や勇氣、はたまた絶望や叫喚などの真の己を顕現させた真髓にして誇りとも言えるスペルなのだ。

霊夢が昔、咲夜戦に使った『夢想天生』が、それに当たる。

しかし、それに達するには自分のことを全て理解した上で、必死に努力し、研鑽を積まなければならない。そうしなければ、その境地に立つことはできない最強のスペルなのだ。

「流石のあなたも、このスペルには歯が立たないようね」

何もしようとしない霊夢を見て、リグルが余裕の余地を生みながら言う。

どうやらリグルには、霊夢があまりにも強力過ぎるスペルを前に、諦めたと思っっているようだ。

「確かに驚いたわ」

霊夢は小さく呟く。

「けど、私には通じないわよ」

そう言うと、カードを取り出した。

「あんたとは踏んだ場数が違い過ぎるのよ。霊符『夢想妙珠』！」

霊夢がスペルを唱える。

その瞬間、霊夢の周りに光弾が展開され、一斉にリグルの弾幕を掻き消しながら、リグルに殺到する。

「何……!?!」

リグルはその光景を驚愕の眼差しで見る。

「そういえば、あんた。私がどうして虫を嫌っているかを聞きたがつていたわね」

悠々と、何の感慨もなく笑顔になり――

「私が虫を嫌っている理由はね、一言で言うと――単に気持ち悪いからよ」

何の慈悲もなく、簡単に言い切った。

そして、それを聞いたリグルは同時に、霊夢の光弾に被弾した。

これにより、リグルは完全にノックアウトする。

――弾幕ごっこは霊夢の勝利で幕を閉じたのだった。

《2》

幻想の結界チームが、自分たちの前に立ち塞がったりリグルを倒した辺りの時刻――

幽冥の住人チームの妖夢と幽々子は、夜の森林の上空を飛んでいた。

「ん〜、なかなか美味しいわねこれ。何千本でもいける」

「その言い方には少し、語弊があるものと思われませう」

幽々子が両手に何本もの、鳥の串焼きを握っている。どうやら晩ご飯の後のおやつのようなのだ。

バクバクと、さながらシュレッダーに紙を通す勢いで鳥の串焼きが幽々子のブラックホール顔負けの胃袋へと消える。

そして勿論、そんな勢いで食していたら……

「妖夢うく、串焼きが残り一本になっちゃったよお」

幽々子が哀愁を漂わせて言う。

先まで両手に十本近くあつた串焼きが、時既に一本。時間にして十秒満たない。

「異変が解決するまで我慢してください」

溜息混じりに尤もなことを言う妖夢。

異変解決中に気の抜けた事を言われると、やる気を無くしてしまう。幽々子の場合は日常の殆どが、気の抜けた感じだから諫める気も起きない。

「えく、妖夢のけちいく。だから一護くんには振り向いてもらえないのよ」

「なっ！ 何を言っているのですか幽々子様!? いいかげん異変解決に集中なさってください!」

妖夢が頬を染めながら狼狽する。

幽々子はそれを見て、面白がる……最近の趣味の一つである。

そして、最後の串焼きを口に入れようとした瞬間——幽々子の手から串焼きが無くなった。まるで、誰かに一瞬で取られた感じだ。

「あれ……私の串焼きは?」

「幽々子様! 敵です!」

呆然とする幽々子を前に、妖夢が楼観剣を抜き放ちながら言った。妖夢の見据える先には、一人の少女が幽々子の串焼きを持って存在する。

背中に妙な羽が生えており、頭にはナイトキャップを被っており、それに背中の羽の飾りが付いている。

ジャンパースカートのようにシックな茶色だが、曲線のラインにそって蛾をイメージしたような、紫のリボンが多数あしらわれている。

「あなたは……見たところ夜雀ですね」

妖夢が少女を注視して、確認するように言う。

「そうよ。よく知っているわね」

夜雀の少女が口を開いた。

「私は夜雀の怪 ミステリア・ローレライ。あなた達は？」

少女は二つ名と共に名乗り、次に妖夢達の名を尋ねてくる。

「私は半人半霊 魂魄妖夢です」

最悪の礼儀として妖夢は名乗る。

いくら敵であつても名乗られたら名乗るのが、幻想郷の仕来りだ。

だが幽々子は……

「ちよつとく、私の串焼き返してよ。それ最後の一本なんだからね」

と、ミステリアに奪われた胃袋補給材の串焼きを指差して言った。

それに対して嫌悪感丸出しで、ミステリアは言葉を吐く。

「……この串焼きは何で出来ているか、ご存知でしょうか？」

「え、鳥だけど」

「鳥だけど……じゃないわよ！ さつきも言ったけど、私は鳥なの！

鳥の妖怪！ ここまで言えば馬鹿でも分かるよね？」

ミステリアが声を荒げて言った。

「ここで妖夢も察しは付いたが、幽々子に至っては——

「だから何？」

と、意味不明状態である。

「本当に鈍いわね。今あなたは私の目の前で、私の同族を食べようとしているのよ。それを黙って見ていられると思う？」

「よく分からないけど、私の串焼き返してくれないかしら。あなたの主張は、それを食べたなら聞いてあげるから」

「……いや」

そう言つて、ミステリアは串焼きをどこかへ放り投げた。

「ああー！！！！」

それを見た幽々子が、夜を引き裂きかねない絶叫を上げ期待通りの反応をする。

「な、何するのよおー！！！！」

幽々子が森林に落ちていった串焼きを拾いに行こうとする。

それを妖夢は、幽々子の着物の襟を掴み、制止した。

「幽々子様、一度落ちた食べ物を持ちに行かないで下さい」

「妖夢！ 離して！ あれは私の生命線なの！！」

(いえ、既にあなた様は死んでいます)

幽々子のボケ?に、妖夢は心の中でツツコミを入れる。

「……………仕方ないわ」

幽々子は一言眩き、落ちた串焼きを追うのを止めた。

諦めたと思った妖夢は、掴んでいた襟を離す。

「妖夢……………一つお願いを聞いてくれるかしら」

幽々子が表情を曇らせながら妖夢に言う。

「? はい、何ででしょうか」

「あの雀を……………捕まえてちょうだい!」

唐突の幽々子のセリフに、妖夢は少し戸惑う。

「ど、どうしてですか?」

「いいから捕まえなさい。それとも、私の命令が聞けないの?」

お願いから命令に早変わりした。

しかも、命令と変わると同時に、言葉に殺気が込められる。

「は、はい。かしこまりました……………」

妖夢は幽々子に半脅され感覚でする事となった。

そして妖夢は、ミスティアに向き直る。

「そういう事で、あなたを一度捕縛させて頂きます」

ミスティアにそう言つて、臨戦態勢に入る。

「私を捕縛? 出来るものならやってみなさい」

ミスティアもそれに答えるように、臨戦態勢に入る。

こうして、一本の鳥の串焼きが原因で起きた弾幕勝負が始まる。

(あまりやる気は起きないけど、これからの準備運動くらいにはなるかな)

「行くよ! 声符『木菟咆哮』!」

ミスティアが先手でスペルカードを唱えた。

ミスティアを中心に全方位に、無数の弾幕がばら撒かれる。

「……………捕縛するのは、思ったより大変そうですね」

妖夢は刀に、自分の霊力を込める。

そして、向かってくる弾幕を刀で乱舞の勢いで斬り潰していった。

「けど、捕縛出来ないレベルではありません」

妖夢が鋭い視線で、ミステイアを見据えて言う。

その刀より鋭い視線に、夜雀は少し恐怖を覚えた。

「故に、直ぐに終わらせませす！」

「きやああああー!! 妖夢かっこいいー！」

妖夢がセリフを決めた後、幽々子がまるで観客のように声を上げた。

「口を閉じていてください幽々子様……」

少し注意する妖夢。

「……では、次は私から行きますよ。幽鬼剣『妖童餓鬼の断食』！」

妖夢はスペルを唱えた。

そして刀を横に一振りした瞬間、その軌跡から無数の弾幕が放たれた。

このスペルは昔、一護との弾幕ごっこに使用したスペルだ。

「そんなスペル喰らわないよ！ 毒符『毒蛾の鱗粉』！」

妖夢のスペルに対抗するように、ミステイアがスペルを唱えた。

ミステイアの周りに光の球体が幾つか現れ、その球体がゆらゆらと動き始める。そして球体が動き出すと同時に、球体から弾幕が放たれた。

その弾幕が妖夢の弾幕を相殺していく。

「成程。この程度のスペルは効きませんか。では、これなら……」

そう言い、妖夢はスペルを唱える。

「獄炎剣『業風閃影陣』」

複数の大弾が放たれ、それを妖夢が透かさず横一閃に斬る。

それにより、斬られた大弾から小さい弾幕が無数に発生した。

そして妖夢はその無数の弾幕に紛れ込む。これにより妖夢の姿が確認できなくなった。

「弾幕に紛れ込んで、私に接近する魂胆ね」

ミステイアは妖夢の行動を推測する。

その推測は大正解だ。

妖夢の狙いは、弾幕と共にミステイアに近づき、人符『現世斬』で決着をつける事。

しかし、そんな狙いなど稚児でも分かる。理解はできるが、それに対応できると言われると難しい。

敵がどう攻めて来る。どう戦略を練ってきている。それを知ったところで、それを回避もしくは反撃する手段を持ち合わせていなければ、理解したところで意味はない。

だがミスティアは不敵な笑みを零す。

「けど、私に通じるかな」

「漆黒園の暗闇に誘え。鷹符『イルスタードライブ』！」

そしてスペルを唱えた。

刹那、妖夢の周りが暗闇に覆われる。

「——ッ!？」

妖夢は目を見開き、動きを止める。

その瞬間、妖夢に向かって暗闇から弾幕が飛んできた。

それを避け切る事が出来ず、被弾してしまう。

「くっー！」

被弾すると同時に、妖夢は真剣な眼差しで暗闇を見据え、構える。

周りは真の漆黒。自分が失明してしまったと錯覚するくらいに、本当に何も見えない。常人ならそれだけで狂ってしまうほどの不安に満ちた何も見えない空間。

しかし妖夢は直ぐに順応し、視覚以外の六感に至るまでの感覚を超人的に発揮する。

よって、続いて連射されてきた弾幕を避けることに成功した。

だが生憎と、ミスティアの位置までは把握できない。

「どう？　これが私の本当の力よ。あなたに、このスペルを破れるかな？　と言っても、その様子じゃ無理でしょうね」

どうやらミスティアには妖夢の姿が手に取るように分かるようだ。

「それじゃあ、そろそろ終わらせようかしら」

そう言つて、ミスティアはスペルを唱える。

「これで終わりよ。夜雀『真夜中のコーラスマスター』！」

そして闇の洗礼を味わうが如く放たれる無数の弾幕が、妖夢に襲いかかる。

「くそー！」

流石の妖夢も、それを全て躲し切れず、何発か被弾してしまう。

(このままだと……！)

休む事無く飛んでくる無数の弾幕。

そして暗闇に奪われた視界。

誰がどう見ても、圧倒的に不利な状況だ。

(……だったら、この手で)

妖夢は攻略法を考えたのか、諦めず弾幕を避け続けた。

だけど、それでも何発かは被弾する。

「そろそろ諦めたら？ 今ならまだ見逃してあげるわよ」

ミスティアは何の変変わった動きも見せない妖夢に向かって告げた。

だが、妖夢は何も答えない。

「つたく、諦めの悪い」

仕方なくミスティアは、妖夢を撃ち落とすまで佇む事にした。

「……………」

妖夢は黙ったまま弾幕を避け続ける。

その何かが来るまでの間、最大限まで感覚を活かし、無数の弾幕を

斬っては避けて、斬っては避けてを続ける。

そして、妖夢は何かが分かったのか、一瞬目を見開いた。

(——見つけた！)

心の中で一言呟くと、刀を構え直した。

その光景にミスティアは、妖夢を凝視する。

「人符『現世斬』！」

妖夢がスペルを唱えると、刀に霊力が込められる。

「何をするつもりか知らないけど、私の居場所が分からなければ、何を

しようと無駄よ」

「確かに、そうですね。けど、もし傲慢としている、あなたの位置を掴

めたら、状況の趨勢はどうでしょうね」

「なんですって?」

瞬間、妖夢は目にも留まらない速さで、ミスティアを完全に斬り抜けた。

「な、に……!?!」

ミスティアは妖夢の攻撃を受けた。

そののせいか、暗闇が綺麗に消え去った。

「何で、私の位置が分かったの!?!」

ミスティアは直ぐ様、妖夢の方に向き聞く。

「簡単ですよ。私の半霊が、あなたの居場所を教えてくれたのです」

「半霊……?」

ミスティアはそれを聞くと、妖夢の周りをフワフワ浮いている白い魂を見る。

「そうです。私と半霊は一心同体。つまり、あなたが人間の方の私に気を取られている間に、幽霊の方である私がああなたの居場所を探ったの」

「反則ね……それ」

妖夢は半分が人間で、半分が幽霊。

即ち、妖夢の半身である幽霊が、ミスティアの位置を探り教え、人間である妖夢が、それを元にミスティアに攻撃を与えた。

「どうですか？ これでああなたの暗闇による攻撃法は、もう効きませんよ」

「……まだ、私には奥の手があるのよ」

ミスティアは自分が出せる最大の妖力を体外に出力する。

「——漆黒の園に迷い込んだ供物は、血肉を喰われ、魂は闇を彷徨う——求める光は永劫届かず、楽園から希望が遠ざかる盲目の世界」

紡ぎ出される祝詞は、己の業が生んだ力。

『ブラインドナイトバード』!!』

(符名の付かないスペルカード)

ミスティアは符名の付かない最強のスペルを唱えた。

再び、妖夢の周りが暗黒に塗りつぶされた。

そして、今までの弾幕の速度、パワー、数が圧倒的に違った。

その凄まじい弾幕が妖夢を襲う。

「けど、詰です」

高密度に演算された妖夢の基礎スキル。

場を見極める一瞬一瞬の直感と慧眼、何一つ特別なことなど必要ない。ただ要するは、基本的なことのみ。

「遅いですよ。もう同じ手は食いません。人鬼『未来永劫斬』」

妖夢はミスティアがスペルを唱えた後、直ぐにスペルを唱えた。

今ならまだ、ミスティアの位置が判然としているから。

妖夢は向かってくる全ての弾幕を撃ち落とし、そして暗闇さえも妖夢と圧倒的な妖力により引き裂かれる。

「何!?!」

ミスティアが自分の最強のスペルを軽々と撃ち落としていつている、妖夢の姿を見て驚愕する。

「どうして、私の最強のスペルが……こんな簡単に!?!」

迫り来る妖夢の姿を見て叫ぶ。

「日々の鍛錬の成果です」

それに答えるように妖夢は言う。

そして、答えると同時にミスティアに一閃の刃を与えた。

これにより、ミスティアは完全に気を失った。

「これで捕縛完了です」

こうしてミスティアとの弾幕勝負は、妖夢が勝利を修め幕を閉じたのだった。

第35斬【ウルキオラの策略】

《1》

幽冥の住人チームはミスティアを倒した頃――

夢幻の紅魔チームのレミアアと咲夜は人里に向かって飛んでいた。

二人がこの異変に乗り出した理由は、人里から帰ってこないフランを探すため。故にまずはそこからフランの手がかりを探すため、人里に向かっているのだ。

「妹様は人里にいらっしやるでしょうか？」

「分からないわ。けど、フランを見掛けた人間くらい居るでしょう。何たって、あの二人は目立つから」

心配そうに言う咲夜に、レミアアは答える。

一人は外来人で、異変を解決してきた有名な黒崎一護。

一人は吸血鬼で、周囲とは違う派手目の洋服。

この二人と一緒に歩いていれば、何をしなくても確実に目立つのは必須である。

「しかし黒崎さんとご一緒だと、恐らく異変の解決に付いて行っているかもしれないですね」

「まあ、その可能性が高いでしょうね」

「それ以外ですと、男性女性が夜な夜なすることと言えば……いえ、妹様にはまだ早い！ だけどしかし、年齢を鑑みるに――」

「……………」

そんな訳で、人里に着かないと何も出来ないのが現状なのだ。

*

同時刻――人里では、夜がいつまでも明けない事に気付いた慧音は、外に出ていた。

「……おかしいな。夜が一向に明ける気配が見えない。それどころか、月の位置も動いていない」

肌寒くなってきた夜空の下、歪に欠けた月を見ながら呟く。

（月が欠けているのは、恐らくあいつの仕業だろうけど、月が全く不動なのはおかしい）

どうやら慧音は満月の異変の犯人を想起しながら、夜が明けない状況がどうしてなのかを考える。

だが夜が明けない異変は、全く検討がつかないみたい。それもそのはず。

何たって夜を明けないようにしているのは、幻想の結界チームの八雲紫の仕業なのだから。

すなわち、現在二つの異変が幻想郷で起こっている事になる。

満月が欠けている事。

紫の能力で夜が明けなくなっている事。

第三者からすればもう、どっちが悪役か分からない状況だ。

そして突然——慧音の前に一人の男が現れた。

「お前は……」

慧音は男の方に視線を移す。

そこには白い死覇装を着た男——ウルキオラが立っていた。

「ウルキオラか。なぜここに」

ウルキオラとは知人の仲なのか、特に警戒の色は一切見せずに対話を行う。

「上白沢、今すぐ貴様の能力で人里を消せ」

慧音の質問には答えず、ウルキオラは即座に命令した。

「おいおい、突然何を言い出すんだ？ 流星にそのようなことを何の許可も知らせもせずに……」

「俺は、警告しに來ただけだ。判断は貴様に任せる」

戸惑う慧音をよそに、ウルキオラは冷静に、しかしどこか冷酷の色を染めて言った。

「一体、お前は何を言いたいんだ？ なぜ、そのようなことを」

「程なくして、俺の言った意味を理解する。今すぐ人里を消せ……俺が言いたいのは、それだけだ」

そうとだけ言い残し、ウルキオラはそのまま姿を消した。

「なっ、おい待てー！」

呼び止めようとする慧音だが、既にウルキオラは姿を消したため、呼び声は儚く散る。

突然来て、直ぐに帰ってしまったウルキオラ。
人里を消せ。

警告。

(一体、何なんだあいつは)

ウルキオラは初めて会った時から、よく分からない人間？だった。
それは今でも変わらない。

けどウルキオラの言葉は、どうにも無視しておく訳にはいかない
……ように感じる。

「仕方ない」

慧音はウルキオラの言われた通り、行動を起こす事にした。

*

「……………」

「……………」

夢幻の紅魔チームのレミアと咲夜は無事に、人里へと到着した。

だが、そこには――

「人里が、無い」

そう、人里が無いのだ。

そこにある筈の民家、人間達、畑……人里そのものが、忽然と姿を
消してしまっている。まるで最初からそこに人里など存在しなかつ
たように、平らな平野のみの広い土地があるだけ。

最早ここまで来ると滑稽どころか、場所を間違えたかのように思う
のが当然の理だ。

「……咲夜、本当にここが人里なの？ ただの空き地のように見える
んだけど」

「間違いありません。私はあまり外出なされないお嬢様と違って、よ
く人里に足を運びますので場所を誤ることは無いと思います」

ニートと言っても過言ではないレミアは兎も角、咲夜はよく里に
買出しに来る為、いま目の当たりにしている光景に訝しさを感じてい
る。

その時、二人の目の前に一人の女性が現れた。

「やはり、ウルキオラの警告を聞いていて良かったようだ」

現れると同時に女性は口を開いた。

「……あなたは誰？」

「私か？ 私は知識と歴史の半獣 上白沢慧音だ」
女性は二つ名と共に名乗る。

そう、そこには上白沢慧音が平地となった土地に立っていた。

「で、そんなお二人さんは？」

慧音が二人の事を聞く。

恐らく慧音はレミリアの事は知っているだろう。何たって紅霧異変を起こした張本人で、新聞にも載っていたから。

しかし最低限の礼儀と慮って聞いた。

「私はお嬢様に仕える紅魔館のメイド 十六夜咲夜です」

「私は紅魔館の主の紅い悪魔 レミリア・スカーレットよ」

二人も二つ名と共に、名乗る。

どうやら咲夜は人里にはよく来るが、慧音とは初対面のようだ。

「紅魔館の者か……」

慧音が呟くように言う。

「成程、ウルキオラの言った意味が分かったよ。貴様らが人里を狙う輩だな」

慧音が二人に向かって言う。

そのセリフに二人共、頭に？を浮かべている。

「あなたは、何か勘違いをしているのでは……」

「——人里を消しておいて正解だった」

咲夜が誤解を解こうとした瞬間、慧音が一人事のように言ったセリフを聞き逃さなかった。

「……あなたが人里を消したのですか？」

「そうだ。私の能力、〃歴史を食べる程度の能力〃でだ」

「歴史を食べる程度の能力？」

慧音の能力……歴史を食べる程度の能力。

能力だけを聞いただけでは、全く理解できない。

「そもそも、人間は居なかった事にした。今、この里の歴史は全て私が保護している。故にここには元々何も無かった。人間も人間の里

もだ。だから今すぐここから立ち去れ。何もない場所に、用はないだろう？ それとも、こんな何も無い場所に用があるほど暇なのか？

ピクニックをするなら、もったいい場所を提示してやる」

「態度がムカつくわね。咲夜なんとかしなさい」

レミリアが慧音の態度にイラツと来たらしく、頭に怒りマークを付けている。

「はい、お嬢様。では、ここは幻想郷らしく……弾幕勝負で白黒つけましょう。私が勝てば、人里を戻す事。私が負ければ、素直に立ち去ります」

咲夜が提案する。

それに対し、慧音は少し思案する。

「……確かに、このまま素直に引き下がる雰囲気じゃないか。分かった、受けてたとう」

そして慧音はそれに乗った。

「それでは勝負ルールはお手軽に……一発でも弾幕に被弾した方の負け。それで宜しいでしょうか？」

「異論は無いわ」

咲夜が続けて勝負ルールを決めた。

一発でも被弾したら負け。

これで弾幕勝負は直ぐに決着がつくだろう。

「それでは、紅魔のメイド長のお見せして差し上げます」

「ああ……来い」

両者の弾幕勝負の幕が開いた。

*

「先手はもらいます。幻符『殺人ドール』」

咲夜が最初にスペルを唱えた。

白銀に煌く凶刃が、まるで意志を持つかのようにして慧音に流星のごとく降り注がれる。

「危険な弾幕だな。野符『GHQクライシス』」

慧音も咲夜の後にスペルを唱える。

弾幕が鹵車のように回転しながら、咲夜の弾幕を尽く、ひとつも残

さずに撃ち落としていく。そして、それだけでは終わらずに、無数の弾幕が一気に咲夜を襲った。

「強力なスペルね。だったら、こっちもそれ相応に強力なスペルで行くわ。幻葬『夜霧の幻影殺人鬼』」

咲夜が新たにスペルを唱える。

無数のナイフが現れ、それら全てが慧音の弾幕を相殺しながら、白銀の波が慧音に殺到する。幻符『殺人ドール』の強化版のようなスペルだ。

「二発でも当たっては駄目なら、出し惜しみは無しだな。国体『三種の神器 郷』」

慧音も新たにスペルを唱える。

中弾が全方位に放たれた後、咲夜の方に無数の弾幕が放たれた。最初の中弾が咲夜の弾幕を掻き消していき、その後から無数の弾幕が咲夜を狙うように、計算されて放たれたのだ。

お互いのスペル同士のぶつけ合い。

一発でも被弾してはいけないが故に、下手な手を踏めないのだ。

「強力なスペルを続けて使うのは結構キツイのですが……仕方ありませんね」

咲夜は新たにカードを取り出し、スペルを唱える。

「幻幽『ジャック・ザ・ルドビレ』!」

咲夜から大岩のような大弾が、前方に幾つか放たれる。

その大弾が、慧音の弾幕を否おうなく掻き消していった。

勿論、それだけでは無い。

その後、咲夜は時間を止め、無数のナイフを慧音の周りに展開させる。前方からの攻撃にも手に余るナイフの波に対して、次は全方位。そして時間を動かす。

「ッ!? 何!」

しかも、時間を止められていたが故に、慧音は気づいたら自分の全方位に訳も分からずに展開されている無数のナイフ。

態勢も、予測も、どういった経験則も活かせない状況下である。

だが驚くと同時に、ナイフが自分に被弾するまでの数瞬の時間はあ

る。故に、慧音は直ぐに反応した。

「虚史『幻想郷伝説』！」

透かさず慧音はスペルを唱えた。

慧音から全方位に、無数の弾幕とレーザーが放たれる。

「チツ」

咲夜が舌打ちする。

自分の弾幕が全て慧音のスペルにより、撃ち落とされたのだ。

「こう見えても先生なんていう仕事をしていな。どんな状況でも、直ぐに効率の良い対応が出来るように鍛えているんだ。そうでもない、子供たちの相手は大変だし、もしもの時に子供たちを救えないからな。だからこそ、先のナイフの弾幕も突破できた」

「成程、先生ですか。世の中の先生というものは、とてもお強いのですね」

「当たり前だ。先生は、生徒の為なら何も惜しまないからな」

そして、天に向けて手を振り上げ――

「終わりだ、紅魔の従者！ 未来『高天原』！」

慧音がスペルを唱える。

それはまさしく高天原より、大地に向けて放たれる神罰のように全方位より、無数の弾幕と全てを射抜くレーザーが隙間なく放たれた。

そして正銘、紛れもない全霊に近い慧音のスペルである。

「これは、不味いですね。流石の私も本気のスペルで行かないと、勝ち目は無い様です」

咲夜が額から汗を流して呟く。

一発でも被弾したら負け。

相手が本気のスペルで来たら、それ相応のスペルで対抗しないと、直ぐに敗北してしまう。

故にここで、咲夜は自分の持つ最強に等しいスペルを唱える。

「――私はこの瞬間、この今こそが思考の至福の時であり、最も愛する刹那である――それ故に今の時が永遠に続くよう過去未来を全て現代に収縮する」

それは符名の付かない強力なスペルを唱えるための祝詞。

自分が愛する、今この時を何よりも大事にするがゆえに生まれた最愛のスペル。

『デフレーションワールド』！』

そして唱えた。

(あのスペルは……ヤバイ!!)

慧音が咲夜の符名の付かないスペルを唱えたのを見て、身構える。

——瞬間、咲夜から単独で飛ぶ青と黄のナイフが放たれる。

そして咲夜がその次に時間を止め、どこからか無数のナイフの弾幕が一気に現れた。

それらが時間を動かすと同時に一気に放たれ、慧音の全ての弾幕を掻き消していく。

単独で飛ぶ青と黄のナイフとライン状に並んだ、慧音狙いのナイフを発射した後に時間を止め、青ナイフの飛ぶ軌道上全てに無数のナイフを配置発射。この技は過去未来を収縮して放つスペル。ゆえに無限に等しい白銀を前に、有限に等しい慧音のスペルは無力である。

「やはり、無理か……」

慧音が消されていく自分の弾幕を見て言う。

「私の『デフレーションワールド』は時空を収縮させることで、投げたナイフの過去と未来を具現化させるスペルです。そう簡単には敗れませんよ」

咲夜が自分のスペルの説明をした。

そして咲夜が第二の攻撃をしようとする。

「成程、強力過ぎるスペルだ。なら、こっちも」

慧音は再び、天に向けて手を振り上げた。

「見せてやろう。私の最強のスペルを」

そして唱える。

「——使者言？王以天爲兄 以日爲弟 天未明時出聽政 跏趺坐 日出便停理務——云委我弟 高祖曰 此太無義理 於是訓令改之」

その祝詞は、聞いているレミリアは勿論、咲夜にも理解できなかった。

しかし、そこに孕む全身全霊の力は全神経を持つて感じた。

『日出づる国の天子』！』

慧音を中心に全く隙間の無いレーザーが全方位に放たれる。

これにより、咲夜は身動きが取れなくなった。

そして、その状態で咲夜狙いの弾幕が発射される。

このままだと咲夜が負ける。

だが、咲夜はその前に考える余地も捨てて反射的に『デフレージョ
ンワールド』の第二撃を放った。

両者の最強のスペルが激突する。

そして……お互いに弾幕が行き届いたのだった。

《2》

咲夜と慧音の弾幕勝負は、お互い同時に一発被弾して、幕を閉じた。

結果は互角。

咲夜が勝てば、人里を元に戻す。

慧音が勝てば、咲夜たちは素直に立ち去る。

だが、どっちも勝っていないければ、負けてもいない。

互角だった時は何も決めていない。

だから、どうして良いのか分からないのが現状。

「……で、一つ聞きたい事があるんだが」

慧音が不服そうな顔をしている咲夜に言う。

「どうやら慧音と互角だった事が悔しいようだ。」

咲夜は紅魔館のメイド長と言うプライドもあったから尚更だ。

「はい、何でしょうか？」

「お前たちは人里の人間を襲いに来たのか？」

「……いいえ、違います。私たちは人里に行っただけ帰られない妹様
と黒崎一護様を探しに来ただけです」

「何？」

慧音は黒崎一護と言う名前に反応する。

その反応を見てレミリアが口を開いた。

「あなた、黒崎一護を知っているようね？」

「あ、ああ。まさか……」

慧音は何かに気付いたのか、その事を言う。

「妹様と言うのは、フランドール・スカーレットの事か？」

その名前を言われ、レミリアと咲夜は驚く。

知っているとは思わなかったからだ。

「なぜ、その名前を？」

フランの名前を知っているのは紅魔館の者と、極少数の人間のみ。

それ以外で知っている者は一部除いてまず居ない。

だが、慧音はその名を知っている。

その理由は……

「一時間くらい前まで、私の家に居たからな」

そう、一護とフランはさっきまで慧音の家に居たのだ。

そして慧音とフランは自己紹介までしている。

知っていて当たり前前の存在に、慧音はなっている。

「家に居たあ!？」

レミリアと咲夜は同時に声を上げる。

予想外すぎる答えが返ってきたからだ。

「ど、どうして、あなたの家にフランが……!？」

「ん、それは——」

慧音は一護とフランと出会ってからの事を話す。

話すと言っても、団子屋の前で偶然会って、そのまま家で話し込んで

だと言う事だけである。

その事を慧音が話し終えると、咲夜が口を開く。

「その後、妹様と黒崎一護様はどちらへ行かれましたか？」

「何も言っていないが……ただ家へ帰るとしか」

「そうですか」

手掛かりは0。

やはり、そう簡単には見つからない。

「ただ、帰ったら霊夢に怒られるとか愚痴っていたな」

「……どうして？」

付け足しのように言った慧音の言葉に、レミリアが食い付く。

「いや、よくは聞いていないんだがな。誰かさんのせいで境内がまた

破壊されたとか何とか……」

そのセリフにレミリアはあの時の事を思い出す。

平和ボケをしていた一護に放った弾幕。

手加減をしたとはいえ、地面を少し吹っ飛ばしてしまった。

恐らく、それに対してだろう。

「咲夜それって」

レミリアは咲夜の方を横目で見て言う。

咲夜はそれを察したのか一言……

「でしようね」

と、だけ答える。

「仕方ないわね。一度、博麗神社に行ってみようかしら」

「それなら私が確認しに行きましようか？」

咲夜が言う。

「そうしてくれたら助かるわ」

「はい。では……」

瞬間、咲夜は時間を止め、その間に一人で博麗神社にまで向かった。

咲夜の能力は“時間を操る程度の能力”。

その能力を使い時間を止め、確かめに向かう。

そうする事で、咲夜以外の人は何もせず済む。

何たって、その刹那には咲夜が答えを持ってきているのだから。

まるで、どこぞのネコ型ロボットが使うタイムウォッチだ。

「お嬢様、博麗神社には誰もいませんでした」

瞬間、咲夜がレミリアの目に前に現れた。傍から見れば、咲夜がレ

ミリアの前に瞬間移動したように見えるだけである。

「そう」

一言だけ答えるレミリア。

「恐らく博麗霊夢はこの月の異変の解決に向かったと思います」

「……それしかないわね。恐らく一護も異変の解決に向かった。それにフランが付いて行ってしまった……と、考えるのが妥当ね」

レミリアが推理する。

その推理はほぼ100%合っている。

「いかなさいますか？」

咲夜が聞く。

答えはもう分かっているが。

「急いで追うわ。この妙な妖気を感じる方に行けば会えるはずよ」

そう言うのと、完全に慧音の存在を忘れた二人は、行動を起こしたのだった。

*

その頃、竹林にウルキオラが居た。

何か考えているのか、目を閉じている。

「そして……………」

スツと、ウルキオラは何かを感じたのか目を開ける。

「…………動いたか」

ウルキオラはそう言うのと、右手と左手を広げた。そして虚空に沈むように、そこから空間が割れ上げつつ叫喚した。

「解空『デスコレール』」

そしてスペルを唱えた。

それを唱えると、ウルキオラは歩き出す。

その先は…………

*

同時刻、禁呪の詠唱チームの魔理沙とアリスは、竹林近くを飛行していた。

二人とも、怪しい妖力を感じる方を飛んでいて、此処まで来たのだ。

「竹林の中が怪しいぜ、アリス」

横を飛行するアリスに言う魔理沙。

「ええ、分かってるわ」

アリスも怪しい妖力が竹林の奥から来ている事は、分かっている。

「さあて、今回はどんな相手か楽しみだぜ」

まだ一度も弾幕勝負をしていない二人。

何の妨害も無く、普通に敵の根城近くまで来てしまったのだ。

だから弾幕ごっこが好きな魔理沙は現在、弾幕ごっこがしたくて堪らない状態だ。

「そうね。私の予想では亡霊女だと思うけど」

まだ言っているアリス。

どこまで亡霊女もとい幽々子を疑っているのやら。

「幽々子だったらリベンジだな。あの時は三人掛かりで勝てなかったから」

いちいち突っ込むのも面倒になった魔理沙は、アリスの予想に合わせる。

そう言う会話をしている間に、いつの間にか竹林の中に入ってしまった二人。

その時だった……

「！……何だ、一瞬何か変な力を感じたような？」

「奇遇ね……私も何か妙な力を感じたわ」

どうやら二人共、一瞬不可思議な力を感じたようだ。

と、突然アリスと魔理沙の前方にある二人組が現れた。

「お、おい、アリス。あれって……」

魔理沙が前方を指差しながら驚愕の眼差しで見ている。

「ほら、私の大正解」

アリスが満足気な表情をしながら言った。

*

禁呪の詠唱チームが竹林に入る少し前。

幽冥の住人チームの妖夢と幽々子は既に竹林の中に入っていた。

因みに、この竹林は迷いの竹林と言われ、その名の通り必ず迷う。

単調な風景と霧、地面の僅かな傾斜で斜めに成長している竹等によつて方向感覚を狂わされると言う。

また、竹の成長が早い為すぐに景色が変わり、目印となる物も少なく、一度入ると余程の強運でない限り抜け出せない。

「幽々子様……妖気を辿れば敵の本拠地に着くと仰いましたが」

妖夢は自分の少し前を飛行する幽々子に言う。

「そうよ。敵の根城は直ぐ其処。もう後数十分行ったら着くわね」

「いえ、そうではなく、私が言いたいのは……」

「事が上手く進みすぎている……と言いたいでしょ？」

「は、はい。そうです」

自分の言いたい事を幽々子に言われて少し驚く。

「そうなのよね。私もそれが気掛かりで仕方ないのよ。まるで、敵の策略に上手く嵌ってしまったような……そんな感じを」

「私も、先程からそう思っています」

どうやら二人共、同じ感覚を抱いていたようだ。

「……敵の何らかの罠だったら、どうなされますか？」

妖夢が聞く。

不安なようだ。

「その時は、妖夢の日々の鍛錬の成果に期待しているわ」

ミスティア戦の時に言った、妖夢の言葉を言う。

それを聞いた妖夢は少し顔を赤くした。

「は、はい！ 幽々子様のご期待に答えられるよう頑張ります！」

「それじゃあ——早速頑張ってもらおうかしら」

「！」

幽々子のセリフに妖夢は近づいてくる複数の力に気付いた。

その力は弾幕。

複数の弾幕が妖夢と幽々子に殺到しているのだ。

「幽々子様！ お下がりにください!!」

妖夢はそう言うと、幽々子の前に立ち、楼観剣を抜く。

そして剣に霊力を込め、全ての弾幕を剣で撃ち落とす。

「何者だ!？」

妖夢は弾幕が飛んできた方向に向かって叫ぶ。

それと同時に二人の人影が現れた。

「ほら、あつてたでしょ。私の予想」

「信じたくは無いけどな。本当に」

それは禁呪の詠唱チームの魔理沙とアリスだった。

「まあ、とりあえず——動くと思つぜ」

そして魔理沙がミニ八卦炉を持ち、妖夢の方に向けて言った。

完全に臨戦態勢に入っているのだ。

*

その頃、夢幻の紅魔チームのレミリアと咲夜は目を丸くしていた。先程まで森林を飛んでいたのに、今は竹林の中に居るからだ。まるで森林から竹林に空間移動したような感覚だ。

「……これはどういう事なの、咲夜？」

「私にも理解できません」

二人共歩みを止め佇んでいる。

現状が理解できないからだ。

「ですが、一つだけ分かるとすれば、妙な妖気を感じる拠点に近づいたと言う事くらいですかね」

「ええ。敵の罠かしら？」

「……恐らく」

これにより、二人は慎重に動く事にした。

だが、それは意味を持たなかった。

そう、前方に幻想の境界チームの霊夢と紫が居たからだ。

「ようやく見つけたわ、博麗霊夢」

前方に居る霊夢に向かって言う。

その声に気付いた霊夢と紫は、レミリアと咲夜の居る方を見る。

「あれ、何であんたが此処に居るの？」

霊夢が尋ねてくる。

レミリアが居た事には、あまり驚いていないようだ。

「……単刀直入に聞くけど、一護とフランを何処に行ったか知ってる？」

レミリアが霊夢の問いを完全に無視し、自分の聞きたい事を聞く。

「私の質問は無視？ まあいいわ。一護とフランなんて知らないわよ。一護とは昼から会ってないからね」

「昼から……」

「ええ。それより……ちょうど良かったわ。あんたに一つお説教をしたかったのよ」

「え……？」

何故か霊夢のセリフが理解できてしまったレミリア。

「あんだ、私の境内を一部ふっ飛ばしたでしょ」

レミリアの予想は大正解だった。

さつきも言った通りレミリアは、今日スペルで博麗神社の境内の一部を粉々に粉碎した。

霊夢にとつて博麗神社はかなり大切な家。

そこを壊された事で怒っていたようだ。

「な、何で、それを……？」

それに少し動揺するレミリア。

「微量だけど、粉々に砕けた境内からあんだの妖気を感じたからよ」

「そういう事ね」

「理解した所で遅いわよ。悪い子には……お尻ペンペン一万回よ」

「私はガキか!？」

*

同時刻、禁忌の死神チームの一護とフランは他のチームと同じく迷いの竹林の中に居た。

どうやら一護は他のところと一緒に、妙な力を感じる方に進んでいたようだ。

「この辺だと思っただけだな」

一護が言う。

元々霊圧探査などが下手な一護が、此処まで来ただけでも凄い事だが、迷いの竹林に入ってからには全く分からなくなったみたいだ。

「いっちー、もしかして私たち迷子?」

少し不安な表情をしながら言ってくるフラン。

「……多分な」

答えたくなかったが、一応答える。

だが、多分ではなく、完全に迷子だ。

この光景は、まるで何処ぞの11番隊のコンビだ。

「黒崎一護」

その時、背後から一護の名を呼ぶ、声が聞こえてきた。

(ツ!! ……この声は!?)

一護はこの声に聞き覚えがあった。
かつて一護と壮大な戦いを繰り広げた人物の声。
声のした方に振り向く。

そこには――

「ウルキオラ！」

一護は驚愕の眼差しで言った。

そう、そこには……ウルキオラ・シファアーが立っていたのだった。

第36斬【禁呪VS幽冥・幻想VS夢幻】

《1》

——ウルキオラ・シファア。

虚夜宮で一護と壮絶な戦いを繰り広げた破面。

虚無のような隙のない気配は凍結した鋼のようで、顔立ちは整っているが、全く温かみを感じない。酷薄で、冷厳で、威圧的な気配ながら、なぜか虚無のような不確かな存在感。

忘れるはずもないし、間違えるはずもない。

かつて一護が暴走して、消滅させてしまった男。

「ウル、キオラ……！」

黒崎一護は、その存在を確認し冷静ではいられなかった。

それもそのはず。

グリムジョーは虚圏で生きてまま幻想入りしたが、ウルキオラは完全に消滅して幻想入りしている。生きてまま幻想入りしたのなら分かるが、死んだはずのウルキオラが幻想入りしているのは、どうも理解出来ない。

「何で……テメエが幻想郷にいるんだよ……!?!」

驚きのあまり、目を見開いたままの一護が声を上げる。

脳が理解しきれない不明で染められた。否、そもそもここは非常識が司られる幻想郷。もしかしたら、有り得ない話ではないのかもしれない。

「黒崎一護。貴様の質問を聞いている暇など無い」

「何だと?」

ウルキオラの台詞に一護は顔を険しくして言う。

そしてウルキオラは、一步一步ゆっくりと歩みを進め、一護との間合いを縮めてきた。

「いっちー……」

フランが一護の服にすがり付き、ウルキオラの方を見据える。

その表情からは、怖い人を目の前にしている少女のように恐怖していた。

「あれ……ヤバイよ」

フランが体を震わしながら言った。

こんなフランの姿は今まで見た事がない。

「フラン……」

「私、恐い。あれとは戦いたくない」

フランとは思えない台詞だ。いくら狂気が無くなったとは言え、己の力が無くなったわけでもないのに。それ程までに、ウルキオラは別格ということだろうか。

「心配すんな。俺が付いてるだろ」

「……う、うん」

一護の言葉にフランの表情が少し和らぐ。

「ウルキオラ。すまねえが、今はテメエに構ってる暇は——」

その時、一護は雷が体に迸ったかのように、複数を感じ取った。

(この力は……霊夢、紫さん、魔理沙、アリス、レミリア、咲夜、妖夢、幽々子さん！ 何で、みんなが……!?)

「ようやく気付いたか、黒崎一護」

一護の驚きの表情を察したのか、ウルキオラが口を開く。

「何……?」

「今、貴様の脳に浮かんだであろう連中は醜い争いをしている。俺の計画通りにな」

「ウルキオラ……テメエ、何しやがった？」

「……力付くで吐かせてみる」

「ッ！」

瞬間的に流出したウルキオラの霊圧に、一護は少し態勢を崩す。

だが直ぐ様態勢を戻し——

「上等だあ!!」

ウルキオラの挑戦を受けた。

軽く、いとも簡単に。全てがウルキオラの手の平の上だと気づかず
に、黒崎一護は簡単に策略に嵌ってしまったのだった。

*

現在——禁呪の詠唱チームと幽冥の住人チームは弾幕勝負を繰り

広げていた。

お互いの攻防戦は全く止む事が無い。

飛び交う弾幕と、無数のレーザー。周囲の竹林は薙ぎ払われ、舞い落ちる竹葉でさえも激闘の熱波により焼失している。

最初に妖夢はアリスの変な誤解を解こうとしたけど、アリスが全く聞く耳を持たなかった為、こうなった。

「ほら早く月を元に戻しなさい！ 魔符『アーティフルサクリファイ』！」

アリスが前方にいる妖夢と幽々子に向かって、魔力を込めた人形を放り投げる。

そしてその人形が二人に近づくと、まるで手榴弾のように爆発を起こした。

だが、妖夢と幽々子はそこから無傷で現れた。

どうやら妖夢が爆発する一歩手前で、自分たちに被害が及ばぬ距離で人形を斬っていたようだ。上手く、その人形に練られた魔力を演算し、余裕の範囲をもつてして突破する達人技。

それにより、当然のように爆破の力が二人に届かなかったのだ。

「ですから、誤解と何遍も言っているはずですよ！ どうしてこう、あなた達は聞き分けが悪いのですか!？」

「前科があるあなた達がよく言えるわね。たく、犯人つてのはどうしてこう素直になれないのかしらね」

妖夢の言葉などまるで聞く耳なし。

確かにそう思われても仕方ない。妖夢と幽々子には前科がある。信頼という面において、そして過去において疑われても文句が言えないのだ。

「ツ……どうやら本当にあなた達を倒す以外、ここを打破する事が出来なようですね」

これにより妖夢が遂に本気で闘るようになった。

「そうする事ね。魔操『リターンイナニメトネス』！」

再びアリスがスペルを唱える。

魔力を込められた人形が、複数放り投げられる。先の魔符『アー

ティフルサクリファイス』の上位符だろう。

「人鬼『未来永劫斬』！」

妖夢はアリスがスペルを唱えると、その後からスペルを唱える。

それによりアリスが投げたきた複数の爆破人形は全て、妖夢の銀光迸る剣戟により防げた。

「幽々子、少しはお前も動こうぜ！ 恋符『マスタースパーク』!!」

魔理沙の持つミニ八卦炉から、閃光煌く極太レーザーが発射された。

その極太レーザーは、周囲の空間を震わせながら妖夢の後ろに佇んでいる幽々子に向かって放たれている。

「妖夢一人じゃ、やっぱり無理よねえ」

幽々子は己に飛んでくるレーザーを、軽く上空に高く浮き回避する。

避けたせいで、幽々子の居た場所はレーザーにより木っ端微塵に吹き飛び、隕石が墜落したのではないかと思うほどのクレーターを残していた。

（あの時より威力も速さも増しているわね。これはこれは、今生きる世代も侮れたものではないわね）

幽々子は魔理沙のマスタースパークを観察し、春雪異変の時のことを想起していた。

——魔理沙はあの時より強くなった。

それは幽々子に三人がかりで、あれだけボロボロにされたんだ。

悔しくなかつたわけが無い。その悔しさをバネにし、強くなった。まるで少年のような青臭い理由だが、これがどうして中々馬鹿にできないものではない。

「少しは楽しめそうね。死蝶『華胥の永眠』」

幽々子がスペルを唱えると、自分を中心に蝶型の弾幕が展開され、それが蝶が飛び立つように一気に拡散された。

「来るぜアリス」

「分かってるわよ」

魔理沙とアリスは幽々子の弾幕を注意深く観察し、そのスペルに相

応しいスペルを唱える。

「魔操『リターンイナニメトネス』！」

「恋符『マスタースパーク』！」

アリスと魔理沙は先程のスペルを唱え、幽々子の弾幕を掻き消していった。

たかが幽々子が軽く放ったスペルに対し、必殺に等しい二人が繰り出したスペル。しかしそうでもしないと、あのスペルは打破できなかった。それ程までに幽々子の霊力は桁違いに高いのだ。

「人符『現世斬』！」

そして二人が幽々子のスペルに気が行っていた隙を突き、妖夢がスペルを唱え、アリスに高速で斬り掛かる。

妖夢はアリスさえ倒せば、誤解が解けると思っている。だからアリスを倒して、魔理沙を説得しようとしているのだ。

「小賢しいわね。戦操『ドールズウォー』！」

アリスが急接近してくる妖夢を見て、即座にスペルを唱える。

妖夢から身を守るように、アリスの前に複数の槍を持った人形兵が現れた。

その人形兵達が、回転しながら槍を振るっている。

妖夢はそれらの人形兵を、剣で斬り崩していく。

「隙有りよ——呪符『上海人形』！」

そもそも人形兵はあくまで隙を作らせるため。次に放つスペルこそが本領なのだ。

アリスの眼前に一体の人形が現れ、その人形から極太レーザーが目の前にいる妖夢に向かって放たれた。

（しまった!!）

妖夢は直ぐ様、防御の態勢に入る瞬間には、極太レーザーが妖夢を飲み込んだ。

「くッ!!」

妖夢は一瞬苦悶の声を上げ、後方に吹っ飛ぶ。

「大丈夫、妖夢」

「余所見注意だぜ幽々子！ 光撃『シユート・ザ・リトルムーン』！」

魔理沙は幽々子が妖夢の方に気を取られた隙を突き、スペルを唱える。

複数のレーザーと星型の弾幕が、上空に佇んでいる幽々子を襲う。

「あなたも足元注意よ魔理沙。再迷『幻想郷の黄泉還り』」

瞬間、魔理沙の足元が急に光だし、そこから大量の幽霊のような質量の宿った力の波が現れ、魔理沙を攻撃した。

まさに虚を突いた幽々子のスペルそれにより、魔理沙はかなりのダメージを受けた。

「幽々子様！」

起き上がった妖夢が声を上げる。

そう、魔理沙に攻撃を与えても、さっき発動したスペルの弾幕とレーザーは残っている。

光撃『シュート・ザ・リトルムーン』のスペルで放たれた、レーザーと弾幕が幽々子との差をほとんど縮めているのだ。

「くっ。断迷剣『迷津慈航斬』!!」

妖夢は瞬歩の如く速さで幽々子の目の前に移動し、楼観剣に大量の妖力を注ぐ。

そして顕現されたのは、光り輝く巨大な剣だった。

「ハアアアアアアアアア!!」

妖夢は迫ってくる弾幕とレーザーに向かって、気合の雄叫びを上げながら、剣を振るった。

妖力を纏った剣が、向かってくる弾幕とレーザーを全て否応なく掻き消す。

「あなた……少し学習した方がいいわよ」

アリスが妖夢を見据えて呟いた。

それに妖夢は目を見開く。

何故なら妖夢のほぼ目の前に、一体の魔力の込められた人形が投げつけられていたからだ。

「魔操『リターンインニメトネス』よ。隙がありすぎてビックリ」

アリスがスペルの名を言った。

今、妖夢は力一杯に剣を振るった直後だ。

再び剣を即座に振る事は出来ない。

「舐めるな！」

妖夢は怒声を孕んだ声で言う。

——甘く見るな。私はそこまで愚かな失策はしない。

己が持つ、もうひと振りの剣——白楼剣も抜き放ち、人形を引き裂く。そして並々ならぬ妖力を込める。過去、自分の師であり祖父でもあり、そして二代魂魄家とは一線画す妖夢の力が紡がれる。

「人皆月光照らす夜を以て、等しく狂乱疼く朱き太極描き散る——魔性響めく反射衛星に舞え禍莫大於無敵の陣」

己の力を最大限までに放出する、妖夢の奥義が繰り出される。

「待宵の狂月よ 月光を反射せよ！ 『待宵反射衛星斬』!!」

妖夢は符名の付かないスペルを唱える。

その刹那、引き裂かれた人形は止めを刺されるように妖夢の超高速の斬撃により撃ち落とされた。

「ッ!! アリス避ける!!」

倒れかけていた魔理沙の声に、アリスは右へ跳ぶ。

それと同時に妖夢が、アリスの居た位置に斬り込んでいた。

「!!!?」

アリスは驚愕する。

自分でも全く妖夢のスピードを目で追い切れなかったからだ。

もし魔理沙に避けると言われていなかったら、完全にアウトだった。

そして妖夢のスペルは速さが真骨頂では全くない。

斬り込んだと同時に、広範囲に凄まじい質量を備えた鱗弾の弾幕が縞模様の形で無数に配置された。これにより魔理沙とアリスは上手く身動きが取れない。

「終わりです！」

妖夢は再びアリスに斬りかかる。

アリスは間一髪のところ、妖夢の斬り込みを空中に高く跳び避ける。

だが、それをしたせいで妖夢が展開していた弾幕を、何発も受けて

しまった。それだけで体へ与えられた力は、自分の体力と精神力を見るも無残にへし折られそうになった。

「避けましたか……」

妖夢が空中に移動したアリスを見て言う。

アリスは弾幕をもろに何発も受けてしまったので、一気に満身創痕と言っているほどだ。

「だったら、次は避ける事が出来ない程の速力で行きます。甘く見ていたわけではありません。久方ぶりのこの力に、少し身体が追いついていなかっただけです」

剣を構える。

次は避けるのが不可能だと悟ったアリスは、もう自分の力を隠してはいられない。

「復刻する恐怖劇からは人々の悲鳴散らばせ悦に酔い痴れる大公——並び座すオペラもまた人に悲劇を沸騰させる狂乱の闇劇、そうして再び恐怖を魅せよ」

紡ぎ出される祝詞は、人々に与える恐怖の人形劇のみ。

『『グランギニョル座の怪人』！』

アリスも符名の付かないスペルを唱えた。

それを見た妖夢は一旦動きを止める。

下手に突っ込んだら危ないからだ。

アリスを中心に八つの魔方陣が現れ、そこから無数の米粒弾が放射状に放たれる。

それにより、妖夢が展開した弾幕が次々と相殺されていく。

(これなら、行ける！)

アリスのスペルを見て、妖夢はそう判断した。

アリスは米粒弾を放つ以外、何もしていないからだ。いや、例え他に何かをしても、それをする前に討てばいいだけの話なのだ。

妖夢は飛んでくる米粒弾を剣で斬り潰しながら、一気にアリスに向かう。

だが、アリスの無数の弾幕で速力が落ちる。

「これで、最後だ！」

妖夢が叫ぶ。

後もう少しで剣の間合いに入るからだ。

「最後はあなたよー!」

アリスが叫び返す。

その瞬間、八つの魔方陣から放たれていた米粒弾が一瞬止まり、続いて妖夢狙いの鱗弾の弾幕が無数に発射された。

放射状に放たれていた無数の弾幕が、妖夢一点に集中されたのだ。これでは、勢いに余った妖夢は完全に避ける事が出来ない。

「——だからって、私は負けない! 変な誤解されて、勝手に襲ってきただあなた達に負けたら、格好悪いから!」

烈光迸る剣閃。

全く無駄のない乱舞により、無数の弾幕が薙ぎ払われていく。今の妖夢なら流星群だろうが大海嘯だろうが颶風だろうが、全てを一点の曇りなく引き裂けるだろう。

「あらあら妖夢ったら、一人で勝手に燃えちやって。けど、そんなところが可愛くて仕方ないのよね。だから、私もちよつぴ本気で手伝おうかしら」

そんな中、幽々子がとんでもない横槍を投擲する。

「仏授記已 便於中夜 入無余涅槃 仏滅度後 妙光菩薩 持妙法蓮華經 滿八十小劫——西行寺の死力以て滅する満開の奥義桜」

それは過去に一護に対して放った反魂蝶の、満開に相当する最強のスペル。

「亡霊女の涅槃の境地を見よ『西行寺無余涅槃』」

幽々子が符名の付かないスペルを唱える。

レーザー・大玉・高速で移動する蝶々弾が全方位に発射された。

そして、やはりと言って一護戦に使用した『反魂蝶——八分咲——』のようなスペルだ。

だが、完全に弾幕の速さも数も違っている。

もしかしたらこのスペルは、決して起こり得ない『反魂蝶——満開——』を表しているのかもしれない。

「来たぜアリス!!」

「ええ。分かっているわ！」

二人は九死な状況下にありながら、スペルを唱える。

「魔砲『ファイナルスパーク』！」

「呪詛『蓬莱人形』！」

魔理沙のミニ八卦炉から飛翔する神威の一撃——黄金に光る極太レーザーが放たれた。

続いてアリスは妖夢にも気を配らせながら、自分の眼前に複数の人形が展開し、その人形達からレーザーが放たれた。

恐らくこのスペルは、呪符『上海人形』の上位符だろう。

二人が放ったレーザーが、幽々子の放つ弾幕を掻き消していく。

だが幽々子から出される大玉と弾幕の数が多い上に速い。

到底二人のスペルでは歯が立たない。

「くそ、やっぱ無理か」

二人はスペルを解き、弾幕、大玉、レーザーを避ける。

「だったら、私も本気で行くぜ！」

魔理沙は弾幕を避けながら、自分も負けじと唱える。

「闇夜を引き裂き暗黙を光輝躍起に塗り替えちまえ——さあ派手に楽しめ天より星々がお前らの煌く姿に嫉妬して落ちてくるんだから」

それは何とも魔理沙らしい祝詞であった。

「『ブレイジングスター』!!」

魔理沙が符名の付かないスペルを唱える。

瞬間、空からマスタースパークのような極太レーザーが、いくつも降ってきた。

まるで沢山の彗星が地に落ちてきているようだ。

——その極太レーザーがもはや敵味方関係なしに降り注いだのだった。

《2》

禁呪の詠唱チームと幽冥の住人チームが戦っていた頃——

禁忌の死神チームはウルキオラと対峙していた。

ウルキオラは刀を抜かずに、両手をコートに入れ、ただそこに佇んでいる。

一護も代行証を出さずにウルキオラを見据えていた。

「…………どうした、何故来ない」

向かってこない一護を見て、ウルキオラが言った。

今までの一護なら、真っ先に向かって来たはずだからだ。

虚圏でもウルキオラとの戦いの時は、いつも一護から斬りかかって
いた。

だが、今回はそれをしない。

「やっぱ、テメエもか？ ウルキオラ」

一護は冷静に何かを聞く。

「何？」

質問の意図が分からないウルキオラ。

それに対し、一護は言った。

「霊圧と帰刃の事だ」

眉一つ動かさなかったウルキオラの表情が、その事を言われ、少し
眉をひそめる。

この反応を見るからに、ウルキオラはやはりグリムジョーと同じ異
変に陥っているようだ。

霊圧の半分以上が消失の上、帰刃で斬魄刀の解放が不可能になっ
ている。

ウルキオラは、このグリムジョーと同じ状態なのだろう。

「……………」

ウルキオラは黙ったまま、何も答えない。

「そうか」

一護はウルキオラの様子を見て、察したのか、深く聞くのを止めた。
「分かった、そろそろ行くぜ…………」

代行証を取り出し、死神の姿になる一護。

この状態の一護とウルキオラの対峙している光景を見ると、まるで
あの時の戦闘を思い出してしまう。

「博麗の死神 黒崎一護だ」

一護は二つ名と共に名乗る。

弾幕勝負の前に名乗るのは礼儀らしいことを、得てから覚えた。

「虚無の黒い大魔 ウルキオラ・シフアー」

ウルキオラもそれに連ねて名乗る。

それを聞いた一護は、右腕の霊圧を刀状に構築する。

そして一気にウルキオラの方に斬りかかったのだった。

*

幻想の結界チームと夢幻の紅魔チームの弾幕勝負。

この弾幕勝負の事の発端は——ウルキオラの策略でもあるが——レミリアが博霊神社の境内の一部を粉々に粉碎した事で、霊夢が怒り、起きたと言う下らない理由だ。

こんな下らない理由でも幻想郷の者達は真面目に弾幕勝負をする。負けると言うのはプライドが許さないからだろう。

「いさぎよく、お尻ペンペンされたらどう？ 散霊『夢想封印 寂』」

霊夢が相手に対してガキ扱い丸出しな発言をしながら、己の代名詞とも言えるスペルの応用を唱える。

すると無数のお札と、弾幕が霊夢からばら撒かれた。

「させませんわ！ お嬢様のお尻に触れて良いのは……私だけです！」

「何であなたはOKなの？」

咲夜の露骨なセクハラ発言にレミリアが小声で突っ込む。

そして咲夜はスペルを唱える。

「幻符『殺人ドール』！」

咲夜の周りにナイフの弾幕が展開され、白銀の尾を照らしながら一斉に霊夢に向かって放たれた。

霊夢から放たれたお札や弾幕は、咲夜のナイフに相殺されていく。

「今の発言、少し危ないわよ」

呆れた表情で言いながら霊夢は、飛んできたナイフを避ける。

「けど、そう言われると、意地でも触りたくなるのが、博麗のさがよね」博麗にそんな性はありません。

しかも完全なセクハラ発言に昇華された。

「それじゃあ次行くわよ。神技『八方龍殺陣』！」

霊夢がスペルを唱えた。

無数の弾幕とお札が、霊夢を中心に全方位に隙間無く放たれた。避け切る事が不可能だと思ったレミリアと咲夜は、同じくスペルを唱える。

「幻葬『夜霧の幻影殺人鬼』！」

「紅符『不夜城レッド』！」

咲夜からは無数のナイフが放たれ、レミリアからは自身を中心に真紅の十字架型のオーラが噴射された。

それらが霊夢の放つ弾幕とお札を掻き消していく。

「神槍『スピア・ザ・グングニル』」

レミリアは続けてスペルを唱えた。

左手が紅く光り、そこから巨大な紅い槍が形成された。

森羅万象を貫く神槍を、吸血鬼の膂力で瞬足の域で投擲される。

紅い槍が霊夢の弾幕とお札を掻き消していき、そのまま一気に霊夢に迫った。

「神技『八方鬼縛陣』！」

流石の霊夢も危険を感じ、即座にスペルを唱えた。

飛来してくる紅い槍の方向に結界を張り、身を守る。

結界に紅い槍が衝突すると、凄まじい轟音と、紅い光りが発せられた。そしてお互いの力が相殺され、ガラスが碎けるように散った。

「後ろがガラ空きです！ 傷符『インスクライブレッドソウル』！」

咲夜が一瞬の霊夢の隙を突き、後方に回っていた。

そしてスペルを唱え、目にも止まらない速さでナイフを使い、霊夢に切りかかる。

「チツ」

霊夢は不服そうに舌打ちし、切り込んでくるナイフを全て紙一重で避け続ける。

少しでも気を抜けば、直ぐに切られる勢いだ。

「こつちも無視しちゃ嫌よ霊夢。嫉妬しちゃんじゃない！ 紅符『スカーレットマイスタ』！」

霊夢が咲夜の切り込みを避けている中、霊夢の後方にレミリアが笑みを浮かべながらスペルを唱えた。

レミリアから複数の大弾が放たれ、それに連なるように中弾と小弾の弾幕が無数に放たれる連鎖型のスペルだ。

「ツ！」

霊夢は少し驚くも、レミリアの行動を予測していた。

妖怪退治に異変解決、この二つの事に特化した霊夢に、これくらいの敵の手段は簡単に把握できる。

霊夢はそれを直ぐに対応する。

「大結界『博麗弹幕結界』！」

霊夢を中心に半径5 m程の結界が張られ、その結界内に咲夜とレミリアが中に閉じ込められた。

そして続け様に無数の弾幕を、放射状に全方位に放ったのだ。

「く……ッ！」

咲夜は急に霊夢がスペルを唱えた事により、直ぐ様後方に飛ぶ。

だが霊夢の結界により閉じ込められているので、弾幕からあまり逃げられない上、行動範囲に制限が付けられている。これでは時間を止めようが意味を持たない。

さらにレミリアの放った弾幕が、霊夢の無数の弾幕により悉く潰されていつていた。

現状は霊夢が優勢に立っている。

「クッ！」

「チッ！」

避けるにも、やはり困難を極めたため、いくつか被弾してしまう。

「流星は博麗の巫女つてところかしら……。けどこの程度、吸血鬼の力をもってすれば無力！」

瞳を血のように紅く輝かせ、口を開く。

「渴望する世界を塗り替え 幻想郷を紅魔の世に染めよ——さすれば己が負の面は燃やされ真血としての誇りが尊ばれる——『紅色の幻想郷』！」

レミリアが符名の付かないスペルを唱えた。

瞬間——結界内がレミリアの力により紅く染まり、軽々と霊夢の結界はガラスが割れるように砕けた。

「ツウ！」

更に、そこから放たれた無数の弾幕により霊夢は呑み込まれ、凄まじい痛手を受けてしまったのだ。

だが、それは相手も同じ。

ほぼ捨て身に等しい行為で結界を破壊してせいで、咲夜とレミリア現れると、衣服の所々がボロボロになっていた。

どうやら、二人も結構ダメージを負ったみたいだ。

一旦三人は弾幕を出さずに対峙する。

そして霊夢がある事に気付き、怒り混じりに言う。

「ちよつと、何であんたは戦わないのよ。紫！」

霊夢が声を当てたのは、三人の弾幕勝負を観戦している八雲紫だった。

紫は三人から少し離れた安全地帯で、地に足を着きながら、三人を見ている。

普通なら紫は霊夢のチーム。

相手が二人なら、普通は紫も参戦するだろう。

だが紫はそれをしない。

ただ霊夢が一人で二人相手に戦っている姿を観戦しているだけだ。

「別にいいでしょ。あなた一人でも十分そうだし。ちゃっちゃと終わらせてちょうだい」

紫が笑みを崩さずに言う。

その表情を見た霊夢は少しイラツとした。

「それともなに……あなた一人じゃ、手に負えないのかしら？」

紫のそのセリフに、霊夢はカチンときた。

言い方。

声のトーン。

全てが霊夢の神経にさわった。

「上等じゃない！ 一人で闘ってやるわよ！」

(本当に単純ね、この子は。まあ扱いやすくていいけど)

霊夢の反応に、紫は心の中で笑った。

「さあ、行くわよ」

霊夢はレミリアと咲夜の方に向き直り、スペルを唱える。

「神霊『夢想封印 瞬』！」

すると霊夢は霊力を纏い、高速で動き回って相手を惑わす。それだけでなく、更に霊力の纏った札をばら撒いていった。

「速いわね」

レミリアが目で霊夢を追いながら呟く。

霊夢は二人を囲うように高速移動しながら、お札をばら撒いている。当たれば痛手を食らうだろう。

「けど、捉えられない程のスピードではないわね」

当たりそうになったお札を避けると同時に、スペルを唱える。

「必殺『ハートブレイク』」

紅い槍がレミリアの左手に現れた。

だが、神槍『スピア・ザ・グングニル』程の大きさの槍では無い。

レミリアは霊夢の動きをよく見て、一気に槍を投げる。

「——!!」

霊夢は自分に向かって飛んでくる槍を見て、目を見開く。

直ぐさま槍を躲し、次は絶対に捉えられないであろう速度で動いた。

（速くなったわね）

レミリアは霊夢が加速したのに気付く。

「ここは私にお任せください、お嬢様」

咲夜が一步前に出て言う。

「奇術『エターナルミーク』」

咲夜はスペルを唱えた。

青い無数の弾幕が全方位に凄まじい速さで発射される。

咲夜はいつもナイフを使うが、このスペルはナイフや能力を使わない、スピードと言う面だけに特化したスペルなのだ。

（厄介なスペルね！）

単に咲夜が時間を止めて、自分の周囲にナイフを展開するだけなら回避できたが、こういう単純なスペルは度外視していた。

だけど霊夢は上手い事、弾幕を避けながら行動を続ける。

「避けながらアクションは、やっぱり減速してしまうようね、霊夢」
瞬間、レミリアが霊夢の真正面に立っていた。

霊夢はそれに驚愕する。

「神槍『スピア・ザ・グングニル』！」

その刹那、レミリアはスペルを唱え、巨大な紅い槍が形成された。
それが一瞬にして投げられ、霊夢に直撃する。

——その瞬間、紅い爆発が起こり、霊夢の姿が確認できなくなった。
だが、この程度でやられる霊夢では無い。

直ぐに姿を現す。

衣服が更にボロボロになっており、別途で腕に括りつけている袖が
破け落ちている。

「……あゝあ、私の自慢の巫女服がボロボロじゃない」

戦況を一切気にせず、自分の衣服の心配をする霊夢。

まだまだ余裕があるようだ。

「お尻ペンペン一万回じゃ、済まないわよ」

霊夢がレミリアを睨みつけて言う。

「じゃあ、もっとボロボロにして上げるわ」

レミリアは霊夢の人を殺すような眼を気にせず、再び奥義にも等しい
スペルを歌う。

「其の鬼、神ならず 其の鬼、神ならずにあらす 其の神、人を傷わず

其の神、人を傷わずにあらす 聖人、また、人を傷わず それ、両

相傷わず 故に徳は交に帰す」

それは何とも過去に携わる祝詞。

「『スカーレットディステイニー』！」

レミリアが二枚目の符名の付かないスペルを唱えた。

無数の紅いナイフを全方位に放ちつつ、無数の紅い大弾を霊夢の方
に目掛けて放ったのだ。

「……………」

迫ってくる大弾やナイフを前に、霊夢は動こうとせず、スペルを唱
える。

「天に生み出されし夢想よ 我にその夢想を授けろ——『夢想天生』」

！」

霊夢が符名の付かないスペルを唱えた。

その瞬間、七つの陰陽玉が霊夢の周りに現れ、それが霊夢の周りを回りながら浮いている。

「あれは……!?」

咲夜は霊夢の唱えたスペルを見て驚愕した。

そう、このスペルは紅霧異変の時に咲夜戦に用いたスペルなのだ。そして……咲夜はそのスペルを使われ負けた。

勿論、咲夜はそのスペルの危険性をかなり理解している。

だからレミリアに言わなくてはいけなかった。

「お嬢様！ お気を付け下さい!! あれは——」

だが、咲夜は言い切る事が出来なかった。

何故なら、その前に霊夢にお札による攻撃を受けたからだ。

「ガアッ！」

咲夜はそれだけで倒れてしまった。

「咲夜!!」

流石のレミリアも、咲夜がやられた事に驚いた。

だが、それ以前に不可解な事がある。

何故ならレミリアの放った弾幕が霊夢に当たらずに——通り抜けているからだ。

「一体、何なの、そのスペルは!?!」

レミリアはその現象に全く理解できなかった。

「さあ〜ね、自分で考えなさい、お嬢様。私にお尻ペンペンされながらね」

霊夢は満面の笑みで言いながら、レミリアにゆっくり近づく。

レミリアは近づいてくる霊夢に弾幕を放つが、全てが当たらずに通るだけ。

弾幕が全く霊夢に干渉していないのだ。

「や、やめ……来るな……」

レミリアの声が、どんどん弱くなる。

霊夢は全くレミリアの言う事を聞かずに近づく。

第37斬【揺蕩う思い出】

《1》

——現在、禁呪の詠唱チームの魔理沙とアリスは竹林の奥の方に進んでいる。

進んでも進んでも竹しかない同一の光景の中、魔理沙の心も同じく一つのもやもやとした感情だけで埋まっていた。

「何か、勝った気がしなかったぜ」

魔理沙は不服そうに、まるで親にゲームを途中で止められた子供のように不満たれたれでぼやいた。

「あっちが負けを認めただから、私たちの勝ちじゃない。私はそれで十分納得がいくけど」

そんな魔理沙の言葉に、隣を飛行するアリスが答えた。

アリスは相手とは違い、全く何も気にしていない表情である。

「そうだけだよお、最終的に幽々子には勝てなかったんだぜ。妖夢も妖夢で、まああれは私たちが少し不意を打ち過ぎであったしな」

この会話だけで、魔理沙が一体何に不満を持っているのかは瞭然だろう。

そう、魔理沙は先の幽冥の住人チームである妖夢と幽々子の弾幕勝負に難色を帯びているのだ。

あの戦いを簡単に回想すると——

最後に魔理沙がノリで放った奥義に等しいスペル『ブレイジングスター』を幽々子は、軽々と鼻歌でも歌うかのように気軽な体捌きで避けていた。まあ妖夢は己に襲いかかってくるアリスのスペルに対応していたので、魔理沙のスペルは回避できず、そのまま被弾してしまい倒れたが。

しかし幽々子は軽く避け、尚且つ霊力もまだまだ限界には程遠い万全状態であった。

それなのに幽々子は降参したのだ。まるでこれ以上、戦っても意味がないかのように。

実際問題、それなのだ。

幽々子はこれ以上の戦いは無意味と判断し、弾幕勝負は辞めた。理由としては「自分たちが誰かの掌の上で踊らされている」と感じ取ったからだ。その状況としては、場の不自然さ及び、自分たち以外にも戦いが発生しているのを感じ、はつきりとした。そもそも竹林に入った時点で、妙な靈力に空間を歪められた感覚はあったので、その時点で罠に嵌ったと半信半疑ではあったが直感した。だが降参したのを後押ししたのは、妖夢が倒れたこともあり、お腹が空いたということもあるが。

これが本当の理由だが、魔理沙たちには言っていない。立前上は潔く降参した事になっている。

だが一々本当の事を言ったら面倒だから言わない。

これが本当の事を言わない理由だ。

そして幽々子が犯人と疑っていた、アリスの件は簡単に晴れた。まあ元々何の証拠も無かったから、直ぐに晴れて当たり前だが。

こんな感じで、幽々子と妖夢の弾幕勝負は完結したのだ。

「確かにピンピンしてたからね、あの亡霊女。悔しいけど、あのまま戦っていたら勝てたかどうか分からなかったわ」

アリスが思い出すように言う。

実際にゾツとする話であり、強気で勝てたかどうかなどと言ったが、確実に勝利を掴むのは無理だったであろう。それ程までに実力差があるのだ。

だが降参された。

理由は前述通りである。

「ちきしようく、この異変終わったらもう一度挑みに行くか。あー、もう悔しいぜ」

「だったらその悔しさを、あそこでぶつけたらどう？」

アリスが竹林の奥の方を指差す。

そこには大きな屋敷が見えた。

こんな広大な竹林の中にポツンと、不自然な形で存在している。外装は平屋の日本屋敷で、竹林の中にあるには中々相応しい屋敷だ。「何だ、あの屋敷？」

「随分と洒落た屋敷ね。恐らく、あそこに異変の元凶者が居るはずよ」
異変の元凶者が居る。

先程までは幽々子を疑っていたのに、今ではもう疑っていない。
そもそも魔理沙は、アリスがなぜ幽々子を疑っていたのか、最後までよく理解できなかった。

「そうだな、よし……憂さ晴らしをしに、一気に突入するぜ！」

魔理沙の合図と同時に、二人は真の元凶者のいる日本屋敷に侵入したのだった。

*

その頃、幻想の結界チームの霊夢と紫は同じく竹林の奥に進んでいった。

夢幻の紅魔チームとの弾幕勝負は、レミリアのお尻ペンペンと言う仕置きをして終了した。その後、咲夜とレミリアはその場所に放置して、先に進んだのは言うまでもない。

「……一護の霊力を感じるわね」

霊夢が目を閉じながら、呟くように言う。

「気付くのが遅いわね。私はあなたが紅魔館の者と戦っていた時から、気付いていたわよ」

紫は霊夢が気付く前に気付いていたらしい。

そもそも紫は霊夢と紅魔チームの戦いを傍観していただけなので、周りの霊力などを探る余裕などが有った訳であり、逆に霊夢は紅魔チームとの戦いに集中していたので、そんな余裕は無かった。

だから、紫が先に気付いていて当然なのだ。

「だったらもっと早く教えなさいよね」

「だってもう知ってると思っただから。それと、あの吸血鬼の妹の……えっと、フランって子もいるわね」

「ええ。らしいわね。それともう一人いるけど、知らない奴ね。誰かしら？」

霊夢が感じたもう一人は、ウルキオラの事だろう。

ウルキオラと霊夢は対面した事が無いので、霊力を感じても誰だか分からない。

「恐らく敵の使者でしょうね。とても強い霊力を感じるわ。どうする？ 助けに行く？」

紫はそう提案する。

「ただど靈夢は首を横に振り、断る。」

「一護なら大丈夫でしょ。あいつはどんな巨大な壁でも、一人で突き破る男だから」

靈夢の眼は一護を信じている眼だった。

そして二人は、この後魔理沙たちが入った日本屋敷に、一悶着があつた後に到着するのだった。

*

瞬間——鼓膜を引き裂くような凄まじい爆発音が、静かな竹林に響き渡った。

砂塵が吹き荒れ、周囲の竹が塵のように吹き飛ぶ。

先の二戦とは比較にならないほど、洒落つ気のない弾幕勝負がここで繰り広げられている。

「くッ！」

落ち着きを払った砂塵から、一護の姿が現れた。

その顔は痛苦に満ちており、その証拠に頬には痛々しい切り傷ができています。

「いっちー！」

フランも続いて砂塵から現れた。

そして、一護とフランは竹林の上空に立つ。

徐々に砂塵が晴れていき、半径50m程が荒野になっている。竹やぶが全て消し飛んでおり、その中央付近にウルキオラが泰然と現れた。

「どうした、黒崎一護。お前の力はこんなものか？」

ウルキオラは上空に居る二人を見上げながら言う。

一護の表情に疲れの色は出ていないが、かなりの傷を負っているのは確かだ。同じくフランは、傷を殆ど負っていないが、少し疲れの色を醸し出している。

対するウルキオラは、二人とは完全に違い、傷も疲れも出ていない。

それどころか、腰に添えている剣を一度たりとも抜いていないのだ。
一護もフランも決して弱い訳では無い。フランは狂気という暴力を捨てたことによって、戦闘に対する弱体化はしているだろうが、吸血鬼としての力は健在だ。

故に、二人共幻想郷では強い方に部類して良いだろう。

だが、ウルキオラは更にその上に居た。それだけの話なのだ。

「……………」

「どうやら、そうらしいな……残念だ」

何も答えない一護に、特に何の感慨も持たないまま、ウルキオラは行動に出た。

「ッ！ いっちー後ろー！」

瞬間、一護とフランの視界からウルキオラが消えたかと思うと、二人の背後に姿を現した。

その速度は死神化した一護ですら捉えることのできない。しかし一護より動体視力の良いフランは、ウルキオラの動きを見逃さなかった。

一護は振り向き様に、右手に漆黒の刀を形成し斬りかかるも――

「虚符『虚閃』」

先にウルキオラの人差し指の先端から、碧色の虚閃が放たれた。

その標的は勿論、一護とフランだ。

一護とフランはほぼ運任せで動き、紙一重で虚閃を横に飛び避け切る。

だがウルキオラの攻撃は止まない。

「まだだ」

再びウルキオラは姿を消し、一護の目の前に現れた。

この高速移動は破面特有の響転だ。

そしてウルキオラは手刀を突き出す。その腕はとても華奢だが、そこに秘められている暴力の密度は、軽く岩を貫く程だ。

「舐めんなー！」

一護は上半身を低くし、手刀をギリギリのところ躲し、同時に右腕の霊圧刀でウルキオラに斬りかかる。

だが、ウルキオラの衣服が斬りこみで斬れただけで、皮膚は一切斬れていない。

破面の持つ鋼皮と言うやつだ。文字通り鋼の皮膚。並みの攻撃では傷ひとつ付けられないだろう。

「いっちー退いて！ 禁弾『スターボウブレイク』！」

フランがスペルを唱えると同時に、一護は即座にその場から離れる。

ウルキオラの上空から流星群のように、無数の弾幕が墜落してきた。

避ける事が出来たはずだが、ウルキオラは「あえて避けず」に、その弾幕を受け入れるように被弾していく。

「まだまだー！ 禁忌『フォーオブアカインド』！」

続けてスペルを唱えるフラン。

このスペルを唱えた事により、フランが四人に分身した。分身といっても、一つ一つの個体が単体フランと同一。故にフランが実に四人いるといつてもいい、最強のスペルだ。

「禁忌『レーヴァテイン』!!」

四人のフランが同じスペルを唱え、同じ巨大な炎の剣が握られる。

「行くよー！」

一人のフランの声を合図に、一斉にウルキオラに飛び集う。

先程の弾幕は止み、ウルキオラの様子は衣服が少し汚れただけで、それ以上は何も変わっていない。向かってくる四人のフランを目にしても、全く危険視していないウルキオラ。

四人のフランが一斉にウルキオラに斬りかかるが、最小限の動きで炎の剣を避け、避け切れなかった物は全て手刀で対応している。

空間が震撼した。

音速を超える速さで動き、敵を引き裂こうとする四つの炎の剣が大熱波を帯びながら、踊り狂っている。同時にフランはさながら超電磁砲のような弾幕を多方よりウルキオラを狙って放っていた。

そんな桁外れな戦闘を繰り返される中、一護はその状況をよく見る。

瞬く間でもいい、ほんの一瞬でもウルキオラの間隙が生まれれば、自分の奥義を見逃さず放つ。

「……黒斬『月牙天衝』」

一護は静かにスペルを唱える。

右腕から凄まじい量の霊圧が込められた。

両者それに感づき、フランは何かを察したのか少し微笑み、ウルキオラは特に表情を変えずに応戦する。

炎剣が舞い踊り、弾幕が飛び交う中――

「行くぜ！ フラン!!」

一護は叫んだ。

それを聞いたフランたちは、ウルキオラから四方に分散し、一斉に炎の剣をウルキオラに向けて投げ飛ばした。

その投力は凄まじく、レミリアにも全く引けを取らない光速の域だ。

それらが一気に四方からウルキオラに投げられたのだ。普通の者なら、絶体絶命だろう。

「少々厄介だな」

流星のウルキオラも、こればかりは油断しては対処に困難すると判断したのか、右手左手に霊力を込める。

そして四方から飛来してくる炎剣を一蹴した。

「うおおおおお!!」

だけど、それはあくまで布石。

本当の目的は、一護の月牙天衝だ。

一護はウルキオラがフランの炎の剣に一瞬の対応をしている間に、ウルキオラの直ぐ近くまで来ていた。

そして一気に月牙天衝をウルキオラに撃ち放つ。

「その程度の策略で、この俺を倒せると思うな」

ウルキオラは既に二人の策略を読んでいたらしい。

右腕に霊圧を込め、月牙天衝をいとも簡単に払い消す。

だが、ウルキオラは少し理解できない事が起きた。

一護の月牙から、あまり霊圧を感じれなかったのだ。

「ただだぜ、ウルキオラ」

「!?」

ウルキオラが少し驚く。

一護が自分の眼前で刀を構えていたのだ。

そう、一護の月牙天衝も布石の一つ。

本当の狙いは月牙を撃った後の弐撃目。

「うおおおお!!」

一護は力強く霊圧の籠った刀で、ウルキオラを斜め一閃に引き裂いた。

今度は最初の斬り込みと違い、霊圧の込められた量が違う。最初に放った月牙は目くらましで、殆ど霊圧が込められていなかった。

その込められていなかった分の霊圧は、弐撃目に込めたのだ。

「――!」

その斬で、遂にウルキオラに傷を負わす事が出来た。かすり傷に近いが、傷を負わせただけでも目つけ物である。

「……………」

ウルキオラは斜め一閃に斬られた腹を、手で舐めるように触れる。

その手に赤い血が付いた。

「……………先のごとは訂正しよう。少しは、やるようだな」

視線の先を一護に向ける。

「だが、この程度の傷を付けたくらいで、思い上がるな」

瞬間――ウルキオラの負った傷が何も無かったかのように、再生した。

その光景に、一護は目を見開いて驚く。

「傷が、治りやがった……………!」

「そうか……………お前は俺の能力を知らなかったな。ちようどいい。俺の能力を教えてやろう」

「何だと? 驕りかよ、ウルキオラ」

「驕りではない。お前には、知る権利があるだけだ」

「知る権利だと……………?」

「……………ああ。この能力は黒崎一護……………お前と、井上織姫のお陰で開

花した”と言つてもいいからだ」

「!? どう言う事だよ。」

少しも理解できない一護は、頭が混乱してきた。

一護と織姫のお陰で、能力が覚醒したウルキオラ。

何故、一護と織姫なのだろうか？

「悪いが、これ以上、話すつもりは無い」

「……………」

一護は深く聞くのを諦めた。

そしてウルキオラは一息置くと、能力名を言う。

「俺の能力は、事象を拒絶する程度の能力”。あらゆる事象は、全て俺に拒絶される」

(!! ……う、嘘だろ。その力は……!?!)

一護は能力名を聞いて、驚きを隠せなかった。

そう、事象を拒絶する能力はそもそも、井上織姫の能力だからだ。

事象の拒絶は、対象に起こったあらゆる事象を拒絶し、何事も起こる前の状態に帰す事の出来る能力だ。

藍染曰く、神の領域を侵す能力”。

その能力が今、ウルキオラに宿っていると言うのだ。

さっきの斬り傷も、この能力で起こる前の状態に戻し、治したのだろう。

「続きと行くぞ、黒崎一護」

ウルキオラは能力名を言い終えると、今まで抜かなかった刀を抜いた。

遂に本気で来る。その証拠に、一目瞭然で分かるほどの霊圧を放出している。

一護の表情が苦くなる。

それもそのはずだ。

ウルキオラの能力が事象の拒絶なら、ウルキオラにはあらゆる攻撃は効かないからだ。

どれだけ頑張ろうと、起こる前に戻される。

しかも井上織姫と違い、一々盾を張らずに、瞬時に戻せる。

勝てる確率が低すぎる。

だが、そんな事で諦める一護では無い。

一護は一人じゃない。

今はフランと言う心強い味方が居る。

一護も刀状の霊圧を構える。

「ああ。来いよ、ウルキオラ！」

一護がそう言うのと、ウルキオラは霊子で作った足場を蹴り、一護に向かった。

——今、第二幕が始まった。

*

その頃、禁呪の詠唱チームの魔理沙とアリスは、竹林の中で見つけた日本屋敷の中に侵入していた。

薄暗く、途轍もなく長い廊下を二人は飛行している。

ここに侵入したと同時に、妖怪兎達から弾幕による歓迎をされた。

その歓迎に二人は受け、妖怪兎達を一蹴したのは言うまでもない。

「凄い長い廊下だな、アリス」

「そうね。だんだん異変の解決が面倒になってきたわ」

迷いの竹林の次は、長い廊下。

異変解決に不慣れなアリスにとっては、こういうのは面倒になってくる。

「こんな長い廊下、掃除とか大変だろうな。一回の掃除に丸一日は消費しそうだぜ」

「魔理沙の家よりマシじゃない？ あんたの家は、素人が掃除したら絶対に死人が出るわよ。運が良くて、精神に異常をきたすわね」

「酷いこと言うな、アリス」

「事実には近いでしょ」

「ん……た、多分な」

否定しない魔理沙。

一体魔理沙の家はどうなっているのだろうか？

「もう来たか。意外に早かったね」

「全ての扉は封印しました。もう、姫様を連れ出す事は出来ないわよ」

二人が暢気な会話をしていると、うさぎの耳が付いた、二人の少女が突然現れた。

一人は長い薄紫色の髪に、紅い瞳。頭には前記の通りウサギの耳が生えている。

上の衣服は、白のブラウスに赤いネクタイを締め、紺色のブレザーをその上に着用している。下は薄桃色の、膝下くらいまでのミニスカートを着用している。まるで学校の制服のような衣装だ。

もう一人は癖っ毛の短めな黒髪で、身長は片方の少女より低い。

衣服は桃色で、裾に赤い縫い目のある半袖ワンピースを着用している。首には、にんじんの付いたアクセサリを付けている。

「誰だ、お前らは？」

突然目の前に現れた二人の少女を見て、魔理沙が聞く。

「……って、あれ？ あなた達、地上の人間じゃないの？」

制服を着た方の少女が二人をよく見て言う。

魔理沙の問いは完全に無視だ。

「どういう意味？」

アリスは今の言葉の意味が分からないから聞く。

「別にあんた達には関係の無い事よく。だから、とつとと帰れ」

ワンピースを着た方の少女が、挑発的……と言うか単純に口が悪かった。

その態度にアリスは少しイラツときた。

「うざいわね。あのチビウサギ」

心の中で思ったことを口に出すアリス。

今にも弾幕を張り、暴れ出しそうだ。

「こら、てる。そんなこと汚い口の利き方しちゃ駄目でしょ」

制服の少女が、ワンピースの少女を軽く咎める。

口の悪いワンピースの少女とは対照的に、制服の少女は礼儀と言う言葉を知っているらしい。

そして制服の少女が二人に向き直り、口を開く。

「大変申し訳ございませんが、今日は忙しいので、お帰り願いたいのですが……よろしいでしょうか？」

「いいわよ、ただし一つ聞かせてくれるかしら?」

アリスはゆつくりと怒りを静めて、言葉を発する。

「何でしょうか?」

「この歪な月の異変は、あなた達の仕業?」

それを聞いた制服の少女は一瞬、眉を動かす。

どこか周りの空気が、緊迫になったように思える。

ただしワンピースの少女は口笛を吹きながら、どうでも良さげな顔をしている。

「……そうよ」

緊迫した状況の中、制服の少女は重々しく答えた。ただし、ワンピースの少女の能天気な口笛をBGMにして。

「そう、だったら帰る訳にはいかないわね」

「大人しく元に戻すか、痛い目にあつた後に元に戻すか、どっちかを選べだぜ!」

アリスと魔理沙が臨戦態勢に入りながら言う。

「へッ、面白いね。その案乗った!」

ワンピースの少女が、制服の少女より早く答えた。

答えている時の表情が不敵で、妙に楽しそうだ。

「ちよつと、何でてゐるが勝手に決めてるのよ!」

「別にいいでしょ。ああ言うバカ共は痛い思いをした方が、少しは利口になるよ」

ワンピースの少女の言葉に、アリスは当然の事、魔理沙まで怒りが堪った。

まるで超大バカに、バカにされた感じがしたからだ。

「魔理沙……分かってるわね」

「ああ、分かってるぜ」

二人は小声で言い、完全に臨戦態勢に入った。

「その言葉! 痛い目あつた後って事で受け取っていいんだな!」

魔理沙が声を荒げて言う。

確かにワンピースの少女のセリフを聞く限り、そうだろう。

「そうよ。バカは確認しないと分からないのか?」

ワンピースの少女のこの言葉が、完全に二人の神経にさわった。

「上等だあ！ 受けて立つぜ、このチビチビ兎野郎！」

「バカは見た目でしか悪口を作れないのか。可愛そうだね」

「カツチーンと来たぜ。私は普通の黒魔術師 霧雨魔理沙だ！」

「私は七色の人形遣い アリス・マーガトロイドよ」

怒り心頭の二人だが、名乗ると言う礼儀はきっちり守る。

「私は狂気の月の兎 鈴仙・優曇華院・イナバです」

「私は地上の兎 因幡てゐだよ。バカには憶えられないかなあ？」

一言多い因幡てゐと言う少女。

だが、もう二人は反応しない。

「行くぜアリス」

「ええ、言われなくても」

二人は相手を見ながら言う。

見られている二人も、口を開く。

「月の兎である私の赤い瞳で、狂気に落としてあげるわ」

「真の悪戯と言うものを見せて上げる」

こうして二対二の弾幕勝負が始まった。

《2》

魔理沙とアリスがてゐの言葉に苛立ちを覚えている頃、霊夢と紫はまだ竹林の中を飛行していた。

普通なら二人共、既に魔理沙たちが侵入した日本屋敷に到着しても

よい時間なのだが、ある会話をしているせいで、遅くなっている。

その会話とは――

「あの時の話の続きだけど……」

霊夢が紫の方に顔を向けて、言う。

「あの時って、私のマイホームにお邪魔していた時？」

「マイホーム……？ よく分からないけど、あんたの家に居た時よ」

あの時とは、霊夢が紫の家に居た時の事みたいだ。

となると昼頃になる。

そこでの会話の続きを、この異変中に行っているのだ。それ程までに

大切なことなのだろう。

「で、あの時の話がどうしたの?」

「紫……あんたは私の母上と仲が良い、友達と言う間柄だったのよね。そこで、ある事を一つ、聞き忘れていたのよ」

どうやら霊夢は、紫の家に居る時、自分の母親について聞いていたらしい。

そこで霊夢は真を突く質問をする。

「何で、あんたは私の『母上と父上を助けなかったの?』」

「……………」

その事を言われて、紫のいつもの笑みが消え、少し暗くなった。

だが、それは一瞬で消え、いつもの表情に戻し、答える。

「あなたが、もう少し成長したら教えてあげるわ」

「何それ?」

紫はこれ以上、何も答えない。

答えたくないようにも見える。

「……………」

紫の脳裏にフラッシュバックのように、走馬灯のようにある過去が蘇る。

『ねえ紫、私は今が一番幸せよ』『おいおい霊華。あまり引っ付くなよ。みんなが見てるだろ』『ははは、魂魄妖摩。随分と妻の掌の上じやないか』『真咲、あなたはまだ子供すぎるのよ』『『真の博麗』はあまり存在していないのよ。私は十三代目だけど、まだ七代目になれていないしね』『おいルリミア、ちよつとそのピーマン取ってくれ。いやそれキウウリな。好き嫌いな』『刹蘭、あなたは誰よりも幻想郷を愛しているのよね?』『へカーティアの馬鹿と純狐を俺と同じ部屋に入れてんじやねえよ』『おいロリっ子ババア。少しは歳を考えろ。は?子供が出来るから外の世界いく?』『これが、覗きか……たまらん』『こおの……変態ー!』『うへえく、また大変そうな異変ね。今年で何回目よ』『幽々子たん登場ッ!』『おいバカ、地獄観光はよせ!』『私はみんなが大好きよ』

明るい、本当に愛した幸せな過去が蘇る。

まるで周囲に輝く、数多の星のように綺麗で優しい大切な記憶の欠片たち。

しかし反目するように——漆黒にまみれた思い出したくもない戦慄の記憶も蘇る。

『どうして、ねえどうしてなの!? 何で六代目が……』『ふざけるな!? 自分の夢や願いを押し付けやがって、勝手に浸ってんなよ自己愛野郎ッ!』『違う。違う! 俺が愛した幻想郷は、こんなじゃない! 誰だよ、この世界を穢したやつは!』『この世界は絶対に守る! 渡しはしない!』『掛かってこいよ■■。俺がお前に、死という片道切符をくれてやる』『嫦娥を匿う。アイツ、あえてあつちに乗りがった』『てるてる坊主、てる坊主、あした天気、しておくれ、それでも曇って、泣いたなら、そなたの首を、チョンと切るぞ』『刹蘭やルリミアのように、お前まで狂ったのかよ……』『必ず俺たちで、この大異変を解決してみる』『私たちの知らない博麗と、■■■■。根源の存在は絶対に叩く!』『私たちの愛する幻想郷と、みんなを守るために、行きますよ!』『おぉー!』

嫌な記憶ほど、たくさん蘇る。

暗黒の歴史。忘れない過去……。

しかし同時に、無くしてはならない物語なのだ。殺伐とした、ただ単に不愉快な事実。過去に戻ってやり直したい。だが、恐らく何百回何千回繰り返しても、変わらないであろう過去。

事実上、歴代最大にして最悪の大異変——混神異変。

「……最悪だったわね」

そして最後に後悔の念が押し寄せる。

(紫……私のこと——見捨ててね)

霊夢によく似た女性が微笑み、涙を流しながら言っている。

これは紫と霊夢の母親……霊華との過去の一部だ。

だが、何故見捨てないといけないのか、何故涙を流しているのかは、全く分からない。

(霊華……約束は守るわ。だから、あの時、護れなかったのは謝らせてね)

励んでいるように見える。

さつきまでの挑発的な態度が嘘のようである。

「……どうしたんだ？ アイツ」

そのてゐの姿に、魔理沙が首を傾げる。

魔理沙の目には、さつきと別人に見えているのだ。

「ボサツとしない！ 次来るわよ！」

アリスが呆然としている魔理沙に向かって、声を当てる。

それを聞いた魔理沙はハッと、我に返った。

「幻波『赤眼催眠』！」

魔理沙が我に返ると同時に、鈴仙がスペルを唱える。

鈴仙を中心に、全方位に無数の弾幕がゆつくりと放たれた。その弾

幕は、まるで銃の弾丸のような形をしている。

「これも避け切るわよ、魔理沙」

「おう」

魔理沙とアリスは迫ってくる弾幕に、弾幕で対応しようとせず、全て避け切ろうとする。

「何故、弾幕を使わないのですか？ 使う程度では無いと言う事ですか？」

二人の様子を見て、鈴仙が疑問を呟く。

その声調には、少し怒りが孕んである。

「そうよ」

それにアリスが答えた。

「あなたたち程度に魔力を消費できないからね。この黒幕のために温存してるのよ」

「そうですか。真つ当な理由があれば、少しは手を抜いて上げようと思いましたが、そうする必要は無いようですね」

瞬間、鈴仙の眼が紅く光りだした。

それに呼応するように、一瞬だけ魔理沙とアリスの眼が自然的に見開いた。

「……何だ？ 今一瞬」

魔理沙は自分の眼下辺りを触れる。

どうやら無意識に開いたようだ。

「さあ、私の弾幕が見えますか？」

鈴仙が眼を紅くしながら、二人に告げる。

その言葉を聞いた二人は、今初めてそれに気付いた。

二人に迫ってきていた弾幕が、消えていたのだ。

「なんだよ、こいつは?!」

魔理沙が驚愕の眼差しで、前方を見る。

さっきまで存在していた……鈴仙が放った弾幕が全て消えているのだ。

ゆつくりと放たれていたから、警戒はしていなかったが、弾幕が消えたのであれば、話は別だ。

少し取り乱している魔理沙に比べて、しかしアリスは至って冷静だ。冷静だから、相手の能力を分析できる。

「——まさかこれは。魔理沙！ 弾幕は消えていないわ、気をつけて！」

冷静だから、魔理沙に忠告できた。

「ッ！」

その瞬間だった。

魔理沙とアリスの目の前に、何の前兆もなくさっきの消えていた弾幕が現れたのだ。

そしてアリスの忠告のお陰で、魔理沙は後方に跳び、弾幕から逃れる事が出来た。

「危ねえ！ 何で急に弾幕が現れたんだ!?!」

魔理沙が率直な疑問を口に出す。

「恐らくけど、あいつの能力ね。ほら、あいつの目が紅く光りだしただしよ。あれが能力発動の瞬間だったんじゃない?」

アリスは先程自分で分析した結果を、魔理沙に言う。

詳しい所までは分からないが、ある程度の鈴仙の能力の推測もした。

それを魔理沙に伝える。

「……あいつの能力は多分、相手の視野などに関係する能力だと思う

の」

「視野だど？」

「ええ。あいつの紅い眼が光った瞬間、一瞬だけ自分の眼に妙な違和感を感じたでしょ？」

「あれで私たちは、あいつの能力に侵された」と

「そうよ。まあ恐らく他にも脳に作用する幻術とかも使ってきてそうね。これは少々厄介な相手かもよ」

二人は相手の弾幕の警戒を怠らないように会話をしている。

もしアリスの憶測が正しければ、気を抜いただけで、危険だから。今にも、また目の前に弾幕が現れても何らおかしくない。

その瞬間、読み通り再び二人の目の前に弾幕が出現した。

まだ、あの時の鈴仙のスペル、幻波『赤眼催眠』が継続している証拠だ。

そう、ただ避けきっただけで、消していないからだ。

「たく、魔力は温存しておきたかったんだけど、仕方ないわね」

アリスが瞬時にスペルを唱える。

「魔操『リターンイナニメトネス』」

複数の人形が、アリスと魔理沙眼前に現れ、アリスと魔理沙は直ぐに後ろに跳び退く。

その瞬間、人形が爆破し、鈴仙の弾幕と共に消え散った。

アリスと魔理沙はようやく本気になる。

二人がスペル無しで行こうとしていた理由は、先も言った通り簡単だ。

幽々子と妖夢との弾幕勝負で、結構な魔力を消費したから、あまり魔力を使いたくなかった。

相手が異変を起こした張本人だったら、話は別だが、その下っ端なら使う必要……と言うより、アリスが言ったとおり、温存しておきたかったのだ。

この後に、異変の張本人と戦う為に。

けど相手が予想以上に手強いと思つた二人は、その考えを捨て、本気で戦う事にした。ただし、あまり魔力を使わない方向で。

「行くわよ……廻符『輪廻の西藏人形』」

先にスペルを唱えたアリス。

アリスの周りに複数の人形が現れ、主の周りをグルグルと回る。

「さあ、私の可愛い人形たち……あのバカな兎さんたちを懲らしめなさい！」

そう言った刹那、人形たちから無数の弾幕が発射された。

「私はバカではありません！ 狂視『狂視調律イリユージョンシーカー』！」

鈴仙がバカと言われて少し怒り、強力なスペルを唱えた。

壁のように隙間なく並んだ弾幕が、無数に放たれる。

「その程度の弾幕で私に勝てると思っているの？ 舐めないでちょうだい」

アリスが鈴仙の弾幕を見て言った。

もし弾幕無しで挑んだとしたら、避けるのは不可能に近いが、弾幕有りなら余裕に攻略できる。

弾幕を弾幕で掻き消せばいいのだから。

「……ええ確かに、私の弾幕では、あなたの弾幕には恐らく勝てないでしょう。しかし、私の弾幕——消えますよ」

鈴仙が言い放った瞬間、言葉の通り、鈴仙の弾幕が消えた。

……いや、消えたのではない。

少し透明になったのだ。

アリスの弾幕は、透明になった鈴仙の弾幕に文字通り被弾せず、そのまま鈴仙とてゐの元に殺到する。

「てゐ、来るわよ」

「分かってるよ。見ればわかる。兎符『因幡の素兎』」

鈴仙に言われ、てゐがスペルを唱える。

無数の弾幕と大弾が展開され、迫ってくるアリスの弾幕に向かって放たれる。

そして鈴仙が放った弾幕は、透明状態から一斉に分裂し、弾幕の数を増やす。そして分裂し終えると、透明から実体に戻り、魔理沙とアリスを襲う。

戦いの場所は廊下。

縦幅も横幅も広いが、所詮は廊下。

逃げ道には限界がある。

限界はあるが、敵が使うのは弾幕。

攻略するには弾幕を消し去ればよいだけの話だ。

「行くぜ！ 恋符『マスタースパーク』！」

魔理沙は迫ってくる弾幕に向けてミニ八卦炉を構え、スペルを唱えた。

凄まじい魔力が込められた超極太レーザーが、ミニ八卦炉から発射され、無数の弾幕を全て掻き消していく。

廊下を一直線に、逃げれる幅も無く撃たれているので、その前方にいる鈴仙とてゐるは逃げる事が出来ない。

長く広い廊下の割に、直線の道で、曲がり角が無いからだ。

「なにこれマジ面倒ね」

てゐるはダルそうに新たなスペルを唱える。

「生きることは万象騙し通すことは必須 繰り出される世界が嘘にまみれた世界で形成されているのなら詐欺師となり狡猾に生きよう」

それは、てゐるの真理に至る祝詞。

故にそこから放たれるは、奥義に等しいスペル。

『エンシエントデューパー』！』

符名の付かないスペルを唱えた。

てゐるの両サイドから二本の赤いレーザーが放たれると共に、てゐるを中心とした全方位型の青弾と、てゐるを囲むように円弧を描きながら展開される赤弾が同時に放たれる。

それが魔理沙のマスタースパークを押し負かす。

「あのスペルはキツイぜー」

自分のマスパを負かすだけでは飽き足らず、そのままアリスと魔理沙の元にてゐるのレーザーと無数の弾幕が襲い掛かった。

「二人掛かりで行くわよ」

流石のアリスも符名の付かないスペルは危険に思い、二人で対応する事にした。

決まると直ぐに、二人はスペルを唱える。

「呪詛『蓬莱人形』！」

「魔砲『ファイナルマスタースパーク』！」

アリスと魔理沙はお互いレーザー系のスペルを唱え、てゐのスペルに対抗する。

アリスの案は正しく、てゐのスペルは二人のレーザーにより、相殺された。

だが一難去ってまた一難。

二人がてゐのスペルに対応している間に、鈴仙がスペルを唱えていた。

——散符『真実の月』。

波紋状に弾幕を発射した後、一瞬だけ全ての弾を消失させてから再拡散を繰り返すスペル。消失中も弾幕は動いている為、どこに現れるか分からない。

どこに現れるか分からないから、二人は反応できなかつた。

二人の眼前に、何の予兆も無く鈴仙の弾幕が現れたのだから。

「しまった！」

てゐのスペルを打ち破った後で、二人は一瞬の気の緩みが出来てしまっていた。

そうしたせいで二人は、鈴仙の弾幕を何発も被弾してしまう。

「くっ！ 魔操『リターンイナニメトネス』！」

ダメージを受け態勢を崩すも、直ぐに戻しスペルを唱えるアリス。

複数の人形を全方位に放り投げ、爆破させる。

それにより鈴仙の弾幕を掻き消していく。

「一旦、態勢を整えるわよ」

アリスの言葉に魔理沙は一旦動きを止める。

相手二人も一旦動きを止めた。

弾幕を放った様子は一切無い。

お互い動きを止め、にらみ合う。

間合いも充分に空いており、今のうちに態勢を整える両者。

この緊迫した状況で、てゐが口を開いた。

「さてと——ようやく私の本気モードね」

その発言に、二人は嫌な汗が身体から溢れ出た。

こういうふざけた奴が本気モードとか言い出すと、大体場が破天荒になる。

「第二幕の開始よー」

そして、てゐの真剣な表情から一変し、弾幕勝負をする前の悪巧みを考えている様な表情に変わった。

「へッ、何を考えてるかは知らないけど、本気になる前に倒してやるぜ！」

魔理沙が魔力を込め、スペルを唱えようとするが……

——パチンツッ！

と、てゐが親指を弾いた瞬間、魔理沙の開いた口の中に、何か赤いものが見事に入った。

「！」

そして思わず噛んで、飲み込んでしまった。

「な、何か飲んじまった……！」

「心配なくていいよ。身体に害を及ぼすような物じゃないから」

一応言っておくてゐ。

もし毒だったりしたら一大事だ……と言うより、弾幕勝負では無くなってしまう。

「じゃあ、何なんだよ？ ……ん、喉の奥が……熱い？」

魔理沙が自分の身体の異変に気付いた。

喉の奥、胃が妙に熱く、何かの熱気が食道を通って這い上がってきている様な感覚。

そして魔理沙の顔が一気に赤くなり、それを感じた。

「……か、辛あああああ!!」

口から火を噴かんばかりの勢いで叫び、悶える。

どうやら、口に入れられた何かは、改造された超激辛の物だったらしい。

「水！ 水ううううう!!」と叫びながら走り回っている。

その様子を見ているアリスは、心のどこかでホツとしていた。

(……もし私が先に唱えていたら、ああなっていたのかな?)
何も無いとこで躓いて転んだ魔理沙を、哀れみの眼で見ながら心の中
で思った。

「さあ今から第二幕の悪戯地獄篇の開幕よ!」

てゐるの合図と共に、鈴仙とてゐるが廊下の奥に飛んでいった。

「な! 逃げるつもり?!」

苦しそうにしている魔理沙を横目に、廊下の奥にゆっくりと逃げて
いく二人を見て言う。

「逃げる? バカの考える事は単純ね。そんなバカが私たちに追いつ
く事は、到底不可能よ。この低能ども」

「……………」

てゐるの無駄な挑発に、鈴仙は何も注意しない。

もう面倒なのだろう。

「チツ、行くわよ魔理沙。あいつ等を追うわ!」

アリスの言葉に、魔理沙はゆっくりと立ち上がる。

どうやら口の中の辛さは取れたようだ。

「おう……あの野郎、一発どころか頭を瘤祭りにするくらい殴ってや
るぜ」

声は低いものの、完全に怒り心頭だ。

そして二人は、鈴仙とてゐるを追う為に、飛行した。

ゆっくりと飛行する鈴仙とてゐる。

それを勢いよく追う、魔理沙とアリス。

距離を着々と縮める。

だが、そう簡単にはいかない。

「そのまま真っ直ぐ飛行すると、危ないよ」

てゐるが魔理沙たちの方を振り向き、忠告する。

それを聞いた魔理沙たちは考える間もなく、紐らしき物に魔理沙が
当たり、その紐が切れる。

まるで昔のトラップのようだ。

「何だ、今の?」

紐を無意識に切り落とした魔理沙は、辺りを少し警戒する。

——ガタンツ

天井の方から何か音がした。

魔理沙とアリスが飛行しながら上に顔を向けると、最初に眼に映ったのが天井ではなく、黄色いシャワーだった。

二人がそのシャワーを綺麗に浴び、口の中に黄色い液体が大量に入った。

「!!」

二人は目を見開いた。

口の中からシユワシユワと炭酸のような音を出し、二人は飛行を止め、一気に吐き出す。

「何だこりやあああああ!!?」

「口の中が、痛い……」

魔理沙は大絶叫し、アリスは口を抑えて少し悶えていた。

これは言わば超強力なシユウガや唐辛子を配合した炭酸飲料を、口に入れられたのと同じ。

炭酸を口に入れると、少し口の中にチクチクとした痛みが襲うが、この黄色いシャワーはその何十倍もの威力がある。それを一気に口の中に入れられれば、叫ぶくらい痛いだろう。

「どうだ? 改造したお水の味は。少し刺激が強かったかな」

ゆつくりと飛行しながら、てるは言う。

完全に舐めきった態度だ。

「く、くそお、絶対に許さないぜ!」

「……とつとと追うわよ魔理沙」

二人は再び飛行を始めた。

充分に辺りを警戒しながら。

「あ、そこも危ないよ」

再びてるが忠告する。

「へっ、だったら、恋符『マスター……』」

魔理沙が一気に全ての罌を潰そうとした前方めがけた瞬間、ちょうど魔理沙の上の天井が開き、そこからお笑い番組で見るような銀のタライが落ちてきた。

それが魔理沙の脳天に綺麗にヒットする。

「あいツツて〜〜！」

魔理沙は頭を抑えながら、身悶える。

「だから危ないって言ったのに。バカには危ないと言う単語が通じないのか？」

「この野郎おろ、いい加減に悪戯は止めろ！ 真剣に戦えつての」

「これが私の真剣よ。なに負け惜しみ？ 弾幕ごっこだったら勝てると思ってるの？ この程度の罫に嵌る魔法使いさんが」

てるの台詞にカチンときた魔理沙はミニ八卦炉を構え、マスパを撃とうとするが、再び銀のタライ……そして氷水が降って来て阻止された。

それに魔理沙が直撃すると、脳天の痛みだけでは無く、服はビショビショ、氷水で身体は冷たくなる。

もう嫌になってくる。

「ちぎしやうー！」

再び魔理沙とアリスは二人に向かって飛行した。

*

数分後……

魔理沙とアリスの姿は酷いの一言に尽きた。

二人は完全にびしょ濡れで、服の所々に矢が刺さっていたり、蛇が嘔み付いていたり、焦げ目が付いていたり、黒い墨が付いていたりしている。

しかも魔理沙に至っては、頭の瘤が尋常じゃ無い。

昔のアニメのように、オヤジにボコボコにされた時くらいの瘤がある。

瘤祭りにしてやるとか言っておきながら、自分が瘤祭りになっていたのでは、話にならない。

てか、もう弾幕勝負にもなっていない。

「もう、帰らない？ 魔理沙」

アリスが諦めたように言う。

全くって言っていないほど、鈴仙たちの距離と魔理沙たちの距離が縮

まっっていない。

「……そうだな」

アリスの案に魔理沙は承知する。

流石の魔理沙も、もう嫌気が差したのだろう。

それを聞いた鈴仙は安堵したかのように、息を吐いた。

てゐはしてやった感万歳の顔をしている。

「だったら、最後に……こいつをぶちかますか」

そう言つて魔理沙は一枚のカードを取り出した。

それに鈴仙とてゐは身構える。

「闇夜を引き裂き暗黙を光輝躍起に塗り替えちまえ——さあ派手に楽しめ天より星々がお前らの煌く姿に嫉妬して落ちてくるんだから！

『ブレイジングスター』!!」

銀のタライが降つてこようと、魔理沙は怯まなかった。

怒りが頂点に達し過ぎたせいで、もう何も感じなくなっている。

そして唱えたスペルは、かなりの魔力を消費する、符名の付かないスペル。

もうここで終わりにしようと思つたから、これを唱えたのだ。

天から極太レーザーが彗星のように沢山、地に落ちてくる。

屋敷の天井を貫き、全てを破壊する。

だが、これでは終わらない。

「復刻する恐怖劇からは人々の悲鳴散らばせ悦に酔い痴れる大公——並び座すオペラもまた人に悲劇を沸騰させる狂乱の闇劇、そうして再び恐怖を魅せよ！ 『グランギニョル座の怪人』！」

続けて符名の付かないスペルを唱えたアリス。

アリスを中心に八つの魔方陣が現れ、そこから無数の米粒弾が放射状に放たれる。

アリスも魔理沙と同様、ここで終わりにしようと思つたから、このスペルを唱えた。

もう後先考えてはいない。

二つの符名の付かない最強のスペル。

しかも、これは鈴仙やてゐを狙つたスペルではなく、単純に八つ当

たりに等しい暴力。つまり、この異変の元凶者のいる日本屋敷そのものを、滅茶苦茶に破壊しようとしているのだ。

「ちよっ、止めなさい！」

鈴仙が叫ぶが、当然聞く耳なんて一切持ち合わせていない二人。自分たちの屋敷が潰されて行っているのを、止めなくてはいけない。

仕方なく鈴仙も、最後のスペルを唱えた。

「里わの火影も、森の色も田中の小路を、たどる人も、蛙のなくねも、かねの音も、さながら霞める朧月夜——朧月の魅惑に影響されし者よ、月の狂気に満ちよ」

それはとある童謡を用いた祝詞。

さこから放たれるは狂気まみれる世界。

『幻朧月睨』！

鈴仙も符名の付かないスペルを唱えた。

その瞬間、屋敷の一角が跡形も無く吹っ飛んだのは言うまでもなかったのだった。

第38斬【ウルキオラ・シフアー】

《1》

幻想の結界チームが日本屋敷に侵入して、直ぐに二人は魔理沙たちが弾幕勝負をしていた場所へやってきた。

そこで二人は、凄惨な光景を目の当たりにする。

「紫……これは一体、どういう事？」

霊夢が言う。

その光景は、まるで大型の爆弾が爆破し、辺り一面を木っ端微塵に吹っ飛ばしたような光景だった。

屋敷の長いトンネルのような廊下が、天井に大穴を開け、床や廊下に隣接している部屋が爆発地のように無くなっている。

そこに魔理沙、アリス、鈴仙、てるるが死体のように倒れた姿で発見された。

「どうやら先に侵入した魔理沙とその金髪少女が、あの二人の兎耳 Girl's を倒したようね。倒したと言っても相打ちらしいけど」

隣に立つ紫が、四人の姿を見て、自分の考えを推理して言う。

まんま正解である。

「まあ、それしか考えられないわよね。じゃあ、さつさと先へ急ごうかしら。魔理沙たちの死は、無駄にはしないわ」

死んでいないのに、死んだという設定にされる魔理沙たち。

そして霊夢と紫はそんな魔理沙たちを置いて、先へ進もうとした瞬間、二人の目も前に、二人の女性が現れた。

一人は長い銀髪を三つ編みにして、青いナース帽を被っている。

服装は左右で色の分かれる特殊な配色の服を着ている。青と赤から成るツートンカラーだ。上衣は右が赤で左が青、スカートは上の服の左右逆の配色となっている。袖はフリルの付いた半袖。全体的に色合い以外はやや中華的な装いだ。

もう一人はストレートで、腰より長い程の黒髪をしている。

服は上がピンクで、大き目の白いリボンが胸元にあしらわれており、服の前を留めるのも複数の小さな白いリボンである。袖は長く、

手を隠すほどである。そして下は、赤い生地にも、桜、竹を連想させる模様が金色で描かれているスカートと、その下に白いスカート、更にその下に半透明のスカートを重ねて履いている。スカートは非常に長く、地面に着いてなお横に広がるほどだ。

その二人の女性が、倒れた四人を挟むように対峙する。

「……いつら、強いわよ」

霊夢が一目見て、そう判断した。

久し振りに、霊夢の口から強いという言葉聞いた気がする。

「ええ。さっきの吸血鬼の少女と、メイド女とは訳が違うわね」

紫も相手の二人が強いと認めざるを得ない力量だと判断した。

「残念ながら久方振りに、本気を出さないといけないかもね。肩がこるから嫌なんだけど」

本気を出す。

八雲紫の本気を、今だかつて見た者は極少数だと言われている。

それが、今回の戦いで出ようとしている。

「……月の使者が攻めてきたと思いきや、巫女と妖怪ですか」

銀髪の女性が口を開く。

目の前の光景に全く目を向けず、霊夢と紫だけを見る。

「何か、この屋敷にご用かしら?」

銀髪の女性が続けて言う。

「メチャクチャ有りよ。あの満月を見て分からない?」

霊夢が指差す。

その方向には、スペルのせいで大穴の開いた天井……その先の満月を差している。

だが満月ではなく、少し欠けた出来損ないの満月になっているのと言うまでもないだろう。

銀髪の女性が、霊夢の指差した方を見て、察した。

「成程、そういう事ね。で、あなた達はその異変の元凶が此処にいると思ってきたのかしら?」

「思ってきたのと言うより、あなたが異変の元凶者でしょ?」

「……証拠はあるのかしら?」

「とぼけるつもり？ てか、こういうやり取りはあまり好きじゃないから、力付くで吐かせるわね」

長話をするつもりが全くない霊夢は、早々に決着を付ける事にした。

霊夢と紫は、既にこの二人が異変の元凶者だと踏んでいる。

理由は、怪しい妖気の終着点が此処だからのと、長年異変の解決に携わってきた霊夢の勘がこいつらだと言わせるからだ。

「そうそう、私もこういう白を切るような行為は嫌いなよね。ってか面倒」

今まで何も話さなかった黒髪の女性が割って入った。

そして、その女性の瞳が好戦的になる。

「だから、少し遊びましょう。弾幕ごっこと言うゲームで」

「姫様……」

銀髪の女性が横目で黒髪の女性を見る。

何故、黒髪の女性が姫と言われたのかは分からない。

「話が早くて良いわ。とつとと始めましょう」

いちいち姫と言う単語には突っ込まない。

そのまま霊夢と紫は臨戦態勢に入る。

「仕方ないわね。姫様が言われるまでもなく、こういう展開は読めましたし」

銀髪の女性と黒髪の女性も臨戦態勢に入る。

「楽園の素敵な巫女 博麗霊夢よ」

「境目に潜む妖怪 八雲紫」

霊夢と紫は二つ名と共に名乗る。

「月の頭脳 八意永琳」

「永遠と須臾の罪人 蓬莱山輝夜よ」

二人の女性も二つ名と、名前を名乗る。

「さてと、久し振りの弾幕勝負……楽しむわよう！」

黒髪の女性、蓬莱山輝夜はまるで遊園地に連れて来られた子供のような表情で言った。

「紫……今回は一緒に戦いなさいよ」

先の件もあるから一応指摘しとく霊夢。

「大丈夫よ。流石の私も、この二人を一人で相手させるほど、非情な妖怪ではないわ」

「そう……」

吸血鬼とその従者を一人で相手させるほどの紫が、このセリフを吐くと言う事は、かなり手強い相手だ。

（——ッ!! 何、今の霊力……!?!）

ふと霊夢は、ある霊力を感じ取った。

その霊力は目の前にいる永淋のでも、輝夜のも無い。

（一護……）

感じ取ったのは一護の霊力だった。

霊夢は一護の霊力に変な違和感を感じた。

それに対し、異常な程までの胸騒ぎがする。

（……杞憂に終われば、良いんだけど）

戦い前の霊夢は、自分の心配は全くせず、どこかで戦う一護の安否をしたのだ。

そして……それが杞憂で終わる事は、無かった。

*

迷いの竹林の一角——

そこは最早、竹林と呼ぶべき場所では無くなっていた。

竹林の全てが跡形もなく消えており、大地が砕け荒涼地帯のようになっている。

そこで禁忌の死神チームとウルキオラが激戦を繰り広げている。

斬魄刀を抜いたウルキオラと霊圧で刀状に構築した霊圧刀を持つ一護が刀を交える度に、周辺の大地が砕け散り、突風を起こしている。

超高速の斬撃に、それによって発生する衝撃波は熱すら帯びていた。

その中でフランが一護を援護するように、スペルを唱える。

「禁忌『クランベリートラップ』！」

空間に四つの魔法陣が描き出され、それらがウルキオラと一護を囲むように移動した。

それをチェックした一護は即座にウルキオラから離れ、魔法陣の領

域から離れる。

その瞬間、ウルキオラを四方から囲むようにして移動していた四つの魔法陣から、無数の弾幕が内部にいるウルキオラ目掛けて放たれた。

「これで隙を突いたつもりか？」

カツン……と、一瞬ウルキオラの足元から音が出たかと思うと、その刹那にはウルキオラの姿が消えていた。

瞬間、ウルキオラが刀を振り下ろしながら、フランの目の前に現れる。

「!!」

何の躊躇いも無いウルキオラの斬撃を、フランを何とか身を翻して避ける。

フランは吸血鬼で身体能力が高いから、今の一撃を避ける事が出来ても何ら不思議では無いが、並みの妖怪だったら、斬られた事にも気付かずに地獄の旅路に出ていたであろう。

「QED『495年の波紋』!」

フランはウルキオラの斬撃を避けると、スペルを唱えた。

円形状に広がる弾幕が、各場所から現れ、無数の弾幕がウルキオラを襲う。

フランはこれで倒せるとは全く思っていない。

このスペルを発動した訳は、あくまでウルキオラとの距離を取るためだ。フランは直ぐ様、後方に勢いよく跳ぶ。

「逃げれると思うなよ。虚符『虚閃』」

ウルキオラは迫り来る弾幕を全く気にせず、スペルを唱えた。

指先から超濃密度の霊力の塊である虚閃を放つ。

その標的はフランだ。

「ッ!」

流星のフランも予想外の攻撃に、避け切る事が出来ずにいた。

「黒斬『月牙天衝』!」

一護が直ぐ様、フランの眼前に立ち、迫ってくる虚閃に向かって同じく超濃密度の霊力を内包した月牙天衝を放った。

それにより虚閃を相殺する事に成功する。

「虚符『虚弾』」

続けてスペルを唱えるウルキオラ。
無数の弾幕が一護とフランを襲う。

その弾幕はただの弾幕ではなく、少しでも気を抜けば被弾してしまう程の速さを有している。込められている霊力は少ないものの、速さと連射性は桁違いだ。

「高く跳べフラン！」

一護が叫ぶ。

それと同時に、地上にクレーターを形成するくらいの勢いで二人は上空に跳ぶ。

もし一秒でも遅れていたら、被弾していたであろう。

「甘い」

ウルキオラが一言吐き捨てるように言うと、弾幕の方向を、即座に一護とフランの方に変えた。

「黒符『月霊幻幕』！」

一護は直ぐにスペルを唱える。

三日月状の弾幕を一斉に向かってくる弾幕目掛けて放った。
それにより、ウルキオラの弾幕を相殺していく。

「禁弾『過去を刻む時計』！」

フランがその隙を突き、スペルを唱えた。

十字のレーザーがさながら風車のように回転しながら、ウルキオラに迫る。

それと一緒に無数の弾幕も展開され、放たれた。

「下らん。まとめて消してやる——虚符『王虚の閃光』」

もうこれ以上は時間の無駄だと思ったウルキオラは、強力なスペル——王虚の閃光を放った。

フランのスペルも一護のスペルも全て、いとも容易く掻き消されていく。

「——黒斬『月牙天衝』！」

その光景を見た一護は、自分も強力なスペルを放つ。

その時、一護は「再び妙な違和感」を感じた。

フレデリックに向かって、最後に月牙天衝を放った時と同じ感覚だ。

だが、いちいちそんな事を気にしていられない一護は、気にするのを止める。

月牙と王虚の閃光が激突する。

瞬間、月牙が王虚の閃光に飲み込まれ、凄まじい爆発を起こした。

その光景を見たウルキオラは少し目を見開き、口を開く。

「……王虚の閃光を相殺するか」

表情を変えずに、ウルキオラは少し感心するように言った。

「成程、どうやら俺のスペルが貴様に通用する事は無さそうだ。いや、あつたとしても少し時間がかかるといったところか」

ウルキオラは自分の王虚の閃光を相殺されて、そう判断した。

だが、ウルキオラのスペルはこれだけでは終わらない。

「俺の主が座す屋敷に、どうやら誰かが次々に侵入している。つまり、ここで時間を費やすにはいけないということだ」

ウルキオラは刀を前に突き出す。

一護とフランは何もせず、ウルキオラを見据えた。

「見せてろう。これが俺の……真の力だ」

そう言い符名の無いスペルを唱える。

「鎖せ……『黒翼大魔』」

《2》

「鎖せ……『黒翼大魔』」

ウルキオラが符名の付かないスペルを唱えた。

黒翼大魔……ウルキオラの刀剣解放だ。

だが、刀剣解放は幻想入りすると同時に不可能になっている。

「……………ッ！」

それなのに一護はあの時と同じプレッシャーを感じた。

瞬間、ウルキオラが確認できなくなる程の、黒い翠色の混じった液体が噴水のように舞い上がった。舞い上がった翠黒い液体が、雨のよ

うに一護とフランに降り注ぐ。

「嘘……だろ……!?!」

あの時と同じ、帰刃の際に起こる現象。

一護は目を疑った。

噴水が止んだと思うと、そこには解放したウルキオラが立っていたのだ。

背中に巨大な漆黒の翼。仮面の名残が四本の角のついた兜のようになり、服も下部がスカート状のものに変わっている。仮面紋もより大きくなっている。

これは紛れもない帰刃だ。

悪魔にも、吸血鬼にも見える、恐怖と絶望を一つにしたような畏怖の姿。

正真正銘、刀剣解放したウルキオラだ。

「……何をそんなに驚いている」

解放したウルキオラが、一護の姿を見て言う。

「俺が解放した事が、そんなに解せないか?」

「ああ、信じらんねえな。何で解放出来んだよ? グリムジョーは解放できなかつた。それなのに、テメエは……」

「単純なことだ。俺はスペルという力で、一時的に帰刃を可能にした」

「スペルだ?!」

一護は声を出して驚く。

スペルによりウルキオラは帰刃を一時的とは言え、成し得た。

恐らくグリムジョーですら、まだ気付いていないだろう。

「……黒崎一護。構えろ」

ウルキオラの発言に直ぐさま構える一護。

ここでの問答など無意味。まずは戦いに専念するのが絶対だ。

「光槍『フルゴール』」

ウルキオラはスペルを唱える。

右手から翠色に輝く一本の槍のような物が形成された。

「構えを崩すな。意識を張り巡らせる。一瞬も気を緩めるな」

その発言をした瞬間、一護の眼前にウルキオラが刹那的速度で現

れ、一護に攻撃を仕掛ける。

光の槍で一護を薙いだ。

だが一護はあの時のことが記憶に焼きついていたので——ウルキオラの攻撃を防ぐ事が出来た。

ウルキオラのは速度は、まるでコマ落ちした映画のような感覚。一瞬のまばたきも許されず、まるで一護の目の前に空間移動して現れたような感じだった。

フランですら全くウルキオラのを速度を目視できなかつた。

それなのに一護はウルキオラの攻撃を反射的に月牙を出し、防ぐ事が出来た。

理由は前述通り、あの時の事を覚えていたからだ。

虚夜宮の天蓋の上で、ウルキオラが解放した時、一護はあのセリフを聞いて、解放したウルキオラの初撃を防ぐ事が出来た。

今回も同じで、ウルキオラはあのセリフを言い、一護に攻撃を仕掛けた。だから一護は反射的に身体が動き、ウルキオラの攻撃を防ぐ事が出来たのだ。

「やはり、反応速度だけは大了なものだな」

ウルキオラは一護に攻撃を仕掛け終わると、間合いをおき言う。

「だが、この程度で思い上がるなよ。次は、これ以上のレベルで行く」このセリフに一護とフランは構えなおす。

瞬間、ウルキオラの姿が消えた。

——今、第三幕が開いたのだった。

*

同時刻、幻想の結界チームは、今回の異変の元凶者である八意永琳と蓬萊山輝夜との弾幕勝負を繰り広げていた。

屋敷内での戦いは不可能と見たのか、屋敷の上空で戦闘を繰り広げている。

障害物が何も無い、空での弾幕勝負。

星の輝きに負けないくらいの弾幕が空に飛び交っており、相殺し合った弾幕は花火のように輝いている。

「霊符『夢想妙珠』！」

無数の弾幕が飛び交う状況の中、霊夢がスペルを唱えた。複数の光弾が展開され、一斉に永淋と輝夜に殺到する。

「甘いわね。神符『天人の系譜』」

自分に向かつてくる光弾を見て、何の危機感も持たない永淋は冷静にスペルを唱えた。

複数の赤いレーザーが放たれ、それが四又に数を増し、複数のレーザーが連鎖的に数を増していったのだ。

更に永淋から米粒状の弾幕が扇のように広がる形で、無数に放たれた。

そのスペルは横にいる輝夜を守るには十分な弾幕とレーザーの数だ。

永淋の予測通り、霊夢の光弾は全て弾幕とレーザーに押し負け、掻き消された。

そして必然的に、永淋のレーザーと弾幕は霊夢と紫を襲う。

「境符『四重結界』」

自分たちに向かつてくる弾幕とレーザーを見て、紫がスペルを唱えた。

紫と霊夢を囲むように四角い結界が張られ、迫ってくる弾幕とレーザーから守る。

「なかなかいい結界ね。けど、これは防げるかしら?」

永淋の弾幕とレーザーが止むと、輝夜がスペルを唱える。

「神宝『ブリリアントドラゴンバレッタ』」

五色の弾幕と三色のレーザーが大量に、放たれた。

それにより紫の結界はいとも簡単に破られる。

永淋の弾幕とレーザーを防いでいたせいで、結界が衰えていたのだろう。だが、それを差し引いても輝夜のスペルは、半端なレベルではない程レベルが高い。

「やるわね本当に。結界『光と闇の綱目』」

自分の結界が砕かれても、冷静に対処する紫。

赤いレーザーと青いレーザーが発射され、続いて無数の弾幕が発射された。

それらが輝夜のスペルを相殺する。

「うんうん。やっぱり弾幕ごっこはこうじゃなきや。この程度のスペルでやられたら興醒めだからね」

輝夜が今までは腕試しだったかのような発言をする。

確かにまだ、これといって高性能なスペルは発動されていない。

「それじゃあ、ちよつとレベルの高いスペルで行くわね」

そう言い、輝夜は気楽な感じで上級レベルのスペルを唱えた。

「神宝『蓬萊の玉の枝　―夢色の郷―』」

瞬間、あらゆる角度に七色の無数の弾幕が展開され、あらゆる角度から無数の弾幕が発射された。

「なら、こつちもそれ相応のスペルで挑んであげるわ。紫奥義『弾幕結界』」

紫は相手のスペルにレベルを合わせて、スペルを唱えた。

二つの魔法陣が現れ、そこから無数の弾幕を発射しながら移動する。

「それぞれ」

紫が任意に魔方陣を移動させ、楽しそうに向かってくる弾幕を相殺していく。

「やるじゃない。気に入ったわ」

満足そうな表情で言う輝夜。

「永淋、私はあの女性と一対一で戦いたいわ」

「危険です。あの妖怪は、私の弾幕も、姫様の弾幕も防ぎました。相手の力量がまだ未知数ゆえ、一人で戦わせる訳にはいきません」

「姫の命令よ。従いなさい」

「主君の過失を諫言するのは、従者の役目ですけど」

「ム……面倒臭いわねえ。もういいわよ！」

と、膨れる姫。

今が弾幕ごっこ中だと言う事を忘れてしまう。

「……ハア、仕方ありませんね。分かりましたよ。姫様も久し振りに身体を動かしてくれましたし、今回だけは、目をつむります」

永淋は輝夜の膨れた顔を見て、渋々従う事にした。

「やったー！ー！ 聞いていたわね、八雲紫！」

輝夜は願いが叶い、歓喜すると、紫を指差して言った。

「聞いてたわよ。確かに私もタッグ戦より、一対一派の妖怪だしね」
紫は輝夜の案に乗る事にした。

そっちの方が自分も戦いやすいし、楽しいからだ。

「それでは、必然的に私とあなたになりますね」

永淋が霊夢を見据えて言った。

「そうなるわね。私もタッグよりシングル派だから、願ったり叶ったりだわ」

どうやら霊夢も紫と同じ考えだったようだ。

「さて、とつとと始めようかしら。異変解決までのカウントダウン開始よ」

勝ち誇った顔で言う霊夢。

だが、数十分後に異変どころでは無くなるのであった。

*

一方、ウルキオラと戦っている一護とフランは……

——ウルキオラに苦戦し、一方的に攻められていた。

「槍撃『ルス・デ・ラ・ルナ』」

そんな中、ウルキオラが追い討ちを掛けるように、スペルを唱える。

翠色をした無数の鏃状の弾幕が展開され、一護とフランを襲った。

「くそっ！ 黒符『月霊幻幕』！」

「禁弾『カタディオプトリック』！」

間髪いれずスペルを唱える一護とフラン。

一護は無数の三日月状の弾幕を発射し、フランは無数の大弾、中弾、小弾を発射する。

それらで何とかウルキオラのスペルを破る事が出来た。

だが、ウルキオラはそれだけでは終わらない。

「こつちだ——黒崎一護」

ウルキオラの声にするや否や、一護の顔面をウルキオラは驚掴み、野球ボールを投げるような感覚で、一護を放り投げた。

それだけで数百メートル吹っ飛び、その勢いをどうにか霊圧刀を地

面にブツ刺して止める。

「いっちー!!」

フランが吹っ飛ばされた一護の方を見て叫ぶ。

その瞬間、ウルキオラがフランの目の前に現れた。

同時に、翠の槍をフランに穿つ。

(早い……!)

フランは直ぐに炎の剣……レーヴァテインを出し、フルゴールの攻撃を間一髪のところまで弾く。

「成程、吸血鬼と言うのは聞いていた以上に、やるようだな」

自分の攻撃が弾かれた事に多少驚くウルキオラ。

相手が吸血鬼ともあり、少し早く、強めに攻撃したのだが、それを弾かれたのだ。

「禁忌『フォービドゥンフルーツ』!」

フランは今すぐウルキオラとの距離を遠ざけるためにスペルを唱えた。

戦い始める前に、本能的にウルキオラの事を危険と感じていたフランは、距離をおきたいのだろう。

無数の弾幕が、ウルキオラとフランを取り囲むように展開される。これではフランも巻き添えを喰らうが、勿論そんなへまはしない。

フランは即座に弾幕の領域から離れる。

「また距離を遠ざけるか。無駄な事だ」

ウルキオラはフランを追いかけようともせず、迫りくる弾幕にも全く警戒していない。

まるで一々そんな事をしなくても、今この場で迅速に、フランも弾幕も対処できてしまえるみたいに。

「虚符『黒——』」

ウルキオラがスペルを唱えようとした瞬間、ウルキオラの周りに三日月状の弾幕が現れた。

虚空より現れた弾幕が、一斉にウルキオラに襲い掛かる。

続いてフランの弾幕もウルキオラに被弾し、ウルキオラを包み込むほどの爆発が起きた。

突然、虚空より現れた弾幕の正体は、一護のスペル黒符『天幻月牙』だ。

「大丈夫かフラン？」

一護は吹っ飛ばされた後、即座に元の場所に戻ると、ウルキオラが何らかのスペルを、フランに向けて放とうとしていたので、自分が先にスペルを唱え、ウルキオラのスペルが発動する前に防いだのだ。

「大丈夫だよ。いっちょーは？」

「ああ、心配いらねえ」

見るからに大丈夫とは言いがたい二人。

二人共お互い心配をかけないようにしているのだ。

「そうか」

声が出た刹那、弾幕により出来た黒煙が、一気に掻き消された。まるで強風により、まとめて消されたような軽い感じで。

そして掻き消された黒煙から、全く無傷のウルキオラが現れた。

「まだ、余裕があるようだな」

一歩前を歩き……

「だったら見せておいてやる。こいつが黒翼大魔状態で発動できる限定スペル……」

指先を一護とフランの方向に向け――

「――虚符『黒虚閃』」

スペルを唱えると同時に、黒い虚閃が放たれた。

範囲も威力も、普通の虚閃とは圧倒的に段違いに高い。

「――!!」

一護とフランの視界全体に、黒い閃光が迫る。

「フラン!!」

一護は咄嗟の判断で、フランを横の方に撥ね飛ばした。

この黒い虚閃の恐怖を、一護は知っている。

だからフランをその恐怖に巻き込みたくはなかった。

そして、恐怖の黒い虚閃は一護を覆い包んだ。

更にそれだけでは止まらず、数km先までの大地と竹林を消し去る。

「いっちー!!」

一護に撥ね飛ばされ、黒虚閃に巻き込まれずに済んだフランは、一護の名を叫ぶ。

自分を助けるために、一護は敵の攻撃を真正面に受けてしまった。あれだけの威力だ。

例え弾幕ごっこでも、ただでは済まない。

それに弾幕ごっこは当たり所が悪ければ、死ぬ事だってある。

もしかしたら一護は――

(そんな訳、無いよね)

ある事を考えかけた瞬間、フランは首を横に振り、考えそうになった事を否定する。

今まで一護はフランの“ありとあらゆるものを破壊する程度の能力”を喰らっても死ななかつた。

この程度で死ぬわけが無い。そうやって、どうにか否定できる論を並べては見た。

だがフランは、一護の姿を見て、今までの考えが全て一蹴された。全身が黒焦げに近い姿の一護が、ピクリとも動かずに倒れているのだ。死神の姿も解けている。そして、霊力そのものまでも、流水のように下がっていく。

「……いっちー」

弱々しく一護の名を言うフラン。

だが何の反応も示さない。

「お前らの道はここで終わりだ」

ウルキオラが一護を一瞥し、フランに向けて言う。

だけど、フランの耳にウルキオラの言葉などは入ってこなかった。放心状態に陥ったフランが、一護に歩み寄る。

そして、一護の元に立つと、膝を曲げて座り、一護の背中をさする。
「……」

そんなフランを興味なさげに瞥見し、背中を向け立ち去る。

だが、その瞬間――

ウルキオラの右腕が爆発し、右腕の根元からもぎ取られたかのように

に吹っ飛んだ。

「——ッ!？」

その事実には驚くウルキオラ。
何で自分の腕が吹っ飛んだか分からない。急に、不意を打つように簡単に吹き飛んだ自分の右腕を見て、流石のウルキオラも驚きが隠せなかった。

「逃ガサナイヨ」

瞬間、背後から狂った人形のような声が聞こえた。
ウルキオラは直ぐに後ろを振り返る。

そこにフランが立っていた。

フラン……と言うべきか。

さつきまでとは全くの別人に近い。

纏っているオーラが狂気に満ちており、紅い目が更に紅く血のようになっている。

……そう、フランが狂気の姿になったのだ。

恐らく一護が倒されたせいで、今まで抑えていた狂気が一気に溢れ出したのだろう。

「……何をした?」

自分の右腕を破壊したのは、間違いなく目の前の少女だろう。

「破壊シタノヨ。ドツカーンテネ」

楽しそうに会話するフラン。

まるで無邪気な子供のようなだ。

それと同時に、子供のような残酷さも感じられる。

「破壊しただと? 俺の鋼皮を貫通して……」
解せない。

鋼皮は強固な霊圧硬度による外皮だ。

それが、まるで何の意味も持たないかのように、破壊されたのだ。

「次ハ、キミノ左足ヲ破壊シテ上ゲルネ」

フランはそう言い、手の平の上に赤い目玉のような物を出現させた。
た。

そして、それを握り潰した瞬間、ウルキオラの右足の根元が爆発し、

右足が胴体からもぎ取れた。

「ッ!? バカな……!」

軽々と、防御など何の意味も持たないかのように破壊された右足。どうか倒れずに、左足だけの力だけで体制を維持する。

「知ツテル? 全テノ物質ニハ目トイウ最モ緊張シテイル部分ガアツテ、ソコニカヲ加エレバ簡単ニ物質ヲ破壊デキルツテコト。アハハ、楽シイヨネ。自分ノ身体ガコンナニ簡単ニ消シトブンダモン!」

「…成程、そういう事か」

今のを聞いて、ウルキオラはフランの能力を一瞬で分析した。

「お前の能力は、その目を自分の手の上に出現させ、破壊しているのか」

「ソウダヨオ〜大正解! 正解者ニハ、モレナク脳ヲ一瞬デ破壊シテ上ゲチャウ♪」

脳の破壊。

それは完全な死を意味している。

フランは再び、自分の手の平に、赤い目を出現させた。

これを潰せば、ウルキオラの脳は潰され、即死する。もしかしたら能力を使う暇すらなく、死んでしまうだろう。

そしてフランが目を潰そうとした瞬間……

「遅い」

ウルキオラがフランの腕を掴み、目の破壊を一瞬戸惑わせる。

その一瞬の間にウルキオラが、空いている片方の手にフルゴールを形成し、フランを横一閃に斬った。

事象の拒絶で腕と足を即座に元に戻しておいたのだ。

「ガハッ!」

フランは横一閃に斬られた事により、後方に吹き飛ぶ。

「例えお前に、あらゆる物を破壊する能力が有ろうとも、その目を破壊される前に、お前を倒せばいいだけの事だ」

簡単に言うが、フランの能力をそうやって攻略する者など、ほんの一握りだろう。

「お前等はここで終わりだ」

わっている。

凄まじいほど残酷で邪悪な笑みを浮かべている。

これを一護とは言いたくないくらいに、狂気に満ちた一護になってしまった。

「……何だ、その仮面は？」

ウルキオラが虚化していつている一護の姿を見て言う。

完全虚化した一護は知っているが、この状態の一護は知らない。

(……この霊圧は、虚?)

一護の霊圧を確認するウルキオラ。

さつきまでの死神の霊圧と違い、虚の霊圧に近づいている。

「ウウウウ」

人間でも、獣でも無いような唸り声。

強いて言うなら、虚に近い声音だ。

それが何重にもブレて聞こえる。

「……アアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

急に大地を揺るがすほどの声を上げ、ウルキオラに襲い掛かる一護。

「どうやら、言葉が通じんらしいな」

会話が不可能だと思ったウルキオラは、右手にフルゴールを形成し、一護より先にフルゴールで斬りかかる。

だが先に斬りかかったにも関わらず、一護の目にも止まらない霊圧刀の振りで、ウルキオラのフルゴールが弾かれた。

「グッ！」

フルゴールが弾かれた瞬間、一護の頭突きを喰らい、後方に飛ばされるウルキオラ。

「アアア!!」

一護は休む事無く、ウルキオラに向かい、斬りかかる。

態勢を整えたウルキオラは、指先を一護に向け、スペルを唱えた。

「虚符『黒虚閃』」

指先から先程の黒い虚閃が放たれた。

黒い虚閃が地面を削り飛ばしながら迫る。

それを見た一護は、地面を強く蹴り、その場から姿を消した。

「!!」

姿を消した一護を確認したウルキオラは、直ぐに一護を目で追った。

(後ろか……!)

そしてウルキオラは、フルゴールを自分の後ろに振り下ろした。

瞬間、一護がそこに現れ、自分に振り下ろされてくる光の槍を、霊圧刀で防いだ。

(まだ、目で追えるレベルか)

ウルキオラはそう考えると、姿を消し、一護の肩を深く斬り抜けた。それにより一護の肩から鮮血が噴出し、仰向きに倒れる。

痛みに悶えているのか、一護は苦しそうに身体を動かしている。

「終わりか?」

ウルキオラは小さく言った。

しかし、その時、一護から噴出していた紅い血が、白い液体に変わった。

「!?!」

それを見たウルキオラは目を見開く。

一護から出ている白い何かから、巨大な口の付いた蛇のような生物が現れたのだ。

巨大な口に比例するように、その蛇の大きさも尋常ではない。人間なら十人くらい一気に軽く飲み込めそうだ。

「何だ……こいつは?」

巨大な蛇が、ウルキオラを呑み込もうと、襲い掛かる。

そして、ウルキオラを呑み込もうとした瞬間……

「――槍撃『ルス・デ・ラ・ルナ』」

ウルキオラはスペルを唱える。

翠色をした、無数の鏃状の弾幕が一齐に、巨大な蛇に放たれる。

それら全てが巨大な蛇を貫き、跡形もなく消し去った。

「……」

前方を見据えるウルキオラ。

今の巨大な蛇のせいで、砂煙が舞っていて一護の姿が見えない。

「……!？」

ウルキオラは砂煙から現れた一護を見て、驚愕した。

胸の中心に穴が空いており、胴体と左腕が虚のように白くなっている。しかも左肩には複数の突起があり、腕には紅い模様が出来ている。

「アアアアアア!!」

一護が虚のような叫び声を上げた。

その瞬間、黒い霊圧が一護の周囲を囲い、そこから一気に霊圧が溢れ出た。

溢れ出た黒い霊圧で、再び一護の姿が確認できなくなった。

「何だ……?」

理解できないウルキオラ。

さっきまでの一護の霊圧が、一気に虚の霊圧に近づいているように見える。死神と虚の力を合わせ持った人間など、全くもって考えられない。

その瞬間、溢れ出す黒い霊圧から、眩い光りが放出し、辺りの空間を全て包み込んだ。

「ッ!」

直ぐに放出された光りが弱くなっていき、光の中心地点から異形と化した一護が現れた。

一護の全身は白い虚のような姿になっており、仮面が顔の四分の三を覆い尽くしている。

髪の毛も腰まで伸び、長い尻尾まで生えている。

この姿は、仮面の軍勢との虚の抑制修行の時に、一護が暴走状態になった時の姿だろう。見た目はもう、完全に虚である。

「馬鹿な……何だ、その姿は? 虚の真似事か? それで虚の力を得たつもりか?」

ウルキオラが異形と化した一護の姿を見据えて問う。

だが一護からは虚のような唸り声が口から出るだけで、答えは返ってこない。

「愚劣だ、黒崎一護。前にも言ったが、貴様が例え虚のような姿に成ろうとも、貴様と虚が並ぶ事など永劫ありはしない」

そう言うのと、ウルキオラは一枚のスペルを唱える。

「光槍『雷霆の槍』」

右手に翠色に輝く、光の槍が形成された。

フルゴールにも似ているが、槍が少し炎のように靡いている。

そして一瞬ウルキオラがビデオのブレのようにブレたかと思うと、一護から離れた位置に立っていた。距離にして約100m。

「喰らえ」

ウルキオラは持っていた雷霆の槍を、勢いよく一護に向けて投げつけた。

その刹那に、一護は手の平を飛んでくる槍に向ける。

瞬間、深紅の塊が手の平に溜まり、そこから一気にアレが放たれる。

——虚閃だ。

虚閃と雷霆の槍が衝突したのだった。

*

同時刻、竹林の上空で弾幕勝負をしている四人——霊夢、紫、永淋、輝夜は、凄まじい轟音と、異様な霊圧を感じ取った。

「！……この霊圧は、一護？」

異様な霊圧を一番先に感じ取ったのは霊夢だった。

「永淋！ 今、ウルキオラは誰と戦っているの!？」

輝夜は永淋に向けて言う。

凄まじい轟音で、一旦弾幕勝負は中止になっている。

「恐らく私たちを狙いに来た者達だと思えますが……おかしいですね。ウルキオラの霊圧が弱まってきている」

「!! あのウルキオラが負けてるの!？ 相手は一体何者よ？」

驚く輝夜。

「どうやらウルキオラの力は、かなり良い評価をされているみたいだ。」

「感じた事のない霊圧です。恐らく、ここに博麗の巫女がいるって事は、あの新聞に載っていた黒崎一護って言う少年だと思おうのですけど」

……」

あの新聞……。

知っての通り文々。新聞の事だ。

「黒崎一護で当たっているわよ」

永淋の予想を答えた紫。

「けど、おかしいわね。この霊圧……本当に一護君のものなのかしら？ 随分と霊圧が異質になっているようだけど……？」

流石の紫も、今回の一護の異質な霊圧には理解できなかったようだ。

「何なのかしら……？ この霊圧、霊夢は何か知ってる？」

幻想郷で一護と一番一緒にいる霊夢なら何か知っていると聞いた紫は、一護から感じる霊圧について聞いてみる。

「……ええ、知っているわ」

「へえー、流石」

まさか知っているとは思わなかった紫も、他の二人も驚く。

「もし、あの時の一護がまた同じ力を使っているとしたら……そのウルキオラって奴、死ぬかもしれないわよ」

霊夢の発言に永淋と輝夜は目を見開いたのだった。

*

「……この力は」

そこは時間の概念や空間の概念さえも存在しない、別次元の別宇宙のような隔離された無の場所。そこには何も存在することは不可能であり、誰であろうと干渉できない牢獄。

そこに彼がいた。

「成程、黒崎一護か。これは随分とまた、面白い展開になってきているな」

彼——刹蘭は座す。

そして見る。

「目的に達するための鍵は、絶対に離さないさ。過去の『失敗と、真の自由、そしてあの頃に戻るため』」

混沌とする己に対して、一瞬だけ悲しみが孕んだかのように言っ

た。

「——俺にとっての最愛の時。永劫続いて欲しかった時間。ああ、絶対に『アレ』は潰す」

同時に赫怒の念を募らし、何かに復讐を誓っている。その念だけで、この無限に広がる無の宇宙が、無を超えた滅びに昇華するように。「さあ、見に行くか」

——そして刹蘭が動く。

もちろん、場所は幻想郷だ。

*

「馬鹿な……二度もこの俺が、虚と化した人間に苦戦するとは」
先程までのウルキオラとは思えないほど、ボロボロの姿になっている。

息遣いも荒く、所々から血が出ている。普段ならウルキオラの持つ能力『超速再生』により、脳と臓器以外の全てを超速再生出来るのだが、その能力は幻想入りすると同時に無くなっていった。

だが、それをカバーするように『事象を拒絶する程度の能力』と言う能力を覚醒させたのだ。この能力を使えば、身体の負傷なんぞ一瞬で元に戻せる……はずだった。

だが、この能力が一護の前で全く発動しないのだ。

まるで、あの時と同じように。

「……………」

異形と化した一護は今にも倒れそうなウルキオラを見て、再び手の平をウルキオラに向ける。

軋る音を立て、深紅の塊が溜まる。

そして一気に深紅の虚閃を放った。

「虚符『黒虚閃』」

深紅の虚閃に対して、漆黒の虚閃を放つウルキオラ。

二つの虚閃が激突すると、凄まじい轟音と真紅の爆発を起こす。大地が吹き飛び、突風と共に黒煙が舞った。辺り一面を衝撃による熱気が覆う。

「……………」

黒煙のせいで辺りが見えないウルキオラは、周囲に神経をとがらせる。

その瞬間、前方の濃い黒煙から一護が現れた。

「光槍『フルゴール』」

ウルキオラは右手に光の槍——フルゴールで一護に対応する。

斬りかかってくる一護に対し、ウルキオラはフルゴールで一護の霊圧刀を弾いた。そして、その隙を狙って一護を穿とうとするも軽々と躲かれ、同時に再びに一護の斬撃が舞う。

激突するたびに、大気が大きくたわんだ。空振りするだけで大地が裂けた。二人が衝突するたびに、世界が悲鳴を上げる。

「槍撃『ルス・デ・ラ・ルナ』」

そして一護の攻撃を弾いた一瞬の隙にスペルを唱え、ウルキオラの周りに翠色をした無数の鍔状の弾幕を展開し、一斉に一護に放つ。

それら全て被弾した一護は全く怯まず、ウルキオラに追撃する。

「!!」

全く効かなかった事に驚愕したウルキオラは、一護との距離を取るために、後方に勢い良く跳ぶ。

「光槍『雷霆の槍』」

距離を広げたウルキオラは、即座にスペルを唱えた。

右手に雷霆の槍を出現させる。

「ガアアアアアア!!」

一護は奇声を上げながら駆ける。

ウルキオラの広げた距離が一気に縮められた。

(……普通に雷霆の槍を放つだけでは駄目か)

ウルキオラは向かって来る一護に、雷霆の槍を投げようとはしない。

投げたところで、防がれるか、避けられるか、虚閃で相殺されるからだ。普通に投げてても効かないのは目に見えている。

(だったら……)

ウルキオラは全神経を一護に集中する。

そして一護の斬程内に入った瞬間、一護はウルキオラを斬りつけ

る。

だが、それをウルキオラは紙一重で躲した。並の妖怪なら避けることは到底不可能なほどの斬撃だろう。だが、ウルキオラはそれを見極め避けたのだ。

(……だ！)

そしてウルキオラは、雷霆の槍を一護の顔面目掛けて穿った。

一瞬の隙を突いた雷霆の槍の攻撃だ。

瞬間——ウルキオラの帰刃状態が解けてしまった。

「!!」

急に帰刃状態が解けてしまったせいで、雷霆の槍が消えてしまう。

雷霆の槍は帰刃状態の限定スペル。通常の状態では発動する事が不可能なスペルなのだ。

「何?」

一世一代のミスを犯してしまったウルキオラ。

帰刃状態になれると言っても、それは一時的にであって、永久ではない。時間制限と言う制限がある。

ウルキオラはその時間制限が来てしまい解けてしまったのだ。

一護は振り下ろした霊圧刀とは違う腕で——普通の左腕でウルキオラの顔面を殴った。

それによりウリキオラは勢い良く吹き飛んだ。

「く……ッー」

ウルキオラは直ぐに態勢を立て直す。

最初に視界に移ったのは、自分に向かって休むことなく駆けてくる一護だった。

帰刃状態では無いウリキオラにとって絶望的な状況。再び帰刃状態に成れば良いのだが、そんなに世界は甘くない。二度目の発動は不可能。なぜなら帰刃のスペルは一度唱えれば、一日は発動不可能になってしまう。

どんなものにもメリットとデメリットは生じてしまうということだ。

「虚符『虚閃』！」

駆けて来る一護に向かって虚閃を放つウルキオラ。

だが当然無駄な事は百も承知。

一護は空中に高く跳び、虚閃を避ける。

「！」

一護は空中に跳びあがり、そのままウルキオラに空中から斬りかかる。

「しまっ——」

想定外の攻撃にウルキオラは為す術なく、立ちすくむ。

普段のウルキオラなら想定内の攻撃だったが、急な展開に思考が追付かなかったのだろう。

一護の斬撃が、ウルキオラを空中から襲う。

「まさか俺が、同じ人間に二度も敗れるとはな」

心の中で一人呟くように言ったウルキオラ。

敗北を確信したようだ。

「——何やってんのよ！ あんた!?!」

その刹那、ウルキオラに斬りかかっていた一護が、誰かに蹴り飛ばされた。

一護は無様に倒れる。

「つたく、危機一髪じゃない。良かったわね、あんた。紫に感謝しなさいよ」

ウルキオラの前に一人の少女が立った。

「ちよつと、何とか言いなさいよ」

黙りこくったウルキオラの方を向く少女。

その少女の正体は……博麗霊夢だ。

「アアアアア」

一護は蹴られたにも関わらず、何も無かったかのように立ち上がる。

「アアアアアアア!!」

一護が虚のような奇声を上げ、霊夢の方に駆け出す。

と……その時、霊夢の前に一人の女性が現れた。

「神宝『サラマンダーシールド』！」

現れると同時に、女性はスペルを唱えた。

女性から無数の火炎弾と赤いレーザーが放たれる。

一護はその火炎弾とレーザーを受け、動きを止めた。

「ウルキオラ、姫が自ら助けに仕ったわよ」

動きを止めた一護を確認した女性が、ウルキオラの方を振り向いて言う。

その女性は蓬萊山輝夜だ。

そして輝夜と霊夢に続いて、紫と永淋が現れた。

どうやら紫のスキマにより、ここまで来たようだ。

「なぜ、貴様らが……？」

ウルキオラは四人を見て言う。

この場に急に現れた事に驚いたようだ。

「あなたを助けに来たのよ。後、ついでにアレを止めね」

永淋がウルキオラの問いに答える。

「一護……とつとと正気に戻してあげるわ」

霊夢は言い、異変最後の戦いが幕を上げる。

第39斬【異変の終結】

《1》

「一護……今すぐ正氣に戻してあげるから、覚悟しなさい」

暴走している一護に対して、強気で言う霊夢。

だが霊夢を前にしても、一護は何も答えず、虚のような唸り声を上げているのみ。意識はもちろん、理性すら何もない、ただ目の前の獲物を殲滅するだけの化物と化しているのだ。

「紫、行くわよ。幻想の結界チームとしての、最後の戦いよ」

「ええ、そうね。チームとしての最後の戦いね」

こうして虚化一護と幻想の結界チームとの戦いで終幕が始まる。

「アアアアアアアア!!」

耳を突き刺すような、凄まじい咆哮。それだけで音圧が発生し、周囲の空間を揺れ動かす。同時に、地面を蹴り上げ、猪突猛進に二人に襲いかかった。

もはや一護にとつて、自分の視界に入る物は容赦なく敵と見なしている。自分の恩人も、何も見境がない。

「八意永淋と言ったわね。ちよつといい?」

一護が襲い掛かって来ているにも関わらず、霊夢は平然と永淋に話しかける。

余裕なのだろうか、霊夢は一護に目もくれず、全く違う方向に視線を向けていた。

「何かしら? なるべく手短にお願ひ」

「ええ。あそこに倒れている吸血鬼の少女を回収して、あんたの屋敷に運んでくれない? こいつは私と紫でどうにかするから」

そう言つて、視線を向けていた方——遠方で倒れているフランを指さす。

フランを見た永淋は頷き「分かったわ」と申し出を受け、フランの元へ向かった。

こうしてフランと永淋と輝夜とウルキオラは屋敷へと戻ったのだ。

そして、そんなやり取りをしている内に、一護が二人の目の前まで

差し迫っていた。近づくにつれて判然として分かる並外れた靈力の圧。下手をすれば、並の妖怪程度なら近づいただけで、魂が圧され消滅する領域にあるだろう。

隔絶した力を集約して形と成した、片手に宿る漆黒の刀。

一護がそれを躊躇いもなく、二人へ向けて振るった。

「境符『四重結界』」

だが、その前に紫がスペルを唱える。

手の平に四重の結界を形成し、直接一護の身体に結界で打撃を与えらる。結界はあらゆるものを拒絶する力を担っている。故に同極をぶつけた磁石のように、一護は後方に吹き飛ばされた。

「ほら靈夢、一護から気を抜いちゃ駄目よ。今の彼、理性もなにもないから、そこらの野生の獣と同じよ」

分かっていることだろうが、一応靈夢に注意する紫。

ただし全く聞いている様子はない。

なぜなら一護が、瞬時に態勢を整え、こちらに手のひらを向けていたからだ。そこに膨大な熱量を帯びた靈力が集中する。

あれは虚閃だ。文字通り閃光のような勢いで放つ、破滅の一撃。

範囲、威力共に桁外れに高い反則域の火砲が今、二人に向けて放たれた。

「紫、あんたの能力でどうにかしなさい」

「分かっているわ。この程度なら楽勝よ」

八雲紫の能力……境界を操る程度の能力で好きな空間にスキマと言う異次元へ通じる穴を作れる。そのスキマを迫り来る虚閃の方向に作り、異次元のどこかに飛ばそうとしているのだ。

故に楽々と攻略できると思ったが――

「あれ、スキマが出ないわ」

「え？」

スキマが出ない。

即ち、虚閃を避けないと、もろにダメージを受けると言う事だ。

靈夢と紫は即座に虚閃を横に飛び、何とか間一髪のところまで避け切る。

普通なら紫のスキマで、虚閃を異次元にやって終了。だったが、紫は能力で異次元を出さなかった。いや、出せなかったのだ。

「……おかしいわね、どうして発動しないのかしら？」

発動しなかった事について、紫は頭をフル回転して考える。

しかし、一護が考える時間など、与える訳も無く、二人に颯風の勢いで襲いかかった。

「霊符『夢想妙珠』！」

向かってくる一護を見て、霊夢がスペルを唱える。

今ここで熟考している暇など皆無であり、愚の骨頂。常に気を張り、変化に対応してこそ初めて三流の域だ。

もちろん心得として適当に持っている霊夢は即座に、複数の光弾を展開し、的確に一護を捉えながら一斉発射を行う。

一護は駆けながら、霊圧刀を虚空に向かって横に薙ぎ払うようにして振った。

その瞬間、霊圧の刀から無数の三日月を形作った弾幕が発射される。一発一発が高密度の霊力が宿っており、霊夢の弾幕を尽く相殺していった。

(能力は使えないけど、スペルは使えるのね)

霊夢がスペルを発動したのを確認した紫は、能力が使えなくなった理由を考えるのを止めた。

能力が使えなくとも、スペルは使えるからだ。

だが気になる。なぜ能力が使えないのかが。

今まで、こんな事は無かった。いや、無かったと言えば嘘になるが、原因が分からないのは初めてだ。事実、現在までこういう事が二度あった。紅霧異変の時のルミアの異能「月夜大星」やウルキオラの能力「事象の拒絶」。この二つの能力が、暴走した一護の前では、全く発動しなかった。原因は未だに不明。

「まあいいわ。原因なんて、後でじっくり考えればいいだけだし。スペルが使えるなら、こっちのものだしね」

とりあえず、まずは一護を止めなければならない。

一刻も早くにだ。

「アアアアアアアア!!」

一護は駆けながら天高く跳び、空中から霊夢と紫に斬りかかる。

「また結界を喰らいたいようね。境符『四重結界』」

再び同じスペルを唱える紫。

手に四重の結界を作り出し、先と同じように一護に直接的ダメージを与えようとする。だがそれを、二度喰らう一護ではなかった。

一護は結界目掛けて霊圧刀を振り下ろす。

「——!?!」

一瞬、軋る音と同時に轟音が轟いたかと思うと、ガラスが割れるように、結界が消えちった。

結界が潰された事で、直接紫に漆黒の刀が降り掛かる。

「まあこれくらい、予測の範囲内よ」

結界を破られたことには単に驚きはしたものの、紫の頭には何通りかの予測を組立て、直ぐに行動に移せるようにしていた。

故に攻撃は軽く横に飛び避けきる。

そして紫の横に居た霊夢は、同時に少し横に跳びスペルを唱える。

「霊符『夢想妙珠』!」

複数の光弾が再び一護に向かって放たれる。

近距離で放たれた光弾は、流石の一護も防ぐ事が出来ず、全て被弾してしまう。

「結界『魅力的な四重結界』!」

光弾を喰らった一護は、少しダメージを負ったらしく動きを止めている。

そこを狙い紫はスペルを唱えた。

境符『四重結界』に似ているが、結界の大きさが一段と上がっている。どうやらこのスペルは境符『四重結界』の強化スペルのようだ。

一護はその結界に拒絶されるかのように、破裂音が響かせ勢い良く後方に吹っ飛んだ。

「流石のアイツも、今のは効いたんじゃない?」

霊夢は倒れた一護を確認して言う。

倒れた一護は、所々にダメージを受けていて血を流している。見る

からに、大幅な痛手を受けたのは間違いないだろう。

「……だといんだけどね」

それでも紫は、全く安心できていない様子だった。

瞬間、一護の身体の傷が全て虚面のように超速再生し、傷が完治してしまった。

何も無かったかのように一護の傷が一瞬で元通り。

それを見た二人は驚きを隠せなかった。

「そんな……嘘でしょ？ 傷が一瞬で治っちゃったわよ」

「ええ、そのようね。あそこまで一瞬で傷を治した者なんて見たこと無いわ。霊的なダメージを受けたにも関わらず、普通に負った傷とは違うのよ全く」

「とりあえず肉体的ダメージは一切効きそうにないわね。もつと別の手段か、もしくはは一撃で終わらせれるような力を喰らわせるしかないわね」

「……あれ、そういえばあなた一度、あの状態の一護君を見たことあるのよね。だったら、その時はどのようなようにして一護君を止めたの？」

「えっと、確かね……」

霊夢が過去を思索していると、一護はゆっくりと立ち上がった。

仮面が一護の顔を全て覆い尽くし掛けている。まるで、活発に動く毎に、ダメージを負う毎に速さを増していつているかのように、仮面の増殖が止まっていない。

それを見た霊夢は、あの時の事を思い出した。

「そうだったわ！ 確か、あの変な白い面っぽい物を割ればいいのよ！」

そう、紅霧異変で一護が暴走した時も、仮面を割れば暴走は止み、普通の一護に戻った。

あの時の事を霊夢は思い出したのだ。

「成程ね、分かったわ。それじゃあ、霊夢。仮面を割るのは、あなたに任せるわ」

「それならあんたは一護の隙を作りなさいよ」

暴走一護の弱点が分かったところで、二人は即役割分担を決めた。

そして直ぐに決行する。

「人間は人間の境界を、妖怪は妖怪の境界を、聖邪隔てる境界を創成せしめん 生滅盛衰の果てに天地万物が変化起こり永劫循環とする『人間と妖怪の境界』」

紫が符名の付かないスペルを唱えた。

瞬間、一護の周囲を取り囲むようにビーム状の弾幕が取り囲んだ。更に通常の弾幕が一護に向かって、全方位から放たれる。

これで一護は身動きが上手い事取れなくなった。

「ほら、これで一護君の身動きは取れないわよ」

「そういう隙じゃないんだけどね。まあいいわ……宝具『陰陽鬼神玉』！」

霊夢が何やら不満を言った瞬間にスペルを唱えた。

手先から巨大な光の弾を出現させる霊夢。

「こいつをブツけて、仮面を割るわ」

どうやら霊夢は巨大な光の弾で、一護の仮面を割るようだ。

確かに、これ程の超高密度の霊力の玉を当てれば、簡単とまではいえないが割るであろう。

「分かったわ」

紫がそれを答えた瞬間、一護は大きく口を開け……

「アアアアアアアアアアアアアア!!」

天を轟かすほどの叫声を上げた。

そこに込められているのは滅殺。

殺せ、殺せ、殺せ、殺せ——万象滅尽する呪いの絶叫は、一護が渴望する呪怨を具現化するように紫の展開した弾幕を雲のように消化し、破壊の爪痕を残す。

発する禍々しい霊力だけで、禍を散らす波涛。本来の思いなど欠片も感じさせない、狂いに狂った一護の力。

しかし、これはまだ真価を発揮していない。言うなれば前兆レベル。

仮面が顔を覆い、そこから様々な全てを覆い尽くす時、真に神威の如き力を発揮するであろう。

その証拠に、時間が経つにつれて霊力の圧力が天井知らずに膨れ上がっている。

まだまだ、まだまだまだまだ、まだまだまだまだまだまだ……
全く、今尚至らず。

極論を言うと、こうなってしまうのが悪い。そして出会ったものが全てが悪いといえよう。出会ったが運命はそれまで。命運尽き果て、死を待つのみ。こんなもの災禍となんら変わらない。

「凄いわね……！ 私の弾幕を声だけで消し去るなんて」

幻想郷最強と謳われる八雲紫も、自分の弾幕を声だけで掻き消されたのは、少し信じがたかった。

例え、その発する声に夥しいほどの呪、つまり言霊や想いが乗せられていても、それだけで自分の奥義にも等しいスペルを打倒されるなんて、正直な話、信じたくもないだろう。

「アアアアアア!!」

一護は完全自由の身となり、霊夢と紫に駆けた。

そして右手の霊圧刀に凄まじい霊圧を溜める。

（——アレは!?）

それを見て霊夢は嫌な予感がした。

一護の事を幻想郷で一番理解している霊夢。

この溜まった霊圧は……もう、あれしかない。

「紫！ 即援護して！」

そう言っつて、霊夢は迫り来る一護に向かって走り出した。

「ええ、引き受けたわ。その代わり必ず成功させなさいよ。流石にこの失敗は許されそうにないからね」

紫は答えると同時に、再度奥義のスペルを唱える。

「厭離穢土、欣求浄土——一切の有為の法は、夢幻泡影の如し 夢も幻も泡も影も、全て儚い人生で終わりを告げよ『深弾幕結界——夢幻泡影——』」

瞬間、魔法陣が二つ出現し、そこから勢い良く無数の弾幕が放たれる。

紫はそれを意図的に操作し、一護目掛けて無数の弾幕を放つ。

一護は全く弾幕を気にせず、霊圧を右腕に込める。
霊夢と一護の距離はざっと80m強。

その距離になった途端、一護は右腕の霊圧刀を大きく振るった。
その瞬間、とてつもない大きさの月牙天衝が放たれたのだ。

大きいだけではなく、込められている霊圧もかなり大きい。飲み込まれれば消滅のみ。今までの一護の月牙とは比べるに値しない、もはや別物レベルの一撃。

「――紫！」

どうにかしなさい！　と言いたかったのだが、それを言う暇すらなかった。

月牙が霊夢の目の前まで迫る。

これでは霊夢と月牙が激突してしまう。いくら何でも、こんなものと衝突すれば、流石の霊夢も抗うことなく終わりを迎えるだろう。

「あんたは一護だけを見なさい！」

紫は二つの魔法陣を霊夢と月牙の間に挟むように持っていく。

「行くわよー」

紫は両手を、何かを拝むように合わせた。

その瞬間、紫の両手から淡い紫色の光りが溢れ出す。

それに呼応するように、二つの魔法陣も淡い紫色の光りが溢れ出た。

どうやら紫が自分の妖力を、二つの魔法陣に送り込んでいるようだ。

そして月牙が魔法陣に激突した瞬間、何の拮抗も起こさないうまま、爆発を起こした。

炎と熱風を撒き散らす。月牙は魔法陣に阻まれ、消え去った。

そんな中、霊夢は全く怯まず一護に向かう。

距離にして10mも満たない。

一護は先程の月牙の爆発により、少し怯んでいるようだ。

――恰好のチャンスだ。

「さあ、一護……博麗の巫女が今、あんたを止めて上げるわ！」

霊夢は手先から出していた巨大な光の弾で、一護の顔面の仮面目掛

けて突き出した。

光の弾が一護の仮面を貫く。

仮面にめり込む毎に、ピシピシと輝が入り割れていった。

「アアアアアアア!!!」

一護は苦悶の声を上げる。

輝が割れていき、苦しんでいるようだ。

しかし、それでも一護は最後っ屁のように、霊圧刀で霊夢を斬りかかった。

「!しま…ッ!」

予想外の攻撃に、霊夢は避け切る事が出来ない。

だが……一護の霊圧刀に何かが飛来した。

それにより、一護の霊圧刀は掻き消える。

霊夢は直ぐ様、後方に跳んだ。

「アアアア……」

一護の声がだんだんと弱くなっていき、虚の仮面が完全に砕け散る。

その瞬間、一護の身体を覆っていた白い塊は、鉢植えが割れるかのように粉々になった。白い破片は全て、虚空へと消え、元の一護が姿を現した。

だが気絶しているのか、そのままうつ伏せに倒れる。

「……終わったの?」

「終わったようね」

霊夢と紫が一護を確認して言う。

寝ているのか、寝息をして倒れている一護。

その姿を見て二人は安堵した。

けど霊夢には一つ気掛かりな事がある。

そう、一護の最後っ屁の攻撃。あの霊圧刀が霊夢に向かって振るわれたが、誰かがそれから守ってくれた。一体それが誰なのかが気になる。

だから霊夢は紫の方を見て、口を開く。

「そういえば、あの時の一護の攻撃を掻き消したのってだ——」

「私だよ、博麗霊夢」

霊夢が言い終わる前に、名乗り出た。

霊夢はその声を聞いて驚愕した。この声には聞き覚えがあつたらだ。

声のした方を見る。

そこには一人の人物が立っていた。

「あ、あんたは……!!」

《2》

満月の夜が明け、空を太陽が支配する。

温かい風が吹いており、竹林の竹を優しく揺らす。

そんな竹林の中に一つの大きな平屋の日本屋敷がある。竹林に溶け込むようにある、と言うより竹林の中心地点がこの屋敷のように見える。

その日本屋敷の縁側沿いの部屋に、一人の少年が布団の上で眠っている。ケガをしているのか、頭には包帯をグルグル巻いており、顔には彼方此方に湿布が張られている。何ともケガ人の見本のような姿だ。

そのケガ人の見本のように眠っている少年の正体は……黒崎一護だ。

あの後、どうやら一護は此処に運び込まれたらしい。

ふと、風に靡かれていた竹から、一枚の笹の葉がフワリと飛び散つた。一枚の笹の葉は風に支配されるがまま、一護の眠る部屋まで飛ぶ。緩やかに飛ぶ笹の葉は、一護の眠る部屋に入ると、狙ったかのよう風が止む。そして笹の葉は重力に従い、ゆっくりと一護の鼻元に落下した。

すると一護は一瞬、眉間を強張らせた。

「……う、んこは」

笹の葉が落ちたせいかわ、一護は微睡みから目を覚ます。

この程度で起きるといふ事は、それ程深い眠りではなかつたのだろうか。

「……ん」

一護は首だけを横にし、縁側を通して外を見る。

寝ぼけ眼に映ったのは緑一色の深い竹林。起きたばかりで頭が働いていないが、一つだけ分かった。

ここは博麗神社ではない。

「どこだ(ん)ん？」

寝ぼけた状態での結果は、見覚えがないと判定された。

一護はゆるりと上半身を起こす。

今着ている服装は、病人が着るような純白の病衣だ。

「……そういえば」

一護はあまり働いていない頭で、どうにか過去を思い出そうとする。

(確か、俺は、ウルキオラと戦って……)

ウルキオラと戦って負けた。

まずは、その事から思い出した。

どうやら負けた後、ここに連れて来られたようだ。

だが、一護は自分が虚化して暴走してしまった時の記憶が無いみたいだ。

と、一護は部屋の隅に置かれている自分の服を見た。

洗濯されたのか、ボロボロの服が綺麗になっている。

「……とりあえず、着替えるか」

一人呟くと、ゆっくりと立ち上がる。

治療されたのか、身体の痛みがほとんど無い。

一護は自分の服を手に取り、着替える事にした。

まずは上の服を脱ぎ、上半身裸になる。上半身にも所々に包帯が巻かれている。傍から見たらかなり痛々しいが、当の本人は全く痛がついていない。

そして次は下半身下着一丁になる。足にもいくつか包帯が巻かれており、もはや派手に交通事故して病院に運ばれたあとの状態に似通っていた。

「にしても、随分と上手な巻き方だな。医者にでも診てもらった気分

だ」

パンツ一丁で、そんなことを思っていた時だった。

ガラガラと、不意に部屋の襖が音を立てて開かれたのだ。

「……えっ？」

「あ」

その向こうには見知らぬ少女が一人……

「……………」

ウサギ耳の付いた、薄紫色の長髪の少女——一護自身は完全初対面の鈴仙・優曇華院・イナバだ。

「……………」

鈴仙は硬直したまま動かない。

そして一護は気づいた。自分が今、パン一だと言う事に。

(まずい……！)

今までいくつもの苦難を乗り越えてきた一護ではあるが、こういった事態には不慣れどころかほぼ経験がない。

(いや、待て。ここは冷静に考えろ。俺はただ着替えようとしていただけなんだ。平静を装って言えば)

一護は一步前に出て、どうにか誤解を解こうと試みる。いや、そもそもだが、何の誤解を解こうとしているのか、曖昧になってきた。

「あく、えつと、ど、どうした？」

「ひっ……………」

鈴仙は小さな口を開け、顔が急激に赤くなった。

今なら頭から湯気が出ても、何らおかしくないかもしれない。

「なっ、おい、大丈夫か？」

急に鈴仙が発病状態みたいになったので、一護は心配そうに声をかけ、また一步近づく。

「あ、あい、あう、あによわ——」

もはや、パンツ一丁などどうでもよくなり、少女の身体的な安否を気にした。そしてまた一步近づき……

まるでその一步が地雷を踏んでしまったかのように……

「いやあああああああ——!!」

地雷音以上の叫び声を出して、鈴仙は部屋から逃げるように走り去っていった。

「……………」

一護は呆然と立ち尽くす。

この光景を第三者が見ていた場合、パンツ一丁の男が少女を襲おうとしている絵面に見えなくもない。

「さて、どう誤解を解くか」

恐らくだが、あの少女はこの屋敷の者だろう。どうして自分がここにいるかは不明だが、これからのことを考えるに、どう弁解したらよいのかをまず思案するのが、進展に向けてスムーズだ。

一護は素早く自分の服に着替えると、まるで狙ったかのように廊下の方から誰かが走ってくる足音が聞こえてきた。

どンドン一護のいる部屋へと近づいてくる。

「誰だ？」

一護は廊下に顔を覗き出し、見てみる。

「えぶっ！」

その瞬間、一護の覗き出していた顔面を誰かに殴られた。

そのまま無様に倒れる。

「……………な、何しやがんだ!?!」

倒れた一護は直ぐに、自分を殴った人間に目を向けた。

そこには、本来人を殴るようなことは絶対に行わない役職の巫女……博麗霊夢が立っていた。

「何しやがんだ？　じゃないわよ！　人に心配かけといて、何いきなり女の子を襲おうとしてんのよ！」

「は、襲う？　俺がそんな事する訳ねえだろ！　俺はただ着替えをだな」

「ロリコンがよく言えたわね」

「な、ロリコンだと……!?!　あれは不可抗力だつて——」

「まあいいわ。とりあえず早く来なさい。話したい事があるの」

一護の言葉を遮り、霊夢が廊下を歩いていく。少し怒っているのか、歩くスピードが早い。

「ま、待てよ」

廊下を歩いていく霊夢を追う霊夢。

誤解されたままと言うのは、かなり辛い。

だが仕方が無いのだ。

パンツ一丁の男が、怯えている少女に近づいていたら……第三者は男が少女に襲い掛かろうとしている凶しか表れないのだから。

*

屋敷の居間に着くと、紫、フラン、永淋、輝夜、鈴仙が居た。

ウルキオラとてゐる姿が見えないが、何処かに出掛けたのだろう。

「いっちー!!」

フランは一護を見ると、勢いよく一護に抱きついた。

一護を心配していたのか……少し涙を流しているフラン。

それを横目で見る霊夢。

「いっちー、心配したんだよ!」

「悪いフラン。心配かけてごめん」

そう言つてフランの頭を撫でる一護。

自分より年齢は何百倍も高いが、精神的には一護の方が上だろう。

だから一護にとっては、自分より年下の少女に、泣くほど心配を掛けさせてしまったと言う罪悪感が募る。

……不意にある視線を感じた。

その視線の主は鈴仙だ。

視線からは敵意を感じられず、どこかしよんぼりとしている。

「えつと……あの時は悪い」

一護は鈴仙に顔を向け、一言謝った。

「いえ、その点なら私にも落ち度がありますから。その……殿方の、はだ……を」

鈴仙は顔を赤らめながら言う。

あまりにも言うのが恥ずかしいのか、最後の方が聞き取れなかった。

「鈴仙も悪気があった訳じゃないから許してあげてね」

と、隣にいる座る女性——永淋が鈴仙の代わりに言った。

「それにあなたは二日間も寝ていたから、起きてるとは知らずに襖を開けちゃったのよ」

永淋が続け様に言った台詞に、一護は聞き捨て出来ない言葉があった。

二日間も寝ていた。

実感はあまりないが、確かに頭と筋肉の働きに少し違和感を感じていた。

その原因が二日間も寝ていたせいみたいだ。

「てか二日も寝てたのかよ」

「ええ、そうよ。それより鈴仙も、私の助手をしているんだから、少しは男性の肌を見たくらいで大きい声出さないのよ」

「あう、そこを突っ込まれると痛いです」

項垂れる鈴仙。

そして一護はふと気になった。

「助手って何のですか？」

「ああ、そう言えば話してなかったわね。ここは永遠亭。あなたの世界で言う病院よ、一護君」

「病院……」

だから、こんなに上手な綻びも隙もない包帯の巻き方をされていたのかと、気づく一護。

「そう言えば自己紹介がまだでしたね。私は八意永琳。以後お見知りおきよ」

「俺は黒崎一護。博麗神社で住んでいる、いわゆる外来人だ」

「ええ。知っているわよ。一年くらい前かな？ あの文々。新聞の記事、有名ですもの」

「え、あ、そうですか」

と、少し落ち込む一護。

「えっと、私は師匠の助手を務めさせている鈴仙・優曇華院・イナバです。気軽に鈴仙と呼んでください」

「あ、ああ。よろしく」

「……あれ、これって私も自己紹介する流れ？」

「当たり前ですよ姫様」

滑らかな長い黒髪と着物を着た清楚と言う言葉が似合いそうな外見ではあるものの、テーブルに頬杖を付いて眠たそうにしているため色々と台無しな少女は、大きな欠伸をしてから言う。

「私はこの主である蓬莱山 輝夜。しかとその弛んだ脳に記憶しておきなさい」

「弛んだ脳ってなんだよ」

言葉に出して言わないが、この輝夜と言う少女は生活が弛んでいそうだと思った。

「そう言えば、この人、2日間ほとんど部屋から出てこなかったの。私と同じで部屋から出ちゃダメだったのかな？」

フランが言う。

「はあ？ バカにしないで。あなたがどうだかは知らないけど、私は好きで部屋にいるだけなの。いちいち外に出る必要性もないしね」

「姫様、その思考回路は所謂、引きこもり……」

「ああ……」

外の世界でいうニートに値するのだろう。外見からは一切考えられない。

「そもそも屋敷の主はね、外には出ないで玉座でドサって構えておくものよ。屋敷こそが私の世界。外の世界で獅子奮迅とするのは、部下の勤めだからね」

「考えは悪くないけど、根本が部屋に引き籠もりっぱなしの甲斐性なしだと、何だか信憑性以前に威光なんかも欠けちゃんわね」

黙って話を聞いていた紫が、色々と突いたことを言った。

「なっ、い、言うわね。まあ、下賤な者に、私の崇高な御言葉は理解できないでしょうね」

「まるで威厳が感じられないわね。台詞だけ大きくしても、その人に宿る魅力と言うものが何一つないわ。ああ、これが井の中の蛙ってやつかしら」

「くっ、い、いいもん！ 私には凄い霊力とかあるから！」

「力でしか誇示できないようじゃ、部下を統率するなんてまだまだだね。」

「反逆されて終わりだわ」

「……うつ、うああああああん！ 永琳！ この年増が虐めてくるウー！ だから外の世界なんて嫌なのよ！」

と、永琳に泣きいる輝夜。

「よしよし姫様。紫さんも、これ以上、姫様を弄るのをお止めください」

「ええ、少し言いすぎたわ」

「それに、そろそろ本題に入ったらどう、博麗の巫女様」

「……そうね」

そして、霊夢が口を開いた。

「一護、あんたに話したいことがあるの。そこに座って聞きなさい」

ほのぼのとした空間が、一気に緊迫とする。

一護は言われるがまま、座った。

「一護、今から言う事は事実だから、よく聞きなさい」

霊夢の声音が真剣になる。

今までの会話から、真剣な話になると、なぜか聞かずにはいられなくなる。

霊夢はまず最初に、一護が紅霧異変の時のような暴走をしたことを話した。

誰にも知られたくなかった事を知られてしまった一護は、愕然とした。だが、霊夢はそんな事がどうでも良いように、続きを話す。

その続きは暴走した一護が倒れた後の話。

*

時間は二日前に遡る。

霊夢と紫が暴走状態の一護を止めた瞬間、一人の男が現れた。

空気が変わる、空間が脈打っている。その男がいるだけで、世界が拒絶反応を起こしているような錯覚さえ覚える忌むべき存在。

「——あ、あんたは?」

霊夢はその男を見て、驚きと恐怖が煮え混じった声で言った。

男は淡々と歩み寄ってくる。

距離にして約50m。いや、この男の前では距離という概念は、意

味を持たないのかもしれない。移動という名の時間を切断して、いきなり目の前に現れてもおかしくない。

「久し振りだね、博麗霊夢。それと……久しぶりだね八雲紫」

どこか懐かしそうに、男は紫を見つめる。

まるで旧友に接しているような瞳と表情に、男から発せられている危険信号が消えかけたような気がした。

「そうね、何年ぶりかしらね——刹蘭」

紫は特に何の感情も露呈させず、男の名を口にした。

そう、今二人の目の前に居る男は幻獄七夢卿の一人……刹蘭だ。紅霧異変以降から姿を現さなかったが、約一年の時を経て現れた。服装も背丈も全てあの時のまま変わっていない。

「何か用かしら？」

紫は刹蘭を前にしても平静で話しかけられる。

だが霊夢は対照的に、今にも刹蘭に攻撃を仕掛けようとしている。

「……黒崎一護に会いに来たんだが、どうやら眠っているようだね」
倒れている一護を一瞥して言う刹蘭。

だが刹蘭が本当に、一護に会いに來ただけなのかは分からない。最初から意図が読めない相手。何を企み、何をしようとしているのか、わからない。

ただ感覚で理解できるのは、この男の行動一つ一つに嫌な“感じ”を覚える。

「で、あなたはそのまま素直に帰ってくれるのかしら？　まあ帰らなっていうのなら、少しお茶を嗜む時間くらいなら作れるわよ」

本当に一護に会いに來ただけなのなら、もう用はないだろう。一護は暴走のあとで眠りに落ちてしまっているのだから。

「ああ、そうだね。お茶の時間も悪くないが、生憎と黒崎一護が眠っているのだつたら、ここに居る意味は無い。忙しい身なんですね」

刹蘭はそう吐き捨て、二人に背中を向け帰ろうとした瞬間……

「霊符『夢想妙珠』！」

霊夢がスペルを唱え、複数の光弾を刹蘭目掛けて放つ。

「またか」

迫り来る複数の光弾を目の前にして、刹蘭は一人呟いた。

そして光弾全てが刹蘭に当たる前に虚空へと消失した。まるで刹蘭の周りには、目に見えない異空間へと通じる穴があるように、全ての光弾が消え去ったのだ。

「君は私の帰宅を邪魔するのが、随分と好きみたいだね」

「そうね、あなたの帰りを邪魔するほど、価値のある事は無いわね」

霊夢がお札を出しながら言う。

このまま帰るつもりだった刹蘭は、臨戦態勢に入った霊夢を見て溜め息をついた。

「本気かい？ 私まで斃されてしまったら、幻獄七夢卿は四人になってしまうだろ？ それだと組織としては寂しい。まあ組織として成り立っているのすら怪しいけど」

刹蘭は冗談半分に言う。

幻獄七夢卿は刹蘭が倒されたら残り四人。フレデリックは倒されて、断霧鏡帥は幻獄七夢卿から脱退し外の世界にいる。今現在は刹蘭を含めて五人と言う事だ。

「知らないわよそんなこと。とりあえず、あんた達……幻獄七夢卿は崩壊させないといけない組織なのよー」

「……駄目よ霊夢。今の私たちじゃ、アイツを倒す事は出来ないわ」

紫が戦い始めそうな霊夢を制止する。

今の紫でも倒せないという事は、幻想郷のほとんど、否全員が倒せないと言っても良いだろう。

「何だよ紫！ こいつを今どうにかしないと大変な事になるわよ」

「ええ、分かっているわ。けど、性急過ぎては駄目よ」

紫の言葉に霊夢は、臨戦態勢は崩さないものの戦意を押さえ込む。

「……紫」

ボソツと、刹蘭が呟く。

「本来なら『彼女たちも』そして『君も』、こちら側に立って来ていたはずなのにな」

どこか悲しみの孕んだ声音で言う刹蘭に、霊夢は少し驚いた。

こんな最悪な組織に所属している男が、こんな悲しそうな目と声を

出すなんて信じがたい。いや、過去を思い返せば、ルリミアもフレデリックもどこか最後は、人間的な感情に満ちていた。

ここで霊夢は改めて考え直す。

幻獄七夢卿とは、母上が遺言で残したように、本当に恐れていたような組織だったのだろうか？

「まだ過去のことを引きずっているのね。あの『異変』のことはもう忘却したほうがいいかもね」

「そんな事を言うなよ紫。俺にとってあの頃は、今になっても思うが、大切に暖かい日常だった」

「ええ、そうね。けど、私はまだ『あの異変の本当の真髄を知らない』。あの異変の渦中にいたあなたなら、真相も知っているでしょ？

よければ教えてよ。何か手伝えるかもよ」

霊夢には二人の会話の内容が理解できない。

しかし、薄々だが思い出した。恐らく異変の筆録書に載っている『混神異変』のことだろう。

母上は異変の内容は、どんな小さなものも丁寧に書き込んでいたが、この異変に関しては何も書かれてはいなかった。とある『意味が理解できない一言を残しては』。

「あの異変、正式には『混神異変』か」

一瞬だが、凄まじい怒りに満ちた刹蘭。

しかし直ぐに表情を戻し、

「悪いが内緒だ。あの真相は『知っただけで危険が及ぶ』。故に、教えることはできない」

瞬間、その言葉を聞いた霊夢の背中が寒くなった。

最初から理解を始めていたが、それを信じたくなかったから頭で強引に拒絶していた。

この二人の会話を聞くに、まるで昔は親友のような間柄で、しかも異変では共闘していたように聞こえる。つまり仲間だった。今も刹蘭は、二人に危険が及ばないように、発言を謹んだ。それも完璧な善意で。

いや、待て。

そもそも霊夢は異変を解決していく博麗の巫女で、今は解決できていない大結界の謎の異変に関しても並行して調べている。そして、恐らくだがその大結界に何かをしたのが刹蘭で……だから敵で……ドクン、ドクンと、霊夢の心臓が激しく波打ち、周りの音が消えたような感覚に陥る。

まるで考えたくもないことを、答えたくもなかったことを言うように。

刹蘭と紫は元々仲間だったのなら、もう一つ、違う見方ができる。

「誰か、他に——」

そう、他に……

「もつと、違う敵がいた……？」

ああ、言ってしまった。

言いたくなかった。信じたくなかった。個人的には『混神異変』は大結界に関する異変で、その黒幕が刹蘭。今回の大結界の異変も、もう一度、刹蘭が企んだ異変だと。

霊夢はそうだと思っていた。しかし違う。『混神異変』はそんな生易しい考えで到れる異変ではなく、もちろん黒幕が刹蘭などではない。

もつと別の黒幕が、深奥で眠っている。いや、笑っているのかもしれない。

分からない、理解できない、信じたくない。

「……それじゃあ、俺はそろそろ帰るよ。黒崎一護には宜しく言っておいてくれ」

刹蘭はそんな霊夢が苦悩している中、飄々と去ろうとする。

「なつ、ちよつと待ちなさい！」

それを見た霊夢は、慌てて刹蘭に声を掛ける。

「何だい？ 悪いが、あまり質問には答えられないよ」

「一つだけ、教えなさい。あんたは何者なの？」

霊夢は咄嗟にそう聞いた。

ここで『混神異変』のことや、過去の出来事なんかを聞いても教えてはくれないだろう。

なら、一つでも情報を仕入れておきたい霊夢は、そう問うた。

刹蘭は微笑みながら一言で答えた。

「サンジェルマン伯爵……と言っておこうか。じゃあね、博麗の巫女」

そう言うて、刹蘭は消えたのだった。

*

こうして霊夢の話は終わった。

何も言わずに聞いていた一護は、何を言ったら良いか分からなかった。

「とりあえず、刹蘭が現れて聞き出せたのは、刹蘭の正体がサンジェルマン伯爵って言う意味不明な名前だけよ」

霊夢が最後に纏めるようにして言った。

一護はサンジェルマン伯爵と言う名前を聞いて、思索する。

「サンジェルマン伯爵……どっかで聞いた事あるな」

聞き覚えのあるサンジェルマン伯爵と言う名前。

だけと思いつけない。

そういえばフレデリックも最後に、刹蘭の正体は外の世界で有名な伯爵と言っていた。

「紫さんは分からないのか？」

「ええ、あまり知らないわ。外の世界のインチキ伯爵としかね」

何て答える。

「つうか、紫さんと刹蘭さんが顔なじみってのは驚きだよな」

「ええ、黙っていてごめんなさい。けど、これに関してはまだ深く聞かないで。いずれ、時が来れば教えるから」

「ああ……」

それより気になることがある一護。

刹蘭は自分たちの敵で間違いないはずだ。なら、刹蘭ですら敵対している、何か。もっと違う敵。

つまり昔の異変の黒幕だろう。『混神異変』が何の異変かは知らないが、ここが恐らく刹蘭や紫の関係、もっと言えば全てのものが分岐した瞬間だろう。

だとすれば、恐らくこの時の黒幕は、今もどこかで笑っている。何かを企んでいるかも知れない。

一護はそんなことを考えていた時だった。

「つたく、何なのよその話しようもない会話」

一人の少女が盛大に水を差した。

その少女は輝夜だ。

「さつきから聞いていれば、詰まらない話ばつかじゃない。聞いてて飽きたわ。だから——」

輝夜は座布団の上から立ち上がり……

「今日の夜、この竹林で『肝試し』をするから、いいわね」

急な輝夜の提案により、一護だけではなく、霊夢も目を丸くした。

そして再び新たな面倒ごとに、一護は巻き込まれるのであった。

第40斬【肝試し】十番外編

「……どうして、こうなったんだ？」

なんだろう、昨日も同じことを呟いたなと思う一護。

あれから異変は解決と言う……いや、和解と言う形で解決した。何故、こんな異変を起こしたのかは別に、深く聞かなかつた。それ以上の問題が発生したからだ。

刹蘭について、『混神異変』などの謎に包まれているが、全ての答えがそこにあるような問題。他にも一護の暴走などもあり、そこまで頭が回らなくなり、追求はよしておいた。

しかしまあ、今の一護にはどうでもいい。

それ以上の、別方向の問題が発生しているのだ。

一護は現在、暗くなった迷いの竹林にいる。

ただし、一人で居るのでは無い。一護の横には、一護の腕にしがみ付いている少女がいる。まるで恋人同士の肝試しをしているように見える一人の少女の正体は――

「ねえねえ、いっちー、怖くない？」

吸血鬼の少女、フランだ。

確かに一般人なら、こんな夜暗い竹林は恐怖するだろう。だが生憎と一護は元死神代行だ。幽霊なんかで怖がる訳が無い。

「怖くねえよ。俺としちゃ、別の方向で怖い」

「別の方向？」

「ああ、何か嫌な予感がする」

怖くない……確かに怖くは無い。

だが、何か裏があるような気がしてならない。

そもそも今、こんな事をしているのには訳がある。

蓬萊山輝夜の肝試しと言う提案だ。

この妙な提案により、一護と少女は夜の暗い竹林を歩いている。しかし、あの輝夜が何も考えず、普通な肝試しなどさせるはずがない。きつと何かあるはずだと、色んな意味で一護の肝が試されている気がした。

「たく、何で俺がこんな目にあってんだよ」

フランに聞こえないように、小さく不満を呟く。

嫌々肝試しをさせられている一護にとっては、とても帰りたいたい気分だ。

（霊夢は先に神社に帰っちゃもうし、八雲紫さんもそれに続いて帰った。お陰で残ったのは俺と…）

そう思うと一護は、自分の片腕にしがみ付いているフランを見る。

人懐っこく無邪気な笑みを浮かべていた。まあフランが楽しそうならいいかと、一護はポジティブに考えてみたのだ。

「あ、そうだ。ねえいつちー」

「何だフラン？」

「いつちーは私のあだ名……決めてくれた？」

あだ名……

そういえば、異変解決に挑む前にフランと約束したな。

自分のあだ名を決めてくれた代わりに、フランのあだ名を決める。

そんな約束を……

その瞬間、何の前触れもなく一人の女性が一護とフランの前に現れた。

一護とフランはその女性を確認すると、進めていた足を止める。こんな竹林で人と遭遇するとは思ってはいなかったが、直ぐに氷解した。

「誰だ、あんた？」

「お前らがウルキオラとてゐが言っていた、あいつからの差し金だな。よし、ぶっ殺してやるよ」

「はい!？」

*

時は遡り、霊夢が迷いの竹林から抜け出した後――

霊夢は紅魔館を訪れた。

別にレミリアをどうこうしに行った訳では無い。

確かに博麗神社の境内を砕かれた恨みは消えた訳では無いが、今日ここに来たのは、ある人物に会うためだ。

それは、

「たのもー!」

霊夢は紅魔館にお邪魔すると共に、ある一室に向かい、そこに到着すると扉を蹴り開けた。

その一室はまるで図書館を思わせるような蔵書の数々。一生掛かっても読み切ることとは不可能と思わせるほどの数だ。

此処は紅魔館の名スポットの一つ、大図書館だ。

霊夢は大図書館の中をズカズカと歩く。

「おい、パチュリー。居るんでしょ。出てきなさい!」

と、叫びながら大図書館の住人を探す霊夢。

それを聞き取ったのか、一人の少女が現れた。

「読書場では静かにしなさい。そんな常識も知らないの、博麗の巫女は」

現れたのはパチュリーだ。

出てくるなり、霊夢に苦情を言い付ける。

「あなたの苦情には興味ないから、私の用件だけ聞きなさい」

身勝手な事を言う霊夢。

「はあく。そんな態度で、私があんたの用件を聞くとでも——」

「サンジェルマン伯爵って知ってるわよね?」

パチュリーが「思っているの?」と続けようとした瞬間……霊夢が遮るように一言ある名前を言った。

それを聞いたパチュリーは絶句した。

霊夢から意外すぎる名前が出たからだ。

「……意外ね。あんたから、そんな人物の名前が出てくるなんて」

言動から見るに、どうやらパチュリーはサンジェルマン伯爵と言う人物を知っているようだ。

「いいわ。気分が変わったわ。で、サンジェルマン伯爵について、何が知りたいのかしら?」

「全部よ」

*

時は戻り、一護とフランは逃走していた。

それを追うように一人の女性が、一護とフランを追いかけている。白銀髪のロングヘアーに、深紅の瞳。髪には白地に赤の入った大きなリボンが一つと、毛先に小さなリボンを複数つけている。上は白のカッターシャツで、下は赤いもんぺのようなズボンをサスペンダーで吊っており、その各所には護符が貼られている。

そんな妙に怪しい格好をした女に追われているのだ。

「ちきしょー！ 何なんだよお前!？」

一護は女から逃げながら、後ろを振り返って叫んだ。

女はまるで狐を追いかける狼のような笑みを浮かべて追いかけている。

「輝夜のバカが差し向けてきた刺客だろ？ ヘツ、今度は何企んでるんだお前ら」

何かとんでもない勘違いをしているようだ。

刺客？ ……違う。

肝試しだ。

「いや、これはこれで肝、試しか。いや、そんなことに対して納得しての場合じゃねえか」

一護は迫ってくる女に向けて、弁解の言葉を吐く。

「おい、あんた、何か勘違いしているようだけど、俺らはただ平和的に肝試しをしているだけだぞ！」

とりあえず軽く弁明してみる。

「ああ、肝試し？ そうやって私を騙まし討ちするつもりだろ。今までの輝夜の刺客もそうだったからな！」

言い終わると同時に、霊力を纏う。

どうやら弁明は無理のようだ。

「不死『火の鳥 — 鳳翼天翔—』！」

スペルを唱えた。

すると女性から火の鳥のような物が、逃げている一護とフランに飛来してきた。

「黒符『月霊幻幕』！」

一護も咄嗟にスペルを唱えた。

三日月状の弾幕を展開し、飛来してくる火の鳥目掛けて放つ。

一護の弾幕が火の鳥を徐々に弱くしていき、そして掻き消した。「つたく、しゃあねえな！」

一護は走る足を止め、女と向き合う。

それと同時にフランも足を止める。

本当は無駄な戦いは避け、このまま逃げ切りたかったが、相手がスperlを使ってきたのでは話は別だ。ただの鬼ごっこ的な感じの逃走劇ならOKだったが、スペルを使われては危険すぎる。

背中から撃たれかねない。

「何だ、逃げるのは諦めたのか？ 殊勝なことだ」

足を止めた一護を確認した女は、自分も追いかける足を止めた。

「ああ。本当は撒きたかったんだけどな」

「そいつは残念だな。まあ私から逃げる事の出来る人間なんて、この世に居るどうかすら分からないけどね」

「随分と足には自信があるんだな」

「足だけじゃないよ。こつちにも自信があるからな」

女はそう言って、再び霊力を纏う。

こつちにも自信があると言うのは、どうやら弾幕ごつこの事のようにだ。

「仕方ねえ、フランこいつは俺が一人で戦う」

「えくどうしてえく？」

あからさまに不満そうな表情をして聞いてくる。

「どうしてもだ。先に帰っててくれ」

「んく分かった。じゃあ、先に屋敷に帰ってるね。代わりに、ちゃんと、あだ名教えてね」

「ああ、分かったよ」

少し考えた後、フランは一護の言う通りにした。この時点で、女は一護たちは敵では無いと思って欲しかったが、そうはいかなかった。

一護と女は対峙する。

「いいのか？ せつかくの戦力を減らして。それとも、これも作戦の

うちか？」

「どうだろうな。それより、そろそろお互い名乗らねえか？ 弾幕
ごっこの前の、作法なんだろう」

まだお互い名乗っていないので名前が分からない。

一護は文々。新聞で有名になっていたが、女の態度を見るに、どう
やら文々。新聞を読んでいないようだ。

「そうだな、じゃあ名乗っておこうか」

女が一步前に出て、二つ名と共に名乗る。

「私は蓬莱の人の形 藤原妹紅だ」

「俺は博麗の死神 黒崎一護だ」

一護も女——藤原妹紅が名乗ると続け様に名乗った。

そして両者が名乗り終わると同時に、弾幕勝負が始まった。

「それじゃあ手始めだ。滅罪『正直者の死』！」

先手で妹紅からスペルを唱える。

妹紅の背中から炎の双翼が生え、そこから無数の蛇が出てきた。い
や無数の蛇ではなく、蛇のように形作った弾幕だ。

「黒符『月霊幻幕』！」

相手のスペルを確認した一護は、直ぐにスペルを唱える。

無数の三日月状の弾幕を展開し、妹紅の弾幕に対抗した。

「まだ行くぜ。不滅『フェニックスの尾』！」

先のスペルを解除し、新たなスペルを唱える妹紅。

無数の火の玉が、一護に襲い掛かる。だが一護も三日月状の弾幕を
新たに展開し、火の玉に対抗する。無数の火の玉を、三日月状の弾幕
が押している状況だ。

「……この程度、と言ったところか」

妹紅は何かを一瞬にして測った。

自分のスペルが押されているようだが、どうでも良いように、妹紅はそ
れを測り終わると、スペルを解除した。

元々押されていたせいで、一護の三日月状の弾幕が一斉に妹紅に殺
到する。

「ッ!？」

急に妹紅がスペルを解いたのに、一護は驚いた。

驚いた時には、妹紅に弾幕が被弾していた。

だが全く効いていないのか、妹紅は無傷だ。

「止めだ止めだ。霊力を持った人間でも、お前程度じゃあこの私に勝てるわけ訳ないだろうが」

「なに……っ？」

「何となく、お前の力を計測していたんだが、どうにも駄目だ。どれだけ見極めてみても、程度がしれている。正直、圧倒的な差で私の勝ちだ」

「どうやら、相手は長生きしているらしく、敵の力量差を測るのに長けているらしい。」

実際、一護は「人間時の状態」で多少の本気は出していた。それを憶測も踏まえて、何倍も読んでいたが、自分には到底及ばないと踏んだのだろう。

確かに、この状態で戦えば、彼女の言うとおりの一護の完敗で終わる。「分かるか？ 戦うだけ無駄なんだよ。仕方ないから見逃してやるよ。とつとと帰いな。雑魚をどれだけ潰しても意味はないし、変に労力を使うだけだからな。損した気にしかならないよ全く」

それを聞いた一護は、少し微笑んだ。

「戦闘中に出すような笑みでは無い。」

「何笑ってるんだ？」

普段から眉間に皺を寄せた人間の微笑んだ姿は、なかなか分かりやすい。

「あんた、優しいな」

一護は一言、そう言った。純粹に、心の底からそう思ったからだ。妹紅は予想外のセリフを吐かれて、少し困惑する。

「な、私が優しいだど!? お、お前、いきなり意味の分からん言葉を使うな！ まさか、私の心を惑わす作戦か!？」

「いや、率直に思ったんだよ。特に他意はねえ。だから、あんたと戦う理由はないし、お言葉に甘えて帰らせてもらうぜ」

「な……お、おい！ やっぱり今のは無しだ。最後まで付き合え！」

「……はい？」

急な妹紅のセリフ変わりに、一護はまごつく。

さつきまでは一護を殺すとか言い、やっぱり見逃すと言い、次はやっぱり戦えだ。うむ、混乱と言うより意味不明だ。

「だから、やっぱり最後まで戦えって言ってるんだよ！ 自分から言った事を曲げて悪いとは思ってるけどよ。お前は今までの刺客と違って、力は読めても、お前自身のこととが全く読めない。むしゃくしゃするだけだ。だから付き合え！」

悪びれたように言う妹紅。

やっぱりこの子は優しいと思う。

一護はなるべく妹紅とは戦いたくない。

だから今から逃走しようかと思っただが、致し方なく最後まで付き合うことにした。

「しゃあねえな。俺は戦いたくねえんだけど」

異変を解決？ した後には、あまり弾幕勝負はする気が起こらない。

入試テストが終わった直後に、また勉強をするのは嫌だろう。それと同じだ。

「心配すんな。一撃で終わらせてやるからよ」

妹紅が再度、霊力を纏う。

そんな考えを持つんなら、別に弾幕勝負を続けなくても良いのでは？ と思う一護だが、あえて口には出さない。

「……乗り気じゃねえが、仕方ねえか」

戦闘力には圧倒的な差があるが、一護はどこか余裕だ。

なぜなら切り札があるからだ。

一護は気だるそうに、代行証を取り出す。

瞬間、黒い霊圧が一護の身体を包んでいく。

徐々に黒い霊圧が形を成していき、死神の着る死覇装になる。

「……何だ……！ その姿は!？」

突然、黒い着物姿に変わった一護を見て驚く妹紅。

だが妹紅は黒い着物に驚いたのではなく、霊力が一気に上昇した事に驚いたのだ。

「……まさか」

妹紅は冷や汗を流しながら呟くように言う。

「どんだん霊力が上昇している。おいおい冗談だろ……ほぼ私と互角じゃないか……!?!」

急激な霊力の圧力に、妹紅は威圧される。

「ほら、行くぜ藤原妹紅。俺もラストスペルで行く」

お互い最後のスペルを唱えるようだ。

「面白い……」

妹紅は一護の霊力の上昇を確認して、闘志を燃やした。

「不死鳥の名を持つ鳥、ベンヌ、フェニキアクス、フェネクス、朱雀、鳳凰 今一つに成りて 我の前に立つ不道なる人間を断獄せよ！」

『フェニックス再誕』！

妹紅が符名の付かないスペルを唱えた。

一護は不道という単語の意味を理解しているが、なぜ自分が不道なる人間か理解できなかった。まあそのへんは、祝詞の問題だろう。

火の鳥が妹紅の周りに何体も現れると、全ての火の鳥が融合した。融合した姿は、普通の火の鳥の大きさと何ら変わらない。大きさは人間10人分程度。なぜ大きくならないのかは、理由は簡単だ。融合した力を広げるのではなく、凝縮したからだ。よって、一撃の力は本来より桁違いだ。

一護も続けてスペルを唱える。

「黒斬『月牙天衝』！」

一護の右腕の霊圧に凄まじい霊圧が溜まる。

「不寐ながら一つ聞く、黒崎一護」

「何だ？」

「何故、私を優しい人間と思った？」

それを言われた一護は少し黙った末、答えた。

「俺がお前の事を優しい人間だと思ったからだ。別にそんな深い理由はねえ……よ！」

答えると同時に、一護は月牙天衝を放った。

答えを聞いた妹紅は一瞬目を見開き、少し微笑んだ。

そして妹紅は……

「そうかよー」

妹紅も迫り来る月牙に向かって炎の鳥を放つ。

両者が激突すると凄まじい轟音と、大地を轟かす程の揺れが起きた。

(そうだ……フランのあだ名……)

月牙と炎の鳥が激突した瞬間、一護はフランのあだ名が思い浮かんだ。

緊迫した状況なのに、一護はゆっくりとフランのあだ名を口に出す。

「フランのあだ名は——」

あだ名を言おうとした瞬間、月牙と炎の鳥が大爆発を起こした。

その衝撃はウルキオラの黒虚閃と一護の月牙天衝と同等か、それ以上だった。

言うまでもなく、衝撃により、両者は吹っ飛んでしまった。

そして言うまでもなく、衝撃によりフランのあだ名を一護は、忘却の彼方まで飛ばしてしまったのだった。

こうして一護の一夜が幕を閉じたのだった。

【番外編『一護の女難の相』】

「ふむ、本当に面白いわね黒崎一護君」

とある朝、一護は急に八雲紫の屋敷に呼ばれたので、スキマを使い軽々と部屋まで移動した。

そして座敷に通されると、早速、意味理解できない発言をされたのだ。

「何ですか紫さん。いきなり呼びつけて」

「何やら一護君から禍いの相を感じたので、ちよつとここまで足を運んでもらったんだけど、案の定、正解だったようね」

「禍の相？ えっと、つまりそれは、どういう禍なんですか？」

「一言で言うところ——女難の相ね」

「じよ、女難？」

「ええ、文字通り女性に対して、災いばかり起きることよ。しかも、この度垣間見えたのは、かなりのものね。主にラッキースケベな」
「ラ、ラッキースケベ？ つうか、俺はそれを聞いて、どうすればいいんですか？」

「行動を控えることね。まあ今日だけだと思うし。ちなみにちよつと動いたら、女難的な展開が待っているわよ。一護くんてきにも、そんなことになるのは嫌でしょ？ あら、けど青少年からしたら、もしかしたら天国のような日にちかもね」

「よく分からないが、つまり余計な行動は控えろってことですね」

「いいえ、文字通り……動かない、ということよ」
「……………」

えつと、つまり今日一日、何もするなⅡ微動だにするなど言うことだろうか？ 悪いが一護も、そこまで暇ではない。

「はあく、紫さん。忠告はともありがたいけど、考えすぎだぜそれは」

「あら、信じてくれないの？」

「信じないってわけじゃないけど。流石にそれは言い過ぎだと思うだよ」

「ならいいわ。実際に、体験してみたほうが、こちらとしても面白そうだし」

「……そんじゃ俺は帰るぜ」
「ええ」

何やら最後の方に、紫がとんでもないことを言ったような気がしたが、気にせず一護はスキマを通り、博麗神社まで帰ったのだった。

博麗神社に帰った一護は、まず自分の部屋に戻った。

朝、寝起きを狙ったようなタイミングで現れたため、布団の片付けなどが済んでいないのだ。

「さて、とりあえず一通り済ませて、まずは風呂場の自分の昨日の着替えだけでも自分で処理するか」

片付けを済ませている時に、まあ正直道でも良かった紫の話など、頭の片隅へと追いやっていた。

とりあえず風呂場に行つて、洗濯カゴにあるものを回収しに向かう。その最中、霊夢が見当たらないところを見るに、朝食の支度でもしているのだろうか、勝手に憶測を立てた。

ガララと、一護は更衣室前に着くと、無造作に戸を開けたのだ。同時になぜか、更衣室の向こうにある風呂場の戸まで、同じガララと言う音を立てて開いた。

「——!!」

そこには、いつもののリボンを解いたロングヘアの黒髪に、全身つるつぺた（つまり素っ裸）の博麗神社の主——博麗霊夢がいた。

流れる沈黙に、見つめ合う瞳。

霊夢は言葉を失っているのか、右手で胸を隠し、左手でおへその下を隠した。

「こ、この……ヘン、ヘンタイ……!」

ブワワツと、凄まじい霊力を込める霊夢を見て、一護は咄嗟に焦りきった頭と行動でアクションを起こしてしまった。

「ち、違う! 誤解だ霊夢! 俺はただ洗濯ものを!!」

直ぐそこにあつた適当な洗濯カゴに手をつ込み、両手で握って取り出したそれは……

「あ、あ……」

まさしく絶句した。

そこには下着がひらりと、がっちり握られていたのだ。どこで買ったのだろうか、可愛らしい花柄のパンティーだった。

ああ、そうかと、ここで一護は理解した。自分は間違えて、霊夢の着替えていたカゴに手をつ込んでいたのだと。

「~~~~~この、一度、死んでこい!!」

瞬間、怒りに満ちた凄まじい霊力が放たれて、一護は文字通り吹っ飛んだのだった。

「たく、酷い目にあつた」

まさかベターな女難の展開があるなんて思いもしなかったのだ。

それについてと言わんばかりに、一護は罰として朝飯抜きの、人里への買い出しだった。とりあえず一護は朝早くから、人里へと赴い

た。

「ついでに、適当にうろつくか」

久しぶりに学び舎にでも顔を出すかと思った一護は、そちらの方に歩を進めた。

「……………なにしてるんだ、お前ら」

そして目に映ったのは、学び舎の廊下にいる男子諸君だった。

学び舎は簡素な作りになっている。玄関を入れれば、少し長い廊下。そして奥に一つの教室があるだけである。その廊下に、なぜか体操服姿の男子が全員いた。

一護が来るやいなや、男子全員は、まるで声を抑えるようにして一護の名前を呼んだ。

「いちご先生、お久しぶりです」「おひさー」「おはような」「おっす、いちご先生」などなど。

一護は何度か学び舎に顔を出したが、それだけで人気者となってしまうのだ。今では先生などとも呼ばれている。

「何だよ、お前ら。何で体操服なんて着て？　そもそも幻想郷に体操服ってなかったよな？」

「うん、慧音先生が作ってくれたんだ。あ、そういえば慧音先生が会いたがってたよ」

「そうそう。あ、中にいるから挨拶していったらどう？」

「そうだな」

と、一護は教室の扉を平然と、考えもなしに開け放ってしまった。

なぜ考えなかったのか？　男子全員が、しかも体操服姿で廊下にいるということ。そんな簡単な答えを導き出せるというのに。

「……………」

今日、二度目の絶句。

そこには小さな女の子達が、体操服に着替えている。そして、その小さな蕾たちの中に、咲き誇った一輪の花……上白沢慧音が下着姿でジャージのようなものに手をかけていた。

「な、なぜ、一護君、君が、ここに……………」

流石の慧音も呆然。

他の女の子たちも啞然。

一護は慧音の姿に赤面。そして何とか弁解の言葉を並べる。

「あ、あの、これは誤解で、その、まさか着替えてるなんて思わず……」
そんな一護の言葉を聞き、慧音は冷静に――

「とりあえず扉を閉めて、今は出てくれないか？　今、女の子たちと、わたしは着替え中なので、な」

「え、あ、はい。すみませんでした！」

バンと、一護は教室の戸を閉めた。

とたん爆発したかのように、女生徒たちの悲鳴が木霊したのは言うまでもなかった。

そしてこれが、男子生徒諸君の策略とは、簡単に思い知ったのだった。

「これで二度目か……」

とりあえず一護はみんなに謝罪し、学び舎を後にした。

女難の相……確かにあながち間違いではないのかもしれない。つか洒落にならない。

早く買い物をして、家でゆっくりしようと思った一護は素早く買い物を買わせていくも……

「悪いな旦那。こいつはもう品切れなんだよ。使っている素材が、魔法の森から取れるもので、なかなか出回ってこないんだ」

調味料を購入する時の、行きつけに行っただが、どうやら在庫切れだったらしい。

ここは仕方がないので、帰ろうかと思ったが今回は朝にやらかしているため、下手に買って帰らなかつたら何を言われるか、分かったものではない。

「しようがねえ。悪い親父さん。その素材、今から魔法の森に取りに行くから、この調味料、作ってくれねえか？」

「ああ、そいつは構わねえが、大丈夫か？　あそこは危険だぜ」

「心配すんなよ。こう見えても、色んな異変を解決してきているからな」

そう言って、一護は店主から素材の形などを聞き、早速魔法の森に向かったのだった。

魔法の森……禍々しい妖気で溢れており、人間はおろか妖怪ですら近づかない場所。確かに普通の人間が迷い込めば、たまったものではない。

一護はそんな謎の森を一人散策する。

「えっと、こんな形のキノコか。そういったことなら、魔理沙の方が詳しくそうだな」

店主が描いてくれたキノコの絵と、特徴を見ながら、道に生えているキノコを探していくも、なかなか見つからない。

「これじゃあ、本当に日が暮れそうだな。魔理沙の家に行くのがてつとり——うおっ！」

何かのツタに足が引っかかり、そのまま転んでしまった。

しかもベストな場所に謎のキノコが生えていたらしく、倒れる際に齧り、少し飲み込んでしまった。

「くっ、何か食っちゃ、まった……」

瞬間、変なものを食ってしまったせいか、いきなり体に異変を感じた。

なぜだろう、視界がどんどん下、いや、周りが大きくなったように、身体が、縮んでいった。

「……………え？」

空気の振動を、常に髭先で感じ、暗い闇の中もはつきりと視える。

何だ、一体どうなったんだろう……一護は己の足を舐めた。

「??」

なぜ、自分はそんなことをしたのだろうか？

一護は己の毛むくじやらの手を見た。次いで、己の後足とよく動く可愛いオレンジ色の尻尾を見た。

「……………な、なんだと!？」

そう、一護はオレンジ色の猫になっていたのだ。

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイと、一護は心の中で焦り散らす。このままだと神社にも帰れない。下手をすれば、妖怪に喰われる危険性まである。

「おや、こんなところに子猫」

すると、聞き覚えのある声が、森の中から現れた。

それは魔法の森に住む魔法使いのアリス・マーガトロイドだ。

「お、迷い猫か。こんなところまで来るなんて珍しいな」

そして、その後ろから霧雨魔理沙まで現れた。

「小さいわね。たぶん、まだ生まれただばかりの子猫よ」

「子猫が、こんなところに迷い込んで息絶えてないなんてな。すげー生命力だぜ」

「確かに」

一護はとりあえず意思疎通が出来るか試みるために、小さな口を開く。

「みや、みや、みゃー」

ダメだった、人間語が全く話せなかった。

「だいぶ興奮しているわね」

「まあ、こんあ物騒なところに一匹だもんな。とりあえず連れて帰るか。流石に見捨てるのは目覚めが悪いぜ」

「そうね、野良猫だし。ちゃんと体を洗ってあげなきゃね」

「みや、みや、みゃー」

そのまま力なく、一護（子猫）はアリスの家に連れて行かれたのだった。

そして着いた途端、いきなり風呂場まで運ばれた。そして、予想通りの展開が起きる。

アリスと魔理沙が脱ぎだしたのだ。一護（子猫）は透かさず目をそらし、隙を見て逃げ出そうとするも、軽く捕まった。

「だいぶ怯えてるわね。水が怖いのかしら？」

（違う！ まずい、マジでまずいんだよ、この状況！）

すっぽんぽんとなった二人に抱えられ、一護（子猫）は風呂の中へ。こうしてよく見てみると、魔理沙の体はまだ青い果実を思わせる。

同時にアリスは熟したような、豊満なボディだった。

（つて、俺はなに見てるんだよ!?!）

アリスが優しく、適温な水を被せる。

濡れるのは、確かに嫌だった。何か、体が重くなり、へばりつくよ

うな気持ち悪さがあったから。

「きもちいいか」

と、魔理沙が首筋を撫でる。

それだけで、一護（子猫）のドキドキは絶頂へいきそうになった。

「あ、尻尾がめろめろになってる可愛いわね」

アリスが優しく、尻尾から背までなぞるように撫でる。

（くくくやばい。マジで、ヤバイ!!）

「このあたりも、よく洗わねえとな」

と、一護（子猫）の肉球をプニプニ触る魔理沙。

「そうね。とりあえず、ちゃんと洗って、後は……」

（ま、まておい……おっ）

いきなり天井が近くなった一護。尻が風呂の床に触れた。

「……………」

一護は自分の手を見た。

それは人間の手。そして風呂場にある鏡を見ると、そこにはちゃんと一護の姿があった。

「も、戻った……。やった、戻ったぜ！」

喜んだ一護も束の間、ようやく自分が置かれている状況が理解できた。

自分を見つめる魔理沙とアリスは、しばらく硬直としており、一瞬で愕然の表情に変貌する。

「うあああ……………」

「きやああ……………」

一護は二人の悲鳴を聞きながら思った。

「これも、女難……………」

そして一護はそのまま風呂場から叩き出されたのだった。

*

「くそ、酷い目にあった」

一護はあの後、逃げるようにアリスの家から出ると、魔法の森を彷徨っていた。余談だが、猫にはなっていた服も一緒に同化していた為、よくあるスツポンポン状態ではなかった。

「何で調味料の素を手に入れるだけなのに、こんな苦勞してんだ俺？」
おかしいだろ？ ちよつとした異変を解決した時くらいに疲れがあるぞと、呟く。

「とりあえず調味料は諦めるか。これ以上ここにいと、また面倒なことが起きそうだ」

さあ帰ろうと思つた直後に、あることを思い出した。

「そうだ、確か目当ての調味料、幽々子さんの家にあつたな」

西行寺家に行った時、確かに見た記憶がある。

ここは少しでも希望を込めて、一護は決心した。

「じゃあねえ、少し貰いに行くか」

油断大敵、傲慢不敵、直ぐ行つて頂戴するだけだから、女難も大丈夫だと一護は考え、白玉楼に向かつたのだつた。

——数十分後、一護は西行寺家へと到着した。

相変わらず庭は隅々まで手入れが行き届いており、神社の掃除をする一護からすれば感嘆ものだ。

ここは庭師である魂魄妖夢を褒めるべきであろう。うちの神社にも是非いらしてほしい逸材だ。

「と、感心してる場合じゃなかつたな。早く目的の物を貰わねえと、霊夢になんて言われるか」

朝にとんでもないことをやらかしているから、これ以上買い出しを遅れさせれば激憤は免れない。

一護は「おじやましまさず、妖夢、いるか？」と、玄関を開けて言い放つた。

ここは家主である幽々子に一声かけるのが礼儀なのだろうが、正直なところ彼女にそこまで気を使う必要はないだろう。

そも台所の管理をしているのは確実に妖夢なので、彼女に言っておけば万事OKだ。

そして、とことこと歩いてくる一人の女性が、やって来た。

「あら、一護ちゃんじゃない、どうしたの？」

のんびりとした調子で、家主である幽々子が現れた。

「あ、幽々子さん、こんにちわ。悪い、妖夢はいますか？」

「あらあら、妖夢に御用なの？ 私には御用はないの〜？」
「えっと、はい、そうですね」

正味な話、幽々子に調味料の場所を聞いても分からないだろう。ま
ず幽々子が台所に立つ姿を、一護は想像できない。

「そう、そういうわけね。遂に来るべき日が、来たというね」

何か含みがある笑みを零しながら、幽々子は上がってと招く。

一護は何か、不吉な予感を蟠せながら、上がったのだった。

「妖夢く、一護ちゃんが会いに来たわよ〜」

と、居間に連れて行かれると、妖夢は居間の掃除に勤しんでいた。

「あら、黒崎さん。お久しぶりです」

「ああ。久しぶり」

この常識外れの幻想郷で、しかも性格がおかしい者が沢山いる中、
妖夢はまともな人だと一護が太鼓判を押す人物である。

「うふふ〜、妖夢、ようやくこの日が来たわね。私は待っていたのよ」

ふらふら〜と、幽々子が妖夢の背後に回り、両肩に手を添える。

「え、えっと、待っていたというのは何のことでしょうか？」

妖夢は訳も分からず、じやつかん困惑する。

すると幽々子がとんでもないことを言い放った。

「二人の結婚についてでしょ？」

瞬間、場が凍った。

何を、一体どのようなように頭の歯車を回せばそうなるのか、逆に聞いて
みたい。

妖夢は分かりやすく顔を真っ赤にさせると、

「なっ！ 何をおっしゃっているのですか幽々子様!?! け、けけけ結
婚などと、そ、そのようなことは一切——」

冷静沈着、普段はクールな妖夢が凄まじく動揺している。

それは一護も同じで、

「たく、何言ってるんだよあんたは？ 俺はそういう話をしに……」

「あはは、何か凶星を突かれた感じだよお二人さん」

と、嫌な笑みを浮かべる幽々子。

「それに妖夢はね〜、それっ！」

と、幽々子は背後から妖夢の小さく膨らんでいる胸を、豪快に驚掴みにした。

「ひううううううっ!？」

「ぶううッ!？」

妖夢の声にならない悲鳴と、一護は驚愕の声を上げる。

「ほらほら、この幼さの残っている可愛らしい妖夢のおっぱい。小さいながらも柔らかさはしっかり兼ね備え、尚且つまだまだ成長するであろうこの、おっぱい! しかもクールなキャラと相まって、何と違うかこの背徳感にも似た気持ちだが、どこか興奮を覚えさせる。たまらないでしょ?」

「な、ななな何をするんですか幽々子様!? は、離して、キャウツ!」

「ええやんけ、ええやないの、減るものじゃないでしょ」

「そ、そういう問題ではなく、て……!」

もみもみと、幽々子が優しく、そして胸の膨らみを服の上からでも分かるように素晴らしいテクニクで揉んでいる。

「ほらほら、いいのよ、気持ちのいい声を出しても」

「あつ、くっ……ひうっ、そ、そんな風に触らないで、ください……」

「あらあら、そんな艶かしい声を出しちゃって……一護ちゃんも触ってみる?」

「さ、ささささ触りません! つかいい加減離してやれよ!」

一護は赤面させ、なるべく見ないようにする。

しかし、どうしても妖夢の艶やかな声が聞こえてくるので、いたたまれない。

「んっ、あつ、ああああ……あくう、だ、ダメです……これ以上は……!」

「ごう? ごうかな? ごうがいいのかな?」

さながら喘ぎ声。

これ以上ここにしていると一護の頭が破裂、というよりも理性が吹っ飛びそうになったので、その場から逃げるように去った。

「し、失礼しましたー!!」

こうして一護はまた、女難が働き調味料を手に入れることができない

かった。

「駄目だ。もう疲れた」

一護は空の上を歩きながら、疲れ果てていた。

「もう、こうなったら調味料は諦めるか。また別の場所に行っても、何かあるだろうし……」

霊夢には怒られるだろうが、これも仕方のないこと。

世の中、諦めも肝心だ。

そう思った刹那である。

「あら、黒崎さんではないですか？」

そこで一護は、買い物帰りなのか買い物籠を持った十六夜咲夜と出会った。

「咲夜さん。買い物の帰りですか？」

「左様です。そういう黒崎さんはどこかに行く途中ですか？」

「はい。と言うよりも帰るところかな。とある調味料がなくて、諦めたところなんだ」

「調味料でございますか？」

そこで一護は軽く、例の調味料の事を言う。
すると……

「それでしたら紅魔館にありますので、よろしければお分け致しますよ」

咲夜が優しく、そう言ってくれた。

「……………」

一護としては有難いことこの上ないのだが、現状、素直に喜んでいられない。

この女難と言う力は、どうにも容赦なく襲って来るので、何が起るか予測できない。しかも紅魔館は全員、女。これ以上なく打って付けの場所である。

だが、相手の好意を無碍に断るわけにもいかず、

「あ、ありがとうございます。じゃあ、今から頂きに行きます」

そんな訳で一護は、咲夜と一緒に紅魔館に向かったのだった。

紅魔館に到着すると、相変わらず門番である美鈴は起きているのか

寝ているのか分からない状態である。

咲夜は溜息をつくも、特に何をするでもなく館の中に案内された。「さて、では早速お渡ししたいのですが、少々汗臭いですよ黒崎さん。まずはシャワーをお貸ししますので、一度汗を流されてはいかがですか?」

「え、いえいえ、そんなことは……」

「入られては、いかがですか? そのような体臭を、館中に撒き散らされては迷惑ですのぞ」

「……はい」

浴場というくらいだ。女難が働いている故に、誰かいるのは必然だろうと一護は頭を抱える。

そんな訳で、嫌な予感がプンプンする浴場へのご案内された。

そして——場面変わって、一護は館の大浴場に入ったのだ。

「あら一護じゃない? どうしたの、うちの浴場に入ってくるなんて」
「いっちーだー!」

湯煙の先、そこには大きな湯船に浸かる二人の吸血鬼。

レミリアとフランがいたのだった。

「……何だ、良かった」

一護はここで少し安心する。

「いや、ちよつとな。外で咲夜と会って、調味料を分けてもらいに来んだ。まあ汗臭かったらしく、良かったらシャワーでも浴びろって言われたんだよ。だから好意に甘えたってわけだ」

軽く説明し、熱いシャワーを浴びる。

「へえー、そういうことだったのね。いきなり一護が入ってきたからビックリしたわよ」

「わーい! いっちー、お背中ながしてあげるー」

「いや、いいよ。俺も浴びたら、ちよつと浸かって疲れを落としたいから」

「ええー」

「また今度な」

そしてシャワーを浴びながら思う。

（良かった。これなら安心だ。二人はいわば、まだ子供。年齢はあれ
だけど、見た目は子供だから、そういう危険を感じない。もしこれが
パチュリーや美鈴さん、小悪魔だったら、結構危なかったかもな。だ
から、うん、これでいい。これでいいんだ。決して期待してた訳じゃ
ねえけど、これで正解なんだ）

浴び終え、一護は湯船に浸かる。

その時だった。

「あ、あれ、もしかして一護」

「て、え、え、パ、パチュリー！」

そこにはパチュリーが、大浴場に入ってきたのだ。

「そうよ。それにしても、何で館のお風呂に？」

「ああ、何か調味料を頂きに来たらしいわよ。お風呂はそのついで
だって」

と、レミリアが代弁する。

「うわあ、パチエはやっぱリツルツルほやほやプルンプルンだね」

フランがパチュリーのナイスボディを見ながら言い、一護は今日一
日の色んな臨界を突破したらしく……

「プ、プルン、プル、プル……ブ、ブハアアッ！」

ドバツと、さながら昔のアニメみたいに鼻血を噴出させ、湯船に撃
沈した。

「うわ、なに、お風呂が血の海みたいなんだけど？」

一護の血が流出し、お風呂のお湯がまさに血のようにおどろおどろ
しくなった。

「あらあら、折角の貴重な血液がもつたいない。まあいいわ、血風呂も
悪くないわね」

「うわ、いっちーおもしろーい」

「流石に私は入る気がしないわ。また後で、改めて入るわね」
と出て行くパチュリー。

「や、ちよつと頼むから、救出を、頼む……」

「ふうー、いいお湯ねフラン」

「はい、いっちーの血がきつとお湯をパワーアップしたんだよ」

一護の死にかけの助けも虚しくちった。

「くっ、こ、これが女難の相……恐るべしあぶぶぶぶぶ……」
そして血の海に沈んでいったのだった。

*

「あゝあ、だから私は動くなと言ったのに。ちゃんと言うことを聞かないから」

一護の本日の行動を、スキマより見ていた紫はどこか楽しそうに言った。

「まあこれはこれで面白かったし、次はグリムジョー辺りに女難の相が来ないかな」

何て言いながら、紫は今日一日のことを文あたりに話すのだった。

第六章 〈東方神信譚篇〉

第41斬【日常の中の非日常】

《1》

——太陽の光すら届かない、深く暗い森の中。

唯一、森林の無数の葉を掻い潜るように抜けている太陽の光のみが、辺りを照らしている。しかしそれすら届かぬところは、夜でもないのに漆黒の世界が彩られているのみである。

そのようなところを、一人の男が暗闇など意に介さず歩いていった。

男は黒い着物を着ており、よつて周囲の環境と相まって更に黒と言う色が強調されてしまう。もはや黒い影のようになってしまおうその男は、暗い森の中を行ったり来たりしては、キョロキョロと辺りを見回していた。

「こらあかんは」

見るからに分かるように男は、現在進行形で迷子になっていた。

実を言うと男は、ある人から自分の着ている黒い服を返しにもらいに行き、その帰りについてばりの用事があった妖怪の山にある神社に足を運んだ。現在はその帰りである。

だが運悪く、その妖怪の山を下っている時に「あら、ここさつきも通りはったな」と心底ガツガリしたように呟き、山の中を縦横無尽に歩き回っている。飛ばばいいじゃんって思う人も居るかもしれないが、そうは出来ない。

ここは妖怪の山……下手に飛行すれば、妖怪に見つかりかねない。妖怪の山にある神社は運良く妖怪に見つからずに、行くことが出来たが、帰りまではそう運良くいけるとは限らない。

「どないしよつかん？ やっぱここは、妖怪さんたちを撃退しながらも飛んで帰るのが懸命なんかなあ」

男が立ち止まり、一旦頭をフル回転に活用する事にした。動き回ったところで活路を開く事は不可能だと悟ったのだ。

ここはゆつくり考えて……

——そんな時だった。

パシャリッ!

不意に閃光が走ったかと思うと、シャッターを切る音が男に耳に入った。

「あやや、妖怪と思えば貴方、人間じゃないですか?」

男の前方から、一人の少女が空から舞い降りてきた。背中には鴉のような双翼が生えている。片手にはカメラを持っており、赤い山伏風の帽子がポンと乗っている。

そう、この少女は一年前に一護の偽りの情報を幻想郷中に晒した張本人——射命丸文だ。

「そない言う君は妖怪みたいやな」

男は少女を舐めるように見る。いやらしいとかそんな眼ではなく、何かを観察しているように見えた。

文は蛇のような男の瞳に、一瞬背筋に悪寒が走った。まるで巨大な大蛇の餌が自分かのような錯覚さえ覚える。

「……貴方に忠告しておくわよ。知つての通り此処は妖怪の山。下手に興味本意で入り込まない方がいいわよ?」

男の蛇のような視線が消えると、文は一応忠告しておいた。蛇のような瞳を持つても、相手は人間であると言う事には変わらない。

「そんなん解つとるよ。ただボク、今迷子やねん。すんませんけど、どっち行ったらこの山から出れるか、教えてくれへん?」

男は丁寧と言う割には、その裏別の何かを考えているような口調で言う。文はこの男を少し危険視した。

「分かりました。ここで見捨ててあなたが妖怪に食われたなんて話が入っては、流石に目覚めが悪いですからね。私がいい妖怪で良かったですね」

文は一拍おき、一つ質問した。

「ではお名前を聞かせていただいても宜しいですか?」

文は慎重に聞く。ただし慎重にしていないように男に気付かれなないように。

この先何に使うか分からないが、一応写真も撮っている。あの時、

男の不意を突いた時の一枚が。

「ええよ」

男は一切表情を変えず、

「ボクは——」

そして男は名乗った。

文はその名を聞いてもこれと言って反応しなかったが、その名前はある人物が聞くと驚愕の瞳に変わってしまうような人名とも知らずに。

*

朝——博麗神社は今日も快調に参拝客もいらっしやらずに平和だ。そんな事を思いながら、オレンジ髪が特徴的な神社の居候である黒崎一護は、境内の掃き掃除に精を出している。

永夜異変が解決してから約一ヶ月。何の異変も起きず、争いも特になかった。唯一、一護が知る中での激しい争いはウルキオラとグリムジョーだ。紫がウルキオラの事を言った瞬間、数分後再び迷いの竹林で凄まじい喧嘩（ただし一方的にグリムジョーの攻撃で）が発生した。まあそれも、直ぐにウルキオラがグリムジョーを軽くあしらひ、終わりを告げたが。

「はあ〜」

一護は不幸でも寄ってきそうな溜め息をつく。

幻想郷の季節は秋に入った。外の世界と違い都市が無く、自然が破壊されずにいる。お陰で綺麗な紅葉が何時でも何処でも見れる。

だが、それとは裏腹に秋の次は冬。山の木に生えている葉が散る季節だ。

つまりその大量の落ち葉を、一護が掃除しなければならぬ未来が待っているのだ。

「不幸だ」

なんて事を呟いてしまった。まるで落ち葉のような哀愁を漂わせる声で。

「不幸だと思っただったら、少しは博麗神社の信仰心を人里で集めてきたら？ 少しは幸が寄ってくるんじゃない？」

一護の言葉を聞き取ったのか、博麗神社の神主であらせられる博麗霊夢が一護の背後に現れた。何の気配も感じずに背後に立たれたので、一護は声を出して驚く。

「な、何だよ急に信仰心って？」

一護は振り向き様に霊夢に言う。急に信仰心を集めてきたらと言われても、そんな物集めれるはずが無い。てか、一護の不幸の理由と信仰心は全く関係ない。

「いえ、ただ言ってみただけよ。それに少しは幸運な人間になりたいのなら、ため息や暗いことなんて言わずに、笑顔で鼻歌でも歌いながら掃除でもしたら？ 何事も気からよ」

「そうだな。確かに一理ある。うんじゃあ、少し気分良くいつてみるか」

適当な鼻歌を歌いながら清掃する一護。

「……いきなり水を差すようで悪いけど、はいこれ」

と、霊夢は買い物籠を一護に渡す。

「買い出し頼めるかしら？」

「別に構わねえけど。その替わり掃き掃除の続きは任せたぜ。あそこから、ここまでは終わらせたから」

「ええ、分かったわ」

そして一護が早速向かおうとした瞬間……

「あ、そうだ一護。あんた、今日、何か食べたいものある？」

「は？ 何だよ急に」

「いいから、言いなさいよ」

と、霊夢が語感を強めて、まるで言葉だけが迫ってくる勢いを持って言ったので、一護は素直に答える。

「そ、そうだな。旬に入った栗ご飯とか、かぼちやの煮付けとか……」

「うん、分かったわ。じゃあ、それを作るための食材を買ってきて」

「え、俺の食いたいもんでいいのか？」

「そういうことよ。ほら……少しは幸が寄ってきたでしょ？」

「幸、ね。まあ、確かにそうだな」

「分かったら早く行きなさい」

「ああ」

そして一護は、人里へと向かった。

*

幻想郷には妖怪の山という山がある。

文字通り、妖怪のみが住み着いており、一つの社会が完成した国と
いっても良いだろう。

山の妖怪は幻想郷のどの種族よりも陽気で仲間意識も高く、豊かな
生活を送っているという。ただ、仲間意識の高さから、余所者に対す
る風当たりは強く、山の侵入者に対しては、相手が何であれ全力で追
い返されてしまう。特に天狗は、味方がやられると確実に敵対姿勢を
取る。他の妖怪に無い特徴である。

そのような場所に、神社が建っている。

博麗神社より栄えているのか、外観もどこか立派だ。

そこから、一人の少女が出てきた。

「それじゃあ任せたわよ早苗」

どこからか放たれた声に、早苗と言う少女は「はい！」と元気な返
事を返し、そのまま何処かへ飛んでいった。

これが後に、異変の引き金になるとはまだ誰も気付いては居ない。

*

一護は現在、青空の中をゆっくりと歩いている。周りからしたら、
とても異様な光景だ。

これは一護の能力、“物質に宿る魂を操る程度の能力”。その能力
を使い、空气中に宿る魂を操り足場を作っている。これにより、空を
さながら大地を踏むかのように歩けるのだ。

周りを見渡すと、視界一杯に紅葉が映し出される。紅い山……普段
は緑の山を見慣れているから、紅い山はとても心を奪われる。美しく
華麗で激しい。しかしどこか儂さすら感じさせる光景である。

「……………」

不意に一護は自分の右腕に目を移した。

前からだが、とても異様な何かを感じる。最初は幻獄七夢卿のフレ
デリックとの戦いの時だ。止めの月牙を放とうとした瞬間、右腕に言

葉では表せない、とても妙な違和感を感じた。そして次はウルキオラとの戦いでだ。これも同じく月牙を放とうとした瞬間に、同じ違和感を感じた。最初は気にも留めなかったが、何故か最近気にするようになった。

これは何かの予兆かと思う。

(考えても仕方ねえか)

いくら考えても明確な答えは出ない。そんな訳で考えるのを止めた。

そして次に気になったのは博麗神社の事だ。

神社と言う物は神を祭っている祭神と言う神様が存在する。例えば伊勢神宮には天照大御神(内宮)と豊受大御神(外宮)、出雲大社には大国主大神、八坂神社には素戔嗚尊などが。日本は多神教だから。そこで一つ疑問が浮上するだろう。

——博麗神社の祭神は？

一護はまだ霊夢から博麗神社の祭神を聞いていない。いや、もしくは霊夢自身も祭神を知らないだろう。だから信仰も無く、賽銭箱が廃れていくのだ……と言う答えを一護は導き出した。

「祭神か……」

一護はそんな事を考えていると、少し博麗神社の祭神が何なのかが気になった。神社に戻ったら、調べてみるか。

「おーい、「一護お〜」

何て考えていると、後ろから自分を呼ぶ声が聞こえたので、振り返ってみた。

「あれ、魔理沙。おはよう」

そこには箒に跨って飛んでいる魔法少女・魔理沙がいたのだった。

*

その頃、博麗神社では……霊夢が一護の代わりに掃き掃除をしていた。巫女さんの掃除姿は中々様になる。

「何か、掃き掃除も久し振りね」

一護が現れてから、境内の掃き掃除はほとんど一護に任せていた。だから自分でする事はあまり無かった。久し振りにしたからか、かな

り面倒な掃除だと改めて思わされる。

しかし同時に一護からの出会いを振り返ると、自分は変わったのだろうかと思った。

様々な異変を解決する度に、色んな人間、妖怪などと人間関係が形成されたのだ。正直、一護がいなければ自分は限られた者としか相容れなかっただろうが、現在では吸血鬼や妖精など色んなモノたちと接している。一護に変えられたのかなと、霊夢は考えた。

「——ッ!?!」

瞬間、霊夢の頭に何かが突き刺さったかのような激痛が襲いかかった。

ズキズキと痛む脳髓に、迸るように何かが流れ込んでくる感覚。握っている筈が軋むくらい力入り、何とか片膝を付かず耐える。

すると、何やら妙な映像が視界に、さながら昔の記憶を映し出すかのように展開された。

『俺の愛する幻想郷と仲間たちのために、この神聖闘争は取るぞ。お前たちなんか引き継がせないし、取らせるわけにはいかないんだよ』

誰か、顔は分からないが、男が誰か複数であろう何かに言っている。すると、それだけで妙な幻影は閉じてしまった。同時に頭の痛みも止まり、妙な記憶だけを残したのだ。

「何なのよ今の……!?!」

訳が分からない刹那の時。

「へえー、やっぱり巫女らしい職務はしっかりと果たしているんですね」

突然、神社に一人の少女が現れた。

霊夢は参拝客か!?と思ったが、少女の姿を見てそれは無いと確信する。

胸の位置ほどまである緑のロングヘアーで、髪の毛の左側を一房髪留めでまとめ、前に垂らしている。頭には蛙と白蛇の髪飾りが付いている。霊夢と同じような巫女装束を着ている。巫女装束は霊夢の赤の部分に青にした感じだ。

この人は参拝客と言うより、同業者に見える。いや、同業者なのだろう。

「あんた、誰？ 信心深い参拝の人には見えないけど？」

霊夢は少女に視線をやり聞く。

「私は東風谷早苗。早速で申し訳ございませんが——この神社を営業停止にしてもらいに来ました」

満面な笑みで、何の不純すら感じさせずに、早苗という少女は、霊夢の度肝を抜く発言をしたのだった。

《2》

——一人の黒尽くめの女が、自然が生い茂る妖怪の山を歩いていった。

女は漆黒のマントを肩から足首まで掛けており、その上は黒い鍔広の帽子を被っている。お陰で顔がよく見えないが、腰にまで伸びた緑色混じりの黒髪だけが女性の姿を強く強調している。

見てはならない、近づいてはならない。

その女からは絶えず、人間だろうが妖怪だろうが感じてはならない危険信号を随時、無意識下で垂れ流しているような、恐怖と絶望が人間の姿を形成した悍ましさがある。

「フレデリックは生きていたのか……」

そして不意に、妖艶な微笑みを浮かべて呟いた。そのまま誰に言うでもなく続ける。

「けど、博麗の巫女……そしてアイツの息子に殺された、か。もしかしたら、フレデリックも本望だったのかもしれないわね。いや、救いを求めていたのかもしれないな”。まあ興味もないし、知る必要もないしね」

女性はゆつくりとした足取りで、森を歩く。

異常という存在が、森をスキップでもするかのように闊歩する中、更なる異常が女性の歩いてきた軌跡に転がっていた。

——山のような数の妖怪が、屍骸となっていた。

様々な種族の妖怪が色々な猟奇的殺害をされている。周りの紅葉

の森が、更なる紅い血に染められている。

首だけ刎ねられている妖怪なら、充分死体としてはまだ形になっているが、バラバラや肉片挽肉など、見るに耐えない死体は、死体では無いと錯覚すらしてしまう。普通に生活する人間が見れば、失神は間違えないだろう。

そんな中、女性は死体など一切気にせず、空を仰ぎ見た。

「あく会いたい。フレデリックを負かした博麗の巫女と、黒崎一護に」快感を求めるように、天に向かって両手を仰ぐ女性。それはフランや虚化一護とは違う、異質の狂気を放っている。女性の後ろには大洪水でも起きたような、血の海。まるでそんな屍骸はどうでもいいように、今の彼女の目にあるのは博麗の巫女と黒崎一護だけだ。

後に、この事件が幕で大異変が起こるとは、まだ誰も知らない。

*

秋空の中、たくさんの人や友好的な妖怪がいる人里で、一護は頼まれていた買い物を済ませていた。

その横にはさつき来る途中に会った……

「そっぴやさ一護。私のあの黒い着物が取られちゃったんだ」

一護の隣には、魔法使いのような格好をした霧雨魔理沙が立っていた。魔理沙はいつものテンションで変わらず、一護に話しかける。

「黒い着物……ああ、あれか」

黒い着物は恐らく死覇装の事だろう。時たま、あの格好でよく博麗神社に現れたりしていた。

一護はどうでも良さそうに、

「誰に取られたんだ？ 随分な物好きだろ。あんな地味な着物を取るなんて」

今まで着ていたが、思えばとても味気ない着物だったと思えてきた。

「取られたって言うより、買い取られたんだ。確か銀髪に細目で、変な話し方する男だった」

「銀髪に細目……何だよその見た目100%危険な人間」

ふと一護にある人物の顔が浮かんだが、首を横に振り否定した。

「つうか、死覇装のサイズは良かったのか？ お前のサイズに合わせてるように縮めていたんだろ？」

「それならアリスが修復したぜ」

「そうか……で、いくらで売ったんだ？」

「おいおい何だよその目は？ 心配しなくても、そんなに高く売ってないって」

「……なあ魔理沙、お前は俺と霊夢が出会う前から知り合いだったんだよな？」

一護が話の内容を変えた。

「まあな、急になんだよ？」

急に話の内容を変えられたにも関わらず、魔理沙は普通に対応する。

「いや、魔理沙は博麗神社の祭神って知ってるかと思ってる。何か知ってるか？」

人里に来る前に気になっていたことを聞いた。魔理沙が霊夢と長い付き合いなら、博麗神社の祭神について何か知っているのかも知れない。

だが、それ以前の問題だった。

「祭神って何だ？ 食い物か？」

終わっていた。中学の基本常識レベルの単語も知らない魔理沙に聞いたのが間違いだった。ってか外見は中学生？

「もういい、魔理沙に聞きいた俺が馬鹿だっただけの話だ」

「何だ一護、お前馬鹿なのか」

「……………」

頭を抱える一護。この話は止めよう。

「そういえば、前に一護に会いたって言ってたやつには会ってくれたか？」

次は魔理沙が話題を変える。

「誰にだよ。名前は？」

「稗田阿求って言う女の子にだよ。ほら、前に話したじゃん」

「稗田阿求……ああ、そういえば、お前がベロンベロンになっている

時、酔った勢いで言ってたな。ただの戯言だと思いついでたぜ」

「おいおい一護。例えば私は泥酔していても、真面目なことしか言わないぞ」

「……………」

何て戯言は無視して、一護は手で顎をさする。

「稗田家って言えば、あの有名な家系だよな。『幻想郷縁起』っていう書物を代々記している……………」

興味がなくとも、幻想郷に一年以上も住んでいれば、嫌でも耳にする稗田家。何でも『幻想郷縁起』と言う、幻想郷にいる妖怪なんかの能力や生態などを執筆しているらしい。

「他にも稗田家は千年前から転生を繰り返してるとか。…………何か複雑そうな家系だよな」

「幻想郷だからな。どんな家庭があっても不思議じゃないぜ。そう言えば、今まで聞いてなかったけど、一護はどんな家系というか、家庭環境だったんだ？」

「ごくごく一般的だと思うぜ。二人の妹がいて、うっせえ親父がいて。毎日、騒がしいくらい賑やかで。多分円満な方だと思うぜ家庭環境は。特筆して、何か言うことはねえな」

「へえ、妹がいるのか。やっぱあれか。最近流行りの妹萌え的な要素があつたりするのか？」

「何だよ妹萌えって……………」

「最近外の世界から流れ着く書物に、俺の妹が〜とか、新妹魔王の〜とか、妹様による〜とか、何か妹って単語を強調したタイトルが多くてさ。外の世界では、そういうの当たり前なのかなって思ってる」

「創作と現実を、同じにするなよ。妹好きとか、兄好きとか、ほとんどそういうのは空想……………」

何て言ってみたが、身近にいたような気がした。

ルキアと白哉は、相互的にそんな関係のような気が、しなくともなかった。

「なあ、一護は家族に早く会いたいか思わないのか？」

「そうだな、会いたくないって言ったら嘘になるけど。今は霊夢って

いう頼りになる家族がいるからな」
何て言ってみたのだった。

*

「きやあああああああ!!」

少女の喉がはち切れんばかりの悲鳴が……博麗神社から上がる。

その悲鳴はちやうど、一護と、ついでに魔理沙が帰ってきたところ
で上がったのだった。

「な、何だ!? 今のは霊夢の声か!」

「けっこう可愛い悲鳴あげるんだな」

一護と魔理沙は悲鳴のした、霊夢の自室へと駆けると……

「いやああ~~~~~!!」

瞬間、襖をブチ抜いて廊下にパンツ一枚の霊夢が飛び出してきた。

「うおおおおお!!」

目の前までやって来ていた一護と激突し、そのまま後ろに倒れる。

「うお、どうしたんだ霊夢。んな格好で。発情期か?」

「違うわよバカ! 出たのよ、あれ、あれ、ご、ご、ご、ご、ご……」

「後藤さんか?」

「誰よそれ!? あれよあれ!」

魔理沙の対応をやめ、霊夢は一護を下敷きにしたまま部屋の方を震
える指で差す。

指先を辿っていくと、カサカサと床を這う黒い塊が視界に入った。

「な、なんだ、ゴキブリか……」

一護は仰向け状態で、首を動かして部屋を見て言った。

「や、やめてえ! その名前は聞いただけでゾツとするのよー!」

一護の胸板を可愛い少女らしくドンドン叩きながら、嫌悪感を露に
する。

「早く、早く何とかしてよ!? 男でしょ!」

「いや、ならどいてくれよ。つか、放っておけばその内どこかいくん
じゃねえのか? いつも掃除はかかきずしてるしな。ゴキブリの餌
になるようなもんなんてないし」

「あんたバカなの!? アイツは水一滴、髪の毛一本でも餌になるのよ

！ 生半可なこと言わないですよ！」

「博麗の巫女で、尚且ついくつもの異変を解決している巫女が、たかが虫一匹にそこまでビビるなよ」

「うるちやい！ 苦手なものは苦手なのよ！ あああ、もうこうなつたら『夢想封印』で家ごと……！」

今の霊夢なら本当にやりかねない。

「まずい……魔理沙とりあえず、その筈……じゃ嫌だよな。とりあえず何かで叩き潰してくれ」

「へーい。んじゃ足で潰すか」

「バカーー!! そんなことしたら私の部屋が大惨事よ！ 穢れるじゃない！」

「……じゃあ、どうするんだよ？」

困り果てた一護だったが、ここで魔理沙がふと、あることを思いつき、そして取り出した。

「そういえば香霖堂で買って置いて放置しておいたぜ。こんな時の、こんなアイテムだ」

瞬間、どこから取り出したのだろうツツコミは置いておいて、スプレーの殺虫剤を手に持っていた。

「へへーん。こいつこそ最強の武器だぜ」

そしてスプレーを構えながら、もはや異界に見えてしまう地……ゴキが這う霊夢の部屋へと入る。

「にしてもデケエな。気持ち悪いのは確かだな。パツと見、カブトムシと間違えてもおおかしくなぜ」

「……確かに、大きいな」

一護もよくよく見る。

「今年は暑かったからな。もう秋だけど。異常成長してもおかしくなえよな」

「よっしゃ、一気にいくぜー！」

魔理沙はスプレーを噴射するも、ゴキブリはそれを難なく躲し、逆に先読みまでしてきた。そもゴキブリには気流を読み取る器官が備わっており、俊敏な動きで危険を回避する能力がある。

よって、スプレーの攻撃もなかなかどうして当たらない。
「やるな！ けど、まだまだだぜ！」

しかし魔理沙も魔法使い。
そのような科学的に語れる回避能力では、魔理沙の戦略を崩せない。

パキーンと、魔力の障壁をゴキブリが逃げる方へと張り、一気にスプレーでトドメを刺した。

床には腹を見せてピクピクと痙攣させる黒い塊があるのみ。

しかし……

「魔理沙、まだだ！」

「あ、あ、あ、きやああああああああああ!!!」

同朋の死に反応したのか、箆筒、押入れの隙間や裏から、隠れていたゴキブリが一齐に現れた。そのいずれも、先ほどと変わらぬ大きさを見せている。これは流石に一護も鳥肌だ。

「な、なによこいつら!? 博麗神社を乗っ取るつもりなの!？」

倒れている一護の状態に抱きつき、阿鼻叫喚の霊夢。

一匹見たら三十四匹はいる。ゴキブリの繁殖力と生命力は並大抵ではない。

しかし魔理沙はどこか楽しそうに……

「はっははー！ いいぜ、どんどん掛かってきやがれ！」

どんな状況でも戦かない。一瞬一瞬の動作が効率よく働き、スプレーを噴射し、一匹一匹確実に仕留めていく。害虫駆除業者にでもなれそうだ。

そして程なくして……

「よっしゃ全員片付けたぜ」

魔理沙が全てのゴキブリを駆除した。

「見事だな魔理沙。ほら、霊夢。もういなくなったぞ」

「ほ、本当……」

と、目をうるうるしながら後ろを振り向く。

そこには死骸すらなくなっている、いつもの部屋が目映った。

ようやく、死闘が終わったのだ。

そこで魔理沙が次いで、困ったように現状を言う。

「……あー、つうか霊夢、いつまで一護の上に、しかも下着一枚でいるんだ？ 傍目からは、けっこうヤバイ光景だぜ」

「え……」

そして次は、熱でも出したかのように顔が真っ赤になる霊夢。

下着一枚の霊夢が、倒れている一護の上に乗っかって、上体を抱き起こすようにしている。これは、一護も改めて危ないと思ったのか、目を背けるも、

「きゃあああああああ!!」

霊夢は、今日何度目になるのだろう悲鳴を上げて、片腕で胸を隠しながら、もう片手で一護を平手打ちしたのだった。

*

「……………」

ゴキブリ騒動から一段落終え、一護たちは居間でテーブルを囲っていた。

先の騒動で霊夢と一護は気まずそうだが、魔理沙は能天気そうに、「ふあー、にしても二人は付き合ってたりするの？」

「んな訳ないでしょー!」

魔理沙の発言に、全力否定した霊夢。

「そんな直ぐ否定すると、まるで凶星みたいだぜ。けど、もう一年以上も一緒に同じ屋根の下で生活してたら、普通そう思うぜ。逆に何も無いのがおかしいくらいだ」

「あんだね、なに変なこと言ってるのよ……!」

ブチブチと、眉間に青筋を立てる霊夢に、一護は内心ビビっていた。(……このまま魔理沙の弄舌が続くと、霊夢が切れて神社がドツカン。掃除と建て直しは……俺か)

などと、ちよつとベクトルがおかしい感じに、一護は苦悩していた。

「はあー、今はあんたをブチのめす気も起きないわ」

と、霊夢は呆れたのか、ため息をつく。

「お、どうしたんだよ霊夢？ いつもの霊夢らしくないな。心配すんなよ。またゴキブリが出てきたら、私が二度とでないようにする薬品

を作るって」

「別に、そんなことでどこまで悩まないわよ」

「悩み？ 何か困ってるのか？」

「どうやら霊夢には悩みがあるらしい。」

「霊夢はまるで何かに縛るような気持ちで、口を開いた。」

「一護が買い出しに行っている間に、お客さんが来たのよ」

「お客？ めずらしいな、誰だよ？」

博麗神社に来る人間or妖怪なんて限られている。主に魔理沙やチルノや萃香だ。

それ以外の客or参拝客なんて滅多に来る事が無い。

「客と言うより商売敵って言うところかしら……妖怪の山に一つの神社が建つたらしいのよ」

「神社？」

「ええ、その神社の巫女さんがご親切に挨拶しに、此処まで来てくれたんだけど、来た途端の発言が『この神社を営業停止にしてもらいに来ました』なんて言い出したのよね」

その台詞に一護と魔理沙は少し驚く。驚いている二人を無視し、霊夢は続けて言う。

「理由は——信仰心の無さだって」

*

処変わり、ある頃、とある小さな城に一人の男が、広い部屋の窓の縁に座っていた。そこからは青空や小さな森が見える。

彼は暇そうにその風景を眺め、どこか哀愁を漂わせた。

なぜ、どうして、それは本人にすら分からないだろう。このような感情、過去に投げ捨てたものだと思っていた。

彼……幻獄七夢卿の一人『刹蘭』は、目を閉じ、ゆっくりと窓の外から城の内部に顔を移す。

そこには一人の「誰か」が立っていた。

「刹蘭様、奴が動き出しました」

「誰か」が刹蘭に、とても漠然と無機質に報告する。

刹蘭はそんな話に興味ないのか、分かりやすく話を変え……

「この城の名前、知っているかい？」

急に話を変えられたことに、「誰か」は予想していたのか平然と対応する。

「はい。この城は西インド諸島のハイチ北部のラ・フェリエール山の頂にあるシタデル城でございます」

正確な場所と城の名前を、抑揚もなく、まるで機械的に言う「誰か」。

場所から分かるように此処は幻想郷ではなく、一護の住む外の世界……なのであろう。

「うん、よく知ってるね。感心感心」

刹蘭は問題を解けた子供を褒めるように言うと、微笑みながら続ける。

「それじゃあ、こんな逸話があるのを知ってるかい？ この城は元々黒人が建てた城で、城主は生前、自分の命令に従わない白人を次々と虐殺しては、近くの池にその死体を投げ込むと言うようなことを平然と行っていた……そんな事を」

「いえ、そこまでは承知しておりません」

「まあ知っている人は少ないしね。けど、話の面白味はここから先だね」

刹蘭は子供に絵本を読み聞かせるように、

「1952年に、この地を四人の人間が訪れたんだ。ジョゼフ・クルーゾーとその妻のマリー、それと二人の助手がね。四人は仕事でこの近辺を調査するために訪れたんだけど、仕事中、突然ジョゼフの気分が悪くなってしまったんだ。少し休んだ方が良いと思った四人は池のほとりに座って休憩を取ることにしたんだ。そして妻のマリーが『ジョゼフは私が見てるから、あなた達二人はちよつとその辺でも散歩してきたら？ お城の方を見物してきてもいいわよ』と言って、二人の助手はマリーの言葉に従い付近を散策する事にした。助手たちがしばらく歩いて池の方を振り返ってみると、マリーは夫の横に座ってはいるが、何か池の方をじっと見つめているようだった。『別に状況は変わってないみたいだ』そう思い直して、また二人は向きを変え

歩き始めようとした瞬間——」

刹蘭は自分の右手を、銃のように形作り、人差し指を「誰か」に向け……

「バン！ という銃声が後ろから響いた。びつくりして助手たちが振り返ってみると……マリーは、まだ「硝煙の立ち上る銃を手に持ったまま呆然と立ちすくんでいた」。助手たちはすぐにマリーの元へ駆けつけた。しかし、当のマリーは『私、ジョゼフを殺してしまった……殺してしまった……』と呟くばかり。だがよく見ると、目の前に横たわっている死体はジョゼフではないんだ。殺されたのは城の管理人のレオンという男だったんだ。しっかりと胸を撃ち抜かれて死んでいる」

刹蘭は窓の縁から立ち上がり、

「ここで謎が出来るよね。さつきまでそこで寝ていたジョゼフはどこへ消えてしまったのか？ そしてなぜ城の管理人であるレオンがここにいて、今、この場で死んでいるのか？」

「誰か」は刹蘭の話が無言で聞いている。

そんな「誰か」を見て、刹蘭はゆっくりと移動しながら続きを話す。

「マリーは勿論殺人の現行犯で逮捕された。だが、マリーに詳しく事情を聞いてみると、その話は全く理解に苦しむものであった。『あの時私は、じつと池の水を見つめていました。すると、池に映った私の顔がみるみる醜い男に変化したのです。そしてその醜い男は、いきなり池から出てきて私の首を絞めたのです。それから後のことは覚えていません。きつとジョゼフの持っていた銃をとっさに取って、その醜い男を撃ったんだと思います。私にもわけが分かりません。一体なぜ、こんなことになってしまったのか……』当のマリーも全く理解できていなかった」

刹蘭は城の中をゆっくり歩きながら、後ろの「誰か」は刹蘭の後をペースに合わせて歩く。

「ところで撃ち殺された、城の管理人レオンの方だけど、あの日、時計が午後二時を打った時、レオンの妻は、城の庭で草木の手入れをして

いる夫——レオンをはつきりと目撃している。マリーが池のほとりでレオンを射殺したのは午後二時五分。城と池は約二km離れている。徒歩五分で二kmの道を行けると思うかい？　しかも、二人の助手が、マリーとジョゼフの間を離れていたのは、ほんの一分か二分の間。不思議だよ、どうやってレオンは二kmの距離を五分で……しかもマリーに殺されに。そして何よりも奇妙なことは、ジョゼフは一体どこへ行ってしまったのかだ。警察も大がかりな捜索を行ったが、結局その姿は発見されず、行方不明ということになってしまった」

刹蘭は心底楽しそうに、

「それから半年後のある日、アメリカの調査団がこの城を訪れた。この調査団は、マリーの殺人事件とは無関係で、学術的な見地から、この城そのものを調べにきた調査団ね。調査団は城の中に入り、あれこれと調べているうちに、何十年も誰も入ったことのない地下牢の方へと調査が進んでいった」

いつの間にか城の外に出ていた二人だが、刹蘭の話はまだ続く。

「ある地下牢のカギを開けたところ、その中に一体の死体を発見した。調べてみると、それはなんと半年前に行方不明になったジョゼフの死体であった。死体は白骨化し、変わり果てた姿になっていたが、服や持ち物などからジョゼフであることが断定された。しかし、この地下牢は、何十年も開けられた形跡がなく、第一かけられたカギはすでに錆びついてしまっている。なぜこのような場所にジョゼフの死体があったのか。そして撃ち殺されたレオンは、どうやって五分で二kmもの道のりを移動したのだろうか。謎は今も解明されてはいないんだ」

ここで刹蘭の話は終わった。

「どうだい、面白い話だろ？　真相は暗雲の中で行方不明。行方不明……どこぞの誰かが好きそうな単語だ」

刹蘭は「誰か」と向き合う。

「おっと、話が長くなってしまったね。で、君の方はどうなんだい？」
再び楽しい口調に変わり、

「魔術結社・黄金の夜明けの創設者の一人——《薔薇十字》マクレガー・メイザース。君は私の最高の部下の一人だ。君の話の続きを聞こうか？」

*

そして処変わり、再び幻想郷・博麗神社へ——

「面倒くせえな。だったら、ちゃんと面と向かって話し合えよ。とりあえず今から、その守矢神社ってところに行こうぜ」

あれから霊夢の話聞き、一護はそう決断した。

霊夢の話の内容は簡単だ。信仰心の無い博麗神社を山の上におわす神様に譲渡しろとの事だった。そうする事で、今より必ず信仰心を集める事が出来るらしい。

それにより霊夢の心が揺らぎ、どうするか悩んでいたのだ。

けど一護の今の台詞に決心したのか……

「分かったわ。一護がそう言うのであれば、一度会いに行こうかしらね、その山の上の神様って奴に」

「よっしゃ。なら私も付いていくぜ」

そして熱くなっていたのだが……

「あのおく、こちらに黒崎一護様はいっらしやいますでしょうか？」

と言う、聞き慣れない少女の声が聞こえてきた。

誰だろ？　と思っただが、魔理沙が聞き覚えあつたらしく言った。

「お、この声。阿求だ」

「え？」

そして、守矢神社への決行はとある珍客により先送りになるのだった。

第42斬【阿求の話と山の神々】

《1》

妖怪の山——そこは妖怪が住まう一つの山。幻想郷で山と言ったら、だいたいの人は妖怪の山の事を指すことが多い。勿論、妖怪の山に人間が入るなんて事は許されない。仲間意識が高く、どこか閉鎖的な集団であるから。よって余所者は追い出される、なんてのは生易しい理由だ。下手をしたら喰い殺されるかもしれない。

そんな場所に、命を落としてもおかしくない危険極まらない地域に、三人の命知らずは飛んでいた。

妖怪の山の麓、そこを博麗霊夢、黒崎一護、霧雨魔理沙の三人はこの山にある守矢神社に向かっている。

季節が秋と言う事もあり、満開の紅葉が拝める。だが、無論のんびりと拝んでいる暇なんて無い。博麗神社の信仰心が無い事を理由に、山の上の神社が博麗神社を乗っ取ろうとしている守矢神社に……一護たちはそれを食い止めると言うより、純粋な話し合いで決着を付ける為に今から、その神社に行くのだ。

「……守矢神社、か」

一護は飛行しながら、と言うより己の能力で空に霊子を集約し、足場を形成し、空を駆けている。

「そこには二柱の祭神と、風を司る現人神の巫女が一人。今回は、相当難易度が高そうな話だな」

「ホント、あらかじめ阿求に聞いていて正解だったぜ。下手したら、私たちボコボコにされるレベルの相手だぜ。だって相手は正真正銘の神だもんな」

箒に跨り飛行する魔法少女は、前途に危惧しているがその裏腹には胸を高鳴らせているようにも思える。

「例え相手が神だろうと、私は決して博麗神社を譲渡したりなんかしないわ。もし相手方が喧嘩腰だったら、こっちも本気で挑むまでよ」

そんな魔理沙の言葉を聞いて、少し前を飛行する赤き巫女は力強く言葉を放った。

歴代の博麗の人間が守ってきた神社を、いきなり現れた訳の分らない連中に明け渡しては、こちらの立つ瀬がない。いや、そもそも根本的な話として、そんなもの固い矜持が絶対に許さないであろう。

「ああ、霊夢の言う通りだな。相手の話を聞く限り、筋が通ってねえ」

——数時間前。

霊夢と魔理沙、一護が囲むテーブルひとりの少女も追加されていた。

年齢は霊夢や魔理沙より年下のように思える、可愛らしい少女。若草色の長着に、上から黄色の着物を羽織っている。紫色の髪をセミロングに整え、大きな花の髪飾りをつけている。

彼女は稗田阿求。

代々、妖怪などを記した幻想郷縁起を執筆し転生を繰り返している摩訶不思議な家系。

「えっと、お初にお目にかかります。私、稗田阿求と申します」

どこかオロオロとした調子で名乗る阿求。

「阿求、そんな気まずそうにするなよ。自分の屋敷だと思って気楽にしていっていいぜ」

「それ、家主である私の台詞なんじゃない？」

魔理沙の発言に霊夢が突く。

「私のことは知っていると思うけど、礼儀として名乗っておくわね。私は博麗霊夢。よろしく」

「俺は黒崎一護。よろしくな稗田さん」

二人は名乗った。

それに対して、どこか言いたげに、しかし言いつらそうに何かを呟く。

「あ、あの、そのよろしければ、阿求で構わないです。呼び方は……さん付けもいいです」

「そうか。なら阿求って呼ぶぜ。っと、何か馴れ馴れしくないか？」

「い、いえそんなことないです！　ありがとうございます！　あ、その別に他意はありませんから」

「いや、別にそこまで気にしてないから。それに阿求って方が呼びや

すいしな。んじや、俺のことも一護って呼んでくれていいぜ。そっちの方が親しみやすいからな」

「えっと、承知、しました……一護さん」

頬を紅葉のように染める阿求は、どこか満足気である。

ヒエダノと言うより、アキュウの方が語感的にも言いやすい。同じく自分の名前もクロサキよりイチゴと呼ばれる方が簡単だろう……と言う一護のけったいな考えをした。

「私の時は最初から霊夢って呼んでたのに、随分と対応が違うわね」

霊夢が若干ジト目で一護を見ながら不満を放つ。

「え、あく何だ、その雰囲気じゃないか？ 霊夢と初めて会った時は、あんまり気を遣わなくても良さそうな感じだったからさ」

「あんた、かなり失礼なことを言うのね」

「それだけ気兼ねなく話せるってことだよ。変に心配りする必要もないしな」

「そ、そう、何かありがとう」

お礼を言うのか怒るところなのか判然としなかったが、結果お礼を言う霊夢。

そんな光景を阿求は、どこか羨望に満ちた瞳で見る。

「で、阿求は今日ここに何しに来たんだ？ 会いたがっていた一護のもとに訪ねてきた感じか？」

魔理沙が頬杖をつきながら、どこか落ち着きのない様子で言う。思うに、早く妖怪の山兼、守矢神社に行きたいのだろう。

「え、いえいえそんなわけではなくて！ その……」

魔理沙の言い回しがどこか恥ずかしかったのか、手をわたわたさせる阿求。

そして、この場にいるものの度肝を抜く言葉が放たれた。

「博麗神社の祭神について——お話ししたいことがあります」

——そして現在。

阿求の話を聞いた後に出発した御一行は、妖怪の山の麓でちょっとした異変に気づいた。

「……ん、何だ？」

三人が森の上を飛行している中、魔理沙が何かを嗅ぎ取った。鼻を犬みたいにくんくんさせている。

「何か焼き芋の香ばしい匂いがするぜ」

魔理沙は直ぐに犬並みの嗅覚で、一体何の匂いかを断定した。ただし一護と霊夢は、あまり嗅ぎ取れていないようだ。

「焼き芋って、お前よく嗅ぎ取れるな」

「おう。こう見えても人間以上の嗅覚は持つてるつもりだぜ。魔術の実験や薬の実験では嗅覚も大切だからな」

ちよつと真剣に感心する一護に、魔理沙はどこか喜々として答えた。

それとは対照的に霊夢は、呆れたように溜め息をつく。こんな危険な場所に居て、何を暢気な事を言っているんだ？ と心の中で呟いた。

「にしても焼き芋か。誰が焼いてるんだらうな？」

「ええ。それに食物繊維たっぷり焼き芋か。もし有るんなら、少し頂きたいわね」

「ああ、一口でパクリと食べてやりたいぜ」

何て、各々呑気な感想を口にした。

その時だ……

「——人間の癖に神様を喰べようなんて、笑止千万不届き千万！」

不意に、三人の前方に一人の少女が現れたと思うと、自らを猛々しく神と名乗った。

ボブの金髪に、瞳は赤。帽子は赤色の、唾が広い帽子。前面には立体的なブドウの飾りを付けている。服装は袖のふくらんだ黄色い上着に、上からはオレンジ色のエプロンを付けている。黒色ロングスカートに、首には黒い細チョーカーを付けている。靴や靴下を履いておらず、裸足の状態だ。

見た目は神様と言うより、年齢相応の少女のようだ。

「……神様？」

霊夢が小首を傾げて、もう一度尋ねる。

「そうよ、崇高な神様よ」

神様はぺったんこな胸を張って言う。あまり神様って感じがしない神様だ。

「その神様から美味しそうな匂いがするぜ」

クンクンと犬みたいに、匂いを嗅ぐ魔理沙。

「神様たる物、身に纏う香りも気をつけないと。あ、ちなみに私は豊穰の神ね」

付け足すように、自分が何の神様か言った。

豊穰の神なんて聞いたこと無い。

日本神話か北欧神話かマヤ神話に居たようなくと思いついて出すそうとする一護だが、全く思い出せなかった。

「え、つか本当に神様なのか？ 頭のちよつと痛い妖怪の子供とかじゃないのか？」

「本当っぽいわね。ちなみに神様なんて、この幻想郷にはたくさんいるわよ」

一護と霊夢が聞こえないように会話する。

実際、神様なんて言われてもピンと来ない一護だったが、とりあえず柔軟な考えを持って理解に努力した。

そして、ふとそこに……

「穰子、こんな所で何してるの？」

豊穰の神と名乗る少女の元に、似たような格好と顔立ちをした少女がやって来た。

ウェーブのかかったボブの金髪に、金眼の瞳。穰子とは対照的に、服装は細いシルエットをした赤い上着。その裾は、楓の葉を思わせるような形の切り欠きになっている。頭には3枚セットの楓の髪飾りが付いている。裸足ではなく、黒い靴を履いている。

「あ、お姉ちゃん。何しに来たの？」

豊穰の神が今やって来た少女に向かって、お姉ちゃんと言った。どうやら二人は姉妹のようだ。外見からすると双子だろうか。

「急に穰子が居なくなるから、捜しに来たんじゃない」

心配性なのか、姉がまるで子を叱る親のように言う。

魔理沙が「人探しならぬ、神探しだな」と下らない事を言っている

が、勿論誰も聞いていない。

「分かっているの穰子。今この山は、何が弾みで崩れるか分からない緊迫した状況なのよ」

姉が妹に説教しているが、聞き逃してはいけない台詞が混じっていた。

「緊迫した状況？」

一護が呟くように言った。

それが聞こえたのか、姉妹が一護の方を見据えてきた。

「えくと、あなた方は？」

姉が今さら、そんな事を聞いてきた。

もつと早く聞くべきでは？ と三人が同時に思う。

「見たら分かるでしょ。博麗の巫女と、その下僕の二人よ」

霊夢が一護と魔理沙を指差して言う。

下僕と言う言葉に魔理沙が「おい、今何て言った!？」って怒ろうとしたが、一護が「どーどー」と言い魔理沙を止め宥める。

「私は秋静葉。紅葉の神です」

「私も名乗ってなかったね。私は秋穰子」

姉妹揃って神様ときた。

とりあえず、遅れた自己紹介で二人の名前が判明した。

「で、早速で悪いけど何が緊迫した状況なんだ？」

再び一護が同じ事を聞く。

どうも気になって仕方ないのだ。

静葉が言おうか言わないか少し悩んだが、言う事にした。

「実は今朝、妖怪の山で沢山の妖怪が殺されたんです」

たったそれだけの言葉で、一護だけではなく、霊夢と魔理沙も何で妖怪の山が緊迫した状況なのかを理解できた。

「ですから今現在、妖怪の山は例え誰であろうと出入り禁止なんです」
最後にそう言った。

暗に帰れと言っているのだ。いや、これは善意からくる警告なのだろう。だが、そんな促しを聞き入れるわけにもいかない。

こつちもこつちで、博麗神社の存亡に関わる問題を抱えているの

だ。

「だからもし、此処をどうしても通りたいんなら、私たち二人を倒す事ね。無視したいところだけど、そうは問屋がなんやらだから」

穰子が静葉の台詞を付け足すように言う。

「どうやら弾幕ごっこに勝てば、通してもらえるらしい。」

「良いのかそんなんで……と少し心配する一護。けど通れるなら受けて立つしかない。」

静葉がまた何やら穰子に叱っているが、全くと言って良いほど聞いていない。

「それじゃあ一護、あんた一人で戦いなさい」

「どうせ言われると思ったよ」

霊夢の無茶振りに、一護は了承した。言われるとは思っていたからだ。

一護は一步前に出て、名乗る。

「博麗の死神 黒崎一護だ。弾幕勝負を申し込むぜ」

それを聞いた二人も、作法通りに名乗る。

「豊かさと稔りの象徴 秋穰子よ。一人で大丈夫か人間？ 言っとくけど、手加減なんて生ぬるいことしないからね」

穰子が名乗ると、静葉は仕方ないように、

「寂しさと終焉の象徴 秋静葉です」

三人が名乗ると同時に、弾幕勝負が開始された。

「んじゃ、先手は貰うよ。秋符『オータムスカイ』！」

先手必勝——穰子が最初にスペルを唱えた。

神気にも似た爆発的な妖力が籠められた魔弾が、円形に広がるように無数に放出される。そしてこの魔弾は二種の赤と青の色が存在する。赤は左へ広がり、青は右へ広がる。二色の弾幕が交差するように一護に迫りくる法則性を帯びているのだ。

「こういう弾幕は何十回も見てきたぜ。喰らうわけねえ、だろ！」

迫り来る弾幕を冷静に対処する一護。今までいくつものスペルを見てきた一護にとって、この程度の弾幕は軽く避けられる。

「悪いが、こっちは急いでんだ。直ぐに終わらすぜ」

一護は自分の能力——“物質に宿る魂を操る程度の能力”で、空の魂を操り一躍一瞬で二人の距離を縮めた。二人の神はその速さに驚くも、一護は間髪入れずスペルを唱える。

「黒符『月霊幻幕』」

一護の周囲の空間から、凄まじい霊力を練りこんだ三日月状の弾幕が展開される。そしてそのまま一斉に弾幕を二人に向けて集中砲火させる。同時に、距離も縮まったせいで対応の難度を上げていた。

「嘘っ!？」

穰子が驚きの声をあげる。しかしそこは流石は神様なのか、二人は上空に飛翔し、何とか一護の弾幕を避けた。

一護は直ぐに上空に飛んだ二人の神を見上げる。

その瞬間……

「豊作『穀物神の約束』!」

「葉符『狂いの落葉』!」

二人の神が同時にスペルを唱える。

穰子からは複数のレーザーの無数の弾幕、静葉からは落ち葉のように無数の弾幕が落下してくる。

二つのスペルが一護を襲った。

「——」

瞬間、一護に全ての弾幕とレーザーが降り注いだ。凄まじい轟音と烈風が巻き起こる。

二人の神様からすれば必殺にも近い攻撃だった。

それにより神気を迸らせた煙が舞い、一護の姿が確認できなくなる。

「やったかな?」

などと穰子が言った途端——

「黒符『天雨月閃』」

煙から、耳を澄ましていないと聞こえない程の声が届いてきた。

瞬間、二人の神の頭上に三日月状の弾幕が容赦なく無情に降り注いだ。

二人はそれを避けきれず、全て被弾してしまった。

「すまねえな」

煙がブワツと、強風にでも煽られたかのように、一気に晴れた。そこから悠然とした態度で一護が現れる。

「お前ら程度じゃ、力が足りねえよ」

こうして刹那の如く速さで弾幕勝負の幕が閉じたのだった。

《2》

それは頼りなく、おどおどとしていたが、しかし裏腹に重苦しさを感じた。

「博麗神社の祭神——それが何だか皆様はご存知でしょうか？」

霊夢、一護、魔理沙が妖怪の山に赴く数時間前、博麗神社にて稗田阿求が真剣な眼差しを持って三人に問いかけた。

博麗神社の祭神……つい先ほど一護が人里に向かう前に気になっていた事柄である。それがまるで狙ったかのようにその内容が出てきた。

一護はどこか言い知れぬ不吉と不安が混在する気持ちになる。

「ええ、もちろん博麗の巫女である私が知らないわけないでしょう。いえ、知っているけど知らない、と言ったほうがいいのかな？」

霊夢がどこか不明瞭に答える。

「祭神……つまり神社を信仰するためには必要不可欠。けど、博麗神社には何を祀っているのか、ほとんど、いえ皆揃って知らない」

阿求が淡々と、さながら前にも言ったことがあるかのように、さながら繰り返すように言葉を紡ぐ。

「それは例え、この私でも分かりませんし、幻想郷縁起にも記されていない。理由は簡単です。『真の意味で完全に隠蔽されているから』。例えそれが博麗の縁者であっても、祭神を知る由はない」

いつもと纏っている空気が違う阿求に、樂觀的な魔理沙でさえ黙って言葉に耳を傾ける。

「では何故この私、稗田阿求が博麗の祭神が隠蔽されていることを知っているか。それはその祭神に稗田を『こういつた確立にされたから』。だから博麗の祭神が隠蔽されたと知っている。ですよね、博

麗靈夢さん」

靈夢は黙って、真剣な面持ちで呟いた。

「そうよ。博麗の祭神は誰にも分からない。そして稗田家を祭神の隠蔽するために使ったのも、紛れもない事実」

「祭神は誰にも分からない。転生を繰り返す稗田家だからこそ、それだけは引き継いで世に拡散しなかった。いえ、そもそも知らないから拡散もできない」

二人の会話について行けない一護は、そこで割って入った。

「な、なあちよつと待ってくれ。博麗の祭神？ 隠蔽？ 稗田家が隠蔽に使われた？ 全然話の内容が読めねえよ」

訳の分からない話を続けられても困る。

どうにか頑張って一護が頭で纏めると……博麗の祭神は誰も知らなくて、隠蔽されているよってという設定が稗田家にはあつて、ということまでだ。

「つまりそういうことよ。博麗の祭神は誰も知らない。そういうこと」

簡単に靈夢が言う。

「いえ、誰もっていうのは間違いかもね。博麗の縁者にも知られない、そうじゃなくて薄々気づくようになってくるようになっていいるのよ、博麗の巫女限定でね」

面倒くさそうに、靈夢は頭を掻きながら、

「ほら、一護の前に私が博麗14代目巫女って言ったじゃない？ その後に正式には7代目とかって話」

「ああ、言ったな」

確か初めに聞いたのは紅霧異変の時だ。あの時はルーミアに邪魔されて途中までしか聞けなかったが。

「14代目ってのは総合的にねって事よ。博麗神社が出来て私で14代目」

「じゃあ7代目ってのは？ つか、それと祭神に何か関係あるのかよ」

「あるわよ。幻想郷の法——つまり」

つまり——

「もしかしたら博麗神社の祭神は——」

——そして現在。

二柱の神である穰子と静葉を打ち負かした霊夢一行は警告を無視して、妖怪の山の奥……樹海の中を飛行していた。その名の通り、樹の海のような樹海である。

三人の姿も樹海で出来た影のせいで、よく見えなくなっている。

「結構山の奥まで来たわね」

「ああ。此処なら中々良い実験素材がありそうだぜ」

何処に行つても、魔理沙はそんな事を言う。どれだけ実験が好きなんだろうか？

「それにしても深い森だな。もし飛べなかつたら迷子コースは確實だぞ」

一護が若干物騒な事を呟く。確かにこんな深い樹海は、コンパスも地図も役に立たないだろう。

切り株などで方角を探ることは出来るが、飛べないのであれば樹海を抜け出すのに何日か掛かる。一護は飛べるって便利だなと改めて思った。

「にしても何なのかしらね、今朝起きたって言う大量殺害つて」

霊夢が先の言葉を思い出すように言う。

秋姉妹が言っていた、妖怪の大量殺害だ。一部の妖怪の山に居た様々な種族の妖怪達が無差別に大量殺害されていたらしい。しかも死体とは思えないような、妖怪ですら吐き気を催す猟奇的殺害法で。

「身内争いじゃないわよね」

霊夢が仮説を言ってみるが、それは直ぐに脳内で否定された。

もしそんな身内争いが起きるなら、妖怪の山なんて物は初めから存在しないだろう。それにもし身内争いだったら、とうに解決されていてもおかしくない。

それに色んな種族が殺されている時点で身内争いでは無い。

(こんな大量に妖怪を殺す連中は……)

——幻獄七夢卿。

霊夢はそいつらが犯人だと思った。だが一体なぜ……。

幻獄七夢卿には妖怪を大量に殺す意味など無い。ただ快樂の為に殺したのだろうか。現に幻獄七夢卿にはブギーヴァルトと言う、人間と妖怪を大量に殺した殺人鬼がいる。そいつが犯人なのだろうか？

もしそうなら、また壮絶な戦いが幕を開ける。

霊夢がそんな事を考えているときだった。

「あらあら人間がこんな所に来たら危ないですよ」

不意に三人の前に樹海を背景に少女が現れた。

緑色の髪で後ろからサイドにかけてすべてを胸元で一本にまとめている。頭部にはフリル付きの暗い赤色のリボンを結んだヘッドドレスを着けている。服はいわゆるワンピース状で、襟は白、それ以外は赤を基調としている。袖はパフスリーブの半袖、襟は三角形で腹部にまで垂れている。スカート部分は真ん中よりやや下あたりで色がわかれており、上部分はほぼ黒に近い赤、下部分は純色の赤である。足には、赤紐をクロスして留めた黒いブーツを履いている。

「今すぐ、この山から引き返す事をオススメするわ」

少女は自分の服を自慢するように、クルリと回って言った。

「私は他人のオススメを聞かないわ。自分で確かめる派だからね。だから、先に進ませてもらうわ」

反発心たつぷりの霊夢。こういう人が後々後悔する。

「実はそうもいかないのよね。今この山は結構大変な事が起きているからね。だから立ち入りは厳禁なの」

溜め息混じりに言う。

確かに妖怪側からしたら一大事だろう。だがそれはあくまで妖怪側の事であって、自分には全く関係のない事と霊夢は思っている。

「で、あんたはどうしたいの？ 私たちの邪魔をしたいの？」

とつとと先に進みたい霊夢は、お札を出して怒りを露にして言う。短気は損気と言う言葉が一護の脳内に現れた。

「引き返すのなら邪魔はしないわ。けど、前へ進むのなら精一杯邪魔させてもらいます」

「面倒ね、本当に妖怪の山の妖怪って奴は」

「厄神様よ」

また神か……と霊夢は呆れた表情になりながら心底思う。

「魔理沙、今回はあんたがやりなさい。どうせ弾幕勝負をしたくてウズウズしてるんでしょ？」

「別にウズウズしてないぜ。ただ誰かの弾幕ごっこの観戦は暇だなくと思っただけだぜ」

だからと付け加え、魔理沙は一步前が出る。

「こいつは私が相手するぜ」

やる気満々。

魔理沙にとつて弾幕ごっこは、自分のストレスを解消するためでもある。だからストレスが溜まっていればいるほど強くなる（本人談）。
「普通の魔法使い 霧雨魔理沙だ。前へ進みたいから、お前を倒させてもらおうぜ」

「秘神流し雛 鍵山雛よ。盛大に邪魔させてもらいますよ」

再び妖怪の山で、先と同じ理由で弾幕勝負が始まった。

「先手はもらおう——」

「先手はもらいますよ。厄符『厄神様のバイオリズム』」

魔理沙は弾幕勝負が始まった時に言う常套句を、雛によって遮られた。
た。

魔理沙より先にスペルを唱える雛。少しカチンときたが、魔理沙はそれを抑える。

雛がクルクルと体を回転させると、そこから無数の弾幕が円を描きながら、魔理沙に襲い掛かった。

「さあて私の先手は取られたし、一気にストレス倍増だぜ。お前は悪い奴じゃ無さそうだけど、今週分のストレスを此処で晴らさせてもらうぜ！」

魔理沙は箒を前方に投げつける。

普通なら法則に則り、箒は前方に飛ぶが、まるで意思を持っているかのように、円を描くように大きく一回転し、魔理沙の後ろから箒が戻ってくる。

魔理沙はその動く箒の上に飛び乗り、空高く飛んだ。

「あら飛んじやったわね」

魔理沙が飛んだ事により、雛の放った弾幕は全て当たらなかった。雛は先のスペルを解き、魔理沙と同じ樹海の上空に飛ぶ。

「移動中がチャンスだぜ。黒魔『イベントホライズン』！」

魔理沙は雛が同じ上空に向かってきているところで、スペルを唱える。

複数の魔法陣が周囲に現れ、そこから無数の星型の魔力の弾丸を放出する。その標準を雛に定めた。

「移動中が一番の危機である事くらい承知ですよ。疵痕『壊されたお守り』」

雛は即座にスペルを唱えた。

秋姉妹と同じく神気に満ちた弾幕が不規則にばら撒かれる。

その弾幕が、魔理沙の弾幕を食い止める壁のように、雛を守る。ほぼ直角の競い合いに、前走も後走もない。瓦解するには、それを吹き飛ばすパワーが必要だ。

「面倒だぜ。仕方がない、一気に蹴散らすぜ。恋符『マスターパーク』！」

パワーならお手の物の魔理沙が、懐からミニ八卦炉を取り出し、雛の方に向け爆発的な魔力を宿した超極太レーザーを発射する。

よって、超極太レーザーが雛の弾幕を打ち消していき、状況を劇的に瓦解させた。

「ツ！ 悲運『大鐘婆の火』！」

雛から光り輝く弾幕が無数に放たれた。

一発一発が強力なのか、超極太レーザーを防いでいる。その間に雛が魔理沙と同じ空中位置に立つ。

「創符『流刑人形』！」

雛が続けてスペルを唱える。

無数の弾幕が全方位に放たれ、所々に放たれている青い弾幕が魔理沙を貫かんと狙ってきた。

「言つたら、この弾幕勝負は私のストレス解消の為だって……だから」
魔理沙はそんな中も悠然と、再びミニ八卦炉を雛に向ける。

「——この一発に全てのストレスを込めるぜ！」

ミニ八卦炉が太陽のように輝きだす。

「新スペル！ 精砲『ストレスマスタースパーク』!!」

グオン！ と轟音が轟いた瞬間、超極太レーザーが放たれた。そのレーザーは大地を轟かす振動と烈風を起こした。魔理沙はその反動で、後方に勢いよく吹き飛ぶ。

「ええええええええ、何ですのその——ツ!!」

雛が声を上げようとした瞬間、全てが幕を下ろしてしまったのだった。

第43斬【漆黒の女】

《1》

魔理沙が厄の神様——鍵山雛を撃退したのと同時刻。

妖怪の山の更に奥地、森に囲まれた静かに流れる清流。濁りはおろか淀みすら一切ない、まさに自然のまま残っている川。まさに空気の汚れや、自然破壊などはない幻想郷だからこそ生み出せた神秘の一種と言えよう。

そんな川の流れる傍らに、子供なら十人ほどが優に立てるであろう大岩。

その上で、将棋盤のようなものを囲む二人の妖怪が、何やら遊戯を嗜んでいた。

「むむ、今日はやりますね。この私に数手先まで熟考させるなんて」

一人の少女が目を細めながら、盤の上に乱列している駒を見据え次をどう打つか思案する。

彼女はウエーブのかかった外ハネが特徴的な青い髪を、は赤い珠がいくつも付いた数珠のようなアクセサリーでツーサイドアップにして、緑のキャスケットを被っている。瞳の色は青色。白いブラウスに、肩の部分にポケットが付いている水色の上着、裾に大量のポケットが付いた濃い青色のスカートを着用している。

名は——河城にとり。

河童の妖怪であり人を盟友とする少し変わった一族である。

「はい。私も学習しますからね。にとりに何度も負けることによつて編み出せた、私のにとり用の必勝術ですよ」

胸を張りながら満足げにするもう一人の少女。

彼女の特徴は犬耳と尻尾がついていおり、白髪で山伏風の帽子を頭に乗せていること。着用している服が何処かの巫女に似ている。上から白で下は黒、何処か巫女服を連想させる。

その少女の傍らに楯状の盾と剣が置かれている。

名は——犬走権。

白狼天狗の妖怪で、文と同じ部署で働いている。しかも何か何か悪

いいことをしたのか文が上司と言う悲しい下級天狗である。

「まさかこうくるとは。ただ負けていただけじゃないってことね。うん、流石は努力家。いい加減、あのちゃらんぼらんな、あなたの上司を追い抜いたら？」

「文様はああ見えて結構真面目な方なんですよ。まあ確かにぱつと見は駄目な方ですが……」

にとりと椀が遊戯盤を挟んで会話する。

そこでふと思いついたかのようになり、にとりは言った。

「あれ、そういえば仕事はいいのですか？　今、天狗様達は総動員であの犯人”を探しているようですけど」

「え、いや何か足手まといだからって文様に置いて行かれました。今頃何してるかも分かりませんが、確かに私だと足で纏なのは否めませんし」

椀は頬を掻きながら苦笑いして答える。

実際に相手はとんでもない何かだろう。

たくさんの妖怪を殺めたもの。自分なんかいても何の役にも立たないだろうと、椀は不甲斐ない思いになる。

「ふうん、で、その犯人の目撃情報とかがあってあるの？」

にとりは続いて聞いた。

「現状は分かりませんが、私が知る限りでは全てが謎みたいです。ただ分かるとすれば、相手は異常を通り越して狂人の部類に入るような人物像って事くらいですね。調査に進展はまだ見い出せないようですけど、もしかしたらもう、この山にはいないのかもしれないですね」
何たって妖怪を死体とは思えないくらい残酷で残酷な殺し方をしているのだから。それも無差別に、性欲を抑えないで全てを犯すような悪逆無道な遣り口で。

「けど逆を考えれば、今もこの山の何処かに居るかも知れないって事だよな」

パチツと駒を置き、にとりは言う。

確かに今もその犯人はこの妖怪の山に居るかもしれない。なのに、こんな楽観的にゲームをしていて良いのかと思う。

「もし、その犯人が今此処で現れたらどうしようか？」

にとりが冗談半分でそんな事を口走った……その時だった。

「――あら、それはフラグつてものかしら？」

まるで、にとりの言葉に期待を込めて答えるかのように、女性の声が暗い森の中から聞こえてきた。

それ程、大きい声で聞こえてこなかったのに二人は、まるで耳元で囁かれたような感じがした。さながら地獄の釜から、ふたりを引き込もうとする声音。聞くもの全てを容赦なく恐怖の奈落に落とすような空気。

「誰!？」

二人は同時に声の発せられた森の方を振り向く。無意識のうちに二人は立ち上がり、権は傍らに置いていた剣と盾を持つ。

「誰ですって？ 何を聞いているのかしら。今あなた達が話していたじゃない」

森の奥から、ゆっくりと誰かの足音が近づいてくる。その度に、暗く紅い森が更なる赤黒い何かに浸食されたかのような妙な威圧感……いや、不気味さを感じた。

にとりと権の全神経が無意識の内に、森の方に向けられ額から汗がにじみ出る。

「ん、見たところ河童と天狗かな。あなた達は見た目が綺麗から……愛らしいオブジェにして上げようかしら」

漆黒の闇で全身を包んだような、一人の女性が森の中から現れた。

腰辺りまで伸びた宝石にも負けないような美しいブラックグリーンの髪。頭には鍔広の黒い帽子を深く被っている。お陰で顔がよく見えない。

この女性からは敵意や殺意は全く感じない。だが、異常なまでの恐怖と不気味さを感じるのは、一体何なのか？ それを理解するのは、やはり同じ異常者でなければ理解できないのであろう。

「あ、あなたは……？」

権が渾身の勇気を振り絞って口を開いた。それだけで、不思議なまでの疲労感が全身を蝕んでいく。

まるで一週間、休み無しに働いたかのような疲労感だ。

「簡単よ。あなた達が話していた『犯人』、と言ったところかしら」
何が楽しいのか、女性は微笑みながら答える。

それを聞いた二人は心拍が停止してしまいそうな程の悪寒が、全身を走り抜けた。

「さてと、あなた達は抵抗して惨い死体にしとほしい？ それとも……」

女性はとても楽しそうに、さながら自分の自慢の創作物を披露するように……

「——この子達のように綺麗なままオブジェにしてほしい？」

女性の背後に、巨大な蜘蛛の巣のような物が現れた。

蜘蛛の糸のように細長い糸には二十人くらいの妖怪が死体となつて捕まっている。

男も女も見境無く殺されている。しかも全員、椀と同じ部署に所属している天狗だ。勿論、死体になってだ。椀はそれを見て叫びそうになつたが、声が出なかつた。それ程、恐怖と絶望と悲しみが頭を支配しているのだ。

対するにとりは今にも気絶してしまいそうな程、恐怖に涙を流していた。これは夢よと、頭に自分で言い聞かせるように。

しかし、そんな幻想を優しく撫で壊すかのように、女性は口を開く。

「あらあら怖がらせちゃったかしら。ゴメンね。別にあなた達を怖がらせようとは思って無かつたのよ」

ちやんと謝ってるのか謝っていないのか、理解できない口調で女性は言う。

「それにしても二人とも中々綺麗ね。私のコレクションにしてあげたいわ。だから——」

瞬間、蜘蛛の巣に吊されていた数体の死体が、野菜を切るかのように輪切りにされた。一つの死体に対して五分分に輪切りにされた死体は人間と同じように血を濁流のように流す。

輪切りにされたせいで腹部からは内臓がドロリと血と共に落ちる。

ベチャツと生々しい音がした。首を切られた死体は殺されてから、あまり時間が経過していないのか噴水のように血をドバツと噴出した。それを見た二人は胃から吐瀉物が沸き上がるかと思った。いや、出なかったのが奇跡に等しかった。

天狗の死体。中には昨日椀と一緒に食事を取った者、仲が良かった者、会話した者、他愛もないゲームをした者、そんな天狗達が居たかもしれないが、今の椀はそれを確認するほど頭が回らなかった。

輪切りにされた天狗の死体がベチャツベチャツ、と音を立てながら地面に落ちる。

凄まじい量の血が一つの血の川を作り出し、ドロドロと下流に向かって流れた。

二人は何も言えない。

何を言つて良いのか、何をすべきか、何を考えるべきか、全く頭が働いてくれない。さつきまでしていた将棋も既に頭から綺麗に消失している。

こんな異常を超越した場面は二人も初めてらしく、今にも倒れ掛けている。

「顔色が優れないわね。もしかして気持ち悪い物でも見せちゃったかな？」

ん、と女性は自分の後ろにある巨大な蜘蛛の巣の死体を見た。

「あーこの死体が悪いのね。確かに、この子達は私に攻撃を仕掛けてきたから、少し汚いオブジェになっちゃったんだよねえ。ゴメンね、気付いてあげれなくて」

二人に対して詫びるように、次は全ての死体が輪切りにされた。

さつき輪切りにされた死体の数より多いせいで、ベチャツと言う不快な音が何回も何倍も耳を障る。

男も女も子供も赤子も老人も関係なしに直ぐに殺す異常者。妖怪も関係なしに人を喰らうが、こいつは何かが違う。根本的な何か。「さて、不要な死体は捨てたし、そろそろ私のコレクションになつてもらおうかしら」

ゆつくりと、ゆつくりと女性は二人に近づく。二人の目には危険な

異物が近づいているように映っているだろう。

「く、くそ……」

椀がガタガタ震えている身体を動かし、片手に持っている剣をその異物に向ける。それだけの行為に椀は高ぶるような達成感があった。

だが異物は全く気にせず歩む。

「物騒な物を私に向けちゃって。もし私の『相方』にそんな真似したら、即死刑決定よ」

女性はゆつくりと間合いを詰める。

二人からすれば一步一步が寿命を縮めていく行いだ。

「まあ良いわ。抵抗するのなら、至極残念なんだけど、分かっているわね」

ニコツと微笑み、女性は黒い腕を前に突き出す。

それだけで二人は終わったと思った。絶対的な死。先の仲間たちと同じく、自分たちは何の抵抗もなく殺されるのだろう。

ただ遊戯をしていただけだった。ただ世間話をしていただけだった。なのに、たつたそれだけなのに……危機感のなさ、というのが二人を決定的な地獄の分岐点へと追いやつたのだろう。よって死ぬ。この異物からは逃げられない絶望である。

しかし——世界は二人を見捨てなかつた。

「黒符『月霊幻幕』！」

殺され掛けた二人の耳にスペルを唱える声が響いた。

すると同時に、黒い三日月状の弾幕が否応もなく黒尽くめの女を襲っていた。

女性は冷静に、まるで既に予知していたかのように背後にある蜘蛛の巣を飛んでくる弾幕の方に緩やかに動かし

……凄まじい爆音が轟く。三日月状の弾幕が巨大な蜘蛛の巣に被弾したのだ。

「随分と荒いお出ましね」

どんな事態でも常に笑みを崩さない女性は、晴れゆく爆煙から現れた。

彼女を守つた蜘蛛の巣には傷一つ付いていないとこ見るに、結構強

力な糸のようだ。女性は前方にいる二人の更に向こうを見る。

そこには川を挟んで三人の人影があった。

一人は巫女服を着た少女、一人は幻想郷では見かけない服を着た少年、一人は魔法使いのような服を着た少女。そう、三人は博麗霊夢、黒崎一護、霧雨魔理沙だ。

三人は跳躍し、にとりと楯の前に立つ。

「大丈夫か。もう安心していいぜ」

一護が二人にそう言うと、緊張が解けたのか安心したのか、二人はその場に倒れた。

「ッ！」

一護は黒尽くめの女の立つ後ろを見る。そこには赤黒い血の海が広がっていた。

何人分の死体があるか分からないほど、血の海に肉塊が落ちていく。ただ首から上が綺麗に切断されているお陰か、何人くらいかは分かった。

ざつと二十人。黒い羽が所々に血の海に浮かんでいるところを見るに、どうやら鴉天狗の死体のようだ。

三人はそれを見ると、途轍もない不快感と吐き気、怒りがこみ上げてきた。

「テメエ、何やってんだよ」

一護は怒りを露わにして言う。恐らく此処まで憤怒したのは幻想郷に来て初めてだろう。

「何って？ 決まってるじゃない。聖遺物の為よ」

女性は当然のように答える。その聖遺物と言う単語を聞いた一護は少し目を見開いた。

少なからず一護には聖遺物と言う意味を知っているからだ。

「聖遺物……まあ立派なお人の遺品ね。有名なのはキリスト」

女性が知らなさそうな霊夢と魔理沙に向けて言う。だが先ず二人はキリストが誰か分かっていない。

聖遺物——簡単に説明するとイエス・キリストや聖人、アダムや十二使徒、その他世界で有名な人々の遺品の事だ。その遺品には奇蹟な

る未知な力が宿る。それが聖遺物だ。

「私は自分の所有する聖遺物を起こすために、妖怪の魂を欲しているのよ」

女性は一拍おき、

「こう見えても私、聖遺物コレクターでもあるからね」

一護は女性の言葉を聞きながら、小刻みに拳を震わせていた。恐怖でも武者震いと言うやつでも無い。

——怒りだ。

一護は今にも力を使って目の前の女性に攻撃を仕掛けようとしている。

「私が今持つてる聖遺物はざっと十五よ。っと、ロンギヌスの槍と聖杯、博麗の衣は断霧鏡帥に奪われちゃったんだ。じゃあ十二ね」

一護のことなど全く気にせず話し続ける。だが何か切れたのか一護は、

「十二個の内、八個までは起こしたんだけど、後の——」

「……テメエ」

女性の言葉を途中で遮り、一護は一步前に出る。

「あら、女性が話をしている途中で、横槍を入れるなんて無粋よ」
女性の言葉に耳を傾けず、

「そんな下らねえ理由で、妖怪を殺したのかよ」

一護の声が怒りで震えている。ただし女性は全く気にしていない。それどころか、この状況を楽しんでいるようにも見える。

「下らない？ 私からしたら、とても大切なことよ。それに……妖怪の命なんていくらでも代替がきくじゃない」

その言葉に一護は完全にブチ切れた。

同時に思いつきり女性に向かって跳ぶ。拳を強く握る。割れるかと思うくらい強く握った拳をもって……

——殺されてバラバラにされた妖怪の頭部を殴っていた。
グチャと言う音と共に妖怪の頭部を破壊した。

血と骨、脳髓が四散し、一護はそれを浴びる。

「——ッ!？」

信じられなかった。

今、確実に女性を殴ったと思つたら、変わり身でも使つたのか妖怪の崩れ落ちていた頭部を殴つていたのだ。

「あら、死体を殴る趣味があるのかしら？ 随分と厭らしい趣味ね。流石の私も引いちやうわ」

小馬鹿にしたような声が一護の前方から聞こえてきた。

そこにはさつきまで此処にいたはずの女性が、妖怪の血で出来た川を挟むようにして佇んでいる。

一体いつ、どうやって其処まで移動したのか分からない。単純に早いなってものではない。時間の概念に囚われていないのか、何て思わせられる。

「何考え無しに出てんのよあんたは！」

「ああ、流石に下手に動くのは私でも危険だと思つぜ」

怒号と共に霊夢と魔理沙が一護の傍らに立つ。

「博麗霊夢……フフ、ようやく会えたわね。私はあなたと黒崎一護に会えて、嬉しくて溜まらないわ」

女性は分かりやすく笑みをこぼすと、傍らに落ちていた妖怪の頭部を鷲掴み、拾い上げた。

鷲掴まれた頭部の顔の部分が三人の方に向けられる。頭を掴まれているせいで、顎が下がり口を大きくくだらしなく開き、そこからダラリと舌が力なく垂れ下がっている。目が虚無感を向いており、首の断面から血がダラダラと出ている。

うっと、一瞬だけ吐きかけた一護だが、何とか抑える。

「ほら」

女性はまるで転がって来たボールを子供に返すくらい弱く、妖怪の頭部を投げる。

三人はそれを受け止めず、大げさに避ける。

頭部はそのまま岩の角に当たり、脳髓や眼球などの赤黒い肉塊を飛び散らし、頭部がごろごろと川に落ちた。

血生臭い不快な臭いが周囲を漂う。一瞬でも、この場にはいたくない。

「——痛っ！」

瞬間、霊夢が右肩を抑える。そこには少し切り傷が出来ていた。何かで切られたようだ。

「フッフ、《博麗の血》貫ったわよ」

女性の目の前にワイヤーのような物が伸びている。

そこには少しだが、赤い液体が付いている。

どうやら、あの巨大な蜘蛛の巣の糸だろう。それが霊夢の右肩を裂き、血を付けたのだ。恐らく妖怪の頭部を投げたのは牽制、気を糸から頭部に反らさせるためだ。

「さてと、私はそろそろ帰ろうかしら。今一番手に入れたい物は手に入れたし」

女性はそう言い、踵を返そうとするが、

「大人しく返すと思ってるの？」

霊夢は札を取り出し、冷静に言う。

「……私に近づかない方が良いわよ。近づいたら——」

瞬間——女性の足下にまで広がっていた妖怪の血と肉塊が跡形も無く消えた。

三人は目を見開いて驚く。まるで猟奇死体なんて無かったかのよう、全ての死体の跡が消えたのだ。

「デメエ、何しやがった!?!」

一護が声を荒げて聞く。

「あなたなら聞いた事くらいあるはずよ。魔の三角地帯、マリー・セレスト号、アンジクニ村……有名どころはそこらかな」

「何が言いてえ」

「フフ、この三つは全てが失踪なりしている謎の怪事件。それを私が起こしていたとしたら、どうするのかしら？」

この三つの事件。その共通点は総じて、人が消えているという点。つまり……

「まさか……デメエ」

一護は何かを察したのか、女性を睨みつける。

「察しの通り、今私に近づいたら、あなた《行方不明》になるわよ」

そう言うとき女性は背中を向けた。霊夢と魔理沙が追おうとするが、一護が制止する。

「つと、最後に私の事を一つだけ教えてあげるわ」

女性は息を吸い、

「幻獄七夢卿の一人、エリゼベート・ピーダネル。次会うときはキラースシアターの始まりよ」

最後に不気味な事を言い残し、女性は姿を消したのだった。

《2》

一護たちの前から黒尽くめの女が消えたのと同時刻……人間たちが暮らす人里に鴉天狗の射命丸文が居た。

現在文は一枚の写真を見ながら辺りをキョロキョロ見回している。

「ん〜と何処にも居ないですね。やっぱり、この男が犯人なのかな」

そんな事を考え、手に持っている写真を見て、背筋が寒くなった。

もし写真に写っている男が犯人だったら、あの時に自分が殺されていても可笑しくなかったからだ。

そう、今文がしているのは写真に写っている男を捜すこと。勿論、

この前に妖怪の山でウロウロしていた人間のだ。

「けど、何の証拠も無いし。ただ嫌な感じがしただけだし」

指を顎に当てながら思案するが全く犯人と言う確証が無い。しかもただ嫌な感じがしただけの思いっ切り個人論である。だが悲しくも既に犯人は妖怪の山には居ず、何処かへ消え去った。しかも犯人の正体——顔は分からないが——は一護たちが知ってしまった。

正直、今の文がしている行為は無駄の一言に尽きるのだ。

「ハア〜もう帰ろっかな」

深い溜息をつき、写真を懐に仕舞い込む。収穫ゼロと心の中で呟いた。

人に聞けば何か分かるのかもしれないが、そうもいかない。人捜しをしているだけなのだが、状況が状況だ。『再び人里を混乱に引き入れてしまいかねない』。

そんな事を考えているときだった。

「あれ君、あの時の天狗とちやう？」

軽い口調の男が文に声を掛けてきた。

聞き慣れていない声なのに、昔から聞き慣れているような説明し難い声。

文はゆつくりと振り返る。今さっきまで自分の捜していた人物の声だ。一瞬、振り返るのを躊躇ったが、不思議と振り返ってしまった。

「あ……」

喉の奥から乾いた声を放った。

そこにはあの時と同じ、写真を撮った時と同じ姿の男が居たのだ。

「なんや久しぶりやね」

男が文に歩みながら、口角を吊り上げて言う。

文は蛇にでも睨まれているような錯覚に陥ったが、普通に会話をする体勢を取る。

「久しぶりですね。いや〜丁度、あなたを捜していたんですけど、全く居ないものですから諦めかけていたところですよ」

「……ボクに何か用なん。悪いけど、今ボク少し急いであるから、早くしてくれると嬉しいわ」

「何か急ぎの用事でもあるんですか？」

文は恐る恐る男に尋ねる。もし目の前の男が犯人なら、この質問は相当危険だからだ。

けど、此処で聞かないと今までの苦労が水の泡になる。それだけは避けたい文である。

「これ見て分かんか？」

男は片手に持っている買い物籠を文に見せつける。

「今ボク、頼まれた買い物物の帰りなんやけど、早く帰らんと、ナズーリに怒られるんや」

それを聞いた文は目を丸くした。

まさか、こんな男からそんな日常的な台詞が吐かれるとは思わなかったからだ。

「……は、はあ。では、私はこれで立ち去らせていただきます」

文は黒い翼を背中から出し、男に言う。

「何や、ボクに用が有ったんとかやう？」

「いえ、今の言葉を聞いて、あなたが犯人では無いと思つたんです」

「犯人？ まあええわ。なら、ボクからも一つお願いがあるんや」

男は興味なさげに言うのと、最後に言いたいことが有ったのか、一言文に向けて言う。

「黒崎一護にボクが幻想郷ココに居る事、伝えてくれへんか？」

男は文にそう言った。

そして文はそれに頷いた。

これにより、一護はこの先、ある男と邂逅することになる。

*

所変わって現在、一護たちは更に先へと進んでいた。

あそこに居たら、何やら妖怪の山での騒動に自分達が容疑者扱いにされかねないからだ。

理由としては簡単。直ぐ傍に河童と狼天狗が気絶していたから。

あの現場に天狗たちが来たら疑いの余地無しだ。

「……………」

だが一護は、そんな事を考えていない。

あの時、黒尽くめの女が去り際に言った言葉——「幻獄七夢卿のエリゼベート・ピーダネル」……………この台詞の幻獄七夢卿と言う単語が一護だけでは無く、霊夢と魔理沙までも気掛かりで仕方なかった。

気掛かりと言うより、未曾有の危機が勃発していると言った方が正解だろう。

幻獄七夢卿…………一人一人の実力は全くの未知数で、最低でも単独で一つの大異変を起こすほど。

そんな奴らが後五人。しかし正直、刹蘭を第一に倒すのが一護にとつての目標だ。

だが、怒りの灯火は消えかかっているものの、いつまた燃え上がるかは分からない。何たって、何の罪もない妖怪を、あれだけ無残に殺したんだ。どうしても、このままで終わらせる気はしない。

「幻獄七夢卿って、後五人くらいなんだろう？ え〜と名前は」

「刹蘭、ブギーヴァルト、リフィットオール、そしてさっきのエリゼベ―

ト・ピーダネルって奴よ。後一人は何の情報も無し。断霧鏡帥って奴は脱退したから、数には入れないわ」

魔理沙の詰まったところを、霊夢はスラスラと答えた。

一護ですら名前までは思い出せなかった。だから霊夢のそういうところは少し感心してしまう。

「そうそいつら。後五人も居るんだよな。何か先が長いな」

「何言ってるのよ。私たちの敵は刹蘭。それ以外は通過点よ」

「つう事は、この事件も通過点と」

「当たり前よ。だから、こんなどうでもいい仕事、とつとと終わらせるわ」

霊夢にとって、これから起こり得る全ては通過点。どうやら霊夢は初めから刹蘭しか見ていなかったようだ。

だけど、それは領けることだ。

刹蘭さえ居なければ、幻獄七夢郷は存在しなかったし、母親も父親も苦しまなかった。

霊夢にとって、刹蘭は憎しみの対象でしかない。例えどんな汚い手を使っても、斃さなければいけない敵。しかしこの前、刹蘭にも敵が居るであろうことを仄めかされた。故に、刹蘭関連のことでは手を抜けないのだ。

そして――

「見えてきたわよ。あれが、今回の通過点の一つ」

霊夢たちの前方に一つの鳥居、そして神社が見えてきた。

「守矢神社」

遂に神社の存亡を掛けた戦いが始まる。

だが、この時、一護はまだ気付いていなかった。

自分の霊圧が更なる進化をする事に。

第44斬【覚醒】

《1》

「いらつしやいましたか、歓迎いたしますよ」

妖怪の山の中に見える、赤い鳥居。その奥には博麗神社と同じような――当たり前ではあるが――神社が建っている。

守矢神社――霊夢と同格であろう巫女と、二柱の神が君臨する。今まで異変で戦ってきた妖怪とは、事実レベルの違う相手だ。妖怪や、幽霊、超人とは違う本物の神が実存している祭壇。そのような場所に霊夢、一護、魔理沙は攻め入ったのだ。

「お待ちしておりました、博麗の巫女。そしてお仲間さん達」

一護達を出迎えたのは、守矢神社の巫女。霊夢の巫女装束を青色にしたような感じの、緑色の髪に霊夢と同じくらいの年齢の少女。

きつと霊夢に姉が居たら、こんな感じなんだろうなと一護と魔理沙は奇しくも同時に思う。見た目は霊夢と同じくらいの背丈だが、どこか大人な美貌と雰囲気醸し出している。

「歓迎してくれるなら、至極光栄ね。けど、私たちを歓迎するには、此処は小さすぎるわよ。最低でも、あの吸血鬼の居住まいくらい大きくなくちゃね」

霊夢が相手の神社を見ながら言った。

どの口が言うんだと、再び同時に思う一護と魔理沙。正直言って、此処の神社の方が明らか大きいし、賽銭箱も寂れていない。ただの負け惜しみじゃねえかと思う一護だが、口には出さない。出した途端、自分の死を覚悟しないといけないからだ。

「あら、随分と酷いことを言うのね。あなたの神社よりマシだと思えますけど」

――最もである。

一護と魔理沙はうんうんと頷く。

すると霊夢から二人に向けて凄まじい殺気を当てられた。どうやら心中バレたようだ。

「あんた達、一体どっちの味方なの？」

「そんなもん決まってるぜ。私は私の味方だ。私は私の為に戦うぜ」
「もう帰っていいわよ魔理沙」

格好いい事を言ったつもりで魔理沙を、直ぐに霊夢の一言で一蹴された。

「俺はお前の味方だ。それに今回もお前の為に戦う。それは変わらねえよ」

と、一護は魔理沙とは真逆の事を言った。

霊夢は「そう」とだけ言い、

「じゃあ一護と魔理沙は先に進みなさい。まだ神社の奥に方に何か居るわ。それも、途轍もない奴が二匹」

「途轍もない奴?」

「ええ。最初は話し合いで済ませるつもりだったけど、こいつらは人の話を聞かなさそうな質ね。神気……まあこれを感じ取っただけで瞭然。神様らしい傲慢気質みたいだから」

霊夢の霊力探知は一護に比べて非常に高い。逆に一護はそういうのが大の苦手。それは死神時代から変わらない。

「人の話を聞かないなんて、霊夢と同じ質だな」

魔理沙が余計なことを言う。

「あんた、この仕事が終わったらぶちのめすから覚悟しておきなさい」
「おう、だから無事にちゃんと終わらして帰ろうぜ」
「……………」

魔理沙は純粹に、何の濁りもなく言った言葉に、霊夢は若干戸惑うも、

「とりあえずとつと先に行きなさい。一護は私の為に。魔理沙は自分の為に。ここから先、正直勝てれば重畳。気を抜かないこと、いいわね?」

語り合う、博麗神社に対する意見を聞きたい。

そう思っただけで来たものの、そんなものなど意味を成さなかった。

「ああ」

「分かったぜ。強い奴と戦えるんなら、本望だぜ」

二人は地面を蹴り、一気に緑の巫女を横切り、先に進んだ。

緑の巫女は何の妨害もせず、ただ先へ行く二人の背中を見据えようともせず、どこか哀れみにも似た言葉を発する。

「……あのお二方は、よりによって苦汁の道に進むなんて。しかしそのような道を歩む者を止めたりなどはしません。人の邁進を止める程、出過ぎたことを出来る身でもありませんから」

緑の巫女は、霊夢に視線を向けたまま語る。

「それで、あなたは私を相手をするか?」

「当然でしょ。もう面倒だから、あなた達を黙らせて終わりにする。そっちの方が手っ取り早いし、私らしいから」

「信仰は、もうどうでも良いか?」

「良くないわよ。まあ自分の神社の祭神も知らない私が言えた義理ではないけど、そんなもんは後で探すなり何なりすればいいしね。けど、博麗神社が無くなったなら、元も子もないのよ」

「そう、よく分かったわ。だったら、私も早くあなたを倒させて頂く。異論は勿論無しですよね」

「当たり前でしょ。一瞬で沈めてあげるわよ」

霊夢は何枚もお札を取り出す。

「仕方ないわね。祀られる風の間人 東風谷早苗よ」

「楽園の巫女 博麗霊夢よ」

両者名乗り——瞬間、二人の巫女が激突した。

*

激突と同時刻。

一護と魔理沙は神社近くにあった湖の湖上に居た。

そこらに不自然に凄まじいほど大きい山のような柱が建っているが、二人は全くそれを気にしていない。何故なら、二人の目の前にその柱が小さく見えるほどの、桁違いの神が二柱も存在していたからだ。

一人は紫の掛かった青髪にサイドが左右に広がった、非常にボリュームのあるセミロング。冠のようにした注連縄を頭に付けており、右側には、赤い楓と銀杏の葉の飾りが付いている。瞳は、茶色に

近い赤眼。そして背中に、複数の紙垂を取り付けた大きな注連縄を輪にしたものを装着している。上着は、赤色の半袖。袖口は金属の留め具で留めている。赤い上着の下には、白色のゆったりした長袖の服を着ている。小さな注連縄も首元、白い長袖上着の袖、腰回り、足首、とあちこちに巻かれている。スカートは、臙脂色のロングスカート。裾は赤色に分かれており、梅の花のような模様が描かれている。足は、裸足に草履。

見た目は大人な女性だ。

もう一人は金髪のショートボブ。青と白を基調とした壺装束と呼ばれる女性の外出時の格好に白のニーソックスをしており、俗に「ケロちゃん帽」と呼ばれる市女笠に目玉が二つ付いた特殊な帽子を被っている。片方と比べたら随分とシンプルな格好だ。

見た目は完全に少女。

その二人から、一護と魔理沙ですら蹴落とされそうな力を放っている。

「あんた達が博麗神社の使いだね。来るとは思っていたが、ここまで速いとはね」

「久し振りの遊び相手って訳だ。ゾクゾクするね」

二人の神が一護と魔理沙を見据えながら言う。

全く危機感が見られないところを見ると、ソレほどまでにレベルが違うという事だ。

そもそも、こうして対峙しているだけで二柱の神から溢れんばかりの神気を感じ取れている。感じる、ただそれだけで毒を注入されているかのように、足がフラつき、視界が霞み、手汗が滲み出、頭が眩む。

ああ、この二人が紛う事なき神だと思いき知らされる。

「あんたらが、噂の神ってやつか？」

一護が当たり前のことを尋ねる。

「見ての通り。感じての通りだよ。まさか感受できないほどのヒョウ子ではないだろうか？」

「もしそうだったら、最近の若者は、とか言う三下常套句を言っちゃうよ〜」

和氣を帯びた声調だが、内包している力の桁数が段違いである。

「おいおい、こいつはまた面白そうだな一護。いやー、正味、勝てる気はしないけど、まあ全力全開で立ち回るくらいは頑張ってみるよ」

「えらく弱気だな。けど気持ちは分からなくない」

神様を打倒しようなど不信心もいところだ。神罰が下つてもおかしくない。

けど……

「神様が何だっつてんだ。こっちは死神時代を経験しているんだよ。同じ神が付くんだ、何も恐れることはねえよな」

自分でも何を言っているのか意味不明だが、こうして自分に何かを言い聞かさないと精神的に参ってしまいそうになったのだ。

「さて、そろそろ名乗ってやろう」

神である女性が笑みを浮かべて、言う。

「山坂と湖の権化 八坂神奈子」

「土着神の頂点 洩矢諏訪子」

対する一護たちも名乗る。

「博麗の死神 黒崎一護だ」

「普通の魔法使い 霧雨魔理沙」

こうして両者は邂逅したのだった。

*

——最初に動いたのは霊夢だった。

取り出していた札を早苗に向かって投擲する。札は紙製だが、特殊な梵字が書かれており、それに自身の霊力を込める事によって、破壊力を付けた札になるのだ。

「随分と巫女らしい攻撃手段ね。教鞭通り、詰まらないわ」

早苗は片手に持っている木の棒の先端に白い紙の付いた——いわゆる御幣を軽く一振りする。

すると放たれた霊夢の札が全て、全く別の方角に弾き飛ばされた。札など眼中にないかのようだ。

弾き飛ばされた札は森の中に疾駆し、被弾した木々を破裂にも似た勢いで爆破した。

「博麗の巫女って言うからには、もつと個性的だと思ったんですけど、随分と空虚な御技を使うようね。秘術『忘却の祭儀』」

ついでと言わんばかりにスペルを唱える早苗。

無数の弾幕が、星型を描きながら優雅に、流れる霊力は流麗に放たれた。

「あんたこそ私の服装を真似てるくせに、よく言うわ片腹痛いのよ。霊符『夢想妙珠』！」

対する霊夢もついでと言わんばりのスペルを唱える。

複数の光弾が、暴力的に内包する霊力を宿し早苗の放った弾幕を負けじと掻き消していった。火花が飛び散り、エネルギーの余波が空間を震わせる。

「別に真似てないわよ。あなたこそ、私の巫女装束を真似たのではなくて？ それに、まるで神聖さを感じさせませんね。とても強暴さを持った力、まあ心根も粗暴のように見て取れますが、全く、巫女にあるまじき気質ですね」

呆れ果てたような早苗の言葉に、霊夢のこめかみがヒクつく。

実際、そもそも巫女同士が争うなど御法度に近い。幻想郷では妖怪退治を生業にはしているものの、本職は祈祷、神楽舞などの尊いもの。それがこのように私情で争っているなど、それこそ神罰が下つてもおかしくない。

「けど実際、私は襲いかかってくる野獣を退けているだけ。言っしまえば正当防衛ですね。よって巫女としての役は、何も犯していません、よ！」

掲げた御幣が霊力が集中する。

霊夢が危険を察知した次の瞬間、花火が爆発するかのよう放たれた。

襲い来るは無数に散布する弾幕。視界を埋め尽くすほどの弾幕の嵐、その上これら一粒一粒が追尾性を帯びて、敵対者を貫かんと掛かってくる。

「自分は何も悪くないみたいな言い方ね。反吐が出る。ええ私は口が悪いし、性格も短期で粗野なところがある。けどね、あなたみたいなお

淑やかか売りのような女に限って、裏で何やってるか分かったものじゃないわ！」

そして迎撃に入る。

複雑な挙動は取らない。向かってくる弾幕のみ確実に仕留めながら、一気に突っ込んだ。

しかし弾幕すべてが追尾性を宿している為、霊夢を落とさんと迫り来るが、捌ききれない弾幕など軽い結界を張っておけば問題などない。

「言いますね。ええ思っていましたとも。あなたを人目見た時から、私とは相容れない存在だと。同族嫌悪ならぬ、同職嫌悪、かしらね。だから何を言っても無駄なのは百も承知」

突進に近い勢いで来る霊夢に対して、早苗は悠然とスペルを唱える。

「奇跡『客星の明るすぎる夜』」

早苗の前に青白く光る球体が複数現れた。

それはいい。今までの弾幕と何の特色もない。しかし同時に現れたものは、それを覆した。

無数の槍状の弾幕。槍投げで使うようなものが霊力により形成され、悪魔を穿つように一気に射出される。

「その通りよ。あなたとは、こうしてぶつかり合うしか用を成さない宿命なのよ！」

唱える。

「霊符『夢想妙珠』！」

複数の莫大な霊力の籠められた弾幕が、容易く早苗の槍弾幕ごと喰らい尽くす。

「本当、霊力だけは一人前のようなね。自分の管理している神社の祭神すら知らないのに」

「さつきから煩いのよ。今は口じゃなくて拳で語り合いなさい！」

「巫女としてあるまじき事ですが、そうですね、あなたの霊力だけには敬意を評して、私も神の子として本気でいきます」

そして霊夢と早苗が激突する寸前でスペルを唱える。

「霊符『夢想封印』！」

「大奇跡『八坂の神風』！」

その瞬間、凄まじい破裂音が轟き、巫女同士の霊力が衝突したのだった。

*

「くツ、がア、アアアアアアアア!!」

その頃、守矢神社の湖上の上で、もう一つの弾幕勝負が行われていた。

いや、もう終結したと言っても良いだろう。

何故なら先の攻撃で、魔理沙は悲痛の絶叫を上げながら湖畔に墜落し、一護ももはや満身創痍に近い状態で空中に肩で絶えず息をしながら立っているのがやっただから。

「くそ……ッ！」

一護は荒い息を整えながら、自分の前に佇む二柱の神を見る。

死神の姿になっているのにも関わらず、圧倒的な力の差で負けている。全力で放った魔理沙のマスタースパークは軽い所作で弾かれ、一護の月牙天衝もいとも容易く相殺された。

そもそも相手は神。絶対の存在。

単なる魔法使いや、死神である者に倒せる道理などどこにもない。当たり前の結果。揺るぎない理屈の末である。

「く、くそ……黒符『月霊幻幕』！」

一護が無数の三日月状の弾幕を張り、一斉射撃。二人の神に全力で放つ。

だが二人の神は欠伸すら漏らしそうになりながら、その弾幕を軽い神気を帯びた弾幕で掻き消した。

「土着神『手長足長さま』」

片方の神——洩矢諏訪子が詰まらなさそうにスペルを唱えた。

万象全てを貫く神々しい赤いレーザーと緑のレーザーが一護に向かって放出される。

「舐めるなよ！ 黒斬『月牙天衝』！」

右腕から月牙を放つ一護。

それにより赤いレーザーと緑のレーザーを相殺する事に成功した。
だが――

「奇祭『目処梃子乱舞』」

一護がそれに対応している間に、もう一人の神――八坂神奈子がス
ペルを唱えた。

まるで予測していた展開、演劇の台本通りに演じるかのように、赤
いレーザーと無数の札状の弾幕が一護にに放たれる。

「しまっ――！」

それに対応することが出来ず、全て自分に吸い込まれるように諸に
受けてしまった。いつもの一護ならギリギリ避けれたかもしれない
が、この状態では喰らったのが必然とも言える。

「ふく、もう終わりかい？　そもそも神に挑むことが間違いなんだけ
どね」

神奈子が不満そうに言う。

対する諏訪子も似たように、

「あんまり面白くなかったな。けど暇つぶしにはなったかな」

もう終わりと言わんばかりに、両手で腰を掴む。

そも神様というものは敬い奉るもの。倒すなど考えるだけ無意味
である。よって到れるとすれば鎮めるのみ。

「……ア、ハア、く」

しかし、そのようなことが出来るほどの力量など、今の一護に無い。
無数の弾幕を浴びた一護は、どうにか踏ん張りながら倒れずにい
た。

「……けど、一つ気に食わないね。あんた、まだ何か隠しているだろ
？」

神奈子が一護の右腕を見据えながら、一護が啞然とすることを言っ
た。

「……何言ってるんだよ」

何かを隠している？　正直言って一護何も隠していない。もし力
を隠していたら、こんな絶望的な状況で使わない訳が無い。

だが神奈子は、

「それとも、まだその未曾有の力に気付いていないと。成程、己の力も存分に発揮できないわけだ」

断言するように言う。

「だから、何言っただよ！ 黒斬『月牙天衝』！」

一護は再び月牙を放つ。

瞬間、凄まじい形容し難い違和感が右腕に流れた。

これはフレデリック戦でもウルキオラ戦でも感じた違和感。いや、初めから振り返ればグリムジョーとの戦いでも感じていた。

瞬間、何かが溢れ出るように、違和感が顔を出す。

「!?」

一護は驚く。

右腕の霊圧が何かに形成しようとしていた。無形だった霊圧の刀が、徐々に形を鮮明に作ろうとしている。

諏訪子と神奈子は興味深そうに見る。向かってきていた月牙なんてどうでも良かったように。

「こ、これは……」

そして遂に、違和感の正体が明かされた。

それは――

「斬月……!」

右手には、かつて死神時代だった時の一護の斬魄刀が握られていたのだった。

《2》

最初は何が何だか分からなかった。

確かに表現出来ない妙な違和感を右腕に感じていた。

始めはグリムジョー戦からフレデリック戦。ウルキオラ戦などで。

そして最後はこの戦いで。

故に理解できない。

こんな旨い話はあるのか？ まるで漫画の主人公のようだ。

窮地に陥った主人公が、最強の敵を前にボロボロにされ絶体絶命のピンチになったところで新たな力。これならまだ、誰かが助けに来て

くれて、この状況を打開する方が現実味が有っただろう。

だが一護は漫画の主人公のように、絶体絶命の状況下で新たな力を覚醒させた。

今まで感じていた違和感が顔を出したかのように。新たな力が右腕に握られていた。

否、新たな力では無い。

それは旧なる力であり、真なる力。

死神代行時代、一護と共に戦った斬魄刀。それは一護が死神の力を失うと同時に消失した斬魄刀。

——斬月。

バカデカイ出刃包丁のような刀。柄には白い布が巻いてあり、一護の背丈ほどある。

懐かしい。

一護はそう思った。

もう二度と握ることは無いと思っていた刀。それを今握り締め、この絶体絶命の状況を打開する力にも成っている。

だが、それはあくまで一護の黒い霊圧が形成されたに過ぎない。

言わば今まで不安定だった霊圧刀が一つの形を成し、安定された力。

故にあの時のような斬月の力は無いが、凄く心強かった。

例え真正銘の斬月では無くても、何処かで自分は死神の力を取り戻しつつあると実感していた。

力が湧いてきた。

比喻ではなく本当に力が湧いてきたのだ。

今までのポロポロの状態が嘘かのように体が軽い。傷は残っている物の、痛みを感じなかった。

一護は前を見る。臆せず、引かず、闘志を燃やし、二人の敵を見る。相手は二人、こっちは一人。

だが一護は自分の後ろに斬月のおっさんが居ると思った。錯覚なのかどうかは分からない。だが妙な気軽さを感じる。

これで二対二だ、と一護はそう思い込んだ。

対する二柱の神は、一護の発現した力を見て、少し目を丸くした。少し……いや、かなり不可解だった。

二人の神は今まで沢山の力を見てきた。

それは気なる力や、妖なる力、霊なる力、魔なる力、聖なる力、はたまた超能力と言う天然の力まで。

だが、目の前の力を見たこと無かった。

さつきまでは霊なる力を行使していた。だが急に右手にデカイ出刃包丁のような刀を握った瞬間、霊なる力では無くなった。それどころか、二人とも感じたことのない正真の未曾有の力だった。

恐らくそれは一護ですら気づいていないだろう。

「行くぜ、斬月」

些少目の前の不可解な力を理解しようとしている頭を働かせている二人の神は、一護の言葉を目にして身構える。

その刹那——二人の神の斬程圏内に、一護が居た。

「――」

二人の神が驚愕する。

本当に本当の意味で、一護の移動速度を認識することが出来なかった。二人が気づいたときには、既に一護は二人の懐に入っていたのだ。

一護は刃の付いた斬月を大きく横に振る。

だが相手は神。

まだその程度なら、認識できなくても斬られる前に気づけば避けきけることは可能だ。現に二人は後方に下がることにより躲した。

そしてその後の事も二人の神は考えている。

「神秘『葛井の清水』！」

「土着神『七つの石と七つの木』！」

神奈子と諏訪子は直ぐにスペルを唱える。

左右から一護を狙うように無数のナイフ状の弾幕が、そして真正面から七本のレーザーと七色の弾幕が放たれた。

「黒符『月霊幻幕』！」

一護はスペルを唱えると同時に、大きく斬月を横に振るう。

瞬間、扇状に広がるよう斬月から三日月状の弾幕が放たれた。それらが真正面から放たれてくるレーザーや七色の弾幕を相殺していく。続いて左右から迫ってくるナイフ状の弾幕に向かって同じく三日月状の弾幕を放ち相殺する。

ここまで僅か一秒。

だが、それも二柱の神の計算どおりだった。

「天高く積もる信仰こそ山の象徴 我が言葉以て御国の救えとなり祖国を害する邪を滅する『マウンテン・オブ・フェイス』！」

神奈子は符名の付かないスペルを唱える。

五つの箇所から円状に広がるように、無数の弾幕が放たれた。

(符名無しのスペル！ 霊夢が言うにはそこらのスペルとは桁外れらしいけど……今の俺なら)

一護は斬月を頭上に振り上げ、スペルを唱える。

「黒斬『月牙天衝』！」

斬月から黒い月牙天衝が放たれた。

その光景はまるで、あの時の頃を思わせる。

「——蛙狩『蛙は口ゆえ蛇に吞まるる』！」

諏訪子がこのスペルを唱えたのは、一護が月牙を放ったのと同じだった。

月牙は無難なく神奈子の弾幕を掻き消していつていたが、一護本人に諏訪子の弾幕の魔の手が伸びた。

無数の弾幕がまるで蛇のように、一護に襲い掛かる。

「ツ！ 黒符『月霊幻幕』！」

焦りながらも、一護はどうにか対応する。

だが咄嗟だったので防ぎきれず、いくつか被弾してしまう。

「天竜『雨の源泉』」

追い打ちを掛けるように、神奈子がスペルを唱える。

先の月牙は既に神奈子に弾幕で相殺されていた。

次いで上空から雨のように青い弾幕が降ってきたかと思うと、落下途中無数の弾幕に変貌し、一護を狙うかのように飛んでくる。

「——黒斬『月牙天衝』！」

透かさず月牙を上空に放ち、弾幕を防ぐが、

「——ほらほら、少しは学習しなよ。二対一で言えた義理じゃないけどさ」

一護が月牙を放っている隙に、諏訪子が一護のほぼ目の前まで移動していた。

「！」

「——崇符『ミシヤグジさま』」

諏訪子を中心に全方位に広がるように、無数の弾幕が放たれた。

「！ しまっ——」

——瞬間、一護の身体に、無数の弾幕が衝突した。

「ガアッ、く、負けてたまるかよー」

一護は倒れそうな身体を、どうにか押し止める。

今の弾幕で、今まで蓄積されたダメージが復活したのか、かなりロボロボになっている。

「まあ、例え未知の力を使った所で、私たちと拮抗できないのなら同じ事よ」

諏訪子が余裕の表情で言う。

「故に、この程度のカリヤ、私たちに勝つのは到底不可能」
続けて神奈子が言う。

二人共、まだまだ余裕で、傷一つ負っていない。

「……しゃあねえか」

一護はポツリと呟く。

「付け焼刃になっちまうが、今しかねえよな」

一護は斬月を前に突き出し、

「符名無しノスペルは霊夢曰く、渴望を具現化したものらしい」

一護は誰に言うでもなく、呟く。

そして——

「だから、今此処で、試すしかねえな」

どうやるかは具体的に分からない。

だが渴望だけはある。斬月を見た瞬間、その渴望が生まれたのだ。

一護は一呼吸置き、言う。

「……『卍解』！」

*

「この、とつとと倒れなさいよ！ ああもう見た目によらず随分とタフなのね！」

「あなたこそ、早急に地面に伏して然りだと思っていました。でも、どうも霊力だけじゃなくて体力にも自信があるよう、ね！」

時は流れ、霊夢と早苗の弾幕勝負はほぼ終結していた。

どちらも既に戦える霊力など、ほとんど残っておらず、後は巫女の御身とは一切かけ離れた体術と少ない霊力を使い、もはや傍目には殴り合いのように見える死闘を繰り広げていたのだ。周囲の地面はいくつも陥没、起伏し、周囲の木々は軒並み燃え、伐採されている。この現状だけで、二人がどれほどの激闘を行っていたかを如実に物語ってくれていた。

そして尚も拳、御幣、そして弾幕、巫女服は所々破れ、焦げ跡を見せ、お互い死力を尽くした衝突をする。

「クツ、あんたもうお淑やかさの欠片もないわよ。なに、もう巫女なんたるかは捨てたわけ!？」

「ツ！ うるさい、あなたを倒すためなら、恥も外聞も捨ててやるわよ！ ここで負けることが、現人神として絶対に許されない。言ってしまえば、ただの意地なんですけど、ね！」

飛び交う乱舞。

ここまでするのはお互い、負けられない矜持があるから。絶対にこいつには負けたくないという気持ちのみで、二人は奮い立って、先に相手の膝を地につかせる為に攻防を繰り広げているのだ。

「中々やりますわね、博麗の巫女。流星は数々の異変を解決した猛者と言ったところかしら」

「こつちも認めてあげるわ、あんたのその意地っ張りなところだけわ」
ひたすら殴り、蹴り、同時に霊力をまとった弾丸が休むことなく発射されている。二人の華奢な体型、細い指、か弱い腕や足からは放たれたとは思えない、岩を軽く砕く威力を内包してお互い放たれていた。

「ク、ハッ！ ふふ、あちらも直に決するでしょう。まあ勝機は目に見えていますかね。神奈子様、諏訪子様の實力は本物。何たつてれっきとした神様なのですから。だから、こちらもそろそろ、決着と行きましようか！」

全力で、それこそ身体ごと叩きつけるように強く握り締めた拳を、早苗は霊夢にお見舞いした。

「ガッ！ ク、舐めるんじゃないわよ……神？ 神様だから何？ 神だったら絶対に負けないと、そんな道理誰が作ったのよバカじゃない!? そんな意味不明な理屈で……」

お返しとばかりに、強く強く拳を握り締め、あらん限りに咆哮と共に、渾身の一撃を振り下ろした。

「私の仲間を侮るなッ！」

「キヤアアッ！」

弱々しいが靈力で結界を張り、霊夢の拳を防ぐもそのまま粉碎された。

「何なのよ、一体何なのよ、博麗の巫女っていうのは!？」

交差する二つの力。

ほぼ相打ち。同時に、二人は多大なダメージを受けている。

血に濡れた服も、拳も顔も、凄惨を通り越した様相をしていた。全身の血が沸騰する赫怒で、両者は負けない気負いで、猛然と、吠え猛りながら烈火怒涛に衝撃を叩き込んだ。

「ハアアアアアアッ!!」

そして二人の拳は、同じ相手拳に打ち込まれた。

バキと、骨が碎ける嫌な音を発しながら、二人は苦痛に耐え、そのまま一気に距離をとる。

「ッ！ これ以上やると、お互いが倒れてしまいそうね。認めたくありませんが、私たちはほぼ互角」

「その、ようね。全く、どうしてこう面倒な相手ばかり増えていくんだか」

そして――

「次の一撃で決めます。私の全靈力を込めたスペルを、あなたに繰り

出してあげますわ。これで最後、行きますわよ」

「お生憎様。私の一撃で、あんたのスペルごと吹っ飛ばしてあげる」

最後のスペルを唱える。

「奇跡『神の風』！」

「霊符『夢想妙珠』！」

そして両者、最後のスペルを唱えたのだった。

《3》

「ふうん、やっぱり接触したんだ、エリゼベートは黒崎一護と博麗の巫女に」

細身の男は欠伸混じりにそう言う。

その言葉を聞いているのは、年配白髪おじさんだ。豪勢な司教服を着ており、教会で十字を切っている老人のようにも見える。

だが、それは違う。

彼は魔術結社・黄金の夜明け団の創設者の一人——マクレガー・メイザースだ。詳細は後日説明するが、彼は当の昔に亡くつなっているはずの男だ。

「彼女の半魂は未だに消息不明です。現在は《魔王》と《星天》が幻想郷中を探索していますが、何処にも見当たらないようです」

メイザースは報告書を読み上げるように、事務的に男に向かって口を開く。

男——刹蘭はどうでも良さげに、

「うくん、多分、あの半魂を見つけ出すのは無理だよ。偶然でも見つけ出せるとしたら《原初》くらいかな。他は絶対とは言わないが、ほぼ不可能」

「でしたら、一体どのように策を立てましょうか？ 安易に《原初》を動かしますか？」

「んく命令しといて何だけど、もう放つといいよ。彼女が姿を現したから、見つかると思ったんだけどね。まあアレの叶えたい渴望が何だか知らないけど、正直言って関係ないし。ただ——彼に会って一つ聞き出したかったんだよね」

刹蘭は一拍置き、

「博麗の父親の居所について」

*

卍解——それは死神が使う斬魄刀の最終奥義。

死神時代、一護はこの卍解にまで至り、数々の戦いを勝ち抜いてきた。しかしながら勿論のこと、死神の力を失うと同時に消えた。

だが、今の一護は斬月を形成し、更なる領域に達した。

符名の付かないスペル——謂わば渴望を具現化させた能力のスペル。一護はそれを具現化させる境地に立ち、再び漆黒の刃を持つ刀——

「天鎖斬月」

卍解を手に行っていた。

死覇装もご丁寧に、ロングコート状に似た黒い死覇装を身に纏っている。

一護の瞳に強い力が宿る。希望はここに、再び掴んだ最強の力を手にし、勝利を導くために立ち上がった。

「ッ！」

二柱の神はその瞳に一瞬、戦慄が走り——
隙が生まれる。

「ふんっ！」

一護はいつの間にか、一柱の諏訪子を峰打ちで切り伏せていた。神ですら反応できない速度。まるで時間を無視した速さ。光の速度など、鼻歌でも奏でながら追い越せてしまいうようなものだ。

よって本調子、油断などしていなければ間一髪で躲せたかもしれない一撃を、諏訪子は間隙を突かれて沈んだのだ。

「チツ……『諏訪大戦』 土着神話 vs 中央神話!!」

神奈子は一切逡巡せず、味方の気絶した諏訪子を巻き込む勢いで、符名の付かないスペルを唱えたが——

「ちゃんと避けてくれよ」

平然と一護は告げる。

「今の俺の力じゃ、こいつを抑えられねえ……！」

天鎖斬月を握る手に力を込め……

「黒斬……『月牙天衝』!!」

天を揺るがす黒い斬撃が放たれた。

*

同時刻……外の世界にいる刹蘭は、一護のその力を感じ取った。

「……何ですか？ この出鱈目な霊力は？」

刹蘭の前に居るメイザースが瞠目し、冷静な口調で驚きの言葉を吐く。本来のメイザースを知る者が見れば、夢でも見ているような光景に映るだろう。

「……へく、黒崎一護君……君は本当に未知だ。いや救いなのかな？

まさか、次元すらも超えて——いや、それ以上だ」

刹蘭は感嘆するように言う。目の前のメイザースなど無視して

……

「いやいや、本当に驚きだ。今の力、下手をすれば世界の一つが破壊されていたかもしれないぞ」

口端をプルプル震わせ、頑張つて笑いを堪えるように、

「だけど、踏ん張つて力を抑えたね。いや、今の力は奇跡だな。恐らくあれ程の力はもう、今の一護君には使えないだろう。何たって、そういう『システム』だからね」

「……と刹蘭は続けてセリフを吐く。

「死神時代の一護君……君はその時の力を、優に超えてしまったよ」

*

更に一護の月牙は、あらゆる強者に感じ取られていた。

「何、今の……私ですら、悪寒を全細胞で感じられる程の力だよ」

口に出していったのは幻獄七夢卿のエリゼベート・ピーダネルだ。

「まあ、あんな力、アレが黙っている訳ないか」

直ぐに超然とし、歩む漆黒の衣を着たピーダネル。その口元は不敵な笑みを作り上げていた。

「終焉は近いのかもしれない。また、あの戦いが始まる。どの時まで、私は静かに身を潜めるとしようか」

*

「今の力——《原初》にも届きかねない霊力だな」

黒い司教服のような服を着た男が、何処かの異次元から目を見開いている。

「故に、そろそろ私の出番が来るだろう」

男は何かを悟ったかのように言う。

「さあ、準備は良いかい——聖守護天使エイワス。世界の終りは近いのかもしれない。ああ、この時のための私たち『神のシルベ』だ」

男、《星天》の名を冠する者は歩む。

終わりの近い時を刻みながら——

*

「アハハハハハッハ、アハハハハ!!」

一護の力を感じ取った男は、ナニかなる場所で子供のように大爆笑していた。

「踊る阿呆に見る阿呆、飛び入り大歓迎のパーティーってことで——とか言っちゃったけど、これじゃあ黒崎一護の独壇場じゃん！ クク、アハハハハハ！ もう刹蘭さんもお人が悪い！ 三流映画をダラくとした気分で高みの見物気取るつもりだったけど、これじゃあ僕も動かざるを得ないじゃないか！」

空つぽの男は、空つぽな言葉を紡ぎながら言う。

一護が幻想郷にやってきた時から、神様気分で俯瞰から監視するように眺めていたが、これは干渉しないと面白くない。

よって——

「さあ刹蘭さん。僕らも動くよ。動きまくりますよ。これは大運動会だ。終わりの時と、そして始まりの時は近いですよ」

傍観者は動き出した。

……深い、深い、奈落よりも地獄よりも、なお深い暗黒の極地。

どこにでもいる。無限にいる。ソレは祝詞を掲げながら、次元すら超えた一護の力にすら気づかず、いやそもそも『そのような塵芥程度

の力では関心すらしない”、ソレは新しい時代を見つめる。

—— 誰も関われない。誰も手を出せない。

***可能性分岐、無限に並列している多元宇宙、その更に上位次元、別位相より笑う。

過去？ 現在？ 未来？ あらゆる可能性があるのなら、その理想郷で夢を紡ぐがいい。

混沌とした暗黒の波動が、欲にまみれた祝福の王道を歩む。

「……綺麗だ」

我が真言により開闢しろ——『極界・夢創天世』

そして一護は……月牙を放った後、

力なく、湖の岸に倒れていたのだった。

第45斬【霊夢の光】

《1》

それは私……博麗霊夢が八歳の頃の話。

私は、ただ寂しかった――

あの日、私の母親は亡くなった。

床に臥すでもなく、別段重い病を患っていた訳でもなかった。外傷もなく、ただただ普通に夜、母上と縁側で夜空を見上げていた。

星が綺麗な夜だった。肌を撫でるように過ぎ行く風は心地よく、隣には私と同じように夜空を見て微笑む母上がいる。

明るく、元気で屈託のない笑顔を私に向けてくれたことを覚えている。

しかしそれは私を、ただただ不安にさせないための、偽物の笑顔だと知った時は後悔した。

「ねえ霊夢……」

「なあに、母上」

「霊夢は、大きくなったら、何になりたい？」

それは、親が子に聞く将来の夢。

どういう人間になりたいのか？ どういう仕事をしたいのか？ どういう夢があるのか？ 今にして思えば質問の主旨が分からないが、子供は感じたことを、思ったことを口にする。故に、その問い掛けの回答はとても素直で、嘘偽りのないものであった。

「えーとね……うん、私も母上みたいな立派な巫女さまになりたい」

そう、それが私の夢。

母上みたいな立派な巫女になるのが、今でも変わらない私の夢である。

私は、ただ寂しかった――

「そう。嬉しいことを言ってくれるわね霊夢。なら、これからも私はご立派な背中を見せないとね」

強く、とても強く……母上は私に嘘をついた。

これから何て言葉は、本当、今にして思えば私に■を悟らせないた

めの大嘘だった。

「霊夢。あなたは私とあの人の子供よ。きつと、立派な巫女になれるわ。友達もたくさん作って、人里の人たちからも頼られる立派な巫女にね」

「うん」

「けど努力はしないとダメよ。じゃないと、立派な巫女なんかになれませんからね」

「する。いっぱい頑張って、母上と、父上に褒めてもらおうんだから」

「ええ。その時はいっぱい、いっぱい褒めてあげる」

私は、母上にたくさん褒めてもらいたかった。撫でてもらいたかった。

それだけの、純粋な子供の頃の私。

私は、ただ寂しかった――

「私、頑張るから。頑張るから、ずーと、私のこと見ててよ」

「……………」

その時、母上は直ぐに答えてくれなかった。

今にして思えば、あれは涙を堪えていたのだと思う。私から顔を逸らし、手で目のあたりを宛てがっていたのだから。

「ええ。ええ、霊夢のこと、ずつと見てるわ。だから安心なさい」

「うん！ 約束だよ母上」

「ええ」

私は母上が大好きだった。

ずつと、ずーと、一緒にいたかった。ただそれだけの、純粋な願いと想い。

「じゃあ、そろそろ寝ましようか。お寝坊したら許さないからね」

と、母上は微笑みながら言ったのを、私の脳に焼き付いている。

「うん、おやすみなさい母上」

「ええ、おやすみなさい、霊夢」

だから、だから、これが母上との最後の時間になるなんて、絶対に思えなかった。

*

私は、ただ寂しかった――

朝、母上はそのまま、布団の中で穏やかそうに眠ったままでった。起きない。起きて起きてと、朝だよと言っても、母上は目を覚ましてはくれなかった。

分かっていた。母上の命が、もう少ないと、幼いながらの私でも、分かっていた。

けど分かっているにも認めたくなかった。母上がいない世界なんて、考えられなかった。

いつも横にいて、一緒にごはんを食べて、遊んで、お買い物に行つて、巫女の修行をして、そして新しい朝と一緒に迎える。

ただそれだけの日常。それ以上のことは、願わない。

だから……

「ねえ、早く起きてよ。ほら、朝だよ」

早く起きて、一緒にごはんを食べよ。

そして、一緒にお掃除しよ。

私、いっぱい頑張つてお部屋やお庭をぴかぴかにするから、だから

……

「起きてよ、ねえ、母上……」

早く起きて、またいつものように。

「お寝坊さんは、母上の方じゃない……」

私は無理矢理にも笑みを作り、両目に熱くなりながら言った。

「早く、おはようって、言わせてよ」

私は、ただ寂しかった――

それから、私は一人で博麗神社を管理した。

特筆して何か大きなことがあったわけではなく、母上のいない日常が過ぎていく。

世界は無情だ。母上がいなくなっても、世界の歯車は滞りなく回り続けた。

私は成長する。霊力も増したし、異変の解決も遂行できた。魔理沙という掛け替えのない親友もできた。人里からも頼られるようになった。

私は、母上のような立派な巫女に、少しはなれた。なれたけど、母上は私を褒めてくれない。見ていてはくれなかった。撫でてもらえなかった。

約束したのに、約束したのに……

私は、ただ寂しかった――

神社に帰り、「ただいま」と言うも、もちろん誰も「おかえりなさい」とは言ってくれない。

ごはんを作っても、一緒に食べてくれる人がいない。

一緒に神社のお掃除をしてくれる人もいない。

いつも隣にいた母上もいない。

「……寂しいよ、母上」

夜、一人でいるときは不安しか募らない。

母上のいない、誰もいない神社で一人は、寂しい。不安になる。悲しくなる。

だから、私はいつもお布団の中で泣いた。

「母上、父上、会いたいよ……」

母上がいなくなつて、父上もその前からいなくなつた。

一人は嫌だ。寂しい。

何年たつても、慣れない一人の夜。

家族がいない、一人で生きていかなければいけない。どれだけ霊力や体が強くなつても、心が弱いままだ。両親を思い出して、泣いてばかり。

一人の寂しさに耐えられない。耐え切れなかった。

私は、ただ寂しかった――

*

「お前は一人じゃない」

けど、私の夜の闇に光を与えてくれるように、一人の男と邂逅した。そいつは明るく、元気な男。まるで私の母上のような、笑顔を向けてくれる男だった。

「俺はお前の味方だ。だから、安心してくれ」

私の一人の夜から、二人に変わったのだ。

神社に帰り「ただいま」と言うと、男は「おかえり」と言ってくれた。

ごはんを作ったら、一緒に食べてくれた。

一緒に神社にお掃除をしてくれた。

いつも、隣にいてくれた。

だから……

「もう寂しいなんて言わない。だって……」

私は、嬉しいかった――

「一護、私はあなたのお陰で、ようやく心が晴れたわ」

それが今の私の、純粋な想いである。

《2》

「……………」

「……………」

「……………」

「あら早苗、今日の味噌汁、少し味が薄いわね」

「そうだね同感。けど、私は薄味が好みかも」

「神奈子様。お客様とお食事を一緒にする際は、薄味にするのが常識ですよ」

お日様が上がったばかりの朝、敵地でもあった守矢神社の居間で、一つの座卓に一護、霊夢、魔理沙、早苗、神奈子、諏訪子が朝食のために囲んでいた。

献立はご飯、味噌汁、焼き魚、卵焼き、お新香と言った和がメインの朝食である。

「……………」

しかしどうも、一護と霊夢の箸は進まない。いや、それ以前に手を出していない。

「…………お、霊夢と似たような味付けだな。うん、私は好きだぜこの味付け」

そんな中、魔理沙は二人とは対照的に箸を惜しみなく進める。

「お褒め頂くのは嬉しい限りです。ですが、その赤い巫女と同じ味

付け、と言うのは心外ですね。ええ、何が心外かと言われるすと、生理的にですわね」

さながら自然的に、自分への賞賛を嬉しく思い、そして流動的に霊夢をデイスった。

「……………」

「お、霊夢が怒らなかつた、なかなか珍しいぜ」

「どうにも最近怒りっぽくてね。少し自粛してるのよ」

「怒るとシワが増えると気づいたようですね」

「……一護、怒らない私って偉い？」

「そうだな。つか限界一步手前だろ」

そろそろ霊夢の頭から湯気が出てきそうな気がした。

「ほらほら、せつかく早苗が作ってくれたんだから、冷めないうちに食べんともつたいないよ」

「そうだよ、お米やお魚、野菜なんかは、みんな大切な自然の命。残すのなんて言語道断。美味しく食べてこそ礼儀。ふふん、いいこと言った」

神奈子、諏訪子の二柱から軽く説法？

「……………いただきます」

こうして、どうにも敵地では食事にありつけなかつた二人が、箸を進めた。

「あれ、そういうえばこの山って、いま大変なんじゃねえの？ ほら、山の妖怪がやられてさ」

「ああそのことかい」

朝の食卓でするような会話ではないが、一護は気になつたので聞く。

「犯人は黒尽くめの女。目撃情報は多数、交戦して逃げ帰つた妖怪たちもいて、証言は全員合致。現在は殺された妖怪の埋葬、そして凶徒の行方調査中よ。調査に関しては特に進展は無し。様々な妖怪たちの能力を使ってあぶり出そうとしているらしいけど、まるで『行方不明』になつたみたいに黒尽くめの女の影も形も見い出せてないですよ」

神奈子が簡潔に答えてくれた。

黒尽くめの女——エリゼベート・ピーダネル。

一護たちは知っている。彼女は刹蘭と同じ組織に属する七人の内の一人。妖怪を殺した目的は、具体的には分からないが聖遺物がどうか。

「本当に酷いです……」

そこで早苗がボソリと呟く。

「何の罪もない妖怪を無差別に……こんなこと許されるはずがありません。もし次に現れた時は、守矢神社の総力を上げて捕まえます」

信念の宿った声音で言った。

そんな早苗を見て、一護は微笑みながら何かを言おうとしたが……「その時は私たちも動くけど。足でまといにならないですよ」

霊夢が先に、そう言った。

一護は本当にどうして素直に、一緒に協力しましよとかって言えないのだろうと思う。まあつい前まで本気で殴り合っていた者同士だから、仕方ないのだろう。

「あらあら、全く信仰もない神社の、拙い巫女様にそのようなこと言われたくありませんわね」

「へえ、こんな妖怪の山にあるような胡散臭い神社の暴力巫女に言われたくないわね」

バチバチと、二人の間に火花が飛び散る。

何だかどンドン博麗神社と守矢神社の軋轢が深くなっていった。

「同じ神社の巫女同士、仲良くしたらいいのにな」

ズズズと、味噌汁を啜りながら魔理沙が言った。

「仲良く？ ええ、そうしたいのですが、ご自分の神社の祭神も知らない巫女なんて仲良くできませんよ」

「……………」

そこで霊夢は黙り込み、もう面倒くさくなったのか、傍目からは横紙破りな発言をする。

「博麗神社の祭神はね……この私よ！」

*

朝食を食べ終えた一護は、早苗が買い出しに行くということで付き合っていた。

一宿一飯、その上傷の手当てまでしてもらっては何かお返しをしなければ気が済まない一護。と言う訳で、さきやかではあるが荷物持ちを買ってでたのだ。

「何だか申し訳ございませんね。お返しなど全然構いませんのに」「いや流石にそういうわけにはいかねえだろ。俺の気がすまねえからな」

妖怪の山を抜け、二人は普通の山道を歩いている。

「そういや、何で早苗さんはそこまでして博麗神社を敵視するんだ?」「さん付けは結構ですよ。そうですね、単に商売敵になる危険性を考慮してかしら。実は私たちも外の世界から、この幻想郷にやって来たんです」

「外の世界から? いつ頃なんだ?」

「一年半くらい前かしらね」

「……そうか」

現在は博麗大結界に妙な異変が起きている。そのせいで、一護は自分の世界に帰れないわけだが、外から幻想郷に入る分には問題ないのだろうか。

「何で、幻想郷に?」

「外の世界で、守矢の信仰が失われつつあったからです。どうにも、最近は科学技術の発達によって、こういった信仰が無くなりつつあるんですよね」

「確かに……つうか、そっか。俺と一緒に外の世界にな。な、なあ、外の世界と幻想郷って、同じ時間の流れなのか?」

「ええ、そうですね。まあ断定はしませんけど」

「……………」

つまり一年以上、一護は外の世界で行方不明扱い。

家族や友達が心配してるだろうかと、一護はどこか罪を感じた。

「まあ、結論を言いますと、私たちが幻想郷に来たのは再び信仰心を集めるため。幸い、ここは幻想郷。そういったものは簡単に集まります

からね」

「成程な」

「外の世界でも頑張ったんです。現代を生きる悪しき妖怪や、管公や崇徳院といった怨霊も退散してきた神社の巫女にして清楚な女子高生……だったんですけどね。けどやっぱり、現代社会ではそのようなことをしても意味はありません。どれだけ悪霊を退散しても、守矢は廃れていくばかり。だから、幻想入りしたんです」

「けど、それで救われた人は必ずいる訳だろ。なら意味がないわけねえ。立派じゃねえかよ。少なくとも、俺はそう思う」

「あはは、そういつて頂けると嬉しいです」

そこで一護は思う。

悪霊とは虚（ホロウ）のことなのか？ もしそうだとしたら、虚は斬魄刀で斬らなければ尸魂界に送られない。

いや、そもそも尸魂界は幻想郷という世界を知っているのか？ ここには神様といった存在もいるが、一体どうなのだろう？

と、考えるだけで疑問がどんどん湧いてくる。

「……あの、一つ聞いていい？」

「ん？ ああ」

一護は氷解しないたくさんの疑問の考えを止め、早苗の方に目を向けた。

「あの黒崎さんって、その……あの博麗霊夢と、お付き合いしていたりするんですか？」

「はい？」

突拍子な質問に、一護は一瞬哑然とする。

「だってその、一緒の屋根の下、一年以上暮らしている訳ではないですか。だったら、そういう関係なのかなと、思いました」

「……………」

一護は困ったように頭を掻きながら答える。

「別に付き合ってたねえよ。何か、みんなそう思うんだな。まあ思われなくても仕方ないのか」

「で、でしたら、私とその、付き合ってみませんか？」

「はっ。」

恐らく一護は、今年一番の「？」という疑問符を使ったのではないだろうと思う。

「いえ、その……学生時代も巫女のお仕事で、異性と付き合ったこともなく、お友達もいなかったものですから、一度こう言う彼氏彼女という関係に憧れていました」

「……………」

「だから、ちよつと聞いてみたんです。その、駄目ですか？」

「いや、流石にいきなり付き合うのは……」

別に外の世界に彼女が居るわけでもないし、例え早苗と付き合っても特に問題はないだろう。しかも容姿もいいし、気品もある。家事炊事も完璧だろう。こんなもの願ったり叶ったりだ。

だが……

「悪い。いきなり付き合うってのは、俺もどう答えていいか分からなくってよ」

「そ、そうですね。で、でしたらお友達からでも、いいですか？」

「友達？ そうだな、霊夢と仲良くしてくれるんなら、いくらでも友達になってやるよ」

「う、なかなか大きい壁を作りますね」

「いや、そうでもねえだろ」

そして、早苗は言う。

「分かりました。黒崎さんとお友達になるために、博麗の巫女とも仲良くできるよう頑張ります」

「ああ——」

そんな、少年少女の愛らしい会話をしている時だった。

「アハハハハハハ、ハハハハハハハハハハ!!」

狂いに狂った、まるで世界全てを見下したかのような哄笑が、一護と早苗に降りかかる。

天からなのか、その笑い声の音圧だけで大地が砕けようとしていた。森の木々が折れようとしていた。

「おいおい何だよオイ何ですか!?! いきなりラブコメものですか?」

くっさいんだよ！ 誰も期待してねえつつうの」

瞬間、天が割れた。雲が止まった。風が止んだ。音が消えた。――
時間が停止した。

一護と早苗以外、まるで時間が止まったかのように何も動いていない。
い。

「な、なんだ!？」

「分かりません。けど、発端なら、恐らく……」

早苗と一護は空を見上げる。

そこには空間に穴が空いたかのように、大きな大きな黒い穴。さながらブラックホールが現れたかのような錯覚さえ覚えさせるソレは、とある男が現代に顕現する為の闇である。

「やあやあ、黒崎一護さん。お会いできて光栄で御座いますよ。いや、本当はもつとあなた様のご活躍を俯瞰で見ていたかったですけどねえ、随分とまあグダグダとやっていらっしやいまするので、こうして足を運んでみたわけですよハイ！」

そして、黒い穴から一人の青年が現れる。

年齢は一護と同じくらいだろうか、豪華なピアス、ネックレス、ブレスレット、リングといったシルバーアクセの装飾をしている男。黒い革ジャンを着ており、胸元は全開。髪は茶髪といった、どこか外の世界の不良を沸騰させる典型的な姿。

しかしそこから醸し出る、莫大な霊気は尋常ではない。

前日、神奈子や諏訪子といった神と戦ったが、ソレを上回っている
極大な密度を感じさせる。

「デメエ、何者だ!？」

一護は叫ぶ。

普通ではない。一護は直ぐに感じた。

別に莫大な力というわけではない。いや、そもそもそれが矮小に見えてしまうくらいに、ある特定の概念が抽出してしまえる。

そう、こいつは――

「おやおやまあまあ、怖いですねえ。そう怒鳴らないでくださいよ。僕さ、現代でいうところのお、ゆとりだからさ。もう、そんな目をさ

「ただただでおウチに帰っちゃいそうだよお」
狂っている。

過去、フランは狂気に苛まれていた。しかし、この男はその狂気そのもの。まるで形がない。空っぽなのだ。さながら虚無の塊でいながら、狂気という概念。

「なにかもが軽い——」

「つうワケで僕の名前ね……そうだな、特に名前というものはないんだけど、周りからはこう呼ばれているね」

そして笑いながら、侮蔑しながら名乗る。

「《神無》——果心居士！」

瞬間、期待と絶望、軽蔑、楽観が妙に合わさった声音で叫ぶ。

「踊る阿呆に見る阿呆、飛び入り大歓迎のパーティーってことで——
お一つよろしくウ！」

《3》

果心居士……そう名乗った男のたった最初の行動は至ってシンプルである。

無数の兵器、兵器、兵器。

空には無数の虫のようにの飛行する戦闘機。陸には這い回る大量の戦車。それらが空間に、いきなり現れたのだ。

幻想郷にはとても似合わない戦争にのみ活躍する戦機たち。まるでこれから本当に戦争でも始める光景である。

「さあさあ、破壊の雨だ。破滅の嵐だ。どこまで耐えられるか、見せてくれよ！」

開戦の号砲。

つまり一斉砲撃である。

「ッ！」

空からはミサイルが、前後左右からは火砲が。破壊の狼煙を上げながら、大戦争の幕を上げた。

「黒崎さん！ 散開します！」

「ああ！」

固まっただけでは格好の標的だ。

二人は超高速で一気に飛ぶ。その後には凄まじい爆撃が大地を支配した。

鋼鉄の暴力装置。幻想郷の緑を、青い空を紅蓮の炎に変えながら無作為な破壊が続けられる。この無数の戦機には弾切れがない。ミサイルは戦闘機が飛ぶ限り無数に降り、火砲は対象を撃ち落とすまで無限に攻撃を仕掛けてくる。絨毯爆撃の様相を見せた。

「止めろおおおおお！」

一護は叫びながら、死神の姿に変化し、大きな出刃包丁である斬月を握った。

耳障りなエンジン音を轟かせながら、戦闘機は一護に向けて機銃掃射。

しかし一護には全てが見えているのか、躲し、霊力を斬月に乗せて放つ。そこから放出されるエネルギーは、とても戦闘機で耐えられるものではなく、一気に一掃していった。

「くそっ！ このままだと幻想郷が！」

山が燃える、大地が陥没する。

一護の視界一杯には、まだ戦闘が始まって一分も立っていないのに真っ赤だった。

時間が止まった世界でも、爆撃があつた場所から時間が流れているかのように破壊の祝詞を上げている。

「奇跡『神の風』！」

炎の轟哮が迸る中、早苗はスペルを唱える。

遊び抜き、手加減抜きで放たれた無数のスペルは、周囲の戦闘機のみならず、陸を支配している戦車をも破壊していった。

早苗は怒っている。

急に現れた意味不明な男に命を狙われた程度ならいい。しかし、この幻想郷を破壊するのは絶対に許せない。

「許さない。森を、山を、大地を……あなたは自然をなんだと思つてゐるんです!？」

赫怒の念を募らせながら、1機の戦闘機に座す果心居士に言葉を叩

きつける。

「なになに、あなた自然を愛する偽善少女ですか!? カッ、お恥ずかしい限り、僕は自然になんの愛着もなくてね、別に燃えようが伐採されようが無関心な男なんですよ!」

紅蓮地獄の中、吹き荒れる大熱波を心地よさそうに果心居士は馬鹿笑いしながら答えた。

狂っている。そして放つ言葉に重みを一切感じさせない虚無。まるで早苗は空気に語りかけたかのような錯覚に襲われた。

「ほらほら! まだまだ戦闘機は出てくるぞ。お前たちを殺さんと、穴だらけにしたいと、爆殺したいと、いっぱいいっぱい出てくるよおおおおお!!」

戦闘機を破壊しても、戦車を破壊しても、まるで虫のように無数に湧いて出てくる。

果心居士は、一人で世界と戦争できるほどの力を持っている。いや、本気を出せば世界なんていう範疇では収まらないのかもしれない。まだまだ遊び。傍観しているだけなのだから。

「舐めやがって……黒符『月霊幻幕』!」

三日月状の黒い弾幕が展開され、一気に果心居士に向けて一斉掃射する。

その放射状にある戦闘機は軽く貫き、爆砕していった。

「おーおー、なんかキター、なんかいっぱいキター!」

しかし迫る弾幕に無関心なのか、果心居士は特に何もしない。

そう、本当に何もしない。何故なら、男は狂っているから。

そして一護の弾幕は吸い込まれるように果心居士に被弾し、座している戦闘機ごと大爆発した。戦闘機の欠片は爆風に乗し、周囲の戦闘機ごと爆破の連鎖を繰り返す。

「やったか!?!」

一護はそう声を上げるも、果心居士は期待を裏切るように下卑た笑い声を上げながら、まだ空中にざざしていた。

「クハッ! バツカじゃないの! こんなんで、この程度で、僕を倒せる訳無いじゃん! 頭のネジ外れてんじゃない、新しく付けてあげよ

うかあ〜」

果心居士は無傷。

しかも服の乱れも一切ない。結界でも張ったわけではなく、防御したわけでもない。本当に、全く乱れがないのだ。

「ほおら、まだまだいっくよ〜つと」

そして烈火怒涛の爆撃。

終わらない。切りがない。無限の銃撃火砲。連続する爆音を轟かせながら、空が赤く染まっていく。

「態勢を崩すなよ！ 常に霊力の防壁は張っておけ！」

「はい、承知しています！」

破壊しても破壊しても切りがない。

どれだけ戦機を破壊しても、無限の貯蔵を有しているのか空間にいつの間にか現れる。

つまり戦機を破壊するより、空中に欠伸をしながら座している果心居士を斃すしかない。

「どうした果心居士！ ビビってないで、テメエが掛かってこい！ 効きやしないんだよ、こんな鉄の塊なんか！」

怒声一喝。一護は挑発にも似た言葉を叩き、周囲の戦闘機を破壊していく。しかし戦機の攻勢は激しくなり、激流のように密度を上げていく。しかし一護は一人ではない。今は早苗という相棒がいる。故に――

「秘術『一子相伝の弾幕』！」

無数の弾幕が、戦機を物ともせずには撃ち碎いていく。

「ん〜、そろそろ味気なくなつたかな。なら、こいつはどうだい？」

急に冷静な声になった果心居士は、瞳を陸に向ける。

瞬間、空間を引き裂きながら、大きな要塞が現れた。

さながら戦車のような形をしている、巨大なカノン砲――これは80cm列車砲。ドイツ軍が二次大戦で使用した、巨大な砲撃装置である。

「さあさあ、祭りだ祭りだー!!」

瞬間、列車砲から有り得ない火砲が轟いた。

さながら機関銃。砲弾が連鎖爆発でも起こしているかのような爆音を上げ、火砲が連射される。一発一発が凄まじい破壊力を有している列車砲は、砲弾の装填のために時間を有する。しかしそれを反則の域で、連射しているのだ。

そもそも常識など通用しない。これが果心居士の力である限り。

「黒斬『月牙天衝』！」

一護は直さま己の奥義である月牙を放ち、列車砲を一呑みにし破壊する。

しかし……

「まだまだ、たくさんあるよ〜！」

再び列車砲が、しかも次は一機ではなく、数十単位で現れた。

同時に破壊の雨あられ。轟音を轟かせながら、味方である戦闘機や戦車も破壊していく。

「こんなもの、この幻想郷で出さないでくださいー！」

早苗は弾幕を展開し、全ての列車砲に向けて放つ。

爆破、爆破、爆破。止まらない破壊の数々。止まらない破壊の轟音。

「ふむふむ、成程成程。この程度の兵器では意味を成さないか〜。ん〜、いいよいよ、戦争はこうでないかね！ もっともっと、面白いものを出してあげるよ〜！」

果心居士は手のひらを、前方に向ける。

途端に、一護と早苗の目を疑うものが現れた。

「祭りだ祭りだ！ コオオオオオイ——リトルボーイ!!」

それは第二次世界大戦で使用された悪魔の兵器。一護のいた世界、そこの広島に癒えない傷を遺した原子爆弾。

「——ッ！」

二人は即座に超濃密度の霊力の膜を全身に張る。

瞬間、破滅的な爆発が発生した。そこに宿る爆発の炸裂は、二人は優に吹き飛ばした。危ない、本当に危険だ。あんなもの、もう少し早く爆発していたら二人は死に瀕していたかもしれない。

いや、それよりも危ないのは果心居士だ。あんなものを至近距離で、しかも自分の身まで危ないというのに軽い気持ちで爆発させた。

狂っている、こんな奴にまともな神経で挑んではダメだと、改めて深く理解した。

周囲に乱れ飛ぶ陽子や電子などの素粒子の奔流を抜けながら、果心居士に肉迫する。

「いいねえ、いいよお、やつぱり流石だわ！ 惚れちまいそうだぜ、この野郎！ ツアーリ・ボンバア!!」

世間話をするような気軽さで、更なる悪魔的兵器が姿を現した。

爆弾の皇帝——ソ連が開発した人類史上最大の水素爆弾。その威力、そして衝撃波はリトル・ボーイなど赤子のように感じてしまうほど。つまるところ数千倍以上。こんなものがここで爆発などしたら、それこそ冗談抜きで幻想郷は滅びる。

よって——

『卍解』！』

逡巡などしない。

即座に卍解を行い、片手に漆黒の刀が握られる刹那、一護は斬撃を放った。

威力は弱く、かつ斬撃は超光速で。それを天に向けて、斬撃を水爆に放ち大気圏外へと持っていく。間髪の入れない動作により、爆破は圏外で行われた。凄まじい大音響と衝撃波の嵐が下るも、被害は最小限に留まった。

「何なのよ、何であんなものを何も考えなしに出せるのよ！」

早苗は訴えるように言うと、即座に果心居士に攻撃を仕掛けるも

……

「ならなら、これなんてどうかな、けっこうきついかもよ」

瞬間、果心居士の頭上に大きな鉄の筒が現れた。

「超電磁砲——いっけええええええ！」

それは物体を電磁誘導により、超光速で弾丸を放つ電磁加速砲。まさに雷速を行く弾丸の速さに、瞬間的な対処が出来る訳もなく……

「アアアアアアアア!!」

霊力の膜を張っていなければ、今頃、早苗は即死だったであろう。凄まじい衝撃が全身を襲うと、地面に叩きつけられた。

「ハハッ！ ほらほら、なに簡単にやられてんのさ！ このメス豚がッ！」

哄笑を上げながら、早苗を罵る。

しかし早苗は、ただでやられる女ではない。

「……甘いのよ」

「おお？」

早苗が呟くと、いつの間にか弾幕が果心居士を囲んでいた。

「吹き飛びなさい！」

瞬間、超電磁砲ごと弾幕が果心居士を襲い爆発した。

そして、それだけでは終わらない。一護は即座に霊圧を溜め、果心居士に向ける。

「黒斬『月牙天衝』！」

「Rods from God！」

しかし、それより速く一護の眼前を光が通り過ぎた。同時に凄まじい爆発が発生する。

「グアッ！」

「アハハハハ！ まさか超電磁砲しかないと思ったか！ 甘い、んゝ甘いねえ！ あまあまだね、神様の杖を忘れてるでござるよ！」

神の杖——ロズ・フロム・ゴッド。まさに人類では手出し対処できな、最強の一撃。

宇宙兵器、衛生から放たれる神の鉄槌による小型ロケットの音速以上の降下発射。そこに宿る運動エネルギーにより地上に衝突すると、核爆弾に匹敵する爆発を起こす。

「ヒヤハハハハ！ どう？ どう？ 僕って強いでしょ！ 最強でしょ！ ねえねえ、ねえったら！」

狂っている。イカれてる。基地外である。

まるで酔っぱらいをみているかのようにも感じてしまう。

「えー、何でも言ってくれないの？ あっ、分かったぞ。僕のもっと本気を見たいんでしょ！ あくいいぞ、いいを見せてやるよ！」

空中に座していた果心居士が立ち上がり、天に両手を挙げる。

「誇るな、怠けるな油断するな。お前の使命はまだ残っているのだから」

ら、僕と再び逢う日まで心の紐をゆるめるなかれ」

酔いしれた祝詞を唱えながら、果心居士の全体像が蜃気楼のようにあやふやとなる。

しかしそこに宿る得がたいどす黒い何か……それこそが狂気の渦なのだろう。

「波切孫七郎ト申は、無レ隠武辺之者、又ハ氣チガ者ナレバ——『神打創造』」

そして狂気の渦から、死神が持つような黒い黒い大鎌が現れた。それを握ると、悲鳴を上げるように術を名乗る。

『狂器幻虚——自己破壊ノ奇術師』！』

それは見る者全てを狂わせる異質の武器。

そこにあるだけで、同じ空間にあるだけで世界そのものが狂っていく。空には無数の目と口が。大地は黒い溶岩が。まるで世界そのものが変貌を遂げたかのように、狂いに狂っていく。

しかし果心居士は変わらず狂っており、それでいて蜃気楼のように空っぽな男。虚無と狂気に満ちた男である。

「アハ、ハハハハハ！ さあ狂え、僕のように狂っておくれ！ きつと、いい夢をくれるよ」

ここは狂った世界。

故に、そこにいるだけで並の人間だったら一瞬で狂い、自己崩壊を起こし、死をも苦しい地獄を見ることになる。

「ガハアツ、ツウウウウー」

「ウウ、アアアアア……」

一護と早苗は頭を抑える。

急な頭痛と吐き気。体が狂気の世界を拒んでいるがための現象である。

しかしこれは時間の問題。例え神様であろうが、この世界にいるだけで気が触れ、最終的には自己崩壊を起こす。

故に時間の問題。一度、果心居士の力に嵌れば、抜け出すことは不可能。空間移動？ 別次元へ移動？ 否否。そもそもこんな空間にいるだけで、そのような行為はやる気が削げる。

狂気に満ちるとは、酔い痴れるのと同じ。つまり気持ちが良いのだ。気持ちよくて気持ちよくて、堪らないのだ。お酒を飲んで気持ちよくなるのと、楽しい夢見心地になるのと、気持ちよく性交を行うのと、薬物すつて気持ち良くなるのと同じ理屈だ。いや、そのの何倍も気持ちがいいのだ。

よつて、やる気が削げる。気が狂う。

なら果心居士を倒す？ もっと不可能である。

なぜなら前述の通り、まず倒す気すら失せる。それにもし戦う意思があつても、彼は外部からは絶対に倒せない。

一護がどれだけ攻撃を与えても、早苗がどれだけ攻撃を与えても、自ら放った爆弾を喰らつても無傷なのだ。

理由は簡単。狂っているから。空っぽだから。

狂っているから外部からのアクション、あらゆる能力に全く同じ反応しか示さない。故に全くもって通用しない。同時に虚無だからこそ物理的なダメージを負わない。果心居士は狂気と虚無の塊。実態はなく、あるのは自己陶醉に満ちた狂気のみである。

「アハハ、ハハハハハ！ ああ楽しいなあ、素敵だなあ、羨ましいなあ！ 僕も、はしやぎたあい！」

そして大鎌を振り上げる。

ここに、二人に向けて更なる一撃を加えようとした瞬間だった――

『神打創造』――

『博麗陰陽 東方幻想斬』

それは一護の口から放たれたものだったが、しかし声色が違った。そもそも、この状況で一護がまともに言葉を発せれるわけがない。

さながら活発な女性のような声色。同時に、眩い閃光が迸った。

「あなたの力を借りるわよ」

そして一護は早苗に手を伸ばす。いや、今は一護と言つては語弊があるかもしれない。一護の体を使って、何かを行っているものがあるのだから。

『神器・東風谷早苗』

瞬間、果心居士の世界が抹消し、元の緑がいつぱいの幻想郷に戻つ

た。まるで今までの激闘が無かったかのように。

「はあ？ はあ？ なになにに何ですか？ この超展開？ マジやめてくんろく、テンション下がろうく……あ？」

ここに来て、空っぽの男は狂気を消し、初めて瞠目した。

同時だった――

「祓え清め。早苗『現人神ノ風祝』」

一護の持つ天鎖斬月が、黒いお祓い棒になっており、それを軽く振るった。

瞬間、果心居士は本当の意味で蜃気楼のようになり、体が消滅していく。

「あく、そつかあ、あんたかあ。あんたが相手じゃ、僕では到底及ばないよねく、マジ酷いなあ」

軽い口調で果心居士は言う。

「まあいいやく、僕がここで消滅するのはあ、刹蘭さんにとっても都合が良さそうだし。だってだって、僕たちはあくまで博麗の為の『試練でしかないんだからねえ』。刹蘭さんが用意したあ神のシルベである『五つの試練』。まあいつか。それじゃあ僕は消滅するけどお、本当に良かったのかい？」

果心居士は一護にとり憑いているであろう、女性に問いかける。

「あんたが最後の賭けでえ、強引に幻想入りさせた黒崎一護つて子く。

その子に、全てを賭けてもお？」

その問に対して、一護の中の何かは頷いた。

すると果心居士は「あつそおく、じゃあバイバイ」とだけ言い残し、完全に消滅したのだった。

そしてその後、一護と早苗は完全に気を失い、異変に気づいた霊夢たちに助けられた。

この戦いによる被害は皆無。まるであんな壮絶な戦いが嘘だったかのように、時は回り、着実に終わりに向かっていたのだった。

第七章 〈東方地底核篇〉 第46斬【雪かき】

《1》

「……………寒い」

早朝——博麗神社にて、ニットキャップを被り、マフラー、手袋、耳あて、レインブーツ、防寒着と言った万全の装備をして少年——黒崎一護は雪かきを片手にこれより面倒な作業に入る。

猛雪が降り終わった幻想郷は、まさに白銀の世界。

肌を突き刺すような寒さ、息を吐けば白い天幕。降り積もる雪は、まさに大地の白化粧。

幻想郷は冬を迎えた。一護にとって幻想郷に来てから二度目の冬である。

「いや、にしても積もったな。すげえ歩きづらいぜ」

一護の後ろから、雪を踏みしめながら歩く霧雨魔理沙が同じく片手に雪かきを持ちやってきた。足首くらいまでは余裕で積もっているので、すごく歩きづらい。

「霊夢は部屋の掃除で、俺たちはこのいつ終わるかもわからない雪かきに精を出さねえといけないのか」

「マスパで雪を一掃していいかって霊夢に聞いたら即却下されたからな。そうすれば早く終わるのに」

「いや、それは俺も却下する」

もし、あの極太レーザーが境内の石畳及び地面を破壊されては、二次被害が生まれる。もちろん、それを修復するのは自分たちになる。

「魔理沙、足元には注意しろよ。滑りやすくなってるからな」

「承知してるぜ。いくら私はずっと箒に跨って飛んでるからって、そこまでお約束なこと——」

ツルン、ドサ……と、見事にお約束通り顔面から転んでくれる魔理沙。

前途多難だなど思う一護は、魔理沙を助け起こした。

「悪い悪い。いやー、本当に滑りやすいなこりや。一本取られたぜハッハハハハ」

顔や服を雪まみれにしながら笑う。

「ほら、笑ってねえでやるぞ。こいつは、時間がかかりそうだ」

「そうだな、ちよつとした異変解決より面倒そうだ。この一面雪だらけの敷地を、かきかきするんだ、旨い飯をたらふく食わせてもらうぜ」
「はいはい。終わったら、いくらでもご馳走してやるよ」

霊夢から雪かきの依頼が来た瞬間に、飯を餌に魔理沙を釣ったのだ。流石にこの敷地すべての雪かきを一人というのは、洒落にならない。

「骨が折れそうだ。いや、マジな意味で」

「普段慣れてないことだからなく。滑って腰の骨をやるっていうのは、よくある話だぜ」

とりあえず、雪かきを始める。

去年もやったにはやったが、雪かきというどうにも慣れない作業は腰を痛める。その上、雪はなかなかどうして結構重い。

融雪剤でもあつたら、もつと効率よくできるのだろうが生憎とそのようなものはない。

「何かさ、ここの雪を操る妖怪とかいたらいいのにな」

「確かに。雪女とかか？」

魔理沙の発言に一護は答える。

「雪女か。つかさ、やっぱこの量はきついから、もつと誰か呼ばねえか。使えそうな奴を」

「使えそうな奴って、お前な……」

「つう訳で思ったら行動だ！ ちよつと行ってくるぜ！」

「つて、オイ魔理沙！」

すると、一護の了解を得る前に雪かきを放り投げ、魔理沙は箒を片手に飛んでいった。

「あの野郎……」

数分後――

「ほら、連れてきたぜ」

「最強のあたいが登場よ！」

(早速役に立たねえ奴を連れてきやがった！)

魔理沙が連れてきたのは氷の妖精であるチルノ。

確かに能力的には冷気を操る、氷を操るといったものだが、雪をどうこうできるとは思えない。雪を消したり、移動させたり等等。

「ふふん、このあたいが来たからにはこんな雪なんて即時解決よ！

解決したら報酬として、一護をもらうからね！」

「何でだよ……」

「そうすれば、いつでも一護と弾幕ごっこが出来るからよ！ あた
いって頭いいでしょ！」

「そうだな。ああ、頭いいよお前は」

呆れながら一護は言う。

「ふふふ、うんじや、氷の大船に乗ったつもりで期待しておきなさい
！」

「よっしゃ、流石は私が選んだ逸材。任せませ！」

そしてチルノは行動に出た。

「……なあ魔理沙、本当にチルノで大丈夫なのか？」

一護は魔理沙に小声で耳打ちする。

「うんや。実はレティあたりをお願いしようと思ったんだけど見つからなくてさ。しゃあなしに直ぐにエンカウトできるチルノにしたんだ」

「酷い話だな」

「……つかさ、何か一段と寒くなってきたくないか？」

「ん……あ、ああ。そうだ、な」

と、チルノの方を見ると。傍から見てもチルノの頭の上に？がいくつも浮かんでいるのが見て取れた。

「あつれく、おかしいなあ。うまくいくはずだったんだけどなー」

「おいチルノどうしたん——」

ツルン、ドサ……と、再び魔理沙が顔面から雪の上に転んだ。

「……大丈夫か、魔理沙？」

「何か、滑りやすくなってるぜ！」

顔を雪に埋めながら言う。ちよつとした死体だ。

「アハハハハハハハ!! 魔理沙がスツ転んだ! バツカみたい!」
「アハハハハハハハハ!!」

「……カチンと来たぜ」

ドカツ! グチュと、生物的に危険な音を響かせながら、魔理沙は起き上がると同時にチルノの頭頂部に拳骨を落とした。

「きゃふん……」

そのままチルノは倒れた。

「……まあ寒くなつたのはチルノの能力が働いたせいだな。それに相まって更に地面が凍り滑りやすくなつたと。これじゃあ、更に作業の効率が悪くなつただけだったな」

一護がため息混じりに言う。

「くそ、次はもつと役に立つやつを連れてくるぜ!」

「いや、もう俺たちだけでやろうぜ。そっちの方が速く——」

「行ってくるぜ!」

一護が言い終わる前に魔理沙は飛びだった。

数分後——

「ほら、連れてきたぜ」

「おいおい、いきなりこんな所に連れてきて、何をさせるつもりだ?」

(次は妹紅か。まあ、チルノよりは期待できるな)

綺麗な白銀の髪を靡かせながら、不老不死の人間である藤原妹紅が、魔理沙に連れられてやって来たのだ。

「ちよつと、あたいに任せてくれるんじゃないの!?!」

「お前は黙ってろ」

一護はチルノの口を封じつつ、予想外の人物が現れたことに少し驚く。

「よつ一護。久しぶりだな」

「そうだな。まさか、妹紅がここに来るとは思わなかった」

「来るとはってより、ほぼ強引に連れてこられたようなもんだけど。まあ一応、報酬というか見返りがあるって聞いたから来たんだけどよ」

「……見返り？」

「一護と弾幕勝負をする。正々堂々、サシでな」

「……………」

そんな気はしていた一護。

「悪い一護。それでも言わねえと、動いてくれないと思つてさ。けどこれで解決したら、万事OKだろ？ 少しくらい付き合つてやれよ」

「勝手に決めてその言い草かよ」

今更、断つても不可能だろ悟つた一護は、頭を抱えつつ妹紅に言う。

「えっと、妹紅。お前に頼みたいことつてのは至つて簡単だ。この目の前に広がる積もりに積もつた雪をどうにかしてほしいんだ」

「何だ、そんなことか？ 別にいいぜ、つまり溶かせばいいんだろ？」

「ああ、そういやお前は炎とか出すの得意だったな。頼むよ」

「分かつた。んじゃ、軽く任せろ」

そして妹紅は行動に出た。

「ふふ、どうだ一護？ 今回はこの場に最適な炎の使い手を選んだ。間違いないだろう？」

「まあな。さつきよりは期待できる」

「ちよつと！ どういうことよ、この最強のあたより期待できるつて?! 二人の目はうじ穴なの!!」

「節穴な。何だよ、うじ穴つて」

蛆のいる穴を想像してみたら、単に気持ち悪かつた。

「まあいいわ。あの女の力量を見せてもらおうじやないのよ。ふん、このあたより役に立つわけないしね！」

「何で上から目線なんだよ」

しかもチルノの場合、損害しか出なかつた。

「……………」

ふと、一護は自分の足元を見ると、そこには水が溢れていた。

「これは……………しまった！」

ここで一護は過ちに気づいた。

雪解けしていくということは、つまり水になること。

妹紅は宙に浮きながら、己が灼熱の炎を火の玉のように飛ばしつつ

容赦なく白い雪を、どんどんと地面の雪どころか博麗神社の屋根の雪まで溶かしていく。

まだまだ寒い季節であり、この量の雪が溶けたら水浸しで霊夢が切れる。そして水が凍ると更に怒る。

一護は焦りながら言う。

「妹紅！ ストップ、手を止めてくれ！」

「はあ？ 手は動かしてないぞ？」

「間違った、炎を消してくれ今すぐ！」

「またどうして？」

「いいから頼む！」

妹紅は釈然としないまま、火の玉を消す。

「急にどうしたんだよ？ セツかくお望み通り雪を溶かしてたのに、いきなり消せとはどういう了見だ？」

「悪い、けどそれどころじゃなかった。このままいくと辺り一面水びたしからの全面氷張りになっちまう。そうなったら俺は霊夢にお灸をすえられる」

「何だよ、私なりに頑張ってたのに……」

少しむくれる妹紅。

「本当にすまん」

「ふふん、やっぱりポツと出のキャラなんかじゃ、あたいより活躍できるわけがないのよ。隅っこの方で縮こまっているのがお似合いね！」

「……………」

「さあ、すみやかにその片の軒下のもとと下でバカ犬のように寝てなさい」

「おい妖精。あまり舐めていると燃やすぞ」

妹紅の殺意ある笑顔を向けられたチルノは、黙って一護の背後に隠れた。

「ふうむ。妹紅でも駄目か。だったら、もっと慣れてそうな奴を連れてくるぜ」

「いや慣れてそんな奴とかいいから、普通に雪かきで——」
「行ってくるぜ！」

一護が言い終わる前に魔理沙は飛びだった。

数分後――

「ほら、連れてきたぜ」

「えっと、なぜ私がここに連れてこられたかは存じませんが、一体何の用なのですか？　そろそろお昼の支度を始めないといけないのですが」

（次は妖夢か。まあ、一番家庭的っていうか、こういう事にはうってつけだよな）

半霊の幽魂が妖夢の傍らに浮きながら、いつも通り二本の刀を佩刀した庭師である魂魄妖夢がおそらく強引に、魔理沙に連れてこられたのだろう。

「何その変な白いフワフワしたものを取ったら、ただのモブキャラになりそうなキャラの薄い奴は？」

開口一番に悪口雑言を言うチルノ。

「そんな酷いこと言ってるじゃねえよ。お前が口だけなのはよく理解してるからよ」

「何よ！　あんたも結局役に立たなかったじゃない！」

「お前ほどじゃないけどな」

「キィー、こいつムカつくう！」

チルノが妹紅に一方的に火花を散らしている。

「あの、黒崎さん。一体これは何の集まりなのですか？」

「え、ああそうか。やっぱり聞かされてねえか。まあ大した集まり……てよりも、魔理沙が連れてきただけなんだけど」

一護は博麗神社の境内を見渡し、

「この積もった雪を、一言で言うかどうかにかしてほしい」

「成程、つまり雪かきと言う訳ですか」

「ああ」

妖夢は庭師であり、幽々子に幾十年も仕える幻想郷の中では物凄く一般常識の通じる数少ない人間。その上、半人半霊であるが故、普通の人間よりも身体能力は圧倒的に高い。

（霊力の込めた刀ひと振りで雪を蒸発、とかさせたら凄いやな。まあ

それはなくても、妖夢なら直ぐに解決してくれそうだ)

どこか妖夢なら、なんとかかしてくれれば、一護は期待に胸を膨らませている。

「む……」

「……………」

一護が妖夢に目をキラキラさせているのを見て、チルノと妹紅はどこか不満そうにしていた。

「では、始めさせて頂きます。ご期待に添えるかは分かりませんが、精一杯奮闘してみたいと思います」

そして妖夢が行動に出た。

「どうだ一護。この私の人選は？ 完璧だろうか？」

「まあな。これなら俺も安心できる」

「だろ。いや、私もそう思っただよ。見返りとかも求める素振りないしさ」

やりきった感で魔理沙が言うのに対し、横目でチルノと妹紅がジト目で睨んできた。

「何よー、あたいが欲張りって言いたいの！」

「それに一護、何でそんなに信頼しきってるんだ。私たちの時は期待すらもしていなかったのか？」

「そうだよ！ 最初からあたいたいじゃ無理だっと思ってたの！」

「これじゃあ、まるで私たちが前座みたいじゃないか。ちよつと悲しいぞ」

「いや、別にそういうわけじゃねえよ！ みんなにだって期待してたし、見返りはあつて当たり前だと思ってたからさ」

一護は二人の言葉に対し、早口でまくし立てた。

「それに、特別妖夢にだけ期待している訳じゃねえよ。二人が俺たちのために頑張ってくれたのも充分感じた。だから、その何だ、後で俺が何かお礼するから、もちろん妖夢にも。見返りとか、そういうんじゃないくて、そうでもしないと俺の気がすまないし。だから、もしそういう風に思わせてしまったんなら、すまない！」

「うーん、一護がそこまで言うんなら……しょうがないから許す！」

一護の言ったことの半分ほどの意味合いを聞き取るほどの頭がなかったチルノは、熱意にのみ押し入れ満足そうに強く頷いた。

妹紅は少し言いづらそうに、そっぽを向きながら言葉を紡ぐ。

「たく、一護に謝らせてしまったら、まるで私たちが詰ったようじゃないか。言っておくけど、別に怒ってないからな」

「ああ、分かっているよ。それにさっきも言ったけど、特別に妖夢だけを期待してるわけじゃねえ。ただ、今回は妖夢がやるってことで、期待しているだけであって——」

妹紅との対話から妖夢の方に視線を向けると、

「うんとこよいしょっ。やっぱり雪は見た目によらず重いですね……っど！」

至って普通に、赤い大きなシャベルを片手に雪かきをしていた。

(あれ、すげえ普通ッ！)

何だろう、妖夢だったら刀ひと振りでどうにか何て甘いことを考えていた。そうでなくても、もつと何か凄い方法で雪を葬ってくれと思うっていた。しかし予想とは裏腹に、物凄く普通だったのだ。

「黒崎さん、雪かきをここまで本腰を入れて行ったことはないのですが、なかなか労力を伴う作業ですね。雪かきだけでいい鍛錬になります」

清々しい笑顔でいい汗を流しながら、妖夢はせつせと雪かきに精を出す。

(い、言いにくい。これだったら最初と何も変わらないって。妖夢を呼んだ意味がないって……)

普通に雪かきをするのだったら、初めから魔理沙と二人で行っている。

「……とりあえず妖夢にはあのままやってもらおうとして、次の奴を連れてくるぜ」

「いやもう普通に雪かきしたほうが早く終わる気がしてきた」

「それじゃあ私のプライドが許さないんだよ。行ってくるぜ！」

「……何だか嫌な予感がしてきたな」

そして……

魔理沙は次々と有志を集い、除雪を行った。

妖夢の次は同じく家庭的な鈴仙。上記と同じで普通すぎて失敗。

その次は複数の人形を従えるアリス。たくさんの人形を使って雪かきを試みたが、小さい人形では効率が悪く失敗。

その次は最高の科学力を持つと言われる河童の河城にとり。新開発したと言って、雪を全てどこかに吹き飛ばすという、便利なのか迷惑なのか分からないアイテムを持ってきた。手違いで使用してしまい、必死に雪かきをしている妖夢に甚大な被害が文字通り降り注いだ。

そのまた次は何故かルーミアが呼ばれた。魔理沙曰く封印を解除して、ルーミアに雪を消し飛ばしてもらおうなんていう奇抜なアイデアを出したので即却下した。

「つか……こんなに集めてどうすんだよ魔理沙」

「收拾がつかなくなったな」

何て他人事で言う。

「全く、魔理沙は後先考えないで動くから。まあ了解して付いて行った私にも責任はあるけど」

アリスが溜息混じりに呟く。

実際、二人三人あたりで止めて、とりあえず皆で雪かきをしていただいた方が良かったであろう。過ぎ去った後の後悔である。

「うくん、次は雪のみの解析処理を行って、それを削除する方式を組み込んで……」

にとりはにとりで賽銭箱の上に座り込み、何やら次の発明品の考え耽っている。

てか、賽銭箱の上に座るのは止めて欲しいと思う一護。霊夢に見られたら叱責が飛んできそうだ。

「ねえねえ一護。何がしたかったのお？」

「そうだな、何がしたいんだろうな俺たち」

ルーミアの純粹な質問に一護は頭を抱えた。

今、しっかりと手を動かしているのは妖夢と、その姿を見て手伝わなくちゃと思った鈴仙のみ。二人のおかげで何やら五分の一くらい

雪かきを終えている。

これなら最初から、魔理沙と二人でやっていたら終わっていたのかもしれない。いや、魔理沙はどこか怠けそうな感じがするから、ここまでスムーズには進まなかっただろう。

「とりあえず、あの二人がしつかりやってるんだから、私たちも手伝って早く終わらせましょう」

「いや、後一人だけチャンスをくれ！ 次こそ最適なやつを！」

「もう黙って手だけ動かさないさい魔理沙」

アリスは魔理沙の首をガシツと掴み、邁進を阻んだ。

「グツ、な、何するアリス！ 行かせてくれよ！」

「ダメよ。早く雪かき持ってやりなさい」

アリスの強い物言いに負けた魔理沙は渋々、箒を手放し赤いシャベルを握った。

「……ねえ、そういうえば何で魔理沙はあの館の連中は連れてこなかったの？」

「あ、本当だ。そういえばいないね」

チルノとルーミアがああ館……つまり紅魔館の面子が一人も連れてこられていないことに気づいた。

「ああ、それはな。あそこに行くといちいちパチュリーが本を返せ返せとうるさいから、行くの止めた」

と、アリスに引つ張られながら魔理沙が言った。

「……どっちかってえと、あそこが一番除雪に使えそうなものたくさん持ってそうだよな」

「……呼んでこようか？」

「いや、みんな雪かきした方がいいだろう。下手に呼ぶと面倒そうだし」

妹紅が行動に出る前に、一護は止める。

妹紅は「んじゃ」と言い、自分の頬を両手で挟むように叩き気合を入れなおす。

「それじゃあ、やるか。こう見えても雪かきは経験があるからな。期待しててくれ」

「ああ、期待してるよ。おーい、チルノ、ルーミア、にとり、雪かきするから手伝ってくれ」

「はーい、やるよー」

「ん、分かった。手伝うよ。そのつもりで来たんだし」

「えー、あれをやるのー。面倒くさい」

ルーミアにとりは快く了承してくれたが、チルノは嫌そうにした。

「お前は何の役にも立ってないんだから、少しは役に立って見せろ」

妹紅が雪かきを手に、チルノの首根っこを掴む。

「にやー！ やめろーこのバカ！」

「お前にバカとだけは言われたくねえな。結構ムカつく」

「にやーにやー！ 離せこのバカ！」

「うるさい。口より手を動かせ」

さながら猫のように持っていかれるチルノ。

「……さて、じゃあみんなで雪かきだ。とりあえず、まずは終わらせることが先決だ」

こうして一護たちの雪かきが始まろうとした時だった。

「あつれえく、みんなで何やってるのお？ ヒック、へへへ、ちよおつと飲みすぎたかなあ？」

まさにベロンベロンに酔っ払い、顔を赤く染めた鬼こと伊吹萃香が現れたのだ。

「おー、なんか楽しそうなことしてるねえ。私も混ぜてよお」

フラフラとした、いつ転んでもおかしくない千鳥足で一護たちに近づいてくる。

「よお萃香、久しぶり……つか、何で朝から酔ってたんだよお前」

「うい？ 朝から飲む酒も、これまた美味いんだよお。分かってねえな！ これだから酒も飲んだことのないお子チャマは」

「……何かスゲエうざいんだけど」

酔っている者を相手にするほど、辛いものはない。

「でえ、何やってんの？ もしかして雪かきやってやっ？ なら手伝ってやろうか？」

腰に下げてる瓢箪の酒を一気に煽り、

「——せえい、やー！」

凄惨たる質量と、莫大な腕力及び妖力を纏った拳を前方の積もった雪と雪かきをする少女たちに向けて振るう。

それだけで暴力的な風圧と、それに乗って放たれた妖力が、全てを一掃するようにさながら紙くずを吹き飛ばすよう、全面の雪と少女を散らした。

まさに阿鼻叫喚。急すぎる展開に誰もが追いつけず、弄ばれるように吹き飛ばされた。

「……………」

吹き飛ばされなかった一護のみが、呆然と立ち尽くす。

「あつれ〜、どったの一護お？ お望み通り雪を無くしてあげたよお」

確かに塵芥程度の雪は残っているものの、雪かきをしなくていいくらいに雪はなくなった。代わりに、そこかしこに死屍累々となった少女たちが……

「て！ 何してくれてるんだよ萃香！ 確かに雪は無くなったが、みんな怪我しちまつたじゃねえか！」

「んあ？ まあ何かを得るためには、何かを犠牲にしなければならぬってことだよ」

「何で雪かきで犠牲が生まれるんだよ!? いや、でも雪国ではあつてもおかしくないのか……いやいやそれ以前に今日の雪かきだったら犠牲なんて絶対出ないから！」

「あーもう〜、うるさい、なあ！」

一足、力強く地団駄を踏んだ。

その力のみで、ちよつとした地震が起きたのではないかと錯覚するほどの揺れが生じたのだ。

「うおつ、危ねっ」

転びそうになったのを、一護は踏ん張って耐えた。

「何すんだよ危ないだろ萃香！」

「だつてうるさいんだもん。私に対してグチグチ言っても——」
瞬間だった。

一際激しい揺れが発生したのだ。
まさにゴゴゴと揺れる大地、そして収まったかと思うと、更なる異変が発生した。

博麗神社の近所に突然白い柱——勢いよく間欠泉が立ち上ったのだった。

「……………」

「うおおお、何だあれ!?!」

一護は絶句、萃香ははしゃぐ。

あれだけの雪が熱気と飛び散った熱湯で溶けていく。

「ちよつと、一護!——今すごい揺れたけど大丈夫…………ぶ?」

霊夢が慌てた様子で、神社から出てきた。

そして目の前には何故か魔理沙たちが倒れており、萃香が酔っ払っており、直ぐそこでは温泉が湧き出ている。一体どこから突っ込めばいいのか分からない。

「…………つて、あれ何お湯!? え、もしかして温泉が湧き出たの!?!」

霊夢はまず倒れている人たちより、間欠泉を優先した。

「ああ、そうみたいだ。俺もマジで驚いてる」

「凄じじゃない!——ねえ本当にすごいじゃないの!——」

霊夢は瞳をキラキラさせながら、じやつかん取り乱す。

そして、

「これはあれよ、博麗神社の名物を、この温泉にできる!——」

温泉計画が始まったのだった。

*

時間は少々遡り、守矢神社にて——

神である神奈子と諏訪子の二柱は、ある計画を実行していた。

「さてさて、実験って名目だからな。まずはあそこに行きますか」

「地底世界だよね。いやあ、ちよつと楽しみなんだよね」

神奈子が楽しそうに言い、諏訪子もそれに同調する。

「じゃあ行きますか…………旧地獄である旧都に」

この二柱の行動が、後に大変面倒な異変へと発展していくのだった。

そして——博麗神社の近くに露天風呂が出来た。

透明な湯に、適度な湯加減、硫黄の香り。お湯につかれれば体の疲れが溶けるように、心身ともに癒されるであろう。その上、冬であるために雪見露天風呂と化している。まさに絶景で眺めながら、気持ちの良い温泉につかれる訳だ。

「うう、それなのに……」

暖かな湯気が立ち上り、まさに入らずにはいられなくなる。

「それなのに……どうして俺は、御預けを食らった上に、こんなことしてんだ？」

霊夢や、雪かきを手伝ってくれたメンバーから、それに近い者たちからの紅魔メンバーまで一護の知る幻想郷の女たちが今、博麗神社の露天風呂に入浴している。

よって男児たる黒崎一護が入るのは道徳的にと言うか風紀的にと言うか、やっぱり駄目なのである。しかし世には混浴という、男と女が共に一日の疲れを洗い流す崇高な習慣もある。だが、そのようなことが霊夢に通じるわけがないのは、火を見るより明らかである。

体を震わせながら、一護はこの露天風呂に不埒ものが近づかないかの監視をしている。

そんな事をしなくても、みんななら结界を張るなり気配で分かるだろうと思うだろうが、曰く入浴している時くらい気を緩めてゆつくりしたいとのこと。

ちなみに雪かきのお礼の件は、この露天風呂ということになった。

「ああ、俺もつかりてえな」

一護が白い息を吐きながら監視をしている中、霊夢たちは極楽浄土である露天風呂に体を浸からせていた。

程よい湯加減、疲れという疲れがお湯に溶けていき、体の芯まで温かくなる。まさに最高の一言に尽きる。

「ふう、やっぱりお風呂は露天が最高よね。ああー、生き返るわ」

「いいよなあ、霊夢はこれから毎日こんな露天風呂が入れるもんなあ。羨ましいぜ〜」

霊夢と魔理沙が並びながら入浴している。

湯には美肌効果もあるのか、いつも以上に二人の肌が艶やかに見える。頬も仄かに赤く染まり、口元は自然に緩んでいる為、それだけでこの露天風呂の気持ちよさを如実に物語っている。

「確かに、それには同意せざるを得んな」

二人の会話を聞いていた上白沢慧音が、豊満な胸を湯に浮かせながら大人の魅力を温泉で醸し出している。

「人里にもこんな気持ちの良い風呂はないからな。是非とも、今後も入らせて頂きたい」

「……………」

霊夢は無言で慧音の胸と自分の胸を見比べながら、釈然としない表情になった。

そして慧音の隣にいる妹紅がお湯につかりながら、小さな胸を張り満足そうに言う。

「何だ？ 慧音の大人の魅力に今頃気づいたのか。どうだ、素晴らしいだろう。お前たちも慧音を目標に奮闘するがいいぞ」

「何だよその言い方。それに何でお前が上から目線なんだ？」

魔理沙が突く。

「あれ、そう言えばあの小うるさい氷の妖精はどこに行ったんだ？」

妹紅が思い出したかのように、チルノの事を言った。

やはり温泉という熱い湯につかれないと思いついてどこかに行ったのだろうか？

「チルノちゃんなら、真っ先に温泉に飛び込んで蒸発しましたので、復活するのに時間がかかりますよ」

気持ちよく温泉に浸かっている大妖精が、平然と答えた。

「あいつ、やっぱバカなんだな」

「ああ。私は必死に止めたんだが、言うこと聞かなくてな。全く、困った子供だよ本当に」

慧音がため息をつくように言った。

「着水した瞬間に消滅してたからな。あれは一発芸としては面白かったぜ」

「一発芸で命かけすぎでしょ」

魔理沙が笑いながら言うのに対して、霊夢は冷静に突っ込む。

「ふいふ、いい湯だねえ」

「はい、萃香ちゃん。これうちの八目鰻の串焼き」

萃香は湯に浸かりながら、湯にお盆を浮かせている。もちろん盆の上にはお酒とミステイアが持ってきた小さめの鰻の串焼き。

「お、気が利くねミスチー。んじや、ありがたく頂くよ」

「いえいえ。私の屋台出店の為に一護さんや萃香さんには協力して頂いたので、そのお礼です」

「お礼なら出店した際に一杯してもらったけど？」

「お礼の延長ですよ」

ミステイアが微笑みながら言う。

実は前に、ミステイアが夢の屋台を出店すると言い、それを一護たちが協力した結果、無事に出店できたのだ。今ではミステイアは、屋台で屋台の居酒屋で人間や妖怪に好評を頂いている。屋台出店の物語は、また別のお話。

「ミスチーのどこの鰻美味しいんだよね。今日も夜になったらみんなで行こうよ」

「はい。私もぜひお付き合いします」

ルーミアが思い出したかのように言い、その隣で湯に浸かるリグルが同調した。

「いやあでも、本当にいい湯ですね」

とリグルが呟くように言った。

「ねえよくむく、うちにもこんなお風呂作ってよお。あなたなら出来るでしょ」

「無茶言わないでください」

「だったら今度は温泉でも集めようかしら？ そしたら温泉入りたい放題だよ」

「そのようなことは絶対にしませんから」

幽々子がのほほんと言うのに対して、妖夢が生真面目に答える。

「あはは、そんなことしたらまた霊夢に怒られるぜ」

魔理沙は二人の会話を聞いていたのか笑って言うど、どこから視線を感じた。

同時に自分に向けて言葉を発せられる。

「……で、魔理沙。このような場で言うのも何だけど、私の本はいつになつたら柵に返ってくるのでしょうかね？」

魔理沙の正面前方で湯に浸かっているパチュリーが、ジト目で言った。

紅魔メンバーも露天風呂に招待というより、噂を聞きつけやって来たのだ。

「だから、死んだら返すって言ってんだろ。それまで待つてろ」

「だったら今すぐ冥界の門に誘ってあげましょうか？ 一発で済むから」

「おいおい、止めようぜ。せっかく気持ちの良い露天に入ってたんだ。ギスギスしてたら疲れも取れなくなるぜ」

「分かった。それには同意する。から、上がったら覚えて、おき……なさい……」

「あー！ パチエがのぼせそうー！」

「のぼせそうというより、もうのぼせているわね」

パチュリーの顔が真っ赤になり、ジト目のまま気絶したかのようにフラフラし始めた。

そんなパチュリーを見たフランがわたわたとしながら助けようとする姿を、レミリアが微笑ましそうに見つめる。

「パチュリー様は私が看ます故、ごゆるりとしてください」

メイド長の咲夜が、小柄なパチュリーを抱えようとする。

「……ねえお姉さま。どうしてパチエと咲夜って、あんなにおっぱいの大きさが違うのかな？ 身長は咲夜の方が大きいのに、おっぱいはパチエの方が大きいよね。どういうことなのかな？」

「ちよつとフラン！ それを言っちゃダメー！」

フランの無垢な質問に、レミリアは愕然と反応した。

しかし既に遅く、咲夜はまるで凍ったかのように固まった。

「……………」

「さ、咲夜。フランの無垢な質問よ。真に受けないで……………」

「——巨乳なんて…………ええ、もう…………そうよ……………呪われる……………」

「怖い！」

咲夜がパチユリーを抱えながら、放心した瞳で呪怨が宿ったことをブツブツと呟いている。

「ありやりや、咲夜さん、気を取り戻すのに時間がかかりそうですね。それより黒崎さんはどこにいるんですか？」

「ホントだ！ いっちは？」

美鈴のセリフに、フランが思い出したかのように言った。

その問いに霊夢が答える。

「一護なら、不埒な輩が来ないか見張っててもらってるわ」

「えーなんでー、いっちーがいないとつまんないよお」

「そんなこと言われてもね。流星に男と一緒になんて無理でしょ」

「なんで？ 別にフランはなんとも思わないよ」

「何でって言われてもね……………」

霊夢が返答に窮した。

それを聞いていた八雲紫が、温泉に徳利の乗ったお盆を浮かべながらお猪口で酒を喉に流しつつ助け舟を出す。

「それはね、それが女性と男性の境だからよ。つまり踏み越えてはならない境界。まだフランには早いかもしれないけど、いつか慧音先生がしつかりと教えてくれるわ」

「おいおい、勝手に決めるな。まあ教えてやらないこともないが」

慧音が困ったかのように言う。

しかしフランには意味が全く理解できないのか、頭を傾けた。

そんな中、同じく誘われてきた永遠亭メンバーの一人、八意永琳が紫に話しかける。ちなみに蓬莱山輝夜ももちろん入浴しており、直ぐそこには犬猿の仲の妹紅がいるが、慧音や永琳の前では二人共、事は起こさない。

「あれ、そういえば紫はあの、えっと彼の名前なんだったかな？」

「グリムジョー？」

「そうそう。彼は連れてきたの？」

「ええ。けど彼、一緒に入るって誘ったんだけど、ふざけるなと言って、どこかに行ったわ」

「そうなんだ。でも、女性と男性の踏み超えてはならない境とか言っていた割には、簡単に彼と一緒に入浴しようとして誘い入れるのね」

「それはそれ、これはこれよ。そういう、あなたの所の外来の方は？」

「ウルキオラなら、一護くんと同じで外の見張りをお願いしてるわ」

「あら、一緒に入浴したほうが面白そうなのに」

「ウルキオラを何だと思ってるわけ？」

「弄れば面白そうな男かな。ああいう寡黙な男に限って、変な性癖してるのよね」

「ウルキオラが聞いたら怒りそうね」

そんな勝手な思い込みをされているとも知らず、当のウルキオラは……

「成程、黒崎一護。貴様はこの程度の低気温で震える男だったとはな。見下げ果てたぞ」

「俺以上に高価そうな防寒着でフル装備している男にだけは言われたくねえよ」

どう見ても一護より防寒性の高い物で一式揃え着衣しているウルキオラ。

一護は周囲を監視しつつ、霊圧探査が苦手でもウルキオラの霊圧はとつくに感じ取っていた。

「八意永琳が着ると小うるさかったのな。仕方なく纏っているに過ぎん」

「そうなのか。あれ、そういやグリムジョーも来てんだろ？ 何で姿を現さねえんだ？」

「俺が知る範囲ではない」

「そっか。まあアイツがどこで何をしようが知ったことじゃねえけど。つか、お前は露天に入らねえのか？ まだ入ってない俺が言うのもなんだけど、きつといい湯だぜ」

「……今は入らんとだけ言っておこう」

「左様ですか。案外、お前もそういうところは気にするのな」

いくらウルキオラでも、女性だけの露天に入る勇氣はなかったらしい。

「にしても早く風呂に入りてえな。こんな寒空の中で入る露天は格別だろうし。お前のその健康に悪そうな肌も少しは生気が出てくるんじゃないかねえの?」

一護が少し胸躍らせながらウルキオラに言う。

「黒崎一護。貴様は最近、俺に対する物言いが軽くなってきたてはいないか?」

「そうか? まあ昔ほどじゃねえのかもな」

「……………」

確かに死神時代の一護は、破面のウルキオラとは明確な敵ではあったが、今は味方とは言えないが敵でもない間柄である。

そして、どこからか不自然な突風が吹き荒れ、同時に快活な声が発せられた。

「おやおや、これはこれは素晴らしく面白なお二方がいますね」

瞬間、二人の目の前にカメラを首から下げた烏天狗こと射命丸文が現れた。

「何だよ、お前も露天を聞きつけてやって来たのか。なら遠慮せずに入っていけよ」

「急な登場に対して、冷静なご好意のお言葉ありがとうございます。ですが、今日はこの博麗神社の露天風呂を取材しに来ましたので、また後日改めさせていただきます」

「仕事熱心だな」

「はい。まあ私の助手である権は、にとりのお誘いで露天に浸かっているそうなので、そこだけは凄く不満ですが」

そしてメモ帳と鉛筆を取り出し、

「では、早速取材をさせて頂きま——」

と、文の常套句が発せられたかと思うと、途中でとあるメモを見てセリフは途切れた。

「どうした、また取材か？ 相も変わらず詰まらぬことをやっているんだな」

「何だウルキオラ。お前も取材されたことがあるのか？」

「何度か。全て拒否しておいたが」

二人がそんなやり取りをしている中、文が珍しく真面目な表情になり言う。

「一護さん。ひとつ質問があるのですが、よろしいですか？」

「ん、あ、ああ。改まって何だよ？」

「えつとですね。——市丸ギン、と言う人をご存知ですか？」

そこで、一護とウルキオラは初めて同時に目を丸くした。

どうして、なぜこの場で市丸ギンという男の名前が出てくるのか、全くもって理解できなかったのだ。

「……知ってるものにも。つか、何でお前がその名前を——」

『きやああああああああ!!』

その瞬間だった。

強烈な名前を聞いた途端、露天に入っている少女たちの絹を裂くような甲高い悲鳴が響いたのだ。

「な、何だ!？」

「行くぞ黒崎一護」

「あ、ああ！」

今は市丸ギンという名前は置いておいて、霊夢たちの入浴している露天まで一護とウルキオラが走る。

薄く立ち上る湯気をかき消しながら、そこで見た二人の光景は……何故かグリムジョーが衣服を着たまま露天風呂におり、何故か幽々子の豊満な胸を傲慢にも驚掴みしているのだ。

流石の一護もウルキオラも啞然。

いや実際、どう反応して良いのか分からないのだ。

「グリムジョー！ 貴様、一体何をしているのだ!？」

妖夢が即座に濡れないように置いていた刀を手に、グリムジョーに本気で一閃放った。

「うるせえ！ 俺も知らねえよ!」

「きやあん」

グリムジヨは幽々子の胸から手を離し、素早い動きで躲す。

「やあねえ、グリムジヨーったら、結構強引ね。けど、そういうの悪くないわよ」

「黙れ！　つか何で俺がここに、確か木の上で寝ていたはずなのによ」

幽々子の台詞を一喝し、グリムジヨは頭を抱えた。

「て言うか……とつとと出て行きなさいよ！　この変態ツ！」

霊夢を筆頭に、羞恥心ありありの少女たちから弾幕の一斉放射。

「チツ！　クソがあ！」

立場的にも色々と危ないと感じたグリムジヨは、逃げるように走り去った。

「……まさか、アイツに助平心があつたなんてな」

「俺も理解したいわけではないが、事実がそうなのならそうなのだろう」

一護とウルキオラが呟くように言った。

「――で、何であんたまでいるわけ？」

凄まじいオーラを纏った霊夢が、布で自分の体を隠しながら、符を取り出していた。

「え、いや悲鳴を聞いてだな見に来たんだよ！　決して邪な気持ちはない！　なあウルキオラ！」

と、自分の隣にいるウルキオラに助けを求めるが……

「つていねえー！」

ほんのつい先ほどまでいたのに、ウルキオラは危険を察知したのかいなくなっていた。

「とつとと、出て行けえええー！」

そして一護の目の前が爆発した。

その衝撃により、一護は露天風呂から吹き飛ばされたのだ。

（ああ、やっぱこうなるのかよ……）

空中を舞いながら、一護はとあるものを感じ取り、その次にそれが見て取れた。

（あれ、なんだこの沢山の……霊魂は？）

*

そして――

大地の底の更に深奥の奈落の国……一護も噂程度には聞いている
地底都市。

元は地獄であつた、鬼が築いた都市である世界。しかし地底都市とは思えなほど、常に煌びやかな提灯の灯りでこの暗黒の地底を照らし上げている。常に活気が有り、飲みに行く者たち、遊びに行く者たち、働く者たちで絶えない、鬼や妖怪の地底界。

ここは鬼や、世間から忌み嫌われた妖怪が最後の救いとして移り住む世界。

そこに一人の赤い角を生やした女性が、建物の屋根から地底世界を眺め見ながら一献やる。

「風が騒がしいね。肌でびんびんに感じ取れるよ」

愉快そうに、これから起こりうる何かに期待感を膨らませながら女性
性は呟く。

「何か面白いことが起こるかもね。ここ最近、とても退屈だったからいい刺激になればいいんだけど。楽しく暴れて、どんしゃん祭り。私の生き甲斐だわ」

赤い杯の酒を喉に流しながら、悦楽の瞳を空……いや地上のある洞窟の天蓋に向ける。

そこから何かがやって来る。面白い奴が来ると、女性は気持ちよく酔う。

「――なあ、そう思うだろう？ ……おっと、そうだった。まだあんたはここに来て1年くらいだっけ？ いや2年か？ まあそんなことはどうでもいいか。朗報だぜ。これから楽しい祭りが開催される。私が予言しておこう」

いつの間にか自分の背後に現れた男に、顔も向けず言葉をかける。振り向かなくても、誰がそこにいるのか気配だけで分かる。故に、女性は酒を煽りつつ、地底世界を眺めた。

「その予言が外れることを、じゃあ俺は祈るわ。面倒事は御免だからな」

女性とは対照的に、男はやる気のない声色で言葉を交わす。

「パルスィが呼んでるぜ。今日は一緒に飲む約束をしてたんだろ。早く行ってやれ」

「おっと、そうだったそうだった。すっかり忘れて」

女性は盃の酒を一気に飲み干し、言葉を紡ぐ。

「じゃあ行くか。祭りの前の前夜祭だ」

そして女性は振り返り、

「お前も一緒に飲もうぜ。他にも何人が誘ってるからよ」

男の名前を口にする。

「——スターク」

その男は、ウルキオラとグリムジョーと同じ……破面の一人である
コヨーテ・スタークなのであった。

第47斬【いざ、地底へ】

《1》

博麗神社の敷地内に沸いた温泉。

しかし、それと同時に湧いてきた異形の者たち……地霊。

その異変を解決するべく、現在三人は地底世界に向かっているのだ。

「ここが地底世界につながる道か」

奈落の底に向かって黒い口を開ける、地底への道を落ちるよう進む三つの人影があった。

「いやあく、味気ない道中だよな。もっとうこう緑が欲しい。いくら地底への道なりといってもよ、ここまで何もないとしようもなさすぎるだろ？」

魔女の霧雨魔理沙は嘆息を突きながら、言葉を吐いた。

辺りは地面が剥き出しの、本当にただの大きな穴の中に落ちていつているようにしか映らない。

「前々から言ってるけどね、異変解決の時はもう少し緊張感を持ちなさい。足元すくわれるわよ」

「大丈夫だって。こう見えて、今までどうにかなつちまつてるしな」

巫女であられる博麗霊夢の戒めを、魔理沙は気楽そうに飄々とした態度で答えた。

「それに霊夢はもう少し肩の力落としたほうがいいぜ。こういつも眉間にシワ寄せると、直ぐにしわしわの婆さんになっちゃうぜ」

「……ねえ一護。目の前の魔女をこの奈落到、思いつきり地の底まで叩きつけていいかしら？」

「それを行う労力に時間と体力を無駄遣いしたくないから、止めたほうがいいいだろ」

「それもそうね」

少年、黒崎一護は無難に答える。

「ここでいちいち軋轢を生んでは、異変解決どころではなくなってしまう。」

「それにしても何か鬱陶しいな、これ」

魔理沙が自分の周囲に浮かぶ小さな四つの八卦炉を見ながら呟く。

「しようがないでしょ。紫が持つて行けと煩かったんだから」

霊夢の周囲にも同じく、陰陽玉が付き添うように浮いている。

紫に渡された物だが、いまいち用途が分からない。攻撃の補助などをしてくれるのだろうか、その他に何か使用できるのだろうか？

「うくん、本当に何なんだろうな？ 私は八卦炉、霊夢は陰陽玉、一護は……えつと。それなんだっけ？」

「代行証、っぽいものだな」

一護の周囲には死神代行戦闘許可証、通称「代行証」を円球にデザインしたものが同じく四つ浮いていた。

「なあ霊夢。そういや俺、あんまり地底のこと詳しくねえんだけど、どういうところなんだ？」

「一言で言えば旧地獄。地獄だった場所よ」

「何だそりゃ？」

「行けば分かるわ。その他に旧地獄には忌み嫌われた妖怪や鬼たちが暮らす世界。正直、ここに出てくる妖怪は並の妖怪じゃないわよ。気を引き締めなさい」

「ああ」

確かに、この奈落の底へと進むごとに濃密な妖力を感じ取れる。まるで地獄の釜が開き、そこには溶岩にも似た灼熱地獄があるかのよう

に。
「こつちも異変解決スペシャリスト三人組だぜ。例えどんな妖怪が出てきてもイチコロだぜ」

「あんたは前の異変で何を学んだのかしら？ 諏訪子や神奈子にボコボコにされたって聞いたわよ」

「それはもう過去の話だぜ。今の私はあの頃より桁違いに強化されているんだよ」

と、楽観的に言う魔理沙だが、こう見えて霊夢に負けず劣らずの負けず嫌い。まだそれほど日数は経っていないが、強くなっているのは確かなのだろう。

一護もあの戦いはとても経験を積めた。斬月を握り締める事も出来た上、符名無しのスペル『卍解』も会得できた。諏訪子と加奈子には感謝している。自分自身を格段にレベルアップ出来たのだから。

そして、今回の異変は地底世界……地獄だった場所。相手は未曾有、どんな妖怪が現れるかもわからない未知の世界である。下手をすれば、今までの異変よりも解決が困難になるだろう。それ故に前回の異変での成長は、とても功を奏したと言える。

「……あれ、そう言えば一護の符名の付かないスペル、えっと『卍解』だったかしら？ あれ私、実際にはこの目でまだ見てないのよね」

「あ、私も見てないぜ！ 耳では聞いたが、目ではすっかり見ていない！」

「出す機会がなかったからな」

一護の最後の切り札とも言うべき『卍解』の事を話したが、まだお披露目はしていない。

斬月の方は妖怪退治で出したので、二人は知っている。しかし『卍解』を出すレベルの相手とは、果心居士以降現れてはいないのだ。

だが……

「今回の異変では必ず出す」

探查系が苦手な一護でも、奈落の底から怖気が走るほどの力を骨の髄まで感じ取れる。それ故に相手に不足なし。いや、それどころか下手を打てば自分がやられてしまう。

この異変は、そんなレベルの相手なのだ。

「——どうやら、お出ましのようね」

霊夢が、そう呟いたのと同時だった。

「ん、どっから——イテエエツ！」

ゴン！ と一護の頭頂部に桶が落ちてきた。

なかなかの質量を保持していたのか、桶だけが落ちてきたかのような音ではなかった。

「くそツ、何だよこりゃ!？」

一護は落ちてきた、少し大きめの桶を両手で抱き抱える。

結構痛かったのか、ちよつと涙目な一護。頭から少し血が垂れてい

た。

「何か入ってる感じだったが……」

と、中を覗き込んでみると……

にゅつと、桶の中から人の顔らしきものがこちらを見ていた。

「うおおおおお!!」

驚いた一護は、その桶を放り投げる。

しかしその桶は、落下せずまるで上から紐でぶら下がっているかのようになり、その場に留まった。

「お、何だあの桶？　すげえな浮いてるぞ。上から縄で吊り下ろしてんのかな？」

「馬鹿言ってるじゃないで、感じるでしょ魔理沙。あの桶、もとい中にあるであろう妖怪の力が」

言われてみて、確かにあの桶から禍々しい妖力を感じ取れる。

「……出てこいよ」

一護が静かに言うのと、桶の中からヒョコツと幼い少女が顔を出した。

緑色の髪をしたツインテールで、一枚の白い着流しを着ている。

そして恥ずかしがり屋なのか、頬を赤らめを顔を出したり、少し覗かしたりしている。

「……随分と愛らしい妖怪だな」

率直な感想。

ここで出てくる妖怪はまず危険だと思っていたが、案外そうでもないのかもしれない。あくまで偏見、世論だけであつての勝手な浮世話に過ぎない噂だったのかもしれない。

「危険性はなさそうだぜ。少し話でも聞いてみるか」

「ちよつ、魔理沙！　下手に近づかな——」

魔理沙が桶の少女に近寄ろうとした途端だった。

烈火怒涛の勢いで、無数の弾幕が桶の少女から放たれたのだ。

「——なッ!？」

幼い少女から放たれたとは思えない、凄まじい猛攻の弾幕。速さ、妖力、そして数。さながら裂帛の気合で放たれた力は、油断していた

魔理沙に容赦なく襲いかかった。

魔理沙は必死に避けつつ後退する。それと同時に星型の弾幕を展開し、迫る弾幕に対して挑んだ。

「なるほど、見た目によらずとても危険な気質かもね、この妖怪は。ほら見なさい、噂通りつてやつよ」

霊夢は弾幕の飛んでこない安全域から、魔理沙に少し嫌味を添えていう。

「そうみたいだぜ！ それなら私も本気でやれるつてもんよ！」
相手がやる気満々なら、こちらもそれを堂々と迎撃できる。

幼い少女であり、とても内気な性格っぽいから、可哀想という観点で戦いは避けたかったが、ここまでの力を見せつけられては最早戦う以外に余地はない。

そして魔理沙も弾幕を展開し、戦闘態勢に入ったのだった。

『……霊夢、聞こえるかしら？』

魔理沙の戦っている時に、陰陽玉から八雲紫の声が響いた。

「なにコレ？」

『陰陽玉を通じて、あなた達とお話ができるようにしたのよ。私と河城にとりの力によってね』

「そんな事が出来るならもっと早く伝えなさいよ」

「にしてもすげえな。そんな事が出来るなんて」

つまるどころ通信機。

一護的には携帯電話と変わらないので、どこか懐かしい思いが膨らんだ。

『で、霊夢の陰陽玉には私と萃香、あと射命丸文が担当することになったわ。色々助言とか、戦いの補助をしてあげるから』

「紫は分かるとして、あとの二人は必要なさそうんだけど」

『何よ！ この中で一番旧都に詳しいのは私なんだからな！ 全力で私に頼られろ』

『そうですよ。是非とも私もサポートしますから。いや本当、たくさん面白いネタがありそうで助かります』

と、紫の声から伊吹萃香と射命丸文に切り替わった。

萃香はいいとして、文の文言は完全に文々。新聞の為である。

「……ちなみに俺は？」

なぜか嫌な予感がしつつ、紫に聞いてみた。

『ええ、一護君の担当は——』

『黒崎一護オ！』

紫の声を引き裂くように、一護の周囲に浮いている代行証っぽい球体から、鼓膜を潰すかのような怒声が響き渡った。

「つつ、この声は……」

どう考えても、どう聞いてもグリムジョー・ジャガージャックである。

『てめえ何俺に黙ってんな所に出向いてんだアア!? 言つとくがな黒崎、テメエがそんな下らねえ場所に行くから俺は八雲紫に強引にこんなことをやらされてんだぜ』

「……うるせえ」

『オイ聞いてんのか!? 俺が出向くなら分かるが、何で俺がこんなサポートじみた詰まらねえことやられねえといけねえんだ?』

「知るかよ! つうかお前、そんな素直に従う奴じゃねえだろうが!?

嫌ならやるなよ!」

と、一護は至極当然のことを突っ込んだ。

『う、うるせエ。こつちにも事情があるんだよ。それより黒崎お前に

——』

『ああもう、話が進みません!』

と、何か通信機から押し退けるような音と共に魂魄妖夢の声が聞こえた。

『あ、えつと黒崎さん。私たちが微力ながら全力で助力致しますので、ご安心ください』

「お、おお。そいつは助かる。ありがとうな妖夢」

『い、いえ、とんでもないです! 私なんかがお力になれるか分かりませんが、よろしく願います!』

一護は心底良かったと思った。

妖夢なら真面目だから、こつちも安心して頼ることができる。

『愚劣だ、黒崎一護。よもや貴様、先の桶、本気で躲せなかつた訳ではないだろうな?』

「……この声は」

そして妖夢と入れ替わるように、何やら辛辣な言葉をととても聞き覚えのある男から頂いた。

『まさか、俺がこのような裏方をやらされるとはな。思ってもみなかった。だが手伝えと、俺の現状の主から言われた以上は、最低限お前に力を貸す』

その声はウルキオラ・シファア。

聞いていると、ウルキオラも随分と丸くなったのだなと一護は心底思った。

「……つまり、俺のサポート役はグリムジョーに妖夢、ウルキオラか」
何だこの面子は?

こんな組み合わせえ、想像したことすらなかった。

『ちなみに、あそこで戦ってる魔理沙の補助はパチュリー、アリス、にとりにやってもらってるわ』

「パチュリーとアリスは分かるけど、にとり?」

『ええ、私と開発したこの通信機の確認と、後は旧都の妖怪に多少なりとも詳しいという点でね』

「成程。じゃあ、俺の面子も変えてほしい。主にグリムジョー辺りを」

『ああ!? テメエ今なんつった!? 俺が役立たずだとしても言いてえのかコラ! 言っとくがな黒崎、テメエが向くより俺が行ったほうが直ぐに事が片付くんだよ。分かってんのか!?!』

『愚昧だグリムジョー。お前では解決するどころか、事を大きく荒立てるだけだ。何の解決にもならん、お前の質ではな』

『ウルキオラ、テメエ喧嘩売ってんのか?』

『そう聞こえたのなら、そうなのだろうな』

『ああ分かった。なら受けてたってやる……表出やがれ!』

『下らん、お前では俺にかすり傷一つ付けことなどできん』

『上等だア! 腕の一本は覚悟しやがれウルキオラ!』

『ああもう! 二人とも喧嘩はやめてください! 今はそのような場

合ではないでしょう!』

妖夢が必死に仲裁に入る。

一護は本当に頭を抱えた。

「くそ……とてもじゃねえが、戦いに集中できねえなつと!」

そして別方向より複数の弾幕が飛んできたので、直ぐさま回避に転じる。

『お、こいつは懐かしい。土蜘蛛だね』

「新手つてことね」

霊夢が前方を見据えると、そこには金髪の黒い上着の上からジャンパースカートを着ている少女がいた。

「おやおやキスメが誰かと戦っていると思いきや、まさか人間が三人もいるとは。地底に遊びに来たのかい……そんな顔じゃないか」

「どうやら今、魔理沙と戦っている少女はキスメと言うらしい。」

目の前の少女はキスメと言う妖怪より話が通じるようだ。いきなり襲ってきたりなどはしない。

「あんたは話を通じそうだ。俺は黒崎一護。あんたは?」

「ん、私? 私は黒谷ヤマメ。地下に住まう土蜘蛛よ」

「土蜘蛛。また危険極まりない妖怪。流石、地底世界に封じられた種族ということかしらね」

霊夢がぼやくように言う。

「危険とは失礼ね。私は地底の妖怪たちに比べたら、まだまだ意思の疎通が取れる方よ。けどまあ——」

空間が震撼する。

突発的に凄まじい殺気がヤマメから放たれた。同時に襲来する無数の、殺意を乗せた弾幕。

「——ッ!」

一護はそれらを反射的に、自分の弾幕で対応する。

爆破と火花が飛び散る中、ヤマメは詰まらなそうに言葉を吐く。

「ええ、ええ。私は話を通じるわよ。だから何? そもそも私は人間というものが大嫌いなもの。生理的に受け付けないのよ」

ギチギチと骨が軋むような音を立てながら、ヤマメは愉しそうに笑

う。

獲物を目の前にした蛇、いやこの場合は巣に捉えた虫を捕食する蜘蛛が如く、垂れ流す妖気が人間を噛み砕くように空間を支配する。

『いい霊夢。地底の妖怪は地上から追放された危険な連中よ。出会い頭に倒しなさい』

「そのようなね。でもどうせ、私も対峙する気満々だし、ちようどいいわ」

紫の助言に霊夢は頷いた、その瞬間――

「喰らってやろう。醜い肉片にした後で、私の腹を満たしてくれ」

弾き出された弾幕は、先の不意打ちとは段違い。

間隙なく発射された弾幕は、まさに人間を殺すには余りある力だ。

一発一発が人間を殺害できる。

「――」

しかしそれは人間に当て嵌めた時の話である。

こっちは博麗の巫女と、死神だ。このような枠には嵌らない。

一護が飛び出すと同時に、漆黒の衣を纏い手には大型の出刃包丁のような大剣――斬月が握られる。

そして横一閃……霊力を乗せた斬月は、容易くヤマメの弾幕を引き裂いた。

「はは、はははははは！ どう、醜いでしょ？ おぞましいでしょ？ 恐

怖するでしょう？ それが地底の妖怪。理解しなさい、あなた達はどう、糸に囚われた獲物でしかないの」

ぎらつく牙を見せながら、ヤマメの目が禍々しく光る。

「……霊夢。こいつは俺がやる。初戦だ。このどう働くか分からない代行証？を試してみたい」

自分の周囲に浮かぶ四つの代行証を模した球体。そしてこれは戦いの補助をしてくれるらしいが、一護を担当するのは妖夢、グリムジョー、ウルキオラと言った組み合わせ。

どうしても不安な一護は、本格的な異変解決を実行する地底の都市に行く前に試してみたいのだ。

「分かったわ。けど油断は大敵よ。相手は地下の妖怪、漫然と戦えば

あんたでも痛手を貰うわよ」

「ああ、分かっている」

斬月を構え、一護はヤマメと対峙する。

地上の妖怪とは違う。相手は忌み嫌われた能力を有する、危険な妖怪だ。

初めから本気で、もしかしたら『卍解』を使わざるを得ないかもしれないと考えながら、一護は臨戦態勢に入った。

「いいでしょう。なら、あなたから砕いて、引き裂いて、食らってあげる。でもまあ、なかなかいい男だから首から上は残してあげてもいいよ」

「そいつは御免だ。それに、どっちが勝つかはやってみなけりや分からない」

「へえ、面白い。じゃあ試してあげる」

「望むところだ」

そして一護とヤマメの戦いが始まった。

*

「捕まえてあげる。蜘蛛の巣に捕われた獲物は、もうただの餌なのよ。蜘蛛『石窟の蜘蛛の巣』！」

無数の弾幕が、さながら蜘蛛の巣を描くように放たれる。

初発はヤマメのスペル。

捕らえるというより、完全に殺しに来ている弾幕だ。回避はどうか可能なレベルではあるが、一つでも被弾すると危険と悟った一護は、同じくスペルで対抗する。

「黒符『月霊幻幕』！」

無数の漆黒の三日月状に構築された弾幕。

同時に颯風の勢いで放たれると、ヤマメの弾幕を相殺し、またはかき消し、または逆にかき消された。互角、現時点での弾幕の競い合いは相を打つ。

火花が散り、轟音を放ちながら爆発の色合いを重ねる先で、ヤマメは不敵な笑みを零していた。

「へえー、成程ね。人間というのは、本気を出せばどこまで強いのかね。」

食前のいい運動になりそうだわ」

己の蜘蛛の巣の弾幕を引き裂かれながらも、ヤマメは続くスペルを放つ。

「瘴気『原因不明の熱病』！」

無数の弾幕が、一護に放たれる。

「喰らうか……よっ……」

瞬間、一護は自分の体の異変を感じとった。

同時に――

「ぐ、がアツ！」

一護を襲ったのは例えようもない吐き気だった。毒に満ちた大気にいるような、生存本能が死の危険を感じ取らせるような、清浄さを失った空間。

体中が病んだかのような激烈な蟻走感。皮膚の下で蛆が這いずつているような感覚が走り、同時に首からは灼熱に犯されたかのような激痛が絶え間なく一護を掻き乱す。

幻聴に厳格、攪拌する五感は宙に浮くことすら許されなくなり、全身から腐ったような激臭がしていた。

頭と胸を掻きながら血と嘔吐を繰り返す。

「あッ、グ、があ――ああああアアアアアアッ！」

血反吐からは糞便の臭がした。腹が爛れる。脳が腐る。全身があらゆる死病に侵された、形容しがたい地獄のような苦しみ。

そんな中、ヤマメは京楽な笑みを浮かべていた。

「どう、これが人間にとって、いえ生物にとって最大の苦しみ。それは病。絶対の死と苦痛を与える最悪の病気よ」

つまりヤマメの真骨頂は……

「私は病気を操る程度の能力。あらゆる生物にとって私は、最悪の能力を所有しているの」

そう、一護はヤマメの操った病に犯されているのだ。

病魔が一護の全身を喰らうように、生命を根絶するが如く蝕んでいく。

「さて止めを刺してあげる。死の恐怖は充分味わったでしょう？ 次

は喰われる恐怖を味わう時よ。どだい人間では、到底私に勝つなんて不可能なのよ。いいえ、私にとりより病からか」

問答無用に叩き込まれた病など、一護では防ぎようがない。蹂躪、陵辱、後には何も残らない。それだけ地底の妖怪は危険なのだ。

「美味しく、食べてあげる」

そしてヤマメが一護に手を伸ばした瞬間……

『病か。成程、確かに通常的手段では防ぎようのない力だ。だが、運が悪かったな』

一護の周囲に浮かぶ代行証から、ウルキオラの声が響いた。

「何……この声？」

ヤマメが眉をひそめる。

しかしウルキオラはそれに答えることなく続ける。

『事象の拒絶……それが俺のサポートできる力だ』

あらゆる起きた事象を拒絶し、一護の病を超回復させた。

無数の病に犯されていたのが嘘だったかのように再起したのだ。

「すまんウルキオラ。すげえ助かった」

『礼などどうでもいい。今すぐソイツを倒せ黒崎一護』

「ああ、分かった」

一護は再度、斬月を構え直す。

「くそッ！ どうして私の病が!? 人間如きに破れる訳がないのに！」

目視不可、回避不可の必中の病の能力を解放するも、今の一護には通用しない。

猛威を振るう病の毒は、ウルキオラのサポートにより瞬時に回復される。

「悪いな。今の俺は心強い味方が付いているんだよ！」

「な、にイイツ！」

一閃、霊力を乗せた斬撃を放つと、ヤマメはそれに飲み込まれたのだった。

ヤマメとの戦闘が一護の勝利で終わると、ちょうど同じタイミングで魔理沙もキスメと呼ばれる少女に勝利していた。

そして学んだ。

本当に、地底の妖怪は危険だ。一護に至ってはウルキオラの支援が無ければ、病に犯されて、そのまま死んでいたであろう。

一護の力不足という点もあるが、これは今までにない妖怪だった。概念的な攻撃を防ぐ手段を、今の一護にはない。そして、この先には地底の都市。ヤマメレベルの妖怪が住む、真に恐ろしい場所なのだ。

「これで分かったでしょ。気を引き締めなさい。油断するしないの以前に、もう出会い頭に倒すのが最善の手段よ」

「確かに。あのキスメって妖怪もなかなか強かったぜ。けどまさかパチュリーにアリス、にとりにサポートされるなんて夢にも思わなかったぜ」

『ええ、感謝するのなら私の本をちゃんと返すのね』

『まさか雪かきと温泉の後にこんなイベントが待ってるなんて。早く家に帰りたいわ』

『私の開発した道具もなかなかのものね。ふむ、次はもっと改良できるかも』

各々の声が、魔理沙の四つのミニ八卦炉から聞こえた。

「まあ実際、このサポートシステムは本当に役に立った。ウルキオラに助けられるなんて初めてだったからな」

『その為に俺はここにいます。だが黒崎、あまり俺達の力を過信しすぎるな。あくまで補助程度だ。その道具からは、俺達の力を十全には扱えない』

「ああ、分かっている。そうだと思ってたからな」

けど、ウルキオラは事象の拒絶で病から助けてくれた。

つまりグリムジョーも妖夢も、何かしらの力で支援してくれるだろう。

『けど、やっぱり危険ですね地底の妖怪は。それにこんな深く大きな穴があつて、深奥には都市ですよ。いや、地上の強度が心配です』

通信機から、文が面白そうに言った。

『まあそれは心配要らないわ。地上が地下都市まで陥没する事は多分無いから』

『あら、言いますね。何か根拠でも？』

『何も。今まで落ちなかつたのが何よりの証左になるから』

『あく、ふむふむ成程。流石、年増のようなお考えをお持ち——』

文と紫が何やら話していたが、文が禁句を言った瞬間、二人の会話が途切れた。何があつたのかは考えないようにしよう。

そして、そんな時。

「……着くわよ、地底の都市」

霊夢が眩くと、その先に灯りが見えてきた。

『へえ、これはまた。あつちもやる気満々みたいよ』

萃香の声が響く。

『いい、これからあんた達に仕掛けてくる敵はさっきの土蜘蛛以上よ。お、この嫉みを含んだ視線はアイツか。はは、面白い戦いになりそうだね』

陰陽玉越しにも力を感じ取れるのか、萃香が楽しそうに言う。

「ヤマメ以上か……」

一護は再度、改めて緊張感を持つ。

『おい、ウルキオラ』

『ああ。グリムジョー、お前も感じたか』

そしてグリムジョーとウルキオラの声も響いた。

『黒崎、気イつけろよ。この先に破面が一人いやがる。しかもコイツは……』

『何だよ、破面がいるのか。お前ら以外にも幻想入りしてたのかよ』

『らしいな。本気でかかれよ。認めたくはねえが、幻想入りする前は俺やウルキオラよりも強かつた破面だ』

「……マジか」

嫌な汗をかく。

ヤマメ以上の妖怪たちに、ウルキオラとグリムジョーを上回る破面。

これが今回の異変。

死の恐怖を感じつつ戦わなければいけない。

「この異変を解決しないと幻想郷が大変なことになるわ。逃げることは許されない。解決して、みんなですべて生きて帰る。いい、これは絶対よ。分かっているわね？」

霊夢が確認する物言いと言う。

一護と魔理沙は頷き、

「行くわよ……本気で攻撃を仕掛けるわ！」

そして地底都市に入ると、まず最初に起こったのは凄まじい開戦の号砲だった。

第48斬【旧地獄での戦い】

《1》

まず迸ったのは重圧な轟音と、妖力による烈火のような閃光であった。

暗い洞窟のような穴を抜けた先には、地底都市のごとく広大で煌びやかな都があった。しかしそれが視野に入るや否や、膨大な力が三人に襲いかかったのだ。

爆発的な密度を宿した暴力。

単一な拳。純粋な混じり気のない拳が、風を切りながら三人に放たれていた。ただの拳ではない。絶大な破滅を纏っているかのような、隕石でも飛来してきたのではと錯覚さえ覚える拳の圧である。

瞠目するよりも先に手が動いたのは博麗霊夢であった。

黒崎一護、霧雨魔理沙よりも捷い動きで前に移動し、霊力による結界を張ったのだ。

しかし次の瞬間には、結界が碎かれる轟音と同時に妖力による衝撃波が舞い、それに伴って砂塵が荒れ狂う。

「霊夢、魔理沙!!」

「分かってるわよー!」

「へへっ、こいつは面白くなりそうだぜ!」

霊夢が張った結界など、付け焼刃に等しい。よって一護も魔理沙もそれは承知しており、あの結界はあくまで颯風のような拳を少しでも安全に避けきる為の、数瞬の時間稼ぎに過ぎないのだ。

砂煙が舞い、視界が悪くなった状況下でお互いの位置を把握しつつも、更なる脅威が三人に降り注ぐ。

それは粘着質を帯びた妖力による大弾。それらが複数放たれ、その軌跡には花卉が咲き誇っていた。

「こいつは……ッ!?!」

その花卉を見るなり剣呑とする。

これに触れては駄目だ。直感的にだが、三人ともそれを頭の奥底で理解した。理由は分からない。分からないが触れてはならない。例

えるなら毒性を宿した動植物のような、本能がこれを触れてはならない、そしてなるべく視界に入れない方がいいと。何故か知悉のように理解し、総身が粟立つ。

三人がそれに理解し、避け切った後に始まりから止めに持つていくような流れで強烈な一撃が放たれた。

「——これは」

この一撃を知っている。

凝縮された霊力が、破壊の閃光と化して対象を撃ち貫く攻撃法、それは……

「『虚閃』だと!？」

紛れもない破面が好んで放つ技である虚閃である。

「霊符『夢想封印』!」

「恋符『マスタースパーク』!」

「黒斬『月牙天衝』!」

動揺と同時に、対処法は三人とも把握している。

放たれた破壊の閃光を、三人は対して攻撃的スペルを放った。魔力と霊力と渦が暴風のように荒れ狂い、それにより破裂するかのよう虚閃は相殺された。

衝撃波が吹き荒れ、大地が砕ける最中、三人は次の敵方の迎撃に備える。

「……………来ねえな」

「そうみたいね。不意打ちは失敗だと、判断したんじゃない?」

砂煙が舞い終わると、前方には二人の女と一人の男が現れた。

直後だった。一人の女が笑い声を上げたかと思うと、一護たちを指さしながら言葉を放つ。

「いいねいいねええ!。せっかくの祭りだ!。前祭で終わったとあっちゃや興が削げちまうからね!」

その女は濃密な力を宿した鬼だと、瞬時に理解できた。

破壊と暴力の具現体。なびやかに舞う金色の髪は美しく伸びており、頭には鬼の象徴たる赤い角が生えている。三人を見つめる瞳は紅く、悦楽に輝いている。両手首には暴力の戒めなのか、手枷が付いて

おり、よく見ると両足首にも足枷が付いてある。片手にはとても大きな赤い盃を手にしており、その中には明らか酒を思わせる透明の液体が波波と入っている。

履いた下駄をカツカツと音を踏み鳴らしながら前へ歩み出て、鬼の女性は口元を愉悅に歪めながら、

「祭りつてのは騒いでなんぼだ。お前らもそう思うよな?!」

並外れた妖力と、莫大な膂力を横溢させつつも、その女は笑みを絶やさず三人に言葉を投げかけた。

まるで敵視していない。例えるなら、遊びに来た友達とでも言おうか。この女からは一切の敵対心がなく、あるのは目の前にいい遊び相手が現れたという感情のみ。

「勇儀、少しうるさい。貴方だけだよ、お祭り気分なのは。そもそも、この程度の歓迎で終わる相手が、地底になんて来るとは思えないし」
陰鬱な雰囲気醸し出しながら、もう一人の女は勇儀に言う。

尖った耳が特徴的な、外見的にはどこにでもいそうな少女である。しかし先程からこちらに向けられている嫉妬にも似た負の感情、度外れたその病みにも近いものを三人は感じ取った。

「全くどうして、こんな旧都に女を二人も侍らして連れてくるのんて、一体どう言う神経しているのかしら? その男、見ていると嫉妬で嫉妬で、嫉妬のあまり狂って殺してしまえそう」

粘りつくような殺意、先の女性とはまるで逆である。悪しき妖気が濃密なまでに垂れ流されており、遊びなどと見ておらず、完全なまでに殺す対象として見ている。

いや、大前提にここは元地獄。危険極まりない妖怪が隔離された世界なのだから、これは至極真つ当なのだろう。

そして……そんな三人のうちの最後の一人——
「のんびり過ごしたかったんだがな。何でこう争い事を持ってくるんだ」

白い、グリムジョーやウルキオラが着装している物と似通った格好をした男。

一護なら否が応でも分かる。

この霊圧は……

「破面か」

そして思い出す。

今日の前にいる破面の男は、過去に井上織姫を一護、そして剣八の前から一瞬で拐った男。

「どうにもあの男は、あの二人と似通った性質をしているわね。随分とまあ、危険な気質だわ」

「破面ってやつだっけ？ 私も詳しく知らないけど」

霊夢と魔理沙も即座に理解できたらしい。

一護はほぼ初対面に近いたため、あの男の能力も力も何もわからない。

だが、ここに来る前にグリムジョーが言っていた事が一つだけある。あの男はグリムジョーやウルキオラよりも強いということ。それだけで、とてつもない実力の持ち主だと分かる。

「さて、どう仕掛けるか」

霊夢が睨みを効かせる。いつ、何かの拍子で緊張の糸が張り裂けてもおかしくない状況である。

一護も固唾を呑む。戦力的には互角、下手をすれば相手が上かも知れない。グリムジョーやウルキオラよりも格上の破面。それに引けを取らない鬼の女。そして地底の妖怪。敵がいつ攻撃してきてもいいよう、注意集中する。

しかし、そんな緊張感ある状況は破面の男によって崩された。

「……あー、そのあんだ」

気怠そうに、一護を指さしながら、

「黒崎一護、だったか？ こんな状況で急に言うのも何なんだが、あんたと少し話したい。いいか？」

突拍子もなく、いつ火蓋が弾け開戦が始まってもおかしくもない中、男は気の抜けた声でそう言った。

「……………はああ！ あんたなに意味不明なことやってんのよ!」

予想的中だろう、最初にリアクション兼声を荒らげたのは霊夢だった。

「おいおいそう怒鳴らないでくれ。あー、出会い頭の一撃を根にもっているのなら謝るよ。だからその黒崎一護と二人きりで、平和的に話したいことがあるんで、お願いできませんかね?」

頭を搔きながら男は、怠気80%、ちよつと本気20%くらいの疲れきった社会人のような口調で言った。

読めない、何を考えているか分からない相手というのは、敵として一番厄介ではある。自陣の組んだ戦略の盤を、いとも容易く崩しかねない型破りな行動をしかねないからだ。

それがまさに、目の前の男である。

それを聞いていた鬼の女性は、男の肩を組みながら、

「そうだぜ、こうしてコイツが頭下げてお願いしてんだ。そこは二つ返事で頷くのが人情だろう?」

「頭どころか面倒くさきそうにお願いしてるんだけどソイツ。しかも鬼に人情がどうのなんて言われたくない」

「何だよ、巫女ってのはこんな薄情なのか? はっ、だから胸も薄いんじゃないのかい?」

「——は?」

豊満な胸が特徴的な鬼の女性は、快活な態度で言葉を吐くのと同時に霊夢の地雷を踏んだ。

「今なんて言った?! この鬼ババア!」

「お、何だ威勢はいいなあ気に入ったぜ! だが、ババアってのは聞き捨てならないな!」

霊夢が即座に放った、少女から出たとは思えないストレートな拳を鬼の女性は片手で軽々と受け止めていた。

そして怒髪天となった霊夢と同じく、鬼の女性も快樂から少し怒りを滲み出す。

「この無駄な脂肪が何?! 大きいから何?! 偉いの? そのダルダルに垂れ下がった醜い肉の塊が偉いの?! ふん、笑わせてくれるわね! 所詮は不要な贅肉の溜まり場なのよ胸なんてね!」

「おいおいおいおい、分かりやすい妬みだな。パルスィ以上に分かりやすいぞ巫女さん。何? 胸のことが癪に障ったか? そいつは悪

かったね。どうも、貧乳って奴の気持ちは、私には理解できなくてな
！」

「そうだぜ！ 貧乳代表格の霊夢の気持ちだが、巨乳代表格のお前に分
かるはずないぜ！ なあ霊夢？」

「ちよつと魔理沙、それ聞き捨てならないんだけど。あんたちよつと
表に出なさい！」

二人から三人に変わり、不毛な争いをする中、男は「あく〜」とど
うでも良さそうに声を上げ、

「何だかもう面倒だから、一つだけの質問で構わねえ。あんたは……」
ここで急に、男の雰囲気張り詰めた。

視線を一護に向け、男は口を開く。

「——藍染サマを倒したのか？」

「まあな」

聞かれると予想はしていた。

破面にして、十刃の一角と思われる男だ。自分を従えていた藍染が
どうなったのか、気になって当然である。

「そうか。いや、そんな気はしていた。あんたは恐らく、藍染サマを倒
しちまえるんだとよ」

「随分と買ってくれてるんだな。けどもつと驚くと思ってたぜ」

「予感はしていたから、あまり驚かねえよ」

平坦に答えた男。

しかしその瞳の奥には、どこか悲しみを孕んでいるような気がし
た。

「そーいや名乗ってなかったな。俺はあんたの知っての通り破面——
ココロテ・スタークつつうもんだ」

「黒崎一護。改めて名乗らせてもらうぜ」

お互いが名乗る。

当然だが破面のスタークは一護を知っている。虚夜宮（ラス・ノー
チェス）に攻め入った際に、ある程度の情報は得ている。

「おいおい、なあ〜に律義に自己紹介しちやってんのスターク。一応、
こいつらは敵だぜ？」

鬼の女性がスタークの肩に腕を回しながら言った。

「まあそのまな板みたいな貧乳のガキよりも、あんたはまだ話が通じそうだね」

「いやもうあんた、う霊夢の怒りを買うようなことしないでくれ」

後ろの方で霊夢が何か叫んでいる声と、魔理沙が体を張って止めているような声が聞こえてきた。

「そいつは悪かったね。おっと、ちなみに私は星熊勇儀。見ての通り鬼、よろしくね」

「……星熊勇儀」

どこかで聞いたことあるような、ああ萃香かと思ひ出す。

そして鬼の特徴といえば――

「いいねえいいねえ、あんた中々に強いね。見れば分かる。これは本気でやりあつてみたいわね」

強者が現れると、その力を試さずにはいられない。勇儀も多聞に漏れず、その気質の持ち主のようだ。

「まあ、認めたくはないけど、あの巫女も、そしてあの魔女もなかなか強い力を持つてるようだし。こりゃあ、久しぶりに全力を出せそうだ」

「あのなあ。今、地上で地底から湧きあがってきた地霊――つまり怨霊達が悪さをしてるんだ。その原因を探りに来ただけで、俺たちは別に戦いに来たとかじゃねえんだよ」

実際、世に怨みを持った怨霊は地上の妖精や人間なんかに害を及ぼす。そんな危ない存在を、一刻も早く解決に導かなければならない。無駄な戦闘などは避けたいところだが……

「は、ふざけないでください」

地の底から響き渡ったかと思うくらい重い声と、病みに近い嫉視の瞳を向けてくる少女。

現れた三人のうち、そう言えば一人忘れていたようなと、存在感の薄いと言ったら悪いので誰も言わないが、そんな少女が話に割って入った。

「二人の少女と楽しくパーティー組んで、危険だと分かっているながら

旧地獄にやってきてさ、戦わずに問題を解決できるなんて出来ると思ってるの？ 馬鹿なの？ いい年して、考えが甘すぎなんじゃない？」

「いや別に楽しく組んでねえよ。仕方なく組んでるだけだ」

「男って生き物は下心丸出しなのよ。例え表向きに出さなくても、裏では可愛らしい女の子と一緒にいてグヘへたまんねえ、なんて思ってるんでしょ？ 本当、嫉妬するくらい最低だわ」

「可愛い？ 狂暴の間違いだろ」

「どうですかですね。勇者気取って、将来はハーレムでも築ききでしょ？ 男の欲情なんて透けて見えるのよ」

「そんなつもりねえよ。つか、こいつら二人にそんな劣情は全くもって抱かねえから、俺を甘く見てんじゃねえ」

「ちよつと一護。それはどういう意味？」

「……しまった」

後ろに霊夢がいることに気づいた一護は、ゾツとすると同時に冷や汗が流れ始める。

「悪い一護。もう私も止める気なくした」

おやおや魔理沙まで敵に回してしまったかと思う一護。

異変解決の最中だというのに、何だこの緊張感のなさはと、霊夢にいいのを何発か頂きながら一護は思い悩んだ。

「あく、敵地だつてのに随分とまあやかましい奴らだな全く」

「いいんじゃない？ あそこまで余裕な態度を見せるってことは、今まで十分な程の場数を踏んでるってことだよ。下手に氣い引き締めてる相手より期待できるってもんだ」

「そんなもんかね」

「そんな訳ないでしょ。単に危機感がないだけよ、あんなの。旧地獄の恐ろしさを微塵も知らない蒙昧な地上の連中は、その身をもってその恐ろしさを味合わせるのよ。ああもう、この嫉妬の気持ちを思いつきりぶつけてあげたい」

「おう、なら全力でぶつけてやんな。私はこの拳をぶつきたいと血が騒いでるからよ」

スタークが二人の言葉を聞きつつ、嘆息する。

「何でこう、うちの仲間も難ありなんだろうな。そう思うだろう黒崎一護」

「ああ。お前も大変だな。何となくだけど、あんたの境遇も理解できる」

一護はフルボッコにあった後のような傷だらけの状態で倒れつつ、スタークに同情した。

「そういえば、あんたら二人の名前をまだ聞いていなかったわね。何て言うの?」

勇儀が思い出したかのように、霊夢と魔理沙を指さして聞く。

「私が律義にあんた達に名前なんて教えると思う? 特に、そんな乳牛みたいな醜いものぶら下げた女に名乗る名前なんて持ち合わせていないわ」

「まくだ言うのかよ、このお子ちゃまは。これはとんだ捻くれものだな」

「は? 誰が捻くれ者ですって? この——」

「一旦、口閉じよつか霊夢」

一護が霊夢の口元に手をあてがい、強引に紡ぐ言葉を封じる。

「むぐううう——!」

「私は霊夢と違ってしっかり答えてやるぜ」

暴れる霊夢が一護に抑えられている傍ら、魔理沙は威風堂々と答える。

「私は泣く子も黙る霧雨魔理沙! 世界一の大魔法使いになるヴィーナスすら羨む麗しの美少女! とくとその頭に刻んでおけだぜ!」

「……………」

何か、よく分からない自己紹介をする魔理沙に喚いていた霊夢は絶句し、一護は溜息を吐いた。

「んで、この巫女っ子が博麗霊夢だぜ」

「ちよっと何勝手に私の名前言ってるの!」

親指で霊夢を指しながら、魔理沙がおまけのような口ぶりで霊夢の名前を代わりに言った。

「……………勇儀……………アイツにイラつときた」

「まあたか。パルスイは本当、ああいう超明るいやつ見るとそうなるよな」

勇儀が自分の隣で、気持ち悪いほどの嫉妬と殺意が煮えたぎったかのような雰囲気醸し出しているパルスイに、呆れた声を上げた。

「さて、そろそろそこを通してもらっていいか。俺達が用あるのは、怨霊の発生源、管理してるやつか？ そいつに用があるんだよ」

「へえ、もしかして私たちを無視して素通りできる、なんて思ってる？」

一護の言葉に、さも当然のような足取りで一護たちの前に立ちほだかる勇儀。

ああ、そうだよな。分かってました、分かっていたとも。幻想郷で事がスムーズに進むわけがないのは、一護も十二分に理解している。

そもそもここは敵地のど真ん中。曰く地底の妖怪は出合い頭に倒せと、紫にそう発言させるくらい危険な場所なのだから。

「丁度よかったわ。私もあんたをボコボコにしてやらないと、イライラが収まらないところだったのよ！」

霊夢はやる気満々な態度で、勇儀を指さして言った。

「いいねえ。その威勢、しっかり腕に見合っているか、私の期待を裏切らせないでよ」

血気盛んな勇儀もまた、霊夢の意気込みに答えた。

「あなたは、私が相手してあげる」

パルスイと呼ばれていた少女が、魔理沙を指さして言う。

「お、私とやりたいって？ いいぜ、この魔理沙様が相手になつてやるぜ！」

「その活気、とてもムカつく。妬んでしまうじゃない」

魔理沙がパルスイに答えたと同時に、スタークが面倒くさそうにする。

「難儀なこった。何でこう、戦いに拘るんだろうな」

「……………破面って言ったら。好戦的なやつが多いイメージだったけど、あんたは違うのか？」

闘争意志がほとんど感じられないスタークについて、一護は疑問を投げかけた。

スタークはその問いに、他のみんなを見渡しながら、「そうかい？ まあ別に、無理して戦う必要なんてねえからな。他の破面は好戦的なやつは多いが、俺はのんびりしていてえだけだ。けど、この流れは、俺だけダラダラとしている訳にはいかねえみたいだからよ、ちよつとだけ相手してもらうぜ——黒崎一護」

「……そうなるよな」

一護も覚悟を決める。
曰く、相手はグリムジョーやウルキオラを超える男。相当な実力だと踏んで、まず間違いはない。

「それじゃあ早速、始めようか。ああ心配するなよお三方。ちゃんと戦って、勝った暁には怨霊たちの管理している場所を教えてやるからよ」

「その言葉、本当でしょうね？」

「安心しなよ。嘘はつかないわ」

「そう。なら——時間も惜しいから、早く始めるわよ」

「お望み通りに」

勇儀と霊夢が睨み合いつつ、互いに距離を縮める。

「よし、こつちもそろそろやろうぜ。手加減は無用でいいよな？」

「手加減？ そんな余裕ある言葉、直ぐに言えなくしてあげるわ」

「はっ、そいつは楽しみだぜ」

「本当に、その余裕さが、ムカつくわ。嫉妬して、嫉妬して、嫉妬のあまり狂ってしまいそう」

魔理沙の意気軒昂な様を見て、どこか羨むと同時に嫉妬の念を募らせるパルスィ。

「……全員、やる気になったみてえだな」

「そうらしいな。そういえば、単純な興味本位なんだけど、あんたは十刃では何番目に強かったんだ？」

「力の序列のことか。なら俺は——1番。一応、十刃でトップってことになってたな」

「だよな。そんな気はしていた」

「そいつはどうも。面倒臭えが、こっちも始めるか」

「……ああ」

そして遂に——戦いが始まった。

《2》

「私は普通の……いや、人間代表の魔法使い　霧雨魔理沙だぜ！　改めてよろしくな！」

「地殻の下の嫉妬心　水橋パルスィ。私はあなたが妬ましい。だから討つ。理由はたった、それだけよ」

そして両者、名乗りを上げると同時に一気に弾幕を放つ。

両者間で激しい爆音と火花を散らしながら、魔理沙は箒の柄に立つて乗り、空中飛行を繰り広げる。

『ねえ、そろそろ話は可能よね？』

魔理沙が器用よく空中から弾幕を放っている中、魔理沙の周囲に浮かぶ小さな八卦炉からアリスの声が響いた。例の通信システム兼、戦闘の補助をしてくれるアイテムからだ。

「お、本当にちゃんとみんな黙ってたんだな。そっちの方が驚きだぜ」
『あんた達が勝手に決めたんでしょ？　みんなで喋ると気が逸れてしまうから通信は戦闘中か、何かしらのやむを得ないときだけ。そして、みんなで喋ると混乱するから、戦闘中は一人だけが通信。まあ私たちはあくまでサポートだし、現場にいないから頷くしかなかったんですけどね』

そう、この旧都に入る少し前、アリスの言った通りの取り決めがなされたのだ。主にサポート同士のけんかが勃発したためである。

「へえ、それじゃあアリスが今回サポートしてくれるのか？」

『そうなるわね。それよりほら、よそ見しないで、次来るわよ』

アリスと通信しながらも魔理沙は弾幕による攻防を繰り広げると同時に、軽快に飛行を続けていた。

しかし、その攻防の最中でパルスィの妖力が上がっていくのが感じられる。

「これは――」

「スペルか」

魔理沙が呟いた瞬間、上昇していたパルスイの妖力が一気に解き放たれた。

「花咲爺『シロの灰』」

緑色の美しい弾幕が周囲に放たれると同時に、特大の弾も同時に魔理沙に向けて放たれる。

そしてその軌跡には煌びやかな花卉が咲き誇った。

「きたきた！ やっぱ弾幕ごっこといええばスペルだよな。これこそ醍醐味ってやつだぜ」

魔理沙はパルスイのスペルを見て、楽し気な表情となりつつ弾幕を華麗に避け続ける。

『ほら、これは戦いよ。楽しんでないで真面目にやりなさい。相手は危険な地底の妖怪なのよ』

「だからこそ、楽しまなきゃ損ってやつだぜー！」

『全く、そんな油断してたら痛い目あうわよ』

アリスの注意を無視し、そのまま魔理沙はスペルを唱える。

「星符『メテオニツクシャワー』！」

さながら煌く流星のような弾幕が、パルスイの弾幕を尽く蹴散らしていく。

「チツ、何なのよコイツ。戦いだっていうのに楽しそうにして。嫉妬『緑色の目をした見えない怪物』」

忌々しそうに舌打ちし、パルスイは次なるスペルを唱える。

緑色の弾幕が、その軌跡上に動かない弾幕を設置しながら放たれた。ながら緑の蛇のような怪物を思わせるスペルが、魔理沙に迫り来る。魔理沙の放った流星の弾幕も、緑の怪物が呑み込んでいくが如く、掻き消されていった。

流星の魔理沙もやばいと思う反面、そこに楽しさを見出す。

魔理沙は弾幕ごっこが趣味といっているくらい好きである。故、敵が強ければ強い程、魔理沙は燃え上がるのだ。

「行くぜえええー！」

ミニ八卦炉を手に、魔理沙は襲い来る緑の蛇に向けて構える。同時に膨大な魔力の奔流が、ミニ八卦炉に収束されていく。相對するのは巨大な弾幕による緑の蛇、怪物。水橋。パルスィは嫉妬を司る橋姫。その緑の怪物は、例えるなら嫉妬という目には見えない感情が具象となって顕現した存在を思わせる。立ちはだかる目の前に敵を、輝かしい者共を喰らい尽くそうとする嫉妬の怪物である。

それはさながら最凶の弾幕。

されど、最凶を迎え討つは最強の閃光。

「——恋符『マスタースパーク!』」

それは星々のように輝く閃光で、魔理沙の代名詞とも言えるスペル。太陽よりも眩しく、全てを包み込むような煌きは、しかし無情にも触れた全てを粉碎する超破壊の極太レーザーとなっている。

秒にも満たず刹那をも待たぬ瞬間に、魔理沙の放った閃光は緑の怪物を包み込み、破壊していった。

「くそッ、この魔女。本当に虫酸が走る。こんな女に——」

目に入れるのも嫌だと言わんばかりの感情を顔にしながら、マスタースパークを避けきる。

元気で活発な少女であり、弾幕も光輝に満ちた燦爛たる華々しき。ああ、羨ましい妬ましい、怨嗟の念を募らせていくパルスィは、自分のスペルを打ち破られたことなど気にも止めず、心の奥底から嫉妬に狂い染まっていった。

「よっしやあー! あいつのスペルを討ち取ってやったぜ!」

『あなたのマスタースパークだけは、清々しいくらい相手の弾幕を葬るわよね。そこは褒めてあげるわ。けど、油断しちや駄目よ。アイツ、今ので変なスイッチ入ったみたい』

アリスの警告の声が、喜々としている魔理沙の耳に入る。

すると、その刹那に感じ取った。

パルスィから邪悪なまでの妖力が揺蕩っており、まさに深き闇に満ちた嫉妬心の具現。奈落の底めいた瞳を魔理沙たちに向けていた。

「妬ましい妬ましい妬ましい! こんなやつに、私の心が掻き乱されるなんて……ああ、羨ましいのよ。妬ましいのよ。あなたのような暖

かい地上に生きている女は、私の前に現れちゃいけないのよ」

吐き気を催すくらい嫉妬に呪われ、狂ったかのように頭を抱える。

そんなパルスイを見ながら、魔理沙は当惑したかのように頭をポリポリとかく。

「あく、難儀な性格つつうか種族、なのか？ そんなに私、人から妬まれる魔女でもないぞ。なあアリス？」

『ええ、その通りね。魔理沙にジエラシー感じちゃうなんて、とても可哀想だわ。もつと博識な……そうね、例えば頭脳明晰な私なら妬まれてもしようがないと思うけど』

「いやそれはないぜ。アリスに比べたら、まだ私の方が妬まれる。それだけは確信を持って言い切れるぜ」

『はあ？ どの辺が私より妬まれる要素があるっていうの？ 具体的に聞きましょうか？』

「そうだな、自分で危険な相手、油断したら痛い目あうって言うっておきながら、当のアリスもちよつと浮かれ始めているところとか？ 頭脳明晰とか言つときながら、全然そんな感じないぜ。逆に、この私は相手の行動、弾幕やスペルの対処をしつかり分析しながらやっつてるぜ。それらを鑑みたら、まあ圧倒的に私のほうが妬まれる要素がある！」

『そりゃあんたが現地にいるからでしょ。私がそつちにいたらね——』

アリスが言い切る前に、パルスイが行動に出た。

「さつきから、ごちやごちやと五月蠅い。友情ごっこなら、他所でやりなさいよ。まあ他所に行く前に、痛い目にはあつてもらおうけどね」

病んだ目が蛆でも見るような汚らわしい視線となり、相手を妬み殺すかのような言葉を紡ぐ。

「丑時まいりは胸に一つの鏡をかくし、頭に三つの蠟を……杉の梢に釘うつとかや。はかなき女の嫉妬より……人を呪詛ば穴二つ……」

ブツブツと、所々聞き取れない程の声で、念仏のように言葉を発するパルスイ。

おどろおどろしい妖力が、発している言葉の効果なのか徐々に鋭利

な刃物のように研ぎ澄まされていく。

「さあ私の鬱憤、晴らしてちょうだい。これが嫉妬の力。絶対なる力よ——怨み念法『積怨返し』」

積年の怨みが爆発したかのように、病的なまでの嫉妬の念が空間を圧迫する。

周囲の空気が変化した。パルスイを中心にドロドロに煮詰めた腐泥のような、粘性を帯びた妖力の波動が広がる。これこそ嫉妬の極限。万象を己の嫉妬の対象として認識した、パルスイの深層より溢れ出した力。

妖力が弾幕となりて迸る。全てを攫う土砂や津波さながら、弾幕の飛行方向に存在するあらゆるものを呑み込んで広がる。例えるなら、死滅という概念そのもの。弾幕に触れたものは、大地も木々も石くれさえも、ドロドロに溶かされるかのように分解されていく。

形あるもの全てが嫉妬の対象と言わんばかりの、パルスイの積年の怨みである。

「なら、こつちも正々堂々と乾坤一擲の勇往邁進で挑んでやるぜ！
恋符『ノンディレクショナルレーザー！』」

魔理沙を中心に、複数の魔法陣が展開され、五色のレーザーが回転するように発射される。同時に星型の弾幕も張られ、弾幕とレーザーによる二重アタックでパルスイの攻撃に対抗する。しかし、相手の方が上手だったのか、魔理沙の弾幕やレーザーが尽く敵の弾幕に分解されて消滅する。

だが、相手の弾幕よりも恐ろしいのは、並行して密度を上げていく嫉妬の念である。

『これは、不味いわね。その場になくてよかったわ。人間、いや軟弱な妖怪でさえも彼女から出る圧や視線だけで精神が保てないもの』

通信機からも胸をなでおろしたのが分かるアリスの言葉。

実際、こんな腐蝕されていく空間は最悪極まりない。四肢が、内臓が、魂に至るまで全てが生理的嫌悪感を感じる。その上、嫉妬の念は呪怨と化し、全ての生き物を包んでいく。包まれた生き物は、まず猛烈に死にたくなる。ネガティブ感情、マイナスの感情が津波のように

内側から膨れ上がる。ああ、死にたい、こんな俺に生きている意味や価値などない。これ以上苦しみたくない、そう言った負の念が襲いかかるのだ。

『これが、地底の妖怪の本性。……何て危険なのよ全くもう』

通信先にもその念を感じているのか、アリスの声が弱々しくなっていく。

そうなれば、現場は破滅的な状況だろうとアリスは、魔理沙の安否を確認しようとした矢先だった。

「だああああああああ!! 何だこの辛気臭い感じ! 私はこういうのスーパーに苦手なんだぜ!」

魔理沙が獣の咆哮のような、しかし快活にも聞こえる大声を上げた。

まるでパルスイの放った波動など意にも介していないのか、それどころか蹴飛ばすかのような気概で逆に闘志を燃やす。

「こ、こいつ……どんな精神構造してるのよ!?!」

魔理沙の姿を見て、パルスイは剣呑とし栗立つ。

「けど、この私の弾幕があなたを討つ!」

パルスイの左右から青色の炎弾と赤色の炎弾を波紋状に展開している。嫉妬による怨念が弾幕となりて、辺り一面を腐らすように分解しながら差し迫った。魔理沙が放っているレーザーや弾幕など多少の時間稼ぎにしか過ぎないかのよう。

「行くぜアリス、力を貸してくれよ! パルスイに強烈なやつを叩き込んでやろうぜ!」

『本当にあんたは、今回ばかりは凄いと認めてあげる』

この状況でも澆刺とした魔理沙の声に、アリスは安堵したのか嘆息混じりに答えた。

『魔理沙、周囲の弾幕は任せたわ。私は一点集中で、あの陰気な女を叩く』

「了解ッ! 頼りにしてるぜアリス」

『ええ、期待してなさい。このアリス・マーガトロイドが最高の技を披露してあげる』

魔理沙の周囲に浮かぶミニ八卦炉にアリスの魔力が込められ始める。

「マジですげえカラクリだよなこれ。通信機だけじゃなくて、こうして通信先のこつちにまで魔力を送り込めるんだもんな。こいつあ、この技術力を河童からかつぱらいたいぜ」

『なに詰まらないダジャレ言ってるのよアンタは』

「ん、ダジャレなんて言ったか？」

『あー、天然入ってたわねアンタ』

通信先の向こうからでも頭を抱えているとわかるアリスの声音。

それを気にしない魔理沙は、魔力を一気に収束させる。

「暴れてやるぜ！ こんな時でもなければ本気でブツかれないからな」

濃密な魔力が黄色の輝きを放ちながら、螺旋を描きつつ魔理沙の八卦炉に集う。魔力を八卦炉に固定、暴発してしまいそうな勢いで魔力が込められていく。

パルスイの弾幕は、幾星霜の長い嫉妬による念の解放によって成される力。その力が万物を分解する形で発現した。その嫉妬への想いは極限、想いという面においては前代未聞で類を見ない程である。

これを打ち破る術を魔理沙は持ち合わせていない。だが、逆を言えば自分の全力を出せる。小細工などは一切しないし、できるタチではない。だからこそ、単純な強さのみを研鑽してきた魔理沙は、臆せず挑めるのだ。

「よっしゃ！ 準備万端だぜ！ おいパルスイ、強いつてのはな、お前みたいな陰気な力じゃないぜ。ただ真つ直ぐに希望を見据える、その心だ！」

ただただ純粹な善性の輝きを纏う、無謬な思いの魔理沙。

そこから放たれるは穢れを眩い煌きへと変える一撃――

「恋心『ダブルスパーク』！」

穢れなき輝きを放つ魔理沙の奥義、極太レーザーという壮大なスケールの御技である。

嫉妬によって生み出された絶望の弾幕へ向けて放たれたマスター

スパークは、光の道となって打ち崩していく。

「こいつ、こんな力を隠していたの!？」

パルスィは驚愕の表情を露にする。しかし直ぐに我を取り戻し、抑揚のない声で言葉を紡ぐ。

「それに……あんたの価値観をいきなり押し付けられないで。この嫉妬の感情が、あんたなんかに分かるもんか!？」

自分の嫉妬を、他人の裁量で推し量られ怒りの呵責を上げる。

「嫉妬……ああ、分かるぜ私には。この私にも嫉妬の感情くらいあるぜ! 私の友達には、すんげえくらい本を持っているやつがいてな、それがたまらなく羨ましくて、毎日毎日嫉妬してるんだぜ!」

「……は?」

「だから、ああもう私は誰かを説くつてのは苦手なんだぜ! まあそのなんだ、そんな偏狭な考えしてないで、もっと度量のでかい女になってみる。そうすれば世界はまた違って見えるぜ!」

そして放っているマスタースパークの力が、魔理沙の裂帛の気合により出力が上がる。

だがそれでも、パルスィの力が上手なのかマスタースパークでも分解され消滅していく。

「ふん、所詮は口だけ。私の芯にも響かないし、この力に対抗することできない。力ないものの発言なんて、この地底では無意味なもの!」

「なら、もっと力を込めてやるよ!」

魔理沙が使ったスペルは『ダブルスパーク』。

それは言葉の意味通り、二発分放てる。

「くらええええええええ!!」

咆哮と共に、二発目のマスタースパークが放たれた。瀑布の如く嫉妬の弾幕を、煌く奔流の閃光が押し流す。真っ向切って対抗する。

パルスィの弾幕を打ち消せていったのはいいものの、しかし全てかき消すには至らない。それどころか、前述通り時間を稼いでいる程度となっている。

「くそッ! やっぱキツイぜ……!」

けど、諦めねえぞ。私はな真っ

直ぐ、希望を捨てずに挑んでやるぜ！」

「無駄よ無駄。私の嫉妬の力に敵うわけもない」

「へっ、嫉妬なんて力より、希望っていうパワーの方が強いってことを絶対に証明してやるぜ！　そしてお前を、そんな嫉妬よりも希望を見据えていけるようにしてやるぜ！」

単なるエゴ。

これはあくまで魔理沙の確執。それを押しつけているに過ぎない。

この世界ではどれだけ雄弁に語っても意味はない。肝要なのは力。なら魔理沙はそれを示し、パルスイに少しでも希望を見据えられるようにしたいのだ。

「けど……！」

流石に厳しい。

そろそろマスタースパークのための装填していた魔力が切れる。

パルスイの弾幕はまだまだ張られているのだ。

『あら、そろそろ限界なの魔理沙？』

そこで遂に、アリスの声がミニ八卦炉より流れた。

『こつちの準備は整ったわ。いつでもいけるわよ魔理沙』

「待ってたぜアリス！　それに私はまだまだまだ限界じゃないぜ！」

『あら、そうなの？　とても疲弊してると思うけど。まあいいわ。じゃあ、そろそろ決着つけるわよ！』

瞬間、ミニ八卦炉が光り輝くと、魔理沙の周囲を暴風となって吹き荒れる。膨大な魔力の奔流が、渦を巻きながら少しずつミニ八卦炉に集束されていく。

魔理沙が稼いでくれた時間で練り上げた魔力は、それこそマスタースパークの魔力量を優に上回っている。

『私は人形使い。針の穴に糸を通すのはお手の物よ！』

そしてミニ八卦炉より一筋のレーザーが放たれた。

匠に修練された魔力は、絶大ながらも一本の糸のようになり、パルスイが放っている弾幕を文字通り針の糸を通すような技法により通過していった。

パルスイの弾幕に正面からの対抗は不可。ならパルスイ本人を狙

うしかない。しかし大量に放たれた弾幕がそれをさせんとしていたが、生憎と相手が悪かった。

人形遣いアリス。例え通信先からでも、相手の弾幕を通り抜けるようにレーザーを発射できる命中精度。それは普段から日常的に針に糸を通すような事を繰り返して行わなければ、なかなか成し得ないテクニクである。

「——くッ!?!」

刹那の判断。

パルスイは間一髪でアリスのレーザーを転ぶようにして避けた。

危なかったと、パルスイは感じ取る。あれを喰らえば自分は確実に倒されていたと確信を持って言える。たったの一撃、それだけで喘鳴を起こし膝が笑ったかのように振るえた。

「——」

だが次が来る！ と身構えた矢先、それは来なかった。

代わりに別の脅威が目の前に広がっていた。

「悪いなアリス。力を借りるぜ！」

自分が張った弾幕の向こう側、そこには再び八卦炉を構え、魔力を集中させる魔理沙の姿があった。

「私は、あのパルスイの弾幕を正面から打ち破ってみせるぜ！」

アリスが練り上げた魔力を、全て自分の八卦炉に移しているのだ。

同時に魔理沙自身の魔力も練り込み、極大にて神大たる圧倒的な魔力が装填されている。

「あれは——ッ!?!」

かつてないほどに満ちる魔力に、パルスイは戦慄する。

地底世界全てを照らし出すほどの、あまりにも強大な魔力の収束に、身を震わせて剣呑する。

「負ける、もんか!!」

このままだと自分の弾幕は敗れると直感したパルスイは、再び弾幕を張り嫉妬の怨念により限界を超えて強化する。

それを見て魔理沙は笑みを零した。

「いいぜいいぜ、やっぱり弾幕はパワー。お互い悔いのないように全

力でぶつかろうぜ！」

小細工などしない。全力で正面から受けて立つのが魔理沙である。眼前の嫉妬の運命に囚われた敵に、希望という道筋を切り拓くため。

そして自分の全て、アリスの練り上げた魔力を全て込み上げ——
「負けねえぜパルスィ！——魔砲『ファイナルマスターパーク』
!!」

今までの比ではない。

魔理沙とパルスィ、まさに二心同体の友情が紡ぎ出した希望の魔砲が、嫉妬の弾幕を浄化せんと、その穢れなき輝きを放つ。

猛烈な眩い煌きを放つ魔砲は、空間をも引き裂きながらパルスィへと迫る。

文字通り死力を尽くし放ったファイナルマスターパークは、全てをドロドロに溶かし分解するパルスィの弾幕と激突した。それは一瞬のせめぎ合いだった。完全に、確実にファイナルパークがパルスィの弾幕に優った。

いいや、理由はそれだけではない。

「……ああ、何なのよ。全くもう、友情、希望、そんな輝かしいものを見せびらかして」

パルスィの心が、魔理沙を見て揺らいだのだ。

怨嗟の嫉妬ではない、純粹に羨ましいと、羨望の眼差しを向けて。それ故に、嫉妬の怨念により放たれた弾幕は、パルスィの心が一転した一瞬の間に弱体化したのだ。

「嫉妬、しちやうじやない」

そしてファイナルパークは、パルスィの弾幕を全て飲み込み、同時にパルスィを呑み込んだのだった。

《3》

——時は少々戻り、一護とスタークもお互い刀を交差させていた。

磨きのかかった両者の剣戟、そこには確かな技術と経験が根付いており、全てが正確無比な一撃を放ちながら、同時に捌き散らしていく。しかし、そんな中でもまるで二人は本気を出していない。別に相手

の技量を測ろうともしている訳ではない。

例えるなら、道場で軽い打ち合いを沸騰させるような。

「……なあ、あんた。本気で戦うきがないだろ？」

死覇装のような黒い着物を纏い、斬月を握り締めた一護は、スタークの刀を捌きつつ問う。

「あんたは別に俺たちと戦うのが目的じゃないんだろ？ だったら適当に戦ってるフリだけして、他の連中が戦い終わんのをボンヤリ待とうと思ってな」

面倒くさそうに、スタークは一護の問いに答える。

実際、スタークは全力で戦う気はない。特段、自分が標的でわけでもない上、あくまで勇儀に無理やりここに連れられてきたに等しい。確かに一護の力には興味はあるが、それだけでは戦う理由にはならない。

「それに、あんたの目的は怨霊の発生源、つまりあそこだ。ならここで、下手に力を使うより温存した方がいいんじゃないのか？」

スタークは軽く後退しながら辺りを見渡して一護に言った。

周辺では霊夢と勇儀が辺りを粉碎しながら化物じみた猛烈な戦いを繰り広げ、逆に魔理沙とパルスィは弾幕を飛び交わせながら激烈な戦いを繰り広げている。

まるで、その後のことなど考えていないかのような感じである。

「俺からの助言だが、この後も戦わずして解決は恐らく難しいと思う。だったらあんただけでも、体力を残しておくべきだぜ黒崎一護」

「……確かに、な」

スタークからの提案は大いにありがたい。

ここで一護まで消耗しきったら、後の戦いに支障をきたす。それに相手が破面、しかも元N0, 1となると一護は確実に全霊をもって挑まないと退けることはできない。

「……ああ、分かった。あんたの提案には、感謝するぜ」

悩んだ末、一護はスタークの流れを飲む。

霊夢、魔理沙が全力で戦っている中、自分だけこんな適当でいいかを苦悩したが、ここは今後のことを考えることにしたのだ。

そしてここでグリムジョーあたりから何か言われると思ったが、特に通信機から何も言わないということは承ってくれたのだろう。

「まあ建前上の戦いみたいなものだ。気楽にやってくれ」

「恩に着る。そういや、一つ聞きたかったんだが、あんたも幻想入りすると同時に霊圧のほとんどを失っていたのか？」

「あんたもつてのが引つかかるな。そいつはつまり黒崎一護、お前は俺と同じように幻想入りした他の破面と接触してるのか？」

「ん、ああ。あんたの仲間だったグリムジョー、それにウルキオラだ。今は地上にいるぜ」

「そうかい。俺以外にもいると思ったが、あの二人もか」

スタークは表情を変えなくも、どこか嬉しそうな、安堵したかのような声調となった。

「ずっと地底にいるから分からなかったが、そうかあの二人もいるんだな。それで、話は戻るがあんたの言うように、俺は幻想入りすると同じく霊圧のほとんどを失っていた。ついでに言うると帰刃もできなくなっていた。……この件は、あの二人も同じってことか？」

「ああ。原因とか、そういうのは分からねえけどな。やっぱりあんたも同じか」

グリムジョーもウルキオラも幻想入りすると同時に霊圧をほとんど失い、破面の十八番である帰刃も出来なくなっていた。原因も全て不明だが、完全に弱体化した状態で幻想入りしているのだ。

弱体化、確かにそういう認識であったが……

「まあ霊圧は失ったか、その分こっちにきて新しい力を身に付けられた。面倒だったが、力をつけねえと地底では生きていけないからな」

「新しい力？」

「霊圧以外の妖力つつうのか？ そういった力だよ。スペルもだな。これが大きいって言えば大きい。正直言って、霊圧を失った分、いやそれ以上の分を新しい力で補完できた。そのおかげで、当時よりも俺は強くなれた。まあ、力なんて別に欲しくないんだけどな」

「そう、なのか」

一護にとって霊圧を失い、そのうえ帰刃が不可となった状態は完全

に弱体化だと思っていた。しかし、この幻想郷で鍛える事によって新しい可能性、つかり力や能力を手にした。

そして十刃時代よりも強くなった。

——まるで、それを誰かが狙っていたかのように。

一護は直感的にそう思った。

「俺もあんたに聞きたいことがあるんだが、藍染サマをどうやって倒したんだ？」

スタークが急に話題を変えてきた。

やはり気になるのだろう。

「ああ、そうだな。じゃあ、助言のお礼に教えてやるよ」

そして両者、刃を交差させながら話を続けたのだった。

×

「おらアツー！」

気合一閃、風を切る重低音を上げ拳が繰り出される。

放つは鬼の妖怪である星熊勇儀。圧倒的な怪力を持ち、勇儀の右に出るものは同じ鬼でもないときれる。大地を踏みしめただけで、周囲の建造物は倒壊し、地震が起きたかのように大地は揺れ、大きな地震を発生させる。

そして放たれた拳は風圧だけで暴力的な烈風を引き起こし、下手な回避行動では躲し切るのは不可能である。拳を避けても、拳に乗った風圧によって体を引き裂かれて、吹き飛ばされてしまうのだから。

「——神技『八方鬼縛陣』！」

それに相対するは博麗霊夢。並外れた霊力を持ち、弾幕勝負においてはトップレベルの実力者である。

瞬時に勇儀の拳の危険性を看破した霊夢は、即座にスペルを唱えた。

無数の札が霊夢を守るように囲い、同時に勇儀を迎撃すべく無数の弾幕も一斉掃射される。防御と攻撃、両方を同時に行えるスペルである。

しかし……

「甘いねええ！」

紙くずでも殴るような軽拳な動作で、霊夢の弾幕や札が破壊されていく。たった一発の拳で、霊夢のスペルが無残にも総崩れしたのだ。「チツ、なんて馬鹿力なのよもう!？」

直ぐ様、後退するも勇儀の放った拳が空気砲のような風圧となり、霊夢を軽く吹き飛ばす。

吹っ飛ばされる中、空中で体制を立て直し、勇儀に向けてスペルを唱えた。

「夢戦『幻想之月』！」

無数の霊力を内包した御札が、勇儀を貫かんと吸い込まれるように放たれる。

着弾すると同時に、勇儀の纏っている妖力と霊力がぶつかり業火を迸らせながら爆発を起こした。並の妖怪なら今ので決着が付くだろうが、勿論、相手は並なんてもんじゃない。

爆炎を手で軽く仰ぐようにしてかき消しながら、勇儀は笑みを零しつつ片手に持っている盃の酒を呷っていた。

「どうした、そんなもんか博麗の巫女。もって気合入れた一撃、ぶちかましてみなよ」

「あんたこそ、酒なんて飲んでないで戦いに集中しなさいよ。そんな奴と、真面目に戦う気になんてなれないわ」

「だったら私から盃を手放させるくらい力を出してみな。まあ今のあんたじゃ到底無理だろうけど」

「言うじゃない。ならその高そうな盃、壊しちゃってもいいってことよね。いいわ、使い物にならないくらい粉々にしてあげる」

「粉々にされちゃ困るけど、そのぶん期待できるってことにしてやる」
言い終わるや否や、疾風の如く霊夢が動いた。

矛先を勇儀に向け、無数の弾幕を放ちながら距離を縮める。確実に仕留めるレベルで放たれている弾幕、それに対して勇儀は重く鋭い拳で応酬する。数十、数百まで昇る弾幕に対して勇儀は拳一つ。数の暴力により圧倒的に不利と思わせるも、しかし一発一発から放たれる拳に加えそこから発生する衝撃波。それにより弾幕の尽くが潰されて

いった。

「なるほど、確かに凄まじい力ね」

勇儀は腕一本で怒涛の連撃を繰り広げている。余波のみで大地が碎かれるその光景は、まさに豪腕による絨毯爆撃。直撃すれば金剛石だろうが粉微塵に碎け、まるで紙屑の如く押し潰すだろう。当たれば必殺に等しい。

これが力にのみ収斂を置いた、鬼の力である。

「けど……」

冷静に勇儀の隙を伺って特攻する。

勇儀の打撃を一撃たりとも貰ってはいけないのは必定であり委細承知。ならば、弾幕を自分が隠れるほどの密度で放ち、その刹那を狙う。

霊夢は更に無数の弾幕を滅多打ちにし、自分の姿を勇儀から視認不可にした。

そしてその瞬間を狙い、高速で動き勇儀の背後を捉える。

「——隙ありよ」

「はっ、そんな小細工が通じるかっての!」

「え!?!」

だが、勇儀はそのようなことは完全に見破っており、振り向きざまの拳で霊夢を逆に捉えた。

直撃すれば、人体などは木っ端微塵に粉碎する鉄拳が、霊夢の顔面に突き当たる。

肉が抉られ、骨が碎かれ、拳の風圧で微塵切りにされ、見るも無惨になると思われたが……

「——これは」

勇儀は直ぐに理解した。

全くもって手応えがない。例えるなら霊夢の影を殴ったかのような空虚な感覚である。

「嵌ったわね。それは幻影よ」

霊夢の声が自分の背後から聞こえるのと同時に、高密度の霊力を感じ取った。

「霊符『夢想封印』！」

爆発的に放たれた複数の光弾が、ホーミング性を備えて勇儀に襲いかかった。

「ッ!？」

勇儀は後退するため跳ぼうとするも、一步遅く弾幕が炸裂した。

この程度なら少々の手傷程度で済むと確信した勇儀だったが、自分の手に持つ盃……通称、星熊盃が疎かになっていたことに気づく。その時には既に遅く、霊夢の弾幕により盃が粉々に破壊されてしまっていた。

「どう、あんたの大事な盃、言った通りちゃんと丁寧に壊してあげたわよ」

余裕な笑みを浮かべながら、霊夢は砕け落ちた盃を見ながら言う。
「……………」

勇儀も粉々となった盃を見ながら、何も言葉を発さずにいた。

怒っている、残念がっている、悔しがっているわけでもない。ただただ見つめ、そして何かを確信したかのように、勇儀が笑みを浮かべたのだ。

「いい、いいぜお前。口だけじゃないようだね。見直したよ、やればできるじゃない。今のは、あんたの分身ってわけ？」

「ええ、霊符『博麗幻影』。端的に言うと、文字通り私の幻影を出すスperlよ」

「そうかい。ったく、あたしも焼きが回ったね。こんな子供だましに引つかかるなんてさ。まあ、けどそれはいい訳になるね。いいわ、認めてあげようじゃないか」

まるで爆発しそうな爆弾を見ているような、溢れ出る妖力を身に纏う勇儀。並の者なら、その眼光だけで失神する程の威圧を放出しながら、勇儀は改めて名乗る。

「語られる怪力乱神 星熊勇儀。私の本気、しっかり見せてあげようじゃない」

「楽園の巫女 博麗霊夢。上等よ、受けてたつてあげるわ」

勇儀の威圧に対して、霊夢は平然としながら名乗り上げた。

妖力と霊力が激突しながら、周囲一帯を余波で吹き飛んでいく。大地が悲鳴を上げる。この地底世界が、大きな地響きで揺れ始めたのだ。

「行くよ、博麗霊夢!!」

獰猛な獣めいた咆哮が迸る。それだけで吹き飛ばされる破壊の圧力は凄まじく、ただ強く、ひたすら無尽に大暴れしると、大いに楽しめと絢爛にして暴虐たる鬼の本懐を遂げていく。

山の四天王に数えられる、力の勇儀。それが彼女である。かつて妖怪の山のいた時、妖怪たちの頂きにいた四人の妖怪のうちの一人であるのだ。

「ええ、いつでも構わないわ。掛かってきなさい」

勇儀は一回地面を蹴ると、そのまま霊夢の眼前にまで瞬時に迫り、そのまま拳を振り下ろした。

即座に霊夢は、勇儀の拳から大きく飛んで回避する。それとほぼ同時に、勇儀の拳が超威力の破壊となって地面を抉り、大きなクレーターを作り上げる。

「逃がさないよ! 鬼符『怪力乱神』!」

無数の弾幕が勇儀を中心に放たれる。

その怪力の化身たる鬼から放たれる弾幕は、高速で破壊を撒き散らしていく。

「この! 境界『二重弾幕結界』!」

霊夢を守るように、無数の弾幕と結界が張られるも――

「ほらほらボサつとしてんなよ!」

相手の弾幕や結界など恐るるに足らず。

自分で放った弾幕と共に、勇儀自らも霊夢に向かって特攻を仕掛ける。純粹な膂力、圧倒的なパワーのみで霊夢の弾幕を、結界を破壊していった。元々、純粹な物理で破壊不可の結界でも、常に妖力を纏っている勇儀にとっては何の問題もなく、妖力の力によって破壊できてしまう。

迫る脅威を前に、霊夢は平静を保って対処を試みる。

湧き上がる恐怖と焦りを封じ、静謐な心を持って挑まなければ勝て

ない相手。勇儀の一手、一撃でも自分に加われれば致命傷は免れないだろう。そう考えた時だった。

『霊夢、勇儀の力に対して半端なスペルじゃ簡単に破られちゃうよ』
陰陽玉の形をした通信機から、伊吹萃香の声が聞こえた。

『だから、ちよつち本気のスペルでいかないと駄目だよ霊夢』

「そんなこと分かつてるわよ」

萃香の言葉に、霊夢は自分に迫る勇儀に向けてスペルを唱える。

「霊符『夢想封印』！」

渾身の霊力を込めて放った霊夢の夢想封印。

霊夢自身、勇儀相手に油断はしていない。この相手には本気で挑まないと負ける危険は大いに有り得る。故に自分の代名詞でもあるスペルを放ったのだが……

「阿呆かい？ その程度のスペルが何になるってんだい！ 光鬼『金剛螺旋』！」

勇儀がスペルを唱えると無数の大型弾幕が螺旋を描きながら、鞭のようにしなる。

さながら光の蛇腹剣。それを手にした勇儀が霊夢の弾幕を、ひと振りしただけで軽々と打ち消していった。

「え、なアッ!？」

「ほら、呆けてる場合じゃないよ！」

霊夢が驚愕している間に、一瞬にして勇儀は接近し拳を放つていった。

とにかく全神経を回避に転じて、勇儀の拳を紙一重で避けるも。

「私が何度も外すと思ってるんじゃないよ！」

回避されることは既に読んでいた。

ならば、その先を狙って勇儀は確実に当てる一撃を放つのみ。

核兵器のような圧倒的な暴力の拳が、霊夢の身体にめり込もうとした刹那――

「円結界『博麗大ニ重結界』！」

常にいつでも自身に強力な結界を纏えるようにしていた霊夢。

当たり前だ。相手は化物レベルな物理の力の持ち主。一発でも当

たれば危険ゆえにである。

『博麗大ニ重結界』——純粹な物理による結界、そして妖力や魔力といった不思議パワーを防ぐ結界。それらを同時に発動する二重結界。これは周囲に展開するというより、自身を覆うように展開する結界。自分しか守れない範囲の狭い結界ではあるが、そのぶん結界の強度は絶大であるのだ。

耳元で爆弾でも爆発したのではないだろうかと思うほどの轟音を響かせ、勇儀の拳が靈夢の結界に激突した。

「いい結界だね悪くないよ。けど、いつまで持つかね」

勇儀は涼しい顔で、楽しそうに拳を靈夢に向けて連打する。

ここで恐ろしいのは、威力が放つごとに桁外れに上昇していることだ。

最初に受け止めた攻撃の威力の十倍はでかくなり、それが瞬きの後には二十倍。三十、四十と、際限なく拳による力が上がっていく。一体、どれほど上がるといえるのか、もはや個という枠に収まらないほど膨れ上がっていく暴力は、さながら神話の怪物めいている。

荒唐無稽な勇儀の膂力。

横殴りに放たれた拳の一撃は今や、音速で飛来する山の塊に等しい。

「この——ッ！」

このままでは結界が砕けると判断した靈夢は、一気に靈力を放出させる。

勇儀に結界を攻撃されている最中、ただただ喰らっていたわけではない。結界への攻撃開始からはほんの数秒だった。だが、時間は大いに取れた。靈力を練り上げた靈夢は、この近距離と攻撃に夢中の勇儀に全力をぶつけければ致命傷とまではいかぬも、かなりの痛手を負わせるであろう。

ここで一気に反撃に出る。

「神技『天覇風神脚』！」

「!?!」

靈夢のスペルの中でも珍しい肉弾戦専用スペル。

片足に練った全霊力を込め、渾身の蹴り上げを勇儀の腹部に放った。物理的な威力では勇儀に比べると劣るも、内包された霊力が勇儀に多大なダメージをぶつける。

「見事！ この私に蹴りを放つなんてね！ 私とここまでやりあえる相手は久しぶりだよ！」

「あつそ、じゃあとつととぶつ倒れなさいよ！ 光霊『神霊宝珠』！」
霊夢は後方に飛びながら、虹色に輝く複数の大弾を勇儀に向けて放つ。

「力業『大江山嵐』！」

対する勇儀もスペルを唱える。

まるで霊夢の放った大弾を全て洗い流すかのように、無数の大弾が天から降り注いだ。

「褒めてあげるよ博麗霊夢。技量といい度胸といい、私といい勝負だ。いやー、この私が人間を賞賛してやるなんてまあ有り得ないことだよ。胸を張りな、あんたは立派な化物だ」

「なにそれ、褒めてるの？ それとも貶してるわけ？」

互い、距離を取りながら次の一手を模索しつつ口を開いている。

「無論、褒めているよ。博麗の巫女っていう肩書きは伊達じゃないって、この私に認識させたんだからね」

「それはどうも」

『言っておくよ勇儀、霊夢は褒めてもあんまり喜ばないから』

そこで通信機から、萃香の声が聞こえた。

「おや、この声は萃香かい。久しぶりだね。姿が見えないようだが、どこにいるんだい？」

『今は地上だよ。この通信機つてやつから霊夢のサポートをしてるの』

「へえ、お前さんが人間と手を組んでいるなんてね。こいつあ珍しい」
『組んでるっていうより、面白いから一緒にいるだけだよ。それより勇儀、霊夢は強いよ。きつと楽しめると思うから存分にやっちゃいな』

「おうよ。骨のあるやつは大歓迎さ」

「ちよつと萃香、いちいち煽らないで」

霊夢が二人の会話に割って入り、

「萃香、あんたのサポートはいらさないから。こいつは私一人で倒す。いいわね？」

『構わないよ。私はのんびり酒でも飲みながら観戦させてもらうから』

「ええ、そうしてちょうだい。直ぐに、私が勝って終わらせるから」

「へえ、勝つか？」

勇儀は悦楽の表情に満ちながら、霊夢の言葉を噛み締める。

「ええ、難しくない。簡単なことよ」

返答に虚勢はなかった。確かに相手の膂力は半端ではない。同時に相手は常に攻めの姿勢といった単一のもの。

虚と実。布石。誘い、騙しなどの駆け引き、そうしたものがまっただくない。勇儀は途轍もない純度の力と戦意を纏った、決め技のみの連撃。それが勇儀の戦い方で、つまり大砲の乱れ撃ちに似ている。

脅威は無論のこと凄まじく、僅かな停滞を見せただけで即座に潰される。しかし、分かっているなら対処はできる。読めるし、返せる。

「面白い。じゃあ見せてみなよ博麗霊夢」

楽しげに嘯きながら、一步踏み出す勇儀。それに答えるように霊夢もそれに応じる。

そして両者、再び間合いが触れた瞬間、号砲のごとく衝突した。

霊力、妖力、スペル、肉体、戦術——極限の出力と精度で練り上げられた力と力が激突し、空間震すら伴いながら放射状に拡散していく。

吹き荒ぶ弾幕や力の余波は、周囲の大地を砕き隆起する。もはや大地震の直下に等しい。自然災害を連想させてしまうほどに、二人のせめぎ合いは桁外れのものだった。厳密に言くと、周囲を破壊しているのは勇儀単独の猛威がほとんどだが、それを逸らしながら相対している霊夢の立ち回りも尋常ではない。

勇儀が度外れした膂力の持ち主なら、霊夢は度外れした霊力を持っている。

例え勇儀の戦法を理解したところで、それを対処できるかというのは話が別だ。理解しても、この暴威の渦中に飲まれれば、常人は軽々と引き裂かれ、吹っ飛ばされる。

霊夢自身も、少しの気の緩みで戦況の趨勢が一気に傾くレベルなのだ。

「ははは!! いいぞもつとだ! もつと楽しもうではないか! 鬼声『壊滅の咆哮』!」

勇儀がスペルを唱えると、無数の弾幕が一気に霊夢に向けて放たれた。

「楽しんでるのはあんたと、通信先で酔っぱらってる萃香だけよ! 宝具『陰陽鬼神玉』!」

陰陽玉のような巨大な霊力弾を放ち、勇儀の弾幕を飲み込むように掻き消していく。

しかし特攻を仕掛けてきた勇儀が拳で霊夢のスペルを破壊し、そのまま霊夢に殴りかかった。

いや、それだけではない。

「おらあ喰らいな! 鬼符『鬼気狂瀾』!」
鬼の妖力がレーザーのように複数に形成され、高速で射出された。

「あんたも喰らいなさい! 神技『八方龍殺陣』!」
無数の御札と弾幕が展開され、レーザーを否応なく滅殺していく。同時に特攻をしてきていた勇儀にも被弾し、痛手を連続して与えている。

しかし痛みを感じていないのか、そのまま霊夢に向けて鬼の拳が炸裂した。

「ぐッ!? 結界がッ!」

今の一撃で、先ほど張った二重結界が完全に砕けた。それだけではない。そのまま勇儀の拳を受け、霊夢の身体に直撃したのだ。

体を、内蔵までも木っ端微塵にされたかのような苦痛が、全身を駆け巡る。血反吐を吐くも、この程度で済んで良かった。もし結界を張っていなかったら、間違いなく今の一撃で霊夢は沈んでいたであろう。

対する勇儀も、全方位からまともに霊夢の御札と弾幕を受けてダメージを負った。

「……は、はははははは！ よくやった、この私にここまで痛手を与えるとほ」

しかし勇儀は苦痛に悶えるでもなく、受けた傷をむしろ寿ぐかのよう
に鬼の圧力が高まっていく。

「いいな、やはり戦いとはこうあるべきだ。拮抗してこそ真に楽しめる
というもの。だろう霊夢！」

傷を負う。それに比例して攻勢の密度も強度も跳ね上がった。

霊夢はそれに対処しつつ、うまいこと勇儀に弾幕のカウンターを与えていく。また、その逆も然り。霊夢は常に結界を張るも、勇儀の拳が当たれば一撃で砕け、同時に霊夢にダメージが通る。結界はもはや、ダメージを軽減させるためにしかなかった。

「この四天王の一角である星熊勇儀を、ここまで獅子奮迅させたのはお前が久しぶりだよ。伊吹萃香、茨木童子、金熊明道、私たち四天王を前にすれば、みな逃げるのが必然であった。だが、なるほどな。地上にもまだまだ捨てたものじゃない。なかなかの強者がいるではないか」

「戦いながらペラペラ喋ってるんじゃないわよ！ 舌噛んで後悔しても知らないからね！」

「確かにな。語っている場合じゃない。今は、この戦いを全力で楽しむ時だね！」

「ええ、思いつきり楽しませてあげるわよ！」

そして再び、両者の力と力が交差し、戦場が彩られていく。

無数に煌く弾幕、それを奏でるかのような破壊の轟音。見るものが見れば紋情的な感嘆さえ漏らすだろうが、両者にとってはどうでもいい。

勇儀は心の底からこの戦いを楽しみ、霊夢はこいつに負けたくない。いや必ず勝つという心意気でぶつかっている。

「いいな博麗霊夢。お前が良ければこの地底で暮らしてはみないか？

「ここにはまだまだ面白いことがあるし、猛者もいる」

「勘弁して欲しいわね。こんなところ、頼まれても住まないわ。それに私は博麗の巫女。やるべきことが沢山あるのよ」

「そうか、残念だよ。まあいつでも遊びにきな。歓迎してやるからよ！」

「ただでござ飯にありつけるなら、考えなくもないわ！」

超弩級の一撃を叩き込み、磁石が弾かれるようにして両者は後方に吹き飛んだ。

「この戦いが永遠に続いてもいいんだけどね。どうやら、お前を私の奥義で倒したいと、本能がそう囁くんだよ。全く、笑いが止まらない！ 最高の戦いだよ博麗霊夢！ 見せてやるよ、私の最高の一撃を！」

絶頂、興奮、狂喜乱舞する勇儀。

それに比例するかのように、妖力が天井知らずに上がっていく。

「ええ、見せてみなさい。その一撃、軽々と破ってみせるわ」

「破ってみせな。私が大いに期待している！」

そう言うと、勇儀はありつたけの妖力を弾幕へと変換した。弾幕は花が咲くかのように展開されていき、霊夢の全方位を弾幕で包んでいく。身動きを封じるために。

「なるほどね。いいわ、真正面から受けて立ってやるわよ！」

霊夢が勇儀の狙いを読んだ上で、霊力を一気に練り上げる。

「博麗にて巫女語る 善性独白逆手にて安寧は滅び、親しきものは等しく崩れ落ちる 集え集え、博麗巫女の怨恨を今ここで与えてあげる」

祝詞を唱えるごとに、霊力が飛躍的に急増する。

今ここに霊夢の最大最高の一撃を持って、勇儀を迎え撃とうとする。

「……………」

勇儀はそれを見て、もう口では何も語らない。

後はもう、この拳に全霊を込めて霊夢に語りかけてやるのみ。

——この勝負は私の勝ちだと。

「行くぞ——四天王奥義……『三步必殺』!!」

妖力を込めた圧倒的な力を込め、大槍を投げ放つかのように拳を振るった。

大轟音を轟かせ、飛翔する妖力と臂力の融合技の一撃は、まさに万軍を突破する流星の如し。超規模の震動波を帯びながら、展開した弾幕を粉碎灰燼とさせつつ霊夢に迫る。

まさに神威の一撃。今までの勇儀の力の最高峰である。

それに対して霊夢は、毅然とスペルを解き放った。

「さあ驚いて目を見開きなさい！ 『最も凶悪なびつくり巫女玉』!!」
己の全霊力を緻密に練り上げた、勇儀の一撃に匹敵するほどの巨大な青い陰陽玉。それを放つと、周囲の弾幕など歯牙にもかけず消滅させていった。

そしてその刹那には、両者の力と力がぶつかり合った。

この地底全域に響いたであろう破壊の轟音と衝撃波。それらが放出された時には、もはや両者はまともに立つことすらままならず、糸の切れた人形のように倒れてしまった。

——ああ、久方ぶりに全力を出せた。胸踊った、病みつきになりそうだよ。博麗霊夢、また一緒に楽しくやろうじゃないか。

——ごめんだけど、もうあんたとは二度とやりたくないわ。全くもう、本当に疲れたわ。けど認めてあげる。あんたは私が本気で勝ちたいたと思った数少ない相手よ。

——そいつは嬉しいね。けど、それは私も同じだよ。まあ今回は相打ちってところか。

——は？ いやいや私の方があんたより倒れたの、ちよつと遅かったから。私の勝ちよ。

——何を言ってるんだい。大目に見て相打ちにしてやろうと思っただが、どう見てもお前の方が先に倒れたからな。

——いやいや、あんたの方が先に倒れたから。全く、何を見てたの本当。これだから呑兵衛は。

——呑兵衛は関係ないでしょうが。ああもう、いいわよあんたの勝ちで。しょうがないから譲ってあげる。

——なにその上からな態度。腹立つんだけど……くっ、ああもう、

だめ。意識が、遠のいて……………

——……………ま、楽しめたんだ。勝ち負けんあんでもう、どうでもいいよ……………

霊夢も勇儀も口で話していない。

お互い、心で通じ合った。摩訶不思議なことだが、倒れてもお互いが心をぶつけていたのだろう。

こうして二人の戦いが幕を閉じたのだった。

《4》

霊夢たちが地底に入る少し前——

とある男もこの地底に姿を現していた。

「……………始まる。この私の役目が、目前にまで来ている」

黒い司教服を身に纏った男は、どこか空虚な目を開きながら誰にも言うでもなく呟く。周囲は明るく、たくさんの妖怪が町を闊歩していた。

「この《星天》アレイスターである私の努め、それは博麗を次なる一手に歩ませること。ああ、どうしてこう……………詰まらないのだろうか」

生気がない、まるで幽霊のような雰囲気をした男は感情のない声を上げていた。

誰にも気づかれず、いや気にもとめられず、ただそこに小石のように転がっているかのような実態のない男。声を上げても、それは空間に溶け込むようにして消え失せる。

『神のシルベ』としての役目を終えて、早く、早くこの世から消えたものだよ」

そうして男は、ゆらゆらと頼りない足取りで、街中へと消えていったのだった。

*

そして同時刻……………とある西洋風の豪華な大きい屋敷にて。

一人の少女が自室の窓から、地底を眺めていた。

「……………来る」

まるで未来でも見通したかのように、少女は呟く。

「逃れられない、大きな戦いが」

意を決したかのように、少女は言った。

「噂の博麗霊夢。そして黒崎一護。……私、古明地さとりが相手をしてあげるわ」

第49斬【コヨーテ・スターク】

《1》

「はははは!! いやーまいったまいった! あんたらこの私が認めざるをえないバトルマニアだよまったく!」

「俺の知り合いにそんな奴がいるけど、一緒にされたくねえ」

地底に入り、話に聞いていた旧都へ入ろうとした途端、三人の妖怪

——星熊勇儀、水橋パルスイ、コヨーテ・スタークと激戦を繰り広げた一護たち。

地底に行く前に聞かされていた通り、危険極まりない妖怪たちであつた。

魔理沙も霊夢も文字通り死力を尽くして打倒に当たり、勝利もしくは相打ちにまで持ち込んだが既に魔力も霊力も底に近い。

結果、霊夢はまだ立つのが限界に等しく、魔理沙は動けるものの戦闘に関しては危惧の念を抱かずにはいられない。

「おいおいどうしたよ博麗霊夢! この私と互角に打ち合ったっていうのに、なに疲れきった顔してんのさ」

勇儀はバシッと、疲弊して手頃な石に座っている霊夢の背中を叩く。

「イタツ! 何すんのよこの力馬鹿! てか、何でもうそんなに元気なのよ!?!」

涙目になりながら背中をさする霊夢。自分はここまで体力的にも霊力的にもダウンしているのに、相對していたこの鬼はもう全快に近しい。

恐ろしいまでの回復力といったところだろう。妖力までは回復しきっていないものの、体力的には元通りである。

「鬼の体力舐めるなよ。お前らとは身体のがつくりが違うからな。よし、もう一戦いっとくか?」

「絶対イヤ。二度とゴメンだわ、あんたとの戦いなんで」

「つれないね。ここは酒と喧嘩を何より楽しめる世界だったのに、楽しまなきや損つてもんだぜ。まあ全快でもないあんたと戦ったとこ

ろで、さつきみたいないない熱い戦いは無理って話だろうけど」

「それより早く教えなさいよ。戦ったら怨霊を管理している場所、教えてくれるんでしょ？」

「戦って勝ったらって言ったんだがけど、変に曲解しないあたりまあいいわ。あつちの奥、旧都の外れにある大きな屋敷に向かいな。そこにいるはずだ」

「そう、まあお礼くらい言っておあげるわ。ありがとう」

お、霊夢が素直に感謝の言葉を言ったと、どこか感心する一護。

その近くで魔理沙とボロボロの格好のパルスィ握手を交わしていた。

「いいか、これで私とパルスィは友達だ！」

「……さつきまで戦ってたのに何この切り替えの早さ？ 気持ち悪いけど羨ましいわ」

「こんな美少女に向かって気持ち悪いはないぜ」

「自分で美少女って言えるなんて、何て自惚れ……けど妬ましいし羨ましいの」

握手を交わしている二人だが、何やらパルスィからおどろおどろしい妬みのオーラがにじみ出していた。いや、文字通り妬みの念が出ているのだ。

そのオーラが魔理沙に触れると、徐々に魔理沙の服のみを溶かし始める。

「お、うおお！ ちょっと、パルスィ待てストップだ！ 私の一張羅が溶けてる！」

「ん、あら、ごめんなさい」

妬みのオーラを抑えるも、一度溶けた服は元に戻らない。

「うわああああ！ 私すっぽんぽん！ すっぽんぽんになっちゃった！」

「いいから隠せよ！ なんて堂々としてんだよ！」

「見られて恥ずかしい身体してないからな。へっくしょッ！ うう、流石に寒ッ！ なんか着るものないか？」

「とりあえずこれ羽織つとけ」

一護は自分の上着を脱ぎ、それを魔理沙に着せる。

「……何でだ、さつきよりエロく感じるのは」

「感触やだなく。地肌 напрямуюこんな上着は気持ち悪いぜ。あとブカブカだぜ」

「人が親切心で渡してやったつてのに。嫌なら返してもらってもいいんだぜ」

と、一護は何の気なく魔理沙に着せた服を引っ張る。すると小ぶりだがふつくらと膨らむ胸と、艶めかしい柔肌が見えた。

「うおおっ！ 悪い！」

「何だその反応。もつところ、グへへいい体を見せてもらったぜ、とかあるだろ」

「いやそんな反応しねえよ！」

一護は魔理沙から目を逸らしつつ、顔を赤らめる。

それを見た勇儀が悪戯な笑みを浮かべた。

「おやおや、随分と初心な男だねえ。結構イケメンだから女性経験は大変豊富だと思っただけけど、案外見た目と反するものだね」

「うっせえよ。別に構わねえだろ」

「何なら私が相手してやろっか？」

「いや聞いて——」

「駄目に決まってるでしょ！」

一護が言い切る前に、霊夢が慌てたように声を上げた。

それに一護は面食らい、霊夢はハツと我に返る。

「ち、違うわよ！ 決して他意はないから！ 私はただ同居人、というか相棒……いいえ、仲間として言っただけよ！」

「へえ、それにしても凄いい狼狽だねえ。二人揃ってあれかい、思いつきりピユアなのかい。いいねえ、嫌いじゃないよ。私も気が遠くなるくらい昔はそうだった」

「聞いてないわよ。ほら、早く行くわよ二人とも。もう休憩は終了。ここにいと気が狂うわ」

霊夢は石から腰を上げつつ、

「……ねえ、本当に怨霊を管理してる場所は、あっているんでしょうね

？」

「私が嘘ついているって言いたいのかい？ 心外だねえ、こうしていい喧嘩させてくれた相手につまんない嘘なんてつかないわよ」

「鬼の言うことを真に受けるな、と言われたことがあるのよ」

勇儀はため息をつくとき、スタークに視線を送る。

「スターク、あんた一緒にやってやりな。道案内と、ついでに助力でもしてやりなよ。さっきの戦い、黒崎一護を温存させておくために、あえて本気でやりあわなかったでしょ？」

「筒抜けか。しょうがねえな」

スタークは面倒くさそうに頭を掻きながらぼやく。

「しょうがねえ。悪いけどよ、俺もあんたらの手伝いをさせてもらうが、構わねえか？」

「ああ、あんたが付いてきてくれるんなら心強い」

一護は快諾する。

「スタークって言ったわよね？ まあ雰囲気から言って敵方と共謀とかしてないと思うし、別にいいわよ」

「一護も信用してるしな。それにすげえ強そうだし」

霊夢と魔理沙も頷いた。

「随分と信用されているんだな。いい仲間じゃねえか、黒崎一護」

「あんたも地底でいい仲間に出会えてるじゃねえか、スターク」

「……そうだな。一人じゃないってのは、いいことだ」

スタークは口元が綻びた。

「よし、十分休憩はしたわ。例の屋敷に向かうわよ」

「よっしゃ！ 異変解決に王手つてやつだな。気合入るぜ」

「ねえ……」

意気軒高な魔理沙に、ボソツとした声でパルシイが話しかけてきた。

「……と、友達になったんだから、また遊びに来ても、いいから」

顔を赤らめながら、パルシイはそう言った。

「おう、絶対に遊びにくるぜ！」

魔理沙は満面の笑顔で答える。

それを聞いたパルスイは、ほんの少しだけ笑みを零したのだった。そして……一護たちは例の屋敷に向かった。

*

——その頃、地上組では。

博麗神社の一室にて、グリムジョーが静かに、そして溜息交じりにぼやく。

「地底にスタークなあ？ 何であの野郎までこっちに来てんだよ。しかも共闘だ？ 破面だろうがよ、何で死神に手貸すんだ」

「その言葉、全てお前に返ってきているのを忘れるな」

グリムジョーのとんまな台詞にウルキオラが冷静に言い返した。

テーブルの上に陰陽を象った水晶玉を置き、それを囲むように一護を担当しているグリムジョー、ウルキオラ、妖夢が座っている。

「しかし一護さん達も軽率に決断しましたね。先ほどまで敵だった男を連れて行くなんて」

「確かに早計だな。あの男は昔の同胞だが、信用に値するとまでは俺の口からは言えない」

「ハッ！ 俺ならあの場合で全員ぶっ倒していくけどな。甘エんだよアイツらは。敵は倒す、当たり前のことだろうがよ」

三者の意見は、やはり英断とは言えない様子。

当然だろう。今しがたまで死闘を繰り返していた相手方の言葉を、正面から真に受けているのだ。人がいいのか、もしくは現地でしか分からない情があるのか。

ウルキオラとグリムジョーはスタークを知っている。藍染惣右介が十刃で一番の称号を与えた、自他共に認める実力のある男だ。しかし本人の怠惰というのか、やる気を感じられない野心も何もない男だったため、その真意を測ることはできなかった。

だから、信用していいのか否か決めかねるのだ。

「あらあらグリムジョーったら、あまり強い言葉は遣わないほうがいいわよ。弱く見えてしまうわ」

「ああっ!？」

襖で仕切られた向こうの部屋から、八雲紫の声がグリムジョーを挑

発するように言い放たれた。

「テメエ今なんつった!？」

力強く襖を開け放つグリムジョー。

その部屋には同じくテーブルを囲う八雲紫、伊吹萃香、射命丸文がいた。

こちらの三者は、霊夢を担当しているもの達だ。

「淑女の座敷に土足で踏み入るのは感心しないわよ。またスキマに閉じ込められたいの？」

「あア、やれるもんならやって——」

グリムジョーが言い切る前に、スキマに食われるように閉じ込められてしまった。

「あやや、まるで悪い子を蔵に束縛するみたいでしたね」

「まあ実際、悪い子だからいいんじゃない。それよか、紫はよくアイツを家に置いてるよね、ヒック」

酒を煽りながら、真つ赤な顔をした萃香が呂律の回らない口ぶりで言う。

「いいのよ。反抗期の小童の方が愛くるしいものだから。けど、少し自分の力を過信しすぎている、おいたなところはあるけどね」

「まるで母親のような感じですね」

「あんな大きな息子いらないわよ。あと、私はまだ未婚だから。子供なんていないので、変な記事を書いたら許さないわよ」

「そんな釘を刺さなくても書きませんよ。いやあ信用ありませんね私」

「信用が欲しいのなら、もっとまともな記事を書くことね」

紫は歎声を発しつつ、訴訟も辞さない決めている。

過去、橙と二人で買い物をしていただけで『大妖怪の八雲紫に隠し子が!』などという内容が、文々。新聞の一面を飾った日のことを忘れていない。そのせいで数日の間、人里でみんなから不本意な視線を向けられていたことを決して忘れない。

「私は色々とお世話になっているけどね」

不意に、もう一つ別の部屋——襖で仕切られた——からこちらに向

けて声をかけられた。

「文々。新聞に私たちの発明品を掲載してもらっているから、私たち河童は種族としての名聞を得られる。それは大いに助かっている。私たちは人間が好きだからね」

襖が開かせつつ、河城にとりが顔を出す。

そちらの部屋には同じく、テーブルを囲うようにアリス、パチユリー、にとりがいた。

「人間が好きだけど、表立って前には出れない。だからこそ、少しでも人間に親近感をもってもらうため、文々。新聞は素晴らしい媒体さ。とても信用できるよ」

にとりは諭すように、紫に言う。

「ええ、文々。新聞は人里や妖怪の情報源、それに娯楽にもなっている。情報を素早く伝達するという面では認めるわ。けれど、ゴシップまがい……と言うより巷談のようなことまで書かれると迷惑する人もいるってこと」

「固いね。大妖怪様なんだから、もっと心を広く持たなくちゃ。人の噂も七十五日、一時の気保養となっていると思えば、それを嬉しいと思わなくちゃ」

「困ったものだけ。新聞への扱われ方だけで、ここまで双方の印象が変わるものなのね」

紫が嘆息を漏らした。

「下らん。情報など、自分の眼で見たもの以外は信用に値しない」

二人の会話を聞きながら、ウルキオラが言った。

「へえ意見が合いそうね。まあある程度は真実なんでしょうけど、あの新聞は主にエンターテイメントとして見るに限るわ」

アリスがウルキオラに同調する。

実際、文々。新聞は100%の嘘は書かれていない。多少、文視点で脚色加わってしまうが……。

「私は楽しく読ませてもらってるわ。朝のアーリー・テイーのお供に文々。新聞を読むのが習慣になりつつあるからね。ホント、フランに読み聞かせる童話のかわりになって本当に助かってるわよ」

「何か素直に喜ばせんね」

パチュリーの言葉に文が不満の声を漏らした。

「私はねえ、あの新聞は時々さ良いお酒の特集を載せてくれるから、それだけは読んでよ。逆に、それ以外はよく分からないから読んでないけど」

「喜んでいいのか悲しんだほうがいいのか。これはあれですね、しっかり信用のある記事を書けてことですね。ええ分かりましたよ。今度から善処してみます」

次いで酔っ払いの萃香の言葉に文は反駁せず、渋々受け入れることにした。

「信用は大切です。人を陥れたりする人は信じれませんからね。猜疑心を持ちすぎるのはよくありませんが、足元を掬われる恐れもございますから」

先を見据えているのか、妖夢は達観した物言いで呟く。

欺瞞に満ちた者や、他者を陥穽させる者などは信用できなくて必定。と、言いたいところだが、この場にいる何人かは異変や厄介ごとを起こした事のある前科持ちや加担した者である。霊夢がここにいるなら「どの口からそんな言葉を吐いているのかしら？」などと言った可能性はある。

「まあ信用云々は、今この場では歓談に過ぎないわ。問題は現地の方よ」

「そうね。現地のみんなはあのスタークという男を信用して、異変の渦中に向かっている、ということよ」

パチュリーとアリスが、テーブルの上に置かれた水晶（通信機）を見ながら言う。

「そうだよ。本当に善意で助けてくれるのか、もしくは何か目論見があるのか。けど通信で見えていた感じ、どこか利他的なところもあるように感じるんだよね、あの鬼に関しては」

「ええ。それにあの鬼に姦計を巡らせるほど、利口な頭はないでしょうし」

「おやおや、勇儀も馬鹿にされたもんだね。いやまあ頭はよくないか

ら、紫の言っていることは正しいよ。勇儀はそんな姦計とか、セコイことはしない。本当に霊夢たちの手助けをしたいだけだよ。本気で戦った仲だからね。勇儀にとっては、それだけで戦友ってやつになるのさ」

にとりと紫の言に、萃香がまくし立てるように割って入った。

「だから、安心して信用していいよ」

グビグビと、瓢箪の酒を飲みながら萃香は言い切る。

「流石は旧知の仲であり鬼同士ですね。通じ合うところがあるようです」

「ほお、まるで恋みたいですね。これは面白い。同性愛ってやつですね、いい記事が書けそうです」

「早速信用がなくなりそうな記事を……」

妖夢が文の台詞に呆れつつ、通信機に目をやる。

「流石は一護さんの信用を一撃で奪っただけのことはありませんね、この烏天狗は」

「……………全くだ」

ウルキオラが呟く。

一護だけではなく、ウルキオラも幻想入りした際はふんだんに捏造、脚色されたものである。流石のウルキオラもその時は眉間に皺が寄っていたらしい。

「さてさて、スタークという男は信用に値するのかしらね」

紫が面白そうに、この先の展開に心を弾ませていた。

《2》

そこは暗く、重く、冷たい、文字通り地底の底めいた一室だった。

その一室にある家具はどれも一級品だが、周囲に漂う異質な雰囲気 が全てを台無しにしている。さながら古い廃墟の汚れ切った部屋に、熟練のコーディネーターが一流の家具だけをレイアウトしたかの ようなアンバランスさを孕んだ場所である。

異質な雰囲気などといった明瞭のしない言い回しをしないのなら、この一室は単純に数多の怨霊が蔓延っているのだ。通常の間人なら

目に映らない。しかし見えるものがここにいたら、反吐を撒き散らし発狂したうえで逃げ出すか、意識が吹き飛ぶだろう。見えないものでもここにいるだけで精神が圧迫され呼吸困難、見えるものと同じ末路を行くだろう。

端的に言って危険極まりない部屋。どんな神職に就いていようが、この場を浄化するなど不可能。それだけ深く深く、死者の濃度が強いのだ。

そんな部屋で、中央に配置された椅子に腰を落としている一人の男は、部屋にも怨霊にも全く無関心なのかその瞳は虚空を見つめているのみである。

ここにいてだけで異常なのに、まるで無意味な部屋の背景程度の存在感しか放っていない。これがどれだけの胆力を要するのか言うまでもない。

「……いつまでここに居るつもり？ 私はあなたに協力も何もする気はありません。お引き取りください」

対して、その部屋にある豪華なベッドの上に一人の少女が座っていた。

やや癖のある紫色の髪色に、フリルの多く付いたゆったりとした水色の服装をしており、下は膝くらいまでのピンクのセミロングスカート。見た目からするなら十代前半の小柄で可愛らしい少女である。

しかし同じく、この狂気に染まった部屋に居るということは、この少女も普通ではない。

何よりこの部屋、そしてこの部屋を含んだこの屋敷は、この少女が主なのである。

そもそも「この部屋はここまで異質な雰囲気は本来していない」。理由は簡単。目の前の男が少女にとって明確な敵と、認知しているからである。

早く帰れ、もしくは死んで、と部屋の怨霊が空気を澱ませながら、狂気の色を膨らませていく。

それでも椅子に座る男は、全くもって意に介していない。

「私は静かに暮らしたいだけ。あなたの要望にも、期待にも答える気

はありません。私はあなたの道具ではありませんよ。例えどんな見返りや報酬があつても、私を領かせるのは無理です。今すぐ、そして二度とこの地底には来ないでください」

「……………」

「だんまりですか。不気味で気色悪いですね。あなたが何者かも分からないし、それに微塵なまでに興味も関心もありません。ここにあなたがいる意味などありません。無益に時間を浪費しているだけですよ」

「……………」

少女の言葉を聞いているのか、聞いていないのか判然としない男は、何かを吟味したのち口を開く。

「…………おやおや、やはり軽い術式を張っておけば、君に心を読まれる心配はなさそうだ。私の考えを読まれるなんて、苦行の極致だからね。しかしまあ、君に今張っている術を看破される危険性も考慮して、あともう少し面倒なものも展開しておこう。さて古明地さと、私は潔く諦めよう。君を口説き落とすのは浮気をやめるほどの困難を極めそうだ」

先の物々しい雰囲気を払拭したかのように、男は弾けるような笑顔を向ける。

古明地さと、そう呼ばれた少女は忌々し気に男を睨みつけると、深いため息と同時に口を開いた。

「だったら早く出て行ってちょうだい。諦めたんでしよう？　屋敷で迷われても迷惑ですので、案内でも付けましようか？」

「いいえ結構。そしてご心配なく。このような分かり易く単純な経路の屋敷で迷うほど、私は落ちぶれちゃいない。美人な姉ちゃんにガイドして頂けるのなら喜んでお受けしますが」

「最低ですね」

軽薄な男の態度に、さとりは吐き捨てるように言う。

今もなお、怨霊の煮え滾った負の質は部屋に蔓延としており、男を蝕もうとしている。この場はもはや、猛毒が充満した部屋といっても過言でない。

そんな場所にも関わらず、男は涼んだ表情で言い放った。

「それに交渉を諦めたとは言っていない。レディ相手に大変失礼だと存じていますが、やむを得ません。少々……私の虜になってもらいます」

「——ッ!？」

さとりも予測していた。

目の前の男が強硬手段で、何か仕掛けてくることくらいは。故に対策もしていたし、様々な手も回していた。なのに……

気の揺らぎ、男がそう言った瞬間に身構えただけで、いとも容易く術中に嵌った。

男が小指を動かした程度の術。それだけで、さとりに微小な綻びを生じ、完全に男の掌の上となったのだ。

「……こ、れは……最悪、ね。こんな、男……にッ!？」

さとりは糸の切れた人形のようにベッドの上に倒れると……頬を赤らめたのだった。

*

その頃、一護たち一行はスタークを加えて、怨霊を管理している屋敷へと向かっていた。

先の戦いにより霊夢と魔理沙は共に力不足とっていいだろう。一護はスタークの計らいにより力を温存できた為、二人と違い遜色なく戦える。

しかしここは旧地獄と呼ばれる、危険な妖怪の巣窟。ここに来て戦った妖怪は全て強力だった。よって、スタークが助力してくれるのはとても有難い。

「あんまり期待はするなよ。俺にできることは限られてる。その巫女の嬢ちゃんや魔法使いの嬢ちゃんほど弾幕勝負にも手馴れてない」
「それでも、あんたは腕が立つ。癩だが、あの藍染が十刃で一番を選んだ男だ。期待しないほうが無理ってもんだぜ」

「そうかい。ま、少しでも期待に添えるよう励んではみるよ」

スタークはそう言うと、前を歩く霊夢が声をかけた。

「ねえ、あんたに怨霊屋敷について聞きたいんだけど」

「怨霊屋敷じゃねえよ。正確には地霊殿だ」

「地霊殿ね。そこにはどんな奴がいるの？」

「そうだな。主力としては四人いる。地霊殿の主人である古明地さとりと言う少女。そしてその妹の古明地こいし。後は主人のペットである火焰猫燐と霊鳥路空だな。ペットは数いれど、あの二人が主戦力だろうよ」

「館の主人が少女って。この世界はどうしてこうも主人が少女なの多いのよ」

「お前も人のこと言えねえよ」

ボソリと呟く一護。

「しかもペットって何？ 妖怪のこと？ それとも怨霊のこと？ も

しかしてペットしか友達がいらない可哀想な子じゃないわよね」

「お前もそこまで人のこと言えねえだろ」

次のは聞こえたようで、霊夢の拳が一護の顔面にめり込んだ。

「……で、そいつらも好戦的だったりするの？」

「古明地姉妹は勇儀たちほど好戦的じゃねえよ。だが後者のペットは主を守るためなら、俺たちにどれくらい特攻を仕掛けてくるだろうな」

「心配いらないわ。あくまで話し合いに行くだけだし」

「もしくは遊び感覚で特攻してくるか、だな」

「結局戦いは避けられないわけね。ええ分かっていたわよ、この妖怪は出合い頭に倒しなさいって言われてるくらいだしね」

渋難な流れに霊夢は苦虫をかみつぶしたような顔となるが、逆に魔理沙は喜色に染まっていた。

「いいじゃないか。ここには滅多に遣り合えない面白い奴らがいるんだ。せっかくなら思いつきり楽しみたいってもんだぜ。一護も勿論そうだよな？」

「さも当然なように俺も入れるな」

一護は溜息交じりに言う。

「けど土蜘蛛に四天王の鬼、橋姫、そして破面。何ていうか豪華な面子だよな。妖怪ってさ、俺の世界には多分いない存在だから、次はどんなのが出てくるか、そういうのは楽しみではある」

「ごらごら、最初に相対した妖怪、釣瓶落としを忘れてるわよ」

「え、あれって釣瓶落としなのか!? 俺の世界ではでけえ親父顔をした妖怪ってイメージだったぜ」

一護は霊夢の言葉に少し仰天した。

こつちに來てから自分の中の妖怪像が360度変わっている。

スタークはついでとばかりに言葉を紡ぐ。

「ちなみにだが、ペットである火焰猫燐と霊鳥路空なんだが……火焰猫燐は火車の妖怪。文字通り火の扱いには長けてるが、それ以上に厄介なのが死体や怨霊を操る点だな。実際に戦ってみたら分かるが、趣味のいい能力とは言えない力だ」

「火車か……歯車に親父の顔が付いた妖怪だよな?」

「違エよ。しかもそれ輪入道じゃねえのか? 見た目はまあ普通の女の子だ」

一護の的外れな妖怪像を訂正しつつ、スタークは続ける。

「次に霊鳥路空は一口に言う土地獄鳥。能力は黒崎一護、お前の世界では聞き馴染んだもので……核融合を操る程度の能力だ」

「地獄鳥は流石に親父顔じゃねえよな……て、核だど!」

再び見当違いな考えを見せそうになった一護だが、核という単語を聞いて仰天する。

イメージとしては一護にとって、核爆弾が強いだろう。前に果心居士と戦った際、近代兵器を使ってきたのでその恐ろしさは経験済みである。

「幻想郷に核は、どうにも似つかわしくねえな。つか旧地獄、流石は危険な奴らがいるって言われるだけはある」

「核ね。紫から少し聞いたことあるわ。外の世界では最悪の兵器を作り上げたんでしょう? 何だったかしら……水爆? 原爆? 何かそんなのよね。あんたと早苗がそういうのを使う男と戦ったって聞いて少し勉強したんだけど、専門用語が多すぎて挫折したわ」

霊夢にも、あの果心居士との戦いについては話した。

まるで世界大戦レベルの戦力を単体で内包した果心居士は、時間を凍結させたかのような結界を張って戦った為、幻想郷そのものの被害

は無に等しい。しかしもし結果が張られていなかったら、想像するだけでも恐ろしい。

「ちなみに私は結構勉強したんだぜ。核ってやつをな。是非ともそんな凄いやつを持って爆弾と私のパワー、どちらが上か比べてみたいぜ」

勉強したうえで、満面の笑顔でそう言い切る魔理沙には脱帽したくなつた一護。

「ま、油断しないことだな。あんた達は十分強いが、相手も強い。もし戦いになったら、面倒だが本気でやらねえとこつちがやられる」

スタークの説明を聞いて、一層気を引き締める一護。

同時に次は、その地霊殿の主人について聞こうと思つたが、その矢先――

「……見えたな、あれが地霊殿だ」

遂にその視界に、大きな洋風の屋敷である地霊殿が見えてきたのだつた。

*

「……それで、いつグリムジョーは出てくる」

そして地上組では、ウルキオラが紫に向けてそう言い放つた。

先程、グリムジョーが粗相を犯したためスキマに閉じ込められた。それからまるで忘れ去られたかのように、グリムジョーはずつと出してもらえないのだ。

「あ、そういえばすっかり忘れていましたね。紫さん、そろそろ彼も反省したと思えますので出してあげては？」

「彼が反省した姿なんて想像できないわ。まだお猿さんの方が反省の姿を見せてくれるわよ。こう、壁に手を当てて少し頭を下げるポーズみたいな」

「ならそれを彼にさせましょう。是非とも一枚撮らせて頂きます！」

紫の言葉に、文は愉快そうにそう言う。

「へえ、なかなか面白そうじゃない。あのパンチの効いた男のそういう姿は絵になりそうだね」

「いや普通にカッコ悪いでしょ」

パチユリーとアリスの意見が割れる。

「あの馬鹿は見てて飽きないからね。良い酒の肴になるつてもんだよ」

「彼も彼で、霊夢や一護と同じでトラブル体质だからね。今や弄られキャラにまで定着してきてるし」

酒を飲みつつ言う萃香と、手元で何かを作っているにとりが言った。

「幻想入りした時はもうそれは本当、手の付けられない悪ガキだったわ。でもね彼、今ではお米の焚き方からお風呂掃除まですっかりこなせるようにはなってるのよ。凄く嫌そうにやるけどね」

「あら凄いじゃない。見かけによらず主夫のようなことができるのね」

紫の言葉に関心するアリス。

「最初は大変だったけどね。草むしりを頼めば庭が戦場の跡のような荒野になったり、人里に買い物頼めばトラブルを持ち帰ったり。拳句の果てに家庭内暴力を振るわんとする亭主関白のような甲斐性なしに。本当、よく立派に成長してくれたわ」

思い出し感動したのか、まるで自分の子を自慢する母のような言いようになる。

ちなみにグリムジョーの家事スキルを、心血を注いで上げたのは八雲藍である。紫はただ傍観していただけなのだ。

「これ、グリムジョーが聞いたら憤慨しそうですね。それでグリムジョーをそろそろ出して頂けませんか？」

妖夢が苦笑いを浮かべながら言う。

このままだと話の内容が脱線してくるのは目に見えているので、端的に聞いた。

「あらそうだったわね。グリムジョーなら——東風谷早苗のところに送ったわ」

『……は？』

紫の発言に、全員が口を揃えて目が点となった。

*

そんな和氣藹々とも言えない地上組と比べ、地底組は一気に凄惨なものとなっていた。

簡潔に言うと、地霊殿が見えたと思つた途端、先程スタークが話していたペットに二人が現れたのだ。

火焰猫燐と霊鳥路空。そこからの流れは至つてシンプル。こちらの出会い頭に倒せという決め事を、向こうから仕掛けてきたのだ。共に暴虐的な力を宿しており、弾幕の一発一発が致死性を帯びていた。強い、しかしそれ以上に不可解な点がある。

まるで洗脳されているかのような、生気の抜けた化物のように感じる。覇気もなく、殺気もなければ戦意すら感じられない。

「おかしいな、いつもの二人じゃない。何だこいつら、誰かに操られてんのか？ あの二人を屈服でもさせ、木偶の如き扱える……か」

唯一この二人を知るスタークは、訝しげに言う。

「つまりだスターク。俺たちの知らない第三者がいて、こいつらを操っている。そう言いたいわけだな」

「ああ。さとりやこいしがこんな事をするのは考えられない。それに出来るとも思えない。結果、考えられるのはこれを暗躍している誰かがいるってことだ」

「暗躍か……」

一護は内心、嫌な予感が胸を渦巻いていた。

これは刹蘭による刺客。もしくは本人。それ以外だと幻獄七夢卿。可能性としてはどれも大いに有り得るのだ。

「まあ、倒してから考えればいいことですよ。相手が攻撃をしてくるなら正当防衛よ。躊躇する必要なんてないわ」

「同感だぜ。どうせ操られていようがないなからうが、戦いは避けられなかったんだらう。なら話が早いほうがいいぜ」

霊夢の言葉に魔理沙が同意する。

長らく共に戦ってきたせいとか、互いに似た者同士だと分かっていた。自分たちの邪魔をする者は敵。対戦相手ということだ。

「その通りだな。全く、血の気の多い味方で助かったぜ。あんた、しっかりあの二人の手綱は握つとけよ。俺が言うのもなんだが、この旧都

で生活してても違和感のない二人だ。喧嘩と酒の彩られたこの町でな」

スタークが屈託のない言い方をする。

要はバトルマニアに少し近い霊夢と魔理沙。迷いもなく言い放つ二人は、この危険な妖怪が住まう旧都にいても、何ら違和感を覚えな
いのだろう。

言われた一護自身、返答に窮してしまう程だ。

「それに吉報もある。操られているせいも、普段のあの二人より動きが読みやすい。何つうか、攻撃手段に一貫性がある。とにかく強力なスペルのみで俺たちを討とうとしている。機械のような意思のなさ、だからこそ敵の行動が単調だ」

吉兆が見えたかのように、スタークは見極めた発言する。

「確かにね。簡単に捌けるわ」

霊夢は相手の弾幕を避けつつ体現する。

気軽に全員で口を動かしているも、実際はそんな中も瀑布の烈度で暴虐の限りを尽くす弾幕が飛び交っている。さながら重戦車による非情なる弾幕のようで、傍目には洒落になっていない光景である。

しかし四人は苦も無く避けている。いなしている。隙あらばこちらから攻撃も仕掛けている。

子供が強力な武器を手にして、無闇矢鱈に振り回しているような稚拙さを感じられる。それ故に危険とも取れるが、自身の力の扱いを理解していない為、四人にとってド三流もいいところである。

「そんな訳で、渋々だけどここは私と魔理沙で対処するわ。一護、それにスターク。あんた達二人は先に行つて。そして大元を叩いてきなさい」

「大丈夫なのか霊夢？ お前ら二人、さっきの戦いでかなり消耗して
るだろ」

「余裕、とまではいかないけど、誰かに操られてるこんな傀儡人形に負ける気もしないわ」

霊夢は泰然と答える。

「もし相手が本調子だったら、認めたくないけど今の私でも悪戦苦闘

ね。けど、今のあいづらなら倒すまではいかなくとも、倒されることもないわ」

負けを認めない霊夢らしい台詞。それに乗っかるように魔理沙が紡ぐ。

「その通りだぜ。それにこんな面白い相手、四人で分け合う気なんて毛頭ないぜ。私と霊夢で思いつきり楽しむ、むしろ私一人でも十分なくらいだぜ」

心強いというか、何というか。

先のスタークの発言が、本当に現実味を帯びている。旧都でもやっていけるだろう。

「頼りになる仲間だな」

「ああ。こいつらのおかげで今の俺があるからな。頼りになりっぱなしだよ」

一護は口元を綻ばせながら答える。

死神時代、一護が仲間として信頼していたルキアや恋次、石田に井上、チャドなどがまさに今という霊夢や魔理沙なのだ。

一護は霊夢と魔理沙に背を向けると、短く言い残した。

「任せる。お前らほど信頼できるやつを、俺は知らねえからよ」

そしてその場に2人を残し、一護とスタークは地霊殿へと向かった。

——地霊殿。

旧都の中心にある灼熱地獄跡の真上に建てられた西洋風の屋敷。紅魔館にも似ているが、あそこまで高圧的なものは感じず静観としたイメージである。

その中は黒と赤の市松模様彩られた荘厳な床に、美麗なまでのステンドグラスの天窓。まさにお姫様でもいそうな、立派で近寄りがたい雰囲気である。

そして灼熱地獄跡の真上なだけあって、常に焼き切るような熱波が襲い来る。同時にここは旧地獄。多くの怨霊が屋敷を彷徨っており、人に害を成す危険な魂であるため更に剣呑な場所を作り出していた。

一護とスタークはそんな屋敷の中に入ってきていた。

「すげえ歓迎されてない雰囲気だな。こんな所に住む奴の気が知れねえよ」

「いや……少しおかしいぜ。地霊殿は、ここまで狂っていない、救いのない場所じゃあなかった。何度か来たことはあるが、怨霊の数もここまで多くないしな」

「つまり、何かが起きているつつうことだな」

「正解だ。ほら、あれを見てみる」

前方、スタークの指さした方角の空間に歪曲な亀裂が生まれた。

まるで袋の口でも広げるかのように、亀裂が開くとそこから一人の少女と、一人の男が現れる。

「——さとり」

スタークが少女を見て、その名を言う。

この屋敷の主である古明地さとりに相違ない。一護もスタークの出した名前を聞き察する。

では逆に、もう一人の男は……

三角の帽子に、灰色のローブを羽織った、いかにも魔法使いであり詐欺師にも見える30代前半といった男。おそらくこの男が——

「お初にお目にかかる黒崎一護。私は『神のシルベ』が一人である《星天》——アレイスター・クロウリー。銀の星魔法師などと、刹蘭からは言われたかな。曰く、魔導の星となるようにとのことらしい」

神のシルベ……『五つの試練』を冠する一人。過去、一護と早苗が倒した果心居士がその一人である。

しかし果心居士と違い、その異質感は尋常ではない。果心居士が狂いに狂った空っぽな男なら、目の前の男は地の底めいた闇。暗く、黒い、さながら地獄の底のように見える男。一護は少なくとも、そう感じ取った。

「テメエ、刹蘭の仲間か!? 何でこんなところにいるんだ!」

激昂する一護。

それを横目にスタークはどこか心配そうに、さとりを見つめていた。

「おや、果心居士の小僧はちゃんと話していなかったか。私は君と、そして博麗の巫女を昇華させるための存在。『五つの試練』と名乗らせてもらっているが、まあややこしい話は後でいいだろう。端的に言うと、君を鍛え上げるために来たんだよ。つまり君の糧、君たちのための捨て駒さ」

アレイスターと名乗った男は、小躍りしかねない浮かれた調子で答える。

「何だよそれ。どういう意味だよ……？」

「そのままの意味さ。君たちの試練であり、脅威であり、経験値であり、ただの道具だよ黒崎一護。ああ、こう言ってもいいか。ただの刹蘭からの刺客。客さ。しっかりもてなしてくれ。恋人ともども、しっかり丁寧に歓待してくれ」

「恋人だど？」

そこでスタークが疑問の声を漏らした。

アレイスターという男に、さながら恋人がごとく腕組をしているのだ。その顔も恍惚としており、まさに一途な少女が大好きな男性と添い遂げることに成功したかのような、エクスタシーさを感じられる。

なぜだ、どうして、アイツの好きなタイプなのか？ いや違う。少なくともスタークはさとりのあんな顔を知らない。そうなると思えられるのは一つ。

「あんだ、さとりを操ってるのか？ 都合のいいように、不都合のないように人身操作してるのか？」

「おや、目敏いね。もしかして彼女のこと好きだったのかい？ それは都合の悪いところを見られたね。今の彼女は私に夢中だからね。我を忘れて無我夢中になっているからね。嫉妬しないでくれよ、私の方が魅力的だっただけなのだから」

「違エだろ。アンタがどういう力を使ったかは知らないが、少なくとも俺の知っているさとりは、そんな風なことをしない」

「これはこれは、まるでさとりのことを知っているような口ぶりだね。何を根拠にそのようなことを言うのか分からないな。なあ、さとり」

自分の腕にしがみ付いている少女、さとりに目を向ける。

「はい。何を言っているか分かりません。私は愛しい人とこうしているのに」

うっとりとして、心の底から、さとりはそう言った。

「ほら、彼女もこう言ってる——」

瞬間、乾いた音が響いた。

「……………」

音源はスターク。

まるで早撃ちのガンマンのような速さで、銃弾程度の大きさの弾幕を発射し、アレイスターの頬ギリギリを掠めたのだ。

「……………これは何の真似だい？ ああ、そういう事か。早く戦おうぜってことだな」

「確認だ。さとりが本当にアンタのことを愛しているのなら、何故さとりはアンタの心配をしていないんだ」

今のスタークの不意を突いた卑怯な一撃に対して、さとりは変わらなかった。恍惚にしているだけ。腕組をしているだけ。怒ったり、やり返したりが全くないのだ。

「さとりは本当に大切に思っているものが傷つけられたら、誰よりも怒るんだ。それがないってことは、操られているいい証拠だよ」

「不躰だな。全く、これだから面白い。流星は刹蘭が選んだ破面だ。期待通りの成長ぶりだよ」

「……………選んだ？ どういうことだ。俺たち破面は、この世界に誰かの手によって誘われたって、ことなのか？」

「ああ、その通りだよ。さて、そろそろ詰まらないお喋りは終わりだよ。不意に、こちらの疑問を氷解しないままアレイスターはプレッシャーを上げてきた。

大地が震撼する、全身の毛が逆立ちし尋常ではない威圧が一護とスタークに襲い来る。天変地異の前触れのような極大な力が、目の前に現れているのだ。

「疑問が多数あるとは思いますが、この際だ忘れてくれ。今は私との試練に付き合ってくれよ。もし私を踏破したのなら、褒美に何でも教えてやろう。ありきたりな報酬だが、その方が君たちは喜ぶと思ってね。

さあ始めよう……私の試練は至ってシンプル」

アレイスターはさとりの頭に手を置き、

「黒崎一護が戦ってきた、そして戦うはずだった——過去と未来の敵だよ」

そしてここに戦いの幕が下りた。

《3》

「さて、黒崎一護。君の今までの全てを乗り切る時だよ。それを踏破してもらってこそ私の試練は成就する」

大仰に、そしてこの上もなく奇態さも滲ませながらアレイスターは古明地さとりの頭に手を置く。

魔法陣、置いた手の甲に展開された幾何学の模様が描かれた円形の陣より、淡い光がさとりを包み込んだ。瞬間だった。

輝く燐光が発生したかと思うと、アレイスターの目の前に驚くべき人物が現れた。

班目一角……護廷十三隊十一番隊第三席。スキンヘッドが特徴的で、一護とはそれなりに付き合いのある死神である。

「よォ一護。久しぶりじゃねえか」

「——一角!?! 何でお前がここにいるんだよ!?!」

訳が分からない。理解できない。なぜここに尸魂界にいるはずの班目一角がいるのか。

一護が混乱する中、スタークがそれを氷解させるために解説する。

「さとりは心を読む程度の能力を持っている。その力を応用して相手のトラウマ、過去の弾幕を再現することも可能だ」

「再現……。てことは、あの一角はさとりって奴が再現してるってことなのか?」

「いや、流石に人物そのものを再現できるなんて話は聞いたことねえ。恐らくだが、あの男が何か手を加えたんだろうよ」

目の前にいる一角はまさに本物そのもの。虚像や偽物といった陳腐な言葉では片づけられないほど、完璧なまでに再現しているといつていいだろう。

古明地さどりの力をアレイスターが底上げした結果、一護のトラウマではないが戦ってきた猛者たちを完全再現しているのだ。

「おい一護オ！ なに呆けていやがるんだ。さっさと構えねエと、こっちから行くぞ！」

一角は一気に跳躍する。

そして自身の斬魄刀を抜き放ち、解号を口にする。

「延びろ——『鬼灯丸』！」

すると日本刀が形状を180度変える。

それは槍……始解と呼ばれる一角の持つ斬魄刀の姿である。

「ッ、一角！」

一護の代行証は黒い霊圧を噴き上げる。爆発するように噴き出た漆黒が一護を包み込み、その次の瞬間には死覇装のように着こまれていた。同時に、手には斬月が握られ、急激なまでに霊圧が上がった。そして一護と一角の斬魄刀がぶつかり合う。

両者、手など一切抜いていない初撃。鏝迫り合いとはならず、一護と一角は弾かれるようにお互い後方に飛ばされた。

「やるじゃねえか一護。やっぱ戦いはこうじゃねえとなア！」

再度、一角は一護に槍を振るう。

刺突、薙ぎ、更には槍が三節混のように変幻自在となり、それらを巧みに操る。雄々しく戦い、そしてただ無我夢中になるのではなく冷静さも担っているのだ。よって、自身の斬魄刀の長所を活かして、一護を翻弄できている。

「オラオラどうした一護！ お前の力はこんなもんじゃねえはずだろうが！」

「うるせえ！ だったら見せてやるよ。黒符『月霊幻幕』！」

三日月状の黒い弾幕が展開され、一斉に一角に放たれる。

「鬼道か!? くッ！ 一護、テメエいつそんな力を!？」

自身の知らない力を使われ驚愕する一角は、紙一重で冷静さを取り戻すも一歩遅かった。

弾幕を放つと同時に一護は、瞬歩の要領（大地の魂を引き出している疾走）で高速移動し、一角の後ろに回り込んだのだ。躊躇いはない。

再現である以上、いや例え本物であつても一護は手加減はしなかつただろう。それは一角に対して、多大なる失礼に当たるから。

「終わりだアア!!」

斬月を振るい、斬撃とともに一角を容赦なく吹き飛ばした。

「グアアアアアアアツツ!!」

一角が苦悶の叫びを上げる。

ピシツ……と、硝子の割れるような音が一角から聞こえたかと思うと、文字通り盛大に一角が砕け散つたのだ。パラパラと光の粒子にまで砕け、風に乗って飛ばされる。

それを見てアレイスターは心底満足げな顔を見ると、再び前方に光の粒子が集約されていった。

「いいぞ、流石だよ黒崎一護。その調子でどんどん突破していってくれ。ああ、あと分かつたとは思うが、こうして召喚した人物は君に絶対的な敵意を持つ。戦いは避けられないと思いたまえ」

親が子でも褒めるかのように言う、集約された光が新たな人物像を形成した。

「久しぶりだな一護。まさかこうして、お前とまた戦えるなんてよ。こっちは存分にやらせてもらうぜ」

「——恋次。次はお前かよ」

「ただだと思ふなよ黒崎一護」

目の前に護廷十三隊六番隊副隊長……阿散井恋次が現れたかと思うと、再び光の粒子が虚空より生まれ集約されていった。

そして集約された光が人の形を形成すると、二人目が現れたのだ。

「黒崎一護、こうして兄(けい)と再び相まみえるとはな。これもまた宿命か」

「白哉も、だと……!?!」

そして同時に護廷十三隊六番隊隊長……朽木白哉も現れた。

「一人しか再現できないとは、言った覚えはないぞ。頑張りたまえよ、励みたまえよ、私は君に踏破されてこそここに来た甲斐があるというものなのだからね。死神時代の輝きを、超えてもらわなければならぬのだよ。さあ、踊ってくれよ、この素晴らしき歌劇の中でな」

礼賛するかの如く、心の底より乞い願う。真偽はどうあれ、アレイスターは自身が生み出している試練突破を最優先に遂行しているのだ。

過去の、一護が駆け抜けてきた轍にいる猛者。それらを幻想郷で得た力を以て、改めて超えてもらおう。

なればこそ、全力を尽くせ。魂を燃やせ。己の渴望を声高らかに叫ぶがよい。ここで一護が負けるなんて言う未来は、誰も望んではないのだから。

「俺は負けねえ。今までも、そしてこれからも、そんな予定はないからな！」

一護は霊圧を上げ、恋次と白哉に向け弾幕を飛ばす。

烈風となり、破壊力を宿した無数の弾幕に対して、恋次は跳躍した。

「咆えろ——『蛇尾丸』！」

幅広の蛇腹剣となる恋次の斬魄刀。

よって刀身を伸ばし、遠距離からの攻撃を可能とするそれは、一気に入護に向けて振るわれた。

「くッ！」

咄嗟に一護は斬月で、恋次の蛇尾丸の攻撃を防ぐ。

その衝撃、防いでなお一護を後退させ、斬月を握る手に痛みが走るほどである。

そして勿論、それだけで終わるはずはない。

「散れ『千本桜』」

白哉の斬魄刀の刀身が、ヒラヒラとまるで舞い散る桜のように細かく枝分かれする。そしてその舞った桜のように絢爛たる輝きが、それらを反して凶悪たる暴虐性を帯びていた。

舞う輝きが、一護の放った弾幕を防ぎ、掻き消していくのだ。

「おらアアアッ!!」

恋次は地面に着地すると再び蛇尾丸をゴムのように伸ばし、一護を切り裂かんと颯風の勢いで迫る。

「お前の戦い方は嫌ってほど知ってるんだよ！ 黒符『天幻月牙』！」

一護は蛇尾丸を避け様にスペルを唱える。

恋次の周囲全域に黒い弾幕が展開されると、容赦なく四方八方より弾幕が恋次に集約するように襲い掛かった。

「何ッ!？」

それに対応するには数舜遅く、爆撃爆風が烈破となりて吹き荒れた。

「兄にそのような力があるとはな。だが、それは鬼道とよく似ている。ならば対策を講じるのも容易いだろう」

その間に白哉がこちらに矛先を向けていた。

千本の見えない刃は吹雪き、触れたものを無残に切り刻む白哉の十八番。一護が気づいた時には既に眼前にまで刃が舞っており、回避や防御が追いつかない位置にまでできていた。

「——しまッ!？」

「虚符『虚閃』」

誰もが一護の引き裂かれる瞬間を予想していたであろう。しかし、そうはならなかった。

赤い閃光が迸ったかと思うと、白哉の千本桜を全て掻き飛ばしたのだ。

「手を出そうか少し悩んじまったが、やっぱり手を出すことにした。恨むなよ、一応これはさとりを取り戻すための戦いでも、俺の中であるからな」

これまで傍観していたスタークが、虚閃を放って一護を守ったのだ。

「二対一なら手を出すのも悪いと思ったんだが、相手が二人なら話は別だ。俺も、面倒だが本気で行かせてもらう。何より、大切な仲間を助け出すためだ」

「スターク、あんた……」

一護はスタークを見て、何かを言おうと思ったが口を噤んだ。

ああ、短い時間だがスタークのことを少し理解した。スタークは誰よりも仲間想いだ。藍染との戦いで、ほとんど関わりのない相手だったが、恐らく破面で仲間を大切に思っているのはスタークだろうと、一護は感じ取った。

「破面と手を組んでいるとはな、黒崎一護。よもや、そこまで落ちたということか？」

白哉が失望したかのような声を上げるも、一護は平然と答える。

「落ちてねえよ。今の俺はスタークの仲間だ。白哉、お前は知らねえと思うけど破面も全員が全員、悪い奴じやねえんだぜ」

「成程、戯言だ。その考えは相いれん。故に、それが間違えであると正してやろう」

白哉が指先をこちらに向け、

「縛道の六十一『六杖光牢』」

六つの光の帯が一護の周囲に現れたかと思うと、胴を突くように囲うと身動きが取れなくなった。

死神は使う霊術。鬼道と呼ばれるもので、二つに分けられる。一つは攻撃系の破道、そしてもう一つは防御や束縛、伝達などに使われる縛道。今のは縛道で、対象の動きを封じる縛道である。

「ちッ！ 鬼道か!? こんなもん——」

「遅い。破道の三十三『蒼火墜』」

蒼い灼熱の焰が扇状に放たれ、一護を包み込もうとする。

「仲間、か……」

余裕な足取りで一護の前に立つと、白哉の放った蒼火墜を片手で軽々煽るように掻き消してしまった。

隊長格の鬼道をここまで容易く対処するとは、流石は藍染から一を授かった十刃である。その実力は伊達ではなのだろう。

一護は霊圧を高め、呪縛を粉碎しスタークの横に立つ。

「助かったぜ、ありがとよスターク」

「死神にお礼を言われるのは、随分と滑稽に思ってしまうな。けど、まあ仲間だからな。面倒だが助け合いといこうぜ」

「ああ、頼むぜ」

一護とスタークは構える。

その姿を見て、白哉の眼は刃のように鋭く細めた。

「死神と破面の共闘だと。そうか、兄は変わったという事か。少し見ぬ間に何があったかは知る由もないが、兄がそちらに立つのならこち

「らもそれ相応の処置を取らせてもらう」

「隊長！」

すると死覇装の所々が焼き焦げた状態で、なおかつ負傷している恋次が現れた。

「あの馬鹿の目は俺が覚まさせます！　ここはしばらく俺に任せてください！」

気骨稜稜とした様で、恋次は前に出た。

それを見た白哉は何も言わず、目を閉じて一步後ろに下がる。これだけで意思疎通は完了。恋次は隊長の期待と、何より今の一護を改悛させるためでもある。

よって、ここから先は全力である。

「一護、一発思いつきりぶん殴って目エ覚まさせてやるからよ。後悔すんなよ！」

恋次の霊圧が爆発的に上がる。同時に蛇尾丸を一護に向け――

「――『卍解』!!」

言うや否や、霊圧が一気に暴風となり放出され土煙が恋次の周囲を竜巻のように巻き上がる。

もはや猛威とすら言える暴風が颯々と吹き荒れる中、それが徐々に姿を現した。

先の蛇尾丸の姿が嘘かと思ってしまう程に姿形が変化している。刀は巨大な蛇の骨のように変化し、恋次自身も狒狒の毛皮と牙で出来たマントを纏っているのだ。

「……『狒狒王蛇尾丸』」

これこそ死神の奥の手である卍解。

斬魄刀の始解の更に上である卍解は、死神の中でも極僅かな者しか会得できない奥義中の奥義。その力は始解の五倍から十倍まで力が上がると言われる。

恋次のこの卍解は一護と共に、ルキアを救出するために習得したものである。

「卍解、かよ。加減はなしってことか」

「あれが卍解か。一度、卍解を使った相手とは戦ってみたかったんだ

よな。こいつは都合がいい、どんなものか近くで見せてもらおうぜ」
一護は警戒心を強め、スタークは興味深く観察する。

「……何だ？」

そして一護はここで不可解なものを感じ取った。

「オラー！ ボサツとしてんなよ一護！」

恋次は狒狒王蛇尾丸を大きく振るうと、まるで生き物のように獣の咆哮を上げて迫ってくる。相乗効果なのか獣の雄叫びにより圧迫感が段違いに上がっていた。先の蛇尾丸の比ではないのは火を見るよりも明らかだ。

よって卍解を防ぐにはそれと拮抗しうる卍解の力が必要である。

しかし……である。

「何ッ!？」

愕然とした。驚愕した。目を大きく見開いた恋次が、一番戦慄したであろう。

何故なら——一護は斬月の状態（始解とは少し違うが）で軽く受け止めていたのだ。小揺るぎもせず、正面から、斬月を握る手に何の痛痒すら感じず。先の蛇尾丸の攻撃は手に痛みを感じ衝撃で後退したにも関わらず、卍解した恋次の攻撃を糸も容易く防ぎ切っているのだ。

「霊圧が上がっているのか。それも上昇の幅数が尋常ではない。最初の一撃は臨戦態勢ではなかった、ということか」

白哉すらも瞠目しつつ分析した。

そうした結果、導き出されるのは明快な絶望の格差。霊圧は勿論のこと、技量もそして一護が使う弾幕の力も全てが恋次で敵う相手ではない。

「舐めてんじゃねえぞ一護オオ!!」

そして当然、恋次もその事実には気づいていた。

だが退かない。いいや退けない。仲間である一護に一発喰らわすまでは、絶対に引けないのだと恋次は怒りに沸騰している。

「テメエこそ少しは聞く耳持ちやがれ！」

受け止めている斬月を振るい、蠅でも叩き飛ばすかのように弾い

た。

「破面と手を組んだお前に、何を聞けつていうんだよ！」

弾かれてなお、恋次は巨大な狒狒王蛇尾丸を自分の手足のように動かしながら、一護に休むことのない猛攻を加える。岩盤を砕き、恋次の裂帛の気合が剛撃を生んで常に極大の力が一護に注がれた。

「うるせえ！ 頭ごなしに何でも否定してんじゃねえよ！」

まさに鎧袖一触。一護はそんな猛攻を前にしても、怯むことなく軽く捌いている。今の恋次など敵ではない。死神時代の一護自身の力を、今や上回っているためこんなもの目を閉じていても防げてしまえるやもしれない。先に感じた不可解さは、卍解した死神の霊圧は……この程度のもなのか？ という疑問である。

「くそッ！ 卍解もしてねえのに、どこにそんな力があるんだよ！」

恋次は猛攻の手を止め、その次の瞬間に狒狒王蛇尾丸に霊圧を込める。

「だがな、俺も諦めは悪いんだよ。それはテメエが一番理解しているはずだぜ一護」

赤い霊圧が骨の全ての連結部分で電流のように激しく通り始める。

一目瞭然、これは恋次の必殺の一撃である。

「喰らいやがれ！ 『狒骨大砲』!!」

霊圧による超高密度の閃光。破壊の限りを尽くすその一撃は、必殺と言って何の遜色もないだろう。

一護も斬月に霊圧を込め、同じく自身の必殺のスペルを唱える。

「お前が喰らいやがれ！ 黒斬『月牙天衝』！」

瞬間、漆黒の斬撃である月牙天衝を放つ。

単なる霊圧による斬撃。だがその威力は拮抗すらもなく、恋次の必殺を理不尽なまでに造作もなく掻き消してしまった。そしてそのスペルは、恋次の狒骨大砲を両断してなお、その勢いは揺ぎない。

「——一護、お前は……」

恋次の持つ狒狒王蛇尾丸ごと完全に貫き、恋次はそのまま月牙天衝に飲み込まれてしまった。

そして轟音と共に、爆発が発生すると光の粒子が一緒に散らばって

いく。これは恋次が先の一角と同じで、その再現が消滅した証だ。
「……………くそッ」

苦虫を噛み潰したような顔となる一護。例え一角や恋次が再現された存在でも、仲間を討つというのは心に多大なダメージを負う。久しぶりに見た死神時代の仲間。感傷に浸ってしまいやすい一護にとって、辛く重すぎるのだ。

「……次は俺がやる。少し下がってろ」

一護のそんな姿を見て、スタークが白哉と対峙する。

「い、いや、俺がやるスターク」

「言っただろ。今は仲間だ。それに俺にはさとりを助け出さないとけない。失敗はできないんだよ。あと隙があれば、律儀にこんな試練に付き合う義理はない。あの男をお前が討て。そうすれば全て片が付く」

スタークの言う通り、わざわざこのような試練を突破する必要はない。やれるチャンスがあればアレイスターを倒してしまっても構わないのだ。

「まあそれに、卍解を使える相手ってのは俺も戦ってみたかった。少し興味があるんでな」

刀の切っ先を白哉に向けて言う。

同時に白哉が目を細め、

「貴様が私の相手をするということか。ならば、こちらも情けを掛ける必要はなさそうだな」

「そうかい、まあこっちも後には引けないんでね。さっさと始めようぜ」

互いの霊圧が急激に上がると、開戦の号砲が鳴り響いた。

千本桜による無数の刃、全てがスタークを引き裂かんと不規則な舞い方をしている。辺り一面、どこからでも攻撃を仕掛けられるため、この攻撃を対処するのは困難である。

「面倒だな。だが子供の小細工に等しいぜアンタ」

途端に圧倒的な暴威を宿して、スタークが白哉に突貫した。

そしてただ突っ込んでいく訳では勿論ない。自身の周囲に青色の

弾幕を展開し、それらがスタークより速く次々と白夜に向けて発射されているのだ。

「破道の三十三『蒼火墜』」

白哉の片手より、蒼い炎が閃光のように放たれる。

青と蒼の激突。鼓膜を破るような轟音が響き渡り、衝撃波を伴った爆発が発生する。しかしスタークの展開している青の弾幕はそれこそ簡単に装填され、魔の弾丸と化して休むことなく放たれ続けた。

「潤沢な弾幕だな。ならば縛道の八十一『断空』」

自身の眼前に透明な防御壁を作り出す断空。それによりスタークの弾幕は断空により被弾しても白哉には届かない。

だが、そんなものは弾幕にしか効果がなかった。

「行くぜ」

スタークが前方まで行くと手にした刀を断空に振るう。呆気なく硝子が割れるかのように砕けた。

断空は八十九番以下の破道を完全に防ぐ最強の防御壁だが、スタークにとつてそんなものは何の守りにすらならない。

「終わりだぜ」

「甘いな。破道の六十三『雷吼炮』」

だが碎かれるのを予期していた白哉は、既に鬼道の準備を万全としていた。

放たれるは凄まじい雷を帯びた霊圧によるエネルギー波。それがほぼゼロ距離に等しい位置でスタークに浴びせられたのだ。

確実に喰らったと、そう思われたのも刹那。事態はそう簡単には覆られなかった。

雷吼炮がスタークに直撃する瞬間、構えもなしに虚閃が放たれていたのだ。構えもなしに放たれた虚閃は、例え意表を突かれても直ぐに対応できる。

そしてほぼゼロ距離でぶつかり合った互いの攻撃により、猛烈な爆発が発生し完全に二人を破壊の嵐が包み込んだ。

「スタークー」

一護が思わず叫ぶと、両者が爆風を引き裂きながら現れた。互いに

手傷は負っているものの、致命傷とはなっていない。いや、それどころか両者何事もなかったかのように攻め立てていた。

千本桜がスタークを襲うも、素早い動きで回避しつつ無数の弾幕が常に白哉に向けて放たれる。弾雨と刃の激突は、烈火怒濤の勢いで繰り広げられ、安全な領域など存在していない。もし両者の間に割って入れば、文字通り切り刻まれ爆破の嵐が全身を粉微塵にするだろう。止まらない、いや止めてはならない。少しでも手を緩めれば趨勢は決まるだろう。

だがこのままでは埒が明かないと、スタークは不意を突くように流れを変える。

「虚符『百火虚弾』」

それは破面が得意とする虚弾（バラ）。威力は低いがその弾速は虚閃の二十倍速いとされる。それが一気に百個の虚弾を生み出し、一斉に発射されるのだ。相手の虚を突くのにこれほど適したスペルもないだろう。

「くッ！ よもやこれ程とは——ッ!!」

吸い込まれるように白哉に被弾し、苦悶の声を上げる。その痛み、音速以上で飛来してくる砲撃を受けているに等しい。全身の骨がひび割れ、身体が原型を留めなくなってもおかしくはない。

「はッ、はあはア……ぐウ、ッッ！」

だがそうはならない。

白哉はすんでのところ千本桜を防御に回し、上記のようにはならずに済んでいる。

「砕けないか。再現だから、これだけダメージを与えりや終わると思っただがな。個体差があるようだ」

スタークは白哉の姿を見て、自身の考えを口に出す。

そんな中で気概を見せる白哉は、まだ終わらぬと再び霊圧が上がった。

「貴様、卍解が見たいと言っていたな。ならばその望み、叶えてやろう。貴様には過ぎたる技だ。存分に堪能するとよい」

「そいつはどうも。少しだけ見せてもらうぜ、アンタの卍解とやら」

スタークは再度、構えを直す。あの時、戦うことが叶わなかった卍解相手の戦闘が、こんなところで出来るとは夢にも思わなかった。その点だけは欠片、いや塵芥ほどだがアレイスターに感謝せざるを得ない。

そして白哉は刀の先を地面に向けると、そのままスツと落とした。

「――『卍解』」

しかし刀は地面に落ちるのではなく、吸い込まれるように消えると卍解が顕現したのだ。

『千本桜景厳』

地面から千本もの巨大な刀身が現れたかと思うと、桜が舞い散るように刀身が全てばらけた。千本桜を遥かに上回る数の刃と化したのは瞭然である。ここまですると美しさのあまり目を見張り息をのむ。桜吹雪のように舞う刃は、明媚で煌びやか。だが、それに見とれていたら切り裂かれるのは必然。そしてスタークもそんな愚は犯さない。

「凄いな。これが卍解か。近くで見れて感謝するよ隊長サン」

「感謝の返礼だ。受け取れ破面」

白哉が手を動かし、全ての千本桜を操る。

無数の桜吹雪が刃と化し、スタークに向けて襲い掛かった。こんなもの多勢に無勢である。億の刃が自分のみを標的に向かってくるのだ。脅威以前に理不尽すら超えた絶望を生んでいる。

「……まあ堪能している暇はないんだがな隊長サン。こっちは仲間を一刻も早く助けないといけないんでね」

スタークは分身を作り出す程の速さで動き、白哉を翻弄とする。同時に虚符『百火虚弾』を連発し、瀑布の勢いで繰り出していく。

白哉もそれは読んでいたようで、無数にある桜吹雪を防御に回しスタークの攻撃を防いでいく。その上で余りある桜の刃でスタークに向けて放っていった。

矢継ぎ早に繰り出される桜の斬撃の悉くを、スタークは事も無げに刀で弾いていく。刀で舞い散る桜の花びらを斬るが如く、なんの困難もなくスタークはやってのけていった。過去、一護はこの攻撃を卍解――天鎖斬月で対処したが、スタークはこれを帰刃無しでやっている

のだ。その実力、計り知るのは容易でないだろう。

「これでは捉えきれんか……。厄介だな」

スタークは常に弾幕を張り、白哉を襲っている。そして白哉でも補足するのが苦難な動きをしている。よって吭景、殲景といった千本桜景敵の応用技を出すことができない。少しでも防御に回している桜の軌道を変えれば、自身に弾雨が降り注ぐのは目に見えているからだ。

「……成程。理解したぜ。十分だ。そろそろ締めに移らせてもらう」

瞬間、スタークが攻撃の手を止めると、捷い動きで後退した。

白哉はそんなスタークの姿を見て訝しむも、瞬時に悪寒が走る。

「こっちも卍解を見せてもらった札だ。俺もとっておきを見せてやるよ」

刀を腰に戻し、佩刀する。傍目には臨戦を解いたように見えるが、そうではない。霊圧が、そして幻想郷で手にした妖力が徐々に膨れ上がっていく。

一護も、そして白哉もスタークが何を行うかを理解していた。

これが破面の、死神の卍解に当たる御業――

「蹴散らせ――『群狼（ロス・ロボス）』」

瞬間、青い霊圧が爆発するように広がり、竜巻となりてスタークの周囲を包み隠すように旋回する。

天井知らずに急増する霊圧。横溢し切った霊圧が空間を漂い、場の圧を急激に広めていった。

「構えな隊長サン。これは警告だ」

スタークの姿を捉えるより前に、声が響き渡った。

それを聞いた白哉は咄嗟に、自身の最終奥義を形成する。千本桜の全てを自身の体に集約させ、桜の翼と一本の剣を作り出す。千本桜全てを纏って相手を攻撃する技であり、威力は間違いなく白哉の持つ技で一番である。

『『終景・白帝剣』！』

そして地面を蹴り、スタークがいるであろう領域に突貫を仕掛けた。

いくらスタークであっても、これをまともに受ければ敗戦となりうる威力を有している。だが、次の瞬間には全てが終わっていた。

「――虚符『無限装弾虚閃（ゼロ・メトラジェッタ）』」
目を疑った。

一度に、ざつと千発以上の虚閃が放たれたのだ。しかもそれだけでは終わらない。連射性を秘めているのか、二千三千と勢いや威力が全く劣らない状態で放たれている。もはや滑稽にすら感じるそれは、ジエノサイドによる愕然たる蹂躞。

剣呑などする暇を与えず、虚閃の奔流に白哉は貫かれたのだった。

「ふふふ、あははははは!! ああ、いいな最高だよ！ 悦に浸れ、刮目させられる。笑いが止まらんよ、解放された気分だ！」

アレイスターはその光景を見て、歓喜に満ち溢れていた。

総身を奮わせ、湧き起こる感動を隠せない。

「本番はまだまだこれからだよ。黒崎一護が戦ってきた敵はもちろん、本来戦うはずだった未来の敵も残っているんだからね。さあ楽しませてくれ、感嘆とさせてくれ！ 君たちならこの試練を超えられると、私は誰よりも信じているからね」

そして一護とスタークの試練は……まだまだ終わらない。

第50斬【銀の星】

【1】

私は魔術があまり好きではない。

魔術というものはどうにも肌に合わない。小難しい本を読んで、変な文字覚えて、魔術業界の偉そうなやつに色々教わる。しかも座学が多いせいか身体が訛る上、無駄に目が疲れる。そもそも学生の頃の授業も嫌いだったので、苦行もいとところだ。

ならなぜ魔術を、こんな嫌々ながら学んだか。
簡単だ。

喧嘩で魔術師に負けたからだ。鍛え上げた肉体を以てしても、魔術とかいう人間の範疇では太刀打ちできない術が使われたから。細かい身体して行くせに、高慢で傲慢なクソ野郎に魔術を使われ負けた。

イラっとした。

だから魔術をマスターし、そいつに復讐してやった。魔術を練りこんだ拳でぶつ飛ばしてやった。

やはり肉体のポテンシャルが、最終手にはものを言うと思ったよ。だから私は魔法学を片手間に、肉体を鍛え上げた。

私は……魔術などという小細工より、殴り合いの方が性に合っているのだから。

*

地底にて再度、激戦を繰り広げる霊夢や魔理沙、一護にスタークを陰陽を象った通信装置を使い、それをもって見守る地上組。

出会い頭に襲ってきた二人の妖怪——火焰猫燐と霊鳥路空に相対する霊夢と魔理沙の姿を見ている計六人は、特に緊張した面持ちもななく援護と通信を行っていた。

「全く、あんたも体力馬鹿ね魔理沙。あれだけ魔力を消耗していたのに、まだここまでの闘ぎあいを行えるなんて。言いたくないけど、流石は私の大図書館から本を盗んでいくだけのことはあるわ」

今回の戦いの魔理沙担当はパチュリーがする事となり、通信装置に向けて魔理沙に話し掛ける。

『おう！ 褒めてもらって嬉しいぜ。お返しにまた盗みに行つてやるぜパチュリー』

「その余裕があるんなら私の援護は必要なさそうね」

魔理沙から現在戦っているとは思えないほどの明るい口調で返答があつたのに対し、少し呆れるパチュリー。実際、燐からは靈魂のような青い炎が弾幕の如く放たれ、空からは太陽のような灼熱の大弾が放たれている。当たれば満身創痍は必然となつてしまふだろう。

そんな中であつても魔理沙は明朗快活としているのだ。

「それより、あんた達が戦っている妖怪、どうにも不可思議ね。最初の読み通り、誰かに操られているのは間違いなさそうだし」

同じく魔理沙を見守るアリスが、現状を推察する。

「多分……というか確実に操っているのは今、黒崎さんが交戦中の謎の男。相当なポテンシャルね。その妖怪二人も恐ろしいまでの猛者なのに、それらをコントロールしながら黒崎さんとも戦っている。何ていうか、一人で大舞台を全て統制しているような、そんな化物じみた才腕を感じるわ」

『お、やっぱ一護は誰かと戦ってるのか？ 凄く気になるぜ。こんなところの黒幕と張り合えるなんて、羨ましいからな』

通信機の向こうから暴力じみた爆音と風切り音が生じる最中でも、魔理沙は興味津々に聞いてくる。

「ええ、そうよ。黒崎さんとスタークっていう破面は急に出てきた変な男と交戦中よ。名前は確か——」

「アレイスター・クロウリーと名乗っていました」

別のテーブルを囲い、一護を見守っている妖夢から言葉が飛んできた。

『アレイスター・クロウリー？ 知らない名前だな、どんなやつなんだソイツは？』

「能力は不明ですが、どうやら地霊殿の主である少女を操って、過去に一護さんが戦ってきた相手を再現しているようです」

「再現というより召喚に近い印象を受けるがな」

『再現？ 何かよく分からないけど、面白そうなことになっているの

は理解できたぜ』

『ちよつと魔理沙！ あんたなに悠長にしゃべってんのよ！ ちゃん
と戦いに集中しなさいっての！』

すると通信機の向こうから霊夢の叱責が飛んできた。

『言つとくけどねあの妖怪ども、それなりに強いわ。そして私たちは
連戦で疲弊し切っているの。分かる？ 悔しいけど、それなりに全力
を出さないと勝てないのよ』

「全くもって霊夢の言うとおりね」

溜息混じりにアリスが賛同した。

地底に入った途端、力を使い果たす程の戦闘を繰り広げて、再び同
じレベルの戦いを行っている。正味な話、正気の沙汰ではない。

「言つとくけど魔理沙、私たちの援護がなければ今頃あなたは負けて
るのよ。そのへんしつかり自覚して戦いなさい。にとりなんてだん
だん面倒くさくなって、うとうとしてるんだからね」

「……え、何か言った？」

『そんな口うるさく言われなくても分かってるぜ』

会話の中でも、通信先からは劣悪な怨霊の悲鳴にも似た叫びと、大
轟音を放つ発破が聞こえてくる。恐ろしいほどの激戦を繰り広げて
いるにも関わらず、それを感じさせない魔理沙はある意味において緩
和剤になっていると言える。

程よい緊張感を保て、緊張の糸が一本切れただけでは場の趨勢を傾
かせない。地上組にとって、それは精神的に和らげていると言えるの
だ。

「ふふ、いいわね魔理沙。その余裕、澆漑とした雰囲気。霊夢もそのく
らいの余裕はあつて然るべきだと思うわよ」

霊夢の援護をしている八雲紫が、通信機に向けてそう投げかける。

『はあ？ あのね、私はいつだつて真剣なの。異変解決で手を抜くな
んてしないし、ふぎけるなんてこともしないわ。この戦いは勝たな
きゃいけないの。そっちももつと気を引き締めてやりなさい』

怒りと呆れを孕んだ口調で答える霊夢。

確かに敵の攻撃を一撃でもまともに受ければ、それだけで致命的な

事になるのは明らか。敵が操られており、なおかつ稚拙な攻撃しかしてこなければ、即敗北を期していたかもしれない。

「まあそうだろうね。だって地獄鴉と火車だもんね。私も接点はないから知らないけど、地底にいるくらいだもん。めっちゃ強いと思うよ。あ、戦ってるから強いのは分かってるよね。変なこと聞いちやった、ごめんささくい」

『……だれかその鬼を殴ってくれない?』

「暴力的な発言はダメだよ。霊夢。そんなにご機嫌ななめならお酒でも飲んで、ぜくんぶ放り投げたらいいんだよ」

今なお酒を飲み続けている伊吹萃香が、呂律の回っていない口調と頭の回っていない台詞を零した。

「あやや、とりあえず萃香さんは黙りましょうか。そんなことより、これはもういい仕事ですよ。私の手帳がネタで埋まる埋まる。次の新聞は私の記事で独占ですよ!」

『どうして私の周りにはまともな奴がいないの』

通信先で霊夢が頭を抱えている。

「それはあんた自身もまともじゃないからよ。類は友を呼ぶって言うでしょ?」

『お願いだからそれを言わないで。私は絶対に認めないから』

紫の悟ったかのような発言をしたため、霊夢のやる気が失われていった。

「まあ心配しなくても、一護君が敵を倒してくれたらその洗脳も解けるでしょう。それまで耐え抜けば問題ないわ。仮に負けて死にそうな窮地に陥つても、私が通信機を介してスキマを展開するから、それで二人を救い出すことは可能よ。だから安心しなさい」

『そんなみつともない事されたくない。負けるなんて、いちいち前提に考えて戦うようなことはしないわよ。やるからには勝つから』

「おおく流石は博麗の巫女だねえ。プライドは一丁前ときた。ねえそれよりこの神社にお酒はないの?」

『プライドの欠片もない鬼が何言ってるの? あとうちのお酒を飲んだら承知しないわよ』

「……………」

『ちよつと文、あんたが無言で手帳に何かを真剣に書き綴っているのが一番怖いんだけど』

『おい霊夢、お前も結構呑気にしゃべってるぜ』

すると横やりを入れるように、魔理沙が霊夢に声をかけてきていた。

『はあ！ そ、そんなこと、ないわよ？』

『自信なさそうだぜ霊夢』

本当に通信先で戦っているのか怪しくなるが、そんな中でも魔理沙は続ける。

『それに霊夢、勝ち負けは正直どうでもいいんだぜ。今の私は楽しめたらそれでいい。そう思ってるから』

『あんたそれ本気で言ってるの？ いやもう、確かにそうね。あんたはそういうタイプだったわ』

『だから私は、今一護が戦っている相手が大いに気になっている。そっちの方が楽しそうだからな』

*

「見事だ、黒崎一護、そしてココロ・スターク。やはり一度戦った相手や、見知った相手の攻略法は熟知しているか。そして実際に戦っていない相手に対しても、素早く見切って対処している。いやはや、流石というほかない」

地霊殿の中心で、この主人こと古明地さとりを操っているアレイスターが、顎をさすりつつ二人の戦局を見据える。

一護とスタークは共に、目の前に現れる自分達の見知った相手の再現体を倒していった。

朽木白哉と阿散井恋次の次はダークワンの巖龍、続いてバウントの狩矢神、十番隊隊長の日番谷冬獅郎とその朋友である草冠宗次郎、元三番隊隊長の天貝繡助、そこからはグリムジョーやウルキオラ、スタークを除く十刃の面々。他にも虚圏統括官の東仙要、古の破面アルトウロ・プラテアド、十二番隊第七席の因幡影狼佐、地獄の黒刀も再現されている。

倒しても倒してもキリがない。一護が戦ってきた相手でもある為、攻略するのはそう難しくない。その上、今は元No. 1十刃のスタークもいるのだ。しかし再現される数が多いため、こちらの体力も霊力も衰えを隠せないでいる。

「いいぞ、では次だ。ここまで私を期待させておいて、失望させてくれるなよ。この試練を踏破した瞬間こそ、羽化登仙の夢心地を感じられるもの。さあ行くぞ、これがお前の未来の敵だ」

そして一護の前に、再び煌めく粒子が人体を形成していく。

大柄な男、黒を基調とした服を身にまとい、黒髪をオールバックにしている。その男の名は――

「初代死神代行……銀城空吾」

*

「誰だお前？ 俺の知っている奴じゃねえのか」

目の前に現れた男、銀城を見て一護は困惑する。

今までの相手は例え戦ったことのない相手でも、頭の隅にはいた相手だった。しかし今再現された男は全く知らない相手なのだ。

記憶がない、面識のない男は一護に向けて口を開く。

「よお一護、久しぶりだな。俺のことをぶっ倒しておいて覚えてねえのか。そいつは随分と悲しいじゃねえか」

「何言ってやがる、俺はお前なんか知らねえよ」

投げかけられた男の言葉に、一護は一蹴した。

本当に知らない。知るはずもない。何故なら目の前の男は、一護が“本来いた世界で倒すはずだった、未来の相手”なのだから。

「そうかよ。まあ構わねえよ。俺のことを忘れていようが覚えていようが、やることは変わらねえ。なあそうだろう、黒崎一護オオ！」

銀城は一護に向けて突貫する。

それと同時に身に着けている十字架のネックレスが淡い光を放出すると、それが刀身にも柄のある身の丈ほどの大剣に成り変わった。その大きさはさながら斬月を彷彿とさせる。

「だから知らねえって言ってんだろうが！」

同じく手に斬月を握り、銀城と応戦する。

大剣と大剣が衝突すると、風切り音の烈風が吹き荒れ大地が陥没した。

互角、そう見えたのも束の間、

「ウオオオオオオ!!」

気合の裂帛と共に、一護が銀城を弾き飛ばした。

「クソッ! やるじゃねえか一護! 俺を殺した時より強くなってるじゃねえか! だったら俺も最初からとぼしていくぜ」

銀城の霊圧が膨れ上がると……

「――卍解!」

「なにッ!」

その言葉を口にする。

膨れ上がった霊圧が、まるで爆発したかのように迸ると、そこには先ほどの銀城の姿からは一変していた。

虚のような禍々しい姿。髪は白くなり、瞳の色は悪魔の如き黒白反転。下半身は体毛に覆われ、背中には翼が生えたかのように霊圧が放出されている。

霊圧は隊長格レベルであり、それに加えて虚の力も混ざり込んでいる。それはまるで一護の虚化を思わせる力である。

「どうした? この姿を見せるのは初めてじゃねえだろ。何そんなに呆けてやがる。俺を殺した時のお前は、もつと迫力があつたぜ一護!」

先の速さとは別格。

一護が驚く間に一気に懐に入れられ、大剣を木の枝のような軽々しさに振るわれる。その上、その威力も絶大で、振るわれた余波だけで台地がめくり上がったのだ。

「チィ、テメエが何言ってるか分からねえが、勝手に俺のこと語ってんじゃねえよ!」

対する一護は、斬月で応戦する。

相手は卍解しているが、まだ斬月でも戦える。よって切り札を下手に出すのは危険だと感じた一護は、斬月とスペルで応戦する。

「黒符『月霊幻幕』!」

一護の周囲に黒い三日月状の弾幕が展開され、それらが一斉に銀城に向けて放たれる。

「随分と変わった技を使うようになったじゃねえか。だが、そんなもん喰らうと思ってるのか！」

大剣の切っ先を、迫る弾幕と一護に向ける銀城。同時にそこに霊圧が凝縮されていたかと思うと、それが赤い閃光となって一気に放出された。

そう、紛れもない虚閃である。

「——ッ!？」

拮抗する間もなく、一護の弾幕は虚閃に飲み込まれた。そのまま勢いの止まらない虚閃が、一護をも飲み込もうとしたが間一髪で躲し切る。

それを読んでいたのか、銀城は一瞬で一護の背後へと回り込み、大剣を一護めがけて剣戟を振り放った。

一護はそれを斬月で防ぐも、先の意趣返しかのように次は一護自身が弾き飛ばされる。

「次は避けられねえぜ一護！」

再び剣の切っ先を一護に向け、銀城は虚閃を発射した。

「……黒符『天幻月牙』！」

「なにッ!？」

虚閃に包み込まれる寸前でスペルを唱えた一護。

その瞬間、銀城の周囲には三日月状の弾幕により包囲され、吸い込まれるように一斉掃射されたのだ。

一護と銀城、お互いの技がヒットするが……

「……………」

「……………」

共に痛烈な一撃とはなっていないなかった。

「やっぱアンタただの人間、じゃねえな。卍解に虚閃、そしてその姿。俺が言うのも何だが、普通じゃねえよ。虚化とも違うようだしな」

「それはごっちのセリフだけ。いつからテメエはんな小細工するようになった？ テメエの技は月牙天衝だけじゃなかったのか？」

「アンタの知ってる俺と、今の俺は違うってことなんじゃねえのか。それに何回も言ったが、俺はアンタなんか微塵も知らねえんだよ。もし会ってたら、アンタみたいなドギツイ奴を覚えてないわけないだろう」

——それにだ。アレイスターと言う男は未来の敵だと言っていた。それを真に受けるなら、目の前の相手は何の因果か自分と将来戦うことになっていった相手と言うことだ。

ここまで考えるとある疑問が生じる。自分は死神の力を失ったのに、なぜ未来の敵がいるのか？

思考をそつちに持つていくとキリがないと判断し、一護はいったん目の前の男を倒すことに集中する。

「そうだな、俺もよく分かっちゃいねえが、今はそれを氷解するよりテメエを倒したいと俺の体が疼いてんだよ一護。どんなカラクリか興味はあるが、そんなもんは後回しだ。決めようぜ、テメエもそれが望みだろう」

銀城は大剣を構える。どこか儂げな色を感じるも、直ぐに滾るような闘志に塗り替わる。燃え上がるような霊圧が、大剣の刀身に収斂されていく。必殺にも等しい奥義が来るのは一目瞭然である。

「そうだな。今はとつととアンタを倒して、アイツも倒さねえといけねえ。下手に時間を喰うわけにもいかねえから、これで決める。——黒斬」

一護の斬月にも、銀城に負けず劣らずの霊圧が集中する。

そして同時に、足に力を込め、大地を踏みしめながら叫ぶ。

「月牙天衝!!」

互いに放たれた月牙天衝がぶつかり合い、熾烈な勢いで拮抗する。衝突の余波で周囲の岩壁や大地が消し飛んでいったが、直ぐに決着がついた。

両者共、この技が決め手にならないと即座に踏み、月牙天衝を放つと武器を構え斬り込んでいたのだ。

袈裟斬り……ほんの数瞬の違いだった。

先に動き、先に斬り込んでいた一護が、銀城を斬っていたのだ。

「くそッ、またか……俺はまた、お前に負けんのか。いや、これでいい、お前になら負けても悔いはねえよ一護」

斬られた銀城は、そもまま硝子が割れるかのように飛散し雲散霧消と化す。

それを見た一護は、どこか心の奥で遣る瀬無い気持ちになった。

知らない相手だった。見たことも、戦ったこともない相手なのに、相手を倒した瞬間、言いようのない沈鬱な感情が渦巻く。しかしそれと混同するように、強い憤りも感じていた。あくまでアレイスターが再現した偽の存在であっても、今まで戦ってきた相手の信念や矜持が踏みにじられている気がして、怏然となるのだ。

「まだ終わ리だと思ふなよ。こっから先こそが地獄、滅却師どもが所属する『見えざる帝国』。その中でも卓越した集団『星十字騎士団』が相手をする番だ」

一護の思いなど知る由もないアレイスターは、更なる再現体を現出しようとしていた。

「ふう、やれやれ。流石に少し疲れてきたな……」

スタークは帰刃状態で戦闘を継続していたのか、疲弊の色が見えてきていた。

「ザエルアポロ・グランツ……そうか。0番の時はあそこまで強かったのか。なるほど、もし俺がここで鍛えていなかったら負けていたなこりやあ」

消えゆく昔の同胞を見つつ、座り込みたい体をどうにか保たせる。

「このままだとジリ貧か。こっからで仕掛けねえとまずいな。敵さんの手札はまだまだ残っているようだし、こいつは直接叩かないと勝ち目はない」

スタークは響転で一護の隣へと移動する。

そしてアレイスターと、対峙する形となった。

「分かっていると思うが、このままだと状況が悪化する一方だ。そろそろ試練とかいう遊びは終わらせて、あの男を討つてもいい頃合いだと思ふぜ」

「ああ、分かっている。それに遅すぎたくらいだ。もっと早く、そうして

おくべきだった」

一護がスタークに同意する。

しかし心のどこかで、自分が戦うはずだった未来の敵とやらが気になるのも事実だ。銀城という男もだが、今アレイスターの口から滅却師という聞きなれた単語が出てきた。

滅却師といえば、一護の仲間である石田雨竜が該当する。しかし滅却師は死神によって滅ぼされたと聞いていたが、それが自分の未来の敵となって現われるらしい。見てみたいという欲求が少なからず生まれたが、一護はそれを頭の片隅に追いやる。

「行くぜスターク。こっからは本気で仕掛ける。……頼むぜ」

ザツと、一護は地面を蹴り、一気にアレイスターに突っ込む。

「ああ、そう来るか。読めていたとも、君たちが私の試練に、律義に最後まで付き合ってくれないことなど、童でもお見通しだったろうよ。しかしまあ、一応は未来の敵を一人でも倒してくれたんだ。赤点ギリの及第点と言ってところだろうか」

「饒舌なのもたいがいにしやがれ！」

一護は斬月に霊圧を込めると、スペルを唱える。

「黒斬『月牙天衝』！」

至近距離より放たれる、烈々たる猛威。斬撃に乗せられた霊圧が大地を捲りあげながら、アレイスターと洗脳されている古明地さとりを迫る。

「おいおい冗談だろ？ こっちには操り人形兼、人質が——」

アレイスターが自身の傍らにいる、さとりの腕を掴み訴えようとするも……

「あんたは少し黙ってる」

不意を突かれたかのように、アレイスターの懐にスタークが瞬間移動さながらの速さで入っていた。

そこからの行動は迅速だった。スタークは背後から迫る月牙天衝が直撃する刹那、片手の銃でアレイスターへ零距离で虚弾を連射。回避不可に等しいその弾丸を受け、アレイスターが仰け反り力が弱まった隙を逃さず、さとりを回収し再び瞬間移動さながらのソニードで退

避。

この後の展開は予測通りとなる。

「……ッ！」

スタークの銃弾により、隙だらけとなったアレイスターに一護の月牙天衝が完全に飲みこんだ。

*

時を同じくして。

地底世界に入った辺りのどでかい空洞を落ちるようにして進む、守矢神社の巫女こと東風谷早苗。

紆余曲折あり、神奈子の命により今地霊殿へと向かっている。端的に言うに、どうやら神奈子が地底にいる地獄鴉に力を与えたらしく、その力を見てきてほしい。と言うものである。

え、どうして？ 何でそんな力与えたんですか？ などなど色々突っ込みたいたころはあったが、渋々押し切られる形となってしまったのだ。

「はあく、私もまだまだ未熟ですね。神奈子様にもつとガツンと言える巫女にならないと」

ため息をつき、自身の従属に近い立場を悔いる。

「諏訪子様は可愛らしい(見た目)から何でも言うこと聞いちゃいますけど、神奈子様はどう見てもいい大人。そんな人の我が儘をずっと聞いていたら、調子に乗った小姑みたいになりますよね」

本日何度目かのため息をつく。

あーやだやだ、早く帰って愛らしい諏訪子様を抱きしめたい、などと頓馬なことを考えている早苗。

そんな時だった。

ゴツンツと、早苗の頭にさながら神奈子の天誅が下されるが如く、硬い何かが激突した。

「……いッツたあああい!! 何なんですか落石ですかもうッ！」

頭をさすりながら涙目になった早苗は、ぶつかってきたであろう何かの方を見る。

そこには……

「ツテエな、くそがッ」

同じく少し痛そうにしているグリムジョー・ジャガー・ジャックの姿が、そこにあった。

「あ、あなたは確か八雲家の居候で、黒崎さんと同じ世界からきた、名前はえつと……グリムさん！」

「違エよ！ テメエ舐めてんのか？ 俺はグリムジョーだ。つかテメエは誰だ？」

「ヤンキーな見た目と態度なのに、しつかり名乗ってくださいるあたり根は優しいのでしょうか、まずは謝罪でしょうグリムジョーさん。今、私の頭にあなたがぶつかってきたのですよ」

「知るかよ。なに被害者ぶってんだテメエは。ぶつかってきたのはテメエだろうが」

「何ですかその当たり屋みたいな文言。言つとききますけど、私はそんなものには屈しませんから。まあ避けられなかった私にも米粒程度の非はあるのでしようけど、今のは明らか——」

「……………」

こいつ面倒くせエと感じたグリムジョーは、これ以上関わるのをやめ穴の底へと向かう。

グリムジョーがここにいる経緯としてはこうだ。最初は地上組で現地組をサポートしていたが、粗相を犯した為ひよんなことから紫にスキマに落とされ、気付いたら今に至るのだ。

「……………感じるな。これは黒崎と、スタークの野郎か」

地底深くまで潜りつつ、グリムジョーは二人の力を感じ取った。

「チツ、後はついでに黒崎の居候先の女と、その連れの力も感じるな。全員、まだ戦闘中か。ああ、それで構わねエ。とりあえず俺の新しい力を試すにはちようどいいじゃねえか」

「ねえあなた、誰と話してるの？」

誰に言うでもなく自然と口に出た言葉を、付いてきていた早苗が聞き取り訊ねる。

「ああ!? なに勝手についてきてんだテメエ？」

「ええー、だって私もそちらの方角に用がありますもの。それにどう

やら、黒崎さんたちがこの先で何か一悶着起こしているようですし、助けに行かないと」

これが万が一、神奈子が原因で起きた事態なら、釈迦に説法。強く諫言しようと思う早苗。

「助けだど？ テメエ程度の女が行ったところで足手纏いにしかなんねえよ。とつとと帰ってろ」

「言っておきますがね、私の実力はそれはそれは奇跡の現人神と謳われる守矢神社の風祝。そのへんの妖怪なんて私の前ではわけないんですからね」

「……………面倒くせえな」

グリムジョーは諦めたかのように呟く。

どうにもこの幻想郷にいる女って生き物は、頑固というか考えを曲げない奴が多いと思うグリムジョー。それに実力も恐らくそれなりにはあると踏む。でまかせでないのは霊力を感じ取るだけでも分かるのだ。現人神というだけあって、それに見合った実力はあるのだろう。

「いいか、一つ約束しろ。俺の邪魔はするな。したらその瞬間、テメエも敵とみなす」

「こちらの台詞です。あなたこそ私の足を引つ張らないでください
ね」

「……………」

再び言い返そうと思ったが、これはオウム返しになることが目に見えている。

よってグリムジョーは口を閉じ、早苗を引き離すように一気に先行了した。

【2】

「……………素晴らしいよ、黒崎一護。そしてココロテ・スターク」

一護の月牙天衝をもろに受けたアレイスターは、多少ながらも全身に傷を負いながら二人に言葉を投げかけた。

「まさかこんな早々に直接、私を叩きに來るとは。予想通りといえば

そうだが、試練が最後まで成せなかったのは心残りだ。銀城空吾の他にもまだまだ未来の敵はいたんだが、こうなつては試練を変更せざるをえないな」

「何だよ、試練つてのはそんな簡単に変えちまってもいいのか？」

「仕方ないだろう。私にとつてのVIPがいなくなつてしまったのだ。なんなら返してくれないか？ 試練の続きを行いたい」

「返すわけねえだろ。諦めて、あんたらの目的を全て話せよ。勝手に試練だなんだで、よそに迷惑かけてんじゃねえ」

「随分と嫌われたものだ。私は君たちのことを考え、君たちにとって将来有益となるよう行動しているのに、ここまで卑下されるとは。残念だよ」

アレイスターは大きなため息をつき、両手をさながら降参宣告のように上げる。

「OK、了解した。従来の試練は完敗だ諦めよう。そもそも試練など私の本意ではない。あくまで刹蘭に頼まれたからやっているからに過ぎない」

「ぶつちやけるじゃねえか。だったら決着つけようぜ、俺のやることは変わらねえ。あんたを倒して、それで終わりにする」

一護は斬月の切っ先を向け、一気に霊圧を上げた。

「――『卍解』！」

瞬間、漆黒の霊圧が渦を巻いて噴出する。

さながら竜巻めいた猛威を感じさせると、それを引き裂いて一護の最強形態が顕現した。

黒衣の死覇装を纏い、刀が黒い日本刀へと変形している。そしてその霊圧は、先の倍を行く質量を身に宿していた。

「……凄まじいな。これが黒崎一護の切り札。アイゼン様を倒した死神の力というやつか」

スタークが横目に一護を見て呟いた。

「壮観だよ。帰刃をした破面。そして卍解した一護。ならばこちらもそれに応えようではないか！」

同じくアレイスターの魔力が、今までに反して轟轟しく唸りを上げ

ながら上昇する。プロレスラーのような熱い力を感じ、それは今までの慇懃めいたアレイスターの態度とは一変する。

「来い！　そして力を貸せ聖守護天使エイワス！　全力で叩くぞ、黄金という肩書も秘密の首領などという魔術界のドンという肩書も捨てる。私は、私自身とそしてお前の力をフルに使うとする」

言い切ると、アレイスターの背後に浮遊するように一体の天使が現れた。

それは神々しく、文字通り天使のような輝き放出させて姿を見せた。圧巻、まさにその圧倒的存在感に息をのむ一護。身体が自然に無自覚に跪きそうになる神秘のオーラを纏う聖守護天使は、アレイスターを覆うように両腕で包み込む。

「行こう、愛しい我が妻よ。この劇的な舞台上、私は本気で君と踊りたいと、そう感じた」

『ゆえ、私を呼んだのだろう。振るえ、私はお前の剣だ』

何かを語るアレイスターと聖守護天使。

一護は冷や汗を流しながら呟く。

「あれが天使……初めて見た。死神とも、虚とも滅却師とも違う。本の中だけの存在だと思ってたぜ」

「俺もだよ。ま、世の中は広いつてことだな。俺たちも幻想郷という世界を知らなかった口だ。天使や悪魔がいてもおかしくないだろうよ」

幻想郷には妖怪や魔法使い、果てには神様がいるくらいだ。今さら天使や悪魔といった概念が出てきても不思議でない。

「天使を見るのは初めてか？　ああ、悪いな二人ともガツカリしないでくれよ。聖守護天使エイワスは厳密にいえば天使とはまた別の存在だ。ここでエイワスについて説くには、なかなかの時間と労力、そして神秘学についての知識を要する。よって君たちは何も知らなくていい」

『私はエイワス。アレイスターを愛し、教授し高めるもの。さあ行きましょうアレイスター。あなたの本領の時間よ』

そしてエイワスは消えるようにして、アレイスターの身体へと入っ

ていく。それはさながら一心同体のようで。

「《ハド》《ヌイト》の顕現！ 天の一座の幕開け。全ての数は無限。そこには如何なる差異も無し。ホール・パール・クラフトに仕えるエイワスによりて啓示された。出ておいで、子どもたちよ、星々の下へ、そして愛に胸ふくらませるがいい我が喜びはお前の喜びを視ること」
謳い上げるように、歡喜するようにアレイスターは声高らかに叫ぶ。

「4638ABK24ALGMOR3YX2489RPSTOVALL。《ハディート》の潜伏の終わり。美しき《星》の預言者に祝福と礼拝を！ 汝の欲する所を為せ、それが汝の法とならん——『神打創造』」

星々のような煌めきと共に、アレイスターの全身に黄金の鎧が形成されていく。

「——『アイオン生成・ホルス顕現』！」

五芒星の星をかたどった兜を装着し、胸に人の顔のようなものが彫られた星が象られている黄金の全身鎧。その佇まいは魔術師と言うより、歴戦の勇者を感じさせる。

「すげえ力だ。見ているだけで、身体が震えてやがる」

「武者震いつてやつか？ 卍解とも帰刃とも違う、感じたことのない力だ。俺はあの力に興味がある」

スタークは両手の銃口をアレイスターに向け、

「行かせてもらう。色々と試したいもんでな」

「奇遇だな。俺もちょうど試したいことがある。昔、使っていた力の真似事、だけど」

一護は片手を額に当てがいながら言う。

その姿はまるで仮面を付けるような仕草で……。

「そいつは気になるな。だが俺が先に行かせてもらうぜ」

虚閃を発射する。

「同じくだ。私もこの力を使うのは久方ぶりだ。少し肩慣らしが必要なんだよ」

右拳を裏拳の要領で振るい、虚閃を難なく弾くアレイスター。

「準備運動といこうか。付き合ってくれたまえよ」

そして地面を蹴り、一気に前進する。

「――虚符『無限装弾虚閃（ゼロ・メトラジェッタ）』」

そんなアレイスターに向けてスタークは容赦なく、己の必殺技であるスペルを放った。一度に虚閃を千発以上連射できる、出鱈目極まらない技である。

「おいおい急に大技か。こちらとしては最初は少し動く程度を所望したいのだが！」

アレイスターは立ち止まり、横に避けて射程から逃れる。

しかしその程度で回避できるわけもなく、常に連射が絶えることのない虚閃の猛威がアレイスターを襲う。

「とんでもないな。いやはや虚閃の無限連射とは果てしない脅威だよ！」

言っていることとは裏腹に、口元は笑みを浮かべている。

そして連打、連打、連打。虚閃の連射に対抗しうる速さで拳を放ち、文字通り相殺していつているのだ。並みの力量でどうこうできないこの技を、アレイスターは正面切って競り合っている。

「こいつはとんだ化け物だな。初めてだ。俺のこの技を正面から堂々と挑んで、そして張り合っている。こんな野郎に会うなんてな。ま、勇儀あたりもやってきそうだが」

スタークは連射を止めることなく撃ち続け、その間に別のスペルを唱える。

「牙符『一匹狼』」

瞬間、アレイスターの背後に一匹の狼が現れた。狼のようだが、炎のように青く燃えており、膨大なエネルギーの塊が狼の形をとっているように感じる。

それが狼のように吠えたかと思うと、一気にアレイスターへ襲い掛かった。

「ならこうだー！」

正面からは虚閃。背後からは狼。そこでアレイスターは何の迷いもなく、それらを対処する行動に出た。

拳を放ち続けながら、踏み込んでいる両足を軸に身体を高速回転。さながら稚拙な行動に見えるも、その回転は脅威の域へと変わる。さながら竜巻を思わせる烈風が発生し、それが防壁のような役割となつて、虚閃と狼を弾いた。

驚愕するスタークだったが、それだけで終わらなかつた。

発生した激烈な竜巻から、上空に舞い上がるようにアレイスターが跳躍していたのだ。

「受けてみるコヨーテ・スターク！」

拳に魔力を込め、それを振るつて魔力を放つ。茶渡泰虎のような攻撃方法だが、その威力は桁が違う。

それを察知したスタークは直ぐさま銃口をそちらに向けた。同時に虚閃を放ち、何とかそれを相殺するもそれで終わるわけがない。

まさに隕石群を思わせる弾丸が無数に降り注ぐ。

高密度に圧縮された魔力の隕石は、一発一発が極悪な威力を有している。

「チッ！ こいつ、地底ごと崩壊されるつもりか……！」

銃口に更なる霊圧を込め、険しい顔をしたスタークはスペルを唱える。

「虚符『無限装——』」

「読んでいないと思つたか？ 単純だなコヨーテ・スターク」

魔力の隕石に集中した一瞬の隙を狙われ、自身の懐にアレイスターが入り込んでいた。

「——しまった！ と言うと思つたか？」

「なに？」

そして次の刹那には、アレイスターとスタークの間には漆黒の刃が煌めいていた。

それが自分の首を刎ねようとしていると思つたアレイスターは、即座に回避に徹した。

「これは黒崎一護か。成程、大人しく観戦しているとは思えんかつたが、ようやく動いたということか。一対二なのを忘れていたよ」

「まだまだ、逃がさねえぞアレイスター！」

後方に跳んで躲したアレイスターを追うように、一護が天鎖斬月を構えて疾駆する。

「剣呑としたぞ。私の首を狙うとは、随分と豪気な男になったようだ。殺しはしないのではないか、黒崎一護」

「あんたが避けると踏んでいたからな。それに、当たったところでその鎧が防いでくれただろうから、致命傷は避けられただろうよ」

「そうか、愚問だったな。私の力を良く見極めている」

「それにな、俺らは二人じゃねえ！」

そして光った。

一護の周囲に付き添うように浮遊している、代行証を球体にしたような四つの玉——通信装置兼、援護機器——が一護に応えるように光ったのだ。

「妖夢！ 力を貸してくれ！」

瞬間、一護の天鎖斬月に緑色の霊力が纏われる。

『お待ちしておりました黒崎さん！ 全力で援護いたします！』

「ああ頼む！ 一緒にアイツをぶっ倒すぞ！」

天鎖斬月から黒と緑の莫大な霊力が纏われる。

「喰らえアレイスター！ 黒斬『月牙天衝』！」

そして放たれるは月牙天衝。

しかしいつもと違い、今回は妖夢の力も加わっている。文字通り二人分の力が合わさっているのです、威力も倍である。

「これが月牙天衝か!? 正面から受けて立ってやろう！」

アレイスターは拳に魔力を込め、自身に迫る斬撃に向けて拳を突き放つ。

「——ぐッ！ グラウウウウッ！」

拳と月牙が衝突した瞬間、凄まじい衝撃が発生した。アレイスターの立っている地面が陥没、更に陥没していく。それでも月牙天衝の勢いが収まることはなかった。

「私の力は、まだまだこんなものではない！」

自身に言い聞かせているのか、アレイスターは咆哮に近い言葉を口にする。

同時に拳に更なる魔力を込め始めた。

「だったら俺もまだまだいくぜー！」

このままだと月牙天衝は惜し負けると踏んだ一護は、即座に行動に出た。

『黒崎さん！ いきます！ 次は斬撃を飛ばすのではなくそのまま斬り伏せましょう！』

「ああー！」

再び天鎖斬月に一護と妖夢の霊力が込められる。

『断迷剣「迷津慈航斬」！』

『黒斬「月牙天衝」！』

二人のスペルにより天鎖斬月に込められる霊力が、相乗効果により増した。

そして先に放った月牙天衝と拮抗していたアレイスターがそれを打ち破った刹那、一護は斬撃の乗った天鎖斬月を直接アレイスターに向けて突貫する。

「——ッ！」

咄嗟のことでアレイスターは迎撃を捨て、間一髪で両腕で守りを固めた。

「ウオオオオオオオ!!」

裂帛の気合と共に、一護が袈裟に斬り込んだ。

「ッ！ なるほど考えたな！ 斬撃を飛ばすのではなく、刀に纏ったまま斬りこんでくるか！ 確かにそうすることにより剣戟の威力は増すが、まだまだだ！」

黄金色の鎧に更なる魔力と、そして天使めいた道の力が増幅される。

「喰らいつく、この私こそが上だと、お前たちに反論させさせぬ域で盛り返してやろう！」

「なッ!？」

アレイスターが気力を振り絞ると、その勢いのまま一護の剣戟を弾いて見せた。

そして格闘家のような構えを取ると、アレイスターが一気に一護の

腹部に拳を放つ。

「ガアッ！」

口から血反吐を飛ばしながら、一護は苦悶の声を上げつつ吹き飛ばされる。

「どうだ、この私の力は?! まだまだこんなものじゃないぞ」

アレイスターはどこか愉快そうに言った。

悶絶するような痛みと、呼吸するのも困難な状態となるも一護は倒れることなく態勢を立て直す。

「うるせえよ。俺の力もまだまだこんなもんじゃねえ」

息も絶え絶えになりつつも吠え、意識を通信装置に向ける。

「ウルキオラ、わりい。回復頼む」

『ほう、この俺に直接頼るか。構わん、俺の力はお前と井上織姫が元で発現した能力だ。好きに使え』

事象の拒絶——元来は井上織姫の力であるが、今はウルキオラにもその力が備わっている。

よって援護できるものとしては、回復が最も適している。しかし織姫ほどの完全な回復（事象の拒絶）はできない。それは装置を介しているからではなく、単純にその能力そのものが劣っているからである。

だが致命傷ではない一護を回復させるだけなら、造作もなく可能だ。

「悪いなウルキオラ。助かる」

『そう思うなら必ず勝て。俺の助力を無碍にはするな黒崎一護』

「ああ」

そして一護の身体がみるみるうちに回復していく。

「ほう回復か。しかも通常の回復の術ではないな。まるで回帰にも似た力だ」

一護の身体を熟視しつつ、アレイスターは顎に手を当てる。

「つまり、ダメージを与えても回復を続けられれば千日手。ならば、お前を一撃で屠るほどのダメージをぶつけければいい。単純な話だ」

「そう単純にいくと思ってるのかい？」

カチツと、金属音がしたかと思うと、青い閃光である虚閃がアレイスターに放たれていた。

それを拳を振るって掻き消すと、アレイスターは言う。

「流星だ。私が全力で放った拳の弾雨を全て相殺していたか。いやはや、恐ろしいまでの実力だ」

先ほど隕石群めいた魔力の弾雨を、一発も地上に直撃させることなく撃ち抜いて見せたスターク。その技能に感嘆の声を漏らしたのだ。

「そうかい、そいつはありがとよ」

「まだやれそうかスターク？」

一護が横目にスタークを見やった。

「ああ、やれるさ。それにまだ、試したいことをやりきれていないからな」

スタークはそう言うと、二丁拳銃をホルスターにしまいつつアレイスターに向けて一歩前に出る。

「このままアインタに虚閃を撃ったところで、致命的な深手を与えるのは難しいだろうな。なら俺の、奥の手を使わせてもらう」

瞬間、スタークのリボン式の弾倉から青い炎が噴出する。

「——狼符『魂ノ群狼』」

そこから青い炎を纏った狼が一体、また一体と徐々に増え始める。

まさに群狼のように顕現していく狼の群れは、一体一体が脅威だと感じさせるほどの力が込められていると見て取れる。

「狼の群れか。高ぶるな、私はそれと拳一つで挑んでみたいと胸躍っている。しかし……今は黒崎一護に集中したいと、そう思っている！」

告げるや否や、黄金の鎧の輝きが一際激しさを増す。

「開け——『高次時代・銀の星』！」

アレイスターを中心に、円球に黄金の光が爆発するように広がった。

目を突く光に一護は反射的に目を閉じるも、次の刹那には光景が一変していたのだった。

*

「アレイスター・クロウリー。聞いたことはあるけど、ここまで強いなんてね」

地上組の八雲紫が、暇だったのか妖夢とウルキオラが担当している通信装置を覗き込んでいた。

「……貴様はこちらにうつつを抜かしていいののか？」

「構わないわよ。霊夢と魔理沙の方はもう少しで決着が付きそうだし。さしあたっての異変の元凶も分かったようだし、無地解決の流れになってるわ。問題は、このアレイスターって男ね」

ウルキオラの言葉を返しつつ、アレイスターという男を観察する。

「あの、この男の人を知っているのですか？」

「名前だけわね。実際にこの目で見るのは初めてよ。でも、まさかここまでやるなんて。流石は聖守護天使と一緒にいるだけあるわ」

妖夢の言葉も返しつつ、紫は深いため息をつく。

「随分と詳しそうだな。どこまで知っている？」

「少しだけよ。隠岐奈から聞きかじった程度。あの聖守護天使は、アレイスターの妻であるローズという人間よ。誰よりも何よりもアレイスターという男を愛し、生涯を彼と共に歩みたいとそう願っていた、アレイスターの女房。けどローズという女性は病弱だったらしく、永くは生きられないと言われていたの。自分の命がそう永くないと感じていたローズに宿ったのが、聖守護天使エイワス」

「つまり、そのローズという女性に乗り移ったと？」

「ええ。簡単に言うとアレイスターが、かの地で聖守護天使エイワスと名乗る存在と出会うの。そこで数多の知識を与えられ、魔術界で有名な『法の書』を書くわけだけど、その際にエイワスは妻ローズの体に移ったわけ」

そして紫は簡略的に説明する。

神懸かりにあった妻ローズはその後、エイワスと交渉した。

自分の身体を好きに使ってもいい。だから自分の命をアレイスターが死ぬまで永らえてほしいと。

結果、ローズとエイワスは一心同体になり今に至るといふ。

「劇的な愛の物語ね。これが愛のなせる所業つてもものなのかしら。私

にはとても分からない概念ね」

「え、八雲様は1000年以上も生きて……あ、いえいえ失言でした。何でもないです」

「そこまで言っただけを閉じるのも失礼だけどねあなた」

妖夢の言葉に少しムスツとする紫。

そこで言い返せない自分にも虚しく感じたし、あれ私1000年も生きて何してたっけ？と言ういらぬ疑問が頭をよぎったのだった。

「ローズという女のごことは理解した。なら、聖守護天使エイワスとはどういう存在だ？」

ウルキオラの言葉に紫は続けて言おうとするも、口元に人差し指をあてがって悩む。

「ん、そうね。私も魔術や天使なんかは専門外だから説明は難しいわね。パチュリーは分かる？」

「いいえ、私も天使にはそこまで詳しくないわ。それに神秘学においても、エイワスってかなりマイナーな部類だったと思うから、詳細に知っている人なんて少ないんじゃないかしら。いえ、そもそもただでど。エイワスについて熟知しているのは、アレイスター・クロウリー以外にいないと思うわ」

聞き耳をたてていたのか、開いた襖の向こう部屋からパチュリーが答えた。

「そうよね。隠岐奈もエイワスについてはほとんど分からないって言ってたから。だから私も気になって見ているわけだし」

「博麗霊夢の支援は大丈夫なのですか？」

「いいのいいの、あの子は殺しても死ななそうタイプだし」

紫は霊夢の方には目もくれずに言い切った。

「では、もう一つ質問だ。アレイスターとは言動から見て地霊殿と関係のない者だ。神のシルベと言っていたか。それは一体なんだ？」

「私が知っている前提で話すのね」

「アレイスターと言うものを摩多羅隠岐奈に聞いたという点でおおよそ察しは付いた」

「耳聡いわね。ま、黙っている必要もないから、今は端的に話すわ。彼

はいわゆる使者、刹蘭の配下……なのかしら？ まあその一人ね。刹蘭が幻想郷の外で見つけた傑物揃いで構成されているようで、その名が『神のシルベ』。五つの試練ってやつを冠するらしいわ」

「刹蘭か。八意永琳から報告は受けている。どうやら、俺やグリムジョーといった破面をこの世界に幻想入りさせた男だとか」

「ええ、その通りよ。彼は五人の配下を使って、何やら行動しているらしいの。彼の言葉を鵜呑みにするなら、目的は一護くんを試練を与えるのだとか」

「試練だと？ 意味が分からん。そんなものを与えてどうする？」

「私に聞かないでよ。そこまでは知らないわ。全て聞き出すことはできなかつたんだもの」

紫はバツが悪そうな顔をする。

恐らく、永夜異変で対峙した時に聞き出したのだろう。その内容がかいつまんで話してくれたようだ。

「それにしても神のシルベだとか、五つの試練だとか、変わったことを言いますね」

妖夢がそれとなく口にした。

「……まあ彼は、昔からどこか中二的な思考があつたからね」

「中二？」

「ああ、ごめんなさい。何でもないわ」

紫はどこか懐かしむように答えると、視線を戻す。

すると一護と対峙するアレイスターの鎧が、何やら神々しく輝きを放ち始めた。

「——これは、そうきたわね。なるほど、こちらからも手出しを一切させない腹積もりね」

「八雲様、通信が……ッ!？」

「ええ、やられたわね。完全に遮断されてしまったわ」

そう、今の謎の輝きにより通信装置が断たれたのだった。

【3】

「……………は、どこだ？」

一護はアレイスターの謎の閃光により、目を閉じてしまった。

敵の前で目を閉じるなど自殺行為も甚だしいが、不意打ちすぎて対処できなかった。しかし直ぐに身構え、目を開けると、そこには別の光景が広がっていたのだ。

地平線まで広がる荒野。空は銀の星々が煌めき、さながら宇宙空間にいるような錯覚さえ覚える神秘的な空間。先ほどまでの地霊殿とは打って変わった景色に、一護は困惑を隠せなかった。

——地霊殿は？ スタークは？ それどころか通信装置まで消えている。

空間転移、もしくはそれに類する何かだと、一護は考える。

そう思索しようとするも、目の前には一人の男が立っていたため、考えるのを止めた。

「ここなら何の邪魔も入らん。黒崎一護、私と一对一の勝負を受けてもらおう」

そこには黄金の鎧を纏ったアレイスターが立っていた。

さながらライバルに果たし状を叩きつけ、公園に仁王立ちしている男のような佇まいである。先までの魔術師然としていた態度からは一変している。恐らくだが、こちらのアレイスターが素なのだろうと、一護はそう感じた。

「私は魔術師として、そして神のシルベとして動いていたが、やはりどうにも性に合わん。ああ、全くもって私らしくない。お前たちと直に拳を交えて、ようやく思い出したよ」

アレイスターはしみじみと感じ入りながら、言葉を紡ぐ。

「感謝する黒崎一護。私は、魔術やら試練やら、正直なところあまり興味がない。私は最初から、自身の拳しか信用していないのだからな。こんなに熱くなれたのは久方ぶりだ」

などと言いつつ切った。

一護はそれに対し、

「そうかよ。まあ戦っててそんな気はしていたけどな。つか、勝手に感謝してんじやねえよ。俺とあんたは逢ったばかりで、しかも敵同士だ。急にそんな情熱的な男になられても反応に困る」

至極、当然のことを言った。

先ほどまで試練だなんだと、人質を取りながら戦い、慇懃無礼な態度でいた。それが急に鎧を纏った途端、今までとは一変。どこか情熱的な性格へと早変わり。確かに対応に困ると言うものだ。

アレイスターはどこか楽し気に答える。

「そうかそうか、そいつは悪いことをした。こう見えても名のある魔術師と自負しているものでね。一応、外聞は崩さずにおこうと思ったのだが、そうはいかなかった。お前たちを見ていたら若いころを思い出してね。つい素が出てしまった」

「ようは魔術なんかより、拳の喧嘩が好きってことか？」

「喧嘩などという無粋な言い方をするな。決闘と言ってくれ」

「似たようなもんだろ」

「……まあ確かにそうだな」

どこか格好がつかないと感じたアレイスターは、拳を握り始める。「このような問答などもう良いだろう。すぐに始めようではないか。気付いていると思うが、ここでは私とお前以外、誰も介入できない領域。ギャラリーがいた方が盛り上がるのだろうが、集中して戦うにはもってこいの場所だ」

「つまり、あんたを倒さねえとここから出られないってことか？」

「察しがいいな。その通りだとも」

ここでは完全な一対一となる。それにこの空間がアレイスターが作り出したものなら、アレイスターを倒す以外に出られる手段はないだろう。

一護は手に持つ天鎖斬月を構え、

「なら、あんたを倒してここを出る。早く戻らねえと、霊夢あたりがそろそろ着きそうだからな。もしまだ戦ってたら小言の一つや二つ言われかねねえ」

「女性の小言くらい、受け止める度量を備えるべきだぞ黒崎一護」

対するアレイスターも拳を構える。

『アレイスター、私の小言を受け入れてくれたことなんてあった？全部聞き流されていた気がするのだけど』

「ローズ、こここそ聞き流してくれると私は嬉しかった」

『まあいいわ。さあやりましょう。私も全身全霊であなたの力になるわ。夫を支えるのは妻の役目だからね』

「ああ、それでこそ私の妻だ。ならば私も全身全霊でそれに応えて見せよう」

鎧から響く妻ローズの声に答えるアレイスター。

それを見て一護は、額に片手を宛がう。

「……いける、今の俺なら次のステップに進めるはずだ」

「ほう、そうか。私の試練は無駄ではなかったという事か」

アレイスターは一護の行動を看破したかのように呟いた。

そして一護の片手から徐々に、黒い霊圧が集約していく。その姿はまるで、死神時代の一護がああ仮面を付ける時の所作に似ていた。

「試練のお陰じゃねえよ。これは今まで戦ってきたみんなの、そして仲間たちのお陰で身に付いた力だ」

死神時代の戦いと研鑽、そして幻想郷で培ってきた賜物であり、元来一護に宿っている力。

「——『虚化』だ」

一気に片手で顔を覆うようになると、そこに虚の仮面が付いていたのだ。

その姿はもはや、死神時代の虚化一護と瓜二つ。その証拠に、霊圧が爆発的に上昇している。あくまでスペルによる虚化のためオリジナルとは違うが、それでも次のステップに進めているのは顕著に出ている。

「……よし、うまく出来た」

心の底から安堵し、次に達成感を得る一護。

仮面が無事に出た。そして自分の力が更に上がっていることを感じ取っていた。それがとても嬉しく、感慨深いものになっている。

「虚化。刹蘭から聞いていたが、そうか遂に至ったか。いいぞ、楽しみが増えたというもの。心躍るとはまさにこのことよ！」

アレイスターは更に拳を強く握りしめ、歓喜にも近い喜びが沸き上がっているのを感じていた。

ああ、いいぞ。楽しみだ、興奮する。子供のようにわくわくが止まらないと。

「ああ、奇遇だな。俺も今、自分の力を全力で試したいと思っていたところだ」

天鎖斬月の切っ先をアレイスターに向け、

「俺はあんたを倒して、みんなのところに、霊夢の元に帰る。だから負けるわけにはいかねえんだよ！」

最初から本気で行くため、霊圧を一気に上げる。

「ふふ、あははははは!! なら私はお前を倒し、最高の勝利を得よう！」

さあどちらが強いか、決着を付けようではないか！」

「なら、とつとと行くぜー」

一護は一気に地面を蹴ると、天鎖斬月に霊圧を込めながらアレイスターに肉迫する。

アレイスターは真っ向から受けて立つつもりなのか、両拳に力をこめ、格闘家のような構えを取った。

「—————」

そして繰り出される刀と拳。

まさに正々堂々とした激突。交差する刃と拳が、互いにぶつかり合ったのだ。拳が一護の顔面に、刃はアレイスターの右肩の鎧に。どちらも相応のダメージを受けた。傍から見たら、アレイスターにはダメージは通ってないように見えるが、霊圧の込められた刀を鎧に当てられたのだ。鎧が悲鳴を上げ、その痛みがアレイスターに通じているのは、アレイスターの表情を見れば一目瞭然である。

互いに苦悶の表情を浮かべながら、しかし攻撃はやめない。

足に力を入れ、刃と拳が両者の間を疾風のごとく飛び交う。

もはや喧嘩でいうところ殴り合いに似ている。至近距離で行われる子供じみた殴り合いが繰り広げられ、互いの体を削っていく。

「——おらアアッ!!」

アレイスターが一気に力を込め、一護の顔面に拳を叩き込む。すると、仮面の一部が散りながら一護は仰け反ってしまう。

その隙を逃さんとアレイスターは更に拳を突き放つも、

「俺はあんたを倒して、更にも上に行つてやる！」

上体を斜めに歪め、その勢いのまま拳より先に天鎖斬月を斬り放つた。

「グッ！ グウウウウ！」

同時に月牙天衝も放つており、その斬撃に飲まれるようにして吹き飛ばされるアレイスター。

苦悶の表情に顔を歪めつつも、何とか態勢を立て直す。

『アレイスター！』

「心配するなローズ！ まだまだこれからよ！ このような戦い、一生に一度あるかないか、全力で楽しめんでは男が廢る！」

気合と根性で再び拳を構えるアレイスター。

ローズはそれを今、全力を以て支えているのだ。

「すげえ気概だ。けど、俺も今のあんたを倒さねえと！」

一護がそう言うと、アレイスターに向けて瞬く間に迫る。

同じくアレイスターも一護に応えるように動いた。

「うおおらアッ！」

「ガハッ！」

先に射抜いたのはアレイスターの拳だった。剛腕な臂力より放たれたその一撃は、一護の仮面のほとんどを割るに申し分のない威力を有していた。

血反吐を撒き散らしながらも、しかし一護の目は死んでいなかった。

「まだだアア！」

踏ん張りながら、一護の天鎖斬月が続いてアレイスターの体を引き裂き、同時に並々ならぬ力でアレイスターを蹴り飛ばす。

「グ……ッ!?!」

蹴り飛ばしたその刹那の隙を逃さず、一護は霊圧を込めスペルを唱える。

「喰らえ！ 黒符『月牙天衝』!!」

一護の必殺技ともいえる技。

霊圧を超高密度までに圧縮した黒い斬撃が、吸い込まれるようにし

てアレイスターを飲み込んだのだった。

文字通り天を衝くその一撃は、周囲の大地を吹き飛ばしてなお余りある威力を持つていた。

それをまともに受けたアレイスターは、勿論ながらタダで済むわけもなく……。

「——ッ！ グウ、はああはああ……っ」

息も絶え絶えといった形で倒れていたのだ。

荘厳と壮美を感じた黄金の鎧が、罅が入り崩れ落ちている。全壊とまでいかないが、それでも大部分が砕け散っていた。

「——くッ、もう限界だなっ」

同じく一護も仮面が全て花弁のように散っていき、肩で息をしている。纏っている黒衣も、徐々に消失し始め刀を地面に刺して杖替わりにし、何とか立っている状態だ。

お互い、完全に限界。拳を振るう体力も、刀を振るう力も残されていないだろう。

「……この私が、負けたのか」

仰向けに倒れたまま、アレイスターは口を開いた。

「へっ、もうばてたのかよ。随分と潔いんだな。俺ならまだまだやれるぜ」

一護も倒れそうな表情で答えた。

「どの口がほざく。嘯いているのが見え透いているぞ黒一護。だが、これは私が先に倒れたのだ。誰が見ても、勝者は決したと見るだろう」

「そうかい。あんたのことだから、まだ奥の手の一つや二つ隠していると思っただぜ」

「ふっ、そうだな。私ではなくローズなら……いや、よそう。これはあくまで私の戦い。私がこうして倒れた時点で、勝敗は決した。後出しじゃんけんなどといった見苦しいことはせんよ」

「……あんたはそれでいいのか？ えっと、ローズだっけ？ エイワスだっけか？」

一護はアレイスターではなく、その鎧に宿るローズに語り掛ける。

『……ええ、そうね。アレイスターがそう言うのなら、私もそれでいいわ』

一瞬だが、回答に逡巡としたローズの声が響く。

『私はアレイスターを愛している。故にこの戦い、アレイスターを勝たせるのが私の役目。例え何があっても私の力で再び立たせてあげたい。けど、それはアレイスターの意志に反する。そんな真似は何があってもできない。だから、悔しいけどこの戦いはあなたの勝ちよ』
「そうか……」

どこか複雑な気持ちになる一護。もし相手が容赦なく本気で来ていたら、自分が負けていたという事になるからだ。

『それにね、私はあなたに感謝しているのよ』

「え？」

『あなたのおかげで、私は久しぶりにアレイスターの熱い心を感じ見ることができたのだもの。魔術師としてではなく、一人の男としてかっこいい姿が見れたからね』

「おい、そう恥ずかしいことを言うなローズ」

ここでアレイスターが割って入ってきた。

『あら、本当の事じゃない。最初に黒一護と相対した時のあなた、役者のようでそれは見て面白かったけど。やっぱりあなたは、こうでなくちゃね』

「全く、負けた上にそこまでネタばらしするとは、私の立つ瀬がないな」

『心配いらないわ。あなたが戦闘で火がついた瞬間に演技を止めてたから。最初のあなたの口ぶりや態度が嘘だつて、簡単に見分けがつくわ』

「まあ確かにお前の言うとおりだともローズ。しかし男には矜持というものがあつてだな——」

まるで夫婦の会話を聞かされているようで少し困惑した一護は、どこか申し訳なさそうに割って入る。

「なあ、悪いけどよ。まずはこの空間から出してくれねえか。こっちは仲間を待たせてるからさ」

そこでアレイスターとローズは会話をストップし、

「おっと、すまない。そうだな、まずはこの空間を解こう」

倒れたままアレイスターは片手を上げると、一気に何かを潰すかのように拳を固く握った。

その刹那、空間に罅が入り始め、まるでガラスが割れるように消えていく。

「私を倒した報酬だ。私の知っていることは何でも教えてやろう」
碎ける空間で、アレイスターはそう言う。

「ああ、頼む。あんたには聞きたいことが山ほどあるからな」

「頼むか……。ふっ、そうかい、これは長い夜になりそうだな」

少しずつ周囲の空間が、先ほどいた地霊殿に変わり始めていた。

一護もようやく腰を下ろせると思った途端、ここでアレイスターの表情が一変する。

何かに驚愕としている表情なのは、容易に見て取れる。そしてその次に放った言葉が、更なる試練を予感させた。

「——なぜだ。なぜここに……。『魔王』へカーティア！」

休む間もなく、五つの試練の三つ目が顕現する。

次の神のシルベと呼ばれる存在が、地霊殿に現れたのだった——。

第51斬【魔王へカーティア】

【1】

時はアレイスターが『高次時代・銀の星』で一護と自身を別空間に送り込んだところ。

一人だけ取り残されたスタークは古明地さどりの安否を確認すると、一護の帰りを待たためその場に残っていた。

「……たく、いつになつたら戻ってくるんだ？」

面倒そうに頭を掻きながら呟いた。

いつ何ときでも対応できるよう、帰刃は解かずにいる。万が一、一護が負けていた場合、アレイスターとは自分が戦うこととなる。アレイスターは帰刃状態でなければ勝てる相手ではない。

スタークはいつでも戦いに臨めるよう、気を張っている時だった。

「——やあやあ君がスタークだね。刹蘭の坊やが連れてきたという破面で合っているかな？」

その瞬間だった。

声と共に1人の女性が、自分の目の前に現れていたのだ。

一体どうやって、どのような手段を用いて現れたのか分からないが、気づいたら目の前に、さながら最初からいましたと言わんばかりに、平然とそこにいたのだ。

「——ッ!？」

スタークは素早く飛び退く。

驚愕どころではない。

スタークと言えば元NO.1の十刃であり、この幻想郷に来てから更なる力を手に入れていた。

そのスタークが、容易く間合いに入られたのだ。愕然とする他ない。

「何よ、乙女の顔を見てそんな血相変えて逃げるなんて酷いじゃない。地獄に堕としたくなるわね」

対する女性は、面白おかしい調子で口を開く。

赤い髪の女性で、黒を基調としたTシャツにチエック柄のミニス

カートを着用している。Tシャツには『Welcome Hell』とふざけた英字がプリントされている。

見た目だけなら、どこにでもいそうな女性である。

「あらかしらこれ、趣味悪いわね。覗き道具の類ね、変態さんでもいるのかしら」

スツと腕を振るう所作のみで、黒崎一護の周囲に浮いていた代行証型の通信機が粉々に砕けた。

雰囲気だけで、即座に感じ取れる。

——コイツには勝てない。

スタークの勘がそう訴えかけている。

恐らくだが、目の前の女性は全く臨戦体制に入っていないだろう。

それなのに規格外レベルの圧を全身で感じる。冷や汗が止まらない。握る銃が震える。呼吸が乱れる。総身が粟立つスターク。

極端な例えだが、先のアレイスターが通常の大虚（ギリアン）だとするなら、目の前の女は最上級大虚（ヴァストローデ）。それ程までに力量の隔たりが存在する。

一護とスタークの2人がかりで、アレイスターと対等に戦えるレベルなのだ。よって目の前の女性に自分一人で戦える道理などどこにもない。

「ちよつと、黙ってないで何か言ってくれないかしら。私、破面って種族とこうやってお話するの初めてなのよ。あなたのこと興味あるの。だから何か話してくれない？」

出会った人に道を尋ねるような気楽さで、スタークに話しかける。

「あ、そっか。自己紹介がまだだったわね」

ポンと、両手を叩いて思い出したかのように口を開いた。

「私は地獄の女神——へカーティア。よろしくね、コヨーテ・スターク」

友達に向けるような笑みで女性——へカーティアは言った。

「あなたにもキツチリ名乗ってほしいんだけど、まあもう名前知ってるしいいよ。でね、実は私、ここにきたの刹蘭の坊やにも内緒なの。あ、刹蘭って知ってるかな？ さつきあなた達が戦っていたアレイス

ターの上司みたいな男なだけど」

ペラペラと、スタークの心中など無視して舌を回す。

そんな中スタークは、この場をどう切り抜けるかに頭をフル回転していた。敵か、そうではないのか？ もし敵だった場合はどうするか？ 恐らく地底の総力を上げて勝つのは到底不可能。なら逃げる。それも無理だ。背中を向けた瞬間、容易にやられる。

そんな事を思考している時、

「まさか私が敵だと思ってる？ なら心配しなくていいわ。私はあなた達の味方でもないけど、個人的に敵でもないから。別にあなたを殺そうとか、そんなこと1ミリも考えてないから不安がらないでね」
ヘカーティアはのんびりとした口調でそう言う。

「だからお話をしましょう。そうね、あなたは地底での暮らしを楽しめてる？」

戦意がないことへの意思表示なのか、ヘカーティアは近くの壁にもたれかかった。

スタークも深呼吸をすると、初めてヘカーティアに向けて口を開く。

「あんたが本当に戦う気がないのなら、雑談にくらいは付き合ってる。悔しいが、今の俺にあんたをどうこう出来る力はないんでな」

ゆえに従うしかないのだ。

「へえ、今は、ね。まあいいわ、それで地底は楽しい？」

「そうだな、どちらかと言えば楽しいさ。見ていて飽きない奴らがいる。それに俺のことを仲間と、認めてくれる連中がいるからな」

「それは何よりね。地底は私にとって無関係でもないところだし。で、スタークはここに来て強くはなれたの？」

名前を呼ばれるのに抵抗があるが、スタークも続けて答える。

「ああ。ここにきて霊圧以外に妖力も手にした。以前の破面の時よりは数段強くはなっている」

「それは僥倖。やっぱり刹蘭の坊やの考えは合ってたわけね。破面から霊圧のほとんどを抜き取り幻想入りさせることで、別の力をこちらで身に付けてもらう。失った分だけ空き容量が増えるから、新しい力

で穴埋めもしやすい……詳しい原理は知らないし興味もないけど、強くなれたのなら何よりね」

「あんだ、俺が幻想入りしたことで何か知っているのか？」

「ええ、知っているわよ。察していると思うけど、あなたや他の破面、あと死神もね。みんなを幻想入りさせたのは刹蘭よ」

「刹蘭……。知らねえ名前だな」

「でしょうね。私の主観で言うなら、厨二病を隠してクールを演じてる、演者気取りな男よ。あと過去に囚われてる懐古厨みたいなのところもあるわね」

「まともな奴じゃなさそうだな」

へカーティアの言葉を鵜呑みにするなら、自分達を幻想入りさせたのは刹蘭。そして自分達を弱体化させて幻想入りさせたことにも理由があったのだと、スタークは理解した。

「さてとアレイスターが今、あの黒崎一護と戦っているのよね。提案なんだけど、破面であるスターク。あなた、私と少し戦っていかない？」

「何？」

へカーティアの気軽な誘いに、スタークはたじろぐ。

「心配しなくても殺し合いとか、そんな物騒なものじゃないわ。言うなればスポーツよ。ルールは特にないけど、軽く試合するみたいなの。ほら、サッカーでいう練習試合みたいなものだと思うって」

「戦う気はないんじゃないのか？」

「気分は変わるものよ。女性とお付き合いしたこととかない？ 行きたい場所とか、やりたい事とか、その場で変わるものなのよ」
「悪いな。そういう機会はなかったし、小煩いガキのお守りで精一杯だったんだよ」

「それは残念。中々の渋いオジ様だから、モテモテなのかと思っちゃった」

クスクスと笑みを浮かべながら、首輪から伸びている鎖を弄りつつ、

「じゃあ、私の気分が下がらないうちにやろっか」

「随分と勝手だなアンタ」

「安心しなさい、レベルは下げて戦ってあげるから。スタークもさ、自分の本気を全力でぶつけてみたいでしょ？ 私なら答えて上げられるわ」

彼女の快活な物言いに、スタークの握る二丁の銃に霊圧が込められ始める。

「……分かったよ、相手してやる。けど、あんまり俺のことを甘く見るなよ。アンタのその傲慢さは、いずれ身の破滅に繋がるぜ」

「結構結構、逆にそんな未来があるなら見てみたいわ。けど『貴方は私に汚い言葉を使った』。それだけの理由であなたを地獄へ墮とす。あなたのその言葉、そのまま返してあげるわ」

悦楽を感じたヘカーティアは一瞬、戦意の混じった瞳をスタークに向けた。

それにより火蓋が切られたのか、銃口がヘカーティアを捉えて逡巡なく虚閃が発射された。

大地を捲り上げながら蒼い閃光が迸り、対象に突貫していく。

「オーケーオーケー、その容赦のなき嫌いじゃないよ」

迫りくる閃光に何だ危機感を抱かず、ヘカーティアは笑みを崩さなかった。

*

「——なぜだ。なぜここに……『魔王』ヘカーティア！」

一護とアレイスターが死闘を繰り広げ、満身創痍になりつつも何とか一護の辛勝で幕を閉じた。

そして『高次時代・銀の星』という異空間から、元の空間に戻ろうとした刹那、アレイスターが声を上げて驚愕していたのだ。

「お、おいどうしたんだよ急に！ 何かあったのか!？」

「黒崎一護、すまないが悠長に話している暇はなくなつた。お前たちにとって、最大にして最悪の試練が現れている……。悪いが俺でもどうこうできる手合いじゃない」

苦虫を噛み潰したような顔となるアレイスター。ここまで言うということは、いわゆる五つの試練の中でも破格の内容なのだろう。

しかしそもそもな話、アレイスターどころか一護も戦う体力など残っていない。できて雑魚妖怪を少し倒せるかどうかのレベルだ。

「予想外だ。いや、彼女の性格を考えると有り得ないこともないのか……。刹蘭はエリザベートの半魂探しを依頼していたが、やはり従わなかったか……。まあ俺も人のことを言えないが」

「なに独り言いってんだよ!? ヘカーティアってやつは危険なのか?」

「危険、とは言えないが、刹蘭が彼女に課した試練が君たちにとって少々厄介なんだ」

「試練……大前提に試練ってなんなんだよ? お前らは——」

「悪い、異空間が元に戻る……!」

瞬間、硝子が割れるような音と共に元いた地霊殿へと一護とアレイスターが戻される。パラパラと砕け落ちる異空間を映し出していたガラス片から、徐々に元の風景が戻ってきた。

「……スターク!」

まず目に入ったのは片膝をついて息を荒げているスターク。

そして鼻歌でも興じそうな余裕を見せる女性、ヘカーティアである。

「黒崎、一護……」

「あら、急に出てきたわね。アレイスターと一緒にいるってことは、あなたが黒崎一護くんね」

ヘカーティアが値踏みするかのような視線を向け、一護は不快そうに目を細める。

「あんたが、ヘカーティアってやつか? 聞いているぜ、あんたも刹蘭の差し金なんだろ」

「自己紹介は不要ってことね。そうよ、私はあなた達に試練を与える、刹蘭の坊やの差し金。いやね、こうして君に会えるの、少し楽しみにしていたのよ」

「そうかよ。俺は刹蘭と繋がりのあるやつとはなるべく会いたくねえけどな」

「つれないわね。私は友好的にやって来たというのに。それにしても

剌蘭も嫌われているわね。人に好かれる性格じゃないと思っただけだ」

「ヘカーティア、どうしてここにいる？　ここはお前の来る場所ではないはずだろう」

「何よアレイスター。あなたまで私を非難するわけ？　もういいわ、こうなったら私、少しやけを起こそうかしら」

ヘカーティアの不興を買ったのか、忌々しそうに目を細める。刃物の切っ先めいた鋭い眼光を向ける。迸った戦意に一護達が、身を固めた。

全身を電流が走ったかのように、即座に戦闘体制になる一護。戦う気力など全く残されていない状態で斬月を構えるも、脂汗が滲み、呼吸も荒い。誰が見ても体力、霊力共に限界を尽きているのは明らかだ。

「おっと一護くんはもう限界……てか、立っているのもやっとなじゃない。よっぽどアレイスターといい戦いが出来たのね。羨ましいわ」「うるせえよ。やれねえ訳じゃねえ。あんたが戦うってんなら、こっちも戦うだけだ」

「凄い気概ね。立派な男の子じゃない。男児はそうじゃないとね」
同時にスタークも銃口をヘカーティアに向ける。

「あんまり無理すんなよ……と言いたいところだが、俺一人でどうこうできる相手じゃねえ。正直、俺たちが全快でも勝てる見込みが全く見出せねえ、そんな相手だ」

「……だろうな」

弱気になつてんじやねえと渴を入れたいところだが、そういう事を言える手合いではない。

向こうはヘラヘラしているが、こちらは連戦に次ぐ連戦。しかも相手は今まで相対してきたどんな敵よりも格上。もはや全てを投げ出して、ここから逃げ出したい気持である。

「さて、私としては一護くんとは全快のコンディションでやりたいんだけどなく。何かこう、都合よく全快にしてくれそうな、便利なアイテムか回復係はいないかな？」

あからさまな態度でヘカーティアの視線がアレイスターに向く。

「ねえアレイスター。魔術を類まれなる秀才で学んだあなたに聞いたいわ、何かいい手立てはないかしら？」

「何が言いたい？ 周りくどいぞヘカーティア」

「そこは察して言うものでしょ。ほら、同じ試練を与える者同士、少しは手伝ってもらわないと」

「俺もお前も立場は同じだが、協力し合う関係にはない。……だが、そうだな。お前の意に沿ってしまうのは癪だが、いいだろう。エイワスの力で黒崎一護の霊圧を回復させよう」

「そうこなくっちゃ」

アレイスターはエイワスとアイコンタクトを送り合うと、エイワスがスツと一護の背後に移動した。

「君はアレイスターが認めた数少ない人間。そんな彼が君に委ねた想い、私は無下に扱えないのでね。彼以外に力を行使するのは初めてだよ」

「あんだ、何を言つて……」

「あなたの霊圧ごと全てを回復してあげるってことよ。私は聖守護天使、この程度のことは造作もないわ」

言い終えると、エイワスの手から光の粒子が発せられた。優しく包み込み、それが一護に吸い込まれていくと先の疲弊が嘘のようになくなっていく。都合が良すぎることに戸惑いを隠せない一護だが、そうまでしないとならない理由があるのだ。

「——気をつける黒崎一護。魔王ヘカーティアに与えられた試練は単純だが、それゆえに死力を尽くしてもなお不可能に近い」

全快に向けて回復していく一護を見つつ、アレイスターが言った。「試練は越えられない絶望。……お前たちではヘカーティアに手も足も出せない」

*

その頃、地上組では妖夢が困惑した声を上げていた。

「大変です！ 私たちの通信機が何者かによって破壊されてしまいました！」

「淑女が大きな声を出すものではないわよ。どのような事態が起きても悠然と構える、それが出来る女性というもの。ウルキオラを見習ってごらんさい。全く物怖じしていないわよ」

「彼は常に鉄仮面じゃないですか!」

八雲紫が諭そうとするも、一護が心配な妖夢の動揺は止まらない。アレイスターと共に消えて音沙汰がない状態で、正体不明の女が現れた。それを確認するや否や、通信機が破壊され向こうの状況が一切分からなくなったのだ。

不安で自分まで地底に足を向けそうになってしまった。

「鉄仮面……。ふん、あの男に対してそこまで心配する必要はないだろう。殺しても死なん手合いだ。俺が誰よりも知っている」

「ですが相手が誰だったかも分からないのですよ!?! もし黒崎さんでも敵わない相手だったら……」

「なら、なおのこと心配する必要はないだろう。あの男は常に、絶対的な戦力差を見せられてもそれを乗り越えてきた男だ」

過去、藍染率いる十刃を相手に挑み、そして踏破していった。勝てるはずのない者たちを前にしても、臆せず死線を乗り越えてきているのだ。

「ゆえに今は信じて待て」

「……………」

ウルキオラの言葉にプルプルと唇を震わせる妖夢。言い返せないことに腹が立っているのか、それとも自分の知らない一護の過去の出来事を語られ嫉妬しているのか。

「けど私が作った通信機が、こうも簡単に壊されるなんて思ってもみなかったよ。もうね、超がつくほど頑強に頑丈に作ったつもりだったんだけど。なんか悔しいわ」

にとりがため息交じりにぼやく。

この通信機が河城にとりと八雲紫による共同開発。

通信やサポートはもちろん、地底での戦いを想定して強度に作り上げた通信装置だったが、それを軽々と破壊されたのだ。にとり自身、悔しさと腹立だしさもあるが後の課題として色々と思いを巡らして

いる。

「いや、本当に凄いやねえ。だって勇儀とのバトルにも耐えたんでしょ？ 私も壊せるか挑戦してみたいな」

萃香が霊夢の冷蔵庫からくすねてきた、かまぼこを食べつつ言う。

「私の開発したものを壊さないでくださいよ。けど耐久性を精査するにはいいのかな？ 鬼だったら打って付けよね」

「考えが二転三転してますね。記者にもよくありますが。もしよろしければ、それを試す機会がありましたら是非ともお声がけを。取材させてもらいます」

「いいよ。その時は真つ先に文に伝えるね」

「アンタ達は本当に仲がいいわね。それともいい商売仲間なのかしら」

にとりと文の関係に口を挟むアリス。どこか僻んで聞こえる。

「ちよつと、いつからここは談話室になったの？ 今は現地の人たちをサポートするのに尽力……ああそうね、そうだったわ。最初からここは和んだ雰囲気だったわね」

「あやや、まるで自分は違いましたって感じに聞こえますねパチュリーさん。あなたも最初からこの雰囲気には呑まれていましたよ」

「冗談を言わないでちょうだい。この中で一番ちやんと取り組んでいって自負もしてるわ」

「何だかんだで一番しつかり取り組んでいたのは、一護さんのところの三人だと思いますよ」

文とパチュリーがそんなやり取りをしている中、紫がウルキオラに向けて口を開く。

「ところでウルキオラ。君に一つ言っておきたいことがあったのよね」

「何だ？」

「グリムジョーね。あんたや一護君に負けたくないのか、対抗心を燃やしているね。毎日してもらう日課の空いた時間で、健気に頑張ってるトレーニングしているのよ。たまくに私も付き合ったりしてあげてね。私が任せている家事にも色々細工して、鍛錬になるようにもし

「てあげてるし」

「つまり俺の知るグリムジョーよりは、格段に強くなつていると言いたいんだな？」

「そういうこと。気を付けなさい。油断してたらいつの間にか追い抜かれていくかもしれないわよ」

「そうか……それは楽しみだ」

*

その頃、スキマから地底に送られたグリムジョーは、一護たちのいる地霊殿へと向かつていた。

そしてその背中を追う東風谷早苗もまた地霊殿へと飛んでいた。

「——これは、一つの大きな力が消えたかと思うと、次は更に別の巨大な力を感じ取れます。何これ、今までに感じたことのない異質で、かつ底の見えない力は……」

「はッ、知るかよ」

早苗が冷や汗を流しながら慄然する中、グリムジョーはその脅威を笑みを含んで一蹴した。

「誰が相手でも関係ねエ。俺の新しい力を試すにはちようどいい。待ってるよ、黒崎一護オオ！」

【2】

「えつとく、どうしようかなあ。悩むわね」

一護とスタークが対峙する魔王ヘカーティアは、顎に人差し指を当てて妖艶な笑みを浮かべながら考えていた。

「私に与えてほしい試練は、越えられない絶望とかつて刹蘭から言われているからね。適当に戦えばこなせるんだけど、それだと面白くないし……」

「なに一人でぶつぶつ言ってるんだよ。俺と戦いてえんじゃねえのか。それとも、今さら二人相手にビビってるのかよ」

一護が軽く挑発するも、ヘカーティアの耳に入っていないのか反応を示さない。

「けど二人には全身全霊で戦ってもらいたいし、ここは何か勝利条件

を定めてあげるべきよね。そうすればやる気も出るだろうし。うん、きつとそう。あれ、私って頭いい！ あの刹蘭の頭悪い試練とか、いちいち乗ってあげる必要ないしね」

誇らしい顔をしながら、人差し指と中指を一護とスタークに向けてる。

「もしあなた達が私のこの帽子を取ることに成功したら、試練合格としてあげるわ！」

ドヤった表情を作り、鼻息を立てながらヘカーティアは言う。

「けど甘くはないわよ。私は三界を統べる女神、ヘカーティア・ラピスラズリ。私の帽子を落とすだけなら余裕、なんて愚図な考えしてたら痛い思いをするだけじゃすまないわよ」

「――ふざけてんじゃねえよ！」

躊躇いも加減もない。

次の瞬間には一護が黒い弾幕を展開し、一点集中でヘカーティアに放っていた。

甘い考えなど最初からしていない。対面した時から、いつでも弾幕を張れるようにしていた。そしていつでも全力で放てるようにスイツチも入れていた。

並の相手なら、何をされたかも分からずに地に伏すだろう。速さも威力も、その域の殺傷力を秘めている。

「いいわ、そうよ。私相手に戯れは必要ないわ。殺す気で、あなた達の刃を私に向けて振るいなさい」

一護の放った弾幕など意にも介していない。弾幕が被弾した瞬間には、弾幕のほう相手の質量に耐え切れなかったかのように消失したのだ。

「――ッ！」

いや驚くな、挫けるな。最初から相手は格上だと容易に推し量れた。この程度の攻撃が通用しないと、最初から理解している。

だから、

「黒符『月霊幻幕』！」

全ての攻撃に全霊を以て挑む。

凝縮された一護の霊圧が漆黒の弾幕となり、大気を引き裂きながらヘカーティアに放たれる。それとほぼ同時だった。

「――虚符『無限装弾虚閃（ゼロ・メトラジェッタ）！』」
スタークもスペルを唱えていた。

爆発的な轟音と共に、刹那の瞬間に幾百幾千にも渡る虚閃が火を噴いていた。

漆黒の弾幕と虚閃の弾幕がヘカーティアに集中砲火する。その光景は出鱈目めいていて、必勝を感じさせるには十分なものだったが……

「胸躍るわね、高ぶるわね。こうして敵意を向けてくれる。久方ぶりよ、この私に挑もうとしてくれる人なんて。ええ、そうでなくては地獄へ墮とすかいもない」

楽しそうに、迫る弾幕を正面から迎え撃つ。

「初めよ、絶望しないでね。異界『逢魔ガ刻』」

ヘカーティアがスペルを唱えると、自身を中心に紅い弾幕が展開された。

よくあるスペルによる弾幕だが、その底がまるで見えない。一つ一つが大破壊の一撃を備え、万象覆滅せしめん勢いで広がっていく。よつて一護とスタークの攻撃がシャボン玉のように儂く霧散していくのは自明の理。

恐怖を覚えた。絶望しかけた。

一護はそれを寸でのところで踏みとどまり、迫りくる弾幕に応戦する。

「負けるかアアア!!」

天鎖斬月から黒い霊力が噴出した。噴火のような勢いで並々と上昇する霊圧を繋ぎ止め吠える。

「黒斬『月牙天衝』!!」

全身全霊の一撃。

漆黒の斬撃が一護より繰り出され、地底全土に響くほどの鬨ぎ合いとなった。ヘカーティアの放った弾幕を掻き消す。掻き消していく

ものの、一護の月牙天衝はヘカーティアに届く前に削られてしまった。

「いいわ、そうよ。簡単に絶望なんてしないでね。この程度で墮ちるようなら刹蘭の見込み違いってことだから。あの子も必死だからね、期待に応えてあげてよ諸君」

絶望の試練を与える魔王ことヘカーティア。

それを聞き、噴き上がる激情が怒涛となって迫りくる一護。ヘカーティアに視線を向け、腹の底から全霊を込めて吠えた。

「だからテメエら、いつもいつも舐めてんじゃねえよ！」

一護が地面を捲れる勢いで蹴り上げる。

次の瞬間には閃光が迸った。一護が疾駆するその勢いに追尾するかの如く、スタークがヘカーティアに向けて王虚の閃光を放っていたのだ。

雷鳴すら及ばぬ勢いで鳴り響く轟音と共に着弾する。地底全土を揺るがすその一撃を受けても、ヘカーティアには傷一つ見受けられない。それどころか衣服すら乱れていない。

しかし驚くに値しない。

相手がこれくらいで手傷を負うわけないのは頭で理解している。よって一瞬の逡巡もなくヘカーティアに向けて天鎖斬月を振るえた。

初手の剣戟、最速で繰り出した一撃は防がれる。

防いだのは鎖。首輪から伸びる三本の鎖、その一本で防いだのだ。「私に肉薄してくるなんて、照れるじゃない。弱者が強者に果敢に挑むその雄姿、そしてその眩しいまでの勇氣に気概、いい男じゃない」

「ヘカーティアが鎖を手で弄びながら、一護は迷わず次の剣閃を振り放つ。」

多方向から一護は天鎖斬月を振るい続ける。迸る一撃一撃、それに付随するように剣風も舞い起こり、周囲一帯の地面、建造物が両断されていった。

まさに剣閃の嵐。

一振りに見える袈裟斬りも、その実は数十にも及ぶ剣戟が放たれて

いる。奔る刃が疾風となり、ヘカーティアを斬らんと乱舞を演じている。

それをヘカーティアは三本の鎖を巧みに操り、火花を散らしてはじき返す。

「まさに益荒男。その病的なまでに一途な刀への信頼、まるで歴戦の侍ね」

「まだまだ……まだまだアアア!!」

刃乱れて狂い咲く。その攻防はまるで花火のごとく、剣閃は既に輝く軌跡のみが舞っているようにしか見えない。それでいてなお、一護の斬撃は速さを増す。天井知らずに増していく。

その様相を見ているスタークは眩く。

「……これが黒崎一護、か。アイゼン様を倒した男。なるほど、こりや納得するな。戦いの中で、あれほど如実に強くなるやつを俺は知らねえ。だが……」

スタークは二丁の銃を腰に付けている毛皮のホルスターにしまう。戦いをやめたように見えるその姿だが、しかしその真逆である、

「やるか……。取っておきつてやつを。あんな根性ある勇往邁進を見せられちゃ、俺も本気を出すしかねえよな。ここでやらねえで、いつ使うって話だしよ。ここには、仲間たちがいるんだ。……いくぜリリネット」

誰にもなく、自分に何かを言い聞かせるように吐露する。

今まで抑えていた気持ち、そして力が徐々に内側から溢れ出る。ここに来て霊圧以外の力を身に付けたスタークは、新たなる力を宿していた。

それが爆発的な霊圧と妖力の上昇により顕現する。

「——ッ!?!」

「……へえ」

一護とヘカーティアは、恐ろしいほどまでに上がった力に目を向ける。

スタークは一護に言っていた。色々試したい、と。

そう、これがその事。それを思い出した一護は、スタークの次の言

葉に瞠目する。

「帰刃のその先へ——『真説帰刃（セグンダエターパ）』」

符名のないスペル、と称して良いのか。

爆発的に上がった力が、文字通り天を貫いて周囲全域を轟かせる。地底の天蓋を貫き、地上にまで昇る溢れ出た力。妖力と霊圧が混在しており、これだけで破面時代よりも桁外れに強くなっていると証明できる。

そしてその力が滝が落ちるかの如くスタークに集約されると、そこから更なる進化を遂げた姿で現れた。

猛々しく伸びた髪は、虚閃を彷彿とさせる水色に変色しており、眼帯も青色の炎のように揺らめく非物質と化している。衣服もそれに準じるように、黒色の揺らめく炎を着こむような形となっている。しかし完全には着こんでおらず、上半身はほぼ纏っていない。

背中 of 弾倉も様相が一転し、水色の透き通った長方形のようなものが間隔をおいて繋がり、さながら近未来めいたものへと変わっている。

そして何より変化したのは、両手に握る二丁拳銃。形は一回り大きくなり、その色は白から黒へ。弾倉と繋がり、銃口は二つに増えている。

全身から所々に青色に帯びた炎のようなものが揺蕩し、それが抑えつけようのない霊圧が溢れ出たものである。

その姿、その力、それはまるで刀剣解放第二階層。

過去にウルキオラのみが成した帰刃の先にある解放状態である。

「スターク、その力は……?」

「説明は後だ。離れる黒崎一護、そのままだと巻きこんじまう」

その言葉を嚙矢として、スタークは一丁の銃をヘカーティアに向ける。

「——ッ!?!」

一護は銃口をこちら側に向けられただけで、総身が栗立つのを感じ取り、即座にその場から退避した。

対するヘカーティは微動だにせず、逆に期待していたものを見られ

たかのような高揚感を感じ取っていた。

「――虚符『虚閃』」

スペルを唱えた刹那、銃口より虚閃が放出された。

しかしその猛攻たるや『王虚の虚閃』と見紛う、否それを優に上回る破壊力を有していた。

「いいね、刹蘭の説はしつかり当たっていたわけね」

着弾する瞬間にヘカーティアは鎖を旋回させる。同時に虚閃が被弾するや否や、大地を粉微塵に吹き飛ばしながら、大熱波を伴う青色を帯びた大爆発を発生させた。空間が歪み、砂塵が吹き荒れ、電流めいた音が周囲を震撼させている。

「……あれで、虚閃だと?」

今まで様々な虚閃を見てきたが、どの虚閃よりも格段に威力は上だ。王虚の虚閃、黒虚閃、そのどちらをも超える威力を持つ、通常の虚閃。

驚愕する一護だが、同時にそれを受けても無事に平然と仁王たちを決めるヘカーティもまた恐怖のそれである。

「凄いいじゃない。まさか幻想入りして、こんな短期間でここまで力を付けているなんて。もう、こんな隠し玉があるならもっと早く出しなさいよ」

「この力は消耗が激しいんだ。だから安々と使うわけにはいけねえ。下手にやると、俺の方がバテちまうからな。だから、こいつを使う時は……勝ちの筋が見えた時だけだ」

スツと、再び銃口をヘカーティアに標準を合わせる。

「言ってくれるじゃない。自信がついたのはいいけど、その傲岸ぷりは地獄へ堕としたくなるわ」

「あんたのその傲慢ぶりも、足元すくわれるなよ。逆に、あんたが地獄に滑り落ちてしまっせ」

そして続く轟音の嵐。

耳をつんざく爆発音が連続したかと思うと、その数だけ烈火怒涛の鮮烈さで虚閃が放たれていた。

一つ一つの虚閃が未曾有の破壊力を有する、その馬鹿げた力がへ

カーティアただ一人に迫りくる。

「この私にそんな生意気なことを居丈高にも吐けるなんて。まさに烏澁の沙汰ってやつかしら。いいわ、迎え撃ってあげる。異界『地獄のノンイデアル弾幕』」

瀑布の勢いで放たれていた虚閃を、ヘカーティアは泰然自若と対応した。

さながら津波を止める頑丈な防波堤。ヘカーティアの放った弾幕が、圧倒的な猛威を振るう虚閃を容易く堰き止めていた。

「はは、どうしたのこの程度？ 確かに威力はなかなかだけど、ただ撃つだけじゃ芸がないわよ。やってることは最初の帰刃ってやつと変わってないんだから」

「……そうか、今のアンタにはそう見えるわけか。なら崩しようがあるな」

「え？」

ヘカーティアの口から疑問の声が漏れた瞬間だった。

何か当たった程度の、痛みも痒みもない感覚が左肩から流れてきた。

弾け飛んだ小石にでも当たったか、と結論付けようとしたが、そうではないと次の思考を巡らせる前に否定する。

次は右足、その次は脇腹、気付けば全身の至る所から微々たる衝撃を感じ始めた。

「——これはあなたの力？」

「どうだかな。俺程度の力がアンタに通ったのなら、それはもう試練クリアなんじゃねえのか」

ヘカーティアの疑問を氷解させまいと、スタークは話をはぐらかす。

同時に止まることなく続くスタークの虚閃は、勢いは同じでもヘカーティアの全身に与える衝撃を次第に上げていっていた。

「……ああ、そういうことね。ようやくそのからくりを理解できたわ」「そいつは何よりだ。どうせ直ぐに看破されると思っていたよ」

両者、嵐のような攻防の手を止めると、ヘカーティアが種明かしす

るように口を開く。

「貴方は私に撃つ攻撃全てに、微力ながらも自身の魂を少し乗せていた。それを虚閃ってやつから分裂させ、私に当てていたと。まあ要約するとそんな感じかな。私の目を掻いくぐるレベルの力だから、その力を当てたところで私にダメージは通ってないけどね」

「そこまで当てられたのなら答えてやるよ。俺の能力は、自身の魂を力に変える程度の能力」だ。先のネタばらしをするなら、アンタの言った通りになる。俺は自分の魂を別ち、虚閃に紛れ込ませるようにしてアンタにぶつけていた。気づかれたら元も子もないんで、魂の力は弱めていたがな」

木を隠すなら森の中、というやつだろう。

ヘカーティアが虚閃を防いでいる間に、魂の力はヘカーティアに被弾していたのだ。

「けど、もうその手は効かないわよ。次はその魂の力も防ぐわ。理解した力なんて、私にとってもはや意味をなさないからね」

「そうかい。なら……アンタのまだ理解していない力をぶつけてやるよ」

言うや否や、次は黒崎一護のいる方角から、黒い闇のような力が噴出した。

ヘカーティアがそちらを見ると、そこには虚の仮面を付けた一護がいたのだ。

「ああ、確かに理解はしていないものだ。けど、私はそれを知っているよ。確か『虚化』というやつよね。聞いてはいたが、見るのは初めて。いいわ、これでこそ試練を与えにきた甲斐があったというもの」

「その減らず口、いい加減閉じさせてやるよー！」

天鎖斬月を構えた一護が、一気に跳躍してヘカーティアに迫る。

溢れ出るほどの黒い霊圧が軌跡を描き、瞬く間に剣戟が繰り出されていた。

同時に金属音が響いたかと思うと、先と同じく鎖により一護の攻撃が防がれていたのだ。

「悪くないね。さつきよりも速いし、膂力も出ている。言っちゃえば

身体能力の強化、と言ったところかしらね。だからこそ苦言を呈するわ。こんなものじゃ、私に貴方の剣は届かないわよ」

「構わねえよ、今俺の力が届かねえでも！ だから決めてみるスターク！」

「え？」

一護の言葉にヘカーティアが瞠目した。

スタークから溢れ出た膨大な霊圧の奔流が、巨大な二丁の銃の形を成していった。

まさにスタークの握る銃のようなものを形成、青緑色の荘厳で且つ美しい彩りを放つ輝きにヘカーティアは一瞬だけ見入ってしまった。

その隙を一護は見逃さない。

「余所見してんなよ！ 黒斬『月牙天衝』！」

「——ッ」

火花と黒い霊圧が飛び散りながら、一護は刃に膂力と霊圧を集束させていた。そしてそこから放たれるのは、ヘカーティアを突き破らんとする黒い月牙。閃光に近い月牙が唸りを上げ、ヘカーティアを上空へと吹き飛ばす。

しかしそれすらも鎖により防がれていた。だがこれで終わる訳がないことは、ヘカーティアは理解していた。

「行くぜ——『レボルベル・ロス・ロボス』！ 逃げられると思うなよ」
魂の力と霊圧、妖力の力を複合。女神を討つために籠められた弾丸は、最強の一撃に相違ない。さながら神殺しめいた究極の弾丸が、地獄の女神たるヘカーティアに向けて放たれる。

それは音速を超え、光速を突破する勢いで穿ち呑み込む。辺り一面を青緑色の爆炎と衝撃が炸裂し、地底の一部が灼熱と余波により崩落していく。神話の1シーンを彷彿とさせるその凄惨な光景は、この試練を踏破したと思わせるには十分なものだった。

一護の飛ばした月牙天衝により空中に吹き飛ばし、それを更に追い討ちを仕掛けるようにスタークの必殺技を放った。二人の必殺技を正面きって受けたということだ。無事な方がどうかしている。

「……やったのか？」

一護が無意識にそう呟いた時だった。

「それ、生存フラグってやつだよ一護くん」

地獄の底より響いた声は、一護とスタークを絶望へと変えるには充分すぎるものだった。

崩落した岩石と青緑色に燃える炎の海を粉微塵に変え、平然としたヘカーティアが現れた。

所々に衣服の乱れや焦げが見当たるものの、外傷といったものは全く見当たらない。一体全体、どういう芸当なのか教えてほしいレベルの姿である。

「はは、実際ビックリはしたよ今の連携攻撃。棒立ちで喰らってたら、流石の今の私でも多少なりとも傷は負ったからね。だから、しっかり大人気なく防御させてもらったよ」

もはや一護にヘカーティアの言葉が入ってこない。

絶望の試練。それがびったりと当て嵌まるなどと思っててもみなかったからである。

「けど私の服が少し傷んだ。これはまさに僥倖さ。ここまでやるとは思ってたからからね。拍手喝采したいところだよ」

嬉しそうに、しかしどこか傲慢さを孕んだように言う。

「一護くんの虚化ってやつに、スタークの第二解放。ええ、本当に刹蘭の思惑通りに強くなってるじゃない」

「何を勝った気でいるんだ、地獄の女神さん」

ペラペラと回る舌を閉じさせるかのように、スタークは微笑んだ。

その次の瞬間だった。

「――豹符『豹王の爪』!」

「――秘法『九字刺し』!」

豹の荒々しい爪を彷彿とさせる、霊圧による巨大な10の爪。同時に陰陽師が扱う九字切りに似た、縦横から格子状に織り成されるレーザー。

地獄の女神を捕縛、補足するかのようにレーザーがヘカーティアを捉え、続いて圧倒的な暴力で蹂躪するか如く巨大な十爪の爪が轟音と共に被弾した。

「ッ!? 今のは!」

「読み通りときたもんだ。しつかりやってくれ。後は任せたからよ」

一護とスタークが飛来してきた方角を見据えると、そこには見知った二つの影があった。

「――早苗にグリムジョー!」

そこには神職たる東風谷早苗に、何故か地上にいるはずのグリムジョーの姿が帰刃状態であった。一護と最初に戦った際は刀剣解放はできなかったが、あれからの修行でスペルにより会得したのだ。今のグリムジョーもスタークと同様、幻想郷で新たな力を手にし幻想入り前よりも強くなっている。

「こんにちは一護さん。何やらピンチだと思い、勝手ながら助力に参りました」

早苗が一護の近くに着地する。

「よお黒崎一護。みつともなく苦戦してんじゃねえか。情けねえな。それに……スタークか」

グリムジョーが疲弊しているスタークを一瞥し、ため息をついた。「久しぶりじゃねえかスターク。元一(プリメーラ)とは思えねえ醜態だな。成長したのはその姿だけか。まあ藍染の野郎が決めた基準だからどうでもいいんだがよ。元は同胞だ、そんなんじゃメンツが丸潰れなんだよ」

久方ぶりに会うスタークに悪態をつくグリムジョー。

しかしスタークは全くその言葉を意に介さずに荒い息の状態で口を開く。

「こつちは疲れてんだ。あんまでけえ声出すんじゃねえよグリムジョー。あんたも幻想入りしてたことには驚きだが、今は多くは語らねえ。そんな場面でもないからな」

「……アイツか」

ブオンと、疾風が吹いたところで先と同じく全くダメージを負っていないヘカーティアが現れた。

早苗とグリムジョーが眉間を険しくし、少し驚いた様相を見せるも冷静さを欠かさず構える。

「地獄の女神ヘカーティア。何やら俺たちに絶望という試練を与え
きた、女神様だとよ」

「ハッ、何だそりゃ。変な女だな」

スタークの言葉に、グリムジヨールは一笑した。

ヘカーティアは服に付いた埃を払う仕事をしつつ、

「あら、私から自己紹介しようと思ったのに。もうネタバラしされ
ちゃったわね。ええ構わないわ。私もあなたたち2人のことは知っ
ているからね。守谷神社の現人神である東風谷早苗、そして破面であ
るグリムジヨール・ジャガージャック、よね？」

「守谷神社のことをご存知とは。知名度が上がっていて何よりです」

早苗がヘカーティアと対峙する形で立つ。

「けど、一護さんの敵であるなら容赦はしません。あなたは女神との
ことですが、私も神様のお世話をしている身。しかも二柱も。だから
神という存在に慄いたりしませんよ」

「流星は天下の風祝。まだまだ若いのに肝が据わっているじゃない
の。それに……なかなか最適な子が来てくれた、と」

「何を一人でぶつぶつ言ってるんですか？」

「いえ、こっちの話よ」

ヘカーティアは先の展開を達観しているかのように一護と早苗を
見据えた後、グリムジヨールに視線を向ける。

「あなたとも会いたかったわグリムジヨール。刹蘭からあなたのこと
聞いているからね。ぺらぺらと口上を話しても聞かないから、戦って
見定めた方がいいってね。つまり戦闘大好き野郎なんでしょ？」

「勝手に俺のことを値踏みしてんじゃねえよ」

グリムジヨールがどこか苛立ちを孕んだ物言いだ答えた。

油断はしていない。ここに来る直前に帰刃『豹王』状態になってい
るのがいい証拠だ。その上、先の自身の一撃を受けて傷一つも付いて
いなかった。力を出し惜しみしていられる相手でないのは、そのこと
からも、そして一護とスタークの様を見ても言えることだ。

「なら、お望み通り殺し合いと行こうじゃねえか。こっちもその方が
本懐を成せるってもんだ」

目を爛々とさせ、口角を吊り上げる。獲物を見つけた豹さながらの雰囲気を纏いながら、更なる霊圧を放出させる。バチバチと、オーラのような青い電流が波濤となりグリムジョーを覆っていた。

荒い息をどうにか押し殺し、スタークはグリムジョーの力の波を感じ取っていた。それが、自身の身につけた力と同系統だと察することは容易に判断がついた。

ヘカーティアは詠嘆にも似た声をあげた。

「君も更なる力の領域に足を踏み入れていたわけね。戦いが好きっていう野蛮な考えを持つだけのことはあるわ。ええ、刹蘭もなかなか面白い逸材を見つけたじゃない。私の予想を超えてきているわね。これは嬉しい誤算だ」

魔王として、絶望を与えるものとして、これ以上ない舞台であるとヘカーティアは笑みを浮かべた。

しかしまだだ。ここまでのお膳立てをしていて、メインディッシュが来ないのは愚の骨頂であると、視線が早苗と一護に移される。

「さあ次は君の番よ。まさか忘れたなんてことはないわよね？ 果心居士との戦いで東風谷早苗、初めて黒崎一護が纏った力」

「は？ 何を言ってるんだよアンタ」

一護が疑問の声を漏らすも、ヘカーティアは意に介さず続ける。

「まさか果心居士を自分の力で倒したと思ってる？ 違う違う。君は彼の力で廃人になって狂ってたじゃないか。不思議に思わなかったかい？ まさか気づいたら勝利していた、なんて子供みたいな都合のいい解釈をしてたわけないわよね」

「……何が言いてえ」

一護は疑問に思わなかったわけじゃない。

一護と早苗、2人が意識を取り戻した時には既に果心居士の気配は消えていた。しかし意識が途絶える寸前、微かにだが朦朧とする意識の中で自分の体に何かが憑依するかのような、そんな曖昧模煳な感覚に陥ったのは事実だ。

早苗も意識が混濁とする中で、自身の力が一護に吸収されている感覚になったのを憶えている。おぼろげではあるが、そういう風に霞ん

でいく視界の中で見えたような気がしたのだ。

いや、厳密には見えた。瞼が閉じるほんの刹那の時、一護の持つ刀が黒いお祓い棒のようなもの変わるのを、確かに見たのだ。最初は夢幻でも見ているのかと錯覚したが、相手の言いようからして何か関係していると、早苗は推測した。

二人の反応を見てヘカーティアは愚痴るように嘆息する。

「いい加減ね彼女も。ちゃんと一護くんには諭しておかないと……。結局、尻拭いをするのは私ってわけよ。けどまあ、彼女もきつかけを与えることはできたのかもね。全くもう刹蘭もアイツも、この地獄の女神様をこき使いすぎよ。地獄に堕としたくなるわ」

「あなた、あの力について何か知っているのですか？」

「流石は現人神のお嬢ちゃんだ。ちゃんと見ていたということだね。なら話が早くて助かるよ。一護くんはあまり覚えてなさそうだからさ」

2人のことを交互に視線を送りながら、楽しくネタばらしをする。

「黒崎一護君、あなたは幻想郷に遅しく生活している者達の力を借りることができるのよ」

「……は？」

ヘカーティアの言葉を飲み込めず、口から疑問の声音を吐き出した一護。しかしヘカーティアはそんな一護の心境かど気にせず、そのまま言葉を紡いでいく。

「少し言葉足らずだったかな。簡単に言っちゃうとね、君は幻想郷の力を味方につけれるのよ」

「どう言う意味だよ。お前は一体、何を言ってる？」

「直ぐに理解しなくていいよ。こんな荒唐無稽な話、聞いた瞬間から信じたら君が詐欺にでも合わないか心配になっちゃうわ。少しずつでいいのよ。少しずつ理解していけばいいから。ああ、地獄の女神とされたことが、とんだ優しい女神様になった気分ね」

ヘカーティアの言葉が依然飲み込めない。

この女は何を言っている？ 急に訳の分からない話をして、心を乱すつもりか？ などと網を張ったが、圧倒的に優位なヘカーティアが

そんなことをする道理はない。

では真実を言っている？ 鵜呑みにしていいか不明だが、実際に果心居士の時は妙な感覚に陥ったのも事実だ。では、ヘカーティアの言ったことは本当なのか……？

一護はどうか自分なりに考えを纏めようと尽力した。

「これは君の出生にも関わるんだけどね。今は話さないでおくよ。だって君、そこまで頭の回転が早そうに見えないし。そうね、論より証拠。机上の空論なんて思われても嫌だし。実際に使ってみようか一護君」

相手のことなど歯牙にも掛けないヘカーティアは、早々と展開を次のステップへ上げようとする。

「君の能力は確か、物質に宿る魂を操る程度の能力」だったかしらね。その力で東風谷早苗の魂に触れてみなさい。今のあなたなら出来るわよ。きっかけは既に作られているからね。あと、心配しなくても彼女には何の害も及ぼさないから安心しなさい」

「……………」

一護はやはり困惑していた。

例えこの話が本当だったとしよう。では何故、ヘカーティアはそんな話を一護に教える？ 目の前の女は刹蘭の仲間で、自分達に絶望を与えるのが目的だ。希望を与える所以はない。

真の目的は最高の希望を与えてから、絶望の地獄へ墮とすのが目的か？ 魔王などと謳っているのだ。それくらいのことをしてくるのは自明の理。しかし――

「このままじゃ、負けるのもまた事実かよ。口車に乗ってみるしかねえよな」

嵌められた時は、またその時に考えればいい。

一護は早苗に視線を向ける。

考えなかったことはなかったわけではない。そしてやらなかったわけでもない。

自分の能力は生物、つまり人間や動物などの魂には効果を発揮しない。それはその身体にしっかりとした魂が宿っているからである。

生きた肉体を動かしている魂は強く、その魂を操ったり自身の助力に変換することは不可能である……と一護は幻想入りした時にそう定義した。

逆にそれ以外の物質に宿った魂は操れる。それは物や植物、武器、更には空気に至るまで。だがあくまで力を借りる程度のことしか出来ないため、それらに対して万能に扱えるわけではない。

だから一護の能力は、戦闘ではあくまで補助程度の役割しか果たせない。

それがここにきて何とも機転の良い展開。自身の能力が更なる力を手に入れる鍵となる。さながらそれは、相手方にとっても都合の良い展開のようで猜疑心が強くなるがその時はその時だ。

一護は早苗にゆつくりと歩み寄る。

「早苗、悪い。力を借りるぜ」

「ええ、大丈夫ですよ。存分に試してください」

早苗の肩に触れる。

同時に魂を操る要領で、目を閉じて早苗の魂に触れるイメージを脳裏に強く思い描く。

「……………ッー」

瞬間だった。

走馬灯のようなものと言えはいいのだろうか。東風谷早苗の誕生から今に至るまでの歴史が、映像を早送りにしたかのように流れ込んでくる。1場面1場面はほんの刹那で、プライベートな生活までは浅い記憶しかないが、それでも東風谷早苗という人間がどういうものかを知るには十分な情報が否応なく入ってきたのだ。

一護は急激な情報を叩き込まれ頭痛を起こすも、同時にそれが気にならない以上に身体が熱くなっていた。

自分の魂に、何かが合わさったような交わろうとしているような感覚。

何か、といった不明瞭なものでないのは一護自身、すぐに理解した。

「ああ、これが……そうなのか」

瞬間、一護を中心に眩い光が広がる。

放射線状に迸った煌めく星のような輝きは、一護の姿が見えなくなるほどの光を纏っていた。同時にその光には淡い緑の色を帯びており、それはさながら早苗の抽象した色のように感じる。

その溢れ出た光が徐々に弱まっていくと、一護の姿が現れ始める。しかしその姿には少しばかり変化が見られた。

一護の着ている死覇装の袖口や裾に当たる部分が青くなり、胸元を中心に大きくカエルの顔のようなものがプリントされてしまっている。天鎖斬月を握る右腕には白い蛇が巻き付いており、蛇の尻尾は肩から蛇の顔は一護の手首まできている。

そして何より変わっているのは天鎖斬月。鏢から刀身のほうに向けて大麻（おおぬき）のように白ではなく黒い紙垂が複数伸びている。緑色の燐光を発しており、刀身が脇差ほどまでに短くなっていた。さながら近接戦闘ではなく、別の戦い方をしろと訴えかけてきているように感じる。

「……マジ、かよ」

半信半疑だった為、自身の力が変質したことに驚きを隠せない。早苗やグリムジョー、スタークも同様だ。

まじまじと一護は自分の格好を確認し、

「いやダセエー！」

と一言で述べた。

「何だよこのカエル！ 主張激しすぎんだよ！ 小さい子のお洋服じゃねえんだぞ！ しかも何で一部だけ青いんだよ……。つうか天鎖斬月まで、なんかお祓い棒みたいになっちゃってるし」

不満たらたらに文句言う一護。

確かに胸元に大きく浮き出たカエルは、とてもキュートに映るためどこか可愛い。しかしこれを男子高校生が着てしまうと、単純にカッコ悪いのだ。

しかし右腕に巻き付いている白蛇について言及しないのは、そこだけには気に入っているのだろう。ちよつと触ってみたりしていた。

「おい一護、何だそのふざけた格好はよ。それが teme の切り札か？

冗談だろ。その気持ちの悪イカエルをとつと——」

「何が気持ち悪いカエルですか！ あのカエルこそ私を象徴するものです！ そのような愚かな物言い、私が許しません！」

グリムジョーの発言に早苗が途中で遮り、意を唱える。

「一護さんのあのカエルの模様、そしてあの白蛇。まさに私の付けている髪飾りそっくり！ あれは諏訪子様と神奈子様を崇めるもの。最近では自堕落な生活が続いているので、どこにも崇拜するところがなくなりつつありますが」

「ぐちやぐちやと喧しい女だな。ちよつと黙つてろ」

ちなみに一護も色々と言っていたが、そこに対しては指摘していない。

「……そんな感じなんだ。見違えた……いえ、見窄らしい？ まあ何でもいいわ。変身おめでとう」

「あんたまで一護さんの格好に文句あるんですか!?!」

へカーティアの困惑気味なセリフに早苗が素早く反応した。

初の力のお披露目にしては、散々な結果ではある。しかしあくまでそれらは外見のみ。内に秘めたら力はそれを覆すには容易すぎた。

「……霊圧だけじゃねえ。何か別の力も付与されているイメージだ」

「そうでしょうね。それが他者の力を借りる、いえこの場合は纏うと言った方が適切かしら」

並々と溢れてくる一護の霊圧と付与されている別の力。それこそが早苗の力であると理解するのに時間は要しない。

「さあ見せてちょうだい。この魔王へカーティアに一矢報いてみなさいよ。仲間たちと一致団結して勇者様御一行よろしく、魔王を討つてみなさい！」

へカーティアはそんな3人に向けて発破をかけた。

そして――

「ま、無理だと思うけどね」

最後に付け加えられた言葉を皮切りに、一護たちは同時に動いた。

【3】

刹蘭から魔王という称号を与えられ、神のシルベという訳の分から

ない組織に入ってくれと頼まれたのは、何年前だったか？

ヘカーティアはそんな刹蘭の頼みを受けた。この時は友である純狐と予定があったので、深くは聞かずに二つ返事で引き受けたことを、別に後悔はしていない。

後日、刹蘭から色々聞いてみたところ、何年後かに幻想入りしてくる黒崎一護という男と戦って欲しいというもの。さながら魔王のように、絶対的な力でねじ伏せて絶望を与えてやってほしい、そう刹蘭が言っていた。

黒崎一護、どうやら「彼女の息子」らしく凄く凄い特殊な境遇を生きてきたと、刹蘭がすかした顔で言っていた。俺、情報通なんだ凄いだろと、でかでかと顔面に書いてあったのを覚えている。同時期に死神や破面といった存在も幻想入りしてくると言っていたが、ヘカーティアには一護に注力してほしいとお願いされている。

まあ別に構わないし、もし機会があれば死神や破面とも戦ってみたいなく程度だ。

それ以上のことは特に聞かなかった。

聞かずとも分かる。「あの博麗への対抗策」として用いるのだろう。

なら刹蘭に助力するのも吝かではない。あんなものがあるのも、ヘカーティアからすれば不快ではないのだから。

故に魔王という称号を全うしてやろう。将来、黒崎一護の壁となり相手をしようと、まだ見ぬ未来にどこかうきうきしていた。

けど、一つだけ刹蘭との考えに相違がある。

魔王とは絶望を与える存在と同時に、倒され越えられないといけな
い存在だということ。

*

「豹符『豹鉤』！」

拳サイズの棘のようなものが無数に展開され、螺旋を描きながら魔王を貫かんと一斉発射される。

グリムジョーによるスペル。殺傷力の高いその弾幕を、一切の容赦なく放った。

「いいわね、変に手加減してきたら私も怒って、一瞬で片をつけようと思っただわ」

そんなグリムジョーの攻撃を涼しい顔をして対応するヘカーティア。自身の首から伸びている鎖を巧みに操りながら、一つも余さずに弾いていく。

そのような芸当をされたところで一切怯まず、グリムジョーは豹のような俊敏な動きでヘカーティアに急接近する。瞬きをする間の一瞬の時に肉迫したその勢いで、かかと落としのように鋭い蹴りを振り下ろした。

透かさずヘカーティアも鎖を操り、その蹴りを受け止めた。

大地が陥没し、ひび割れていくその一撃をも軽々と防ぐ。鎖にどんな力を宿しているのか、グリムジョーは振り下ろす蹴りの力を更にこめるが容易に阻まれている。起こるは大地が悲鳴を上げ、地割れがヘカーティアを中心に発生しているが、受けている本人は顔色一つ変えていない。

「チッ！」

「動きは悪くないわ。けどまだまだ甘く見て及第点。私に一撃を入れるには、もっと本腰いれてもらわないと一生無理よ」

舌打ちをするグリムジョーを挑発した。

「——あなたも脇が甘いですよ」

そんな中、早苗がヘカーティアの真後ろに屈んで移動しており、手のひらを向ける。

「蛇符『神代大蛇』！」

巨大な蛇がそこから顔を出した。

それを見た次の瞬間には、獲物を丸呑みするかのようにヘカーティアを巨大な蛇が包み込んだ。

グリムジョーは即座に離れており、ヘカーティアのみ巨大な蛇と一緒に吹き飛ばされている。女神を喰らおうとする蛇とは、どこか神話めいた絵になる。

「いい動きね、若い割には悪くないわよ現人神。異界『地獄のノンイデアル弾幕』」

蛇に襲われながらも、平然とスペルを唱える。

赤い閃光がヘカーティアを中心に迸り、神気めいた圧倒的な弾幕が放出される。

次の瞬間には早苗の放った蛇など微塵に消し飛び、非現実めいた光景が広がっていた。空間が歪んで見える、触れたものが消し飛んでいる。王虚の閃光は空間が歪むほどの威力を有しているが、あの無数に放たれている弾幕は一発一発がそれを持っている。

「――黒符『月霊幻幕』！」

それを前にして一護はスペルを唱えた。

三日月状の弾幕が展開される。しかしそれはいつもの黒色ではなく、緑色も帯びていた。黒と緑が混ざり合ったかのような色彩、どちらかと言うと緑色の方が強く感じる。

「……分かる。これは、こう言う使い方だ！」

一斉射出。

緑色の軌跡を描きながら放たれる一護の弾幕は、どこか美しさすら感じる。黒と緑のコントラスト、明確なまでに今までの一護の力とは様相が違った。

ヘカーティアを直接狙わず、全ての弾幕がヘカーティアの弾幕へと着弾していく。

次の瞬間には一護の弾幕は、誰もが予想した通り容易に掻き消された。

魔王の放つ攻撃に、一護の弾幕は弱すぎる。だが、今の弾幕の本懐は別にある。

「――浄化、ね」

ヘカーティアは即座に読み取る。

自分の放ったスペルによる弾幕が、著しく弱体化している。一護の弾幕が当たった瞬間、格段に出力が落ちたのだ。

これこそ今の一護の力。

「早苗の力を纏った、相手の力を根こそぎ弱化する浄化の力。それが今の俺の力だ」

早苗の魂に触れたことで、一護は自分に何の力が付与されたのか理

解した。

浄化の能力——対象の力を弱体化させる。

自分の攻撃に浄化の力を付与することにより、例えば女神の力だろうが何でも弱くする。しかしそれ故に、浄化の力は自分の力も押し殺すらしく今までの威力は出せない。

だからこそ、仲間の力は必須だ。

「グリムジョー、早苗、今だ！」

一護が2人に叫んだ。

「——虚符『黒虚閃』！」

「——大奇跡『八坂の神風』！」

グリムジョーからは黒い虚閃、早苗からは無数の弾幕がヘカーティアに向けて放たれる。

猛威を振るったヘカーティアの弾幕も、一護の浄化の力により弱化しており軽く消し飛ばしていく。

「そう簡単に私には当たらないわよ。異界『恨みがましい地獄の雨』」

「させるかよ！ 黒符『天幻月牙』！」

ヘカーティアが二人の攻撃をスペルによる弾幕で対処しようとするも、一護がそれをさせない。

ヘカーティアの周囲に一護の浄化を付与した弾幕が展開され、放たれてくる弾幕を全て弱体化させていく。弱まった弾幕で2人の攻撃を防ぐことなど出来るはずもなく、黒い虚閃と無数の弾幕がヘカーティアを呑み込んだ。

「やった、当たった！」

「この程度で倒せるタマじゃねえ。油断すんな」

早苗の喜びの声を、グリムジョーが即座に戒める。

そして、それは当たりだった。

「うんうん、悪くなかったわ。今のは私も少し驚いたもの」

早苗とグリムジョー、その背後にヘカーティアは現れていたのだ。

「——ッ!？」

驚くよりも先に、背中に鈍い衝撃が走る。

それがヘカーティアの鎖によるものと気づいた時には、ボールのよ

うに吹っ飛ばされ壁に叩きつけられていた。

「早苗！ グリムジョー！」

「人の心配をしているだけの余裕、あるのかね黒崎一護くん」

「なにッ!？」

出鱈目な速度で一護の眼前に現れたヘカーティア。

首から伸びている鎖を鞭のようにしならせ、そのまま一護に向けて軽く振るった。

咄嗟に天鎖斬月で防ぐも、神の力が宿った鎖は物理法則を無視して一護を紙吹雪のように吹き飛ばす。

越えられない絶望を与える魔王ヘカーティア。その試練に全く恥じる事のない実力は、まさに絶望を体現させていた。当初、自身のかぶっている帽子を取れば一護たちの勝ちと、軽視した発言をしていたが最早それを達成するのも夢のまた夢。

ヘカーティアという未曾有の存在の前に、誰も彼も成す術なし。

「私は魔王という称号を剝蘭から与えられた。君たちに、特に黒崎一護に絶望を与えてやれと。本来、私は女神、端的に神様という存在。そんな私に魔王という称号なんて、侮蔑に値するよね。まあそこは器の大きい私だから特別に我慢してあげてるんだけどね」

ふらふらと立ち上がる一護たちを見据えて、

「魔王は絶望を与える存在。それは認めてあげるわ。けどね、同時に倒さなきゃいけない存在でもあるの。だから試練なんて無視して、超えてみなさいよ。倒してみなさい。私は君たちには期待しているのよ」

魔王は目を光らせて待望してみせた。

そしてそれは哄笑によって答えられた。

「くくく、あはははハハハッ！ 詰まらねえ口上を垂れてんじやねエよ。虫唾が走る」

グリムジョーが自身の鋭く伸びる爪をヘカーティアに向ける。

笑っている、獲物を仕留めるぎらつく眼光を迸らせる。口角を吊り上げ、垂れる血すら狂気に感じさせながら、霊圧が水蒸気のように揺らめき出す。

自分より強い？ だから何だ。自分の前に立ち塞がるのなら「破壊」という死の形をもって叶えさせてやる。魔王？ 女神？ そんなもの知らないしどうでもいい。例え相手は何だろうと、やることは変わらない。

「テメエみてエな上から目線の奴が一番業腹なんだよ。アイゼンの野郎もそうだったからな。気に喰わねエ、腸が煮え返る。テメエのその面の皮、引き裂いてやるよ」

「なら、やってみなさい。その生意気な口が、どこまで私に届くか見物だわ。全く、地獄へ墮としたくなる高慢で不遜な態度よね」

「テメエに言われたかねえよ。いいか覚えておけ。そういう奴らはな殺し殺されても文句言えねえんだよ！」

グリムジョーが霊圧が爆発的に上昇した。

青い霊子が火の粉のように吹き荒れ、同時に砂塵がグリムジョーを包み込む。

「な、何!?! 何をしているんですかあの人は!?!」

「グリムジョー、お前もその域に至ったか」

早苗が驚愕と共に目を見張り、スタークは同胞の成長に綻びる。

「これは、まさか……!?!」

「帰刃のその先へ——『真説帰刃（セグンダエターパ）！』」

一護の予想通りの言葉が聞こえてきた。

舞っている砂塵が綺麗に消し飛び、そこには姿の変わったグリムジョーが立っていた。

水浅葱色の髪は腰にまで届くほど長く伸び、額には青い霊圧が炎のように揺らめき黒い髪が刺々しく伸びている。上半身は裸になっており、過去に一護の月牙天衝により付けられた傷跡から青い霊圧がそれを隠すように出ていた。

下半身は豹のようになり、二股の長い尾が伸びている。腕は更に獠猛さが増し、黒い爪が形成されていた。まさに野性味の増した、破壊を象徴するに十分な姿をしていた。

「……素晴らしい成長を遂げたようね。喜ばしいことだわ。さあ見せてみなさい、その力を——」

ヘカーティアが言い終わる前に、グリムジョーの蹴りが自身を捉えていた。

防御できなかったヘカーティアはその勢いそのまま吹き飛ぶも、直ぐさま態勢を整える。

「いやあ驚いた。え、なに今の？ 速すぎない？」

特に苦悶の表情をせず、逆に怪訝な表情を浮かべる。

身体の作り、神の力によるものなのか負傷という負傷は負っていないが、そんなことはどうでもいい。自身ですら反応できなかったその速さが不思議で仕方ない。

勿論、それは一護たちも同じことである。

「今の速さ……俺よりも速い。いや残像すら見えなかった」

天鎖斬月を持つ一護の取柄である速さ、それすら優に超えている。いやそもそも、速いという概念で捉えていいのかすら分からない。

空間移動、ワープ、移動という因果を断ち切ったのか。荒唐無稽だが、その方がまだしつくりきた。

「おら、まだまだ行くぜ」

グリムジョーは笑みを零しながら、再び足に力を入れた。

ヘカーティアはそれを見極めるために、弾幕を張ろうとするが、「ッ!？」

それより速く、暴狂の嵐が腕を足を、胴を五体全てを四方八方から打ちのめしていく。

グリムジョーの鋭い爪が、強烈な脚力が、劣悪な顎が。魔王ヘカーティアの思い切り殴り、引き裂き、豹のように上下の顎で噛み砕く。原始的なその戦い方は、まさに破壊そのもの。神話の凶獣めいたその速さと戦法は誰も捉えることができない。

大地や壁、空間が気づいたら陥没し衝撃波を放ち、三次元的に見えない速さで疾走している。1秒間の間に数百の攻撃が凶獣から魔王へと一方的に放たれていた。

「……これならどう？ 月『コズミックレディエーション』」

ヘカーティアは全身にグリムジョーの攻撃を浴びながらも、何の痛痒も感じさせずにスペルを唱えた。

無数の弾幕と不規則に飛び交うレーザーが周囲一帯を埋め尽くす。まさに間隙を縫って迫るには困難極まる。そして内包されている力も、それら一発が致命傷となりうるものとなっていた。

一歩間違えれば、いくら速く駆けるグリムジョーであっても危機的状況となりうる。

しかし……

「止まらないのね。とんだ狂犬だわ」

一発たりとも被弾しない。

物怖じせず、常にヘカーティアに狂嵐をぶつけていた。

そして、それによりヘカーティアはどこか得心がいったのか、その刹那轟音が響くほどに地面を踏んだ。

「チッ！」

遂にグリムジョーも危険だと察知して動きを止める。

ようやく姿を現したグリムジョーは息切れ一つしていないが、冷や汗が流れていた。

「見切ったわよ、あなたの力。私の攻撃に怯むことなく、そして私より速く動くその力の正体」

「……………」

「相手よりも速くなる程度の能力」でしょ。よく見て考えれば子供でも分かるわ」

それが当たっていたのか、グリムジョーは眉間に皺を寄せた。

「素晴らしい能力じゃない。相手から絶対に先制も取れる、そして私の弾幕が全く当たらなかったところを見るにどんな攻撃もそれを超える速さで回避している。ええ、実に恐ろしい力でもあるわね」

あれだけでグリムジョーの力を看破したのか、事細かに語ってみせる。

事実、全ての射ていたためグリムジョーに返す言葉はなかった。「ネタが分かったのなら、対策も立て易い。さあ、次は捕らえるぞグリムジョー」

戦意が生ぬるい突風となり、グリムジョーに突き刺さる。

総身が粟立つ。脂汗が出る。筋肉が萎縮したかのように固まる。

直感的に次に魔王に攻撃を繰り返せば、手痛いカウンターが来ると頭が理解してしまった。挑みたくない、近づきたくない、脳裏が警鐘を鳴らす。

だが、これで臆する男でもまたない。

「俺に、舐めたこと言ってるんじゃないよ」

全身に力を入れる。骨を、筋肉を軋ませながら、逆に戦意を押し返すようにヘカーティアへと向けた。

「俺を舐めた眼で見やがる奴は、一人残らず叩き潰す！」

「待てグリムジョー！」

そして脚に力を込めようとした時、横合いから一護が割り込んできた。

「テメエ黒崎、邪魔さんじゃねエ！」

「落ち着け。今の勢いでいっても、万全な状態でヘカーティアに一撃は叩き込めねえよ」

「俺一人じゃやれねエって言ってるのか？」

「あー、言い方が悪かった。俺なら、いや俺たちなら最高のコンディションでお前の最強の一発をぶつけられる」

「……面白エ。なら見せてもらおうじゃねエか」

単純で助かったと一護は胸を撫で下ろしつつ、早苗と、そして小休憩していたスタークに目配せする。

2人は頷くと一護に歩み寄り、

「次の攻めで決める、そういうことですよね」

「言つとくが、俺はあと一発が限界だ。期待はするなよ」

一護の横に2人が並び立つ。

それを眺めるヘカーティアはどこか楽しそうに呟く。

「壮観ね。まさに4人の戦士が魔王を討伐する構図にピッタリ。だったらこっちも、少し魔王らしく行くこうかしら」

ヘカーティアの身体から目に見える域で、神が放つオーラのようなものが溢れ出てくる。

それに対し四人も身構える。

「さあ行くわよ。今の私は魔王、女神を捨てあなた達に絶望を与える

ためにここにいる。超えてみなさい、私の試練を——『トリニタリアンラプソディ』!」

ヘカーティア・ラピスラズリ——今は魔王として立ち塞がっている。しかし元は月、地球、異界、それぞれ三つの世界の地獄を司る神。能力は「三つの身体を持つ程度の能力」で、文字通り三つの世界にそれぞれの身体を持ったためにある力である。この神様の真に恐ろしいのは、神様による圧倒的な力にある。底は見えない、天井も見えない。こうして一護たちと戦っている今も、力の一部とて出していないと思われる。

しかしその一部ですら、幻想郷を壊滅できるほどの力を有しているのもまた事実であるのだ。

そんな底知れぬ力を前に、一護たちは臆せず意気軒昂と前へ進む。

「行くぜ早苗!」

「はい!」

ヘカーティアが展開したのは三角型の超高密度のエネルギー収束体。青、赤、緑と三つ現れ、それらが違った弾幕やレーザーを放ってきている。

先述通り、ヘカーティアの放つ弾幕の一つ一つが大破壊を起こす熱量を持っている。よって浄化の力が活きる場である。

「後が続いてくれ早苗! 黒符『月霊幻幕』!」

「了解しました! 神徳『五穀豊穰ライスシャワー』!」

緑色を帯びた一護の弾幕がヘカーティアの弾幕やレーザーを弱化し、続く早苗の弾幕が一掃していく。

「まだまだいくぜ。黒符『天雨月閃』!」

一護は次なるスペルを唱える。

さながら雨のようにヘカーティアの頭上から無数の弾幕が降り注いでいく。勿論、一護の弾幕には全て浄化の力が宿っている。弾幕に当たれば弱化できる上、対象の人物に当たればそれと同じ効果を与えることができる。

つまり一発でも被弾すればヘカーティア自身が弱体化するのだ。

「——そう簡単にさせないわよ!」

それはさせまいと、ヘカーティアは三角形のエネルギー体の一つを頭上に持つていく。同時に弾幕を展開して、天から降り注ぐ弾幕を防いでいった。

「こちらが疎かになりましたね、油断大敵です！ 大奇跡『八坂の神風』！」

早苗から大小様々な弾幕が展開され、全弾一斉射撃していく。

「そんな手、読めないわけないでしょ」

「こつちもだぜ魔王サン」

そして別方角からスタークが銃を構える。

「こいつでしまいだ！ 虚符『無限装弾虚閃（ゼロ・メトラジェット）』！」

同時に無数の虚閃が同じく一斉に発射される。

ヘカーティアはもう一つある三角形のエネルギー体をそちらに持つていくも、それに気づいた時には遅かった。

「——ッ」

無数の虚閃から分裂した、スタークの魂の力が自身の弾幕を掻い潜るようにして迫ってきていたのだ。

透かさず鎖を使って迎撃しようとするも、その隙を狙われた。

「行くぜ魔王ヘカーティア！」

同時に三角形のエネルギー体を三つ稼働させ、ヘカーティア自身はスタークの魂の力に気が向いてしまっていた。

そのコンマ数秒の隙を、一護は見逃さない。

急接近を仕掛け、片手に持つ天鎖斬月とお祓い棒が合体したソレに霊力を込め——

「祓え清め——早苗『現人神ノ風祝』！」

ヘカーティアに向けて祈祷するように振るってみせた。

すると緑の燐光が淡く発生したかと思うと、ヘカーティアが全身に纏っていた神々しい気のようなものが剥がれ落ちた。

これは果心居士との戦いでトドメを刺したのと同じ力。

浄化の力により、対象の纏っているあらゆる力のみを削ぎ落とし、裸同然の状態にするもの。つまり今ヘカーティアには、自身を守って

いた力が全て消失しているのだ。

「……これは?」

ヘカーティアがここにきて初めて驚愕の表情となる。

前代未聞の脅威が現れたことにより、焦りが生じてしまう。よつて、次の攻撃は避けようがない。

「今だグリムジョー!」

一護が叫ぶ。

同時に凄まじい戦意を溢れ出していたグリムジョーが動き出した。

青く鋭い軌跡を描きながら、ヘカーティアを包み込むように駆け抜ける。能力は相手より速くなるというもの、それ故にヘカーティアの防御は間に合わない。

「その眼に焼き付けろ——『パンテラ・デストロクシオン!』」

全方位から回避不可能な破壊の爪が嵐の如く襲ってくる。

残虐なまでの破壊の嵐は、容赦なく全てを引き裂き斬り刻んでいく。それはヘカーティアだけではなく周囲の人が大地にまで及び、辺り一面が粉微塵になるレベルである。

これがグリムジョーの新たな必殺技。回避など許さない、必中の一撃である。

「……手応えはあったぜ」

グリムジョーがそう言うと、全身に切り傷を負ったヘカーティアが立っていた。

その状態でも立っているのは、まさに末恐ろしいことだが喜ばしい点があった。

「取れてるぜヘカーティア」

ヘカーティアの帽子が地面に落ちているのだ。

当初ヘカーティアは、自分の帽子を落とせば一護たちの勝ちと宣告していた。最初は絶望的であったが、最後のグリムジョーの攻撃により頭から落とすことに成功したのだ。

「あんたは最初に、自分の帽子を取れば俺たちの勝利だと言ったよな。しっかり取ってやったぜ」

「……ええ、君たちの勝ちよ」

勝ち誇った一護に、ヘカーティアはどこか残念そうに呟いた。
落ちた帽子を取り、

「おめでどう。君たちはこの魔王ヘカーティアを乗り越えた。胸を張るといい。この私の試練である絶望を踏破したんだ、もつと喜んだらどう？」

「気に入らねえな。テメエ、本気をまるで出してねえだろう？」

グリムジョーがここでヘカーティアに噛みついた。

「あら、それはどうして？」

「とぼけんじやねエ。テメエが本気じゃねエことはここにいる奴ら全員——」

「ちよつとあなたは余計なこと言わずに黙っててください！ やつと終わったんですよ！」

横から早苗が叱咤する。

「全くだ。グリムジョー、今は大人しくしている」

スタークも面倒くさそうに早苗に同意する。

「ほぼ余力がないため、これ以上の争いごとは何が何でも避けたい。既にいつの間にか解放状態が解けているのが良い証拠である。」

「チツ、情けねえな。それでも破面かオイ」

「グリムジョー、気持ちは分かるが今はこいつから聞きたいことが山ほどある。今は抑えてくれ」

と、一護が間に入る。

相手は魔王で、刹蘭の仲間だ。試練だの何だの、疑問が数々ある。

「ヘカーティア。大人しくしてくれよ。あんたには色々聞きたいことがあるんだ。今のあるたでも、そんなボロボロじゃもう戦えないだろう？」

「……へえ、私がボロボロに見えるんだ。ふくん、そっか。ならグリムジョー、あなたの望み、叶えてあげるわ」

「どこか陰のある物言いをしたかと思うと、ヘカーティアの身体に異常が起きた。」

瞬く間に、衣服の傷も含めて全てが元通りになったのだ。

「なッ!？」

「ッ!？」

同時に発せられる圧倒的な存在感。

一護たちが驚愕すると共に、押し潰されそうな大圧力に襲われる。さながら天が落ちてきたかと感じるほどに。

身動きが取れず地に平伏すような形となり、足場の地面にも亀裂が走っていく。

ただ存在が纏う威圧だけで、一護たちが屈服されているのだ。

「魔王は刹蘭に与えられた称号に過ぎないのよ。本当の私はさつきも言った通り地獄の神様」

先の魔王と名乗っていた時とは別次元。文字通り、全てが隔絶している。

ただそこにいるだけで魂ごと木っ端微塵に粉碎されてしまいそうになる。手も足も、口と目すらも上手く開くことができない重圧。視線を向けられているだけで地獄の業火に焼かれてしまいそうな錯覚に陥る。

「三界に三つの身体を持つ神。地獄の女神——ヘカーティア・ラピスラズリ」

魔王ではなく、改めて自身を神と名乗り、

「あなた達は私に舐めた口をきいた。それだけの理由で貴方たちを地獄へ墮とす」

上位の存在であるヘカーティアの目が炎のように紅く光り、

「ふふ、これじゃあやっぱり越えられない絶望を与えたに過ぎなかったわね。刹蘭の思惑通りで釈然としないけど、まあいいわ」

地に伏している一護たちを見下げながら、

「帰るわよアレイスター。今はまだ彼らに多くを語るときじゃないからね」

同じく地面に横たわっているアレイスターに声をかけた。

「……………」

「あー、そうよね。あなた限界だったわね。しょうがない、連れて帰ってあげるわよ」

一護たちに目もくれず、アレイスターに歩み寄る。

そんな中で一護は顔だけ上げ、重い口を開く。

「ふぎ、けんな……！ あんたらの、刹蘭の野郎の目的は、何なんだよ!?」

「そうね。この状態の私を前に、刃を突き付けることができれば教えてあげるわよ」

吠える一護に対しヘカーティアは愉快そうに答えた。

「さようなら黒崎一護くん。次に会う時は、その力をものにしておきなさいな」

アレイスターを抱え上げたヘカーティアは消えゆく寸前で、一護の目を見て言う。

「その力はあなたの母の力なんだからね」

そうして一護たちは意識を失い、ヘカーティアとアレイスターはその場から姿を消したのだった。

〔4〕

あれから色々その後処理が大変だった。

端的に述べると、意識を失ったみんなを救出するのに紫たち地上組も動いた。

霊夢と魔理沙は際どいところだったが二体の妖怪に勝利していたものの、一護たちの戦いに間に合うことはなかったようだ。

それから全員に話した。

アレイスターのこと、ヘカーティアのこと、そして自身の新しい力のこと。

話の内容が突拍子のないことだったため、みんな困惑していたが紫だけはどこか納得した顔つきになっていたのを一護は印象深く覚えている。

事の発端である間欠泉及び地上に上がってきていた霊魂についての異変だが、これは地獄鴉こと霊鳥路空に原因があった。理由は単純で急に力をつけた空が暴れ始め、間欠泉やら何やらが発生したというもの。その切っ掛けを作ったのが守矢神社の二柱の神。彼女たちが余計なことをした事にとり異変が発生したのだ。

早苗はその力の確認のために地底に向かっていた。そこで合流し
共闘することとなった。

とまあ、簡略的ではあるがこれらが全ての経緯である。

ここからは後日談。

一護たちは何故か地霊殿に招待されることとなっていた。